

# 農作物病虫害等防除指針

(令和6年)

愛媛県

## 利用上の注意事項

- 本指針に掲載した農薬は、原則として令和5年12月6日現在で登録のある農薬を総括的にまとめたものであるが、農薬は登録内容の変更や、同じ成分であっても銘柄（製造メーカー）により登録内容が異なる場合等があるため、**農薬の使用にあたっては、農薬ラベルの表示事項（使用方法、注意事項等）を必ず確認し、使用すること。**（下記HP等を参照し、常に最新の情報を確認するとともに、変更があった場合は、必ず当該農薬のラベルを貼り替えてから、ラベルどおりに散布するよう指導すること。）
- 農薬の使用回数は、種子や苗における使用も回数にカウントされる（果樹等の永年性作物を除く）ため、種子や苗の購入元に農薬の使用履歴を確認すること。
- 本指針に記載してある農薬の使用回数は当該製剤で使用できる回数であるため、各成分の総使用回数が使用基準を超えないよう農薬ラベルでよく確認すること。
- 農薬取締法では、適用作物についてグループ化や分離登録等がされているため、「農薬登録における適用作物名について」（P.16）を必ず確認すること。
- 薬剤防除法の欄に記載した時期は、あくまで目安として示したものであり、農薬ラベルに記載されている使用時期（収穫前日数等）を必ず遵守すること。
- 合成ピレスロイド剤、BT剤、IGR剤、その他水産動植物に影響を及ぼす農薬等を使用する場合、蚕や水産動植物への影響を考慮し、安全使用に努めること。

### ○農林水産省のホームページ「農薬登録情報提供システム」

最新の農薬登録情報（アドレス <https://pesticide.maff.go.jp/>）

### ○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

農薬行政に関する最新情報

（アドレス <https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>）

### ○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」県内における農薬の適正使用への取り組み等

（アドレス <https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html>）

### ○病害虫防除所ホームページ

病害虫発生予察情報等

（アドレス <https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>）

# 目 次

I	農作物病害虫等防除基本方針	1
	薬剤系統略号一覧表	2
II	農薬適正使用・危害防止対策	
1	農薬取締法の概要	5
2	農薬残留に関する農薬使用基準	7
3	農薬毒性の分類基準	8
4	農薬事故防止対策	9
5	農薬の飛散防止対策	11
6	農薬による水産動植物・家畜・ミツバチの被害防止対策	12
7	パラコート剤の安全使用	14
8	合成ピレスロイド剤、BT剤及びIGR剤使用上の注意事項	15
9	農薬登録における適用作物名について	16
III	作物別病害虫防除指針	
1	水 稲	
(1)	早期水稲における主要病害虫の発消長と防除体系	26
(2)	普通期水稲における主要病害虫の発消長と防除体系	28
(3)	水稲主要病害虫の発生程度と被害の関係および防除の目安	30
(4)	水稲病害虫防除法	31
(5)	水稲種子消毒法	42
(6)	育苗箱における薬剤施用法	43
(7)	苗立枯病の防除法	46
(8)	「ストロビルリン系殺菌剤(QoI剤)耐性いもち病菌」の発生と防除対策	48
(9)	「シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策	48
(10)	イネばか苗病の防除法	48
(11)	イネもみ枯細菌病の防除法	50
(12)	スクミリンゴガイの防除法	50
(13)	斑点米カメムシ類に対する殺虫剤の効果	53
(14)	ミナミアオカメムシの防除法	53
(15)	育苗時の生理障害	55
(16)	水田雑草防除法	56
1)	水田雑草防除の留意点	56
2)	稚苗機械移植栽培雑草防除法	58
3)	ウキクサ・アオミドロの防除法	67
4)	直播栽培の雑草防除法	67
5)	水田除草剤のローテーション使用	69
6)	スルホニルウレア系除草剤抵抗性雑草に対する防除法	70
7)	水田難防除多年生雑草の防除法	71
8)	飼料用稲に対する注意事項	74
9)	雑草抑草剤利用による水田畦畔の管理	74
(17)	植物成長調整剤の使用法	76
2	麦 類 (大麦・小麦)	
(1)	麦(裸麦)の主要病害虫発消長と防除体系	77
(2)	大麦病害虫防除法	78
(3)	小麦病害虫防除法	79
(4)	麦類種子消毒法	80
(5)	麦類雑草防除法	80
1)	麦作雑草防除の留意点	80
2)	除草剤成分と適用草種	80
3)	除草体系	81
4)	除草剤使用方法	81
5)	カラスノエンドウ対策	84
6)	カズノコグサ対策	84
7)	スズメノテッポウ対策	84

3	大豆	
(1)	莢の成育と病虫害発生時期	85
(2)	大豆病虫害防除法	86
(3)	大豆雑草防除法	91
1)	大豆雑草防除上の留意点	91
2)	除草剤と適用草種	91
3)	除草剤使用法	91
4)	大豆バサグラン液剤について	93
5)	アタックショット乳剤について	93
4	果樹	
(1)	果樹病虫害防除時期	96
(2)	果樹病虫害防除法	101
	[1] かんきつ類	101
	[2] かき	116
	[3] ぶどう	122
	[4] もも	129
	[5] くり	135
	[6] なし	136
	[7] うめ	142
	[8] キウイフルーツ	145
	[9] びわ	148
(3)	ミカンハダニ防除の要点	150
(4)	マシン油乳剤の夏期散布とその注意事項	151
(5)	果樹カメムシ類の発生生態と防除対策	151
(6)	かんきつ病虫害のスプリンクラー防除上の留意点	152
(7)	かんきつウイルス・ウイロイド病の防除法	153
(8)	カンキツ黒点病の防除上の留意点	153
(9)	ミカンバエの防除上の留意点	154
(10)	キウイフルーツかいよう病の防除法	157
(11)	果樹園除草剤等使用法	159
1)	かんきつ類	159
2)	落葉果樹	160
(12)	植物調節剤使用基準	161
5	野菜	
(1)	野菜の病虫害防除法	166
	[1] きゅうり	166
	[2] かぼちゃ	176
	[3] すいか	179
	[4] トマト	183
	[5] なす	194
	[6] ピーマン	203
	[7] いちご	209
	[8] だいこん	215
	[9] キャベツ	221
	[10] ブロッコリー	232
	[11] はくさい	238
	[12] ほうれんそう	246
	[13] レタス	249
	[14] たまねぎ	257
	[15] ねぎ	263
	[16] にんじん	272
	[17] さといも	274
	[18] ばれいしょ	276
	[19] かんしょ	279
	[20] えだまめ	282
	[21] 未成熟そらまめ	286
	[22] さやえんどう	288
	[23] さやいんげん	292

[24]アスパラガス	294
[25]未成熟とうもろこし	297
[26]薬剤の注意事項一覧	299
(2) いも類の種子消毒法	301
(3) 野菜の土壌病害虫防除	301
①土壌消毒剤による病害虫防除法	301
②対抗植物利用による線虫防除法	305
③土壌消毒剤による一年生雑草防除法	305
④太陽熱利用による土壌消毒法	305
⑤有機物利用による土壌還元消毒法	306
⑥熱水利用による土壌消毒法	306
⑦苗立枯病などの薬剤灌注等防除法	307
(4) ミナミキイロアザミウマの防除法	308
(5) トマト黄化葉巻病防除法	311
(6) 防虫ネットによる害虫の防除法	313
(7) いちご炭疽病の防除法	313
(8) いちご萎黄病の防除法	315
(9) くん煙剤の使用法	316
(10) 野菜用銅剤及び混合剤の使用法	317
(11) 野菜ウイルス病の主な病原ウイルスとその性質	322
(12) 野菜類除草剤等使用法	324
1) 野菜除草剤使用上の注意	324
2) 非選択性茎葉処理型を除く除草剤について	324
3) 非選択性茎葉処理型除草剤による畦間処理について	335
(13) 植物成長調整剤使用基準	339
IV 令和5年主要改訂部分	340



## I 農作物病害虫等防除基本方針

病害虫等の防除にあたっては、関係機関、団体及び地域の防除組織等の緊密な連携のもとに、下記事項に留意し、地域に適合した効率的な防除を推進する。

### 記

- 1 農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定する。
- 2 農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守する。
- 3 病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬の使用推進を図る。
- 4 農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除の推進を図る。
- 5 同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬の輪用に努める。
- 6 農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底する。
- 7 農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守する。また、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着する。
- 8 農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図る。

## 作用機作による分類コードおよび薬剤系統一覧表（令和5年12月版）

	IRACコード※	系統名あるいは代表的有効成分名
殺虫剤 殺ダニ剤	1A	カーバメート系
	1B	有機リン系
	2B	フェニルピラゾール系
	3A	合成ピレスロイド系
	4A	ネオニコチノイド系
	4C	スルホキシイミン系
	4E	メソイオン系
	4F	ピリジリデン系
	5	スピノシン系
	6	マクロライド系
	7C	I G R系（幼若ホルモン類似剤）
	8B	非特異的阻害剤
	9B	ピリジン アゾメチン誘導体
	10A	ヘキシチアゾクス
	10B	ジフェニルオキサゾリン系
	11A	<i>Bacillus thuringiensis</i>
	12A	チオウレア系
	12C	亜硫酸エステル系
	13	ピロール系
	14	ネライストキシン系
	15	I G R系（キチン生合成阻害剤、タイプ0）
	16	I G R系（キチン生合成阻害剤、タイプ1）
	17	I G R系（脱皮阻害剤 ハエ目昆虫）
	18	I G R系（脱皮ホルモン受容体アゴニスト）
	19	アミトラズ
	20B	アセキノシル
	20D	ビフェナゼート
	21A	M E T I 剤
	22A	オキサダイアジン
	22B	セミカルバゾン
	23	環状ケトエノール系
	25A	$\beta$ -ケトニトリル誘導体
	25B	カルボキサニリド系
	28	ジアミド系
29	フロニカミド	
30	メタジアミド系、イソオキサゾリン系	
33	アシノナピル	
34	フロメトキン	
UN	作用機構が不明あるいは不明確な剤	
(物理)	気門閉塞系	
(交信)	交信かく乱剤	
(他)	その他	

※世界農薬工業連盟（現Crop Life International）の傘下の、I R A C（殺虫剤抵抗性管理委員会）により作成された殺虫剤の作用機構ごとの分類コード（2023年9月版）。

体系防除・ローテーション散布の際、コードが異なる薬剤を組み合わせで使用すれば、同一作用機構を持つ剤の連続使用を避けることができ、交差抵抗性のリスクが低減できるとI R A Cは提唱している。

詳細については、農薬工業会のホームページを参照下さい。

<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>



殺菌剤	FRACコード※	FRAC分類表のグループ名	備考
	1	MBC殺菌剤 (メチルベンゾイミダゾールカーバメート)	ベンゾイミダゾール系
	2	ジカルボキシイミド	ジカルボキシイミド系
	3	DMI殺菌剤 (脱メチル化阻害剤) (SBI:クラスI)	EBI系
	4	PA殺菌剤 (フェニルアミド)	
	6	ホスホロチオレート ジチオラン	
	7	SDHI殺菌剤 (コハク酸脱水素酵素阻害剤)	
	9	AP殺菌剤 (アニリノピリミジン)	
	10	N-フェニルカーバメート	
	11	QOI殺菌剤 (Qo阻害剤)	ストロビルリン系
	11A		
	12	PP殺菌剤 (フェニルピロール)	
	14	AH殺菌剤 (芳香族炭化水素)	
	16.1	MBI-R	
	16.3	MBI-P	
	17	KRI殺菌剤 (ケト還元阻害剤) (SBI:クラスIII)	
	18	(SBI:クラスIV)	
	19	ポリオキシシン	
	20	フェニルウレア	
	21	QII殺菌剤 (Qi阻害剤)	
	22	チアゾールカルボキサミド	
	24	ヘキソピラノシル抗生物質	
	25	グルコピラノシル抗生物質	
	27	シアノアセトアミド=オキシム	
	28	カーバメート	
	29		
	31	カルボン酸	
	32	芳香族ヘテロ環	
	36	ベンゼンスルホン酸	
	39	ピリミジンアミン ピラゾールカルボキサミド	
	40	CAA殺菌剤 (カルボン酸アミド)	
	41	テトラサイクリン抗生物質	
	43	ベンズアミド	
	45	QOSI殺菌剤 (QoS阻害剤)	
	49	OSBPI (オキシステロール結合タンパク質阻害)	
	50	アリルフェニルケトン	
	52	DHODHI殺菌剤	
	P1	ベンゾチアジアゾール (BTH)	抵抗性誘導
	P2	ベンゾイソチアゾール	抵抗性誘導
	P3	チアジアゾールカルボキサミド	抵抗性誘導
		イソチアゾールカルボキサミド	抵抗性誘導
	P7	ホスホナート	抵抗性誘導
	P8	イソチアゾール	抵抗性誘導
	U6	フェニルアセトアミド	
	U13	チアゾリジン	
	U14	ピリミジノンヒドラゾン	
	U16	4-キノリル酢酸	
	U17	テトラゾリルオキシム	
	U18	グルコピラノシル抗生物質	
	NC	種々	物理的阻害
	M1	無機化合物 (求電子剤)	有機銅、無機銅
	M2	無機化合物 (求電子剤)	無機硫黄
	M3	ジチオカーバメート (求電子剤)	ジチオカーバメート系
	M4	フタルイミド (求電子剤)	有機塩素系 (キャプタン)
	M5	クロロニトリル (フタロニトリル) (作用点不明)	有機塩素 (TPN)
	M7	ビスグアニジン (細胞膜攪乱剤、界面活性剤)	グアニジン系
	M9	キノン (アントラキノン) (求電子剤)	有機硫黄
	M10	キノキサリン (求電子剤)	キノキサリン系
	M11	マレイミド (求電子剤)	その他の合成殺菌剤 ・天然物由来の殺菌剤
	BM2	微生物 (生菌または抽出物、代謝産物)	

※世界農業工業連盟 (現Crop Life International) の傘下の、FRAC (殺菌剤耐性菌対策委員会) により作成された殺菌剤の作用機構ごとの分類コード (2023年8月版)。

体系防除・ローテーション散布の際、コードが異なる薬剤を組み合わせ使用すれば、同一作用機構を持つ剤の連続使用が避けられ、病原菌の感受性低下・耐性リスクが低減でき、殺菌剤の防除効果を安定化することができる。

詳細については、農業工業会のホームページを参照下さい。 <https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

## Ⅱ 農薬適正使用・危害防止対策

- 1 農薬取締法の概要
- 2 農薬残留に関する農薬使用基準
- 3 農薬毒性の分類基準
- 4 農薬事故防止対策
- 5 農薬の飛散防止対策
- 6 農薬による水産動植物・家畜・ミツバチに対する被害防止対策
- 7 パラコート剤の安全使用
- 8 合成ピレスロイド剤、B T剤及びI G R剤使用上の注意事項
- 9 農薬登録における適用作物名について

# 1 農薬取締法の概要

## 【目的・定義】（第1条～第2条）

この法律は、農薬について登録の制度を設け、販売及び使用の規制等を行うことにより、農薬の安全性その他の品質及びその安全かつ適正な使用の確保を図り、もって農業生産の安定と国民の健康の保護に資するとともに、国民の生活環境の保全に寄与することを目的とする。

この法律において「農薬」とは、農作物を害する菌、線虫、だに、昆虫、ねずみ、草その他の動植物又はウイルスの防除に用いられる殺菌剤、殺虫剤、除草剤その他の薬剤及び農作物等の生理機能の増進又は抑制に用いられる成長促進剤、発芽抑制剤その他の薬剤をいう。

## 【農薬の登録（製造者、輸入者に対する規制）】（第3～16条及び21条）

製造者又は輸入者は、農薬について、農林水産大臣の登録を受けなければ、これを製造し若しくは加工し、又は輸入してはならない。ただし、特定農薬はこの限りでない。

以下、製造者及び輸入者の農薬の表示（第16条）、虚偽の宣伝等の禁止（第21条） 等

## 【農薬の販売（販売者）に対する規制】（第17～23条）

### 1 届出の義務：販売所のある都道府県に届出（第17条）

「販売者は、その販売所ごとに、①氏名及び住所、②当該販売所を、販売所の所在地を所轄する都道府県知事に届け出なければならない。」

### 2 販売の規制等

#### ①販売者についての農薬の販売の制限又は禁止等（第18条）

「販売者は、容器又は包装に第16条の規定による表示のある農薬及び特定農薬以外の農薬を販売してはならない。」

#### ②回収命令等（第19条）

「農林水産大臣は、人畜・生活環境動植物等に被害が発生することを防止するため、販売農薬の回収及び必要な措置を命ずることができる。」

#### ③帳簿の記載（第20条）、帳簿の保存（施行規則第16条の2）

「販売者は帳簿を備え付け、農薬の種類別に、譲受数量及び譲渡数量（水質汚濁性農薬は譲渡先別数量）を記載し、最終の記載の日から3年間保存しなければならない。」

#### ④虚偽宣伝等の禁止（第21条）

「販売者は、販売する農薬の有効成分の含有濃度若しくはその効果に関する虚偽の宣伝、登録を受けていない農薬について登録を受けていると誤認させるような宣伝をしてはならない。」

#### ⑤農薬に該当しない除草剤を農薬として使用できない旨の表示（第22条）

「販売者は、販売所ごとに、公衆の見やすい場所に、除草剤を農薬として使用することができない旨の表示をしなければならない。」

## 【農薬の使用に関する規制（農薬使用者に対する規制）】（第24条～28条）

### 1 使用の禁止（無登録農薬、販売禁止農薬）（第24条）

「何人も、登録表示のある農薬（販売禁止農薬を除く）、特定農薬以外の農薬を使用してはならない。ただし、試験研究の目的で使用する場合は除く。」

### 2 農薬の使用の規制（第25条）

「農薬使用者は、農林水産大臣及び環境大臣が定めた、農薬を使用する者が遵守すべき基準に違反して、農薬を使用してはならない。」

### 3 水質汚濁性農薬（シジソ）の使用の規制（第26条、施行令第2条）

「都道府県知事は当該農薬の使用区域において、公共用水域の汚濁に伴う生活環境動植物の被害や人畜被害を生ずる恐れのあるときは、規則で地域を限定の上、使用の許可制を導入できる。」

### 4 農薬の使用に関する理解等（第27条）

「農薬使用者は、農薬の使用に当たっては、農薬の安全かつ適正な使用に関する知識と理解を深めるよう努めるとともに、普及指導員、病害虫防除員、都道府県知事が指定する者（農薬管理指導士）の指導を受けるように努めるものとする。」

### 【特定農薬】（第3条第1項）

特定農薬は、その原材料に照らし農作物等、人畜及び生活環境動植物に害を及ぼすおそれがないことが明らかなものとして農林水産大臣及び環境大臣が指定する農薬。

現在「重曹」、「食酢」、「次亜塩素酸水（塩酸又は塩化カリウム水溶液を電気分解して得られるものに限る。）」、「エチレン」、「天敵（使用場所と同一の都道府県内で採取されたもの）」が指定されている。

### 【販売使用禁止農薬】（第18条）

リンデン、DDT、エンドリン、ディルドリン、アルドリン、クロルデン、ヘプタクロル、ヘキサクロロベンゼン、マイレックス、トキサフェン、TEPP、メチルパラチオン、パラチオン、水銀剤、2, 4, 5-T、硫酸鉛、水酸化トリシクロヘキシルスズ（プリクトラン）、ダイホルタン、PCP、CNP、PCNB、ケルセン、ペンタクロロベンゼン、アルファーヘキサクロロシクロヘキサン、ベーターヘキサクロロシクロヘキサン、クロルデコン、ベンゾエピン（エンドスルファン）の計27農薬。

### 【農薬を使用する者が遵守すべき基準】（農林水産省・環境省令第5号）

#### ○罰則を科す基準

#### （1）食用作物及び飼料作物に農薬を使用しようとする場合

農薬登録時に定められた

- ①適用作物
- ②単位面積当たりの使用量の最高限度又は希釈倍数の最低限度
- ③使用時期
- ④総使用回数

について遵守を義務とする。

#### （2）食用作物への適用がない農薬を食用作物に使用してはならないこととする。

#### （3）倉庫、コンテナ、船倉、天幕その他密閉された施設において農薬をくん蒸に使用する者（自ら栽培する農作物等に農薬を使用する者を除く）、航空機を利用して農薬を使用する者、ゴルフ場において農薬を使用する者は、当該年度における農薬の使用計画を、毎年度使用する最初の日までに農林水産大臣及び環境大臣（ゴルフ場において農薬を使用するもの限定）に提出する（変更の場合も同様）ことについて遵守を義務とする。

#### ○遵守の努力を要請する基準

#### （1）容器に表示された最終有効年月を超えて農薬を使用しないよう努める。

#### （2）航空機（有人）を利用して農薬を使用する者は、対象区域において風速及び風向を観測し、対象区域外への農薬の飛散を防止するための必要な措置を講じるよう努める。

#### （3）ゴルフ場の外に農薬が流出することを防止するために必要な措置を講じるよう努める

#### （4）住宅、学校、保育所、病院、公園その他の人が居住し、滞在し、又は頻りに訪れる施設の敷地及びこれらに近接する土地において農薬を使用するときは、農薬が飛散することを防止するための必要な措置を講じるよう努める。

#### （5）農薬の使用者は以下の事項を帳簿に記載することに努める。

- ア 使用した年月日
- イ 使用した場所
- ウ 使用した農作物名
- エ 使用した農薬の種類又は名称
- オ 使用した農薬の単位面積当たりの使用量又は希釈倍数

#### （6）止水を要する農薬を水田で使用する者は、当該農薬の流出を防止するための必要な止水措置を講じるよう努める。

#### （7）被覆を要する農薬を使用する者は、農薬を使用した土壌から当該農薬が揮散することを防止するための必要な措置を講じるよう努める。

## 2 農薬残留に関する農薬使用基準

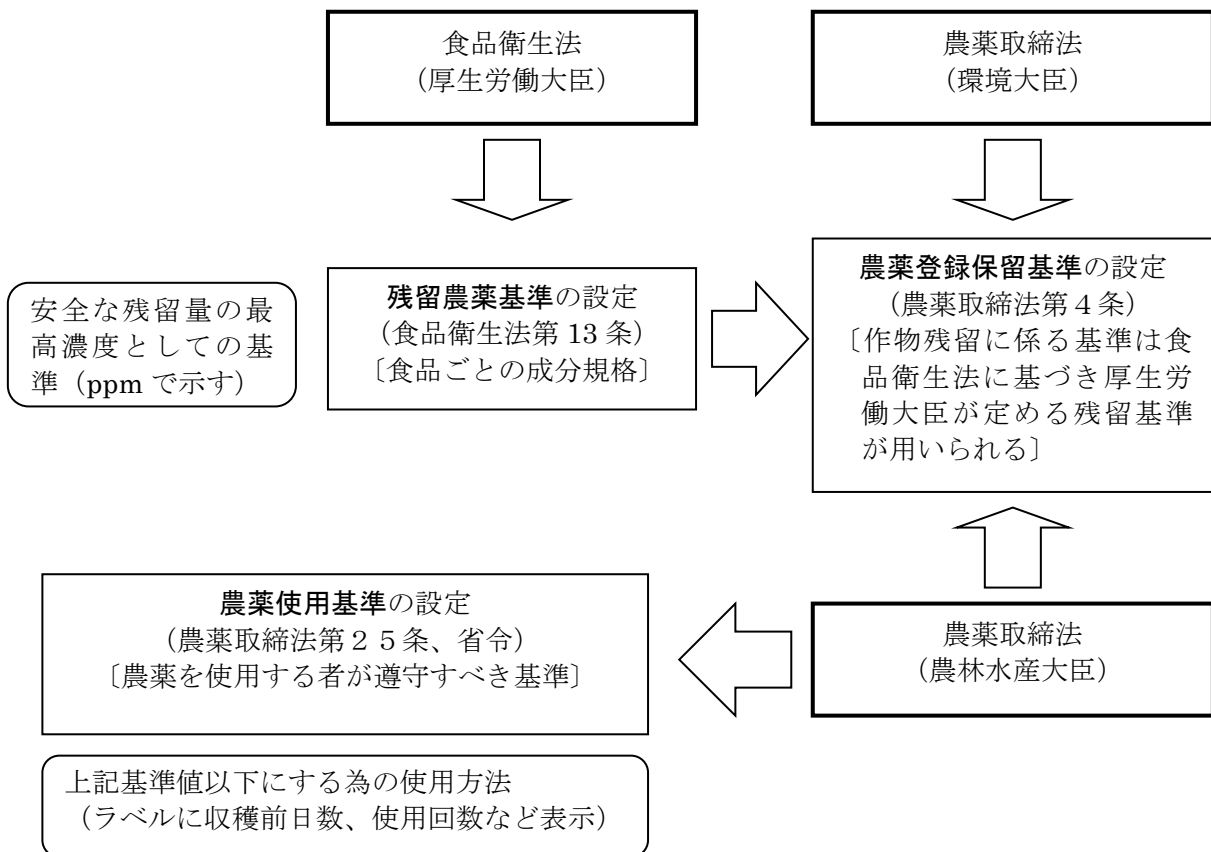
農薬取締法では、農薬の作物残留、土壌残留、水質汚濁による人畜への被害や生活環境動植物への被害を防止する観点から国が基準を定めることとされており、申請された農薬ごとにこれらの基準を超えないことを確認して登録することとされている。

これら基準は、審査の結果、基準を超えると判断された場合には登録が保留されることから「登録保留基準」と呼ばれ、環境大臣が定めて告示することとなっている。このうち、作物残留に係る基準については、食品衛生法に基づく食品規格（「残留農薬基準」）が定められている場合、その基準が登録保留基準となる。

これらのことを担保するため、農薬取締法に基づき「農薬使用基準」が制定されている。法律上農薬使用者には、使用方法（適用作物、使用時期、使用濃度、使用回数）等についてこの基準の遵守が義務付けられており、その使用方法是農薬のラベルに記載されている。

なお、ポジティブリスト制度では、国内の農産物と同様輸入農産物についても食品衛生法で定められた基準を超過して農薬が検出された場合には、当該農産物の流通が規制されることとなっている。

残留農薬基準、農薬登録保留基準、農薬使用基準の関係



### 3 農薬毒性の分類基準

#### 1 人畜毒性（平成29年2月改正の毒物劇物部会判定基準）

動物における知見として表の急性毒性試験、皮膚に対する腐食性試験、眼等の粘膜に対する重篤な損傷試験、農薬の物性または使用法からみた危害の発生状況などにより、原則として次のように分類されている。

分類	経口毒性 (LD <sub>50</sub> )	経皮毒性 (LD <sub>50</sub> )	吸入毒性 (LC <sub>50</sub> )			表示方法
			ガス	蒸気	ダスト ミスト	
毒物	50mg/kg以下	200mg/kg以下	500ppm (4時間)以下	2.0mg/l (4時間)以下	0.5mg/l (4時間)以下	「医薬用外」の文字及び赤地に白色で「毒物」と表示
劇物	50mg/kgを越え、 300mg/kg以下	200mg/kgを越え、 1,000mg/kg以下	500ppm (4時間)を越え、 2,500ppm (4時間)以下	2.0mg/l (4時間)を超え、 10mg/l (4時間)以下	0.5mg/l (4時間)を超え、 1.0mg/l (4時間)以下	「医薬用外」の文字及び白地に赤色で「劇物」と表示
普通物	「毒物及び劇物取締法」によって規定された特定毒物、毒物、劇物以外のもの。					

注1) LD<sub>50</sub>……動物の50%を死亡させる薬物量で体重1kgあたりの薬物量(mg)で示す。

注2) LC<sub>50</sub>……動物の50%を死亡させる薬物濃度で、蒸気、ダスト、ミストの場合はmg/lで示す。

注3) 毒物のうち、毒性が極めて強く、危害発生の恐れが著しいものは「特定毒物」に指定される。

#### 2 水域の生活環境動植物（水産動植物）への影響

農林水産省は、平成17年に新たに製剤の毒性試験結果及び当該製剤の使用方法に基づいた、より実態に近い評価法(以下、「新評価法」という。)を導入し、平成23年度よりその運用を開始、令和2年にも対象動植物を拡大し評価の充実を図っている。本県は漁業生産額が全国3位(平成25年農林水産統計)の水産県であることから、水産動植物への影響を勘案し、農薬成分原体の評価である旧魚毒性分類を加味することとし、県農作物病虫害等防除指針への掲載農薬において、次のような表記を行う。但し、いずれの薬剤も水産動植物への影響を考慮し、注意して使用する。

本文表記	新評価法に基づく注意事項の表現(例)
×	<ul style="list-style-type: none"> <li>・養殖池周辺での使用は避けること。</li> <li>・河川、湖沼、海域及び養殖池に本剤が飛散、流入する恐れのある場所では使用しないこと。</li> </ul>
△	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。</li> <li>・散布後は水管理に注意すること。</li> <li>・養魚田では使用しないこと。</li> <li>・散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。</li> <li>・空容器、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。</li> </ul>
○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この登録に係る使用方法では該当がない。</li> </ul>

上記の表に加え、平成27年以前の県農作物病虫害等防除指針掲載農薬のうち、魚毒性分類「C類」に該当していた農薬に「※」を付す。

水産動植物：魚類（ドジョウ、ボラ、マス、冷水魚）、甲殻類、藻類等

農薬取締法第26条の第1項に係る水質汚濁性農薬は、県農作物病虫害等防除指針への掲載はない。

本文中の該当欄は「水産(注)」と表記。

〈参考サイト〉

独立行政法人農林水産消費安全技術センター（FAMIC）

登録農薬有効成分の毒性・水域の生活環境動植物に対する影響等

<http://www.acis.famic.go.jp/toroku/dokuseieikyoku12.pdf>

水産動植物への影響に係る使用上の注意事項（製剤別一覧）

<http://www.acis.famic.go.jp/toroku/suisaneikyoku12.pdf>

※上記参考サイトアドレスの数字部分(04)については閲覧する月の数字を入力。

## 4 農薬事故防止対策

農薬による事故は、農薬を散布する基本的条件を無視したり、ちょっとした不注意が事故の原因となる場合が多い。万一、事故が起きれば人命にかかわり、また、自然環境に大きな被害を与えることとなるので、農薬使用者は、以下の農薬使用及び取扱いの基本的事項に十分留意し、事故の未然防止に努めるとともに、普及指導員、農薬管理指導士及び関係者は事故防止の指導を徹底する。

### 1 薬剤散布前の注意

- (1) 散布された農薬の飛散により、水源地、河川、池沼、海域等が汚染されることのないよう地区の実状を十分考慮した散布計画を立てる。
- (2) 畜舎、採草地、養魚場等の近くで薬剤散布するときは、家畜や魚介類等に影響が及ばないような対策を講じる。
- (3) 桑園が近くにあるときは、薬剤選定も注意する。
- (4) 農薬の購入にあたっては、使用に必要な量だけ購入する。
- (5) 薬剤を取り扱う前に容器に記載されている注意事項を必ず読み厳守する。
- (6) 散布機器、作業衣類の点検を十分に行う。
- (7) 散布作業の前日は栄養や睡眠を十分取るなどして体調を整え、睡眠不足、病後、妊娠、皮膚病等がある場合は散布作業を行わない。
- (8) 万一、中毒等の事故が起きたときのことを考え、応急処置の方法等を調べておく。
- (9) 薬剤散布直後のほ場へ立入らなくてすむように除草、施肥等の管理作業はあらかじめ終えておく。特に温室、ハウス等の施設内防除では注意する。
- (10) 畦畔等の雑草は刈り取っておき、薬剤散布後のものを家畜に与えない。
- (11) 子供や作業に関係ない者が現場に近寄らないような処置を講じておく。

### 2 薬剤運搬時の注意

- (1) 薬剤を運搬するときは、厳重に包装して運ぶこと。運搬中に破損して薬剤が身体に触れると危険であるから特に注意する。
- (2) 薬剤を運ぶときは、弁当など飲食物と一緒に包んだり、ポケットに入れたりしない。

### 3 散布液調整時の注意

- (1) 散布液の調整は、慣れている人が行う。(特に石灰硫黄合剤とリン酸第一石灰等、リン酸を含む資材を混合すると硫化水素が発生するので混用しない。)
- (2) 必ずゴム手袋、メガネ、マスクを着用し、皮膚の露出部分をできるだけ少なくして行う。
- (3) 薬液をはかるときは瓶の周囲に薬液がつかないように注意し、はかり終わったら1回ごとに必ず栓をしておく。
- (4) 薬液を水に混入するときは、水滴がはねかえらないように水面近くから静かに入れる。
- (5) 薬剤を入れた水は棒で攪拌し、手では攪拌しない。

### 4 薬剤散布の時の注意

- (1) 散布作業に慣れてくると、取り扱いが粗雑になったり、油断からの不注意による事故が起り易いので注意する。
- (2) 完全な服装で作業に当たり、薬剤による影響を少なくする。  
(帽子、メガネ、マスク、ゴム手袋、長袖の上衣、長ズボン、ゴム長を着用する。なお、上衣、長ズボンは防水したものを着るのがよい。)
- (3) 散布に当たっては、風向きを考え、常に身体を風上に置くように作業をし、散布薬剤を直接浴びないように注意する。
- (4) 作業は日中の暑い時を避けて、朝夕の比較的涼しい時間を選んで行い、同一人の長時間連続散布は行わない。
- (5) 作業中はタバコを吸わない。
- (6) 休憩の時や作業後にタバコを吸ったり、食事をとったりするときには必ず手や顔を石けんでよく洗い、うがいをする。
- (7) 作業中に、頭痛、めまい、吐き気等、身体の変調を感じたときは直ちに作業をやめる。
- (8) 万一、中毒等の症状があるときは、医師の診断を受けること。なお、その際は薬剤名を必ず告げる。
- (9) 温室、ハウス等の施設内に散布する場合には、特に作業服を厳重にし、マスクを着用する。
- (10) 温室、ハウス等の施設でクロルピクリン等のくん蒸剤を使用する場合は、隔離式有機ガス用防毒マスクを着用して作業するとともにガス漏れに注意し、付近住民等に危害が起らないように注意する。

## 5 薬剤散布後の注意

- (1) 作業が終わったら使用した容器や器具をよく洗うこと。ただし、洗浄の水が河川等に流入しないようにする。
- (2) 空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行うこと。
- (3) 作業終了後は手足はもとより全身を石けんでよく洗い、衣服は下着まで全部着替え、作業に使った衣類は他の洗濯物と区別し石けんでよく洗う。
- (4) 作業後の飲酒は慎む。
- (5) 夜更かしや、過激な労働はしない。
- (6) 気分が悪くなったり、身体の変調を感じたりしたら、早めに医師の診断を受ける。なお、その際は薬剤名や作業の状況を告げる。

## 6 薬剤の保管管理

- (1) 薬剤は密閉して保管場所にしまうこと。できれば保管庫を設ける。
- (2) 保管場所には必ず鍵をかけ、盗難や紛失を防止し、誤用のないようにする。
- (3) 保管場所はもしも薬剤が飛散したときでも、地下にしみ込んだり、流れ出るおそれのなく、直射日光が当たったり、湿度や温度が高くない場所に設ける。
- (4) 毒物及び劇物農薬の保管場所には、その旨表示する。
- (5) 薬剤を飲食物の容器や、他の容器に入れたり、移し替えたりしない。
- (6) 塩素酸ソーダ等の発火のおそれのある薬剤の保管及び取扱いには特に注意する。
- (7) 万一、盗難又は紛失等が発生した場合は、事故の未然防止のため速やかに近くの警察署に届ける。

## 7 住宅地等における農薬使用

(25消安第175号 平成25年4月26日「住宅地等における農薬使用について」通知 抜粋)

- (1) 病害虫に強い作物や品種の栽培、病害虫の発生しにくい適切な土づくりや施肥の実施、人手による害虫の捕殺、防虫網の設置、機械除草等の物理的防除の活用等により、農薬使用の回数及び量を削減すること。
- (2) 農薬を使用する場合には、農薬取締法に基づいて登録された、当該防除対象の農作物等に適用のある農薬を、ラベルに記載されている使用方法（使用回数、使用量、使用濃度等）及び使用上の注意事項を守って使用すること。
- (3) 粒剤、微粒剤等の飛散が少ない形状の農薬を使用するか、液体の形状で散布する農薬にあっては、飛散低減ノズルの使用に努めること。
- (4) 農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して行うこと。
- (5) 農薬の散布に当たっては、事前に周辺住民に対して農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者等の連絡先を十分な時間的余裕をもって幅広く周知すること。その際、過去の相談等により、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮すること。また、農薬散布区域の近隣に学校、通学路等がある場合には、万が一にも子どもが農薬を浴びることのないよう散布の時間帯に最大限配慮するとともに、当該学校や子どもの保護者等への周知を図ること。
- (6) 農薬を使用した年月日、場所及び対象農作物、使用した農薬の種類又は名称並びに使用した農薬の単位面積当たりの使用量又は希釈倍数を記録し、一定期間保管すること。
- (7) 農薬の散布後に、周辺住民等から体調不良等の相談があった場合には、農薬中毒の症状に詳しい病院又は公益財団法人日本中毒情報センターの相談窓口等を紹介すること。
- (8) 以上の事項の実施に当たっては、都道府県等の防除関係者や農業者向けの「総合的病害虫・雑草管理（IPM）実践指針」（平成17年9月30日農林水産省消費・安全局植物防疫課）や、農薬の飛散が生じるメカニズムやその低減に有効な技術を取りまとめた「農薬飛散対策技術マニュアル」（平成22年3月農林水産省消費・安全局植物防疫課）も参考とすること。

### ※（農薬事故相談）

#### 公益財団法人 日本中毒情報センター

（一般市民専用電話 情報提供料：無料）

「つくば 中毒110番」 電話 029 (852) 9999 【365日 9時～21時対応】

「大阪 中毒110番」 電話 072 (727) 2499 【365日 24時間対応】

（参考）えひめ医療情報ネット <http://www.qq.pref.ehime.jp/qqscripts/qq/qq38.asp>



## 5 農薬の飛散防止対策

平成18年に導入されたポジティブリスト制度では、食品衛生法に基づく残留基準値が設定されていない農薬等が一定量以上含まれる食品の販売等を原則禁止しています。また、ここでいう一定量とは、「食品衛生法第11条第3項の規定により人の健康を損なうおそれのない量として厚生労働大臣が定める量を定める件」（平成17年11月29日厚生労働省告示第497号）により0.01ppmとなっている。

そのため、農薬散布を行う場合には、当該農薬が散布される圃場のみならず、その周辺で栽培されている食用農作物の収穫物についても、食品衛生法の基準を超えた農薬が残留することがないように、関係機関が連携し、以下の農薬飛散防止対策の指導の徹底を図ることとする。

**【農薬飛散影響防止対策等】**（17消安第8282号 平成17年12月20日「農薬の飛散による周辺作物への影響防止対策について」通知 別紙2 2.個々の農業者が行う農薬の飛散影響防止対策等抜粋）

(1) 病虫害防除については、病虫害の発生や被害の有無にかかわらず定期的に農薬を散布することを見直し、以下の3点の取組からなる総合的病虫害・雑草管理（IPM）に努める。

- ① 輪作、抵抗性品種の導入や土着天敵等の生態系が有する機能を可能な限り活用すること等により、病虫害・雑草の発生しにくい環境を整える。
- ② 病虫害発生予察情報の積極的な活用等による病虫害・雑草の発生状況の把握を通じて、防除の要否及び防除適期を適切に判断する。
- ③ 防除が必要と判断された場合には、病虫害・雑草の発生を経済的な被害が生じるレベル以下に抑制するために、多様な防除手段の中から適切な手段を選択し、病虫害・雑草管理に努める。

(2) 病虫害の発生状況を踏まえ、農薬使用を行う場合には、次の事項の励行に努め、農薬の飛散により周辺農作物に被害を及ぼすことがないように配慮する。

- ① 周辺農作物の栽培者に対して、事前に、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類等について、連絡する。
- ② 当該病虫害の発生状況を踏まえ、最小限の区域における農薬散布に留める。
- ③ 農薬散布は無風又は風が弱い時に行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選ぶとともに、風向き、散布器具のノズルの向き等に注意する。
- ④ 特に周辺農作物の収穫時期が近い場合農薬の飛散による影響が予想される場合には、状況に応じて使用農薬の種類を変更し、飛散が少ない形状の農薬を選択し、又は農薬の散布方法や散布に用いる散布器具を飛散の少ないものに変更する。
- ⑤ 上記の②から④の対策をとっても飛散が避けられないような場合にあっては、農薬使用者は散布日の変更等の検討を行い、その上でやむを得ないと判断される場合には、周辺農作物の栽培者に対して収穫日の変更、圃場の被覆等による飛散防止対策を実施する。
- ⑥ 以下の項目について記録し、一定期間保管する。
  - ア. 農薬を使用した年月日、場所、対象農作物、気象条件（風の強さ）等
  - イ. 使用した農薬の種類又は名称及び単位面積当たりの使用量又は希釈倍数
- ⑦ 農薬の飛散が生じた場合には、周辺農作物の栽培者に対して速やかに連絡するとともに、地域で対策を協議する。

**【無人航空機による農薬散布に当たっての留意事項の遵守の徹底】**

無人航空機を用いて農薬を散布する場合は、関係法令を遵守するとともに、以下の通知を参照し、安全かつ適正な農薬散布を徹底すること。

「無人ヘリコプターによる農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」

「無人マルチローターによる農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」

（令和元年7月30日付け元消安第1388号農林水産省消費・安全局長通知）

## 6 農薬による生活環境動植物・家畜・ミツバチの被害防止対策

### 1 水域の生活環境動植物（水産動植物）に対する被害防止

農薬を使用する場合にあっては、使用上の注意事項を守るとともに、次の事項に十分注意して水産動植物の被害の未然防止に努める。

- (1) 散布に使用する機具等が作業中に故障あるいは破損しないよう、作業前に防除機具、ホース及びそれらの接続部分を十分整備点検すること。
- (2) 河川、湖沼及び海域の周辺において使用する場合には、水域に直接流入しないよう十分配慮すること。また、天気予報に注意し、散布後に降雨が予想されるときには散布作業を控えるほか、散布中であっても、降雨、強風などで農薬散布に不適切な状況が生じた場合には直ちに散布を中止すること。
- (3) 水田において使用した農薬が流出しないよう止水に関する注意事項を遵守し、止水期間中の農薬の流出を防止するために水管理や畦畔整備等の必要な措置を講じること（止水期間は1週間程度とする）。
- (4) 散布後に使用した機具及び容器を洗浄した水、使用残りの薬液は河川などに流入しないよう注意するとともに、空きびんなどの容器類は安全に処理すること。

特に水質汚濁性農薬はできるだけ使用しないように努めるとともに、本文表記「×」（P.8参照）及び平成27年県農作物病害虫等防除指針の掲載農薬の内、魚毒性分類「C類」に該当していた農薬を使用する場合は次の事項に十分留意して、水産動植物の被害の未然防止に努める。

- (1) 散布された薬剤が、河川、湖沼、海域及び養殖池に飛散又は流入する恐れのある場合は、使用しないこと。
- (2) 使用残りの薬液が生じないように調製を行うとともに、散布に使用した機具及び容器を洗浄した水は河川等に流さず、散布むらの調整等に使用し、また、空容器、空袋等は廃棄物処理業者への委託等により、水産動植物に影響を与えないよう安全に処理すること。

なお、水質汚濁性農薬をやむを得ず使用する場合は、農薬使用基準を遵守するとともに、人畜や水産動植物に被害を生ずる恐れがある地域（河川、池、養殖場の岸から200m以内の地域、水源地周辺から200m以内の地域）では使用しないこと。

- 水質汚濁性農薬（シマジン剤）については、なるべく代替剤を使用する。
- 特殊肥料の椿油かす（茶の実かす他、サポニンを含有する資材も含む）は魚毒性が非常に強いと言われているため、水田では使用しない。

### 2 家畜に対する被害防止

従来事故発生状況の全国的な傾向をみると、大中家畜は薬剤の散布地域およびその付近の畦草や野菜などの散布直後の給餌や、飲水による経口中毒によるものが多い。

また、鶏の場合は薬剤飛散による吸入中毒、給餌器、飲水の汚染が主な原因となっているので、つぎの諸点に注意する。

- (1) 散布前および散布時の注意事項
  - ① 特定物質の場合は公示されるが、その他の毒性の強い農薬を使う場合にも、散布前に散布地域、使用薬剤、家畜に対する注意事項を地域内家畜飼養者に徹底することが望ましい。
  - ② 散布に当たって豚舎、牛舎、鶏舎、牧草などのある場合は風向きを考えて、薬剤がかからないよう注意する。
  - ③ 広域な集団防除を実施する場合は、薬剤の飛散地域が広範になり、また気化ガス体の影響も考えられるので、当該地域の家畜飼養者に対し安全が確認されるまで戸外でのけい留、放飼をしないように要請する。

## (2) 散布後の注意

- ① 散布後、付近の餌となる草、牧草の刈取りは、薬剤の種類によって長短あるが、概ね2週間程度経過するまで行わない。従って、餌となる草、牧草は散布前に刈取っておく。
- ② 家畜が散布地域に入らないよう細心の注意をする。
- ③ 飲水は野外の天然水をさけ、水道、井戸水を給与する。
- ④ 万一、事故が発生した場合は、速やかに獣医師もしくは家畜保健衛生所に連絡し、手当を受ける。

## 3 ミツバチに対する被害防止

昨今、問題視されているミツバチの減少は、水稻の斑点米カメムシ類の防除で散布される殺虫剤をミツバチが浴びることが原因の一つと考えられている。加えて、水稻以外の作物においても、開花期に使用される農薬についてはミツバチに影響を及ぼすおそれがあるため、次の点に留意し、被害防止に努める。

- (1) ミツバチに影響のある農薬の使用については特に注意する。また、農薬散布によりミツバチ群に被害を及ぼすおそれのあるときは、養蜂組合各支部に使用農薬名、使用時期、使用方法など少なくとも散布2週間前に通報し巣箱退避の協力を得る。
- (2) ミツバチ群の飼育が明らかな場合には、事前に養蜂家への連絡を行う。また、ミツバチの活動が盛んな時間帯(8～12時)の農薬散布を避け、できるだけ早朝、または夕刻に散布する。
- (3) イチゴの奇形果防止やメロン、アブラナ科野菜の受粉などに利用されるミツバチは農薬に対してきわめて敏感であるため、管理に十分な注意が必要である。薬剤散布する場合は巣箱を外に出しておき、影響がなくなってからハウス内に入れる。

### 愛媛県内養蜂関係団体連絡先一覧

#### 愛媛県養蜂協同組合連合会

住 所：伊予市大平甲739-7                      連絡先：089-989-0225

#### 東予養蜂協同組合

住 所：西条市丹原町来見1-41                      連絡先：0898-75-3848

#### 中予養蜂協同組合

住 所：松山市太山寺町1874                      連絡先：089-978-3455

#### 八西養蜂組合

住 所：八幡浜市古町2-2-20                      連絡先：0894-24-3619

#### 南予養蜂組合

住 所：宇和島市鶴島町6-21                      連絡先：0895-24-5112

#### 〈参考サイト〉

農林水産省

農薬による蜜蜂の危害を防止するための我が国の取組

[http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n\\_mitubati](http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati)

## 7 パラコート剤の安全使用

### 1 使用上の注意事項

- (1) 散布液調製の際は、原液が皮膚に接触したり、目に飛沫が入ったりしないように十分注意する。
- (2) 散布時は噴霧をあびたり吸い込んだりしないよう注意し、必ずマスクを着用する。
- (3) 散布作業はなるべく朝夕の涼しい時間を選び、2～3時間で交代するなどして作業が長時間にならないようにする。
- (4) 過労時や病後などで健康がすぐれない時には、散布作業を行わない。
- (5) 散布はなるべく低圧で行い、周囲の作物や居住者・通行人などに被害を及ぼさないよう風向きなどにも注意する。またミスト機の使用は避ける。
- (6) 散布中にめまいや頭痛など、気分が悪くなった時は、直ちに散布作業をやめて病院で手当を受ける。
- (7) 散布後は、顔・手など皮膚の露出部を石けんでよく洗い、うがいをする。  
※ 作業衣も洗濯したものと取替える。
- (8) 散布液を作った容器および散布機具は使用後石けん水で十分洗う。
- (9) 散布後は少なくとも、その当日は散布区域に立入らないよう配慮する。

### 2 保管管理上の注意事項

- (1) 保管の際は、密栓して、必ず鍵のかかる所に厳重に保管する。
- (2) 誤飲の危険を避けるため保管の際は、他の容器に絶対に移しかえない。
- (3) 危険防止のため原液を分割して、他人に譲渡しない。
- (4) 使用後の空びんは、ほ場などに放置せず適切に処置する。
- (5) 飲食物、食器類と区別する。
- (6) 子供の手の届かない所に保管する。
- (7) 万一、盗難又は紛失事故が発生した場合は、事故の未然防止のため速やかに所轄の警察署に届ける。

### 3 毒劇物販売上の注意事項

- (1) 販売数量、年月日、譲受人の氏名・職業・住所の記録、当該毒物の性状及び取扱いに関する情報の提供などが必要である。
- (2) 18歳未満の者、心身の障害により毒物又は劇物による保健衛生上の危害の防止の措置を適正に行うことができない者として厚生労働省令で定める者、麻薬・大麻・あへん又は覚せい剤の中毒者には販売が禁止されている。
- (3) 販売等譲渡にあたっては、農業本来の用途以外に使用されることのないよう十分注意する。

### 4 誤って飲んだ場合の処置

- (1) 誤飲の際は、直ちに濃い温食塩水などをくり返し飲み、指をのどに入れるなどして胃の中のものを吐き出した後、至急病院で手当を受ける。  
※ たとえ飲んだ量が少なく、症状が軽くても必ず処置を受けること。

### 5 誤って眼に入った場合の処置

- (1) 誤って原液や飛沫が眼に入った場合はそのまま放置すると炎症をおこすので、必ず直ちに清水で十分洗眼した後、至急病院で手当を受ける。

※パラコート剤を含む主な薬剤とその主な使用方法

薬剤名	登録作物	適用雑草名	使用時期 【使用方法】	使用量 (mL/10a)	使用水量 (L/10a)	使用回数
プリグロックスL	かんきつ	一年生雑草	雑草生育期 但し、収穫前日まで	800～1000	100～150	5回以内
	麦類		は種前又はは種後出芽前	600～1000		4回以内
	野菜類		は種前又は植付前			3回以内

※野菜類(品目ごとに使用条件が違うので確認すること)

## 8 合成ピレスロイド剤、B T 剤及び I G R 剤使用上の注意事項

これらの剤は、その成分の作用特性からみて、特に蚕や水産動植物に対する危被害防止に努める必要があるため、本来の特性を十分熟知した上で次のような点に注意し、安全な使用・危害防止について周知徹底を図る。

### (1) 合成ピレスロイド剤

#### ① 蚕 毒

蚕に対して長時間強い毒性があるので、薬液の飛散により桑の茎葉を汚染することのないように桑園のある地帯では使用しない。

#### ② 水産動植物への影響

ごく低濃度でも水産動物に強い影響を及ぼすので、河川、湖沼、海域及び養殖池に薬液が飛散・流入する恐れのある場所では使用しない。また、一時に広範囲には使用しない。

#### ③ その他の留意点

ア 水稲用合成ピレスロイド剤（トレボン剤等）で一時に広範囲に使用する場合には、地域の指導方針に従いつつ使用基準を遵守する。

イ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、年1回の使用とすることが望ましい。

ウ 散布に使用した機具及び容器を洗浄した水は、河川等に流さず、散布むらの調整等に使用し、また、空容器、空袋等は廃棄物処理業者への処理の委託等により水産動物に影響を与えないよう安全に処理する。

### (2) B T 剤 (*Bacillus thuringiensis* 菌結晶毒素および生芽胞を含む)

#### 蚕 毒

養蚕地帯及び養蚕農家、共同飼育場などの周辺では使用しない。又、これら以外の場所でも付近に桑園がある場合、飛散してかからないように、風向きなどに十分注意して散布する。やむをえず使用する場合は、事前に関係機関・団体及び生産者組織と安全対策について十分協議し、万全を期すこと。

<B T 剤の分類>

生・死菌の別	亜 種 名	薬 剤 名(主なもの)	特 徴
死 菌 1)	<i>kurstaki</i>	トアロー水和剤 C T	<ul style="list-style-type: none"> <li>いずれもチョウ目害虫の幼虫のみに効果がある。</li> <li>生芽胞は結晶毒素と混合することにより、効果が増強し速効性が高まる。</li> <li><i>kurstaki</i> 系統はコナガやアオムシに有効。</li> </ul>
生 菌 2)	<i>kurstaki</i>	チューリサイド水和剤 デルフィン顆粒水和剤 エスマルク D F チューンアップ顆粒水和剤 ファイブスター顆粒水和剤 バイオマックス D F	
	<i>aizawai</i>	ゼンターリ顆粒水和剤 サブリナフロアブル クオークフロアブル ジャックポット顆粒水和剤 フローバック D F エコマスター B T チューレックス顆粒水和剤	<ul style="list-style-type: none"> <li><i>aizawai</i> 系統はヨトウムシ類に有効。</li> </ul>
	<i>kurstaki+aizawai</i>	バシレックス水和剤	

1) 生芽胞を殺滅処理した結晶毒素のみのもの

2) 生芽胞と結晶毒素の両者を含むもの

3) B T 剤の登録薬剤一覧(参考資料 P. 18) 参照。

### (3) I G R 剤 (昆虫成長制御剤)

#### ① 蚕 毒

蚕に対して長時間毒性があるので、薬液の飛散により桑の茎葉を汚染することのないように桑園のある地帯では使用しない。

#### ② 水産動植物への影響

水産動物、特に甲殻類に悪影響を及ぼすので、養魚池等周辺での使用には十分注意する。

(ただし、アプロード剤はカメムシ目害虫に、トリガードはハエ目害虫に作用するので、他の I G R 剤に比べ蚕毒、水産動植物(特に甲殻類)に対する影響は少ない。)

薬剤名	アプロード	トリガード	アタブロン	カスケード	マ ッ チ	レターデン	ノーモルト	ファルコン	マトリック	ロムダン
蚕 毒	低 (7日)	低 (20日)	高 (90日)	高 (50日)	高 (60日)	高 (80日)	高 (90日)	高 (60日)	高 (90日)	高 (80日)
特 徴	カメムシ目害虫(ウカ、ヨコバイ、コシラミ、カイガラムシ類)に対する効果が高い。キチン合成阻害剤	ハエ目害虫(ハエの仲間、ハモグリバエ類)に対する効果が高い。クチク硬化剤	主にチョウ目害虫に対する効果が高い。					脱皮促進		チョウ目害虫専用のホルモン様活性剤

注：( ) は蚕に薬害のなくなる最低経過日数を一応の目安として記載したが、その日を越えても悪影響を及ぼす場合があるので注意する。

## 9 農薬登録における適用作物名について

(令和3年1月14日 最終改正)

農薬取締法第3条第2項第3号(同法第34条において準用する場合を含む。)に規定する適用病害虫の範囲及び使用方法に関する適用農作物等の名称は、「農薬の適用病害虫の範囲及び使用方法に係る適用農作物等の名称について」(平成31年3月29日付け30消安第6281号農林水産省消費・安全局農産安全管理課長通知)に定められている。

表の使用に際しては以下の事項に留意してください。

注1 掲載されている作物名の中には、現在、農薬の適用作物には含まれてない作物を含む。なお、適用作物に含まれていない作物については、農薬登録時にその名称が変更される場合がある。

注2 品種名及び栽培条件(施設栽培等)等については省略している場合があるが、農薬登録時に品種名又は栽培条件等の指定がある場合は、当該品種又は栽培条件等のみ使用できるものである。

表1 適用農作物のうち食用又は飼料用に利用される農作物

※食用及び家畜飼料の両方に利用される農作物

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)				
果樹類	かんきつ	-	天草		果実を収穫するもの				
			アンコール						
			伊予柑						
			大紅みかん						
			オレンジ	スイートオレンジ、バレンシアオレンジ					
			カープチー						
			かぼす						
			カラ	カラマンダリン					
			河内晩柑						
			清見						
			きんかん	ニンボウキンカン、マルキンカン					
			グレープフルーツ						
			サガマンダリン						
			サマーフレッシュ						
			シークワーサー						
			じゃばら						
			不知火	デコボン					
			すだち						
			せとか						
			セミノール						
			タロガヨ						
			たんかん						
			長門ユズキチ						
			なつみかん	甘夏、なつだいだい					
			ネーブル	ワシントンネーブル					
			はっさく						
			はるか						
			はるみ						
			はれひめ						
			日向夏						
			ぶんたん	ざぼん、ぼんたん、晩白柚、うちむらさき					
			平兵衛酢						
			ぼんかん						
			マーコット						
			みかん	温州みかん、紀州みかん					
			ゆず						
			ライム						
			レモン						
			ミカン(Citrus)属、キンカン(Fortunella)属、カラタチ(Poncirus)属又はこれらの交配種で、概ね偏球形、球形又は卵形の果実を収穫するものは、これらの作物群に含まれる。						
			仁果類	-		-	かりん		果実を収穫するもの
							なし	日本なし、西洋なし、中国なし	
							びわ		
							マルメロ		
りんご									
核果類	もも類	-	もも		果実を収穫するもの				
			ネクタリン						
	小粒核果類	-	あんず	アブリコット					
			うめ						
			すもも	ブラム、ブルーネ					
作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。									
ベリー類等の小粒果実類	-	-	おうとう	さくらんぼ	果実を収穫するもの				
			ぶどう	小粒種ぶどう(デラウェア、シラガブドウ、やまぶどう)、大粒種ぶどう(巨峰系4倍体品種、2倍体米国系品種、2倍体欧州系品種、3倍体品種他)注1)					
			ベリー類	アロニア		チョコベリー			
				がまずみ		ジョミ			
				ぐみ		アキグミ、ダイオウグミ、トウグミ、ナツグミ			
シーベリー	サジー、サージ、スナヂグミ								

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、 品種名等の例	備考 (収穫部位等)		
果樹類	ベリー類等の 小粒果実 類	ベリー類	食用桑（果実）	カラグワ、ヤマグワ			
			すぐり	グースベリー			
			ハスカップ	クロミノウグイスカグラ			
			ふさすぐり	カーラント、カラント、カラント、アカフサスグリ、 クロフサスグリ、カシス			
			ブラックベリー				
			ブルーベリー				
			ボイセンベリー				
			やまもも				
	ラズベリー						
	—	—	アーモンド		仁を収穫するもの		
	—	—	あけび（果実）		果実を収穫するもの		
	—	—	アセロラ				
	—	—	アテモヤ				
	—	—	アボカド				
	—	—	いちじく				
	—	—	いちよう（種子）	ギンナン	種子を収穫するもの		
	—	—	オリーブ		果実を収穫するもの		
	—	—	カカオ		種子を収穫するもの		
	—	—	かき		果実を収穫するもの		
	—	—	カニステル	エッグフルーツ、クダモノタマゴ			
	—	—	キウイフルーツ				
	—	—	グアバ（果実）	パンジロウ、パンザクロ			
	—	—	くり		種子を収穫するもの		
	—	—	くるみ				
	—	—	コーヒーノキ				
	—	—	ゴレンシ	スターフルーツ	果実を収穫するもの		
	—	—	ざくろ				
	—	—	サボジラ				
	—	—	さるなし	こくわ、香粋			
	—	—	さんしょう（果実）				
	—	—	ジャボチカバ				
	—	—	食用つばき（種子）		種子を収穫するもの		
	—	—	ストロベリーグアバ		果実を収穫するもの		
	—	—	チェリモヤ				
	—	—	なつめ				
	—	—	パイナップル				
	—	—	パッションフルーツ	くだものつけいそう			
	—	—	バナナ				
	—	—	パパイヤ	青パパイヤ	果実を収穫するもの。完熟して いないものを含む。		
	—	—	はまなす（果実）		果実を収穫するもの		
	—	—	パンレイシ	ジャカトウ、アテス、シュガーアップル			
	—	—	ピタヤ	ホワイトピタヤ、レッドピタヤ、ゴールドピタヤ、 ドラゴンフルーツ			
—	—	ピタンガ	タチバナアデク、スリナムチェリー、ブラジルチェ リー				
—	—	フェイジョア	パイナップルグアバ				
—	—	ペカン		種子を収穫するもの			
—	—	ペビーノ		果実を収穫するもの			
—	—	ポポー	アケビガキ				
—	—	ホワイトサボテ					
—	—	マンゴー					
—	—	ミラクルフルーツ					
—	—	むべ					
—	—	リュウガン	ロンガン、竜眼				
—	—	レイシ	ライチ				
—	—	レンブ	ジャワフトモモ				
野菜類	いも類	—	アメリカホドイモ	アビオス	塊根を収穫するもの		
			かんしょ	さつまいも、シモンいも			
			きくいも	ブタイモ	塊茎を収穫するもの		
			キャッサバ		塊根を収穫するもの		
			こんにやく		塊茎を収穫するもの		
			さといも	えびいも、たけのこいも、やつがしら、セレバス			
			ちよろぎ				
			はずいも（塊茎）				
			ばれいしょ	じゃがいも			
			みずいも	田いも			
			ヤーコン		塊根を収穫するもの		
			やまのいも	やまといも、自然薯、丸いも、ながいも、とっくりい も、いせいも、いちよういも、つくねいも、だいじょ	塊茎を収穫するもの		
			根菜類	—	うこん	秋ウコン、キョウオウ、春ウコン	根茎を収穫するもの
					かえんさい	デトロイトダークレッド、レッドビート、ガーデン ビート	根を収穫するもの

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)		
野菜類	根菜類	—	かのこそう	ハルオミナエシ	根茎及び根を収穫するもの		
			かぶ	赤かぶ、赤菜、温海かぶ、稲核菜、大かぶ、鬼首菜、源助カブナ、こかぶ、小牛田菜、聖護院かぶ、清内路あかね、酢菜(すぐきな)、長禅寺菜、津田かぶ、天王寺かぶ、鳴沢菜、羽広菜、ひのなかぶ(日野菜)、福島菜、紅かぶ、ゆるぎかぶ(万木かぶ)	茎葉及び根を収穫するもの		
			甘草	ウラルカンゾウ、スペインカンゾウ	根及びストロンを収穫するもの		
			ごぼう		根を収穫するもの		
			しょうが	根しょうが	根茎を収穫するもの		
			葉しょうが	やなかしょうが、はじかみしょうが、筆ショウガ	生葉のついたままの若い根茎を収穫するもの		
			食用あまどころ		根茎を収穫するもの		
			食用ききょう(根)		根を収穫するもの		
			西洋ごぼう	サルシファイ、バラモンジン、サルシフィー			
			セルリアック	根セロリ、根セルリ			
			だいこん	葉だいこん、だいこんな	茎葉及び根を収穫するもの		
			チコリ(根株)	キクニガナ	根を収穫するもの		
			てんさい※	サトウダイコン	根を採糖目的に収穫するもの		
			にんじん	金時にんじん、西洋にんじん、島にんじん	根を収穫するもの		
			にんじん(葉)	葉にんじん	比較的若い葉を根とともに収穫するもの		
			パースニップ		根を収穫するもの		
			はつかだいこん	廿日大根、ラディッシュ、二十日大根	茎葉及び根を収穫するもの		
			紫うこん	ガジュツ	根茎を収穫するもの		
			もりあざみ	やまごぼう、ごぼうあざみ	根を収穫するもの		
			薬用にんじん	おたねにんじん、チョウセンニンジン、コウライニンジン			
			わさびだいこん	ホースラディッシュ、西洋わさび			
	鱗茎類	鱗茎類(根物)	—	たまねぎ		鱗茎を収穫するもの	
				葉たまねぎ	葉玉葱	たまねぎの比較的若い段階(鱗茎が太り始める頃)の葉及び鱗茎を収穫するもの	
				食用ゆり	ゆりね	鱗茎を収穫するもの	
				にんにく	ジャンボニンニク、エレファントガーリック、グレートヘッドガーリック		
				葉にんにく		にんにくの比較的若い段階の葉及び鱗茎を収穫するもの	
				のびる		葉及び鱗茎を収穫するもの	
				ベルギーエシャロット	シャロット	鱗茎を収穫するもの	
				らっきょう	らっきょう(エシャロット栽培)、らっきょう(エシャロット栽培)		
		鱗茎類(葉物)	—	—	あさつき	イトネギ、センボンワケギ	葉及び鱗茎を収穫するもの
					ぎょうじゃにんにく		
					チャイブ	エゾネギ、セイヨウアサツキ、シブレット	葉を収穫するもの
					にら	黄にら	
					にら(花茎)	花にら	花蕾及び花茎を収穫するもの
					にんにく(花茎)		花茎を収穫するもの
					ねぎ	九条ねぎ、加賀太ねぎ、千住ねぎ、やぐらねぎ、下仁田ねぎ、リーキ、わけねぎ	茎葉を収穫するもの
					わけぎ		葉及び鱗茎を収穫するもの
	作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		葉及び鱗茎を収穫するもの				
	豆類(種実)	—	—	あずき	大納言	成熟した種子を収穫するもの	
				いんげんまめ	いんげん、きんときまめ、とらまめ、うずらまめ		
				えんどうまめ			
				ささげ			
				そらまめ			
				だいず※			
				なたまめ			
				ふじまめ	千石豆、カガツルマメ、ツルマメ		
				べにばないんげん	はなまめ		
らっかせい				なんきんまめ、ピーナッツ			
豆類(未成熟)	—	—	えだまめ		未成熟なさや付き豆を収穫するもの		
			さやいんげん	ヒラザヤインゲン、モロッコインゲン			
			さやえんどう	きぬさやえんどう、スナックえんどう、砂糖えんどう、スナックエンドウ	未成熟なさや付き豆を収穫するもの		
			実えんどう	うすいえんどう、グリーンピース	未成熟な種子(さや付で収穫されるものを含む)を収穫するもの		
			未成熟ささげ	十六ささげ、あきしまささげ	未成熟なさや付き豆を収穫するもの		
			未成熟しかくまめ	ウリズン、トウサイ			
			未成熟そらまめ		未成熟な種子(さや付で収穫されるものを含む)を収穫するもの		



大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)			
野菜類	豆類（未成熟）	—	未成熟なたまめ		未成熟なさや付き豆を収穫するもの			
			未成熟ふじまめ	未成熟千石豆、未成熟カガツルマメ、未成熟ツルマメ				
	うり類	うり類（未成熟）	赤毛ウリ	モーウィ	果実を収穫するもの			
			エホバク	韓国カボチャ				
			きゅうり	乙事赤うり				
			きゅうり（花）	花丸きゅうり		きゅうりの雌花を収穫するもの		
			食用ひょうたん			果実を収穫するもの		
			食用へちま					
			しろうり	あおうり、カリモリ、はぐらうり、青しまうり、くろうり、桂うり				
			ズッキーニ					
			ズッキーニ（花）	花ズッキーニ		花を収穫するもの		
			とうがん	かもうり、冬瓜		果実を収穫するもの		
			にがうり	つるれいし				
			はやとうり					
			ゆうがお	かんびょう				
			うり類（成熟）	うり類（成熟）		かぼちゃ	日本かぼちゃ、西洋かぼちゃ、べほかぼちゃ（ズッキーニを除く）	
						すいか		成熟した果実を収穫するもの
						漬物用すいか	源吾兵衛西瓜	未成熟な果実を収穫するもの
						ツノニガウリ	キノ	成熟した果実を収穫するもの
	まくわうり	菊メロン、銀泉、金太郎、金俵、タイガメロン、ニューメロン、悠紀メロン			成熟した果実を収穫するもの			
	漬物用まくわうり	ぺっちんうり			未成熟な果実を収穫するもの			
	メロン	アールスメロン、アムスメロン、アンスメロン、エリザベスメロン、キンショウメロン、キンショウメロン、クインシーメロン、タカミメロン、ハニーデューメロン、パパイヤメロン、プリンスメロン、ハミウリ			成熟した果実を収穫するもの			
	漬物用メロン				未成熟な果実を収穫するもの			
	なす科果菜類	—			しょくようほおずき	ゴールデンベリー、トマティロ、グランドチェリー	果実を収穫するもの	
					トマト		果実を収穫するもの。 直径3cm以下のものは含まない。	
			ミニトマト		果実を収穫するもの。 直径3cm以下のもの。			
			なす		果実を収穫するもの			
			ピーマン及びとうがらし類	ピーマン及びとうがらし類	甘長とうがらし	伏見とうがらし、万願寺とうがらし、三宝とうがらし、ひもとうがらし	果実を収穫するもの。未成熟の状態で利用する甘味種。	
					かぐらなんばん		果実を収穫するもの	
					きだちとうがらし			
					ししとう	ししとうがらし、獅子唐、葵ししとう		
					とうがらし	鷹の爪、八房、日光とうがらし、札幌大長とうがらし	果実を収穫するもの。未成熟の状態で、あるいは完全させて利用する辛味種。	
			ハバネロ		果実を収穫するもの			
			ピーマン	大獅子、カリフォルニアワンダー、カラーピーマン、オランダパブリカ				
	ピカンテ							
	あぶらな科野菜（花蕾及び茎）	はなやさい類	カリフラワー	はなやさい、さんごしょう、ロマネスコ、カリフローレ	花蕾及び花茎を収穫するもの			
			茎ブロッコリー	スティックセニョール				
			ブロッコリー					
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。					
	あぶらな科茎野菜	あぶらな科茎野菜	コールラビ	球茎カンラン、蕪キャベツ	肥大した茎を収穫するもの			
			ザーサイ	茎タカナ、海野（肥大茎）、四川搾菜（肥大茎）				
	葉菜類	非結球あぶらな科葉菜類	あざみな	チリメンカラシ、ハゴロモカラシナ	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの			
			あじみな	味美菜				
あぶらな			仙台芭蕉菜、はたけな（畑菜）、姫路若菜、やまとまな（大和真菜）					
飯田冬菜								
潮江菜								
海野（茎葉）								
大高菜								
大山そだち								
カーボロネロ			黒キャベツ					
かぶな			木曾菜、なかじまな（中島菜）					
かほくな			河北菜					
からしな			黄からしな、葉からしな、やましおな、レッドアジアマスタード、グリーンマスタード、セリフォン					
ケール			ハゴロモカンラン、リョクヨウカンラン					
ケールッコラ								
こまつな			小松菜					

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)	
野菜類	葉菜類	非結球あぶらな科葉菜類	さがみグリーン		茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの	
			さぬきな			
			四川搾菜（茎葉）	たけのこたかな		
			千宝菜	千宝菜1号（せんぼうさい1号）、千宝菜2号（せんぼうさい2号）		
			タアサイ	仙台雪菜、タアサイ（ターサイ、ターツァイ、如月菜、きさらぎな、瓢菜、ひさごな、縮み菜、ちぢみな）		
			体中菜	ハオチイ菜		
			たかな	高菜、かつおな、せいさい、山形青菜、三池たかな		
			食べて菜			
			チンゲンサイ	青梗菜		
			チンゲンルッコラ			
			てごろ菜			
			なずな			茎葉を収穫するもの。春の七草の一種。
			なばな類	あさまこな（朝熊小菜）、あすっこ、アレッタ、おおさきな（大崎菜、芹田菜）、太田かぶ（やる菜）、オータムポエム（アスパラ菜、愛味菜）、大月菜、大野菜、かいらん、かきな（かき菜、宮内菜、宮崎菜、C〇菜、川流れ菜、五月菜、芯切菜）、勝山水菜（平泉寺水菜、郡水菜、さんまい水菜、北市水菜）、くきたちな（会津茎立菜、カブレ菜、縮緬茎立）、ケールルッコラ（なばな栽培）、こうさいたい（紅葉苔）、こまつな（なばな栽培）、さいしん（菜芯、油菜芯）、三景雪菜、四川児菜（子持たかな、祝蕾）、たべたい菜、チーマデラーパ、チンゲンサイ（なばな栽培）、チンゲンルッコラ（なばな栽培）、摘菜花、つぼみな（つぼみ菜、三陸つぼみ菜、あでやかつぼみ菜）、なばな（なのはな、はなな）、のらぼうな（のらぼう菜）、博多蕾菜、はくさい（なばな栽培）（ふくたち）、はたけな（畑菜）（なばな栽培）、はなっこりー、みずかけな（水掛菜）、あいけな（女池菜、新潟なばな、角田冬菜、新潟小松菜）		茎葉及び花蕾を収穫するもの
			のざわな	野沢菜		茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
		パクチョイ		葉、花茎、根茎及び根を収穫するもの。畑地で栽培されるもの。		
		畑わさび	おかわさび	根茎を収穫するもの。		
		畑わさび（根茎）	おかわさび	葉を収穫するもの。畑地で栽培されるもの。		
		畑わさび（葉）	葉わさび	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの		
		非結球はくさい	小倉はくさい菜、さんとうさい（山東菜、べかな、非結球はくさい、半結球はくさい、いがむらさき）、しろな（大阪しろな、なにわ菜、京の里しろな、いなみ菜）、たいさい（体菜、たいな、雪白菜、二貫目体菜、しゃくし菜、長岡菜、下北春まな）、長崎はくさい（長崎白菜、唐人菜、唐菜）、博多白菜、ひこしまはるな（彦島春菜）、ビタミン菜、ひろしまな（広島菜）、優愛菜	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの		
		非結球メキャベツ	ブチヴェール、ミニベール	茎葉及び脇芽を収穫するもの		
		べんり菜		茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの		
		みずな	みずな（京菜、水菜、京水菜）、みぶな（壬生菜）			
		餅菜	正月菜			
		山形みどりな				
		ラファノブラシカ		茎葉及び花蕾を収穫するもの		
		ルッコラ	ロケット、セルパチコ、ガルギール、エルーカ	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの		
		わさびな		茎葉（花茎がのびだす前のもの）又は茎葉及び花茎を収穫するもの		
		作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		茎葉（花茎がのびだす前のもの）又は茎葉及び花蕾を収穫するものも含まれる（根菜類、結球あぶらな科葉菜類、はなやさい類及びあぶらな科茎野菜に含まれる作物は除く。）。		
		Brassica rapa, B. oleracea, B. juncea 又はこれらの交配種で、非結球の茎葉又は茎葉及び花蕾を収穫するものも含まれる（根菜類、結球あぶらな科葉菜類、はなやさい類及びあぶらな科茎野菜に含まれる作物は除く。）。				
		結球あぶらな科葉菜類	キャベツ	チリメンキャベツ、サボイキャベツ	結球した茎葉を収穫するもの	
			はくさい			
			メキャベツ	芽キャベツ、こもちかんらん	結球した腋芽（脇芽）を収穫するもの	
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		結球した茎葉を収穫するもの	

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)	
野菜類	葉菜類	せり科葉菜類	あしたば		茎葉を収穫するもの	
			キャラウエイ (葉)	ヒメウイキョウ		
			きんさい	スープセルリー、シャンサイ、中国ゼリ、キンツァイ、ミニホワイト		
			コリアンダー (葉)	香菜、シャンツァイ、パクチー、コエンドロ		
			せり			
			セルリー			
			チャービル	ウイキョウゼリ、セルフイーユ		
			ディル (葉)	イノンド、時蘿		
			とうき (葉)			
			パセリ	モスカールドパセリ、イタリアンパセリ		
			はまぼうふう (葉)			葉を収穫するもの
			フェンネル (葉)	ういきょう、ステイッキオ		茎葉を収穫するもの
			ぼたんぼうふう	長命草、サクナ、チョーミーグサ		
			みつば	青みつば、切りみつば、根みつば		
		レタス類	エンダイブ	ニガヂシャ、キクヂシャ	茎葉を収穫するもの	
			トレビス	トレビツ	結球した茎葉を収穫するもの	
			非結球レタス	かきちしゃ (サンチュ、チマサンチュ)	葉を収穫するもの	
				サラダ菜 (バターヘッド型レタス、バターヘッド型たまちしゃ)、立ちちしゃ (ロメインレタス、コスレタス)、美味タス (ピミタス)、リーフレタス (葉ちしゃ、チリメンチシャ、サニーレタス、シルクレタス、フリルレタス、オークリーフレタス、パタピアレタス、ロロロッサ)	茎葉を収穫するもの	
			ブンタレッラ		花茎及び葉を収穫するもの	
			レタス	クリスピーヘッド型たまちしゃ	結球した茎葉を収穫するもの	
		レタス類以外のきく科葉菜類	カレブラント		茎葉を収穫するもの	
			きく (葉)	きく葉	葉を収穫するもの	
			こおにたびらこ		茎葉を収穫するもの。 春の七草では、ほとけのぎといわれているもの。	
			ごまな		茎葉を収穫するもの	
			さわあざみ	まあざみ	葉を収穫するもの	
			しゅんぎく	菊菜、スティックシュンギク	茎葉を収穫するもの	
			食用西洋たんぼぼ	食用タンポポ、ダンデライオン	葉を収穫するもの	
			すいぜんじな	金時草、ハンダマ	茎葉を収穫するもの	
			タラゴン	エストラゴン、フレンチタラゴン、ロシアンタラゴン		
			葉ごぼう		比較的若い葉を根とともに収穫するもの	
			ははこぐさ	ごぎょう、おぎょう	茎葉を収穫するもの。 春の七草の一種。	
			ほそぼわだん	にがな、ンジャナ	茎葉を収穫するもの	
			もみじがさ	しどけ、モミジクサ、タイコウナ、トウキチナ		
			ヤーコン (茎葉)			
			よぶすまそう	ぼんな、ホンナ		
			よめな	はぎな		
			よもぎ			
		しそ科葉菜類	えごま (葉)			
			オレガノ	ハナハッカ、ワイルドマジョラム		
			しそ	おおば		
			セージ	コモンセージ、バイナップルセージ、チェリーセージ、レッドセージ		
			タイム	コモンタイム、クレーピングタイム、レモンタイム、カピタートゥス (ペルシアン・ヒソップ)、オレンジタイム、ジギス (ソースタイム)	茎葉を収穫するもの	
			バジル	スイートバジル、ダークオパールバジル、メボウキ		
			はっか	ミント、スペアミント、ペパーミント、アップルミント		
			マジョラム	スイートマジョラム、ポットマジョラム、ゴールデンマジョラム、マヨラナ		
			レモンバーム	セイヨウヤマハッカ		
			ローズマリー	マンネンロウ		
			ヒユ科葉菜類	アマランサス (茎葉)	ハグイトウ、アオビユ、ホナガイヌビユ、ひゆな	
		おかひじき		クサヒジキ、オカミル、ミルナ		
		ふだんそう		ベトラーブ、あかふだんそう、スイスチャード、デトロイト	葉を収穫するもの	
		ほうれんそう			茎葉を収穫するもの	
		—		アイスプラント		
		—		うこぎ	ウコギ (ヤマウコギ)、ヒメウコギ	
—	えびすぐさ (茎葉)	ロッカクソウ		地上部の全草を収穫するもの		
—	エルバステラ			地上部全草を収穫するもの		
—	エンサイ	エンツァイ、あさがおな、空心菜、通菜、ヨウサイ		茎葉を収穫するもの		
—	おかのり					

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)	
野菜類	葉菜類	—	おらんだわれもこう	サラダバーネット	葉を収穫するもの	
		—	かわらけつめい		地上部全草（莖葉及び豆果）を収穫するもの	
		—	かんしょ（莖葉）		莖葉を収穫するもの	
		—	きゅうり（葉）		きゅうりの葉を収穫するもの	
		—	食用ずいば	ソレル、オゼイユ	葉を収穫するもの	
		—	食用すべりひゆ		莖葉を収穫するもの	
		—	ストリドーロ	シラタマソウ	地上部全草を収穫するもの	
		—	つるな	はまな、はまちしゃ	莖葉を収穫するもの	
		—	つるむらさき	シンツルムラサキ		
		—	とうがらし（葉）		葉を収穫するもの	
		—	どくだみ		地上部全草を収穫するもの	
		—	はこべ	こはこべ、みどりはこべ	莖葉を収穫するもの	
		—	はぶそう（莖葉）		地上部全草を収穫するもの	
		—	ポリジ	ルリジサ	莖葉及び花を収穫するもの	
		—	マーシュ	コーンサラダ、マーシュレタス	莖葉を収穫するもの	
		—	モロヘイヤ	タイワツツナソ、シマツツナソ		
		—	やなぎたで	アユタデ、ほんたで、マタデ		
		—	ゆきのした		葉を収穫するもの	
		—	レモングラス	メリッサグラス、レモンガヤ、レモンソウ、フィーバーグラス	莖葉を収穫するもの	
		—	レモンバーベナ	コウスイボク		
	茎野菜類	ずいき類	—	さといも（葉柄）	ずいき、だついも	葉柄を収穫するもの
			—	はすいも（葉柄）		
			—	みずいも（葉柄）	タイモ	
		ふき類	—	つわぶき		
			—	ふき		
		—	アスパラガス		新芽を収穫するもの	
		—	いたどり（芽）		芽を収穫するもの	
		—	うど		若い莖葉部を収穫するもの	
		—	くきちしゃ	やまくらげ、トムシャ、ステムレタス	莖及び上部の若い葉を併せて収穫するもの	
		—	くさそてつ	こごみ、ガンソク、コゴメ、クグミ、ニワソテツ	葉を収穫するもの	
		—	ぜんまい			
		—	フローレンスフェンネル		葉柄の基部の肥大した部分を収穫するもの	
		—	ルパーブ	ショクヨウダイオウ	葉柄を収穫するもの	
		—	わらび		葉を収穫するもの	
		食用花	—	かんぞう（花）	シナカンゾウ、ノカンゾウ、ヤブカンゾウ、黄花菜、金針菜	蕾を収穫するもの
	—		食用あさがお		花又は蕾を収穫するもの	
	—		食用アスター	えぞぎく	花を収穫するもの	
	—		食用アリッサム			
	—		食用インパチェンス	アフリカホウセンカ、		
	—		食用エキザカム			
	—		食用カーネーション			
	—		食用ぎく			
	—		食用金魚草	スナップドラゴン		
	—		食用きんせんか	カレンジュラ		
	—		食用コスモス			
	—		食用シネリア	フウキギク、サイネリア		
	—		食用ストック			
—	食用せんにちこう		千日紅			
—	食用トルコギキョウ					
—	食用トレニア					
—	食用ナスタチウム		ノウゼンハレン、キンレンカ			
—	食用なでしこ					
—	食用パンジー					
—	食用ヒメヒマワリ					
—	食用プリムラ		食用さくらそう			
—	食用ベゴニア					
—	食用ペチュニア					
—	食用べにばな（花）					
—	食用ペンタス					
—	食用ミニバラ		食用バラ			
—	食用モモイロタンポポ		クレビス			
—	食用やぐるまぎく			花を収穫するもの（山野草のやぐるまそうとは別種）		
—	食用ラベンダー	イングリッシュ・ラベンダー	莖葉及び花を収穫するもの			
—	食用リナリア		花を収穫するもの			
—	食用ルドベキア	オオハンゴンソウ				
—	花オクラ					
—	アーティチョーク	ちょうせんあざみ	花蕾を収穫するもの			
—	あけび（莖葉）	キノメ	莖葉（若芽）を収穫するもの			
—	あまちゃ		莖葉を収穫するもの			

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)
野菜類	—	—	いちご	オランダイチゴ	果実を収穫するもの
	—	—	いちょう(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	オクラ		果実を収穫するもの
	—	—	オリーブ(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	ガーデンハックルベリー		果実を収穫するもの
	—	—	かき(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	カモミール	カモマイル、カミツレ、ジャーマンカモミール、ローマンカモミール	花を収穫するもの
	—	—	ぎぼうし	うるい	茎葉を収穫するもの
	—	—	グアバ(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	くこ(果実)	枸杞子(クコシ)	果実を収穫するもの
	—	—	くこ(葉)	枸杞葉(クコヨウ)	葉を収穫するもの
	—	—	クレソン	ウォータークレス	茎葉を収穫するもの
	—	—	くわい		塊茎を収穫するもの
	—	—	サフラン		めしべを収穫するもの
	—	—	さんしょう(葉)	木の芽	葉を収穫するもの
	—	—	しそ(花穂)		花穂を収穫するもの
	—	—	じゅんさい		茎葉を収穫するもの
	—	—	食用アジアントム		葉を収穫するもの
	—	—	食用アロエ	キュラソーアロエ、ケーブアロエ	
	—	—	食用おやまぼくち		茎葉を収穫するもの
	—	—	食用かえで(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	食用桑(葉)		
	—	—	食用月桂樹	ローリエ	
	—	—	食用さくら(葉)	さくら葉	
	—	—	食用さくら(花)		花を収穫するもの
	—	—	食用サボテン	ウチワサボテン、ノパール	茎節を収穫するもの
	—	—	食用べにばな(茎葉)		茎葉を収穫するもの
	—	—	食用ほおのき(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	たけのこ	マダケ、モウソウチク、ハチク、ねまがりだけ	若い桿を収穫するもの
	—	—	たらのぎ	たらのめ	新芽を収穫するもの
	—	—	チコリ	キクニガナ	茎葉(軟化させた芽)を収穫するもの
	—	—	とちゅう(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	なんてん(葉)		
	—	—	パニラ		果実を収穫するもの
	—	—	ひきおこし	えんめいそう	地上部全草を収穫するもの
	—	—	ひし		種子を収穫するもの
	—	—	びわ(葉)		葉を収穫するもの
	—	—	ふき(ふきのとう)	ふきのとう	ふきのとうを収穫するもの
	—	—	ほうきぎ	とんぶり、ほうきぐさ	胞果を収穫するもの
	—	—	まこもたけ	まこも	マコモクロボ菌の寄生により肥大したまこもの茎を収穫するもの
	—	—	みょうが(茎葉)	みょうがたけ	軟化させた茎葉を収穫するもの
	—	—	みょうが(花穂)	はなみょうが	花穂を収穫するもの
—	—	やぶかんぞう(茎葉)		茎葉を収穫するもの	
—	—	やまのいも(むかご)	ナガイモのむかご、ヤマノイモ(ジネンジョ)のむかご	むかご(肉芽)を収穫するもの	
—	—	ヤングコーン	ベビーコーン	とうもろこしの幼果(雌穂)を収穫するもの	
—	—	れんこん	はず	根茎を収穫するもの水系で栽培されるもの	
—	—	ローゼル		肥大した萼及び苞を収穫するもの	
—	—	わさび	みずわさび	葉、花茎、根茎及び根を収穫するもの。水系で栽培されるもの。	
野菜類	—	—	わさび(根茎)	みずわさび	根茎を収穫するもの。水系で栽培されるもの。
きのこ類	—	—	えのきたけ		子実体(きのこ)を収穫するもの
	—	—	エリンギ	カオリヒラタケ	
	—	—	しいたけ		
	—	—	なめこ		
	—	—	ひらたけ		
	—	—	ぶなしめじ		
	—	—	まいたけ		
	—	—	マッシュルーム	ツクリタケ	
穀類	—	—	稲※	水稲(移植、直播)、陸稲	種子又は稲わらを収穫するもの
	麦類	—	えんばく※	オートムギ、エン麦、カラスムギ	種子を収穫するもの
		—	大麦※	二条種、六条種、はだか麦	
		—	小麦※		
		—	ライ麦※		
	ヒユ科雑穀類	—	アマランサス(種子)	ヒモゲイトウ、センニンコク、スギモリケイトウ、フジゲイトウ、繁穂ヒユ、種粒ヒユ	種子を収穫するもの
—		キノア			

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備考 (収穫部位等)	
穀類	イネ科雑穀類	—	あわ		種子を収穫するもの	
			きび			
			食用ソルガム※	もろこし、たかきび、こうりゃん		
			はとむぎ			
			ひえ			
	とうもろこし	—	とうもろこし(子実)		種子(ある程度成熟した雌穂)を収穫するもの	
			未成熟とうもろこし	スイートコーン		
	—	—	そば	だったんそば	種子を収穫するもの	
	—	—	えごま(種子)			
	—	—	えびすぐさ(種子)	ロツカクソウ		
	—	—	キャラウエイ(果実)	ヒメウイキョウ	果実を収穫するもの	
	—	—	からしな(種子)		種子を収穫するもの	
	—	—	ごま※			
	—	—	コリアンダー(果実)	コエンドロ	果実を収穫するもの	
	—	—	さとうきび		茎を採糖目的に収穫するもの	
—	—	しそ(種子)		種子を収穫するもの		
—	—	食用亜麻				
—	—	食用おおばこ(種子)	シャゼンシ			
—	—	食用べにばな(種子)				
—	—	食用綿実				
—	—	茶		新芽を収穫するもの		
—	—	ディル(種子)		種子を収穫するもの		
—	—	なたね※				
—	—	はぶそう(種子)				
—	—	ひまわり(種子)				
—	—	フェネル(種子)	ういきょう(種子)			
—	—	ペボカぼちゃ(種子)				
—	—	ホップ	セイヨウカラハナソウ	雌花穂を収穫するもの		
飼料作物	牧草	—	いね科牧草	オーチャードグラス、チモシー、イタリアンライグラス、トールフェスク、ペレニアルライグラス、パヒアグラス	家畜飼料用に茎葉を収穫するもの	
			—	まめ科牧草		赤クローバー、白クローバー、アルファルファ
		—	—	飼料用えんばく		
		—	—	飼料用さとうきび		
		—	—	飼料用とうもろこし		家畜飼料用に茎葉及び雌穂を収穫するもの
		—	—	ソルガム	スーダングラス	家畜飼料用に茎葉を収穫するもの

注1)

「小粒種ぶどう」は1粒重量が1.5g程度のぶどうをいい、「大粒種ぶどう」はこれより重いぶどうをいう。

#### 巨峰系4倍体品種ぶどう

巨峰、ピオーネ、安芸クイーン、藤稔、サニールージュ、翠峰、黒王、ゴルビー、紫玉、シナノスマイル、高妻、多摩ゆたか、白峰、紅義、伊豆錦、出雲クイーン、イチキマール、ウエハラ540号、オーロラブラック、オリンピア、さがみ、ジャスミン、ダークリッジ、高墨、ハイベリー、ハニーブラック、ハニービーナス、ブラックオーパス、ブラックオリンピア、紅伊豆、紅瑞宝、紅富士、紅やまびこ、竜宝、レッドクイーン、ロードベリー、黄玉、天秀等

#### 2倍体米国系品種ぶどう

アジロンダック、マスカットベリーA、パッファロー(アーリースチューベン)、ナイヤガラマラベルファ、ウルバナ、キャンベル、キャンベルアーリー、スチューベン、セイベル9110、セネカ、大玉露、タノレッド、旅路、ナイアガラ、紅金沢、紅塩谷、紅南陽、ポートランド、レッドポート、ピアレス、ニューヨークマスカット、ノースブラック、ノースレッド、バイオレットウエハラ、フレドニア、ヒムロッドシードレス等

#### 2倍体欧州系品種ぶどう

瀬戸ジャイアント、ロザキ、マリオ、ロザリオピアンコ、ルビーオクヤマ、マスカットオブアレキサンドリア、シャインマスカット、CG88435、アルフォンストラバレー、イタリア、甲斐乙女、甲斐路、カッタクルガン、カベルネソービニオン、グリーンサマー、クルガンローズ、ケニギンデルワインガルデン、甲州、甲州三尺、ゴールド、ゴールドフィンガー、ザバルカンスキー、シトロンネル、シャルドネ、赤嶺、セシリア、乍那、チェリー、京早晶、ニューナイ、ネオマート、ネオマスカット、ネヘレスコール、パラディ、ビーナス、ピッテロピアンコ、ブラックスワン、ブラック三尺、フレームトーケー、貝甲干、紅アレキ、紅三尺、紅環、ベニピッテロ、馬乃子、マスカット甲府、マスカットデュークアモレ、マスカットハンブルグ、マスカットビオレ、マニキュアフィンガー、モルゲンシェーン、ヤトミローザ、ユニコーン、リザマート、リッシパーバ、竜眼、涼玉、ルーベルマスカット、ルビー大久保、レッドグローブ、レッドネヘレスコール、ローヤル、ロザリオロッソ、アリサ、黄華、紫苑、ヒロハンブルグ等

#### 3倍体品種ぶどう

キングデラ、サマーブラック、甲斐美嶺、ナガノパープル、安芸シードレス、美嶺等

注2)

大作物群及び中作物群の豆類(種実)、豆類(未成熟)及びピーマン及びとうがらし類については、これら作物群に含まれるものとして作物名欄に標記されている作物以外のもので、これらの作物群に含まれる作物も含まれる。

### Ⅲ 作物別病虫害防除指針

(普通作)

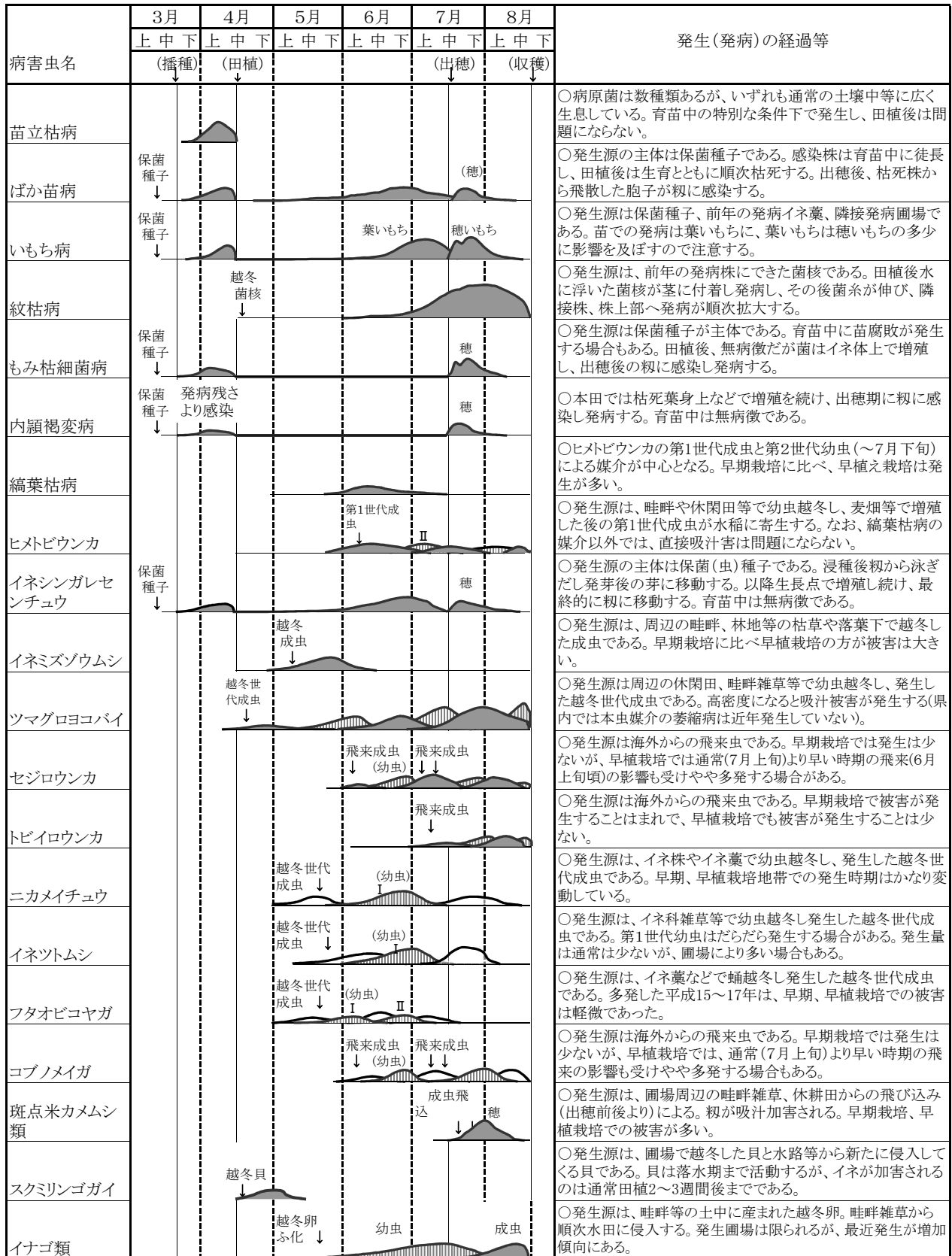
1 水 稻

2 麦 類

3 大 豆

1 水稲病害虫防除指針

(1) 早期水稲における主要病害虫の発生活動と防除体系



注:この図は、防除の参考となるよう、病害虫の発生を概念的に示したものである。実際の発生は、圃場観察を行い把握する。

各病害虫が発生する条件で、かつ防除対策未実施の場合を示しており、防除等で以降の発生は変化することにも留意する。

病害: ▲ 病勢進展時期。 害虫: ▲ 加害時期 (▲ は加害幼虫 世代、—▲ は加害しない成虫 世代)。

害虫欄の数字(I、II、III、...)は、それぞれ世代(第1世代、第2世代、第3世代、...)を示す。



(防除体系：早期栽培)

病害虫名	3月		4月		5月		6月		7月		8月		備 考
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
	(播種)		(田植)						(出穂)		(収穫)		
苗立枯病													育苗箱に対する薬剤処理(苗立枯病の防除法P46参照)。
ばか苗病	□												□種子消毒の効果は高い(イネばか苗病の防除法P48参照)。 発病後の防除法はない。
いもち病	□	■											■箱施用剤の効果は高く、いもち病常発地域では重要である。 ((◎))は発病前～発病初め。((○))は発病初期。 ◎*は幼穂形成期～穂ばらみ期。○*は穂ばらみ期～傾穂期。
紋枯病		■											これまでの発生状況から、「箱施用」、「箱施用+本田防除」、「本田防除」を選択する。 ◎は出穂30～20日前。○は最高分げつ期～穂摘期。
もみ枯細菌病	(□)												防除が困難な細菌性病害であり、総合的な防除対策が必要である(イネもみ枯細菌病の防除法P50参照)。
内穎褐変病													○は穂ばらみ期～乳熟期散布。ただし、防除の困難な細菌性病害であるため、安定的な防除効果は得られにくい。
縞葉枯病													媒介虫であるヒトビウンカの防除。
ヒトビウンカ		■											■箱施用剤の効果はかなり高い(剤により効果差あり)。
イネシガラセンチュウ	□												□種子消毒の効果は極めて高い。 (本圃では、効果の安定した防除法はない。)
イネミズゾウムシ		■											発生は、基本的には前年までの発生地域。 ■箱施用剤の効果は高い。 ◎は成虫の発生時。
ツマグロヨコバイ		■											■箱施用剤の効果は高い(剤により効果差あり)。 ○は成虫、幼虫発生時。
セジロウンカ		■											■早期栽培では必要な年は少ないが、早植栽培では有効な年が多い(剤により効果差はある)。 ○は成虫、幼虫発生時。
トビイロウンカ												(○)*	早期栽培では通常は防除不要。 早植栽培でも、防除の必要な年は少ない。 ○*は早植栽培で、坪枯れ発生の恐れがある時。
ニカメイチュウ		■											■箱施用剤の効果は高い。
イネツトムシ		■											■箱施用剤の効果は高い。早期、早植栽培では、被害は少ない場合が多いが、発生地では有効。 ○は幼虫発生初期。
フタオビコヤガ		■											■箱施用剤の効果は高い。早期、早植栽培では、通常発生は少ないが、発生が多い場合には有効。 ○は幼虫が増加しはじめた時。
コブノメイガ		■											■早植栽培で、早い時期に飛来がある年は有効。 ○は成虫発生ピークの7～10日後。
斑点米カメムシ類													箱施用剤の効果は不十分であるため、本田防除で対応する。 ◎は出穂7日後頃。 ○は出穂10～14日後。
スクミリンゴガイ													発生は前年発生地域およびその関係水系域。 ◎本田防除は、一定の効果を示す(スクミリンゴガイの防除法の項P50参照)。
イナゴ類		■											■箱施用剤の効果は高い。早期、早植栽培では、被害は少ない場合が多いが、発生地では有効。 ○は幼虫発生増加期。

注：□は種子消毒、■は育苗箱施用。本田防除剤は、◎は粒剤、○は粉剤(又は液剤)で、その都度どちらかを選定する。

なお、各剤とも該当病害虫に登録のある薬剤が前提となる。

( )、(( ))は前年まで及び本年の発生状況により判断するが、(( ))は該当の箱施用を行っていれば不要となる場合が多い。

本体系は基本的な発生状況を想定して組立てたものであり、実際の体系は、各地の実情を反映させたものとする。

薬剤の飛散にも配慮し、箱施用を中心に組立てたが、箱施用剤は剤により効果の持続期間等が異なる点にも留意する。

(2) 普通期水稻における主要病害虫の発消長と防除体系

病害虫名	5月		6月		7月		8月		9月		10月		発生(発病)の経過等
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
	(播種)		(田植)				(出穂)				(収穫)		
苗立枯病													○病原菌は数種類あるが、いずれも通常の土壌中等に広く生息している。育苗中の特別な条件下で発生し、田植後は問題にならない。
ばか苗病	保菌種子										(穂)		○発生源の主体は保菌種子である。感染株は育苗中に徒長し、田植後は生育とともに順次枯死する。出穂後、枯死株から飛散した胞子が籾に感染する。
いもち病	保菌種子					葉いもち					穂いもち		○発生源は保菌種子、前年の発病イネ藁、隣接発病圃場である。苗での発病は葉いもちに、葉いもちは穂いもちの多少に影響を及ぼすので注意する。
紋枯病				越冬菌核									○発生源は、前年の発病株にできた菌核である。田植後水に浮いた菌核が茎に付着し発病し、その後菌糸が伸び、隣接株、株上部へ発病が順次拡大する。
もみ枯細菌病	保菌種子										穂		○発生源は保菌種子が主体である。育苗中に苗腐敗が発生する場合もある。田植後、無病穂だが菌はイネ体上で増殖し、出穂後の籾に感染し発病する。
内穎褐変病	保菌種子	発病残さより感染									穂		○本田では枯死葉身上などで増殖を続け、出穂期に籾に感染し発病する。育苗中は無病徴である。
縞葉枯病													○ヒトビウンカの第2世代幼虫(6月下旬～)と第2世代成虫・第3世代幼虫(～8月中旬)による媒介が中心となる。
稲こうじ病													○発生源の主体は土壌中に残存し、前年の発病穂の病粒上に形成された菌核及び厚壁胞子である。幼穂形成期の穎内に菌糸が侵入・感染し出穂後に発病する。
ヒトビウンカ					第1世代成虫								○発生源は、畦畔や休閑田等で幼虫越冬し、麦畑等で増殖した後の第1世代成虫が水稻に寄生する。なお、縞葉枯病の媒介以外では、直接吸汁害は問題にならない。
イネシガラセンチュウ	保菌種子										穂		○発生源の主体は保菌(虫)種子である。浸種後籾から泳ぎだし発芽後の芽に移動する。以降生長点で増殖し続け、最終的に籾に移動する。育苗中は無病徴である。
イネミズゾウムシ				越冬成虫									○発生源は、周辺の畦畔、林地等の枯草や落葉の下で越冬した成虫である。通常は普通期栽培での被害は小さい。
ツマグロヨコバイ				第1世代成虫									○発生源は周辺の休閑田、畦畔雑草等で幼虫越冬し、発生した越冬世代成虫である。高密度になると吸汁被害が発生する(県内では本虫媒介の萎縮病は近年発生していない)。
セジロウンカ					飛来成虫(幼虫)								○発生源は海外からの飛来虫である。発生の時期、量は飛来状況に左右される。被害は、飛来成虫と次世代(第1世代)幼・成虫によるものが中心となる。
トビイロウンカ					飛来成虫(幼虫)								○発生源は海外からの飛来虫である。飛来量は少ないが、秋まで増殖を繰り返し(3世代)、8月下旬以降に坪枯れ被害を生じる。発生は飛来量、飛来後の天候に左右される。
ニカメイチュウ				越冬世代成虫(幼虫)									○発生源は、イネ株やイネ藁で幼虫越冬し、発生した越冬世代成虫である。早期、早植栽培地帯での発生時期はかなり変動している。
イネツトムシ					第1世代成虫(幼虫)								○発生源は、近隣の早期栽培等で発生した第1世代成虫である。被害は第2世代幼虫(8月上・中旬)が中心で、第3世代幼虫の被害は少ない。
フタオビコヤガ					第1世代成虫(幼虫)								○発生源は早期栽培等で1世代経過した後の第1世代成虫である。平成15～17年東予を中心に、7月下旬～8月中旬(第3、4世代幼虫)多発した。
コブノメイガ					飛来成虫(幼虫)								○発生源は海外からの飛来虫である。周辺の早期栽培田等からの再飛来も重要な発生源となる。発生時期・量は飛来状況に左右される。
斑点米カメムシ類											成虫飛込み		○発生源は圃場周辺の畦畔雑草、休耕地からの飛び込みによる。早期栽培等からの再飛来も重要な発生源となる。出穂後より籾を吸汁加害する。
スクミリンゴガイ				越冬貝									○発生源は、圃場で越冬した貝と水路等から新たに侵入してくる貝である。貝は落水期まで活動するが、イネが加害されるのは通常田植2～3週間後までである。
イナゴ類		越冬卵ふ化			幼虫						成虫		○発生源は、畦畔等の土中に産まれた越冬卵。畦畔雑草から順次水田に侵入する。発生圃場は限られるが、最近発生が増加傾向にある。

注:この図は、防除の参考となるよう、病害虫の発生を概念的に示したものである。実際の発生は、圃場観察を行い把握する。

各病害虫が発生する条件で、かつ防除対策未実施の場合を示しており、防除等で以降の発生は変化することにも留意する。

病害: 病勢進展時期。 害虫: 加害時期 ( は加害幼虫世代、 は加害しない成虫世代)。

害虫欄の数字(I、II、III、...)は、それぞれ世代(第1世代、第2世代、第3世代、...)を示す。

(防除体系：普通期栽培)

病害虫名	5月		6月		7月		8月		9月		10月		備 考
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
	(播種)		(田植)				(出穂)		(収穫)				
苗立枯病													育苗箱に対する薬剤処理(苗立枯病の防除法P46参照)。
ばか苗病	□												□種子消毒の効果は高い(イネばか苗病の防除法P48参照)。 発病後の防除法はない。
いもち病	□	■			((◎))((◎-))* ((○----)) (○-)*								■箱施用剤の効果は高く、いもち病常発地域では重要である。 ((◎))は発病前～発病初め。((◎))は発病初期。 ((◎))*は幼穂形成期～穂ばらみ期。(○)*穂ばらみ期～傾穂期。
紋枯病		(■)			(◎) (---○)								過去および本年の発生状況から、「箱施用」、「箱施用+本田防除」、「本田防除」を選択する。 ◎は出穂30～20日前。○は最高げつ期～穂揃期。
もみ枯細菌病	(□)				(-◎-) (○)								防除が困難な細菌性病害であり、総合的な防除対策が必要である(イネもみ枯細菌病の防除法P50参照)。
内穎褐変病								(○)					○は穂ばらみ期～乳熟期散布。ただし、防除の困難な細菌性病害であるため、安定的な防除効果は得られにくい。
縞葉枯病													県下での発生は、やや目立つ地域が増えている。 媒介虫であるヒトビウカの防除(～8月中旬)。
稲こうじ病		■			(○) (◎)								近年、県下での発生は増加している。 8月の天候不順により感染が増加するので出穂20日～10日前に防除する。粒剤はやや早めの散布が効果的
ヒトビウカ		■											■箱施用剤の効果はかなり高い(剤により効果差あり)。
イネシンガレセンチュウ	□												□種子消毒の効果は極めて高い。 →本圃では、効果の安定した防除法はない。
イネミズゾウムシ		(■)											普通期栽培では、発生は少なくほとんど問題とならない。
ツマグロヨコバイ		■			((---○---))								■箱施用剤の効果は高い(剤により効果差あり)。 ○は成虫、幼虫発生時。
セジロウンカ		■			((◎--)) ((-○-- --))								■箱施用剤の効果は高い(剤により効果差あり)。 ◎、○は成虫・幼虫多発生時。
トビイロウンカ		■							(○--)* ◎---◎ -○-				箱施用の効果は高い(剤により効果差あり)。 ◎、○は飛来量が多く、かつ飛来時期が早い場合に実施。 (○)*は、坪枯れの発生が予想される場合。
ニカメイチュウ		(■)											■箱施用剤の効果は高い。発生地帯では有効。
イネツトムシ		■			((◎)) ((○-))								■箱施用剤の効果は高い。 ◎は成虫飛来ピーク～孵化幼虫出現初め。 ○は幼虫発生初期。
フタオビコヤガ		(■)			((○----))								■箱施用剤の効果は高い(剤により効果差あり)。 ○は幼虫が増加しはじめた時。
コブノメイガ		■											■箱施用剤は有効だが、8月の防除も必要な場合が多い ◎は成虫発生ピーク時。○は成虫発生ピークの7～10日後。 ○*は止葉～第2葉の被害が多いと予想される場合
斑点米カメムシ類										(◎) (○--)			箱施用剤の効果は高くないため、本田防除が重要。 ◎は出穂7日後頃。○は出穂10～14日後(多発時はさらに7～10日後に防除)。
スクミリンゴガイ		(◎)											発生は前年発生地域とその周辺。 ◎本田防除は、一定の効果を示す(スクミリンゴガイの防除法の項P50参照)。
イナゴ類		(■)											■箱施用剤の効果は高い。 ○は成虫発生初期。

注：□は種子消毒、■は育苗箱施用。本田防除剤は、◎-は粒剤、○-は粉剤(又は液剤)で、その都度どちらかを選定する。  
 なお、各剤とも該当病害虫に登録のある薬剤が前提となる。  
 ( )、(( ))は前年まで及び本年の発生状況により判断するが、(( ))は該当の箱施用を行っていれば不要となる場合が多い。  
 本体系は基本的な発生状況を想定して組立てたものであり、実際の体系は、各地の実情を反映させたものとする。  
 薬剤の飛散にも配慮し、箱施用を中心に組立てたが、箱施用剤は剤により効果の持続期間等が異なる点にも留意する。

(3) 水稲主要病害虫の発生程度と被害の関係及び防除の目安

病害虫	要防除密度等	発生程度と被害										
いもち病	<p>【葉いもち】条件により病勢が急速に進展するため、要防除密度は明らかでない。初発の早晚、病斑が急性型か慢性型か、気象動向（長雨等）などに注意し病勢の進展が予想される場合には防除が必要となる。</p> <p>【穂いもち】発病すると、直接減収に結びつくため手遅れになるので予防的に防除を行う。出穂25～35日前以降に形成された葉いもち病斑が伝染源になるが、発病は、気象要因、病原菌の動向、イネの体質、品質などが複合的に関与するため、はっきりした要防除密度は設定されていない。</p>	<p>◎<b>収量</b> 【葉いもち】12葉齢期（最高分けつ期）の罹病葉率が10%を越すと収量に対する影響（減収）が大きくなる。 【穂いもち】穂ぞろい後30日目の穂いもち（穂首いもち+枝梗いもち）の罹病率（罹病率を罹病程度別に集計）で、10%を越すと収量に対する影響ははっきりしてくる。</p> <p>◎<b>品質</b> 【葉いもち】発病葉率と青米の発生とは関係は無い。茶米、奇形米の発生とは高い相関がある。 【穂いもち】穂首いもち罹病率10%増加で上米率3%減少。茶米、奇形米の発生とは有意な相関はない。</p>										
紋枯病	<p>普通期栽培で、穂ばらみ期の発病株率15～20%（早期栽培等ではこれより低い）。 ただし、登熟後期の病勢の進展が予想される場合には追加防除が必要となる。</p>	<p>止葉から下位の3葉の葉鞘に病斑があらわれる場合、収量に影響する（普通期栽培で止葉に病斑を生じると18.3%、次葉では12.0%、第3葉では8.9%の減収率となる）。</p> <p>減収量（kg）＝  <math display="block">(41.31 \times \text{病斑高率} - 826.2) \times \frac{\text{発病株率}}{1000}</math> </p> <p>注：病斑高率＝<math>\frac{\text{最上位病斑高}}{\text{草丈}} \times 100</math></p>										
もみ枯 細菌病	<p>実用的なものはまだ確立されていない。</p>	<p>稔歩合、登熟歩合が低下。出穂25日後の病穂率、病粒率と減収率の関係は  減収率（%）＝0.567×病穂率－1.459 または  減収率（%）＝0.732×病粒率－0.221  （本回帰式で5%減収を求めると病穂率で約11%、病粒率で約7%となる。）  ただし、本病によって起きる品質低下（変色米の発生）の割合と、発病程度の解析はされていない。</p>										
縞葉枯病	<p>媒介虫であるヒメトビウンカの発生量と保毒虫率に加えてイネの生育ステージ等も関係する。  ・第1世代成虫（5月下旬～6月下旬）  ：保毒虫率2%で、0.25頭/株  ：保毒虫率20%で、0.01～0.02頭/株  ・第2世代成虫（7月上旬～下旬）  ：保毒虫率20%で、株当たり3頭程度</p>											
イネミズ ゾウムシ		<p>越冬成虫の密度が、0.25頭/株で収量に対する被害が始め、0.5頭/株で5%の減収（育苗箱処理を行っていない場合）。</p>										
ツマグロ ヨコバイ	<p>出穂期の成虫密度で30頭/株。</p>	<p>本虫は吸汁による直接被害のほか、萎縮病を媒介するが、この点の本田での要防除密度はまだ明らかにされていない。なお、萎縮病の発病株率と減収の関係は次のとおり。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>発病株率（%）</th> <th>減収率（%）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>10</td> <td>1.7</td> </tr> <tr> <td>20</td> <td>4.3</td> </tr> <tr> <td>30</td> <td>7.7</td> </tr> <tr> <td>40</td> <td>12.0</td> </tr> </tbody> </table>	発病株率（%）	減収率（%）	10	1.7	20	4.3	30	7.7	40	12.0
発病株率（%）	減収率（%）											
10	1.7											
20	4.3											
30	7.7											
40	12.0											
セジロ ウンカ	<p>普通期栽培の場合、7月上旬の飛来成虫の密度は、10頭/株。</p>											
トビイロ ウンカ	<p>普通期栽培では、1圃場当たり10株払落し調査を2か所実施する。  7月下旬から8月上旬にかけて、成幼虫数が0.1頭/株  8月中旬から8月下旬にかけて、成幼虫数が3～5頭/株</p>	<p>いずれも、要防除密度に達した圃場では即時防除する。</p>										
イネツト ムシ （イチモ ンジセセ リ）	<p>第2世代の1齢幼虫が3頭/株。  （普通期栽培では、7月下旬～8月初めの時期の、葉先1cm程度を切つてできる小さいツト数で3個。）  防除時期は、若齢幼虫期（薬剤の効果）。</p>	<p>幼穂形成期～穂ばらみ期のツト数（蛹に成長したもの）が0.85～2.1個/株の場合に5%の減収。</p>										
コブノ メイガ	<p>飛来次世代の幼虫による被害の発生程度（飛来2週間後頃：一般に7月中・下旬～8月上旬頃）および成虫の発生状況（飛来1ヶ月：8月上～中旬）により、その次の世代の幼虫の発生の時期、およびその発生量を予想する。はっきりした要防除密度は明らかになっていない。  防除時期は若令幼虫期（薬剤の効果）</p>	<p>出穂期における被害葉率と減収率の関係は次のとおり。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>被害葉率（%）</th> <th>減収率（%）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>70</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td>50</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>30</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>	被害葉率（%）	減収率（%）	70	15	50	10	30	5	10	2
被害葉率（%）	減収率（%）											
70	15											
50	10											
30	5											
10	2											
斑点米 カメムシ 類	<p>穂揃期～乳熟期の捕虫網による20回すくい取り個体数で大型種で1頭、小型種で3頭。</p>											
スクミリン ゴガイ	<p>中型のスクミリンゴガイ 1.5個/m<sup>2</sup>（出典：農研機構九州沖縄農業研究センター）</p>	<p>田植直後～田植後2～3週間の密度  （穀高15～20mmの貝） 2.5個/1m<sup>2</sup>で5%減収  5.3個/1m<sup>2</sup>で10%減収</p>										
イナゴ類	<p>穂ばらみ期～出穂期の捕虫網による20回すくい取りで100頭以上。</p>	<p>出穂期～成熟期の放飼試験において、株当たり0.8匹の放飼で約5%の減収。</p>										

(4) 水稻病虫害防除法

病虫害名	病虫害の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード							
いもち病	(防除上のポイント) ○育苗時には播種したもみを露出させないよう覆土量を確保する。 ○育苗時には多湿条件とならないように管理する。 ○苗いもちと葉いもちに對しては早期防除を励行する。 ○中間山地等のいもち病常発地では本病に適用のある箱処理剤を必ず施用する。 ○抵抗性誘導剤(一般名:プロパナゾール、イソチアニル、チアジニル)は効果発現までに一定の期間を要し、発病後の施用では十分な防除効果が望めない。 ○葉いもち発病後は、ブラン、ノンブラス剤の効果が大い。 ○「MBI-D」耐性いもち病原菌の発生と防除対策の項(P.48)参照。 ○「Qo」耐性いもち病原菌の発生と防除対策の項(P.48)参照。	○窒素肥料の過用を避ける。 ○育苗時の厚播き、選播き、本田の密植、深植え、晩植えを避ける。 ○抵抗性品種の利用。 ○冷水灌漑、深水、乾燥を避け、落水を早めなようにする。 ○置き苗が放置されると葉いもちの伝染源となるので補植作業の終了後は、速やかに適正処分する。 ○ケイ酸資材施用。被害わら、被害のみ殻を処分する。	是種前 田植前 苗いもち 葉いもち 分けつ期～幼穂形成期 穂いもち 粒剤 幼穂形成期～穂ばらみ期 粉剤・液剤 穂ばらみ期～出穂10～15日後	箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項(P.43)参照 フジワン水和剤 カスミン液剤 ベンレート水和剤 【粉剤】 ビーム粉剤DL ラブサイド粉剤DL 【液剤】 ビームソル ラブサイドフロアブル フジワン乳剤 【粒剤】 フジワン粒剤 フジワン1キロ粒剤 フジワンハック コラトップ粒剤5 コラトップ1キロ粒剤12 コラトップジヤンボP コラトップ豆つぶ ゴウケツ粒剤 ゴウケツハック サンブラス粒剤 サンブラスハック	1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-イプロチオラン 1-ピロキロン 1-ピロキロン 1-ピロキロン 1-ピロキロン 1-トルプロカルブ 1-トルプロカルブ 1-トルプロカルブ 1-トルプロカルブ	50～100倍/500ml/箱 4～8倍/500ml/箱 500～1,000倍 3～4kg/10a 3～4kg/10a 1,000倍 1,000～1,500倍 1,000倍 3～5kg/10a 1～1.5kg/10a 小包装(ハック)10～15個(750～1125g)/10a 3～4kg/10a 1～1.5kg/10a 小包装(ハック)10～13個(500～650g)/10a 250～375g/10a 3～4kg/10a 小包装(ハック)10個(450g)/10a 3～4kg/10a 小包装(ハック)10個(450g)/10a	緑化始期 覆土前 是種時～は種14日後まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 葉いもちに對しては初発7～10日前 穂いもちに對しては出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで 葉いもちに對しては初発7～10日前 穂いもちに對しては出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで 葉いもちに對しては初発7～10日前 穂いもちに對しては出穂10～30日前 但し、収穫14日前まで 葉いもちに對しては初発10日前 穂いもちに對しては出穂10～5日前まで 葉いもちに對しては初発10日前 穂いもちに對しては出穂10～5日前まで 葉いもちに對しては初発20日前～初発時、穂いもちに對しては出穂30日前～5日前まで 葉いもちに對しては初発10日前～初発時、穂いもちに對しては出穂30日前～5日前まで 出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで) 出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで) 出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで) 出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回 1回 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 1回 1回 1回 1回	普 普 普 劇 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	○ 土壤の濕りすぎ注意 ○ 使用方法(注) ○ 治療効果有※1 ○ 治療効果有※1 ○ 治療効果有※1 ○ 治療効果有※1		

(注):ベンレート水和剤の使用量:育苗箱(30×60×3cm, 使用土壌約50)1箱当り500ml。  
 ※1:フジワンは菌糸侵入阻止(感染防止)効果が主体であるが、菌糸生育阻止(治療)効果も有する。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項												
いもち病	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	葉いもち 分けつ期～幼穂形成期 穂いもち 粒剤 幼穂形成期～穂ばらみ期 粉剤・液剤 穂ばらみ期～出穂10～15日後	P2 P3 24	〔抵抗性誘導剤〕 オリゼメート粒剤 ブルーチン粒剤 ブイダット粒剤 ○菌糸生育阻止(治療)効果主体の薬剤 【液剤】 カスミン液剤 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と菌糸生育阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 グラシン粉剤DL ハンブラス粉剤DL トライ粉剤DL 【液剤】 グラシンフロアブル ハンブラスフロアブル ダブルカットフロアブル トリアフロアブル 上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)	1:プロベナゾール  1:イリチアニル 1:チアゾニル  1:カスガマイシン  1:フェルミゾン2:フサライド* 1:トリシクワゾール2:フェルミゾン 1:デブプロキン  1:フェルミゾン2:フサライド* 1:トリシクワゾール2:フェルミゾン 1:カスガマイシン2:トリシクワゾール 1:デブプロキン	3～4kg/10a  1kg/10a 3kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a 3～4kg/10a 3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	葉いもちには初発の10日前～初発時 穂いもちには出穂3～4週間前(但し収穫14日前まで)  収穫30日前まで 葉いもちの初発20～7日前(但し、収穫45日前まで)  穂前期まで  収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで  収穫7日前まで 収穫7日前まで 穂前期まで 収穫14日前まで	2回以内  2回以内 2回以内  2回以内 2回以内 2回以内  2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △														
													20	○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤 【粉剤】 モンセレン粉剤DL ○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤 【粉剤】 バリダシン粉剤DL 【液剤】 バリダシン液剤5 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンカットファイン粉剤20DL 【液剤】 モンカット水中和剤 モンカットフロアブル40 バシタック水中和剤75 モンセレンフロアブル 【粒剤】 リンパー粒剤 リンパー1キロ粒剤 モンカット粒剤	3～4kg/10a  3～4kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫30日前まで 収穫30日前まで 出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内  5回以内  5回以内  4回以内  4回以内 4回以内 3回以内 4回以内  2回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △ △ ○						
													U18	○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤 【粉剤】 モンセレン粉剤DL ○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤 【粉剤】 バリダシン粉剤DL 【液剤】 バリダシン液剤5 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンカットファイン粉剤20DL 【液剤】 モンカット水中和剤 モンカットフロアブル40 バシタック水中和剤75 モンセレンフロアブル 【粒剤】 リンパー粒剤 リンパー1キロ粒剤 モンカット粒剤	3～4kg/10a  3～4kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫30日前まで 収穫30日前まで 出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内  5回以内  5回以内  4回以内  4回以内 4回以内 3回以内 4回以内  2回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △ △ ○						
													U18	○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤 【粉剤】 モンセレン粉剤DL ○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤 【粉剤】 バリダシン粉剤DL 【液剤】 バリダシン液剤5 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンカットファイン粉剤20DL 【液剤】 モンカット水中和剤 モンカットフロアブル40 バシタック水中和剤75 モンセレンフロアブル 【粒剤】 リンパー粒剤 リンパー1キロ粒剤 モンカット粒剤	3～4kg/10a  3～4kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫30日前まで 収穫30日前まで 出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内  5回以内  5回以内  4回以内  4回以内 4回以内 3回以内 4回以内  2回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △ △ ○						
													7	○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤 【粉剤】 モンセレン粉剤DL ○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤 【粉剤】 バリダシン粉剤DL 【液剤】 バリダシン液剤5 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンカットファイン粉剤20DL 【液剤】 モンカット水中和剤 モンカットフロアブル40 バシタック水中和剤75 モンセレンフロアブル 【粒剤】 リンパー粒剤 リンパー1キロ粒剤 モンカット粒剤	3～4kg/10a  3～4kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫30日前まで 収穫30日前まで 出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内  5回以内  5回以内  4回以内  4回以内 4回以内 3回以内 4回以内  2回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △ △ ○						
													3	○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤 【粉剤】 モンセレン粉剤DL ○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤 【粉剤】 バリダシン粉剤DL 【液剤】 バリダシン液剤5 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンカットファイン粉剤20DL 【液剤】 モンカット水中和剤 モンカットフロアブル40 バシタック水中和剤75 モンセレンフロアブル 【粒剤】 リンパー粒剤 リンパー1キロ粒剤 モンカット粒剤	3～4kg/10a  3～4kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫30日前まで 収穫30日前まで 出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内  5回以内  5回以内  4回以内  4回以内 4回以内 3回以内 4回以内  2回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △ △ ○						
													紋枯病	(発生の特徴) ○菌核で越冬し翌年の伝染源となる。 ○菌核は水面に浮上したあと風などで移動するため圃場周縁部の発生が多くなる。 ○高温または多湿で発病が助長される。 (防除上のポイント) ○薬剤が発病部位の株元にかかるように散布する。 ○強風が吹く地帯では、倒伏防止のために防除を徹底する。	○窒素質肥料の過用を避ける。 ○一株植付本数を多くしない。 ○過剰分けつを避ける。	田植前 最高分けつ期～穂揃期			菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンセレン粉剤DL ○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤 【粉剤】 バリダシン粉剤DL 【液剤】 バリダシン液剤5 ○菌糸侵入阻止(感染防止)と病徴進展阻止(治療)効果を有する薬剤 【粉剤】 モンカットファイン粉剤20DL 【液剤】 モンカット水中和剤 モンカットフロアブル40 バシタック水中和剤75 モンセレンフロアブル 【粒剤】 リンパー粒剤 リンパー1キロ粒剤 モンカット粒剤	3～4kg/10a  3～4kg/10a  1,000倍  3～4kg/10a  1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫14日前まで  収穫30日前まで 収穫30日前まで 出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内  5回以内  5回以内  4回以内  4回以内 4回以内 3回以内 4回以内  2回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普  普 普  普  普 普 普 普 普	△  ○ △  △  △  ○ ○ ○ △ △ △ ○	○使用方法(注)

(注):モンセレンは、菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体であるが、病徴進展阻止(治療)効果も有する。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード							
白葉枯病	(防除上のポイント) ○薬剤防除だけでは、限界があるので、耕種的防除を励行する。 ○止葉の抽出期までの防除効果が高い。	○抵抗性品種の利用。 ○浸冠水防止する。 ○窒素肥料の適用を避ける。 ○病原菌の越冬場所となるサヤスカグサを除草する。	出穂3～4週間前	P2	【粒剤】 オリゼメート粒剤	1:プロベナゾール	3～4kg/10a	移植活着後及び出穂3～4週間前 但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
			P3	ブイゲット粒剤	1:チアゾニル	3kg/10a	葉いもちの初発20～7日前(但し、収穫45日前まで)	2回以内	普	△		
			P3	ルーチン粒剤	1:イソチアニル	1kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	○		
上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)												
もみ枯細菌病	(発生の特徴) ○穂ばらみ期～乳熟期の高温で発病が助長される。 (防除上のポイント) ○もみ枯細菌病防除法の項(P.50)参照。	○発生圃場から採種しない。 ○塩水選を行う。 ○出芽時の温度を30℃以下に保つ。 ○被害わらやもみ殻は堆肥化するか年内に腐熟させる。	は種前									
			出穂3～4週間前	P2	【粒剤】 オリゼメート粒剤	1:プロベナゾール	3～4kg/10a	移植活着後及び出穂3～4週間前 但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
			出穂30～5日前	16.1	【粒剤】 コフトップ豆つぶ	1:ピロピロ	375g/10a	出穂30～5日前まで	2回以内	普	○	
			出穂5日前まで	16.1	コフトップ粒剤5	1:ピロピロ	4kg/10a	出穂30～5日前まで	2回以内	普	△	
			出穂5日前まで	16.3	ゴウケツ粒剤	1:トルプロカルブ	3～4kg/10a	出穂5日前まで(但し収穫30日前まで)	1回	普	○	
			出穂5日前まで	16.3	ゴウケツパック	1:トルプロカルブ	小包装(パック)10個(450g)/10a	出穂5日前まで(但し収穫30日前まで)	1回	普	○	
上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)												
内穎褐変病	(発生の特徴) ○イネの刈り株、稲わら上の病原細菌が主たる伝染源となる。 ○穂ばらみ期～乳熟期の高温で発病が助長される。 ○出穂期に高温と降雨に遭遇しやすい品種では発生が多くなる。	○窒素肥料の適用を避ける。	出穂5日前まで									
			穂ばらみ期～乳熟期	24+16.1	【粉剤】 ダブルカット粉剤3DL	1:カスガマイシン2:トリシカゾール	3～4kg/10a	穂揃期まで	2回以内	普	○	
			出穂5日前まで	U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:フェルムゾン2:アサライド	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
			出穂5日前まで	U14+16.1	【液剤】 ブラシンフロアブル	1:フェルムゾン2:アサライド	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
			出穂5日前まで	16.3	ゴウケツ粒剤	1:トルプロカルブ	3～4kg/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
			出穂5日前まで	16.3	ゴウケツ1キロ粒剤	1:トルプロカルブ	1kg/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)												
内穎褐変病	(発生の特徴) ○出穂期に高温と降雨に遭遇しやすい品種では発生が多くなる。	○窒素肥料の適用を避ける。	出穂5日前まで									
			穂ばらみ期～乳熟期	24+16.1	【粉剤】 ダブルカット粉剤3DL	1:カスガマイシン2:トリシカゾール	3～4kg/10a	穂揃期まで	2回以内	普	○	
			出穂5日前まで	U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:フェルムゾン2:アサライド	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)												

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード							
稲こらじ病	<p>(発生の特徴)</p> <p>○幼穂形成期～穂ばらみ期に降雨が多く気温が低い場合に発生が多くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○(粒剤)出穂18日前の散布が効果的である。(粉剤・液剤)出穂15日前の散布が効果的である。</p> <p>○出穂後の散布は防除効果が期待できない。</p>	<p>○発病穂は早めに取り除く。</p> <p>○窒素質肥料の過用を避ける。特に肥料が運効しないようにする。</p> <p>○転炉スラグ(300kg/10a)を2月～代かき前までに処理する。</p>	穂ばらみ期	M1 U14+U16.1 16.1+U14	【粉剤】 撒粉ボルドー粉剤DL Zボルドー粉剤DL ブラミン粉剤DL ノンブラス粉剤DL	1:塩基性硫酸銅 1:塩基性硫酸銅 1:フェリマンガン2:フサライド 1:トリシクラーノール2:フェリマンガン	3～4kg/10a 3～4kg/10a 4kg/10a 4kg/10a	出穂10日前まで 出穂10日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	- 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ ○ ○ ○	
				M1 U14+U16.1 16.1+U14	【液剤】 ドインボルドーA ブラミンフロアブル ノンブラスフロアブル	1:塩基性塩化銅 1:フェリマンガン2:フサライド 1:トリシクラーノール2:フェリマンガン	2,000倍 1,000倍 1,000倍	出穂10日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内	普 普 普	△ ○ ○	
穂枯れ(しま葉枯病)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○漏水の激しい秋落ち田での発生が多い。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○薬剤防除は、乳熟期と糊熟期の2回散布が有効となる。</p>	<p>○ケイ酸質資材を施用する。</p> <p>○堆きゅう肥などの有機物の施用に努め、過度の窒素欠乏を避ける。</p>	は種前 出穂3～4週間前	P2	【粒剤】 オリゼメート粒剤	1:プロパゾール	3～4kg/10a	出穂3～4週間前 但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				U14+U16.1 16.1+U14	【粉剤】 ブラミン粉剤DL ピーム粉剤DL ノンブラス粉剤DL	1:フェリマンガン2:フサライド 1:トリシクラーノール 1:トリシクラーノール2:フェリマンガン	3～4kg/10a 4kg/10a 3～4kg/10a	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普	○ ○ ○	
ばか苗病	<p>(防除上のポイント)</p> <p>○種子消毒の徹底。</p> <p>○発病株の抜き取りを徹底。</p>	<p>○無病種子を使用。</p> <p>○塩水選を必ず行う。</p>	は種前	U14+U16.1 16.1+U14	【液剤】 ブラミンフロアブル ノンブラスフロアブル	1:フェリマンガン2:フサライド 1:トリシクラーノール2:フェリマンガン	1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内	普 普	○ ○	



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード							
セイネンチユウガレ	(防除上のポイント) ○ 種子消毒の徹底。 ○ 種子更新を行う。	○ 無病種子を使用。 ○ 苗代の被覆に生もみ殻を使用しない。	は種前	16 3A 4A 4A 4A 4C	アブロード粉剤DL トレボン粉剤DL アルバリン粉剤DL スタークル粉剤DL ダントツ粉剤DL エクシード粉剤DL	1:アブロード 1:トレボン 1:アルバリン 1:スタークル 1:ダントツ 1:エクシード	3～4kg/10a 3～4kg/10a 3kg/10a 3kg/10a 3～4kg/10a 3kg/10a	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普	○ × ○ ○ ○ △	○ IGR剤(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15)
ヒメトビウンカイ (萎縮病、萎縮病) (葉枯病、黄萎病) (葉枯病、黒ずじ萎縮病)	(防除上のポイント) ○ 薬剤抵抗性を現状以上に高めたいため稲作期間中同一系統の薬剤の連続使用を避けるほか、防除回数是最小限にとどめる。 ○ 葉枯病、萎縮病の発生地は6月上旬の発生に注意する。葉枯病はヒメトビウンカの9月上旬の発生に注意する。 ○ 黄萎病の発生地は7月上旬に防除する。	○ 萎縮病、葉枯病の多発地では、早植えを避ける。 ○ 休閑田は早めに耕起、除草する。 ○ 畦畔、休耕田などでは、6月上旬までに雑草を刈取り、すき込み等により処分する。	田植前 生育期	16 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4C 4F UN	【粉剤】 アブロード水和剤 トレボン乳剤 アルバリン顆粒水溶液 スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10 ダントツ水溶液 ダントツフロアブル エクシードフロアブル エミリアフロアブル オーケストラフロアブル  【粒剤】 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤 スタークル豆つぶ	1:アブロード 1:トレボン 1:アルバリン 1:スタークル 1:スタークル 1:ダントツ 1:ダントツ 1:エクシード 1:エクシード 1:エミリア 1:オーケストラ	1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 3,000倍 1,000倍 1,000倍 3,000倍 4,000倍 5,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍  3kg/10a 3kg/10a 3kg/10a 250～500g/10a	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで  収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内  3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普  普 普 普 普	○ × △ △ △ △ △ △ △ △  △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15)

上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	防除薬剤					濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
		IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	時期						
セロウソカ	<p>○海外から飛来してくる書虫。飛来後1～2回世代を繰り返した後は圃場から飛び去ってしまう。極めて多量に飛来する年には、飛来成虫自体、および飛来次世代(第1世代)幼虫の加害が大きくなる。第2世代幼虫の加害もあるが、第3世代は問題にならない。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○水稲は生育初期に加害を受けるとダメージが大きいため、田植え直後～生育初期の多量飛来に十分注意を払い、発生状況に合わせて飛来成虫または第1世代幼虫を対象とした防除を行う。</p> <p>○本田散布剤の効果は高いが、飛来は断続的に波続くことがある点に留意して防除する。</p> <p>○箱施用剤は、剤により効果・持続期間に差があるが、ネオニコチノイド系殺虫剤を含有する薬剤は高い効果を示し、繰り返し飛来が続く場合にも有効である。</p>	<p>成虫飛来後から飛来次世代(第1世代)幼虫期(田植え後水稲生育初～中期)</p>	3A		トレボン粉剤DL	1:エトフェンプログス	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○合ピレ(注)(P.15)
		4A		アルバリン粉剤DL	1:ジノテフラン	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○		
		4A		スタークル粉剤DL	1:ジノテフラン	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○		
		4A		ダントゾ粉剤DL	1:クロチアニジン	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○		
		4C		エクシード粉剤DL	1:スルホキサフロル	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		3A		【液剤】 トレボン乳剤	1:エトフェンプログス	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×		○合ピレ(注)(P.15)
		3A		トレボンEW	1:エトフェンプログス	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×		○合ピレ(注)(P.15)
		4A		アルバリン顆粒水溶液	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		スタークル液剤10	1:ジノテフラン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		スタークルメイト液剤10	1:ジノテフラン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		スタークル顆粒水溶液	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		ダントゾフロアブル	1:クロチアニジン	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		ダントゾ水溶液	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4C		エクシードフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○		
		4F		エミリアフロアブル	1:フルピリシ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
		3A		【粒剤】 トレボン粒剤	1:エトフェンプログス	2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	×		○合ピレ(注)(P.15)
		16		アプロード粒剤	1:プロプロフェジン	3～4kg/10a	収穫7日前まで	4回以内	普	△		○IGR剤(注)(P.15)
		4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		ダントゾ粒剤	1:クロチアニジン	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
		4A		スタークル豆つぶ	1:ジノテフラン	250～500g/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△		

上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
トビイロウンカ	<p>○飛来源のベトナム北部(红河デルタ)、中国南部(華南)での多発を受け、本虫の飛来により評価被害の多い年がある。また、高い防除効果を示しているイミダクロプリドの箱施用剤の効果が著しく低下していることから、普通期栽培の最重要害虫となっている。</p> <p>○飛来量はセゾウンカに比べ一般にかなりの少ないが、飛来後3回世代(第1～3世代)を重ね、その間増殖を繰り返して、坪枯れ被害を発生させる。坪枯れに結びつくのは通常第3世代の加害であるが、発生が特に多い年には第2世代の加害から坪枯れが発生することもある。</p> <p>○寄生密度が高い場合には、坪枯れ発生後5～7日以内に急激に枯死株が増加し被害面積が拡大することがある。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○窒素過多で葉色の濃いイネに集中飛来することはないが、栄養条件の良いイネでの産卵数や増殖率が高まるので適正な肥培管理に留意する。</p> <p>○長期残効性の箱施用剤についても、多発時には本田防除が必要となる場合がある。</p> <p>○本田散布剤は卵に対する効果が期待できないので、卵期間を避けた時期に使用する。また、アブロード剤は成虫に効果が無いので、成虫には、他剤との混用で使用する。</p> <p>○トビイロウンカの発生状況は、圃場外からでは坪枯れが発生するまで把握できない。偏った株の株元に生息し増殖を続けているので、9月中旬以降、圃場で多くの株元を観察し、発生状況を把握する。</p> <p>○(粉剤・液剤)株元に十分かかるように散布。 (粒剤)湛水状態(水深3～5cm)で田面に均一散布し、散布後4～5日は水を流さず止水する。</p>	3A 16 4A 4A 4C  3A 3A 16 4A 4A 4A  4A 4C 4F  16 4A 4A  4A	【粉剤】 トレボン粉剤DL アブロード粉剤DL アルバリン粉剤DL スタークル粉剤DL エクスード粉剤DL  【液剤】 トレボン乳剤 トレボンEW アブロード水和剤 アルバリン顆粒水溶液 スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10  スタークル顆粒水溶液 エクスードフロアブル エミリアフロアブル  【粒剤】 アブロード粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤  スタークル豆つぶ	1:エトフェンプロックス 1:プロプロフェン 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:スルホキサフロ  1:エトフェンプロックス 1:エトフェンプロックス 1:プロプロフェン 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:ジノテラン  1:ジノテラン 1:スルホキサフロ 1:フルピロシ	3～4kg/10a 3～4kg/10a 3kg/10a 3kg/10a 3kg/10a  1,000～2,000倍 1,000倍 1,000～2,000倍 3,000倍 1,000倍 1,000倍  3,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで  収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで  収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで  収穫7日前まで	3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内  3回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内  3回以内 3回以内 3回以内  3回以内	普 普 普 普 普  普 普 普 普 普 普  普 普 普  普	× ○ ○ ○ ○  × × ○ △ △ △  △ ○ △  △ △ △  △	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。  ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。  ○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。	
イネノウンカ	<p>(発生の特徴) (耕種防除法)</p> <p>○早期栽培で被害が多い。○中苗または成苗移植被害がらざれ流れ葉となる。</p>	3A	【粒剤】 トレボン粒剤	1:エトフェンプロックス	2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)	

上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード							
イネミズゾウムシ	(防除上のポイント) ○常発地では、箱施用が有効な防除法となる。箱施用を行なった場合は本田防除は通常は不要となる。	○田植え後は深水を避け、根の健全化に努める。 ○5月中旬までに田植えした場合に、特に成虫飛来が多いので、田植え時期をできるだけ遅らせ、地域ごとの一斉田植えが望ましい。	田植前	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
			田植後～生育前期	3A	【粒剤】 トレボン粒剤							
ニカメイチュウ	(発生の特徴) ○年2回発生する。 ○孵化した幼虫が茎下部から茎内に食入して内部を食害し、芯枯れとなる。 (防除上のポイント) ○第1世代の幼虫を重点に防除する。 ○粒剤は粉剤より3～5日早く灌水状態で使用し、使用後3～4日の水の移動は避ける。	○早期に耕運し、刈り株で越冬する幼虫の死滅を図る。特に厳寒期の耕運は密度抑制に効果的である。	越冬世代成虫発生最盛期7～10日後	14 3A		パダン粉剤DL トレボン粉剤DL	3～4kg/10a 3～4kg/10a	収穫21日前まで 収穫7日前まで	6回以内 3回以内	普 普	○ 合ピレ(注)(P.15)	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15)
			第1世代成虫発生最盛期3～5日後	14 18 5		【液剤】 パダンSG水溶液 ロムダンゾル デアアナSC BT剤 参考資料(P.15)参照	1,500倍 1,000倍 4,000～6,000倍	収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで	6回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普	○ 合ピレ(注)(P.15)	
イネソットムシ (イチモンジセセリ)	(発生の特徴) ○窒素過多で葉色の濃い稲や普通期栽培で移植の遅い稲に被害が多い。 (防除上のポイント) ○高温により発生が早まるので、成虫の本田飛来に注意する。 ○幼虫発生初期に防除する。 ○粒剤は粉剤より3～5日早く灌水状態で使用し、使用後3～4日の水の移動は避ける。	○窒素質肥料の適用を避ける。	田植前	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
			(第1世代)6月上旬～下旬	14 3A								
				14 18 5		【液剤】 パダンSG水溶液 ロムダンゾル デアアナSC BT剤 参考資料(P.15)参照	1,500倍 1,000倍 4,000～6,000倍	収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで	6回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15)	
				14		【粒剤】 パダン粒剤4 上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)	3～4kg/10a	収穫30日前まで	6回以内	劇	○ 合ピレ(注)(P.15)	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤				使用時期	濃度(使用量)	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
			IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名						
コブ ノメイガ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○海外飛来性害虫であるため、飛来時期・飛来量は年によって異なる。</li> <li>○窒素過多で葉色の濃い稲や普通期栽培で移植の遅い稲に被害が多くなる。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○老齢幼虫には防除効果が劣る。このため、防除適期の目安は粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後となる。</li> </ul>	<p>○窒素質肥料の適用を避ける。</p>	<p>田植前</p>									
フタオビコヤガ (イネアオムシ)	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○普通期栽培では7月下旬～8月上旬に寄生密度が高増する場所があるので注意する。</li> </ul>	<p>○稲わらに付着した蛹で越冬するため早期耕運により稲わらを早目に埋設する。</p>	<p>田植前</p>									
イネカラ ネキ モバ グ リ ハ エ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○中山間地帯で発生が多い。</li> </ul>	<p>○コンヒカリ等の耐虫性を示す品種を選択する。</p>	<p>(第1世代) 5月中旬～ 6月上旬  (第2世代) 7月中旬～ 8月上旬</p>									
<p>桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。</p>												
<p>箱施用(青苗箱)における薬剤施用法の項(P.43)参照</p>												
<p>桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。</p>												
<p>箱施用(青苗箱)における薬剤施用法の項(P.43)参照</p>												
<p>桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。</p>												
<p>上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)</p>												
<p>箱施用(青苗箱)における薬剤施用法の項(P.43)参照</p>												
<p>桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。</p>												
<p>上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)</p>												

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード							
イネクワカメムシ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○水稻の作型により、発生時期は大きく異なる(早期栽培では、6月上～中旬から成虫の侵入がみられる。)ので、各作型で虫の発生に合わせて防除時期を決定する。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○穂ばらみ期から出穂期にかけて密度が高いと、芯枯害、白穂害が発生するので、それまでに密度を低下させておく。</p>	<p>○多発生地域では、移植期までに圃場周辺の畦畔を除草する。</p>	越冬成虫 加害期 (普通期: 6月上～ 中旬)  若・中齢 幼虫期 (普通期: 7月上旬)	3A	【粉剤】 トレボン粉剤DL	1:エトフェンプロックス 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A	アルバリン粉剤DL							
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○畦畔での発生密度が高いので注意する。</p> <p>○イネ科雑草地、雑木林、雑草の優先した休耕田のある地域及び早期栽培では発生が多いので注意する。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【液剤】 スタークル液剤10	1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール 1:スルホキサフロル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
			4A	スタークルメイト液剤10								1,000倍
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【粉剤】 トレボン粉剤DL	1:エトフェンプロックス 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)	
			4A	アルバリン粉剤DL								3kg/10a
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【液剤】 スタークル液剤10	1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール 1:スルホキサフロル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
			4A	スタークルメイト液剤10								1,000倍
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【粉剤】 トレボン粉剤DL	1:エトフェンプロックス 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)	
			4A	アルバリン粉剤DL								3kg/10a
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【液剤】 スタークル液剤10	1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール 1:スルホキサフロル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
			4A	スタークルメイト液剤10								1,000倍
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【粉剤】 トレボン粉剤DL	1:エトフェンプロックス 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)	
			4A	アルバリン粉剤DL								3kg/10a
カメムシ類(斑点米)	<p>(発生の特徴)</p> <p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○出穂時に定期防除で密度を下げておく。</p> <p>○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。</p>	<p>○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。</p> <p>○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。</p>	4A	【液剤】 スタークル液剤10	1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:ジノテラン 1:クロチアニジン 1:クロチアニジン 1:エチプロロール 1:スルホキサフロル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
			4A	スタークルメイト液剤10								1,000倍

上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤		使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード								
カメムシ類 (斑点米)	(防除上のポイント) ○除草が不可能な休耕田でカメムシ類の発生が見られる場合は、休耕田雑草に適用のある薬剤で防除する。 ○斑点カメムシ類に対する殺虫剤の効果(P.52)、ミナミアオカメムシの防除法の項(P.53)参照。			3A 4A 4C 3A		<b>【粉剤】</b> トレボン粉剤DL ダントゾ粉剤DL <b>【液剤】</b> エクシードフロアブル トレボン乳剤	1:エトフェンプログス 1:クロチアニジン  1:スルホキサフロロ 1:エトフェンプログス	3～4kg/10a 3～4kg/10a  2,000倍 2,000倍	— —  — —	3回以内 4回以内  3回以内 3回以内	普 普  普 普	× ○  ○ ×	○合ビレ(注)(P.15)   ○合ビレ(注)(P.15)
イナゴ類	(発生の特徴) ○卵で越冬する。5月中旬頃からふ化してくる(期間は1か月以上と長い)。 ○ふ化後、1か月くらいは水田内にはほとんど侵入せず、畦畔とその周辺にとどまる。 (防除上のポイント) ○ふ化時期から出穂期までであれば、防除はいつでもよい。	○越冬卵は春期の代掻き時には水面に浮き、畦畔に吹き寄せられるのでゴミとともに処分する。周辺に放置するとふ化するので注意する。	6月～ 出穂期	4A 4A 4A 4A 3A 2B 4C  3A 4A 2B		<b>【粉剤】</b> アルバリン粉剤DL スタークル粉剤DL ダントゾ粉剤DL ダントゾH粉剤DL トレボン粉剤DL キラップ粉剤DL エクシードフロアブル <b>【液剤】</b> トレボン乳剤 ダントゾフロアブル キラップフロアブル	1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:クロチアニジン 1:クロチアニジン 1:エトフェンプログス 1:エチプロール 1:スルホキサフロロ  1:エトフェンプログス 1:クロチアニジン 1:エチプロール	3kg/10a 3kg/10a 4kg/10a 3～4kg/10a 3～4kg/10a 3～4kg/10a 2,000倍  1,000～2,000倍 5,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで  収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	普 普 普 普 普 普 普  普 普 普	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  × △ ○	○合ビレ(注)(P.15)   ○合ビレ(注)(P.15)   ○合ビレ(注)(P.15)	
スクミリンゴガイ													

スクミリンゴガイの防除法の項(P.50)参照

(5) 水稲種子消毒法

1) 薬剤消毒

- ①浸種処理の場合、容量比（種もみ：薬剤）が常に1：1以上とする。
- ②消毒用の袋は、粗めなサラン網等を使用。種子量は袋容量の50%程度とし、処理時にはよくゆすり袋内の空気を追い出す。
- ③薬液の温度は、極端な低温を避ける。特に、10℃以下の液温では効果が劣る。
- ④乳剤以外の長時間浸漬では、処理中1～2回攪拌する。処理後は風乾し薬剤を十分付着させる。
- ⑤浸種後2～3日間は水換えしない。水換え時や浸種時の上下移動は静かに行う。
- ⑥消毒方法・手順は(P.49)を参照。
- ⑦残液は、魚介類などに影響のないよう適切に処理する。

農薬名	一般名	使用時期/ 使用回数	使用 方 法	対 象 病 害 虫						水 産 (注)	実施上の 注意事項	
				シン ガ レ ン チ ユ ウ	ば か 苗 病	い も ち 病	ご ま 葉 枯 病	も み 枯 細 菌 病	苗 立 枯 細 菌 病			
スミチオン乳剤	MEP	播種前/1回	1,000倍 6～72時間浸漬	○						普	△	催芽状態の種粒には薬害が出る。
パダンSG水溶剤	カルタップ	浸種前/1回	1,500～3,000倍 24時間浸漬	○						劇	×	
ベンレートT水和剤20	チウラム・ベノミル	浸種前/1回	乾燥種粒重量の0.5～1%湿粉衣	○	○	○	○			普	×	
			乾燥種粒重量の1%湿粉衣					○				
			20倍 10分間浸漬	○	○	○	○					
			200倍 24～48時間浸漬	○	○	○	○					
			200倍 6～24時間浸漬		○	○						
			400倍 24～48時間浸漬		○	○						
スポルタック乳剤	プロクロラズ	浸種前/1回	100倍 10分間浸漬		○	○	○			普	○	
			1,000倍 24時間浸漬		○	○	○					
ヘルシードTフロアブル	チウラム・ペフラゾエート	浸種前/1回	20倍 10分間浸漬		○	○	○	○		普	△	
			200倍 24時間浸漬		○	○	○	○				
スポルタックスターナSE	オキシロニック酸・プロクロラズ	浸種前/1回	20倍 10分間浸漬		○	○	○	○	○	普	○	
			200倍 24時間浸漬		○	○	○	○	○			
			7.5倍 吹付処理又は塗抹処理		○	○	○	○	○			
テクリードCフロアブル	イブコナゾール・銅	浸種前/1回	20倍 10分間浸漬		○	○	○	○	○	普	△	パダンSG水溶剤との混用を避ける(物理性)。播種機の腐食に注意する。
			200倍 24時間浸漬		○	○	○	○	○			
モミガードC・DF	塩基性塩化銅 フルジオキシニル ペフラゾエート	浸種前/1回	200倍 24時間浸漬		○	○	○	○	○	普	△	吹付処理は種子消毒機使用。使用量は乾燥種粒1kg当たり希釈液30m <sup>3</sup>
			7.5倍 吹付処理又は塗抹処理		○	○	○	○	○			
スターナ水和剤	オキシロニック酸	浸種前/1回	乾燥種子重量の0.5%湿粉衣					○	○	普	○	
			20倍 10分間浸漬					○	○			
			200倍 24時間浸漬					○	○			
			400～800倍 48～72時間浸漬					○				
エコフィット	酢酸	催芽時/1回	100倍 24時間浸漬					○	○	普	○	軽度の初期生育遅延を生じることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持すること。
エコホープ	トリコデルマ・アトロピリデ	微生物農薬(殺菌剤)の使用法の項参照(参考資料P.20)							普	○		
エコホープDJ	トリコデルマ・アトロピリデ	微生物農薬(殺菌剤)の使用法の項参照(参考資料P.20)							普	○		
タフブロック	タラロマイセスフラパス	微生物農薬(殺菌剤)の使用法の項参照(参考資料P.20)							普	○		

2) 温湯消毒

病 害 虫 名	手 順	実施上の注意事項
いもち病 もみ枯細菌病 褐条病 苗立枯細菌病 イネシンガレンチュウ	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 塩水選：比重1.13以上で行う。</li> <li>2 水洗い：塩分を抜くため水洗は入念に行う。</li> <li>3 風乾：種粒を水分15%以下に乾燥させる。</li> <li>4 袋詰め：アミ袋に半分を目安に入れる。</li> <li>5 温湯処理：60℃、10分間で処理する。</li> <li>6 冷却：温湯処理後直ちに水道水で冷却する。</li> <li>7 浸種：浸種、催芽、出芽は慣行どおり行う。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1)病害に高濃度に汚染されている場合は防除効果が劣るので、採種圃産など病害の発生していない圃場の種子を用いる。</li> <li>(2)温度管理が悪いと効果や発芽に問題を生じるため、専用の温湯消毒装置を用いる。</li> <li>(3)機器に応じた種子処理量を遵守する。</li> <li>(4)処理時間10分以上では出芽率の低下が大きくなる。</li> <li>(5)温湯処理は乾燥粒で行わないと出芽率が大幅に低下するため、塩水選後は十分に乾燥させてから処理する。</li> <li>(6)使用前に機器が正常に稼動するのかわかめるなど機器のメンテナンスを行う。</li> </ol>



(6) 育苗箱における薬剤施用法

- ①育苗箱施用剤は、水稲生育初～中期に発生する病害虫を効果的に防除でき、周辺作物への薬剤の飛散がほとんどない防除技術である。
- ②育苗箱施用剤には、殺虫剤、殺菌剤、それらの混合剤が各種あり、対象とする病害虫の種類や効果の程度も異なるので、それぞれの地域の実情にあわせた薬剤を選定する。
- ③軟弱徒長苗では被害がやすいので、施用を避ける。
- ④安定的な効果をj得るためには、決められた施用量を、ムラのないよう箱全体に均一に散布することが重要である。
- ⑤粒剤の施用は、苗の露を落としてから行い、施用後は葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水して、薬剤を床土に付着させる。
- ⑥薬剤施用後、乾燥させると薬害がやすすいので、苗管理には注意する。
- ⑦施用時の除草剤の誤用に注意する。

【育苗箱施用剤一覧表について】 (R3～)

1. 殺虫成分のイミダクロロゲン、クロチアニジン、チアメトキサムはトビイロウンカに対し感受性が低下しているため、これらを含む剤は記載していない。
2. ウンカ類 (トビイロウンカ) に対して適用のない薬剤は記載していない。また、使用時期によってトビイロウンカに適用のない場合は記載していない。
3. 殺菌剤のみの薬剤は県内での使用場面が少ないことから記載していない。

使用薬剤名	一般名		殺菌成分 (成分量)	使用時期	1箱当たり 施用量 (※10a当たり) (▲乾薬量もみ 当たり)	いもち病	紋枯病	箱こうじ病	もみ枯細菌病	内類褐変病	ツマグロヨコバイ	ウンカ類	イネミズンウムシ	コブノメイガ	ニカメイチュウ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	カメムシ類	イネクロカメムシ	イナゴ類	備考
	殺虫成分	殺菌成分																			
アレス箱粒剤	オキザリスDF710	-	-	は種前	50g																★
フェルテラゼクサロン箱粒剤	トリフルダジベリム・クロアクトラニリブ ロール	-	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日 移植時 (側条施用)	50g 1kg※																★
フェルテラチエス箱粒剤	クロアクトラニリブ・ロール・ベ・トロン	-	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日 移植3日前 ~ 移植当日	50g 50~100g																★
プリンス粒剤	フィノニル	-	-	は種前 (床土混和)	50g																★
プリンススピノ粒剤6	フィノニル、スピノサト	-	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日	50g																★
ベキサロンフロアブル	トリフルダジベリム	-	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日	50g																★
リディア箱粒剤	フルニリシ	-	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日 移植3日前 ~ 移植当日	0.50 1.40倍 50g																
リディアNT箱粒剤	フルニリシ	-	-	は種前 (床土混和)	50g																
ルミスバンスFS	トリフルダジベリム	-	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日	50g																★
アブライプリンス粒剤10	フィノニル	チアニジン	-	は種前 (浸種前) は種時 (覆土前) ~ 緑化始期	50g																
アレスモンガレス箱粒剤	オキザリスDF710	化ビ W7004PM	-	移植時 (側条施用)	1kg/10a																★
稲名人箱粒剤	オキザリスDF710	イワチニル (2.0)	-	は種前 (床土又は覆土混和) は種時 (覆土前) ~ 移植当日	50g 50g																
ゴウケツケバスター箱粒剤	ジノチアジン	トルゴロルガ (9.0)	-	移植3日前 ~ 移植当日	50g																★
防入箱粒剤	クロアクトラニリブ・ロール・トリフルダジベ リム	イワチニル (2.0)	-	は種時 (覆土前) ~ 移植当日 移植時 (側条施用)	50g 1kg※																

使用薬剤名	一般名		殺菌成分 (成分量)	使用時期	1箱当たり 施用量 (※10a当たり) (▲乾薬量もみ 当たり)	いもち病	紋枯病	霜こうじ病	もみ枯細菌病	内穎穂変病	ツマグロヨコバイ	ウンカ類	イネミズソウムシ	ニホメイガ	コブノメイガ	イネトテムシ	フタオビコヤガ	カメムシ類	イネクロカメムシ	イナゴ類	備考
	殺虫成分	殺菌成分																			
サントリブル箱粒剤	クロアクトラニア・ロール・ジ・アブソン	トリブ・ロカバ <sup>®</sup> (4.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
サンエース箱粒剤	クロアクトラニア・ロール・トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム	トリブ・ロカバ <sup>®</sup> (4.0)・シノ	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
サンスバイク箱粒剤	クロアクトラニア・ロール・トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム	トリブ・ロカバ <sup>®</sup> (4.0)	1kg※	移植3日前～移植当日 移植時 (側条施用)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
スクラム箱粒剤	クロアクトラニア・ロール・トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム	イナジニル (2.0) ・ベ・ソルフェン	50g	は種時～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
スタウトアレス箱粒剤	オキザギ <sup>®</sup> スワイル	イナジニル (2.0)	50g	は種前 (覆土又はは種時)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
スタウトアレスモンガレス箱粒剤	オキザギ <sup>®</sup> スワイル	イナジニル (2.0)、イビ <sup>®</sup> ワフ	50g	は種時 (覆土前)～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
デジタルバウア箱粒剤	クロアクトラニア・ロール・ピ・ストロジン	ピ・ロキソ <sup>®</sup> (8.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Cs.オリゼリア箱粒剤	フル <sup>®</sup> リシ	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (16.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
Cs.オリゼリアEV箱粒剤	フル <sup>®</sup> リシ	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (16.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
Dr.オリゼスタークル箱粒剤	ジ <sup>®</sup> ア <sup>®</sup> ア <sup>®</sup> ン	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (25.0)	50g	緑化期～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Dr.オリゼブリンズ箱粒剤10	ア <sup>®</sup> イ <sup>®</sup> ロニル	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (24.0)	50g	緑化期～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Dr.オリゼリア箱粒剤	フル <sup>®</sup> リシ	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (24.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
箱維新粒剤	トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム・クロアクトラニア・ロール	イナジニル (2.0)・ワラト <sup>®</sup>	1kg※	移植時 (側条施用)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
稲大將箱粒剤	オキザギ <sup>®</sup> スワイル	イナジニル、イビ <sup>®</sup> ワフ	50g	移植7日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ハコガード粒剤	クロアクトラニア・ロール・トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム	ア <sup>®</sup> イ <sup>®</sup> ニル・ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール	50g	緑化期～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
ハコナイト粒剤	ア <sup>®</sup> イ <sup>®</sup> ロニル、クロアクトラニア	ア <sup>®</sup> イ <sup>®</sup> ニル (2.0)	50g	は種前	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
ビームパルタス箱粒剤	スピ <sup>®</sup> ネ <sup>®</sup> ム、トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム	トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム	50g	は種時 (覆土前)～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ビームプリンスグレート箱粒剤	ア <sup>®</sup> イ <sup>®</sup> ロニル	トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム・ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール	50～100g	移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
ビルダーフェルテラスタークル箱粒剤	クロアクトラニア・ロール・ジ・アブソン	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (10.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ビルダーフェルテラゼクサロン粒剤	トリフルメジ <sup>®</sup> ・リム・クロアクトラニア・ロール	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (10.0)	50g	緑化期～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★
ビルダーフェルテラチエス粒剤	クロアクトラニア・ロール・ピ・ストロジン	ア <sup>®</sup> ハ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ール (10.0)	50g	移植3日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	★

殺虫殺菌剤

使用薬剤名	一般名		殺菌成分 (成分量)	使用時期	1箱当たり 施用量 (※10a当たり) (▲乾薬種もみ 当たり)	いもち病 紋枯病 霜こらじ病 もみ枯細菌病 内類穂変病 ツマクロヨコバイ ウンカ類 イネミズソウムシ コブノメイガ ニカメイチュウ イネソトムシ フタオビコヤガ カメムシ類 イネクロカメムシ イナゴ類	備考
	殺虫成分	殺菌成分 (成分量)					
ビルダーフェルテラチエスGT粒剤	クロントラニア <sup>®</sup> ロール・ビ <sup>®</sup> トロジン	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (10.0)・チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup>	緑化期～移植当日	50g	○		
ビルダーブリンズ粒剤	ア <sup>®</sup> ロール	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (10.0)	緑化期～移植当日	50g	○		
ビルダーブリンズグレートム粒剤	ア <sup>®</sup> ロール	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (10.0)・チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup>	緑化期～移植当日	50g	○		
ビルダーリア箱粒剤	ア <sup>®</sup> リシ	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (10.0)	移植7日前～移植当日 移植時 (側条施用)	50g 1kg※	○		
ビルダーリアE V箱粒剤	ア <sup>®</sup> リシ	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (10.0)、 ベ <sup>®</sup> ソ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (2.0)	移植時 (側条施用) 移植3日前～移植当日 移植7日前～移植当日	50g 50g	○		
ブーンアレス箱粒剤	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ス <sup>®</sup> ロール	ジ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ソ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ク <sup>®</sup> ス (2.0)	は種時 (覆土前)～移植当日	50g	○		
ブーンゼクテラ箱粒剤	トリ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ビ <sup>®</sup> リム・クロ <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ト <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ニ <sup>®</sup> ア <sup>®</sup> ロール	ジ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ソ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ク <sup>®</sup> ス (2.0)	は種時 (覆土前)～移植当日	50g	○		
フアーストオリゼプリンス粒剤10	ア <sup>®</sup> ロール	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (20.0)	移植時 (側条施用)	50g	○		
フアーストオリゼリア箱粒剤	ア <sup>®</sup> リシ	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (20.0)	は種前 (床土混和) は種時 (覆土前)	50g 50g	○		
パイゲットハコレンゼジャーL粒剤 ハコナイ粒剤	クロ <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ト <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ニ <sup>®</sup> ア <sup>®</sup> ロール ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (6.0)・チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ミ <sup>®</sup>	緑化期～移植当日 移植時 (側条施肥)	50g 1kg※	○		★
パイゲットフェルテラセラサクロンL粒剤	クロ <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ト <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ニ <sup>®</sup> ア <sup>®</sup> ロール	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (6.0)	緑化期～移植当日	50g	○		★
パイゲットフェルテラチエスL粒剤	クロ <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ト <sup>®</sup> ラ <sup>®</sup> ニ <sup>®</sup> ア <sup>®</sup> ロール・ビ <sup>®</sup> トロジン	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (6.0)	緑化期～移植当日	50g	○		
パイゲットブリンズ粒剤10	ア <sup>®</sup> ロール	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (12.0)	緑化期～移植当日	50g	○		
パイゲットブリンズリンパール粒剤	ア <sup>®</sup> ロール	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (6.0)・チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ミ <sup>®</sup>	緑化期～移植当日	50g	○		
ブリンズリンパール箱粒剤	ア <sup>®</sup> ロール	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ミ <sup>®</sup>	移植3日前～移植当日	50g	○		
ヨーバルパワーEV箱粒剤	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> ロール・ビ <sup>®</sup> トロジン	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (2.0)、ベ <sup>®</sup> ソ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (2.0)	は種時 (覆土前)～移植当日	50g	○		
ヨーバルUG箱粒剤	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> ロール・ビ <sup>®</sup> トロジン	チ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup> (2.0)	移植3日前～移植当日	50g	○		
リアディアEV箱粒剤	ア <sup>®</sup> リシ	ベ <sup>®</sup> ソ <sup>®</sup> エ <sup>®</sup>	は種時 (覆土前)～移植当日 移植3日前～移植当日	50g 50g	○		
ロングリーチ箱粒剤	ジ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ソ <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ク <sup>®</sup> ス	ア <sup>®</sup> ナ <sup>®</sup> ロール (24.0)	移植3日前～移植当日	50g	○		

注意事項：(1) 本表は薬剤ごとに登録適用対象病害虫 (○印) を記載したものであるが、愛媛県で発生 (問題) がない病害虫は除外した。  
なお、薬剤によっては施用量により対象病害虫が異なることがあるので注意する。

(2) 殺菌成分のトリシクランゾールは、いもち病常発地での使用を避ける。

(3) 薬剤により成分の異なるものには成分量を記載。

(4) 記載されている農薬は、すべて人畜：普通箱、水産動植物への注意 (表記△) が必要である。

(5) ★高密度には種する場合には、1kg/10a (育苗箱30×60×3cm、使用土壌約5L) 1箱当たり50～100g

(7) 苗立枯病の防除法

薬 剤 名	一 般 名	本剤の使用回数	毒 性	
			人畜	水産 (注)
カスミン粒剤	カスガマイシン	1回	普	○
カスミン液剤	カスガマイシン	1回	普	△
ダコニール1000	T P N	2回以内	普	△
ダコレート水和剤	ベノミル・T P N	2回以内	普	△
タチガレン液剤	ヒドロキシイソキサゾール	2回以内	普	○
タチガレン粉剤	ヒドロキシイソキサゾール	1回	普	○
タチガレエースM液剤	ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシル	1回	普	○
タチガレエースM粉剤	ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシル	1回	普	○
タチガレファイト液剤	ヒドロキシイソキサゾール	2回以内	普	○
ナエファイン粉剤	ピカルブトラゾクス	1回	普	○
ナエファインフロアブル	ピカルブトラゾクス	2回以内	普	○
バリダシン液剤5	バリダマイシン	1回	普	○
フジワン水和剤	イソプロチオラン	1回	普	△
ベンレート水和剤	ベノミル	2回以内	普	△
エコフィット	酢酸	1回	普	○

① 発病前（は種前、は種時、は種後覆土前）の薬剤処理

対象病害又は 障 害 名	薬 剤 防 除 法			注 意 事 項
	時 期	使用薬剤と濃度	使 用 量	
苗立枯病 (ビシウム菌) (フザリウム菌)	は種前	タチガレン粉剤 タチガレエースM粉剤	3~6g/箱 6~8g/箱	(1) 粉剤はは種前に育苗箱土壌に均一に混和する。
苗立枯病 (ビシウム菌) (フザリウム菌) (リゾープス菌) ムレ苗防止		ナエファイン粉剤	6~8g/箱	
ムレ苗防止		タチガレン粉剤 タチガレエースM粉剤	4~8g/箱 6~8g/箱	
苗立枯病 (ビシウム菌) (フザリウム菌) ムレ苗防止	は種時	タチガレエースM液剤 1,000倍	1L灌注/箱	(2) タチガレファイトは複合肥料を配合した農薬である(水溶性りん酸18.0%、水溶性加里20.0%)。使用量が多すぎた時、場合によっては初期生育が一時抑制されることがあるので、濃度や使用量を誤らないように注意する。
	は種時又は発芽後	タチガレエースM液剤 500~1,000倍	500ml灌注/箱	
	は種時及び発芽後	タチガレン液剤 500~1,000倍 " 1,000倍	500ml灌注/箱 1L灌注/箱	
		タチガレファイト液剤 250倍~300倍 " 500倍~600倍	500ml灌注/箱 500ml~1L灌注/箱	
苗立枯病 (ビシウム菌) ムレ苗防止	は種時~緑化期	ナエファインフロアブル 1,000~2,000倍	(1000~2000倍) 500ml灌注/箱	
	は種時	ナエファインフロアブル 2,000倍	500ml~1L灌注/箱	
苗立枯病 (フザリウム菌) (リゾープス菌) ムレ苗防止	は種時	ナエファインフロアブル 1,000倍、2,000倍	(1,000倍) 500ml灌注/箱 (2,000倍) 500~1000ml 灌注/箱	
		ナエファインフロアブル 2,000倍	500~1000ml 灌注/箱	
苗立枯病 (リゾープス菌)	は種時から緑化期(但しは種14日後まで)	ダコニール1000 500~1,000倍	500ml灌注/箱	(1) 緑化期に使用する場合、発病後の処理では効果が劣ることがあるので注意する。
		" 1,000~2,000倍	1L灌注/箱	

対象病害又は障害名	薬 剤 防 除 法			注 意 事 項
	時 期	使用薬剤と濃度	使 用 量	
苗立枯病 (リゾープス菌) (フザリウム菌) (トリコデルマ菌)	は種時から緑化期 (但しは種14日後まで)	ダコレート水和剤 400～600倍 " 800～1200倍	500ml灌注/箱 1L灌注/箱	(1) 緑化期に使用する場合、発病後の処理では効果が劣ることがあるので注意する。
苗立枯病 (フザリウム菌)	は種時	ベンレート水和剤 500～1000倍	500ml灌注/箱	
苗立枯病 (トリコデルマ菌)	は種時1回又はは種時とは種7日頃の2回	ベンレート水和剤500～1000倍 " 1000倍	500ml灌注/箱 1L灌注/箱	
苗立枯病 (リゾクトニア菌) (白絹病菌)	は種時～発病初期	バリダシン液剤 5 1000倍	500ml灌注/箱	
幼苗腐敗症 (もみ枯細菌病菌) 苗立枯細菌病	は種前	カスミン粒剤	30g/箱	育苗培土に均一に混和する。
	覆土前		15～20g/箱	育苗箱には種した種もみの上から均一に散布する。
	覆土前		15～20g/覆土1ℓ	覆土に均一に混和する。
	覆土前	カスミン液剤 4～8倍	50ml/箱	は種した種もみの上から均一に散布する。
もみ枯細菌病	は種時(灌注)	エコフィット 100倍	500ml灌注/箱	軽度の初期生育遅延を生じることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持する。銅・真鍮に腐食性あり。
	は種時(散布)	エコフィット 10倍	50ml灌注/箱	
いもち病	は種時～は種7日後頃	ベンレート水和剤500～1000倍	500ml灌注/箱	
	緑化期～移植直前	フジワン水和剤 25倍	500ml灌注/箱	(1) 土壌が湿りすぎていない時に使用。 (2) ムレ苗抑制、根の伸長・発根促進登録あり。
	緑化始期	フジワン水和剤 50～100倍		
	覆土前	カスミン液剤4～8倍	50ml/箱	は種した種もみの上から均一に散布する。

②耕種的防除法等

対象病害	耕種的防除法	注意事項・症状
フザリウム菌による苗立枯病	(1) 床土は無病土を使用する。 (2) 床土のpHは4.5～5.0とする。 (3) 灌水に注意し、乾燥・過湿を繰り返さない。 (4) 温度管理に注意し30℃以上や10℃以下にしない。	(1) 苗の地際部に白いカビがみられ、籾を中心に白～淡紅色のカビが蔓延する。苗は生育不良で萎凋し、やがて枯死する。
ピシウム菌による苗立枯病	(1) 床土は無病土を使用する。 (2) 生育中低温にしない。 (3) 標準は種量を守り厚播きにしない。	(1) 苗の地際部の褐変はやや淡く水浸状となり、急激に萎凋・枯死する。地際部にカビは見られない。
ムコール菌による苗立枯病	(1) 床土は無病土を使用する。 (2) 温度管理、灌水を適正にして高温多湿にしない。 (3) 標準は種量を守り厚播きにしない。	(1) 籾のは種層に白色の綿毛状のカビが蔓延する。根の伸長は悪く色は褐変し、後に枯死する。
リゾープス菌による苗立枯病	(1) 出芽時30℃以上の高温にならないように管理する。 (2) 床土の過湿を避ける。	(1) 籾のまわりに、白色のカビが生え、菌叢中に針頭大の黒点(胞子)が多数混じる。冠根の先端が異常肥大する。苗の生育は悪く、黄緑色に退色する。
苗立枯病 (リゾクトニア菌) (白絹病菌)	(1) 床土は無病土を使用する。 (2) 通風をよくし、高温・多湿にしない。 (3) 極端な厚播きや多肥栽培をしない。	(1) リゾクトニア属菌：移植前に急に発生する。下葉や葉鞘が灰緑色の葉腐れ症状となる。くもの巣状の菌糸がみられる。 (2) 白絹病菌：苗の地際部や根に白色の絹糸状の菌糸がからみあい、のちに褐色球形の菌核ができる。苗は生育が悪く黄褐色となって萎凋し、枯死する。

## (8) 「ストロビルリン系殺菌剤 (QoI剤) 耐性いもち病菌」の発生と防除対策

水稲いもち病防除薬剤のうち、QoI剤 (ストロビルリン系殺菌剤：嵐、アミスター、オリブライト、イモチエースを総括した表現) 耐性菌が平成24年に全県的な発生として確認されている。

耐性菌の発生地域では、水稲移植時にこれらの箱施用剤を施用すると、防除効果が得られず激しく発生する可能性がある。防除対策、効果低下後の対応は「シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策を参照。

## (9) 「シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策

水稲いもち病防除薬剤のうち、MBI-D剤 (シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤：ウイン、デラウス、アチーブ剤を総括した表現) 耐性菌が、平成14年から県下で初確認され、現在では、東予を除いた広範囲で確認されている。発生は西日本に限定されていたが、その後、順次発生地域は北上し、平成18年には東北地方にまで拡散している。

耐性菌の発生地域では、水稲移植時にこれらの箱施用剤を施用しても、気象条件などによって発生の激しい場合には、発病抑制期間の著しい短縮や、効果の低下などが認められる。

### <防除対策>

#### 1 種子対策

- (1) 種子伝染を防ぐため、発生地域では「種子更新」を行う。
- (2) 種子消毒は、種子消毒剤の使用法 (濃度・時間) を遵守して、必ず実施する。

#### 2 箱施用剤対策

- (1) 箱施用剤は、これらの薬剤と作用機作の異なる薬剤を選択する。
- (2) 薬剤は規定の施用量を均一に散布し、効果が低下しないようにする。
- (3) 育苗箱で、苗いもちの発生が確認された場合には、本田への移植を行わないで廃棄等の適正な処分を行う。

#### 3 本田防除対策

- (1) 葉いもちの発生が確認されたら、本田防除を早急を実施する。
- (2) 発生が著しい場合にはブラシン剤等を散布して、蔓延防止対策を早急を実施する。
- (3) 箱施用だけを実施して本田防除を省略すると、耐性菌発生が助長されるので、必ず本田防除と組合わせた「体系防除」を実施する。

### <効果低下後の対応>

箱施用剤の効果低下が疑われる場合には、関係機関に連絡して「感受性検定」を依頼し、検定の結果、耐性菌であると判定された場合には、防除指針改訂など総合的な防除対策を早急に講じる。

## (10) イネばか苗病の防除法

イネばか苗病は、病原菌から産出するジベレリンの作用により徒長する。徒長苗を本田に移植すると、一部の株は部分的に枯死する。発病イネは、分けつ数は少なく、徒長して上位節より不定根を生じ、生育に従って順次枯死する。

発病枯死茎には白い粉状物 (分生子塊) を生じ、風雨によって飛散する。開花中の気温が高い (30℃以上) ほど感染率は高く、また、降雨によって助長され、病原菌は胚など深部まで侵入して、保菌程度の高い種もみとなる。しかし9月以降、気温が低くなるにつれて感染率は低下する。

### 1 種子対策

#### [無病種子の確保]

種子は発病 (保菌) していないほ場からとる。

#### [塩水選]

罹病もみは健全なもみに比べて軽いため、塩水選を行う。塩水選の比重は、うるち (脱芒処理をした後) : 1.15~1.18、もち : 1.05~1.10で実施する。なお比重が高いほど発病もみは少なくなる。

#### [種子消毒及びその後の浸種実施上の注意事項]

##### (湿粉衣法)

- (1) 少量の場合は小型ミキサーやビニール袋を利用する。ビニール袋では薬剤がよく付着するようによくゆすって混ぜ合わせる。大量の場合はポットミキサーを利用する。
- (2) 薬剤が均一に付着するよう、種子を少量ずつ粉衣し、また、粉衣時間を長くすると、均一性が高まる。
- (3) 種子を僅かに湿らせ (塩水選後水洗いし水切り後ムシロ等にひろげて、水滴を含ませない程度に乾かす) 湿粉衣とする。

(4) 種もみに薬剤をよく固着させるため、粉衣後は1～2日間陰干する。

#### (低濃度・高濃度浸漬法)

- (1) 水和剤は、薬剤に少量の水を入れてよくねり「のり状」にしてから、所定量の水を加えて調整する。
- (2) 消毒用の種子入袋はサラン網袋など目のあらい薬剤がよく通るものを使用し、薬剤がもみによく付着するように努める。また種子量は袋容量の50%程度にとどめる。
- (3) 薬液量は種子が浸る程度（種子1kgに対し、薬液2L程度）とする。
- (4) 薬液の温度が低い(10℃以下)と、防除効果が劣ることが多いので15～25℃で処理する。
- (5) 水和剤は薬剤処理中に時々かきまぜ、浸漬後は種もみを十分に陰干して、薬剤を固着させる。
- (6) 薬剤の使用回数は、低濃度薬液長時間浸漬は1回、高濃度薬液短時間浸漬は8～10回までとし、反復使用する場合は、薬液量は種子が浸る程度（種子1kgに対し、薬液2L程度）となるよう、新しい薬液を補充する。

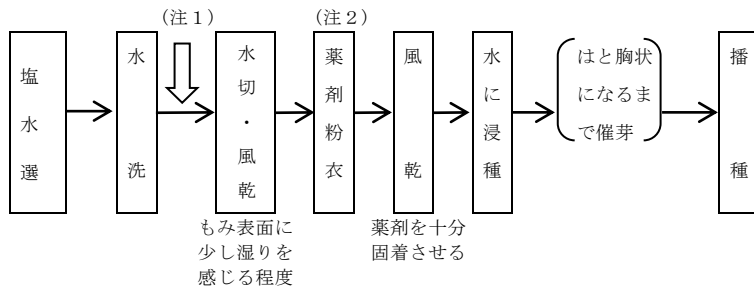
#### (浸種)

- (1) 浸種水温10～15℃で効果が高いので、水温10℃を確保できる3月上旬頃を目安に浸種を開始する。
- (2) 薬剤処理後の浸種は、種もみ容量の2倍程度とし（種子1kgに対し、水約3.5L）、水温は10～15℃になるように努める。浸種は水道水、井戸水で水槽を用いて行い、河川、湖沼の水は使用しない。
- (3) 浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、14℃では6日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は2～3回とする。
- (4) 浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。
- (5) 特に、湿粉衣法は、種子表面に付着した薬剤が浸種後水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高い状態で消毒効果が発揮される。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。
- (6) 複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で浸種・催芽しない。
- (7) 消毒後の廃液は適切な方法で処理し、河川や池などに流さないよう注意する。

#### 種子消毒の作業手順

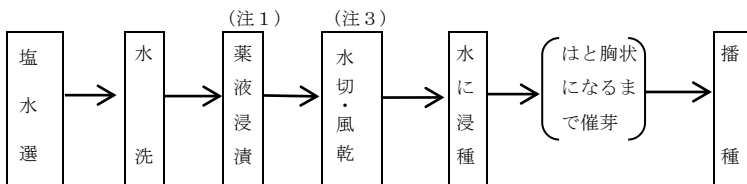
##### 1 湿粉衣法（種子重量の0.5%または1.0%粉衣）

粉衣法は使用後の残液が比較的少なく、環境への負荷が小さいので積極的に活用することが望ましい。



##### 2 浸漬法（各薬剤の濃度、処理時間は水稻種子消毒の頁(P. 42)参照）

浸漬法による種子消毒は残液が多く出るので、その処理は適正に行う。



(注1) シンガレセンチュウの防除を実施する場合は、水洗後、スミチオン乳剤1,000倍またはパダンSG水溶剤1,500倍を用い、24時間浸漬後、水切りする。催芽状態の種もみには薬害が生じることがあるので注意する。

(注2) 粉衣は空の肥料袋などにもみと薬剤を入れてゆする。大量に行う場合には、小型のミキサー（ポットミキサー、モルタルミキサーなど）を用いると能率的である。

(注3) 薬剤を十分に固着させる。但し、薬剤により風乾を必要としないものがあるので注意する。

#### 残液の処理方法

##### (1) 吸着焼却法（テクリード水和剤等）

残液に活性炭を添加し、十分攪拌して吸着させた後、凝集剤（キトサン0.4%）を加え、軽く攪拌後に静置する。その後、さらし布等でろ過し、活性炭を風乾して適正に処分する。

##### (2) 小型移動式廃液処理装置の使用

## 2 育苗対策

- (1) 稲わらには病原菌が寄生または付着していることが多いので、稲わらで作ったコモ等で被覆しない。
- (2) 病原菌は高温によってよく活動するので、出芽時の温度はあまり高くしない。
- (3) 緑化時の温度管理は25℃程度とする。
- (4) シルバーポリ等の被覆は高温（30℃以上）となりやすく、発病を助長する傾向があるので十分注意する。なお、床土温度が30℃以上になると発病は多くなりやすい。
- (5) 病原菌は乾燥状態の時によく生育するので、床土はあまり乾かさないう育苗時の水管理に注意する。
- (6) 保菌もみに隣接した健全もみは徒長苗となることがある。したがって隣接もみへの伝染を抑制するため、播種量は稚苗育苗で箱当り 180 g まで（催芽もみ）とし、厚播きをしない。
- (7) 前年に使用した箱は消毒してから用いる。また、使用後は直ちに洗浄して菌汚染を抑制する。
- (8) 徒長発病苗は、発見しだい抜き取り適切に処分する。

## 3 本田対策

- (1) 発病（徒長）株は早期に抜き取り適切に処分する。
- (2) 発病枯死茎は、病原分生胞子を形成して伝染源となるため、最高分けつ期を中心として出穂期までには徹底的に抜き取り、すみやかに処分して、胞子を飛散させない。
- (3) ツマグロヨコバイによる伝染助長も認められているため、出穂期前後の防除に努める。
- (4) 「すずめ」が食害すると、感染もみ率が高くなるので食害防止に努める。

## 4 採種対策

- (1) 種子用もみは、脱穀機の回転数を通常より若干落とし（毎分400回転程度、周速度11.8m/s程度）、もみに傷をつけないようにする。
- (2) 採種ほ場は、品種や作期を合わせた集団栽培とし、周辺田も含めた総合的な防除対策に努める。

## (11) イネもみ枯細菌病の防除法

イネもみ枯細菌病は、穂にもみ枯症をおこして、減収をきたすとともに、種子伝染して苗腐敗症をおこすため、難防除病害とされている。

### 1 もみ枯細菌病の特徴

- (1) もみ枯症が発生した水田の種子を種子もみに使用すると種子伝染がおこり苗腐敗症が多くなる。
- (2) 育苗期では出芽時の高温、土壌の過湿、土壌の高pHが発病を助長する。
- (3) 本田期では夏期の高温は発病しやすくなる。特に、出穂期に高温かつ降雨があるとき発病が著しく助長される。
- (4) 前年多発した水田では発病が多くなることがある。

### 2 耕種的防除法

（育苗時）

- (1) 種子もみは発生ほ場から採種しない。
- (2) 種子もみは塩水選による選別を行う（もち1.05～1.10）、（うるち1.15～1.18）。
- (3) 浸種時の水管理を適正にし、水温を必要以上（25℃以上）に高めない。
- (4) 出芽時の温度を30℃以下に保つよう温度管理に注意する。

（本田期）

- (1) 被害ワラやもみ殻は、堆肥化するか年内に石灰窒素を施してすき込むなどして腐熟させる。
- (2) 移植（田植）後の冠水は、発病助長原因となることがあるので水管理に十分注意する。

### 3 薬剤による防除法

- (1) 種子消毒により菌密度を低減させる。
- (2) プロベナゾール、チアジニル、イソチアニル粒剤（混合剤含む）には、本田移植時に育苗箱施用できる製剤がある（登録条件を確認のこと）。
- (3) 薬剤の使用時期が適切でないと効果が劣るので、各薬剤の適期に施用する。
- (4) 防除効果を高めるためには、耕種的防除法に加え、体系的な薬剤防除が必要である。

## (12) スクミリンゴガイの防除法

### 1 防除の基本的な考え方

- (1) 定期的な巡回調査により早期発見に努める。



- (2) ほ場内に貝や卵塊を確認したら、早く防除を開始する。
- (3) 地域、水系毎の総合的、体系的な防除対策とする（地域農家、住民への周知、広報に努める）。
- (4) 卵塊、貝は見つけ次第捕殺（粉碎など）する。また、定期的に捕殺して密度低下と拡散阻止を図る。
- (5) 発生地からの水田土壌の移動は、未発生地への新たな発生源となるので、絶対にしない（非発生地であることを確認してから採土する）。
- (6) 水路を越えての冠水や浸水は、爆発的な拡大につながるので注意する。

## 2 耕種的防除（具体的な対策）

### （収穫後から早春期）

- (1) 厳冬期（休閑期）に耕起して、越冬貝の密度を下げる。
- (2) 湿田では排水を良くするため、溝切りなどして乾田化をはかる。
- (3) 畑作物などへの作付転換を行うと密度低下につながる。
- (4) 稲ワラや切ワラは越冬場所となるので、除去、焼却または鋤込むなど適切に処理する。特に湿田では必ず実施する。
- (5) 冬期間には、用（排）水路はできるだけ落水して寒波にさらす。
- (6) 用（排）水路からの発生を抑制するため、雑草除去や泥土上げを冬期間に組織的に実施する。

### （春から田植前）

- (1) 取水口（水口）に金網やビニルネットなどを張り、用水路からの貝の侵入と用水路への拡散を防ぐ。  
（ゴミなどで目詰まりするので、網目を変えた複層構造が望ましい。また、定期的にゴミ除去を行う。）
- (2) 揚水ポンプなどからの貝の侵入を防ぐため、吐出口などに網を付ける。
- (3) 排水口には塩化ビニル管等を使用し、排水路の水面から離して、水田への侵入を防止する。
- (4) 越冬しやすい場所（橋の下、雑草繁茂地等）の越冬貝は、産卵開始（4月中旬）期までに採取、捕殺する。
- (5) 産卵直後の卵は水に弱いので、卵塊を水中に払い落として死滅させる。
- (6) 定期的な払い落とし期間は、4月で15日、5月で10日、6月で5日に1回の割合とする。  
（ただし、孵化期が近い卵塊は、卵が水中に落下しても死なないので注意する。）
- (7) 貝の生息密度の高い水田や侵入被害が予測される水田では、中苗～成苗を移植して、食害被害を軽減する。

### （田植後から初秋期）

- (1) 卵塊を水面下に払い落として死滅させる（前項の注意事項参照）。
- (2) 貝が侵入している水田では、田植後1cm程度の浅水管理にする（容易に浅水管理ができるように作溝する。また、溝に集まった貝を捕殺する）。
- (3) 水田に貝が多い場合には、捕殺して密度低下をはかる。
- (4) 水稻の食害被害が多いときには、苗の補植が必要である。

## 3 薬剤防除

### (1) 石灰窒素による防除

①必ず農薬登録のある石灰窒素を使用し、農薬使用基準を遵守する。

②水産動植物への影響が強いので（水産△、成分：カルシウムシアナミド）一時に広範囲に使用する場合には十分に注意する。

#### （広域散布の留意点）

- ・使用時期、使用地区などが重複、集中しないよう、技術指導者の計画的指示に基づいて実施する。
- ・天気予報などに注意して、少なくとも散布後3～4日は大雨、集中豪雨がない時期を選ぶ。
- ・散布した石灰窒素が、水路や河川などに飛散しないよう注意する。
- ・散布後は、水田の水が用（排）水路などに流れ出ないよう、水戸口管理に注意する。

③周辺作物に飛散して薬害（褐変、枯損）などを起こさぬよう、散布時には十分に注意する。

④散布後、隣接圃場へ流入（漏水）して、農作物を枯損させた事例があるので、周辺圃場の作付け状況や隣接水田への漏水などに注意する。

⑤粉（粉塵）飛散による人体への影響もあるので、粒状石灰窒素の使用が望ましい。また、散布時には防護服、マスク、防護メガネなどを着用する。

⑥死貝の腐敗臭があるので、殺貝効果を確認後は水田への鋤込みが望ましい。

⑦先進県の事例では、石灰窒素の施用頻度は、当初は2年連続、その後は発生状況により、2～3年に1回の散布を指導している。

⑧石灰窒素による単一の防除対策だけでなく、新たな貝の侵入を防ぐなど、総合的な防除を考えて推進することによって、防除効果の高まりと効果の持続が期待できる。

※ 石灰窒素による防除（登録条件）

田植前（荒起し後）または水稲刈取後、水田を3～4 cm深に湛水し、3～4日（水稲刈取後は1～4日）放置する。貝が水中で活動を始めたら、石灰窒素を10 a 当り20～30kg散布し、3～4日放置して殺貝する。田植前施用では、その後代かきを行い、2～3日後に田植えをする。

**\* 注意事項**

ア 効果を高めるためには、水中遊泳など貝の活動開始を確認してから石灰窒素を散布することが大切である。

イ 漏水田（または減水深の大きい水田）では効果が劣るので、事前に代かき等を行い漏水を防止しておく。

ウ 散布後は、水のかけ流しをしない。（効果の低下）。

エ 散布後、3～4日間（代かきが終わるまで）は落水しない。また、途中で水がなくならないよう、十分湛水しておく。

オ ただし、湛水深が深すぎると、効果の低下につながる。

カ 水稲刈取後の散布では、水温15℃以上の時期までの効果が高いので、散布時期が遅れないように注意する。

キ 石灰窒素は、肥料分として窒素を20%含むので、田植前散布では石灰窒素の窒素成分は基肥として換算する。

(2) 育苗箱施用、本田施用による防除

機械移植の場合は、育苗箱施用と水面施用（田植後5～7日）を体系的に実施すると効果が高まる。

また、薬剤防除だけでは、十分な効果が得られにくいので、物理的防除や耕種的防除を組み合わせた体系防除が望ましい。

(3) スクミリンゴガイに登録のある主な農薬

薬 剤 名	コード：成 分	使用量	注 意 事 項	
田植前施用剤 (殺 貝)	石灰窒素	その他：石灰窒素	20～30kg/10a	(1)石灰窒素による防除の注意事項参照(上記) (2)散布時には、周辺作物への飛散に注意する。 (3)隣接圃場への流入に注意する。
育苗箱施用 (食害防止)	パダン粒剤 4	14：カルタップ	60～100g/箱	(1)水産動植物への影響に注意する。 (2)使用時期：は種前又は移植当日
本田施用剤 (殺 貝)	スクミノン ジャンボたにしくん スクミンベイト 3	8(他)：メタアルテヒト 8(他)：メタアルテヒト un：燐酸第二鉄	1～4 kg/10a 1～2 kg/10a 2～4 kg/10a	(1)処理後は水を止めて浅水(3～4cm程度)で3～4日保つ。パダン粒剤 4 は魚毒に注意する。 (2)使用時期 スクミノン：収穫60日前まで(2回以内) ジャンボたにしくん：収穫60日前まで(2回以内) スクミノンベイト 3：発生時 パダン粒剤 4：収穫30日前まで(6回以内) (3)スクミノン、ジャンボたにしくん、スクミンベイト 3 を処理した場合は、他の本田施用剤は1週間程度経過してから散布する。
無人航空機による散布	スクミンベイト 3 スクミノン	un：燐酸第二鉄 8(他)：メタアルテヒト	2～4 kg/10a 1～4 kg/10a	
本田施用剤 (食害防止)	パダン粒剤 4 上記薬剤及びその混合剤(登録に留意する)	1：カルタップ	4 kg/10a	
水稲刈取後 施用剤 (殺 貝)	石灰窒素	その他：石灰窒素	20～30kg/10a	(1)石灰窒素による防除の注意事項参照(上記) (2)散布時には、周辺作物への飛散に注意する。 (3)隣接圃場への流入に注意する。

※ラベルに記載された使用方法等を遵守すること。

表中の成分名の前の数字（記号）は作用機作による分類コードを示す。

(13) 斑点米カメムシ類に対する殺虫剤の効果

表 薬剤の斑点米抑制効果

薬剤名	IRAC	カメムシ類（大型・小型）による斑点米抑制効果	
			大型カメムシ類による 斑点米抑制効果
スタークル/アルバリン（液・粉剤）	4A	◎	○
スタークル/アルバリン（粒剤）	4A	○～△	○
ダントツ（水溶剤・粉剤）	4A	○	△
エクシード（フロアブル・粉剤）	4C	◎	○
エミリアフロアブル	—	△	○
トレボン（乳剤・粉剤）	3A	○～△	○～△
キラップ（フロアブル・粉剤）	2B	○	○

- 1) ◎：効果高い ○：効果がある △：効果がやや低い (—)：データなし  
 2) 日植防試験結果（1996～2019）を基に作成（各試験の無処理区に対するの斑点米発生率で評価）  
 ◎：発生率を19.9%以下に抑制 ○：発生率を20.0～29.9%に抑制  
 ○～△：発生率を30.0～34.9%に抑制 △：発生率が35.0%以上

(注) 水稻の開花期防除に当たっては蜜蜂の危被害防止に努めること。

(14) ミナミアオカメムシの防除法

1 発生状況

昭和48年頃までは旧宇和島市以南までの発生に限られていた。しかし、平成17年に中予地域での発生が確認され、平成20年には東予地域でも発生が確認された。平成20～21年の水稻広域調査の結果、東予・中予平坦部のほぼ全域での発生を確認した。

2 被害

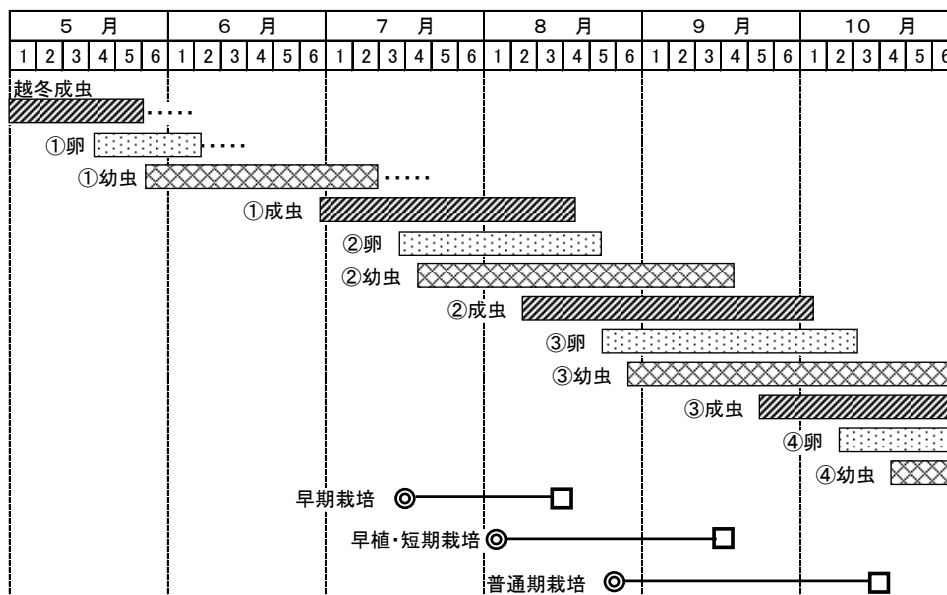
広食性であり、水稻・豆類・野菜・果樹等広範に寄生するが、特に大きな被害を受けるのは水稻と大豆である。水稻では、穂を吸汁し、他の斑点米カメムシ類に比べて被害度の高い斑点米を発生させる（1頭当たりの斑点米発生能力が高い）。大豆では、不稔莢や奇形莢となり減収に直結する。

3 発生生態

越冬は成虫態により、日当たりのよい常緑樹の樹冠内部や落ち葉間などで行われる。越冬成虫は4月～5月初めから活動し始める。その後、年間3～4世代発生し、11月下旬頃には越冬場所に移動する。また、近縁種のアオクサカメムシに比べて、年間発生世代数が多く、1頭の雌の産卵数（約170個）も多い。

世代を重ねる（時期を追う）に伴って、特に9月以降は、各世代や各発育段階の混発が進み、発生量も多くなる。このため、早期水稻が出穂する時期（夏期）に比べて、普通期水稻が出穂する時期（秋期）での発生が目立つようになる。

ミナミアオカメムシの発生経過（東予・中予モデル）



注1) ①は第1世代、②は第2世代、③は第3世代、④は第4世代  
 注2) ◎は出穂期、□は成熟期

水稻の育成ステージとミナミアオカメムシの世代の関係

	7月中旬	7月下旬	8月上旬	8月中旬	8月下旬	9月上旬	9月中下旬
	早期栽培		早植・短期栽培		普通期栽培		
	出穂期	出穂10～15日後	出穂期	出穂10～15日後	出穂期	出穂10～15日後	—
第1世代成虫	●	●	●	●			
第2世代幼虫		●	●	●	●	●	
第2世代成虫				●	●	●	●
第3世代幼虫						●	●
第3世代成虫							●

4 防除対策

- ① 出穂が進むにつれて寄生が目立つ傾向があるため、出穂期以降に圃場をよく観察して、発生を確認したら早めに防除する。近隣に大豆・えだまめがある場合は、特に発生に注意する。
- ② 早期・短期栽培の水稻ひこばえで越冬個体が増加するので、早めに鋤き込む。
- ③ 秋期に発生が多くなるため、特に普通期栽培では、出穂期防除、仕上げ防除を徹底する。
- ④ 早期水稻の刈取りが終了した近隣の普通期水稻において、本種の発生が目立つ傾向があるので注意する。
- ⑤ 粒剤を処理した場合には防除効果が不十分な場合があるので、その後の発生に注意する。

(15) 育苗時の生理障害

障害名	症状	耕種的対策	注意事項
白化現象	緑化された苗の葉に白いしま模様ができる（高温で発芽させ、低温下で緑化させた場合や、暗所発芽で伸びすぎた苗に強い光線を当てた場合に発生する。）。	(1) 緑化は屋内であるか、寒冷紗やシルバーボリなどで遮光と保温に努める。 (2) 高冷地や5月末までに育苗するには、緑化時にビニールトンネル等で保温する。 (3) 発芽温度は25～30℃とする。	緑化時期が遅れないようにする。
磷酸過剰症	葉に退色の斑点ができ、葉焼け症状に似た症状を示す(pH矯正のため過磷酸石灰等を多めに入れた場合によくでる。)	(1) 磷酸の使用量は1箱当たり1g以下とする。 (2) 特に磷酸肥料は、細かく砕き均一に土と混ぜる。	緩衝能の低い土壌では、磷酸が少量でも症状の出る場合がある。症状の軽いものは実害が無く、植付け可能である。
二段根苗症状	芽が芝のように伸び二段三段に発根する（箱を積み重ねて出芽させた時で、緑化の遅れた場合に出る。）。	(1) 発芽むらを避けるため、浸種は水を毎日替えるとともに催芽を行う。 (2) 出芽室内に温度むらがある場合は箱の積み替えをする。出芽したものから早く緑化させる。	出芽室は、温度むらのないよう設備する。障害苗の多い場合は、本田に植付けるのは好ましくない。
水分過多障害	箱を積み重ねて発芽させ緑化させようとして箱を広げると、根か葉か区別のつかないような芽だけが伸び、根の発育の悪い苗ができることがある。	(1) 播種後の灌水量が多すぎないように注意する（1箱当たり500ml程度）。 (2) 育苗培土は重粘土や微粘土では被害が大きいため砂壤土～壤土を使用する。 (3) 水分量が多すぎた場合は、広げて発芽させる。	発芽の際の水分の多過ぎは酸素の供給を悪くし、このため種子は体から酸素を出して必要な酸素を供給して発芽だけはするが、根にまで及ばないので、芽だけが伸びる苗になる。
土壌のアルカリ障害又は酸性土壌の障害	緑化後も苗がうす緑色で生育が劣る。また、強酸性の場合は反対に濃緑色となって生育は進まない場合もある。	(1) 床土の選定に当たっては、pHを測定して適正なものを選ぶ。一般的には山土などが良い。 (2) 野菜などを栽培した畑の土は石灰を多用したものが多いため注意する。 (3) pHが高い場合は、硫黄華(粉)又は希硫酸で矯正する。100kgの用土のpHを1下げるのに必要な硫黄華の量は、砂壤土で60g、壤土で80gである。 (4) 硫黄華による矯正は1か月以上前に行い、土壌と良く混和する。 (5) 育苗用土のpHが低すぎる場合はもみ殻くん炭等で矯正する。	多くの場合はアルカリの害が多く見られ、立枯病の原因にもなる（床土のpHは4.5～5.5くらいがよい生育を示す。pHが高くなると養分の吸収、生理機能が低下し、黄色となって生育は劣る。一方、pHが低すぎても生育機能が劣り、葉色は濃緑色を示し、生育は劣る。）。
種もみの持ち上り現象	箱育苗の出芽時に種もみが土の上に持ち上り、甚だしい場合には、根も露出して倒れ、芽生えが乱れるばかりでなく、その後ももみや根が乾燥するので、苗の生育が遅れて不揃いとなり、植付精度が劣って欠株や活着不良の原因となる。	(1) 床土水分の低い場合に発生が多いことから、床土水分の保持、床周辺の湿度を70～80%に低下させること。 (2) 覆土の厚さを4～5mmとするとともに、箱を7～8段積み重ねると、その重みで持ち上がり防止される。	土が硬い場合、ビニール等で密閉した場合、また床土水分が少なく周辺湿度の高い場合に多く見られる。
ムレ苗現象	箱内の苗が軟弱徒長で色があせたり、下葉が枯れたりして苗の素質が低下する。	(1) 育苗用土のpHが高い場合に発生しやすいので、好適pHに矯正する。用土の好適pHは4.5～5.5である。 (2) 温・湿度の変化、土質、施肥量、播種量等も関与しているので、適正な播種量と温度管理（早朝の低温等）に留意する。	播種量の多すぎる場合や高温多湿条件下で発生が多い。ムレ苗は、リゾプス属菌やムコール属菌を誘発する原因になる。
マット形成不良（根張りの悪い苗）	根の張りが悪く、根の塊であるマットの形成が不良なため、田植え作業中に苗が崩れて田植え作業に支障をきたす。	(1) 育苗中の灌水量が多い場合に発生しやすいので、できる限り少ない灌水で育苗する。 (2) 用土が硬い場合や粘質土壌で発生しやすいので、適正な用土を用いる。	早期栽培など低温時の温度変化が大きい場合に発生しやすい。夕方の灌水が多いと発生しやすいので夕方の灌水は行わない。

## (16) 水田雑草防除法

### 1) 水田雑草防除の留意点

#### (1) 総合防除

- ① 除草剤だけに頼らずに、手取り除草やヒエ穂の抜き取り、水稻収穫後の排水による乾田化や冬期耕起、畦畔の草刈り除草等の耕種防除を含めた総合防除に努める。
- ② クログワイ・セリ・オモダカ・コウキヤガラ・キシユスズメノヒエ・ミズガヤツリなど難防除雑草には、水稻刈取後や春期耕起前の茎葉処理除草剤、田植え直後の初期除草剤及び中・後期除草剤による除草剤体系処理や冬期の耕起、手取り除草、畦畔の草刈り除草等の耕種的方法の両面から防除を行う。

#### (2) 水田の整備

- ① 水田外への農薬(除草剤以外も含む)の流出を防止するとともに、安定した湛水状態を保ち除草剤の効果及び薬害の発生を抑える意味から、水稻栽培が始まる前に、畦畔や水尻(落水口)からの漏水を防止し、また、縦浸透が2cm以下になるように整備しておく。畦畔からの漏水が大きい場合は畦畔1m当たり8kg、縦浸透の大きい水田では10a当たり1～2tのペントナイト施用が有効である。
- ② 高低差のある水田では、湛水時に水面から露出するような高部で除草効果の著しい低下(特にタカサブロウ、タウコギ、ヒレタゴボウ、クサネムなどの大型一年生広葉雑草の繁茂)、苗が水没するような低部で水稻の生育抑制や欠株等の薬害発生があるので、水田の均平に努める。
- ③ 代かきが均一にできない場合、土壌の密度が高く土が集まっている部分では植え穴の戻りが悪く、イネの根が露出して薬害を生じることがあるので、代かきを丁寧に土壌の均一化、均平化を図る。
- ④ 稲わらなど有機物の分解に伴う土壌の強還元による除草剤の薬害を防ぐため、稲わらの切込み田では石灰窒素の施用と冬期の鋤込を励行して腐熟化を進める。また、牧草の地下部や野菜等前作の他作物の残渣が多い場合も強還元となるので注意する。さらに、同様の理由で水稻作前の春期の有機質多量施用を避ける。

#### (3) 健苗育成と適正田植え

- ① 軟弱苗及び浅植・深植では薬害が出やすいので、健苗の育成に努める。
- ② 田植機の植付け爪の磨耗やその他の理由により、田植機の植付け精度が低下すると、浮苗の発生や根部の露出で薬害の発生要因になるので、田植え前に植付け爪の交換を行うとともに、適正な田植えができるように田植機の点検・調整を行う。
- ③ 浅植えや根部の露出は薬害の発生要因になり、深植えでは水稻の分けつ抑制、生育抑制となるので、2～3cmの適正な深度に植付ける。
- ④ 田植え時の土壌が柔らかすぎる場合は流れ苗や根の浮き上がり、硬過ぎる場合は植え穴の戻りが悪くなって、どちらも薬害発生要因になるので、適正な土壌硬度で移植する。

#### (4) 水田除草剤使用上の注意事項等

- ① 除草剤によっては、処理時の高温や低温、深水や浅水など様々な条件で薬害が発生することがあるので、除草剤の特性を熟知するとともに水田の条件等を把握し、適正な使用に努める。
- ② 除草剤の使用に当たっては、水田の占有草種に適応した除草剤を選定する。また、雑草発生が少ない場合や発生草種が少ない場合は、成分数の少ない剤や少量散布など使用薬量を減らすよう努める。
- ③ 同一除草剤の連年使用は特定草種の占有化が進む場合があるので、3～5年毎に特性の異なった除草剤に変更する。
- ④ 除草剤の種類や銘柄によって使用方法や量及び時期が異なるので、容器やラベル等に記載のある使用基準を遵守する。
- ⑤ 適期・適量の均一散布に心がけ、風の強い時は散布や拡散むらができるので中止する。
- ⑥ 大雨によるオーバーフローは除草効果の著しい低下のみならず、環境の汚染につながるので、散布後大雨が予想される場合は、除草剤処理を延期する。
- ⑦ 湛水処理除草剤では水深を3～5cmにして、水口・水尻を止めてから散布する。除草効果を安定させるとともに水田外への成分の流出を防ぐため、処理後少なくとも7日間は完全止水し、3～5日間は湛水状態を保ち(事前の代かきや漏水対策が重要)、かけ流しや田面露出のないようにする。
- ⑧ 処理後に(7日以上置いて)再入水する場合は、一気に多量の入水をせずに静かに行う。

- ⑨初期除草剤のうち、水稻の移植前にも使用することができる除草剤を移植前に使う場合は、従来は「植代時(後)から移植前4日まで」となっていたが、水産動植物の被害防止や環境への影響の観点から、使用時期は「植代時から移植前7日まで」とし、田植え6日前以降には使用しない。(初期剤の一般的注意事項を参照のこと)
- ⑩発生時期が遅れるクログワイ、オモダカと一年生雑草の共生田や代かきから田植までの期間の長い水田では、初期除草剤と中・後期除草剤との体系処理が必要になることがある。
- ⑪多くの除草剤がれんこん、くわい、せり、いぐさ、さといもなどの生育を阻害する恐れがあるので、これらの作物の生育期に隣接田で使用する場合は、除草剤や除草剤を含む水が入らないように特に注意する。
- ⑫有用植物の生育を阻害する恐れがあるので、除草剤を散布した水田の水を作物に灌水しない。
- ⑬下記のような条件では、多くの除草剤で生育抑制、分げつ抑制などの薬害を生ずるおそれがあり、特にこれらの条件が重なる場合は、薬害が助長されるので注意する。
  - ・異常高温の時、あるいは散布後数日以内に梅雨明けになるなど異常高温(29℃以上)が数日続く時
  - ・活着遅延を生ずるような異常低温(15～16℃以下)が数日続く時
  - ・砂質土壌の水田及び漏水の大きな水田(減水深2cm/日以上)
  - ・軟弱徒長した苗を移植した場合
  - ・有機物が分解して土壌が異常還元になった水田
  - ・極端な浅植、浮き苗等イネの根が露出している場合
  - ・田植機の植え穴のもどりが悪い水田
- ⑭ヒエ剤(主としてノビエに効果のある成分)のオキサジクロメホン、エスプロカルブ、カフェンストロール、メフェナセットなどの成分を含む除草剤は、上記条件のうち成分がイネの根に直接接触するような状況で著しい薬害を生じることがあるので注意する。
- ⑮水稻除草剤では使用時期の登録を、～ノビエ〇葉期までとしているが、特に初期剤や初中期一発除草剤等では、気象・圃場条件や生育ステージのバラつきにより生育が進んだノビエ個体が混在したり、ホタルイ、コナギなど他の雑草の生育ステージが進んで除草効果が大幅に低下したりすることがあるので、使用時期の登録範囲内でやや早めに使用するのが良い。

#### (5) 水産動植物に関する注意事項

- ①除草剤の使用に当たっては魚介類に対する危害を未然に防ぐため、除草剤散布後、水が流出することのないよう天気予報、地域の実情を十分勘案して使用する。特に、河川・湖沼・養魚池・海域付近で、一時に広範囲に散布される場合には注意が必要である。
- ②除草剤の処理後7日程度は完全に止水し、水尻や畦畔等から薬剤を含む水が流出しないようにする。
- ③散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。また、空容器、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。

#### (6) 育苗箱施用剤との誤用回避及び誤用時の対策

- ①除草剤の粒剤を育苗箱施用剤と誤用する事故が県内でも見受けられる。近年、除草剤の粒剤の袋には誤用を回避するような記述が増えてはいるが、誤用は後を絶たない。施用前に必ず袋を確認すること。
- ②近年、田植機に専用の散布機を装備して散布する田植え同時処理の可能な除草剤使用が多くなり、除草剤と育苗箱施用剤を同時に扱う機会が増えており、誤用が懸念される。施用前に必ず袋を確認すること。
- ③除草剤や育苗箱施用剤使用にあたっては、容器袋やラベルに書かれてある登録内容や注意事項を必ず読んで確認のうえ、記載事項を守って使用する。
- ④除草剤の粒剤を育苗箱施用剤と誤用した場合、除草剤の種類や処理量にもよるが、植付け苗の枯死、分げつ抑制、生育抑制、出穂遅延などの症状が発生し、30%以上の減収、品質低下は免れないため、下記のような対策をとって植え直す方が良い。
  - ・除草剤の粒剤を育苗箱施用剤と誤用した水田は、良く乾かして田面を太陽光にさらして除草剤処理層を破壊する。
  - ・イネへの安全性を示す具体的な試験データ等は無く、誤用した除草剤の成分の種類や量で差が大きいと思われるが、誤用後できる限り長く時間を置いてから代かき、田植えする。
  - ・入水後代かきを入念に行って、再度田植えする。その場合、できる限り健苗を用いる。
  - ・除草剤を含む代かき水が水田外に排出されないように注意する。

2) 稚苗機械移植栽培雑草防除法

① 水稲除草剤特性表(基本薬剤)

系 統	No	成 分 名	残効	移動	殺 草 メ カ ニ ズ ム と 薬 害							
					作用性	作用部位	薬害の症状	薬害の条件				
オキサゾリジジオン系	1	ペントキサゾン	長	極小	非ホルモン接触型、光要求性(葉緑素生成阻害)	幼芽部、根部に作用、茎葉部	葉鞘褐変、生育抑制	・砂質土壌・火山灰土壌 ・苗が水没するような深水・軟弱徒長苗 ・極端な深植・極端な高温(29℃以上)				
オキサジノン系	2	オキサジクロメホン	極長	小	非ホルモン吸収移行型、ジベレリン代謝活性阻害、茎葉部のクロロシスと生育停止	根部、茎葉基部から吸収	生育抑制、生育遅延、褐変	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出 ・田植え後の土のもどり不良・深植 ・低温(15~16℃以下)、高温(29℃以上)				
イノキサゾリン系	3	フェノキサスルホン	長	小	非ホルモン吸収移行型、クチクラ層の超長鎖脂肪酸の合成酵素阻害	根部、茎葉基部、茎葉部から吸収	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植 ・田植え後の土のもどり不良				
カーバメート系	4	エスプロカルブ	長	小	非ホルモン吸収移行型、オーキシン活性・タンパク質合成阻害	根部、幼芽部、茎葉部から吸収され生長点に作用	生育抑制、草丈抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・極端な遅元状態(ガス発生田) ・軟弱徒長苗・活着不良				
	5	ベンチオカーブ	中	小								
キノン系	6	アミノクロロナフトキン(ACN)	短	小	非ホルモン吸収移行型、酸化力、酸化的リソ酸化解除、光合成阻害	幼芽部、茎葉部から吸収され、作用点に移行	褐変	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・水稲への安全性は高い(藨類に卓効)				
酸アミド系	7	ブタクロール	長	小	非ホルモン吸収移行型、超長鎖脂肪酸合成阻害	幼芽部、根部から吸収され、幼芽部の伸長を抑制	葉身、葉鞘の伸長抑制、わい化症状	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・浅水(田面露出)・軟弱苗 ・極端な遅元状態(ガス発生田) ・極端な浅植え、根部露出				
	8	プレチラクロール	中長	小								
	9	テニクロロール	長	小								
	10	メフェナセツト	長	極小								
	11	プロモブチド	長	中					非ホルモン吸収移行型、成長点の細胞分裂阻害	根部、幼芽部から吸収、茎葉部の生長点に作用	流れ葉、生育抑制、葉色の黄化	・田植え後の土のもどり不良 ・高温(29℃以上)・急激な温度変化
スルホニルウレア系(SU系)	12	イマゾスルフロ	長	小	非ホルモン吸収移行型 アミノ酸合成阻害、ALS阻害	茎葉・根部から吸収され、作用点に移行	葉色の淡化葉身細化、分げつ抑制、根部抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出 ・田植え後の土のもどり不良 ・高温(29℃以上)・急激な温度変化				
	13	シクロスルファミロン	極長	小中								
	14	ピラゾスルフロエチル	長	中								
	15	フルセトスルフロ	長	中								
	16	ペンシルフロメチル	極長	小								
	17	ハロスルフロメチル	長	中								
	18	プロピリスルフロ	長	小								
スルホニアニリド系	20	ピリミスルファン	長	中	非ホルモン型、移行型、アミノ酸生成阻害、ALS阻害	根部、茎葉基部から吸収され、生長点に作用	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出				
	21	トリアファモン	極長	極小~小	ALS阻害	根部、茎葉基部	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出				
スルホニアミド系	22	ペノキスラム	中	中	アミノ酸生成阻害、ALS阻害、成長停止、ネクロシス	茎葉部から吸収作用点に移行	生育抑制、生育遅延	・出穂期散布 ・軟弱苗・重複散布				
ダイアジン系	23	バンタン	-	中	非ホルモン移行型(光合成阻害)	茎葉・根部から吸収され、作用点に移行	葉の黄化(緑失)、斑点状葉、灰褐色葉先枯れ	・フロバニル剤との10日以内の近接散布、混用散布で薬害が助長されることがある。 ・通常の処理量、処理条件では水稲への薬害ほとんど認められない。				
テトラゾリン系	24	フェントラザミド	長	極小	非ホルモン移行型、細胞分裂、伸長阻害	根部、幼芽部、生長点に作用	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出				
トリアゾリン系	25	イブフェンカルバゾン	極長	極小	非ホルモン吸収移行型、葉身、葉鞘の身長阻害、葉の濃緑化、捻転	根部、茎葉基部から吸収され、細胞身長阻害	生育抑制、濃緑化	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱な苗を移植した水田 ・極端な浅植の水田及び浮き苗の多い水田				
	26	カルフェントラゾンエチル	中	小	幼芽部、茎葉部から吸収、白化	幼芽部、茎葉部から吸収され、作用点に移行	発芽阻害、白化、生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱な苗を移植した水田 ・極端な浅植の水田及び浮き苗の多い水田				
トリアジン系	27	ジメタメトリン	極長	小	非ホルモン吸収移行型(光合成阻害)	根部・茎葉部から吸収され、作用点に移行	葉枯れ、葉先枯れ、下葉枯れ、葉鞘褐変 生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・極端な遅元状態(ガス発生田)・活着不良 ・浅水(田面露出)・軟弱苗・深植 ・高温(29℃以上)・急激な温度変化				
	28	シメトリン	中長	小中								
トリアゾール系	29	カフェンストール	長	極小	非ホルモン吸収移行型(細胞分裂阻害)	茎葉・根部から吸収され、作用点に移行	生育抑制、分げつ抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・浅水・極端な浅植え、根部露出 ・極端な遅元状態(ガス発生田)・高温(29℃以上) ・田植え後の土のもどり不良・急激な温度変化				
トリクトン系	30	テフリトリオン	長	中	非ホルモン吸収移行型 HPPD阻害(クロロフィル合成阻害による白化)、光合成伝達阻害	根部、幼芽部、茎葉基部から吸収して新葉に作用	白化、葉枯れ 分げつ抑制 生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出				
	31	ペンゾピシクロン	極長	極小								
	32	メントリオン	長	小					本酵素活性を阻害して色素生成に影響	根部、茎葉より吸収、白化症状を発現して枯死	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出 ・著しい低温・飼料用イネなど
	33	フェンキナトリオン	極長	小中					4-HPPD阻害	根部、基部	生育抑制	
尿素系	34	クミルロン	長	極小	非ホルモン吸収移行型、細胞分裂および伸長阻害	根部から吸収され、発根抑制、根伸長阻害、生育抑制	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・活着不良・極端な深植・低温(15~16℃以下) ・グライムロンにはスルホニルウレア系除草剤などによる薬害を軽減効果				
	35	ダイムロン	長	小								
ピラゾール系(ダイアゾール系)	36	ピラゾレート	長	小中	非ホルモン吸収移行型、葉緑素の生成を阻害、HPPD阻害(クロロフィル合成阻害による白化)	幼芽部、根部から吸収、処理後に展開する新葉の白化	クロロシス(白化)	・砂質土壌 ・高温(29℃以上)				
	37	ピラゾキシフェン	長	小								
	38	ピラクロニル	長	極小								
	39	ペンゾフェナップ	長	小								
ピリミジルカルボキシ系	40	ピリフタリド	長	極小	非ホルモン吸収移行型 アミノ酸生成阻害、ALS阻害	根部、茎葉基部及び茎葉部から吸収され作用点に移行	生育の抑制・遅延 分げつ抑制葉身細化根部抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え				
	41	ピリミノバックメチル	長	中								
フェノキシプロピオン酸系	42	シハロホップブチル	-	小	非ホルモン型、移行型、細胞分裂阻害、脂肪酸合成阻害	茎葉部から吸収され、生長点に移行	水稲に極めて安全	・通常の処理量、処理条件では水稲への薬害はほとんど認められない。 ・初期生育の抑制				
	43	メタミホップ	中	小								
フェノキシ系	44	MCP	長	小	ホルモン移行型 オーキシン作用攪乱による異常生長	幼芽部、根部から吸収され、作用点に移行	分げつ抑制、ロール葉(筒状葉)、生育抑制、株開張、瘤状根、下葉枯れ	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・活着不良・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出・深植 ・低温(15~16℃以下)(筒状葉) ・高温(29℃以上)				
	45	2,4-PA	短	中								
	46	クロメプロップ	長	中					生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・活着不良		
フェノキシピリダジン系	47	シクロピリモレート	長	極小	HST阻害	茎葉部から級数され、展開新葉の白化後枯殺	クロロシス(白化)	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・極端な浅植など				
ペンゾフランニアルキルスルホン酸系	48	ペンプレセート	極長	小	非ホルモン型、移行型、細胞分裂阻害、脂肪酸合成阻害	根部、茎葉基部から吸収され、生長点に作用	生育抑制、濃緑化	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出				
アリルピコリネート系	49	フロルピラウキシフェンベンジル	長	小	ホルモン移行型 オーキシン作用攪乱による生育阻害	茎葉部から吸収され、生長点に作用	幼穂形成以降使用時:葉先黄化、止葉下垂	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm/日以上) ・軟弱苗・極端な浅植え、根部露出				



No	成分名	毒性 人畜	一年生雑草					多年生雑草							
			ノ ビ エ	カ ヤ ツ リ グ サ	コ ナ ギ	そ の 他 広 葉	藻 類	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ	ミ ズ ガ ヤ ツ リ	ウ リ カ ワ	ク ロ グ ワ イ	オ モ ダ カ	ヒ ル ム シ ロ	
1	ベントキサゾン	普	●	●	●	●	●	◎	◎	◎	●	◎	◎	△	
2	オキサジクロメホン	普	●	●	△	△		△	△	△	△				
3	フェノキサスルホン	普	●	●	●	◎		●	◎～○	○		△	△		
4	エスプロカルブ	普	●	●	◎～○	◎～○		●	◎	○	△				
5	ベンチオカーブ	普	●	●	○	◎		●	◎	○	△	△	△		
6	アミノクロナフトキン	普	△	○	○～◎	○～◎	●	○	△	△	●	△	◎	●	
7	ブタクロール	普	●	●	◎	●		●	●～◎	◎	△	△	△		
8	プレチラクロール	普	●	●	◎	●		●	●	◎	△				
9	テニルクロール	普	●	●	◎	◎		●	◎	◎	△	△	△		
10	メフェナセット	普	●	●	●	○		●	○	○	△	△	△		
11	プロモブチド	普	◎	●	●	○		●	●	●～◎	○	◎	○		
12	イマゾスルフロ	普	○	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	◎	●	
13	シクロスルファミロン	普	○	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●	
14	ピラゾスルフロ	普	○～◎	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●	
15	フルセトスルフロ	普	●	◎	●	○	◎	◎	●	△	◎	○	○	●	
16	バンスルフロ	普	○	●	●	●	◎	●	●	●	●	●	◎	●	
17	ハロスルフロ	普	○～◎	●	●	●		●	●	●	●	◎	●		
18	プロピリスルフロ	普	●	●	●	●	◎	●	●	●	●	●	●	●	
19	メタゾスルフロ	普	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●		
20	ピリミスルファン	普	●	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●	
21	トリアファモン	普	●	●	△	△		●	●	●	●	●	●		
22	ペノキスラム	普	●	●	●	●	◎	●	●	●～◎	●	●	●	●	
23	バンタゾン	普	△	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	
24	フェントラザミド	普	●	●	◎	◎		●	○	○	○	△	△		
25	イプフェンカルバゾン	普	●	●	◎～●	◎		●	◎	◎	△	△	△		
26	カルフェントラザンエチル	普	◎	●	●	●		●	●	●	●	○～◎	●		
27	ジメタメトリン	普	◎	●	●	●	●	●	◎	◎	△			●	
28	シメトリン	普	◎	◎	●	●	●	◎	○	○	◎	△	△	●	
29	カフェンストール	普	●	●	●～◎	◎		●	◎～○	◎～○	△	△	△		
30	テフリルトリオン	普	◎	●	●	●		●	●	●	◎	●	●	●	
31	バンブビシクロ	普	●	●	●	◎		●	●	●	○	○	△	●	
32	メソトリオン	普	△	●	●	●		●	●	○	○				
33	フェンキノトリオン	普	△	●	●	●		●	●	●	●				
34	クミロン	普	○	●	△	△		●	●	●	△	●～◎	△		
35	ダイムロン	普	○	●	◎	◎		●	●	◎	△	◎	△		
36	ピラズレート	普	●	●	●	◎		◎	◎	◎	●		●	●	
37	ピラゾキシフェン	普	●	●	●	◎		◎	◎	◎	●		●	●	
38	ピラクロニル	普	●	●	●	●		●	●	◎～○	◎	◎	●～◎	◎	
39	バンブフェナップ	普	◎	◎	●	●		◎	○	○	●	△	◎	●	
40	ピリフタリド	普	●	◎	△	●～◎		◎	○	◎	△				
41	ピリミノバックメチル	普	●	△	△	△		△	△	△	△	△	△		
42	シハロホップ	普	●	△	△	△		△	△	△	△	△	△		
43	メタミホップ	普	●	△	△	△		△	△	△	△	△	△		
44	M C P	普	△	◎	◎	◎	○	○	●	◎	◎		◎		
45	2,4-PA	普	△	◎	◎	◎	○	○	●	◎	◎		◎		
46	クロメブロップ	普	△	●	●	●		●	●	△	◎				
47	シクロピリモレート	普	●～◎	●	●	●～◎			●～◎	●	◎		●		
48	バンプレセート	普	◎	△	△	△		●	◎	●		●	◎		
49	フロルピラウキシフェンベンジル	普	●	●	●	●				●	●		●		

注:●極大(残草量0～10%)◎大(残草量11～20%)○中(残草量21～40%)△小(残草量41%以上)(公財)日本植物調節剤研究協会資料等参照

②除草剤使用方法(10a当り)  
(ア)初期剤

農薬名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 ／10a	使用上の注意
エリジャンジャンボ	ブレチラクロール 15.0	植代後～移植前7日 又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	300g (10パック)	(1)異常高温や異常低温時に葉害を助長することがある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)コナギの多発田では効果が劣ることがある。
エリジャン乳剤	ブレチラクロール 12.0	植代後～移植7日前まで 移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	300mL	(1)異常高温や異常な低温時に葉害を助長することがある。 (2)300mLの移植直後～ノビエ1葉期までは普通期栽培地帯のみ。 (3)コナギの多発田では効果が劣ることがある。 (4)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
エリジャンEW乳剤	ブレチラクロール 38.5	移植時	500mL	(1)異常高温や異常な低温時に葉害を助長することがある。 (2)コナギの多発田では効果が劣ることがある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)100mLの原液か、100mLの原液を最大500mLの散布水量となるよう希釈してから使用。
		移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	100mL	
草笛ジャンボ	ベントキサゾン クミロン 15.0	植代後～移植前7日まで 又は 移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	1kg～ 500g (20～10 パック)	(1)移植前に散布する場合は、散布後7日以上の間隔をあけて苗を移植する。 (2)カブレやすい体質の人は取り扱いに十分注意する。
		草笛フロアブル	ベントキサゾン クミロン 8.2 27.4	
サインヨシフロアブル	ベントキサゾン 8.6	植代時(移植7日前まで)	500mL	(1)田植え同時処理が可能。
サキドリEW	ブタクロール 12.0 ベントキサゾン 4.0	植代後～移植前7日 又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	500mL	(1)梅雨明け等による異常高温時に葉害を助長することがある。 (2)移植後散布の場合は、水稻になるべくかからないようにする。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
デマカットフロアブル	ベントキサゾン ダイムロン 7.2 28.0	移植時	500mL	(1)植代時の使用は、普通期栽培地帯のみ。
シング乳剤	ブレチラクロール ピリプチカルブ 8.0 12.0	植代時(移植7日前まで)	500mL 300mL 少量散布	(1)異常高温や異常な低温時に葉害を助長することがある。 (2)移植後散布の場合は、水稻になるべくかからないようにする。 (3)蚕に影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにする。 (4)トラクター等の塗装面にかかるると変色するおそれがある。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (6)300mLの植代時～移植前7日まででは普通期栽培地帯のみ。 (7)300mLの少量散布は、移植後に使用する除草剤との体系で使用使用する。
		植代後～移植7日前まで 植代時(移植7日前まで) 移植直後～移植後5日(ノビエ1葉期まで)		
マットタブジャンボ	クミロン テニルクロール 18.0 3.0	植代後～移植前7日 又は移植後1日～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	500g 10個	(1)体系処理で長い効果が期待できる。 (2)コナギの多発田では効果が劣ることがある。
		ピラクロン1キロ粒剤 兆1キロ粒剤	ピラクロニル 1.8	
ピラクロンフロアブル 兆フロアブル	ピラクロニル 3.6	植代後～移植7日前 又は移植直後～ノビエ1.5葉期 但し、移植後30日まで 移植時	500mL	(1)多年生雑草は生育段階によって効果にふれが出る。 (1)田植え同時処理が可能。

初期剤の一般的注意事項

- (1)農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、その内容を遵守する。
- (2)水稻の田植え前にも使用することができる除草剤を田植え前に使う場合は、除草剤散布後7日以上の間隔をあけて田植えする。
- (3)農薬のラベルに使用時期が「植代時(後)から移植前4日まで」と書かれている除草剤でも、農業の河川等への流出を低減するため、使用時期は「植代時(後)から移植前7日まで」とし、移植前6日以降には使用しない。
- (4)代かき～田植え前7日に処理した水田の水は絶対に落水せず、自然に減水するのを待って田植えする。
- (5)水稻の移植前に使用することができる除草剤でも、河川等の汚濁防止の観点からできれば移植前には使用しないようにする。
- (6)雑草多発田や難防除雑草発生田では、残草が多くなることもあるので移植後に使用する有効な後処理剤との組み合わせで使用。
- (7)初期剤は主として雑草の発生前から発生始期に有効なので、雑草(特にノビエ)の処理時期を失ないように散布する。
- (8)フロアブル及びジャンボ剤はそれぞれのタイプの注意事項を参照のこと。

(イ)初・中期一発処理剤

●粒剤タイプ

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 ／10a	使用上の注意
アカツキ1キロ粒剤	フェノキサゾルホン 20.0 フェンキトリオン 3.0 メタズルフロン 1.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能
アールタイプ1キロ粒剤	ピラズレート 10.0 ペンゾピシクロン 2.0 メタズルフロン 0.6	移植後3日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗雑草にも効果が高い。
アピログロウMX1キロ粒剤	ピラズルフロンエチル 0.3 ピリフタリド 1.5 ブレチラクロール 4.5 メソトリオン 0.9	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能 (3)飼料用イネ等の一部に枯死する葉害を生じることがある。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意	
イッテツ1キロ粒剤	イマゾスルフロ ン カフェンスト ロール ベンゾピシク ロン	0.9 3.0 2.0	移植後5日～ノ ビエ2.5葉期 但し、移植後 30日まで	1kg	(1)カフェンスト ロールの薬害に 関する注意事項 を遵守する。 (2)飼料用イネ等 の一部に枯死す る薬害を生じる ことがある。 (3)水産動植物に 対する注意事項 を遵守する。
イッポンD1キロ粒剤51	ベンスルフロ ンメチル ピラクロニ ル プロモブチ ド ダイムロン	0.51 2.0 6.0 4.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。
イネキング1キロ粒剤	ピラゾレ ート ピラクロニ ル ベンゾピシク ロン	10.0 2.0 2.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時 処理が可能 (3)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。 (4)飼料用イネ等 の一部に枯死す る薬害を生じる ことがある。
イノーバDX 1キロ粒剤51	ベンスルフロ ンメチル フェントラザ ミド プロモブチ ド ダイムロン	0.51 2.0 7.5 4.5	移植時・移植直 後～ノビエ2葉 期 但し、移植 後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。
エンペラー1キロ粒剤	ピラクロニ ル ピリミノバク メチル フェンキトリ オン	2.0 0.75 3.0	移植時・移植直 後～ノビエ3葉 期 但し、収穫 60日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草 や広葉雑草、イ ボクサ、カヤツ リグサ科雑草も 効果が高 (2)田植え同時 処理が可能
カウントダウン1キロ粒剤 カウシルエナジー1キロ粒剤 アバンティ1キロ粒剤	トリアファモ ン フェンキトリ オン フェントラザ ミド	0.5 3.0 3.0	移植直後～ノ ビエ3.5葉期 但し、移植後 30日まで	1kg	(1)広葉雑草、 イボクサ、カヤ ツリグサ科雑草 も効果が高 く、田植同時 処理可能。 (2)後作物とし て、なす、たま ねぎ及びびさや えんどうを栽培 しない。 (3)いぐさ、れん こん、せり、く わいの生育を阻 害する恐れがあ るので注意する。
カイリキZ1キロ粒剤	イブフェンカ ルバゾン テフリトリ オン プロピルフル オン	2.5 2.5 0.9	移植時・移植直 後～ノビエ3葉 期 但し、移植 後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性 のホタルイ、オ モダカ等にも 効果が高い。 (2)田植え同時 処理が可能。
カチボン1キロ粒剤51	イブフェンカ ルバゾン テフリトリ オン ベンスルフロ ンメチル	2.5 2.0 0.51	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)SU抵抗雑草 にも効果が高い。 (3)多年生雑草 にも効果が高い。
カラット1キロ粒剤 キラリ1キロ粒剤	イマゾスル フロ ン テフリトリ オン ピラクロニ ル	0.09 2.0 2.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)SU抵抗雑草 にも効果が高い。 (3)イボクサ、 クサネム、ヒメ ソハギなどの特 殊雑草にも効果 を有する。
キマリテ1キロ粒剤	イブフェンカ ルバゾン テフリトリ オン	2.5 3.0	移植時・移植直 後～ノビエ3葉 期 但し、移植 後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)SU抵抗雑草 にも効果が高い。
銀河1キロ粒剤	メタゾスル フロ ン ダイムロン ピラクロニ ル	1.0 10.0 2.0	移植時・移植直 後～ノビエ3葉 期。但し、収 穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草 も効果が高い SU系剤 (2)多年生雑草 にも効果が高い。 (3)初期剤と体 系処理の中後期 剤として使用可 能
クサツタ1キロ粒剤	ピラゾレ ート プレチラク ロール プロモブチ ド ジメタトリ ン	12.0 4.5 6.0 0.6	移植時・移植直 後～ノビエ2葉 期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時 処理が可能 (3)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。 (4)SU系抵抗雑 草にも効果があ る。
クサツタ粒剤	ピラゾレ ート プレチラク ロール プロモブチ ド ジメタトリ ン	4.0 1.5 2.0 0.2	移植時・移植直 後～ノビエ2葉 期 但し、移 植後30日まで	3kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時 処理が可能 (3)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。
ゴエモン1キロ粒剤	イマゾスル フロ ン イブフェンカ ルバゾン プロモブチ ド	0.9 2.0 9.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)SU抵抗雑草 にも効果が高い。
ゴーサイン粒剤	イマゾスル フロ ン エスプロカ ルブ ダイムロン	0.3 7.0 5.0	移植後5日～ノ ビエ2.5葉期 但し、移植後 30日まで	3kg	(1)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。 (2)エスプロカ ルブの薬害に關 する注意事項を 遵守する。
コメツ1キロ粒剤	メタゾスル フロ ン テフリトリ オン ピラクロニ ル	0.6 2.0 2.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植	1kg	(1)SU抵抗雑草 も効果が高い SU系剤
サラブレットKAI 1キロ粒剤	オキサジク ロメホン ピラクロニ ル イマゾスル フロ ン	1.4 2.0 2.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)効果の発現 が非常に速い。
サラブレットGO 1キロ粒剤	オキサジク ロメホン ピラクロニ ル イマゾスル フロ ン プロモブチ ド	0.6 1.0 0.9 9.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)効果の発現 が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑 草や多年生雑草 にも効果高い。
ジェイソウル1キロ粒剤	シクロピリ モレート ピラゾレ ート フェントラザ ミド	3.0 6.0 3.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)ALS阻害抵 抗性雑草に効果 が高い。 (3)ノビエに對 して長期残効を 示す。
ジャイロ1キロ粒剤	イブフェンカ ルバゾン ベンゾピシク ロン ペンゾエナ ップ	2.5 3.0 8.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時 処理が可能 (3)飼料用イネ等 の一部に枯死す る薬害を生じる ことがある。
ショウリョクS粒剤	イマゾスル フロ ン カフェンスト ロール プロモブチ ド ダイムロン カルタッ プ	0.3 0.7 3.0 1.7 5.3	移植直後～ノ ビエ2葉期 但 し、移植後30 日まで	3kg	(1)カフェンスト ロールの薬害に 関する注意事項 を遵守する。 (2)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。 (3)スクミリン ゴガイ、フタオ ビコヤガにも登 録あり。(カルタ ップ)
シングキ1キロ粒剤	フェノキトリ オン フェントラザ ミド	3.0 3.0	移植時・移植直 後～ノビエ2.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)ノビエに對 して長期残効を 示す。
シンスイズ1キロ粒剤	オキサジク ロメホン フェンキトリ オン プロピルフル オン プロモブチ ド	0.8 3.0 0.9 9.0	移植時・移植直 後～ノビエ3.5 葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)オキサジク ロメホンの薬害 に關する注意事 項を遵守する。 (2)田植え同時 処理が可能。 (3)SU系抵抗性 雑草を含むオモ ダカ・ミアオイ ・コナギ・ホタル イにも効果が高 い。
ゼータジャガー1キロ粒剤	フェンキトリ オン プロピルフル オン ペントキサ ゾン	3.0 0.9 2.0	移植時・移植直 後～ノビエ4葉 期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)多年性難防 除雑草に高い効 果。 (3)ノビエに對 して長期残効を 示す。
ゼータタイガー1キロ粒剤	ペントキサ ゾン プロピルフル オン プロモブチ ド	2.0 0.9 9.0	移植時・移植直 後～ノビエ3葉 期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)SU抵抗雑草 にも効果が高い。
ゼータプラス1キロ粒剤	フェンキトリ オン プロピルフル オン	3.0 0.9	移植時・移植直 後～ノビエ4葉 期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時 処理が可能。 (2)多年性難防 除雑草に高い効 果。 (3)SU抵抗雑草 にも高い効果あ る。
センイチMX1キロ粒剤 フルパワーMX1キロ粒剤	ピラクロニ ル フルセトスル フロ ン メソトリ オン	2.0 0.2 0.9	移植後5日～ノ ビエ3.5葉期 但し、移植後 60日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草 も効果が高い SU系剤。 (2)散布後の低 温、急激な気温 の上昇により薬 害発生のおそれ がある。 (3)砂質土壌、軟 弱苗、極端な浅 植は薬害の発生 の恐れがある。 (4)魚類に對する 注意事項を特に 遵守する。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
ディオーレ1キロ粒剤	オキサジクロメホン 0.4 テフルトリオン 2.0 メタズスルフロ 1.0	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
天空1キロ粒剤	フェントラザミド 3.0 ベンゾピシクロン 3.0 メタズスルフロ 0.6	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ドニチS1キロ粒剤 マクダス1キロ粒剤	イマズスルフロ 0.9 フェントラザミド 3.0 プロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
バッチリ1キロ粒剤	イマズスルフロ 0.9 プロモブチド 9.0 ピラクロニル 2.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。
バットウZ1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 プロピリスルフロ 0.9 ベンゾピシクロン 2.0	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
パンチャー1キロ粒剤	ベンゾフェナップ 8.0 フェントラザミド 3.0 ペンプレセート 5.0	移植後5日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	1kg	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)水産動植物に対する注意事項を遵守する。
ベッカク1キロ粒剤	ピリミスルフロ 0.50 フェノキサスルホン 2.0 フェンキナトリオン 3.0	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移植 後30日まで	1kg	(1)SU抵抗雑草にも高い効果がある。 (2)田植え同時処理が可能 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ボデーガード1キロ粒剤	テフルトリオン 3.0 フェントラザミド 3.0	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移 植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗雑草やイボクサ、クサネムにも効果が高い非SU系剤 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マスラオ1キロ粒剤	イマズスルフロ 0.90 ピリミノバクメチル 0.6 フェンキナトリオン 3.0	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移植 後30日まで	1kg	(1)SU抵抗雑草を含むホタルイ・コナギ・マスアオイ・オモダカにも効果がある。 (2)田植え同時処理が可能
ムソウ1キロ粒剤	ピリミスルフロ 0.5 メフェナセト 12.0	移植後3日～ノビエ2.5 葉期但し、移植後30日 まで	1kg	(1)非SU系剤でSU系抵抗雑草にも効果高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
モーレツ1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 ベンゾピシクロン 2.0 ペンプレセート 5.0	移植後5日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	1kg	(1)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (2)必要に応じ後処理剤との組み合わせで使用
ラオウ1キロ粒剤	フェンキサスルホン 1.5 ダイムロン 6.0 フェンキナトリオン 2.5 ペンシルフロメチル 0.75	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、植 後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
流星1キロ粒剤	フェンキナトリオン 2.0 ペントキサゾン 2.0 メタズスルフロ 5.0	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、植後 30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。

●フロアブルタイプ

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
イッテツフロアブル	イマズスルフロ 1.7 カフェンストロール 5.7 ベンゾピシクロン 3.8	移植後5日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)カフェンストロールの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
イッポンDフロアブル	ペンシルフロメチル 4.0 ピラクロニル 12.0 プロモブチド 1.0 ダイムロン 8.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。
カイリキZフロアブル	イプフェンカルバゾン 4.8 テフルトリオン 4.8 プロピリスルフロ 1.75	移植後3日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)ホタルイをはじめとするSU抵抗性雑草に効果が高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
カウントダウンフロアブル カウンスルエナジーフロアブル アバンティフロアブル	トリアファモン 0.95 フェンキナトリオン 5.7 フェントラザミド 5.7	移植時・移植直後～ノ ビエ3.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高く、水口施用が可能。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びびさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害する恐れがあるので注意する。
カチボンLフロアブル	イプフェンカルバゾン 5.0 テフルトリオン 4.0 ペンシルフロメチル 1.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500ml	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)多年生雑草にも効果が高い。
カラットフロアブル キラリフロアブル	イマズスルフロ 1.70 テフルトリオン 3.8 ピラクロニル 3.8	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500ml	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメシロハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
銀河フロアブル	メタズスルフロ 2.0 ダイムロン 20.0 ピラクロニル 4.0	移植後5日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。
クサトリーBSX フロアブルL	フェントラザミド 5.8 ベンゾピシクロン 3.8 ペンシルフロメチル 1.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)SU系抵抗雑草にも効果高い。
ゴエモンフロアブル	イマズスルフロ 0.9 イプフェンカルバゾン 2.0 プロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。
コメツフロアブル	メタズスルフロ 1.2 テフルトリオン 4.0 ピラクロニル 4.0	移植後5日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤
サラブレードKAI フロアブル	オキサジクロメホン 0.57 ピラクロニル 3.8 イマズスルフロ 1.7	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。
サラブレードGO フロアブル	オキサジクロメホン 1.1 ピラクロニル 1.9 イマズスルフロ 1.7 プロモブチド 16.7	移植直後～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑草や多年生雑草にも効果高い。
ジェイソウルフロアブル	シクロピリモレート 5.5 ピラゾレート 11.0 フェントラザミド 4.5	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500ml	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ALS阻害抵抗性雑草に効果が高い。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
ジャイロフロアブル	イプフェンカルバゾン 4.5 ベンゾピシクロン 5.4 ベンゾフェナップ 14.3	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)非SU系剤 (2)田植え同時処理が可能 (3)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
シングキフロアブル	フェンキナトリオン 5.6 フェントラザミド 5.6	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500ml	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
ゼータジャガーフロアブル	フェンキトリオン 5.7 プロピリスルフロ 1.7 ベントキサゾン 3.8	移植後3日～ノビエ4 葉期 但し、移植後30 日まで	500ml	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータタイガーフロアブル	ベントキサゾン 2.0 プロピリスルフロ 0.9 プロモブチド 9.0	移植後3日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。
ゼータプラスフロアブル	フェンキトリオン 5.8 プロピリスルフロ 1.7	移植後3日～ノビエ4 葉期 但し、移植後30 日まで	500ml	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)SU抵抗雑草にも高い効果がある。
ディオーレフロアブル	オキサジクロメホン 0.8 テフルトリオン 4.0 メタゾスルフロ 2.0	移植後3日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
天空フロアブル	フェントラザミド 6.0 ベンゾピシクロン 6.0 メタゾスルフロ 1.2	移植時・移植直後1日 ～ノビエ3葉期 但し、 移植後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
パッチリフロアブル	イマゾスルフロ 1.7 ピラクロニル 3.7 プロモブチド 16.3	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。
バットウZフロアブル	ピラクロニル 3.8 プロピリスルフロ 1.7 ベンゾピシクロン 3.8	移植後3日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
ポデーガードフロアブル	テフルトリオン 5.8 フェントラザミド 5.8	移植後5日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	500mL	(1)SU抵抗雑草やイボクサ、クサネムにも効果が高い非SU系剤 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する被害を生じることがある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マサラオフロアブル	イマゾスルフロ 1.70 ピリミナックメチル 1.2 フェンキトリオン 5.8	移植時・移植直後～ノ ビエ3葉期 但し、移植 後30日まで	500mL	(1)SU抵抗雑草を含むホタルイ・コナギ・ミスアオイ・オモダカにも効果がある。 (2)田植え同時処理が可能
ラオウフロアブル	フェンキサスルホン 2.8 ダイムロン 11.3 フェンキトリオン 4.7 ペンシルフロメチル 1.4	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、植 後30日まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
流星フロアブル	フェンキトリオン 6.0 ベントキサゾン 5.0 メタゾスルフロ 2.0	移植後3日～ノビエ3 葉期 但し、植後30日 まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ワンベストフロアブル	ピラゾキシフェン 15.0 プロモブチド 10.0 テニルクロール 2.0	移植直後～ノビエ2葉 期 但し、移植後30日 まで	1,000mL	(1)非SU系剤でSU系抵抗雑草にも効果高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)雑草多発田では使用を避け、残草が多い場合は中後期剤を処理する。

#### フロアブルタイプ除草剤の一般的な注意事項

- (1) 剤によっては貯蔵中に分離することがあるので、使用前に容器をよく振ってから散布する。
- (2) 雑草の発生前から生育初期に散布する。
- (3) 散布の際は水の出入りを止めて湛水状態(水深3～5cm)のまま均一に散布し、散布後3～4日間そのまま湛水状態を保ち、田面を露出させないようにし、散布後7日間は、さし水、落水、かけ流しはしない。
- (4) 強風の時は剤によっては拡散が悪く、風下に吹き寄せられることがあり、効果のフレや葉害を生じることがあるので注意する。
- (5) 著しい多雨条件では除草効果が低下する場合がありますので使用は避ける。
- (6) 水口施用する場合は、自然減水時(ひたひた水～約2cmの水深)の再入水時に、水口に全量を一括投入し、流入する水に乗せて拡散させる。  
(1筆当り6時間以内に5～6cmの湛水が確保できる水量が必要。) また、一度に大量の流水で処理すると、水口付近の効果にフレが出ることもあるので注意する。
- (7) 入水後に水深が5cm程度になれば水口をしっかり止め、水尻からオーバーフローしないように注意する。

#### ●ジャンボタイプ

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
アビログロウMXジャンボ	ピラゾスルフロエチル 0.75 ピリフタド 3.75 プレチラクロール 11.25 メトリオン 2.25	移植後3日～ノビエ3 葉期ただし、移植後30 日まで	400g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する被害を生じることがある。
イッテツジャンボ	イマゾスルフロ 2.25 カフェンストロール 7.5 ベンゾピシクロン 5.0	移植後5日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	400g 小包装 10個	(1)カフェンストロールの葉害に関する注意事項を遵守する。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する被害を生じることがある。
イッポンDジャンボ	ペンシルフロメチル 1.0 ピラクロニル 4.0 プロモブチド 12.0 ダイムロン 8.0	移植直後～ノビエ2.5 葉期(但し、移植後30 日まで)	500g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
エンペラージャンボ	ピラクロニル 8.0 ピリミナックメチル 3.0 フェンキトリオン 12.0	移植直後～ノビエ3葉 期 但し、移植後30日 まで	250g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草や広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。
カイリキZジャンボ	イブフェンカルバゾン 8.3 テフルトリオン 8.3 プロピリスルフロ 3.0	移植後3日～ノビエ3 葉期 但し、移植後30 日まで	300g 小包装 10個	(1)ホタルイをはじめとするSU抵抗性雑草に効果が高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
カウントダウンジャンボ	トリアファモン 1.2	移植直後～ノビエ3.5 葉期 但し、移植後30 日まで	400g 小包装 10個	(1)広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害する恐れがあるので注意する。
カウンスルエナジージャンボ	フェンキトリオン 7.5	移植直後～ノビエ3.5 葉期 但し、移植後30 日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)多年生雑草にも効果が高い。
アバンティジャンボ	フェントラザミド 7.5	移植直後～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30日 まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
カチボンLジャンボ	イブフェンカルバゾン 8.3 テフルトリオン 6.7 ペンシルフロメチル 1.7	移植直後～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30日 まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
カラットジャンボ	イマゾスルフロ 2.25 テフルトリオン 5.0 ピラクロニル 5.0	移植直後～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミナハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
ガンガンジャンボ	ピリミルファン 2.0 フェンキサスルフロ 8.0	移植後3日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日前まで	250g 小包装 10個	(1)多年生雑草にも効果が高い。
銀河ジャンボ	メタゾスルフロ 2.5 ダイムロン 25.0 ピラクロニル 5.0	移植後5日～ノビエ3 葉期 但し、収穫60日 前まで	400g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。 (3)初期剤と体系処理の中後期剤として使用可能。
クサトリ-BSX ジャンボL	フェントラザミド 10.0 ベンゾピシクロン 6.7 ペンシルフロメチル 1.7	移植後1日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)SU系抵抗雑草にも効果高い。
クサトリ-DX ジャンボL	ペンシルフロメチル 1.27 フェントラザミド 7.5 プロモブチド 15.0	移植後3日～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	400g 小包装 10個	(1)魚類に対する注意事項を特に遵守する。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
ゴウワンDLジャンボ	ペンシルフロメチル 0.73 オキサジクロメホン 0.86 クロメブロップ 4.3 プロモブチド 8.6 ダイムロン 6.4	移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	700g 小包装 10個	(1)オキサジクロメホンの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
ゴエモンジャンボ	イマズスルフロ 0.9 イプフェンカルバゾン 2.0 プロモブチド 9.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、収穫30日前まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草も効果が高い。
コメツジャンボ	メタズスルフロ 2.0 テフリルトリオン 6.7 ピラクロニル 6.6	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤
サスケラジカルジャンボ	シクロスルファミロン 2.25 カフェンストロール 10.5 ペンゾピシクロン 10.0 ダイムロン 22.5	移植後3日～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	200g 小包装 10個	(1)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
サラブレッドKAIジャンボ	オキサジクロメホン 0.75 ピラクロニル 5.0 イマズスルフロ 2.5	移植直後～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)	400g (10個)	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。
サラブレッドGOジャンボ	オキサジクロメホン 1.5 ピラクロニル 2.5 イマズスルフロ 2.25 プロモブチド 22.5	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑草や多年生雑草にも効果高い。
ジェイソウルジャンボ	シクロピリモレート 6.7 ピラゾレート 13.3 フェントラザミド 6.7	移植後1日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	450g 小包装 10個	(1)田植え後1日からの処理。 (2)ALS阻害抵抗性雑草に効果が高い。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
シングキジャンボ	フェノキトリオン 12.0 フェントラザミド 12.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータジャガージャンボ	フェンキトリオン 16.0 プロピリスルフロ 4.5 ベントキサゾン 10.0	移植後3日～ノビエ4葉期 但し、移植後30日まで	200g 小包装 10個	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータプラスジャンボ	フェンキトリオン 15.0 プロピリスルフロ 4.5	移植3日後～ノビエ4葉期 但し、収穫90日まで	200g 小包装 10個	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)SU抵抗雑草にも高い効果がある。
ゼータタイガージャンボ	ベントキサゾン 2.0 プロピリスルフロ 0.9 プロモブチド 9.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
デオーレジャンボ	オキサジクロメホン 1.0 テフリルトリオン 5.0 メタズスルフロ 2.5	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
天空ジャンボ	フェントラザミド 10.0 ペンゾピシクロン 10.0 メタズスルフロ 2.0	移植直後1日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
パッチリジャンボ	イマズスルフロ 2.25 ピラクロニル 5.0 プロモブチド 22.5	移植直後～ノビエ2.5葉期(但し、移植後30日まで)	400g (10個)	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
パットウZジャンボ	ピラクロニル 5.0 プロピリスルフロ 2.25 ペンゾピシクロン 5.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
フルイニングジャンボ	カフェンストロール 2.1 カルフェントラゾエチル 0.9 フルセトスルフロ 0.22 ペンゾピシクロン 2.0	移植後5日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	500g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。 (3)初期剤と体系処理の後中期剤として使用可能。
ベッカクジャンボ	ピリリスルファン 2.0 フェノキサスルホン 6.0 フェンキトリオン 12.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草やコナギ、ミズアオイ、オモダカなどにも効果が高い非SU系剤 (2)いぐさ、れんこん、せり、くわい隣接田では注意する。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マサカリLジャンボ	ペンシルフロメチル 1.0 インダノファン 2.8 クロメブロップ 7.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
ラオウジャンボ	フェンキサスルホン 6.0 ダイムロン 24.0 フェンキトリオン 10.0 ペンシルフロメチル 3.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
流星ジャンボ	フェンキトリオン 7.5 ベントキサゾン 6.25 メタズスルフロ 2.5	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。

ジャンボタイプ除草剤の一般的な注意事項

- 雑草の発生前から生育初期に散布する。
- 処理日は田面水の水深5cm程度を目安とし、拡散がスムーズに行われるよう配慮する。
- 圃場の表面が凸凹していたり踵跡が水面に露出していると効果が不安定になりやすいので、土壌表面が水中に没するように水深を調節してから散布する。
- 散布の際は水の出入を止めて湛水状態のまま均一に散布し、散布後7日間は完全に止水し、3～4日湛水状態(水深5～6cm)を保ち、田面を露出させたり、落水、かけ流しはしない。また、散布後に多量の降雨が予想される場合は使用しない。
- 本指針登載のジャンボ剤の多くは、小包装(パック)を10個投入するようになっているが、剤によっては個数が異なるので注意する。
- 強風の時は剤によっては拡散が悪く、風下に吹き寄せられることがあり、効果のフレヤ薬害を生じることがあるので注意する。
- パックに使用されているフルムは水溶性なので、ぬれた手で作業したり、降雨で破袋することのないように注意する。
- 藻類やウキ草が多発している水田では拡散が不十分となるため使用を避け、粒剤に変更する。
- 著しい多雨条件では除草効果が低下する場合がありますので使用は避ける。

●その他のタイプ

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
カラット400FG キラリ400FG	イマズスルフロ 2.25 テフリルトリオン 5.0 ピラクロニル 5.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
コメツ顆粒	メタズスルフロ 7.5 テフリルトリオン 25.0 ピラクロニル 25.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	80g	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤
サキガケ薬粒	イプフェンカルバゾン 10.0 テフリルトリオン 12.0 フルピラロキシフェンベンジル 2.0	移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
サラブレットKAI400FG	オキサジクロメホン 2.25 ピラクニル 0.75 イマズスルフロン 5.0	移植直後～ノビエ2.5 葉期(但し、移植後30 日まで)	400g	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
サラブレットGO 400FG	オキサジクロメホン 1.5 ピラクニル 2.5 イマズスルフロン 2.25 プロモブチド 22.5	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、植 後30日まで	400g	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑草や多年生雑草にも効果高い。
ジョキニー250グラム	プロモブチド 24.0 ペントキサゾン 6.0	移植後1日～ノビエ2.5 葉期(但し、移植後30 日まで)	250g	(1)SU系抵抗雑草にも効果がある。 (2)レンコン、くわい、セリ隣接田では注意する。
シゲキ豆つぶ250	フェノキトリオン 12.0 フェントラザミド 12.0	移植直後～ノビエ2.5 葉期 但し、移植後30 日まで	250g	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータタイガー300FG	プロピリスルフロン 3.0 プロモブチド 30.0 ペントキサゾン 6.67	移植後3日～ノビエ3 葉期但し、移植後30日 まで	300g	(1)雑草の発生前から発生初期に有効。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ツルギ250粒剤	イプフェンカルバゾン 10.0 イマズスルフロン 3.6 ベンゾピシクロン 8.0	移植時・移植直後～ノ ビエ2.5葉期 但し、移 植後30日まで	250g	(1)田植え同時処理が可能。 (2)レンコン、くわい、セリ隣接田では注意する。
パッチリ400FG	イマズスルフロン 2.25 ピラクニル 5.0 プロモブチド 22.5	移植直後～ノビエ2.5 葉期(但し、移植後30 日まで)	400g	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が速く、温度による効果変動が少ない。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ビクトリーZ400FG メガゼータ400FG	プロピリスルフロン 2.25 ピラクニル 5.0	移植後5日～ノビエ3 葉期 但し、収穫60日 まで	400g	(1)SU抵抗雑草も効果が高いSU系剤 (2)効果の発現が速く、長期間持続する。
ワザアリ楽粒	イプフェンカルバゾン 10.0 テフリトリオン 12.0	移植直後～ノビエ3葉 期 但し、移植後30日 まで	250g	(1)SU系抵抗雑草にも効果がある。 (2)レンコン、くわい、セリ隣接田では注意する。

(ウ)田植後中・後期処理剤(初期除草剤、初中期一発処理剤との体系処理、多年生雑草対象)

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
2,4-Dアミン塩	2,4-PA 49.5	有効分げつ終止期～ 幼穂形成期前 収穫 60日前まで	100～ 120g(70 ～1000)	(1)早期・早植栽培、低温時の使用は、筒状葉などのホルモン障害の生じる恐れがあるのでMCP剤を使用する。 (2)散布後1～2日してから入水する。
MCPソーダ塩	MCPAナトリウム塩 19.5	完全落水 雑草茎葉処理	200～ 240g(70 ～1000)	(3)粒剤使用の場合は湛水し、雑草が完全に水中にある状態で散布し、1～2昼夜おく。 (4)風下側作物に飛散しないよう注意する。 (5)噴霧器等器材は専用とし、他の農薬散布器具と区別する必要がある。 (6)イネ科の雑草には効果がない。
粒状水中2,4-D	2,4-PA 1.4	有効分げつ終止期～ 幼穂形成期前 収穫 60日前まで	3～ 4.5kg	(1)SU系抵抗雑草も効果が高い。 (2)散布後の低温、急激な気温の上昇により葉害発生のおそれがある。 (3)砂質土壌、軟弱苗、極端な浅植えは葉害の発生のおそれがある。
粒状水中MCP	MCPAエチル 1.2	60日前まで 湛水処	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
アグシズMX1キロ粒剤	ピリフタリド 2.4 メソトリオン 0.9 メタゾスルフロン 0.8	移植後7日～ノビエ4 葉期 但し、移収穫前 45日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草も効果が高い。 (2)散布後の低温、急激な気温の上昇により葉害発生のおそれがある。 (3)砂質土壌、軟弱苗、極端な浅植えは葉害の発生のおそれがある。
アトトリ1キロ粒剤	ピリミスルフアン 0.8	移植後14日(稲5葉期 以降)～ノビエ4葉期、 但し、収穫45日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
ウィードコア1キロ粒剤	フロロピラキシンフェンベンジル ベノキススラム 0.4 0.5	移植後7日～ノビエ4 葉期 但し、収穫60日 前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
ウィードコア200SD粒剤	フロロピラキシンフェンベンジル ベノキススラム 2.0 2.5	移植後10日～ノビエ4 葉期 但し、収穫60日 前まで	200g	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
グリンチャー1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8	移植後7日～ノビエ4 葉期 収穫30日前まで 湛水処理	1kg	(1)湛水状態で散布し、散布後少なくとも7日間はそのままの状態を保ち、入水、落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。 (2)ウキクサが多数浮遊している水田では効果が劣る。 (3)完全枯死には時間がかかる。
		移植後25日～ノビエ5 葉期収穫30日前まで 湛水処理	1.5kg	(4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
グリンチャーEW	シハロホップブチル 30.0	移植後20日～ノビエ6 葉期 但し、収穫30日 前まで 雑草茎葉処理	100mL (25～ 1000)	(1)必ず展着剤を加用する。 (2)噴霧器を使用し、ノビエの茎葉全体によく附着させる。 (3)完全枯死には時間がかかる。 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
グリンチャーバスME液剤	シハロホップブチル 3.0 ペンタゾンナトリウム塩 20.0	移植後15日～ノビエ5 葉期 収穫50日前まで 雑草茎葉処理	1,000mL (70～ 1000)	(1)本剤使用前に、初期剤又は一発処理剤や中耕等で雑草防除し、組み合わせによる体系防除を行う。(2)落水又は浅水散布し、散布後少なくとも3日間(浅水処理は5日間)はそのままの状態を保ち、7日間は落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。(3)葉害のおそれがあるため展着剤は加用しない。(4)高温など葉害を生じやすい条件では多めの希釈水量を用い、低濃度液をなるべく水稲にかからないように散布する。(5)DCPA剤との近接散布は葉害を生ずるおそれがあるので避ける。(6)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
グリンチャージャンボ	シハロホップブチル 1.8	移植後15日～ノビエ3 葉期 但し、収穫30日 前まで	1kg 小包装 20個	(1)薬やウキクサが多発している水田では拡散が不十分となる恐れがある。 (2)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後25日～ノビエ4 葉期 但し、収穫30日 前まで	1.5kg 小包装 30個	
ソニックブームZ1キロ粒剤	シクロピリモレート 1.5 シメトリン 1.5 テフリトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9	移植後14日(稲4葉期 以降)～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)藻類又は表層剥離の発生しやすい水田では使用を避ける (2)ALS阻害剤抵抗性に効果が高い。 (3)4葉期までのノビエに有効 (4)多年生雑草に効果が高い
ソニックブームSジャンボ	シクロピリモレート 3.0 シメトリン 3.0 テフリトリオン 4.0 ベノキススラム 1.0	移植後14日(稲4葉期 以降)～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	500g 小包装 20個	(1)藻類又は表層剥離の発生しやすい水田では使用を避ける (2)ALS阻害剤抵抗性に効果が高い。 (3)4葉期までのノビエに有効 (4)多年生雑草に効果が高い

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
ツイゲキ豆つぶ250	シメトリン 12.0 ピリミスルファン 3.0 フェンキトリアン 10.0	移植後14日(稲5葉期以降)～ノビエ4葉期(但し、収穫60日まで)	250g	(1)幅広い雑草に効果がある。 (2)花茎が抽出したホタルイや生育が進んだクログワイやオモダカにも有(3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
トドメMF乳剤	メタミホップ 4.9	移植後14日～ノビエ7葉期 但し、収穫50日前まで 湛水散布又は落水散布	200mL (25～1000)	(1)キシュスズメヒエは再生茎5葉期、アゼガヤは草丈60cmまでが散布適期。 (2)雑草茎葉にかかるよう散布する。 (3)周辺作物(特にイネ科)に対して飛散しないように注意(葉害の恐れ)。 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
トドメMF1キロ粒剤	メタミホップ 1.35	移植後14日～ノビエ5葉期 但し、収穫50日前まで 湛水散布又は無人航空機による散布	1kg	(1)強風時の散布はさける。 (2)藻類又は表層剥離の発生しやす水田では、有効な剤と組み合わせ使用。 (3)無人航空機による散布の注意事項を遵守 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用。
トドメバスマF液剤	メタミホップ 1.2 ベンタゾン 18.3	移植後15日～ノビエ6葉期 但し、収穫50日前まで 湛水散布又はごく浅く湛水して散布	1000mL (70～1000)	(1)重複散布は、葉害のおそれがあるのでさける。 (2)高温条件下では、葉害のおそれがあるのでさける。 (3)周辺作物(特にイネ科)に対して飛散しないように注意(葉害の恐れ)。 (4)クログワイ、コウキヤガラは必要に応じて有効な前処理剤との組合せで使用。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
スケダチ1キロ粒剤	フルセトスルフロ 0.22	移植後7日～ノビエ4葉期、但し収穫45日前まで 移植後14日～ノビエ5葉期、但し収穫45日前まで	1kg 1.5kg	(1)使用量1kgではノビエの4葉期、1.5kgではノビエの5葉期を越えると効果が低いので、時期を失しないように散布する。 (2)多年生雑草は生育段階によって効果にブレがあるので、葉齢や草丈把握し適期に散布する。 (3)水深3～5cmの湛水状態で処理し、少なくとも3～5日間は通常の湛水状態を保ち、散布後7日間はさし水、落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。
ツイゲキ1キロ粒剤	ピリミスルファン 0.75 シメトリン 3.0 フェンキトリアン 2.5	移植後14日(稲5葉期以降)～ノビエ4葉期、但し、収穫60日前まで	1kg	(1)次のような条件では葉害が発生する恐れがあるので使用を避ける。①根が露出する条件下では使用は避ける。②砂質土壌の水田及び漏水の激しい水田での使用は避ける。③散布後7日間は5～6cmの湛水状態を保ち、落水、かけ流しはしない。
デッケン1キロ粒剤 ニトウリュウ1キロ粒剤	ベノキススラム 0.5 ベンゾピシクロン 2.0	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草も効果が高い。 (2)散布の際は、水の出入りを止めて田面に均一散布する。少なくとも3～4日間は湛水状態(水深3～5cm)を保ち田面を露出させたり水を切らしたりしない。また、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。
ハイカット1キロ粒剤	シハロホップブチルジメタメトリン 1.8 ベンゾピシクロン 1.0 ハロスルフロメチル 2.0 0.9	移植後15日～ノビエ3.5葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)次のような条件では葉害が発生する恐れがあるので使用を避ける。①散布時の水稲の葉齢が4葉期未満の時、②砂質土壌の水田及び漏水の激しい水田(減水深2cm/日以上)、③軟弱な苗を移植した水田、④極端な浅植の水田及び植付け不良で根が田面に露出している条件、⑤水稲が水没するような極端な深水条件。
バイスコープ1キロ粒剤	シクロピリモレート 2.0 テフリルトリアン 3.0	移植後14日～60日 但し、収穫45日前まで	1kg	(1)ALS阻害剤抵抗性の雑草に高い効果。 (2)特殊雑草(イボクサ、クサねむ)に有効。
バサグラン液剤	ベンタゾン 40.0	移植後15～55日 収穫50日前まで 雑草茎葉処理	500～700mL (70～1000)	(1)必ず落水又は浅水散布し、散布後少なくとも7日間はそのままの状態を保ち、入水、落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。(2)イネ科の残草がある場合は、イネ科に効果のある成分との混合剤を用いる。(3)DCPA剤との近接散布は葉害を生ずるおそれがあるので避ける。(4)雑草の種類によって使用時期が異なるので注意する。(5)処理後2日以内に降雨があると効果が不十分になるおそれがあるので、晴天の持続する時を選んで使用する。
バサグラン粒剤	ベンタゾン 11.0	移植後15～55日 収穫60日前まで 雑草茎葉処理	3～4kg	
バサグラン・エアール1キロ粒剤	ベンタゾン 33.0	移植後15～55日 収穫60日前まで	1kg	
ヒエクリーンバサグラン粒剤	ピリミノバクメチル 0.4 ベンタゾンナトリウム塩 11.0	移植後15日～ノビエ4葉期	3kg	(1)散布の際は、水の出入りを止めてごく浅水状態(雑草が水面上に出る状態)にして田面に均一散布する。 (2)散布後少なくとも2日間はそのままの状態を保ち、その後、入水し、通常の湛水状態を保つ。
レプラス1キロ粒剤	メタフルスロン 1.2 ジメタメトリン 1.0 テフリルトリアン 3.0 ダイムロン 10.0	移植後14日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
ワイドアタックSC	ベノキススラム 3.6	移植後20日～ノビエ6葉期(イネ5葉期以降) 但し、収穫30日前まで	100mL (1000の水)	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。(2)イネの出穂時の散布は葉害の恐れがあるので、使用を控える。(3)葉害のおそれがあるため展着剤は加用しない。(4)落水又は浅水散布し、散布後少なくとも2日間(浅水処理は3日間)はそのままの状態を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。(5)処理後1日以内に降雨があると効果が不十分になる恐れがあるので、晴天の持続する時を選んで使用する。(6)雑草の種類によって使用時期が異なるので、草種に応じて葉齢や草丈を把握し適期に使用する。
ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	ベノキススラム 0.6 ダイムロン 10.0	移植後15日～ノビエ5葉期(イネ4葉期以降) 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。 (2)水深3～5cmの湛水状態で処理し、少なくとも3～5日間は通常の湛水状態を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。
ワイドショット1キロ粒剤	テフリルトリアン 3.0 ベノキススラム 0.5	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫45日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。

表 ノビエおよびホタルイ葉齢と移植後日数の目安

		葉齢(葉)					
		1	1.5	2	2.5	3	4
移植後日数 (日)	早期 4/19植	ノビエ 9	12	13	17	19	24
		ホタルイ 11	14	16	18	21	25
	普通期 6/12植	ノビエ 4	6	8	9	12	16
		ホタルイ 4	6	8	10	12	16

注) 代かきは早期・普通期ともに移植2日前

数値は、農水産研究所で実施した水稲除草剤適II試験の生育データを基に算出(早期: H17～22、普通期: H17～28)



### 3)ウキクサ、アオミドロの防除法

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
モゲトン粒剤	アミノクロナフトキノ ン(ACN) 9.0	ウキクサ、アオミドロ・ 藻類の発生始～発生 盛期 収穫45日前まで	2～3kg	(1)ウキクサ、アオミドロ、表層はく離のほか、ヒルムシロ、ウリカ ワにも効果がある。 (2)苗が小さい時は被害を生じるので使用しない。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)水稲が水没するような極端な深水で使用すると被害が生ずること があるのでさける。
モゲトンジャンボ	アミノクロナフトキノ ン(ACN) 9.0	ウキクサ類、アオミドロ・ 藻類による表層はく離 の発生時 但し、収穫 45日前まで	1kg 20個	(1)上記に準ずる。 (2)ウキクサ類、藻類、表層はく離の発生が進むと拡散が不十分とな り効果が劣ることがあるので、発生を認めた場合なるべく早い時期 に処理する。

注:田植後のウキクサ、アオミドロにも有効であるから上記に準じて使用できる。

### 4) 直播栽培の雑草防除法

水稲の直播栽培は種籾を直接水田に播く栽培方法で、播種前に湛水する湛水直播栽培と、播種前に湛水を行わない乾田直播栽培に大別される。それぞれに除草体系が異なるが、現在の除草剤の登録ではその区別がなく直播水稲で一本化されている。

また直播栽培では、水稲と雑草の出芽がほぼ同時にスタートするため、移植栽培に比べ雑草との競合が厳しく、イネが被害を受けない葉鞘の下限と、雑草に対して除草剤の効果が十分発揮できる葉鞘の上限の差が小さい。さらに、直播栽培ではイネの出芽苗立ち率を向上させるために、播種位置や根の位置が移植栽培に比べてより田面表層に近いので、移植栽培に比べより除草剤の被害が出やすい栽培と言える。このため、水稲直播栽培の除草剤では、その種類や適用範囲がかなり狭いうえに、除草効果や被害の発生に大きなブレを生じることがあり、移植栽培以上に細心の注意を払う必要がある。

#### (1) 湛水直播栽培の除草方法

除草体系1 …… 播種後 ⇒ 初期土壌処理剤 …… 生育初期 ⇒ 初中期一発型土壌処理剤  
除草体系2 …… 播種後 ⇒ 初中期一発型土壌処理剤 …… 生育中後期 ⇒ 中後期茎葉処理剤

- ① 苗立ちの向上、除草剤の効果安定のために、畦畔からの漏水防止を徹底し、移植栽培以上にほ場の均平化に努める。
- ② 雑草の株が大きい場合や多年生雑草が繁茂しているようなときは、耕起前に非選択性茎葉処理剤で除草処理する。
- ③ 多年生雑草の切断茎や塊茎を埋没させるため浅水で代かきを行う。
- ④ 落水出芽させたときには、入水後、水深が安定してから除草剤を散布する。その場合、より遅くまで使用できる一発処理除草剤が望ましいが、雑草の葉鞘を逸しない
- ⑤ 鉄コーティング直播栽培のように、播種位置が田面表層付近にある場合は、より被害を生じやすいため注意する。

#### (2) 乾田直播栽培の除草方法

播種後出芽前	⇒	入水直前	⇒	入水後
非選択性茎葉処理剤 ・ラウンドアップマックスロード ・タッチダウンIQ など		選択性の茎葉処理 ・クリンチャーバスME 液剤 ・ヒエグリーンバサグラ ン粒剤		直播登録のある一発処理除草剤(1部中後期処理剤) ・バッチリ1キロ粒剤 ・バッチリフロアブル ・カイリキZ1キロ粒剤、フロアブル、ジャンボ ・ツイゲキ豆つぶ250 ・サキガケ薬粒 など ・ワイドアタックD・フォローアップ1キロ粒剤 (中後期処理剤)
又は 選択性土壌処理剤 ・サターンバアロ乳剤 など		など		

- ① 入水後の一発処理除草剤は水が落ち着いてから(約一週間)処理する。
- ② 一発処理除草剤後に残草がある場合は、中後期茎葉処理剤を処理する。

#### (3) 直播栽培における除草剤の使用基準

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
アグシズMX1キロ粒剤	ピリフタリド 2.4 メトリオン 0.9 メタゾスルフロン 0.8	稲2葉期～ノビエ4葉 期まで 但し、収穫45 日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草も効果が高い。 (2)散布後の低温、急激な気温の上昇により被害発生の恐れがある。 (3)砂質土壌、軟弱苗、極端な浅植は被害の発生の恐れがある。
エンペラー1キロ粒剤	ビラクロニル 2.0 ピリミノバックメタル 0.75 フェンキトリオン 3.0	イネ出芽揃葉期～ノビ エ3葉期 但し、収穫 75日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草や広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高 (2)湛水散布
カイリキZ1キロ粒剤	イブフェンカルバゾン 2.5 テフリルトリオン 2.5 プロピリスルフロン 0.9	稲1葉期～ノビエ3葉 期 但し、収穫90日前 まで	1kg	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カイリキZフロアブル	イブフェンカルバゾン 4.8 テフリルトリオン 4.8 プロピリスルフロン 1.75	稲1葉期～ノビエ3葉 期 但し、収穫90日前 まで	500mL	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カイリキZジャンボ	イブフェンカルバゾン 8.3 テフリルトリオン 8.3 プロピリスルフロン 3.0	稲1葉期～ノビエ3葉 期 但し、収穫90日前 まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カウントダウンフロアブル カウンスルエナジーフロアブル	トリアファモン 0.95 フェンキトリオン 5.7 フェントラザミド 5.7	稲1葉期～ノビエ3.5葉 期 但し、収穫90日ま で	500mL	(1)雑草の発生前から発生初期に効果が高い。 (2)後作物となす、たまねぎ及びびさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害する恐れがあるので注意する。
カウントダウン1キロ粒剤 カウンスルエナジー1キロ粒剤	トリアファモン 0.5 フェンキトリオン 3.0 フェントラザミド 3.0	稲1葉期～ノビエ3.5葉 期 但し、収穫90日ま で	1kg	(1)キシウスマメヒエに高い効果を示す。 (2)後作物となす、たまねぎ及びびさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害する恐れがあるので注意する。
カウントダウンジャンボ カウンスルエナジージャンボ	トリアファモン 1.2 フェンキトリオン 7.5 フェントラザミド 7.5	稲1葉期～ノビエ3.5葉 期 但し、収穫90日ま で	400g 小包装 10個	(1)キシウスマメヒエに高い効果を示す。 (2)後作物となす、たまねぎ及びびさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害する恐れがあるので注意する。
カラット1キロ粒剤 キラリ1キロ粒剤	イマズスルフロン 2.25 テフリルトリオン 5.0 ビラクロニル 5.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉 期 但し、収穫90日前 まで	1kg	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
カラットフロアブル キラリフロアブル	イマズスルフロン 1.70 テフリルトリオン 3.8 ビラクロニル 3.8	稲1葉期～ノビエ2.5葉 期 但し、収穫90日前 まで	500ml	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
カラットジャンボ キラリジャンボ	イマズスルフロン 2.25 テフリルトリオン 5.0 ビラクロニル 5.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉 期 但し、収穫90日前 まで	400g 小包装 10個	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
カラット400FG キラリ400FG	イマズスルフロン 2.25 テフリルトリオン 5.0 ビラクロニル 5.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉 期 但し、収穫90日前 まで	400g	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
クリンチャー1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8	は種後10日～ノビエ3 葉期 但し、収穫30日 前まで	1kg	(1)移植水稲の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。
		は種後25日～ノビエ4 葉期 但し、収穫30日 前まで	1.5kg	
クリンチャーEW	シハロホップブチル 30.0	は種後10日～ノビエ5 葉期 但し、収穫30日 前まで	100mL (25～ 100g)	(1)移植水稲の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量 /10a	使用上の注意
グリンチャーバスME液剤	シハロホップブチル 3.0 ペンタゾンナトリウム塩 20.0	は種後10日～ノビエ5 葉期 但し、収穫50日 前まで	1,000mL (70～ 1000)	(1)移植水稻の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。
サキガケ薬粒	イブフェンカルバゾン 10.0 テフリトリオン 12.0 フロピラウキシフェンベンジル 2.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉 期但し、収穫90日前ま で	250g	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。
サターンバアロ乳剤	ベンチオカーブ 50.0 プロトリン 5.0	は種直後～イネ出芽 前 ノビエ1葉期まで 収穫90日前まで、入水 15日前まで	600～ 800mL (70～ 1000)	(1)雑草発生前に使用する。 (2)覆土はあまり厚くしない。 (3)過湿、湛水状態を避ける。
サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピ ルアミン塩 41.0	耕起20～10日前まで (雑草生育期)	250～ 500mL (50～ 1000)	(1)雑草の葉全体にムラなく散布します。 (2)雑草の種類によって薬量を変更してください。
ゼータジャガー1キロ粒剤	フェンキトリオン 3.0 プロピリスルフロ 0.9 ベントキサゾン 2.0	稲1葉期～ノビエ4葉 期 但し、移植後90日 前まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)多年性難防除雑草に高い効果。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータジャガーフロアブル	フェンキトリオン 5.7 プロピリスルフロ 1.7 ベントキサゾン 3.8	稲1葉期～ノビエ4葉 期 但し、移植後90日 前まで	500ml	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータジャガージャンボ	フェンキトリオン 16.0 プロピリスルフロ 4.5 ベントキサゾン 10.0	稲1葉期～ノビエ4葉 期 但し、移植後90日 前まで	200g 小包装 10個	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータプラス1キロ粒剤	フェンキトリオン 3.0 プロピリスルフロ 0.9	稲1葉期後～ノビエ3.5 葉期 但し、収穫90日 前まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)多年性難防除雑草に高い効果。 (3)SU抵抗雑草にも高い効果がある。
ゼータプラスフロアブル	フェンキトリオン 5.8 プロピリスルフロ 1.7	稲1葉期後～ノビエ3.5 葉期 但し、収穫90日 前まで	500ml	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)SU抵抗雑草にも高い効果がある。
ゼータプラスジャンボ	フェンキトリオン 15.0 プロピリスルフロ 4.5	稲1葉期後～ノビエ3.5 葉期 但し、収穫90日 前まで	200g 小包装 10個	(1)多年性難防除雑草に高い効果。 (2)SU抵抗雑草にも高い効果がある。
タッチダウンiQ	グリホサートカリウム塩 43.0	は種14日前～出芽前 (雑草生育期)(乾田 不耕起栽培)	250～ 500mL (50～ 1000)	(1)出芽した稲では使用しない。 (2)展着剤加用の必要はない。 (3)他の農薬や肥料とは混用しない。 (4)他の有用作物に飛散しないように散布する。
ダブルスターSB顆粒	ピラズスルフロエチル 2.6 フェントラザミド 25.0 ペンゾピシクロン 25.0	イネ1葉期～ノビエ2.5 葉期まで但し、収穫90 日前まで	80g (500mL/ 10a)	(1)500mLの水に溶かして散布する。 (2)キク科雑草にも、高い効果を示す。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ツイゲキ豆つぶ250	シメトリン 12.0 ピリミルファン 3.0 フェンキトリオン 10.0	稲5葉期以降～ノビエ 4葉期	250g	(1)幅広い雑草に効果がある。 (2)花茎が抽出したホタルイや生育が進んだクログワイやオモダカにも有 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ドニチS1キロ粒剤 マクダス1キロ粒剤	イマズスルフロ 0.9 フェントラザミド 3.0 プロモブチド 9.0	イネ1葉期～ノビエ2.5 葉期まで但し、収穫90 日前まで	1kg	(1)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マスラオ1キロ粒剤	イマズスルフロ 0.90 ピリノバックメチル 0.6 フェンキトリオン 3.0	は種時・は種直後～ノ ビエ3葉期 但し、収穫 90日前まで	1kg	(1)SU抵抗雑草を含むホタルイ・コナギ・ミアオイ・オモダカにも効果がある。
マスラオフロアブル	イマズスルフロ 1.70 ピリノバックメチル 1.2 フェンキトリオン 5.8	稲1葉期～ノビエ3葉 期 但し、収穫90日前 まで	500mL	(1)SU抵抗雑草を含むホタルイ・コナギ・ミアオイ・オモダカにも効果がある。
ハイカット1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8 ジメタトリン 1.0 ペンゾピシクロン 2.0 ハロスルフロメチル 0.9	稲3葉期～ノビエ3.5葉 期まで 但し、収穫60 日前まで	1kg	(1)移植水稻の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。
バサグラン液剤	ペンタゾン 40.0	は種後35日～50日 但し収穫50日前まで	500～ 700mL (70～1000)	(1)移植水稻の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。
バッチリ1キロ粒剤	イマズスルフロ 0.9 ビラクロニル 2.0 プロモブチド 9.0	イネ出芽始期～ノビエ 2.5葉期まで 但し、収 穫90日前まで	1kg	(1)稲の根が露出する条件では薬害を生ずる恐れがあるので注意する。
バッチリフロアブル	イマズスルフロ 1.70 ビラクロニル 3.7 プロモブチド 16.3	イネ出芽始期～ノビエ 2.5葉期まで 但し、収 穫90日前まで	500mL	(1)稲の根が露出する条件では薬害を生ずる恐れがあるので注意する。
バットウZ1キロ粒剤	ビラクロニル 2.0 プロピリスルフロ 0.9 ペンゾピシクロン 2.0	稲1葉期後～ノビエ3 葉期 但し、収穫60日 前まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
バットウZフロアブル	ビラクロニル 3.8 プロピリスルフロ 1.7 ペンゾピシクロン 3.8	稲1葉期後～ノビエ3 葉期 但し、収穫60日 前まで	500mL	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
バットウZジャンボ	ビラクロニル 5.0 プロピリスルフロ 2.25 ペンゾピシクロン 5.0	稲1葉期後～ノビエ3 葉期 但し、収穫60日 前まで	400g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
ヒエクリーンバサグラン粒剤	ピリノバックメチル 0.40 ペンタゾンナトリウム塩 11.0	稲3葉期～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	3kg	(1)移植水稻の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。
ビラクロン1キロ粒剤	ビラクロニル 1.8	湛水直播のは種直後 ～イネ出芽前 但し、収 穫60日前まで 湛水直播のイネ出芽 始期～ノビエ1.5葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)稲出芽前に使用する場合はできるだけ落水状態にして散布し、確実に (2)稲出芽時に湛水状態になると苗立ち数の低下を生じる場合があるので 注意する。 (3)稲出芽始期以降は湛水状態で散布する。 (4)表面播種(鉄コーティング等)の場合では、「播種直後～稲出芽前」処 理で薬害を生じる恐れがあるので、その時期の使用は避ける。
ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩 48.0	【耕起栽培】 雑草生育期(耕起直後 ～出芽前) 【不耕起栽培】 雑草生育期 は種30 日前～出芽前	250～ 500mL (500)	(1)出芽した稲では使用しない。 (2)展着剤加用の必要はない。 (3)他の農薬や肥料とは混用しない。 (4)他の有用作物に飛散しないように散布する。
ワイドアタックSC	ペノキススラム 3.6	稲3葉期～ノビエ5葉 期 但し、収穫30日前	100mL (1000)	(1)移植水稻の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。
ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	ペノキススラム 0.6 ダイムロン 10.0	稲3葉期～ノビエ5葉 期まで 但し、収穫60 日前まで	1kg	(1)移植水稻の(ウ)中後期剤の項を参照のこと。 (2)乾田直播の入水後の処理も可能。

5)水田除草剤のローテーション使用

同一除草剤の連年使用は、同一成分に対する抵抗性雑草の発生、薬害、特定草種の占有化が進む場合があるので、3～5年毎に、特性の異なる除草剤に変更する。

(1) 通常の除草体系

- |                                |
|--------------------------------|
| ①スルホニルウレア系一発処理剤                |
| ②ダイアゾール系、トリケトン系、スルホンアニリド系一発処理剤 |
| ③初期剤+中後期処理剤                    |

(2) 多年性雑草の多い防除

- |                 |
|-----------------|
| ①初期剤+中後期処理剤     |
| ②一発処理除草剤+中後期処理剤 |

(3) ホタルイに有効な一発処理除草剤

- |                                |
|--------------------------------|
| ①プロモブチド含有剤                     |
| ②クロメプロップ、又はベンゾピシクロン含有剤         |
| ③ダイアゾール系、トリケトン系、スルホンアニリド系一発処理剤 |

## 6) スルホニルウレア(SU)系除草剤抵抗性雑草に対する防除法

現在、水田除草剤の中で一発処理剤が大きな割合を占めており、一発処理剤はいくつかの有効成分が組み合わされた混合剤となっている。この防除指針に記載されている初期及び初中期一発処理剤の多くが水田の主要雑草に幅広く効果を示すスルホニルウレア系(以下SU系と記す)化合物であるベンスルフロンメチル、イマゾスルフロン、ピラゾスルフロンエチル、シクロスルフアムロン、フルセトスルフロンなどを含有している。十数年前からアゼナ、イヌホタルイ、コナギ、ミゾハコベ、ミズアオイなどでこのSU系除草剤に抵抗性のある雑草が多量に残草することが問題となっていた。本県でも平成12年頃から各地で問題が明らかになり、現在アゼナ、イヌホタルイ、コナギに抵抗性が確認され、その発生面積も増えているが、SU抵抗性雑草の問題は明らかになって十数年が経過しており、本指針に記載されているほとんどの一発処理除草剤はSU抵抗性雑草対策の成分を含む除草剤になっている。

しかし、現在流通している除草剤の中には対策が不十分な剤もあり、今後もSU剤をはじめ同様の殺草機作(ALS阻害)を中心に、新たな抵抗性雑草の出現や発生が助長される事が懸念される。そのため、一発処理除草剤を適期に適正に処理したにもかかわらず、アゼナ、コナギ、イヌホタルイ等の特定の草種が多量に残草しているような圃場は、抵抗性雑草が発生している可能性があるため、下記の点について留意して除草剤を使用する。

- (1) SU系含有除草剤は、イヌホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリに対して2葉期までしか効果がないため、登録使用時期の範囲内でやや早め(移植後10日頃まで)に使用する。
- (2) SU系除草剤抵抗性雑草に特に効果の高い成分(プロモブチド、クロメプロップ、ベンゾビシクロンなど)を含む除草剤を使用する。
- (3) SU系成分を含まない一発処理除草剤を使用する。
  - ①ダイアゾール系のピラズレート、ピラゾキシフェンを含む一発処理除草剤。
  - ②トリケトン系のテフリルトリオンを含む一発処理除草剤。
  - ③スルホンアニリド系のピリミスルファンを含む一発処理除草剤。
  - ④新SU系成分(SU抵抗性雑草にも効果のあるSU系成分)のプロピリスルフロン、メタゾスルフロンを含む一発処理除草剤。
- (4) 残草が認められた圃場では、中後期剤との体系処理を行い、次年度の種子量を減少させる。

## 7) 水田難防除雑草の防除法

多年生雑草は、種子のほか茎又は塊茎などの栄養繁殖体で越冬し、翌春そのいずれか又は両方で繁殖し、栄養繁殖の場合は水稻の初期剤や一発処理剤の効果が不十分である。特に水田の深い位置から出芽するクログワイ、オモダカ等では萌芽は極めて不揃いで長期にわたる。このため単一除草剤の一時期処理では完全防除は困難で、耕種的な防除と、除草剤の体系処理を組み合わせた総合的な防除を、数年間繰り返すことが大切である。

また近年、生産者の高齢化や兼業化に加え、除草剤成分や種類が大幅に変遷したため、以前はあまり問題にならなかったホソバヒメミソハギ、アメリカセンダングサ、タウコギ、ヒレタゴボウ、イボクサ、クサネム等の一年生大型広葉雑草が残草して問題になっている。これらは、イネの生育と競合するばかりでなく、イネの収穫期には優にイネの高さを超え、収穫に支障を来したり、クサネムのように種子が玄米に混入して品質を低下させたりすることがある。

### (1) 防除上の留意事項

ア 秋から冬にかけての圃場の排水と反転耕(プラウ耕・パワーディスク耕)は、雑草の繁殖源を深く埋没させたり、逆に寒気にさらしたりして枯死させる効果がある。特に、最強の難防除雑草と言われるクログワイは湿田での発生が多く、塊茎は乾燥に弱いため、水稻収穫後の水田の排水対策や耕起による乾田化の除草効果が高い。オモダカは比較的乾燥に強いので、耕起乾燥による塊茎の死滅は少ないが、芽部の損傷による生存塊茎数の減少が期待できるので、ロータリ耕が有効である。

イ セリ、ミズガヤツリ、コウキヤガラ、キシユウスズメノヒエは深耕と代かきによる埋没によって発生が抑制できる。特に、代かきは切断茎や塊茎が浮き上がらないように浅水でいねいに行うことが重要である。

ウ キシユウスズメノヒエは畦畔や休耕田での防除を徹底し、本田に侵入しないようにする。

エ ホソバヒメミソハギ、アメリカセンダングサ、タウコギ、ヒレタゴボウ、クサネム等の大型広葉雑草は、畦畔沿いや浅水及び田面が露出した部分に生育しやすいので、耕起・代かきをいねいに行き、水田を均平にするとともに、漏水をなくし、水をきちんと保つことで田面を水面から露出させないことが重要である。また、種子形成までに抜き取ることで次年度以降の発生を少なくできる。

オ イボクサで問題になるのは耕起・代かき前に生育したものからの再生株なので、代かきを浅水で丁寧に行い、埋没させて、再生個体数を少なくすることが重要であり、耕起前にイボクサが旺盛に生育している場合は非選択性の茎葉処理除草剤を散布して防除しておく効果的である。

カ アゼガヤは、2葉期まで湛水した場合、生育が抑制される。ただし、3葉期以降は、水没しても旺盛な生育を示す場合が多い。

キ 茎葉処理剤は、対象雑草の少ない場合には雑草茎葉へスポット処理する。

ク 難防除多年生雑草が多発している水田では、単年度処理では防除が困難なので、数年間くり返し防除する。

(2) 効果のある薬剤

ア ホタルイはSU抵抗性タイプが増えているので、スルホニルウレア系が主成分の一発処理剤の場合はプロモブチド、クロメブロップ、ベンゾピシクロンを含む剤を、あるいはピリミスルファン、プロピリスルフロロン、メタゾスルフロロン、テフリルトリオンが主成分の一発処理剤を使用する。また、中後期剤ではベンタゾン、ペノキススラム、ベンプレセート、ダイムロンを含む剤の効果が高い。

イ クログワイは、スルホニルウレア系やピリミスルファンを含む一発処理剤の効果が高い。また、中後期剤ではベンタゾン、ペノキススラム、ベンプレセート、ダイムロン、クミルロンを含む剤の効果が高い。

ウ オモダカはスルホニルウレア系やピリミスルファンを含む一発処理剤の効果が高い。また、中後期剤ではベンタゾン、ペノキススラム、ベンプレセートを含む剤の効果が高い。

エ セリはスルホニルウレア系やピリミスルファンを含む薬剤やフェノキシ系のホルモン剤の効果が高い。

オ イボクサは、スルホニルウレア系の成分が効かないので、主成分がピラゾレートやピリミスルファンの一発処理剤及びベンゾピシクロン、ブタクロール、プレチラクロール、メフェナセト、エスプロカルブを含む一発処理剤を用い、残草がある場合はホルモン作用のあるフェノキシ系の中後期剤を用いる。

カ ホソバヒメミソハギ、アメリカセンダングサ、タウコギ、ヒレタゴボウは一発処理剤の効果が切れた頃から発生するため、一発処理剤散布後の水管理を特に注意し、その後発生したものにはベンタゾン・MCPAなどの中・後期剤で防除する。タウコギは、スルホニルウレア系除草剤の中でも、特にピラゾスルフロリエチルの効果が高い。

キ クサネムには一発処理剤が有効だが、その効果が切れた頃から発生する。本薬が2枚くらいまでなら、シメリン・MCPBを含む中期剤(本指針の掲載無し)を、クサネムの草丈が30cmまでにベンタゾン・MCPAなどの中・後期剤で防除する。

(3) 除草剤使用例

雑草	耕種の防除法	薬 剤 防 除 法				注 意 事 項
		時 期	使 用 薬 剤	使用量 /10a	使用水量 /10a	
ホ タ ル イ	(1) 越冬株は初期剤の効果が低いので、代かきを浅水で丁寧に行い、株を土中に埋没させる。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	200~500ml	通常散布 50~100ℓ 少量散布 5~50ℓ	(1) 水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2) 越冬株茎葉へスポット処理する。 (3) 他の有用作物に飛散しないように散布する。 (4) 少量ノズルULV5を使用。
		移植後	ピリミスルファン、プロピリスルフロロン、メタゾスルフロロン、テフリルトリオンを主成分とする一発処理剤又はプロモブチド、クロメブロップ、ベンゾピシクロンを含む一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		
	(2) 早期栽培では稲収穫後できるだけ早く耕うんし、ホタルイの再生を抑えて種子の生産を少なくする。	移植後15日~ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1) ウ)の田植後・後期処理の項を参照のこと (2) ハイカット1キロ粒剤、ワイドアタックSC、ワイドアタックD1キロ粒剤、フォローアップ1キロ粒剤のうちいずれか1剤を使用する。 (3) ワイドアタックD1キロ粒剤とフォローアップ1キロ粒剤は同一成分。
		移植後20日(イネ5葉期以降)~ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100ml	100ℓ	
		移植後15日~ノビエ5葉期(イネ4葉期以降)まで、但し、収穫60日前まで	ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	1kg		
	水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	200~500ml	通常散布 50~100ℓ 少量散布 5~50ℓ	(1) 雑草茎葉へスポット処理する (2) 少量ノズルULV5を使用。	
	水田刈跡 雑草生育期	サンフーロン液剤	500~1,000 ml	50~100ℓ	(1) 雑草茎葉へスポット処理する。	
水田刈跡 雑草生育期/1回	サンダーボルト007	500~2,000 ml	100ℓ	(1) 雑草茎葉へスポット処理する。		

雑草	耕種の防除法	薬 剤 防 除 法				注 意 事 項
		時 期	使 用 薬 剤	使用量 /10a	使用水量 /10a	
クログワイ・オモダカ・コウキヤガラ	(1)11月～2月までに2回以上深さ15～20cmの反転耕(地下部塊茎の露出処理) (2)クログワイは稲収穫直後に5～10m間隔に排水溝を設置し、乾田化を図る。 (3)オモダカはロータリ耕が有効で、低速、高回転で塊茎の芽を損傷させると死滅する。 (4)コウキヤガラは、代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	200～500ml	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ	(1)水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散ないように散布する。
				500ml	5～25ℓ	(1)少量水ノズルULV5を使用。
		植代時又は植代後～移植前7日 移植時又は移植後～ノビエ(発生始期)1葉期	ペントキサゾン、ピラクロニル、ペノキスラム、ベンフレゼート、ダイムロン、クミルロンを含む初期除草剤	初期剤の項参照		(1)初期剤の項参照 (2)一発処理剤との体系処理を行う。その場合一発処理剤は登録範囲内の遅めに使用する。 (3)剤によって使用時期が異なるので注意する。 (4)田植え前に使用する場合は、処理後7日以上置いて田植える。
		移植後	スルホニルウレア系又はピリミスルファン、プロピリスルフロン、メタゾスルフロン、テフリトリオンを含む一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1)中後期除草剤との体系処理により効果が高い。 (2)一発処理剤の項参照 (3)初期剤との体系処理を行う場合は登録範囲内の遅めに使用する。
		移植後15日～ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1)残草がある場合に処理する。 (2)ウ)の田植後・後期処理の項を参照
		移植後20日(イネ5葉期以降)～収穫45日前まで	アトリ1キロ粒剤	1kg		(3)ハイカット1キロ粒剤、アトリ1キロ粒剤、ワイドアタックSC、ワイドアタックD1キロ粒剤、フォローアップ1キロ粒剤、グラスジンMナトリウム粒剤又は液剤のうちいずれか1剤を使用する。
		移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100ml	100ℓ	
		移植後15日～ノビエ5葉期まで(イネ4葉期以降)但し、収穫60日前まで	ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	1kg		
		水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	500～1,000ml	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ	(1)発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (2)他の有用作物に飛散しないように散布する。
		水田作物刈取後 (雑草生育期)	タッチダウンiQ	500～1,000ml	25～100ℓ	(3)2剤のうちいずれかを散布する。 (4)ラウンドアップの少量散布は少量水ノズルULV5を使用。
		水田刈跡 雑草生育期	サンフーロン液剤	500～1,000ml	50～100ℓ	(1)雑草茎葉ヘスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期/1回	サンダーボルト007	500～2,000ml	100ℓ	(1)雑草茎葉ヘスポット処理する。
		キシユウスズメノヒエ	(1)畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2)代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	500ml
				200～500ml	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ	(1)水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散ないように散布する。 (4)所定範囲の多めの薬量を使用。
水田畦畔 収穫前日まで (雑草生育期)				200～1,000ml	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ 5～25ℓ	(1)水田畦畔に使用する場合は2回以内とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散ないように散布する。
水田畦畔 収穫前14日まで (雑草生育期:草丈30cm以下)	タッチダウンiQ			500～1,000ml	50～100ℓ	(4)畦畔の完全除草は、畦畔崩壊のおそれがあるので注意する。 (5)ラウンドアップの少量散布は少量水ノズルULV5を使用。
水田畦畔 雑草生育初期(草丈10cm)及び草刈り後10～20日の雑草再生期 (但し収穫前日まで)	グラスショート液剤			300～500ml	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25L/10a	(1)水田畦畔等の抑草剤で、キシユウスズメノヒエの水田への侵入防止に効果あり。 (2)稲にかからないように注意する。
水田畦畔(雑草生育期草丈30cm以下(収穫120日前まで)	ワンサイドP乳剤			200～400ml	100～150ℓ	(1)稲にかからないように注意する。 (2)畦畔の草刈後15～20cmに再生した頃に散布すると効果が高い。
移植後15日～ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤			1kg		(1)移植前後の初期除草剤との体系で使用。

雑草	耕種の防除法	薬剤防除法				注意事項
		時期	使用薬剤	使用量/10a	使用水量/10a	
キシユウズズメノヒエ	(1) 畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2) 代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	移植後20日～ノビエの6葉期まで(収穫前30日まで)	クリンチャーEW	100ml	25～1000	(1) クリンチャーEWは、必ず展着剤を加用する。 (2) 移植前後の初期除草剤との体系で使用する。 (3) 切断茎からの再生個体は3～6葉期(草長25cm頃まで)に処理すると効果が高い。 (4) 畦畔から侵入したのものに対しては侵入1m程度までに処理すれば効果が高い。 (5) 魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後14日～ノビエ7葉期まで但し、収穫50日前まで	トドメMF乳剤	200ml	25～1000	(1) 再生茎5葉期までが散布適期。 (2) 広葉雑草が混在する場合は、有効な剤と組み合わせる。 (3) 魚類に対する注意事項を特に遵守する。
			トドメMF1キロ粒剤	1kg		
		水田畦畔 収穫14日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)	サンフーロン液剤	500～1,000ml	50～1000	(1) 雑草茎葉ヘスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	500～1,000ml	通常散布 50～1000 少量散布 5～500	(1) 発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (2) 他の有用作物に飛散しないように散布する。 (3) 2剤のうちいずれかを散布する。 (4) ラウンドアップの少量散布は少量水ノズルULV5を使用。
水田作物刈取後 雑草再生時(草丈30cm以下)	タッチダウンiQ	500～1,000ml	25～1000			
アゼガヤ	(1) 畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2) 2葉期まで湛水処理し生育抑制を狙う。	移植後20日～ノビエの6葉期まで(収穫前30日まで)	クリンチャーEW	100ml	25～1000	(1) クリンチャーEWは、必ず展着剤を加用する。 (2) 移植前後の初期除草剤との体系で使用する。 (3) 草丈60cmまでが散布適期。 (4) 魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後14日～ノビエ7葉期まで但し、収穫50日前まで	トドメMF乳剤	200ml	25～1000	(1) 草丈60cmまでが散布適期。 (2) 広葉雑草が混在する場合は、有効な剤と組み合わせる。 (3) 魚類に対する注意事項を特に遵守する。
			トドメMF1キロ粒剤	1kg		(1) 草丈20cmまでが散布適期。 (2) 広葉雑草が混在する場合は、有効な剤と組み合わせる。 (3) 魚類に対する注意事項を特に遵守する。
セリ	(1) 15～20cmの反転耕埋没処理 (2) 代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。 (3) 稲収穫直後に5～10m間隔に排水溝を設置する。	水田耕起前(雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	200～500ml	通常散布 50～1000 少量散布 25～500	(1) 水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2) 発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (3) 他の有用作物に飛散しないように散布する。
		移植後	スルホニルウレア系又はピリミスルファンを含む一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1) 草量の多い圃場では、体系防除を行う。 (2) 一発処理剤の項参照
		移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100ml	1000	(1) ウの田植後中・後期処理の項を参照 (2) 4剤のうちいずれかを散布する。
		有効分げつ終止期～幼穂形成期前 但し、収穫60日前まで	2,4-Dアミン塩	100～120g	70～1000	
		水田畦畔 収穫14日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)	サンフーロン液剤	500～1,000ml	50～1000	(1) 雑草茎葉ヘスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	500～1,000ml	通常散布 50～1000 少量散布 5～500	(1) 発生の少ない場合は茎葉ヘ、スポット処理する。 (2) 他の有用作物に飛散しないように散布する。 (3) ラウンドアップの少量散布は少量水ノズルULV5を使用。
		水田作物刈取後(雑草生育期)	タッチダウンiQ	500～1,000ml	25～1000	

雑草	耕種的防除法	薬 剤 防 除 法				注 意 事 項
		時 期	使 用 薬 剤	使用量 /10a	使用水量 /10a	
イボクサ	(1) 畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。	耕起前 (雑草生育期: 草丈30cm以下)	ザクサ液剤	300~500ml	100~150ℓ	(1) 水田への処理は耕起15日前までに処理する。 (2) 発生の少ない場合は茎葉ヘスポット処理する。 (3) 他の有用作物に飛散しないように散布する。 (4) 所定範囲で多めの薬量を使用する。 (5) 少量散布(30~40ℓ)の場合は専用ノズルを使用する。
		水田畦畔 収穫7日前まで (雑草生育期: 草丈30cm以下)		500~1,000ml	100~150ℓ	
	(2) 代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	水田畦畔 収穫14日前まで (雑草生育期: 草丈30cm以下)	タッチダウンiQ	250~500ml	50~100ℓ	
	水田作物 耕起15日前まで (雑草生育期)	バスタ液剤	300~500ml	100~150ℓ		
			水田畦畔 収穫7日前まで (雑草生育期: 草丈30cm以下)		500~1,000ml	
	移植後	スラッシュャ1キロ粒剤等	一発処理剤の項参照		(1) 一発処理剤の項参照	
	移植後30日~イボクサの茎長30cmまで(但し、収穫60日前まで)	ノミニー液剤	50~100ml	100ℓ	(1) 落水散布又はごく浅く湛水して散布	
	有効分げつ終止期~幼穂形成期前 但し、収穫60日前まで	2,4-Dアミン塩	100~120g	70~100ℓ	(1) 残草がある場合に処理する。 (2) ウの田植後・後期処理の項を参照	
アメリカセンダングサ・クサネム等	(1) 耕起・代かきをしていねいに行き、水田を均平する。	移植後	カイリキZ1キロ粒剤・キマリテ1キロ粒剤等の一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1) 一発処理剤の項参照 (2) タウコギはピラゾスルフロエチルを含む一発処理剤の効果が高い。
		移植後15日~ノビエ3,5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1) 移植前後の初期除草剤との体系で使用する。 (2) ウの田植後・後期処理の項を参照のこと (3) 左の6剤のうちいずれか1剤を使用する。 (4) 草丈が短いうち(草丈が30cm)以内で散布する。
	(2) 漏水をなくし、田面を水面から露出させない水管理を行う。	移植後20日(イネ5葉期以降)~ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100ml	100ℓ	
	(3) 種子を形成するまでに抜き取る。	移植後15日~ノビエ5葉期まで(イネ4葉期以降)但し、収穫60日前まで	ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	1kg		
		移植後30日~クサネムの草丈40cmまで(但し、収穫60日前まで)	ノミニー液剤	50~100ml	100ℓ	

## 8) 飼料用稲等に対する注意事項

2010年3月26日付けで農研機構は、飼料用イネなど新規需要米向けに開発された水稲品種の中には、ある特定の成分を含む除草剤を使うと、場合によっては枯れてしまうほどの影響が生じる品種があることを明らかにした。さらに2016年9月14日付けで、すでに報告のあった品種に加えて、その後、新たに開発された品種を加えた13品種を明らかにした。このため、報告のあった品種とそれ以降の新品種にあっても該当の除草剤成分については十分注意する必要がある。

### (1) 注意すべき3つの除草剤成分

ベンゾビシクロン、メソトリオン、テフリルトリオン

### (2) 除草剤成分の影響を強く受ける水稲13品種

「タカナリ」「おどろきもち」「モミロマン」「やまだわら」「とよめき」「オオナリ」「ソルトスター」「ハバタキ」「ミズホチカラ」「ルリアオバ」「華麗米」「夢十色」「みなちから」

### (3) 注意すべき3つの除草剤成分は、いずれも類似した作用特性を持ち白化させて枯らせる。

## 9) 雑草抑草剤利用による水田畦畔の管理

### (1) 処理等使用法

薬 剤 名	使用目的	使用時期	使用量(使用水量) /10a	使用 方法
グラスショート液剤 (ピスビロバックナトリウム塩) ナトリウム塩 3.0%)	草丈抑制による刈り取り軽減	雑草生育初期(草丈10cm)及び草刈り後10~20日の雑草再生期(ただし収穫前日まで)	300~500ml (通常散布50~100ℓ) 少量散布25ℓ/10a)	雑草茎葉散布 一年生及び 多年生雑草

### (2) 使用上の留意点

① 展着剤の加用の必要はない。



- ②雑草の生育期に薬剤が、雑草の茎葉全体に均一にかかるようにする。また、雑草が大きくなりすぎると効果が低減するので時期を失ないように散布する。
- ③散布後6時間以内の降雨は効果が減ることがあるので、天候に十分注意する。
- ④法面や傾斜地などで面積換算が難しい場合は、200倍液(例:薬液100 mLを20Lの水に希釈)を雑草の茎葉部が十分に濡れるように散布する。
- ⑤低温下では効果の発現が遅れることがある。
- ⑥カモジグサ、オヒシバ、カラスムギ等の一年生イネ科雑草が主体の場合は、抑草効果が短くなる。
- ⑦シロツメクサ、オオバコ等が優占雑草の場合は、枯殺により裸地化が生じるので使用しない。
- ⑧れんこん、くわい、いぐさ、セリや、大豆、小豆等のマメ科、なす、トマト等のナス科、きゅうり、メロン等のウリ科、はくさい、だいこん等のアブラナ科作物には薬害が強いため、周辺作物への飛散に十分注意する。
- ⑨水稻へ直接散布すると、葉の黄化や生育抑制等の薬害を生じるため注意する。

## (17) 植物成長調整剤の使用法

### (1) 処理等使用法

薬剤名 (成分名及び含量%)	使用目的	使用量(使用水量)/10a	使用時期 使用回数	使用方法	使用上の注意事項
スマレクト粒剤 (バクロプロトラゾール0.6)	節間短縮による 倒伏軽減	2~3kg	出穂7~20日前 1回	湛水 散布	(1) 散布適期を守り、均一散布を行い多量・重複散布は避ける。 (2) 散布後7日間は完全に止水し、5日間湛水状態を保ち、落水や掛け流しはしない。 (3) 本剤を使用した水田に後作として野菜類を作付けする場合は初期生育に影響することがあるので、丁寧に深く耕起する。 (4) 本剤を使用した水田の土を野菜類の育苗床土に使用しない。 (5) 黒ぼく土壌では効果が十分でない場合があるので注意する。
	登熟歩合向上	3kg	出穂10~20日前 1回		
ロミカ粒剤 (ウニコナゾールP0.04)	節間短縮による 倒伏軽減	2~3kg	出穂25~10日前 まで 1回		(1) 使用時期、使用量、使用方法を守る。 (2) 湛水条件下で均一散布する。 (3) 散布後7日間は完全に止水し、5日間湛水状態を保ち、落水や掛け流しはしない。
ビピフルフロアブル (プロヘキサジオンカルシウム塩1.0)	節間短縮による 倒伏軽減	75~100mL (通常散布50 ~150L) (少量散布25 ~50L)	出穂10~2日前 (走り穂状態) 1回	茎葉 散布	(1) 散布期間を守り、均一散布を行い多量・重複散布は避ける。
ビピフル粉剤DL (プロヘキサジオンカルシウム塩0.12)		3~4kg	出穂10~5日前 1回	散布	

### (2) 使用上の留意点

①上記の薬剤は倒伏防止剤でなく、倒伏軽減剤であり、次のような条件下では本剤を使用しても十分な倒伏軽減効果が発揮されない場合もあるので、施肥管理、水管理などの基本技術の励行を怠らないこと。

- ・火山灰、黒ぼく土壌・肥沃地・野菜や牧草栽培跡地などの地力窒素の高い圃場
- ・堆きゅう肥の多量施肥した水田

②施肥は各地域の標準的な量、時期を守り増肥を避ける。

2 麦類(大麦・小麦)病害虫防除指針

(1) 麦(裸麦)の主要病害虫の発生消長と防除体系

病害虫名	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	発生(発病)の経過等
	上中下 (播種)	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下 (出穂)	上中下 (収穫)	
縞萎縮病	汚染圃場 ↓							○土壌伝染性で、病原ウイルスは根から感染し、病土は数年間にわたって感染源になる。なお、大麦の縞萎縮病と小麦の縞萎縮病は異なるウイルスであり、前者がBaYMV、後者がWYMVとなる。
裸黒穂病	保菌種子 ↓					(種子感染) (黒穂)		○発生源は保菌種子である。菌は体内を伝わり花芽分化初期に幼穂内に侵入し、黒穂が出穂する。発病穂(黒穂)から胞子が飛散し開花中の花器に入り感染する。
斑葉病	保菌種子 ↓					(種子感染)		○発生源は保菌種子である。発芽後に子葉鞘等に侵入、順次内側の葉の基部を侵し展開とともに発病する。出穂期頃より発病葉から飛散した胞子が花に入り感染する。
黒節病	(保菌種子) ↓							○保菌種子が第一伝染源である。葉・葉鞘では、葉脈に沿って黒褐色の条斑を生じる。稈では、節が濃褐変して上下に黒い条斑が伸び、生育が劣ったり、枯死する。穂では穂焼症状を起こす。
株腐病	汚染圃場 ↓							○被害残さ、土壌より伝染する。秋季に感染・発病し、冬季は一旦停滞する。春季に発病が増大し、株元の葉鞘や麦稈に不整形な斑紋が広がり、折れ易くなって倒伏したり、枯れ上がる。
うどんこ病		飛散胞子 ↓				飛散胞子 ↓		○秋に感染発病したもの、又は前年の発病ムギワラ等で子のう殻で越冬したものが翌春の発生源となる。オオムギ菌は小麦を、コムギ菌は大麦を侵さない。
さび病類		飛散胞子 ↓						○4種のさび病が発生するが、この内、小さび病は、収穫後のこぼれ麦で越冬した夏胞子が、秋に播種された麦に寄生し越冬し、翌春の発生源となる。
赤かび病	(保菌種子) ↓					飛散胞子 ↓ 穂		○保菌種子を播種すると、発芽阻害、苗立枯れが発生する場合もある。翌春、稲ワラ、イネ刈株等から飛散する子のう胞子が穂に感染する。その発病粒からの二次感染も起こり得る。
アブラムシ類		有翅虫飛込 ↓				有翅虫飛込 ↓		○主要種はムギクビレアブラムシである。夏寄主はイネ科、冬寄主はサクラ属植物。秋に麦に寄生し越冬したもの、又は翌春桜等から飛来する有翅虫が発生源となる。

注:この図は、防除の参考となるよう、病害虫の発生を概念的に示したものである。実際の発生は、圃場観察を行い把握する。

各病害虫が発生する条件で、かつ防除対策未実施の場合を示しており、防除等で以降の発生は変化することにも留意する。

病害: ▲ 病勢進展(又は感染)時期 ▲(陰)は穂。ただし、▲(陰)は感染しても無病徴。害虫: ▲ 密度増加期。

(防除体系)

病害虫名	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	備考
	上中下 (播種)	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下 (出穂)	上中下 (収穫)	
縞萎縮病								*耕種的防除法で対応。
裸黒穂病	□							□種子消毒の効果は高い。 →本田での防除法はない。
斑葉病	□							□種子消毒の効果は高い。 →本田での防除法はない。
黒節病	□							□種子消毒の効果は有効である。
株腐病	□							*麦の生育初期に感染・発病する。播種期が早いほど、感染に適する土壌温度域の遭遇期間が長くなり、発病が多くなる。多発圃場では過度の早播を避ける。
うどんこ病						(-○-)		○は発生が多い場合。
さび病類								
赤かび病						○(○)		○は開花期(出穂期の4日後頃)。発病の増加が予想される時は、その7~10日後に第2回目。
アブラムシ類						(-○-)		○は発生が多い場合。

□は種子消毒。本田防除は、-○-は粉剤(又は液剤)。( )は、本年の発生状況により判断する。

なお、各剤とも該当病害虫に登録のある薬剤が前提となる。

本体系は基本的な発生状況を想定して組み立てたものであり、実際の体系は各地の実情を反映させたものとする。

(2) 大麦病害虫防除法

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水灌 (注)	注意事項
黒穂病類 斑葉病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 種子伝染性病害。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無病ほ場で採種。</li> <li>○ 発病穂の早期抜き取り。</li> </ul>	播種前		M5	ダコノイル	1:TPN	10~20kg/10a	は種前	1回	普	×	(作業施用土壌混和)
縞萎縮病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 土壌伝染性病害であり、種子伝染・虫媒伝染はしない。</li> <li>○ 病原ウイルスは3~15cmの比較的浅い土壌中に存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 抵抗性品種を導入する。</li> <li>○ 播種量を多めにする。</li> <li>○ 30cm程度の深耕を行う。</li> <li>○ 大麦発病地では小麦を、小麦発病地では大麦を播種する。多発ほ場では、数年間作付をしない。</li> </ul>	播種前										
黒節病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 種子伝染性病害。</li> <li>○ 暖冬で経過し、寒波が襲来した後に多い。</li> <li>○ 多肥条件や初期生育が旺盛な場合に多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無病ほ場で採種。</li> <li>○ 早播きを避ける。</li> <li>○ 多肥を避ける。</li> </ul>	播種前 生育期		M1	Zボルドー	1:塩基性硫酸銅	500倍	—	—	普	×	
株腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 秋先に感染・発病し、冬季は一旦停滞し、春季に発病増大する。</li> <li>○ 菌核や菌糸が被害残渣や土壌中で越冬し、伝染源となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 早播きを避ける。</li> <li>○ 被害残渣を適正に処分する。コンバイン刈りで残存する麦稈に伝染源となる病斑が多いため、被害茎の焼却処理は有効である。</li> </ul>				種子消毒法の項(P.79)参照							
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 暖冬で雨の多い年に発生が多い。</li> <li>○ 日照の少ない場合に発生が多くなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 窒素質肥料の過用を避ける。</li> <li>○ 厚播き、遅播きを避ける。</li> <li>○ 抵抗性品種を導入する。</li> </ul>	発病期	1		トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000~2,000倍	収穫30日前まで	3回以内(但し、出穂期以降は1回以内)	普	△	
さび病類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 暖冬で雨の多い年に発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 窒素質肥料の過用を避け、リン酸やカリ肥料を十分に施用して発病を抑制する。</li> </ul>	発病期	7		トリフミン水和剤 シルバキエルフフロアブル ワーグアップフロアブル ワーグアップフロアブル カナメフロアブル コナケシ顆粒水和剤	1:トリフルミゾール 1:フコナゾール 1:ホコナゾール 1:ホコナゾール 1:インピルフルキナム 1:ピルフェナド	1,000~2,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 3kg/10a 2,000倍 4,000倍 4,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 劇 普	△ △ ○ ○ ○ ○ △	
赤かび病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 開花から約10日間が最も感染しやすく、この時期が温暖(気温15℃以上)で連続降雨があると発生が多くなる。</li> <li>○ 防除時期は開花期。多発が予想される場合、7~10日後に2回目の防除を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 刈取り時期を早め、収穫物をすみやかに乾かす。</li> <li>○ 土入れ作業は子実の飛散を抑え、発病抑制効果がある。</li> </ul>	開花期 乳熟期	1	IB	トップジンM水和剤 トップジンM水和剤 トップジンM水和剤 スミトップM粉剤 ワーグアップフロアブル ワーグアップフロアブル トリフミン水和剤 シルバキエルフフロアブル ストロビーフロアブル ミラビスフロアブル	1:チオファネートメチル 1:チオファネートメチル 1:チオファネートメチル 1:MEP2:チオファネートメチル 1:ホコナゾール 1:ホコナゾール 1:トリフルミゾール 1:フコナゾール 1:シルバキエルフフロアブル 1:ストロビーフロアブル	4kg/10a 1,000~1,500倍 1,500倍 4kg/10a 3kg/10a 2,000~3,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 2,000~3,000倍 1,500~2,000倍	収穫14日前まで 収穫30日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで	3回以降は1回以内 3回以降は1回以内 3回以降は1回以内 1回 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ ○ ○ ○ ○ △ △ △ △ △	
アブラムシ類			期発生	1	IB	スミトップM粉剤 スミチオン乳剤	1:MEP2:チオファネートメチル 1:MEP	4kg/10a 1,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで	1回 1回	普 普	△ △	

(3) 小麦病害虫防除法

小麦

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
黒穂病類 斑葉病	○ 種子伝染性病害。 ○ 土壌伝染性病害であり、種子伝染・虫媒伝染はしない。	○ 無病ほ場で採種。 ○ 抗病性品種を導入する。 ○ 播種量を多めにする。 ○ 30cm程度の深耕を行う。 ○ 大麦発病地では小麦を、小麦発病地では大麦を播種する。多発ほ場では、数年間作付をしない。	前播種		M5	種子消毒法の項(P.79)参照 ダコソイル	1:TPN	10～20kg/10a	は種前は種前	1回	普	×	(作業施用土壌混和)
黒節病	○ 種子伝染性病害。 ○ 暖冬で経過し、寒波が襲来した後に多い。 ○ 多肥条件や初期生育が旺盛な場合に多い。	○ 無病ほ場で採種。 ○ 早播きを避ける。 ○ 多肥を避ける。	播種前			種子消毒法の項(P.79)参照							
株腐病	○ 秋季に感病。冬季は一旦停滞、春季に発病増大する。 ○ 菌核や菌糸が被害残渣や土壌中で越冬し、伝染源となる。	○ 早播きを避ける。 ○ 被害残渣を適正に処分する。コンバイン刈りで残存する麦稈に伝染源となる病斑が多いため、被害茎の焼却処理が有効。											
うどんこ病	○ 暖冬で多雨の年に多発する。 ○ 日照の少ない場合に発生が多くなる。	○ 窒素質肥料の通用を避ける。 ○ 厚播き、遅播きを避ける。 ○ 抵抗性品種を導入する。	発病期		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内(但し、出穂期以降は2回以内)	普	△	
さび病類	○ 暖冬で雨の多い年に発生が多い。	○ 窒素質肥料の通用を避け、リノ酸やカリ肥料を十分に施用して発病まん延を抑制する。	発病期		7	アシタック水和剤75	1:メコニル	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
赤かび病	○ 開花から約10日間が最も感染しやすい。この時期が温暖(気温15℃以上)で連続降雨があると発生が多くなる。	○ 刈取り時期を早め、収穫物をすみやかに乾かす。 ○ 土入れ作業は子のう胞子の飛散を抑え、発病抑制効果がある。	開花期		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内(但し、出穂期以降は2回以内)	普	△	
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○ 防除時期は開花期となる。多発が予想される場合、7～10日後に2回目の防除を実施する。		乳熟期	1B	1	トップジンM粉剤 ワーケアアップフロアブル トリブミン水和剤 シルバキエルフフロアブル ストロベリーフロアブル ペンレート水和剤 オーソナイド水和剤80 ミラビスフロアブル	1:MEP2:チオファネートメチル 1:外コナゾール 1:外コナゾール 1:トリブミン水和剤 1:ワーケアアップフロアブル 1:クレキシムメチル 1:ペンレート水和剤 1:キヤブタン 1:ヒンジアルトフェン	4kg/10a 3kg/10a 2,000～3,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 600～1,000倍 1,500～2,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで	1回 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	

(4) 麦類種子消毒法

病虫害名	種子消毒法	実施上の注意事項
裸黒穂病	1. 太陽熱消毒法 水4時間浸漬→ムシロ等に広げ日光消毒 4時間以上→陰干乾燥 2. 風呂湯浸法 当初裸麦43℃、小麦45℃→9時間後30℃→陰干乾燥	(1) 温度、時間を正確に保つ。 (2) 太陽熱消毒は、7月の晴天日中に実施し、ムシロ1枚当たり5kg以内とする。 (3) 風呂湯浸法では、残り火を完全に消し、ふたを10cmほどすかせること。
オオムギ斑葉病 オオムギ雲形病 オオムギ網斑病 その他の種子 伝染性病害	1. 塩水選 (比重) 裸麦 小麦 1.22 二条大麦 1.13	

○薬剤消毒法

農薬名	一般名	使用時期 / 使用回数	使用 方法	対象病虫害						人 毒	水 産 (注)	実施上の注意 事項	
				裸 黒 穂 病	斑 葉 病	株 腐 病	条 斑 病	雲 形 病	黒 節 病				
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	は種前/1回	種子重量の0.5%粉衣	○	○						普	○	(1) ホーマイコートは、 大麦のみ処理でき る。 (2) ベンレートT、ホ ーマイ剤、シードラッ ク剤、Zボルドーは水 産動植物に影響を及 ぼす恐れがあるので、 残液は魚介類などに 影響のないように処 理する。 (3) 機械は種の場合に は、コート剤を使用す る。
ベンレートT 水和剤20	チウラム・ ベノミル	は種前/1回	乾燥種子重量の0.5%粉衣	○	○		○	○			普	×	
			20倍 10～20分間浸漬	○	○		○						
			200倍 6～24時間浸漬	○	○		○						
ベンレートT コート	チウラム・ ベノミル	は種前/1回	乾燥種子重量の0.5%粉衣	○	○	○	○			普	△		
ホーマイ水和剤	チウラム・ チオファネートメチル	は種前/1回	種子重量の0.5～1.0%粉衣		○					普	△※		
200倍 6～24時間浸漬					○								
ホーマイコート	チウラム・ チオファネートメチル	は種前/1回	種子重量の2～3%粉衣		○					普	×		
シードラック 水和剤	銀	は種前/1回	乾燥種子重量の0.5～1.0% 粉衣(湿粉衣)							○	普	△	
			20倍 10分間浸漬								○		
Zボルドー	塩基性硫酸銅	は種前/ー	種子重量の1%湿粉衣							○	普	×	

(5) 麦類雑草防除法(裸麦・小麦)

1) 麦作雑草防除の留意点

ア は種前～は種後出芽前における茎葉処理(非選択性)

- ・既発雑草の葉齢が高い場合(あきたこまち跡や耕起からの日数が経過しているなど)は、は種後に雑草が活着し、再発生しやすいため、あらかじめ非選択性の茎葉処理剤で殺草しておく。

イ は種直後の土壌処理

- ・麦は種直後の土壌処理剤は、土壌表面に除草剤の処理層を形成し、初期雑草を殺草する効果が高いため必ず実施する。またその際は、耕起は適湿の時に丁寧に行い土を細かくし、は種後はできるだけ早く散布する。
- ・激しい降雨が予測される場合は、薬害が発生したり薬剤処理層が壊れ殺草効果が低下するため、使用をさける。
- ・細粒剤を使用する際は、土が過乾燥の場合、殺草効果が低下するので適湿条件で処理する。
- ・は種深度が浅い場合(2cm未満)や覆土が十分でない場合は、薬害が発生するため極端な浅播きは避ける。

ウ 麦生育期の処理(選択性)

- ・雑草の発生状況や草種に応じて薬剤を選定し、雑草生育期に雑草葉齢が高くなりすぎないうちに散布する。

エ その他

- ・は種後の土塊が荒いと除草剤による薬害がでやすいので、稲刈り取り後は排水溝を設けるなどして乾田化につとめ、は種後の砕土性を高める。
- ・年々雑草の発生が多くなっている所ではプラウ耕によって雑草種子を埋設させ、発生を抑える。
- ・ドリル播き栽培の条間が広い場合は雑草が繁茂しやすいので、できるだけせまくする。
- ・排水不良田は雑草が繁茂しやすいので、排水を徹底する。
- ・土入れ作業は、後期に発生する雑草抑制の効果が高いので、溝さらえもかねて実施する。

2) 除草剤成分と適用草種

成分名	作用機構と 薬害症状	毒性		一年生イネ科	スズメノカタビラ	スズメノテツボウ	カズノコグサ	一年生広葉	ヤエムグラ	薬剤名(注)
		人畜	水産(注)							
プロスルホカルブ	脂質合成系阻害 発芽及び生育阻害	普	△	●	●	●	◎	●	●	ボクサー、 キックボクサー細粒剤F
ベンチオカーブ	光合成阻害 葉枯れ、生育抑制	普	△	●		●		●		クリアターン乳剤、 サターンバアロ乳剤
トリフルラリン	細胞分裂阻害 発芽抑制	普	△	●			◎	●		トレファノサイド乳剤、 コンボラル、ガレーズG

成分名	作用機構と 薬害症状	毒性		一年生イネ科	スズメノカタビラ	スズメノテッポウ	カズノコグサ	一年生広葉	ヤエムグラ	薬剤名(注)
		人畜	水産(注)							
ペンディメタリン	細胞分裂・細胞伸長阻害 出芽生育抑制	普	△	●	●			●		ゴーゴーサン乳剤、カイ タック乳剤、コンボラル、 クリアターン乳剤
プロメトリン	長鎖脂肪酸合成阻害 生育抑制	普	△	●		●		●		サターンバアロ乳剤
チフェンスル フロンメチル	ALS 阻害(アミノ酸系) 生育抑制	普	○	●	◎	●		●	●	ハーモニー75DF 水和剤、 ハーモニーDF 水和剤
リニュロン	光合成阻害 黄化・褐変	普	△	●				●		カイタック乳剤、クリア ターン乳剤、 <b>キックボク サー細粒剤 F</b>
ジフルフェニカン	カロチノイド合成阻害 白化	普	△	○				●	◎	ガレース G、 リベレーターフロアブル・G
フルフェナセット	細胞分裂阻害 出芽生育抑制	普	△	●	●	●	●		◎	リベレーターフロアブル・G
ベンタゾン	光合成阻害 黄化・斑点	普	○	×				●	●	バサグラン液剤
ピラフルフェンエチル	PPO阻害(クロロフィル系) 褐変	普	△	×				●	●	エコパートフロアブル
アイオキシニル	光合成・呼吸阻害 生育抑制、黄化	普	△	×				●	●	アクチノール B 乳剤

●極大 ◎大 ○中 ×効果なし(公財)日本植物調節剤研究協会の薬剤特性表を参考に作成  
薬剤名の太字に下線表記の剤は、水産の表記が異なる(キックボクサー細粒剤F「○」)。

### 3) 除草体系

	播種前	播種直後	麦 生 育 期
体系①	—	土壌処理剤	選択性の除草剤を処理(草種に応じ、薬剤を選定する) ・ハーモニー75DF水和剤:スズメノテッポウ5葉期、カズノコグサ3葉期まで ・アクチノールB乳剤:ヤエムグラ2~4節まで ・エコパートフロアブル:広葉雑草2~4葉期 ・バサグラン液剤:広葉雑草3~6葉期
体系②	茎葉処理剤 (非選択性)	土壌処理剤	
体系③	—	土壌処理剤 茎葉処理剤	

### 4) 除草剤使用法

ア は種前~は種後出芽前の茎葉処理剤(非選択性)

薬 剤 名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使用上の注意
サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0	麦類(小麦を除く) (1年生雑草) 耕起7日前まで(雑 草生育期) /3回 小麦 (1年生雑草) 耕起7日前まで(雑 草生育期) /1回 (多年生雑草)	250~500ml (50~1000)  500~750ml (50~1000)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず 出芽前に散布すること。
ラウンドアップ マックスロード	グリホサートカリウム塩 48.0	麦類 (1年生雑草) 耕起又はは種前 (雑草生育期) /3回 は種後出芽前 (雑草生育期) /3回 (1年生雑草及び多 年生イネ科雑草) は種後出芽前 (雑草生育期) /3回 耕起前又は播種前 まで(雑草生育期) /3回	200~500ml (少量散布5~ 250)  200~500ml (少量散布5~ 250)  200~500ml (通常散布50 ~1000 少量散布25~ 500)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず 出芽前に散布すること。 (4)少量散布時は専用のラウンドノズルULV5を使用する こと。
パスタ液剤	グルホシネート 18.5	大麦・小麦 は種前 は種後出芽前 (雑草生育期) /1回	大麦 300~500ml (100~1500) 小麦 は種前 300~750ml (100~1500) は種後出芽前 300~500ml (100~1500)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず 出芽前に散布すること。

タッチダウン i Q	グリホサートカリウム塩 43.0	大麦 耕起又はは種前 /3回 は種後出芽前 (雑草生育期: 草丈30cm以下) /1回  小麦 耕起又はは種前 (雑草生育期) は種後出芽前 (雑草生育期: 草丈30cm以下) /1回	250~500ml (25~100ℓ)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
レグロック	ジクワットジプロミド 31.8	麦類 は種5-10日前 (雑草生育期) /1回	400ml (70~100ℓ)	(1)は種後には使用できない。 (2)展着剤は非イオン系を使用する。 (3)広葉雑草への効果は強いが、葉齢の大きいイネ科雑草に対してはやや効果が劣るので、所定範囲内の薬量で多めに使用する。
クサクリーン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0	麦類(小麦を除く) (1年生雑草) 耕起7日前まで (雑草生育期) /1回  播種後出芽前 (雑草生育期) /1回	250~500ml (100ℓ)  250~500ml (25~100ℓ)	(1)雑草の発生前処理効果はない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。

イ 播種後の土壌処理剤

薬 剤 名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使用上の注意
トレファノサイド乳剤	トリフルラリン 44.5	麦類 は種後出芽前~3 葉期 (雑草発生前~雑 草発始)	250~300ml (100ℓ)	(1)整地は丁寧に行いは種後鎮圧する。 (2)砂質土壌では使用しない。 (3)不耕起播には使用しない。 (4)粒剤は風の影響で散布ムラにならないよう朝夕の風のない時に散布する。
トレファノサイド 粒剤2.5	トリフルラリン 2.5	/2回	4~5 kg	
サターンバアロ乳剤	ベンチオカーブ 50.0 プロメトリン 5.0	麦類 は種直後後出芽前 (雑草発生前)	500~750ml (70~100ℓ)	(1)雑草が発生してからは効果が劣るので、必ず雑草の発生前に散布する。 (2)作物の生育期に散布すると薬害が発生するので散布しない。 (3)隣接作物に薬液がかからないように、注意して散布する。
サターンバアロ粒剤	ベンチオカーブ 8.0 プロメトリン 0.8	小麦・大麦 麦4葉期まで (スズメノテッポウ 1.5葉期まで)	3~5 kg	(1)土壌が極端に乾燥していると効果が劣るのであらかじめ散水する等土壌に適度な湿度を持たせて散布する。 (2)イネ科雑草に比べ広葉雑草には効果が不十分な場合があるので、広葉一年生雑草の優占する圃場では所定範囲内の多めの薬量を使用する。
ゴーゴーサン乳剤30	ベンディメタリン 30.0	麦類 は種後出芽前 (雑草発生前) /1回  小麦 は種後~麦2葉期 (イネ科雑草発 生前~雑草1葉期) /1回	300~500ml  麦類 (70~150ℓ) 小麦 (70~100ℓ)	(1)土壌が乾燥している場合は、希釈水量を増加する。 (2)雑草の発生前処理を行う。
ゴーゴーサン細粒剤F	ベンディメタリン 2.0	麦類 は種後出芽前 (雑草発生前) /1回	5~6 kg	
カイタック乳剤	ベンディメタリン 15.0 リニュロン 10.0	大麦・小麦 は種直後 (雑草発生前)	500~800ml (70~100ℓ)	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。 (3)排水不良田での使用は避ける。
カイタック細粒剤F	ベンディメタリン 1.5 リニュロン 1.0	/1回	5~6 kg	
クリアターン乳剤	ベンチオカーブ 50.0 ベンディメタリン 5.0 リニュロン 7.5	大麦・小麦 は種直後 (雑草発生前)	500~700ml (70~100ℓ)	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)整地は丁寧に行いは種後鎮圧する。 (3)砂質土壌では使用しない。 (4)乳剤は隣接作物に薬液がかからないように注意し散布する。
クリアターン細粒剤F	ベンチオカーブ 8.0 ベンディメタリン 0.8 リニュロン 1.2	/1回	4~5 kg	
ボクサー	プロスルホカルブ 78.4	麦類 は種後~麦2葉期 (雑草発生前~雑 草発始期) /1回	400~500ml (70~100ℓ)	(1)雑草葉齢が進むと効果が低下するため、雑草発始期に早めに散布する。 (2)一過性の薬害(黄斑、縮葉)を生ずることがあるがその後の生育に影響はない。 (3)排水不良田での使用は避ける。 (4)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。
キックボクサー細粒剤 F	プロスルホカルブ 7.0 リニュロン 1.75	大麦・小麦 は種後出芽前 (雑草発生前) /1回	3~4 kg	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)一過性の薬害(黄斑、縮葉)を生ずることがあるがその後の生育に影響はない。 (3)砂質土壌では使用しない。 (4)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。
コンボラル	トリフルラリン 1.2 ベンディメタリン 1.2	麦類 は種直後 /1回	4~6 kg	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。 (3)排水不良田での使用は避ける。



ガレスG	ジフルフェニカン 0.15 トリフルラリン 2.0	大麦・小麦 は種後～麦2葉期 まで(雑草発生前 ～雑草発生始期) /1回	4～5kg	(1)砂質土壌では使用しない。 (2)排水不良田での使用は避ける。 (3)散布後まれに麦の葉身に白斑が見られることがある。
リベレーターG	フルフェナセット 0.60 ジフルフェニカン 0.20	小麦(秋播栽培)大 麦(秋播栽培) (一年生雑草) は種後～麦2葉期( 雑草発生前～イネ 科雑草1葉期まで /1回	4～5kg	(1)雑草発生前からイネ科雑草1葉期までで時期を失しない。 (2)砂質土壌、排水不良田、過湿状態での使用は避ける。 (3)処理後、多量の雨が予想される場合は使用を避ける。 (4)使用により葉身に白化や黄化などがみられる場合がある。
リベレーター フロアブル	フルフェナセット 33.6 ジフルフェニカン 8.4	小麦 大麦(秋播栽培) (一年生雑草) は種後～麦3葉期( 雑草発生前～イネ 科雑草1葉期まで) /1回	60～80m l (100ℓ)	

ウ 麦生育期の処理剤 (選択性)

薬 剤 名	成分名及び含量 (%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使用上の注意
アクチノールB乳剤	アイオキシニル 30.0	麦類 穂ばらみ期まで (雑草生育初期) 雑草茎葉散布または 全面散布 /2回	100～200ml (70～100ℓ)	(1) ヤエムグラが出揃い、2～4節期になった頃(1～2月)を目安に散布する。 (2) ヤエムグラに特効的であるが、イネ科雑草には効果がない。 (3) 水産動植物に影響を及ぼす恐れがあるので残液や噴霧器の洗い水を川などに流さないこと。
エコパートフロアブル	ピラフルフェンエチル 2.0	大麦・小麦 収穫45日前まで 節間伸長開始期まで (広葉雑草2～4葉期) 雑草茎葉または全 面散布 /2回	50～100ml (100ℓ)	(1) 広葉にのみ有効であるので、イネ科雑草に有効な土壌処理剤などの体系で使用する。 (2) ヤエムグラに対して効果が高い。 (3) 展着剤を加用しない。 (4) 麦踏み後の数日間は避ける。 (5) 有機リン剤との近接散布は薬害の恐れがあるので避ける。
ハーモニー75DF 水和剤 ハーモニーDF水和剤	チフェンスルフロメチル 75.0	大麦・小麦 は種後～節間伸長 前 (スズメノテッポウ 5葉期まで) 雑草茎葉または土 壌散布 /1回	5～10g (100ℓ)	(1) 薬量が少ないのでよくかき混ぜてから均一に散布する。 (2) 飛散の少ない専用ノズルを使用するなど、隣接作物に薬液がかからないように散布する(薬害)。 (3) 使用器具は、使用後に消石灰500倍による水洗いを行う。 (4) 効果は遅効的で枯死に至るまで約3週間を要する。
ハーモニー細粒剤F	チフェンスルフロメチル 0.15	大麦・小麦 は種後～麦3葉期 (雑草発生前～発 生始期) 全面土壌散布 /1回	4～5kg	(1) 砂質土、排水不良田、降雨前後には使用しない。 (2) まきむらのないよう丁寧に散布する。 (3) 隣接作物に飛散しないように注意する。 (4) 散布器具は、散布後に砂等を通して洗浄する。 (5) 本剤を使用した圃場では、ハーモニー75DF水和剤は使用しない。
バサグラン液剤	ベンタゾンナトリウム塩 40.0	大麦 収穫90日前まで 小麦 収穫45日前まで 雑草茎葉または全 面散布 /1回	100～200ml (70～100ℓ)	(1) 広葉にのみ有効であるので、イネ科雑草に有効な土壌処理剤などの体系で使用する。 (2) キンボウゲ類に対して効果が高い。 (3) 高温、晴天時に効果が高い。 (4) 散布後、曇天、降雨日が長く続くとう効果が劣ることがある。

エ 圃場内周縁の茎葉処理 (非選択性)

薬 剤 名	成分名及び含量 (%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使用上の注意
ラウンドアップ マックスロード	グリホサートカリ ウム塩 48.0	麦類 圃場内の周縁部 収穫前日まで (雑草生育期) /3回	200～500ml (通常散布50～100ℓ 少量散布5～50ℓ)	(1) 雑草の発生前処理は効果がない。 (2) 展着剤を加用しない。 (3) 作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
バスタ液剤	グルホシネート 18.5	大麦・小麦 圃場内の周縁部 収穫7日前まで(雑草生育期) / は種後は3回	300～500ml (100～150ℓ)	(1) 雑草の発生前処理は効果がない。 (2) 展着剤を加用しない。 (3) 作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
タッチダウン i Q	グリホサートカリ ウム塩 43.0	大麦 圃場内の周縁部 雑草生育期但し、収穫7日前まで (草丈30cm以下) /3回 小麦(秋播) 圃場内の周縁部 雑草生育期但し、収穫3日前まで (草丈30cm以下) /1回	250～500ml (25～50ℓ)	(1) 雑草の発生前処理は効果がない。 (2) 展着剤を加用しない。 (3) 作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。

## 5) カラスノエンドウ対策

カラスノエンドウの種子が麦に混入すると、乾燥調製時及び精麦加工時にも除去が困難なため、麦の実需者から、徹底した混入防止を強く要望されている。また、ダラダラ発生する特性等から完全に抑草できる有効な除草剤が無い。このため、カラスノエンドウの除草には薬剤処理や耕種的防除及び人力による抜き取り等体系的な防除が必要である。

- ア は種直後の土壤処理剤を必ず処理する。またその際は、ガレスGやゴゴサン乳剤・ゴゴサン細粒剤Fが比較的有効である。
- イ 生育期処理はアクチノールB乳剤が比較的有効であり、カラスノエンドウの2～3葉期までに散布する。
- ウ 本草は薬剤だけでは除草が困難であるので、土入れや抜き取り作業により完全除草に努める。
- エ 本草は畦畔などに繁茂しているものが、圃場内に侵入する事が多いので、畦畔の除草を徹底して行う。
- オ 本草は種前から出芽したり、除草剤の効力が低下する麦の生育後半に出芽するなど、出芽期間が長く、特に麦の出穂期頃から急に繁茂して、種子を成熟させるので、特に茎立ち期前の土入れにより発生、生育を抑制する。
- カ 麦の穀粒に混入したカラスノエンドウ種子は、乾燥後のグレーダ調製時では除去が極めて困難なため、コンバイン収穫時の刈り込み混入を防止する必要がある。そのため、収穫前に必ず抜き取って完全除去を行う。抜き取り時期は、麦の黄熟前ではカラスノエンドウの識別が困難で、収穫直前では抜き取り時に麦茎葉の損傷が大きくなるので、黄熟直後に行うのが望ましい。
- キ 収穫時にはコンバイン上から圃場をよく観察し、発見した場合は必ず抜き取ってから収穫作業を再開する。
- ク カントリーエレベーターやライスセンターなどの大型共同乾燥施設では、収穫前の立毛調査で、カラスノエンドウ発生圃場を確認し、荷受け開始前の完全除去に努める。また、荷受け時の調査を強化して、カラスノエンドウ種子の混入を防ぎ、全体の品質が低下しないように努める。
- ケ 麦にカラスノエンドウ種子が混入した場合は、色彩選別機や揺動選別機による除去が比較的有効であるが、除去の効率が悪く、時間がかかるうえに麦のロスも大きい。
- コ 自家採種種子からの発生拡大があるので、種子更新を励行する。

## 6) カズノコグサ対策

- ア は種直後にボクサー、キックボクサー細粒剤F、リベレーターフロアブル、リベレーターG等の土壤処理剤を必ず処理する。
- イ 湿潤条件でカズノコグサが発生しやすいので、排水溝などの排水対策を励行する。
- ウ 生育期に使用するハーモニー75DF水和剤は、カズノコグサ3葉期までに散布し、土壤処理剤との体系処理とする。
- エ 土入れや麦踏みを実施し、耕種的防除に努める。
- オ カズノコグサの発生が多い圃場は、次年度の種子を減らすことから、抜き取りを実施する。
- カ 麦を早播きすると発生が多くなるため、11月中～下旬の適期は種に努める。

## 7) スズメノテッポウ対策

スズメノテッポウは、東北以南の水田・麦作圃場に広く発生するイネ科の強害雑草である。本種は、最近、各地でトリフルラリン剤に抵抗性をもつタイプ、チフェンスルフロンメチル剤に抵抗性をもつタイプ、両方ともに抵抗性をもつタイプが確認されている。本種が多発している圃場では、は種前の非選択性除草剤防除と浅耕は種を組み合わせた防除体系が効果的である。

- ア 麦は種前の本種の発芽をより多くするために、水稻収穫後にできるだけ速やかに一度5cm程度の浅耕で耕起する。
- イ 水稻収穫後から麦類をは種するまでの間に土壤表層から発生したスズメノテッポウを非選択性除草剤で防除し、土壤表層のスズメノテッポウの種子が少ない状態にする。は種を遅らせ、スズメノテッポウの発生を十分に促してから防除するとより効果的である。
- ウ 下層にある種子を表層に移動させないように、5cm程度の浅耕もしくは不耕起で麦をは種する。
- エ 麦は種後には、ボクサー、キックボクサー細粒剤F、リベレーターフロアブル、リベレーターG等の土壤処理除草剤をできるだけ速やかに散布する。

### 3 大豆病虫害防除指針

#### (1) 莢の生育と病虫害発生時期

開花後日数	7月	8月	9月	10月	11月	
	播種	開花期 10日後 20日後 30日後 40日後 50日後 60日後				
莢の生育	莢生体重(子実含む)の増加の推移					
	莢伸長の推移					
	子実肥大の推移					
主要病虫害の発生時期	ウイルス病					
	紫斑病					
	ダイズサヤタマバエ					
	マメシクイガ					
	シロイチモジマダラメイガ					
	ウコンノメイガ					
	ハスモンヨトウ					
	カメムシ類					
注意事項	<p>生育ステージは、フクユタカを7月22日播種、8月31日開花日をモデルとした。          ウイルス病および紫斑病は主な感染時期を示す。          ダイズサヤタマバエは、開花終期頃に産卵し莢伸長初期にかけて加害する。          マメシクイガは山間地に発生する。          シロイチモジマダラメイガは、莢伸長終期～子実肥大初期にかけて産卵し子実を加害する。          ウコンノメイガは、7～9月に発生が多い。          ハスモンヨトウの被害は9～10月に多い。          カメムシ類は、莢伸長終期から子実肥大終期にかけての吸汁が特に多い。          ○基幹防除は、子実肥大初期から、10～15日おきに、2回程度実施する。</p>					



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	防除薬剤				濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項				
							一般名	FRAC コード	使用薬剤	一般名										
べと病	(発生の特徴) ○ 発病が激しい時は落葉し、被害が大きいの。 ○ 密植を避け通風をよくする。 ○ 施肥に注意し過繁茂を避ける。 ○ 罹病植物を除去。 ○ 連作を避ける。		生育期		27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:ジモキニル2:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△								
					M3	ベンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	400倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△								
					M3	ジマンダイゼン水和剤	1:マンゼブ	400倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△								
					27+40	バトファアイトー顆粒水和剤	1:ジモキニル2:ベンチアハリカルブ/イノピレ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○								
					27+11	ホライズランドフロアブル	1:ジモキニル2:ファモキサト	2,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※								
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○ ウイルス病に弱い品種(丹波黒など)では早期防除を徹底。 ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺の除草を行う。 ○ シルバーテープ等の展張は有翅虫の飛来防止に有効である。 ○ 前作や作付け前の雑草に産卵され生育した幼虫が加害源になるので、作付け予定地では予め除草		前播種	4A	12+4	クルーザーM1AAXX	1:チアチアハル2:フルジノキニル3:チアチアハル	原液8m0/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	○	○ 塗抹処理 ○ ハトの忌避にも登録がある。 ○ 作条施用土壌混和 ○ 土壌表面散布土壌混和処理 ○ 土壌表面散布 ○ 土壌表面株元処理 ○ 株元散布 ○ 合ヒレ(注)(P.15) ○ 株元散布							
					1B	スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△								
					4A	アクタラ顆粒水和剤	1:チアチアハル	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△								
					4A	ダントゾ水和剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△								
					4A	ダントゾフロアブル	1:クロチアニジン	2,500～5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△								
					4A	モスピラン顆粒水和剤	1:アセメシプロ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△								
					9B	コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	4,000～6,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△								
					4A	クルーザーFS30	1:チアチアハル	原液6m0/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	△								
					4A	クルーザーM1AAXX	1:チアチアハル2:フルジノキニル3:チアチアハル	原液8m0/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	○								
					ネキリムシ類			播種前	4A											



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ダイズサヤ タマバエ	(防除上のポイント) ○ 莢又は虫体により薬剤 がつかかるよう散布。	○ 適期の範囲内で遅まきす る。	着莢期	1B 4A 4A 4A 4A 4A 3A 3A 15	1	スミトップM粉剤 スミチオン乳剤 アルバリン顆粒水溶液 スタークル顆粒水溶液 スタークル粉剤DL アルバリン粉剤DL スタークル液剤10 トレボン粉剤DL トレボン乳剤 カスケード乳剤	1:MEP2:オオアネートメチル 1:MEP 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:エトフェンプロックス 1:エトフェンプロックス 1:フルフェナキサロン	3～4kg/10a 1,000倍 2,000倍 2,000倍 3kg/10a 3kg/10a 1,000倍 4kg/10a 1,000倍 4,000倍	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで	4回以内 4回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ 合ビレ(注)(P.15) ○ 合ビレ(注)(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15)
マモンク イガ	(発生の特徴) ○ 年1回発生し、孵化幼 虫が莢に食入して子 実を加害する。 (防除上のポイント) ○ 散布剤を1～2回散布 する。	○ 連作を避ける。		1B 1B 1B 4A 4A 4A 28 28 15 5	1	スミトップM粉剤 スミチオン乳剤 マラソン乳剤 トクチオン乳剤 ダントツ水溶液 ダントツフロアブル モスヒラン顆粒水溶液 フェニックス顆粒水溶液 フレバシアンフロアブル5 ヨーバルフロアブル カスケード乳剤 ティアナSC	1:MEP2:オオアネートメチル 1:MEP 1:マラソン 1:プロチオホス 1:クロチアニジン 1:クロチアニジン 1:アゼキサメト 1:フルベンジミド 1:クロラントリリアロール 1:テトラリアロール 1:フルフェナキサロン 1:スピネタム	3～4kg/10a 1,000～1,500倍 1,000倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,500倍 2,000～4,000倍 2,000倍 4,000倍 5,000～10,000倍 4,000倍 2,500～5,000倍	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	4回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 劇 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ 合ビレ(注)(P.15)
シロイチモ ジマダラム イガ	(発生の特徴) ○ 孵化幼虫が莢内に食 入し子実を加害する。	○ 適期の範囲内で遅まきす る。	着莢期 実肥大期	1B 1B 1B 3A+1B	1	スミトップM粉剤 スミチオン乳剤 トクチオン乳剤 パーマチオン水溶液	1:MEP2:オオアネートメチル 1:MEP 1:プロチオホス 1:フェンハレール2:MEP	3～4kg/10a 1,000倍 1,000倍 1,000～2,000倍	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫30日前まで 収穫21日前まで	4回以内 4回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 劇	△ △ △ ×	○ 合ビレ(注)(P.15)
フキノメイ ガ(アズキ ノメイガ)	(発生の特徴) ○ 8月上旬、10月中旬に 発生が多い。		生育期	3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤					注意事項					
				IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産 (注)		
ウコンノメイ ガ	(発生の特徴) ○ 播種時期の早い圃場 や葉色の濃い圃場で 発生が多い。 ○ 被害は8～9月に多 い。	○ 適期の範囲内で遅まきす る。	葉 の 巻 き 始 め 初 期	1B 3A 3A 15 28 28 28 4A		スミチオン乳剤 トレボン乳剤 アデイオン乳剤 カスケード乳剤 フレバノンフロアブル5 フェニックスフロアブル ヨートラルフロアブル ダントツH粉剤DL	1-MEP 1:エトフェンプロックス 1:ベルメト 1:フルフェキサゾン 1:クロラントニリアロール 1:フルベシジメト 1:テトラニリアロール 1:クロチニシン	1,000倍 1,000倍 3,000倍 4,000倍 4,000倍 4,000倍 5,000倍 4kg/10a	収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	4回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	△ × × △ △ △ △ △	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15)	
ハスモンヨ トウ	(発生の特徴) ○ 葉色の濃い場合に被 害が多くなる。 (防除上のポイント) ○ 系統の違う薬剤をロー テーション使用。 ○ 若齢幼虫期に薬剤散 布。 ○ 秋期増前の世代が 幼虫時期である8月中 下旬頃の防除が重 要	○ 白変葉(ふ化幼虫の集団 加害葉)の発生に注意し 除去。	生 育 期	22A un 28 28 28 28 22B 6 18 18 15 15 18 15 5		トルネードエースDF プレオフロアブル フェニックス顆粒水和剤 フェニックスフロアブル フレバノンフロアブル5 ヨートラルフロアブル アケセルフロアブル アニキ乳剤 ロムダン粉剤DL ロムダンフロアブル ノーモルト乳剤 アタプロン乳剤 マツチ乳剤 マトックフロアブル カスケード乳剤 ディアナSC	1:イトキヤカルブ 1:ピリダリル 1:フルベシジメト 1:フルベシジメト 1:クロラントニリアロール 1:テトラニリアロール 1:メタルミン 1:レピメクチン 1:テプフェジメト 1:テプフェジメト 1:テフルベシメト 1:クロラントニリアロール 1:ルフェキサゾン 1:クロマフェジメト 1:フルフェキサゾン 1:スピネトラ	2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 4,000倍 5,000～10,000倍 1,000～2,000倍 2,000～3,000倍 4kg/10a 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 3,000倍 2,000～3,000倍 4,000倍 2,500～5,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	○ △ △ △ △ △ ○ △※ △ ○ ○ ○ △ △ △ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ △	○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15) ○ IGR剤注意事項(P.15)	
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 高温、乾燥で増加す る。		発 生 期	6 15		コロマイト乳剤 カスケード乳剤	1:ミルベメクチン 1:フルフェキサゾン	1,500倍 4,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内	普 普	△※ △	○ IGR剤注意事項(P.15)	
センチュウ 類		○ 発生ほ場での連作回避	は 種 前			土壌病害虫の防除法の項(P.295)参照 クロルピクリン剤の登録がある								



### (3) 大豆雑草防除法

#### 1)大豆雑草防除上の留意点

- ①土壌処理型除草剤の抑草期間は約30日で、効果低減後は中耕培土や生育期・畝間処理除草剤で除草する。
- ②出芽時に湿害を受けると大豆の生育が悪くなり、雑草が繁茂するので、湿害対策を徹底する。

#### 2)除草剤と適用草種

薬 剤 名	成分名 含量(%)	使用時期	一年生広葉雑草										毒性		
			メ ヒ シ バ	オ ヒ シ バ 等	ア カ ザ	ヒ ユ	タ デ	キ ク 科	カ ヤ ツ リ グ サ	ツ ユ ク サ	タ ネ ツ ケ バ ナ	ノ ミ ノ フ ス マ ・ ハ コ ベ	マ メ 科	人 畜	水 産 (注)
サターニアアロ乳剤	ベンチオカーブ 50.0 プロメトリン 5.0	は種後出芽前	◎	◎	○	◎	○	△ △ ○	◎	◎	◎	◎	△	普	△
トレファノサイド粒剤2.5 トレファノサイド乳剤	トリフルラリン 粒剤2.5 乳剤44.5	は種後出芽前/生 育期	◎	◎	◎	◎	△	-	-	-	◎	×	普	△	
クリアターン乳剤	ベンチオカーブ 50.0 ペンディメタリン 5.0 リニューロン 7.5	は種直後(雑草発 生前)	◎	◎	◎	◎	△	○	◎	◎	◎	△	普	△	
エコトップP細粒剤F エコトップP乳剤	ジメテナミドP 粒剤1.0 乳剤8.5 リニューロン 粒剤1.4 乳剤12.0	は種後出芽前(雑 草発生前)	◎	◎	-	◎	△	-	◎	○	-	◎	-	普	○ △
ラクサー粒剤 ラクサー乳剤	アラクロール 粒剤4.0 乳剤30.0 リニューロン 粒剤1.04 乳剤12.0	は種後出芽前(雑 草発生前)	◎	◎	-	◎	◎	◎	◎	○	-	◎	-	普	△
ブロールプラス乳剤	ジメテナミドP 6.7 ペンディメタリン 6.5 リニューロン乳剤 11.4	は種後出芽前(雑 草発生前)	◎	◎	-	◎	◎	◎	◎	◎	-	-	-	普	△
ボルトフロアブル	キザロホップエチル 7.0	雑草生育期 イネ科雑草3～10 葉期	◎	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	普	×
セレクト乳剤	クレトジム 24.0	雑草生育期 イネ科雑草3～8葉 期	◎	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	普	○
ホーネスト乳剤	テパラロキシジム 10.0	雑草生育期 イネ科雑草3～5葉 期	◎	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	普	○
ワンサイドP乳剤	フルアジホップP 17.5	雑草生育期 イネ科雑草3～5葉 期	◎	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	普	△
ナブ乳剤	セトキシジム 20.0	雑草生育期 イネ科雑草3～8葉 期	◎	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	普	×
ワンクロスWG	フルアジホップP 7.0 リニューロン水和剤 30.0	は種後出芽前/本 葉3葉期以降雑草 生育期	◎	◎	-	◎	◎	-	-	-	-	-	-	普	△
パワーガイザー液剤	イマザモックスアンモニウム塩 0.85	出芽直前～3葉期 まで/雑草発生揃 期～2葉期	◎	◎	◎	◎	◎	△	△	×	-	◎	△	普	○

◎残草量=0～10% ○残草量=11～20% △残草量=21～40% ×=ほとんど効果なし

#### 3)除草剤使用法

##### ア は種・定植前

薬 剤 名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用上の注意
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 耕起前又は出芽前まで(雑草生育期)	200～500ml (通常散布50～100ℓ) (少量散布5～50ℓ)	(1)散布直後の降雨は効果を減ずるので、天候を見極めて散布する。 (2)雑草生育期に有効であるが、雑草が大きくなると効果が劣るので時期を失わないとともに、薬液が雑草全体によく付着するように散布する。 (3)ラウンドアップマックスロードを少量散布する際は、専用のラウンドスズルULV5を使用すること。 (4)ザクサ液剤は、豆類(種実)ただし、らつかせいを除く登録である。
タッチダウンiQ	【雑草茎葉散布】 耕起又は、は種7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	250～500ml (25～50ℓ)	
サンフーロン液剤	【雑草茎葉散布】 は種10日以前(雑草生育期)	250～500ml (25～50ℓ)	
パスタ液剤	【雑草茎葉散布】 は種前、定植5日前まで(雑草生育期)	300～500ml (100～150ℓ)	
ザクサ液剤	【雑草茎葉散布】 は種、定植前(雑草生育期)	300～500ml (100～150ℓ)	

##### イ は種後出芽前

薬 剤 名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用上の注意
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 出芽前まで(雑草生育期)	200～500ml (通常散布50～100ℓ) (少量散布5～50ℓ)	(1)必ず大豆の出芽前に使用する。 (2)ラウンドアップマックスロードを少量散布する際は、専用のラウンドスズルULV5を使用すること。
サンフーロン液剤	【雑草茎葉散布】 は種後出芽前まで(雑草生育期)	250～500ml (25～50ℓ)	
タッチダウンiQ	【雑草茎葉散布】 は種後出芽前(雑草生育期:草丈30cm以下)	250～500ml (25～100ℓ)	

薬 剤 名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用上の注意
バスタ液剤	【雑草茎葉散布】 は種後出芽前(雑草生育期)	300～500ml (100～150ℓ)	(1)必ず大豆の出芽前に使用する。
サターンバアロ乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前	600～800ml (70～100ℓ)	(1)3cm程度の覆土をして使用する。 (2)隣接作物に薬液がかからないように注意して散布する。
クリアターン乳剤	【全面土壌散布】 は種直後(雑草発生前) 定植3日前まで(雑草発生前)	500～800ml 500～700ml (70～100ℓ)	(1)砕土、整地、覆土は丁寧に、覆土深は必ず2～3cmとし、軽く鎮圧した後に散布する。
トレフアナサイド粒剤2.5 トレフアナサイド乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前又は定植前(植穴掘前) 【畦間土壌散布】 生育期(収穫45日前まで)	粒剤 4～6kg 乳剤 200～300ml(100ℓ)	(1)雑草の発生前使用。 (2)マルチ栽培では使用しない。 (3)散布は日中を避け、夕方か曇りの日に行う。 (4)風のない時に散布する。 (5)残液を川や池に流さない。
ラクサー粒剤 ラクサー乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	粒剤 4～6kg 乳剤 400～600ml(100ℓ)	(1)散布後に多量の雨があると薬害の恐れがある。 (2)蚕に対して影響があるので、桑葉にかからないように散布する(乳剤)。
エコトップP細粒剤F エコトップP乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	粒剤 4～6kg 乳剤 400～600ml(100ℓ)	(1)雑草の発生前使用。 (2)目、皮膚に刺激性あり。
ブロールプラス乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	400～600ml (70～150ℓ)	(1)散布後に多量の雨があると薬害の恐れがある。 (2)蚕に対して影響があるので、桑葉にかからないように散布する。 (3)目、皮膚に刺激性あり。
ワンクロスWG	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	250～300g (100ℓ)	(1)目に刺激性あり。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるので使用しない。

ウ 生育期・畦間処理

薬 剤 名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用上の注意
ボルトフロアブル	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～10葉期(収穫30日前まで)	200～300ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (3)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
セレクト乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期(収穫50日前まで)	35～50ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失しないように均一に散布する。 (3)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
		イネ科雑草5～8葉期(収穫50日前まで)	
ホーネスト乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで)	75～100ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失しないように均一に散布する。 (3)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (4)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
ワンサイドP乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期(収穫60日前まで)	75～100ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失しないように均一に散布する。 (3)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (4)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
ナブ乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期:イネ科雑草3～5葉期(収穫30日前まで)	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (3)大豆バサグラン液剤との混用は効果が低下する。 (4)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
		イネ科雑草6～8葉期(収穫30日前まで)	
タッチダウンiQ	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫前日まで)	250～500ml (25～50ℓ)	(1)散布直後の降雨は効果を減ずるので、天候を見極めて散布する。 (2)雑草生育期に有効であるが、雑草が大きくなると効果が劣るので時期を失しないとともに、薬液が雑草全体によく付着するように散布する。 (3)ザクサ液剤は、豆類(種実)ただし、らっかせいを除く登録である。
バスタ液剤	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫28日前まで) 本葉5葉期以降雑草生育期:株間処理(収穫28日前まで)	300～500ml (100～150ℓ)	(1)砂質で水はけのよい畑では薬量を控える。また、激しい降雨が予想される時は使用しない。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがある。 (3)専用ノズルを使用し、大豆の葉にかからないように散布する。
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫前日まで)	200～500ml (通常散布50～100ℓ) (少量散布25～50ℓ)	
クサクリーン液剤	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畝間処理(収穫前日まで)	250～500ml (通常散布50～100ℓ) (少量散布25～50ℓ)	
ザクサ液剤	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫28日前まで)	300～500ml (100～150ℓ)	
ワンクロスWG	【畝間・株間処理】 本葉3葉期以降 雑草生育期(草丈15cm以下)(収穫45日前まで)	200～300g (100ℓ)	
パワーガイザー液剤	【雑草茎葉散布又は全面土壌散布】 出芽直前～3葉期まで(雑草発生前始期～2葉期) 【畝間雑草茎葉散布】 生育期(雑草発生揃期～2葉期)(収穫30日前まで)	200～300ml (100ℓ)	

エ 落葉終期から収穫前処理

薬剤名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用上の注意
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 落葉終期～収穫14日前まで(雑草生育期)1回	500ml (50～1000)	(1)落葉終期とは、だいたいの葉の大部分が落葉した時期とする。 (2)だいたいの着生葉や莢色に淡緑色が残っている等の成熟の遅れた株(青立株)に散布すると、子実の変色やしわ粒等が発生する場合がありますので、散布前に除去等を行うこと。 (3)水分含量の高い実をつけた雑草では、茎葉が枯れても実が残る場合があります。汚損粒の原因となるので収穫前に除去等を行うこと。また、雑草の茎水分含量が高い場合も汚損粒の原因になるので収穫前に除去等を行うこと。 (4)気温の低下する条件での処理であり、効果の完成まで2週間以上の期間を要するので、収穫時期は処理後3週間を目安とする。

4)大豆バサグラン液剤について

バサグランは、ベンタゾン有効成分とする除草剤で、日本では1975年にベンタゾン酸が水稲分野で登録された。その後、「酸」から「ナトリウム塩」に変更し継続試験され、1986年より麦類・とうもろこし等の畑作分野に使用場を拡大した。大豆分野においても1975年より試験を開始したが、大豆品種により薬害の発生を認め、実用化には至らなかった。その後、水田転換作物として大豆栽培が拡大し、高収量・高品質でかつ農作業の省力化が求められ、広葉雑草防除対策の要望が現場より高まった。このような背景により、改めてバサグラン液剤の大豆への適用性が各試験機関で精力的に検討され、品種ごとの薬剤感受性や薬害助長要因などが明らかにされてきた。大豆への薬害が懸念される中、安全使用の徹底を図るために、本剤は大豆専用剤として2005年4月6日に「大豆バサグラン液剤」の商品名で新規に登録された。

適用雑草及び使用方法

薬剤名 (成分名及び含量(%))	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用回数 (総使用回数)	適用雑草名
大豆バサグラン液剤 (ベンタゾン 40.0)	【雑草茎葉散布又は全面散布】 だいたいの2葉期～開花前(雑草の生育初期～6葉期)ただし 収穫45日前まで	100～150ml (1000)	1回 (2回)	畑地一年生雑草(イネ科を除く)
	【畦間雑草茎葉散布】 だいたいの生育期(雑草の生育初期～6葉期)ただし収穫45 日前まで	300～500ml (1000)	1回 (2回)	

※薬害について

本剤の使用により、だいたいの葉に斑点、色抜け、黄変、縮葉症状の一過性の薬害を生じる。また、薬害の程度および薬害の回復は品種により異なり、減収となる場合もある。したがって、使用については、事前に農業振興課等指導機関の講習を受けなければ、薬剤の購入はできないので注意する。

※使用上の注意点等

- 土壌処理剤との体系処理で使用する。
- 土壌処理剤との体系で使用することで、対象雑草の生育ステージが揃いやすくなり、除草効果が安定する。
- ベンタゾンを含め光合成阻害剤は、処理時および処理後の気象条件によって作物および雑草に対する活性が異なり、一般に低温・曇天時には活性が低く、高温・晴天時には高くなる傾向があるため、薬害回避を重視する場合には前者の条件で、効果発揮を重視する場合は後者の条件で処理する。
- また、降雨が予想される場合には散布を避ける。
- イネ科雑草が混在する場合は、イネ科雑草に有効な除草剤との体系で使用する。
- 大豆バサグランは所定の葉期を越えると効果が劣り、使用時期が早いと後次発生した雑草を抑えることができないため、雑草の3～6葉期までに使用する。
- 大豆の葉に隠れている雑草にも、直接かかるように株元までしっかり散布する。
- 大豆バサグランの効果が劣るエノキグサ、アカザ、シロザ、イヌビユ、ホソアオゲイトウ等が優占する圃場では使用を避ける。

5)アタックショット乳剤について

アタックショット乳剤は2018年2月28日に登録された、フルチアセトメチル有効成分とするだいたいの用茎葉散布除草剤で、シロザ、アオゲイトウ等のヒユ科、ヒロハフウリンホオズキ、イヌホオズキ等のナス科雑草、イチビに高い効果を示す。本剤は光要求型の除草剤に分類され、光を受けることにより速効的に枯死に至る。なお、植物体内での移行性はない。

適用雑草及び使用方法

薬剤名 (成分名及び含量(%))	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量/10a)	使用回数 (総使用回数)	適用雑草名
アタックショット乳剤 (フルチアセトメチル 2.0)	【雑草茎葉散布または全面散布】 だいたいの2葉期～開花前(雑草生育期) ただし収穫45日前まで	30～50ml (1000)	1回 (1回)	畑地一年生雑草(イネ科を除く)

※薬害について

本剤の使用により、だいたいの葉に褐変、縮葉等の一過性の薬害を生じる。薬害の程度およびその後の回復は品種、気象条件、栽培条件により異なるため、だいたいの生育不良の場合または生育不良が予想される場合には使用を避ける。散布液が霧状になると薬害が強くなるため、除草剤用のドリフト低減ノズルを使用する。また、重複散布及び展着剤の加用は避ける。使用については、事前に農業振興課等指導機関の講習を受けなければ、薬剤の購入はできないので注意する。

※使用上の注意点等

- 発生前の雑草に対する土壌処理効果はないので、土壌処理剤との体系処理で使用する。
- イネ科雑草が混在する場合は、イネ科雑草に有効な除草剤との体系で使用する。
- アタックショット乳剤の効果が劣るキク科、カヤツリグサ科等が優占する圃場では使用を避ける。
- アタックショット乳剤の散布適期は雑草生育期(草丈10cm以下)であり、生育の進んだ雑草には効果が劣るので、時期を失しないように散布する。
- 大豆の葉に隠れている雑草にも、直接かかるように株元までしっかり散布する。
- 処理後6時間以内の降雨は効果を減ずることがあるので、天候をよく見極めてから処理する。



## 4 果 樹

4 果樹病害虫防除指針  
 (1) 果樹病害虫防除時期  
 (かんきつ類)

品種	12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		
	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	
温州みかん					灰色かび病 そうか病	そうか病						黒点病・小黒点病	黒点病・小黒点病	黒点病・小黒点病			黒点病 黒点病・小黒点病	黒点病	黒点病・小黒点病			貯蔵病害	貯蔵病害		
					かいよう病	かいよう病					かいよう病	かいよう病													
中晩柑													黒点病・小黒点病	黒点病・小黒点病	黒点病・小黒点病					黒点病・小黒点病				貯蔵病害	
かんきつ																									

(落葉果樹)

作物別	12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
病害								炭疽病 うどんこ病						落葉病 炭疽病 灰色かび病											
虫害									枝幹雪虫																
病害																									
虫害																									

作物別	12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
病害							せん孔細菌病		せん孔細菌病 黒星病・うどんこ病	せん孔細菌病 (落弁直後) 灰星病(落弁直後) ボミアシ腐敗病(落弁直後)			炭疽病		せん孔細菌病								せん孔細菌病	
虫害								カイアシ類 アブ類			カイアシ類 アブ類			シクリイシ類		シクリイシ類								
病害																								
虫害																								



作物別	12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
病害					赤星病	赤星病	黒星病	赤星病	黒星病	赤星病	赤星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病	黒星病			
虫害																								
病害																								
虫害																								
病害																								
虫害																								

作物別	12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下		
病害	ごま色斑点病																									
虫害																										
病害																										
虫害																										
病害																										
虫害																										

(2) 果樹病害虫防除法

[1] かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除法のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		人水産 毒(注)	注意事項			
									使用時期/使用回数	使用回数					
(耕種的防除法) ○排水をよくし、冠水防止。 ○株間を広くとり、苗木間の風通しをよくする。 ○発病部分の早期除去。 5月～7月															
とう か 病 (発生の特徴) ○5～7月の多雨で多発しやすい。 (防除法のポイント) ○予防散布を原則とし、降雨前に実施。 (防除法のポイント) ○通風、日当りを良くする。 ○密植を避ける。 ○越冬病斑を除去。 (防除法上の留意点) ○ICボルドーは、樹勢の弱い樹は使用しない。 沈殿しやすいので、使用時は良く攪拌。	4 新 中 旬 1 c m 下 旬	P7	アリエツァイ水和剤	1:ボセチル	400倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○近接散布(無機銅・前7・後14日)					
	3 3+11	M1	マネブZDF ナチオンボフロアブル	1:イモンゴゾール 1:アプコナール2:トリフロキシストロピン	6,000倍 1,500倍	収穫30日前まで/3回以内 収穫前日まで/3回以内	普	△	○パラフィン系展着剤加用						
	M1	M1	ICボルドー66D フジドールフロアブル	1:塩基性硫酸銅 1:塩基性硫酸銅	80倍 500倍	—/— —/—	普	△	○炭酸カルシウム加用						
	M1	M1	ムンジュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	—/—	普	△	○炭酸カルシウム加用						
	M1	M1	クマガードSC	1:水酸化第二銅	500倍	—/—	普	△	○炭酸カルシウム加用						
	M1	M1	クプロンゴールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—/—	普	△	○炭酸カルシウム加用						
	M1	M1	キノンドー顆粒水和剤	1:有機銅	1,000倍	収穫30日前まで/3回以内	普	×	○かぶれ注意						
	M9	M9	デランプフロアブル	1:ジチアン	1,000倍	収穫30日前まで/3回以内	普	×	○かぶれ注意						
	7	7	フルーツセイバー	1:ペンチオザト	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	劇	○							
	7	7	ハレート15フロアブル	1:ピラジナゾール	3,000倍	収穫7日前まで/2回以内	普	○							
	7	7	ケンジャフロアブル	1:イクアクト	1,500倍	収穫7日前まで/3回以内	普	○							
7	7	カナメフロアブル	1:インゼルキルカム	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	劇	△								
11	11	ストロビーードライフロアブル	1:クレキシムタール	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	普	△								
11	11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピラヒンカルブ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	普	△								
11+7	11+7	ナリアWDDG	1:ピラホスピロ2:ボスカド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	普	△※	○かぶれ注意(10日間圃場禁止)・葉害(シモン)							
29	29	フロンスサイドSC	1:フルアジテム	2,000倍	収穫30日前まで/1回	普	×	○かぶれ注意(10日間圃場禁止)・葉害(シモン)							
M1	M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	800倍	収穫30日前まで/3回以内	普	×								
(次の散布は200-250mmの降雨後または30日以内に散布する薬剤) M3 ジマンダイセン水和剤 M3 ベンコゼブ水和剤 M3 エムダフアア水和剤 (残効性が劣るので次の散布を早める薬剤) M1 オキシンドー水和剤80 M1 キノンドー水和剤80 M9 デランプフロアブル															
5 下 旬 7 月	M3	M3	M3	M1	M1	M9	(次の散布は200-250mmの降雨後または30日以内に散布する薬剤) 1:マンセブ 1:マンセブ 1:マンセブ (残効性が劣るので次の散布を早める薬剤) 1:有機銅 1:有機銅 1:有機銅	600倍 600倍 600倍 800倍 800倍 1,000倍	収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/2回以内 収穫30日前まで/3回以内 収穫30日前まで/3回以内 収穫30日前まで/3回以内	普 普 普 普 普 普	△ △ △ × × ×	○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意			
(次の散布は200-250mmの降雨後または30日以内に散布する薬剤) M3 ジマンダイセン水和剤 M3 ベンコゼブ水和剤 M3 エムダフアア水和剤 (残効性が劣るので次の散布を早める薬剤) M1 オキシンドー水和剤80 M1 キノンドー水和剤80 3+11 ナチオンボフロアブル 11+7 ナリアWDDG 11 ファンタジスタ顆粒水和剤 11 ストロビーードライフロアブル															
中 温 州 柑 み 柑 1 月 中 旬 8 月 中 旬 5 月 1 旬 0 5 月 9 月 中 旬	M3	M3	M3	M1	M1	3+11 11+7	1:マンセブ 1:マンセブ 1:マンセブ (残効性が劣るので次の散布を早める薬剤) 1:有機銅 1:有機銅 1:アプコナール2:トリフロキシストロピン 1:ピラホスピロ2:ボスカド 1:ピラヒンカルブ 1:クレキシムタール	600倍 600倍 600倍 800倍 800倍 1,500倍 2,500倍 4,000倍 2,000倍	収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/2回以内 収穫30日前まで/3回以内 収穫30日前まで/3回以内 収穫前日まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ × × △ △※ △ △	○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意			
黒 点 病	(防除法上のポイント) ○8月下旬以降多雨なら、9月中・下旬に追加防除。 ○防除法上の留意点(P.153)参照	○枯枝除去。 ○剪定枝を圃の近くに放置しない。処理できない場合は、ピニール等で被覆。	5 下 旬 7 月	M3	M3	M3	M1	M1	M9	(次の散布は200-250mmの降雨後または30日以内に散布する薬剤) 1:マンセブ 1:マンセブ 1:マンセブ (残効性が劣るので次の散布を早める薬剤) 1:有機銅 1:有機銅 1:有機銅	600倍 600倍 600倍 800倍 800倍 1,000倍	収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/2回以内 収穫30日前まで/3回以内 収穫30日前まで/3回以内 収穫30日前まで/3回以内	普 普 普 普 普 普	△ △ △ × × ×	○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数		人水産 毒(注)	注意事項
									かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん		
小黒点病	(防除上のポイント) ○8月下旬以降多雨なら、9中・下旬に追加防除。 ○防除上の留意点(P.153)参照	○枯枝除去。 ○剪定枝を圃の近くに放置しない。処理できない場合、ビニール等で被覆。	5月7月下旬	M3	M3	ジマンダクサイセン水和剤 ベンコゼブ水和剤 エムダクワイアー水和剤	1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:マンネブ	600倍 600倍 600倍	収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/4回以内 収穫90日前まで/2回以内	収穫30日前まで/4回以内 収穫30日前まで/4回以内 収穫60日前まで/2回以内	普 普 普	○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意
			11+7	M3	M3	ナリアWDG	1:ピラロクストロン2:ボスカード	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○かぶれ注意
かきよう病	(防除上のポイント) ○発芽前の散布を徹底(ただし、収穫前の散布は、果実に薬斑の恐れ。)○落弁直後までの防除を徹底。 ○ハモグリガ防除を徹底。  (防除上の留意点) ○銅水和剤・ICボルドー剤は単用とし、霧を細かくして行い、しずくが落ちる程は散布しない(薬害軽減)。 ○ICボルドーは、樹勢の弱い樹や異常低温(3月)が予想される場合は使用しない。 ○高温時(6月中旬以降)薬害の恐れ。沈殿しやすいので、使用時は良く攪拌。	○風の強い所は防風対策。 ○被害枝葉除去。 ○秋枝は処分。	3月(発芽前)	M1	M1	コサノド3000 ムンジュボルドーDF フジトールフロアブル クプロシールド クミガードSC	1:水酸化第二銅 1:塩基性硫酸銅 1:塩基性硫酸銅 1:塩基性硫酸銅 1:水酸化第二銅	1,000倍 500倍 500倍 1,000倍 500倍	発芽前/— —/— —/— —/— —/—	発芽前/— —/— —/— —/— —/—	普 普 普 普 普	○近接散布・薬害(注)
			4月下旬	M1	M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	40倍	—/—	—/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	Zボルドー	1:塩基性硫酸銅	700倍	—/—	—/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	コサノド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	生育期/—	生育期/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	ムンジュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	フジトールフロアブル	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	2,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	クミガードSC	1:水酸化第二銅	1,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	カッパマイン2水和剤	1:水酸化第二銅	1,000倍	収穫45日前まで/5回以内	収穫7日前まで/5回以内	普	○近接散布・薬害(注)
			5月上旬	M1	M1	カスミンボルドー	1:水酸化第二銅	1,000倍	収穫45日前まで/5回以内	収穫7日前まで/5回以内	普	○近接散布・薬害(注)
かいよう病	(防除上のポイント) ○銅水和剤・ICボルドー剤は単用とし、霧を細かくして行い、しずくが落ちる程は散布しない(薬害軽減)。 ○ICボルドーは、樹勢の弱い樹や異常低温(3月)が予想される場合は使用しない。 ○高温時(6月中旬以降)薬害の恐れ。沈殿しやすいので、使用時は良く攪拌。	○風の強い所は防風対策。 ○被害枝葉除去。 ○秋枝は処分。	5月下旬	M1	M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	80倍	—/—	—/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	キセンセット水和剤	1:水酸化第二銅2:有機銅	600倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	80倍	—/—	—/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	コサノド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	生育期/—	生育期/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	ムンジュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	2,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	200倍	—/—	—/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	マイコンシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	収穫30日前まで/2回以内	収穫60日前まで/2回以内	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	コサノド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	生育期/—	生育期/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害
			5月下旬	M1	M1	ムンジュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—/—	—/—	普	○近接散布(マン油14日)・薬害

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		水産 人毒 (注)	注意事項
									かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん		
灰色かび病	(発生の特徴) ○開花期の天候不順で多発しやすい。 ○天候不順が続くときは追加防除。 ○耐性菌発現に留意。	○園内が多湿にならないようにする。	5月 (満開後旬)		2	スミレックス水和剤	1:プロシント	3,000倍	収獲30日前まで/2回以内	収獲30日前まで/3回以内	△	○耐性菌注意 ○かぶれ注意(10日間入園禁止)・葉害(レモン)
					3	オーシヤイン水和剤	1:オキホコナゾール・フルアル酸塩	2,000倍	収獲7日前まで/5回以内	収獲前日まで/5回以内	○	
					3+11	ナテオーボフロアブル	1:テブコナゾール・2:トリプロキシストロビン	1,500倍	収獲前日まで/3回以内	収獲前日まで/3回以内	△	
					7	フルーツセイバー	1:ベンチオゼット	2,000倍	収獲前日まで/3回以内	収獲前日まで/3回以内	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ボスカド	1,500倍	収獲14日前まで/3回以内	収獲14日前まで/3回以内	○	
					7	パレード15フロアブル	1:ピラシアナド	3,000倍	収獲7日前まで/2回以内	収獲7日前まで/2回以内	○	
					7	ケンジャフロアブル	1:イワダシ	3,000倍	収獲7日前まで/3回以内	収獲7日前まで/3回以内	○	
					7	カナメフロアブル	1:インピルキサム	4,000倍	収獲前日まで/3回以内	収獲前日まで/3回以内	△	
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:シプロシニル2:フルジ・オキソニル	3,000倍	収獲45日前まで/2回以内	収獲7日前まで/3回以内	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	4,000倍	収獲14日前まで/3回以内	収獲14日前まで/3回以内	△	
					11	ストロベードライフロアブル	1:クレキシスタチル	2,000倍	収獲14日前まで/3回以内	収獲14日前まで/3回以内	△	
炭疽病	(発生の特徴) ○日焼けによる果皮障害が発生を助長 ○枯枝が伝染源。 ○年内に感染、年明けに発症(河内晩柑など)。	○枯枝除去。 ○果実陽光面の日焼け防止。	6月		52	フロリアWDG	1:ピラフロストロビン2:ボスカド	2,500倍	収獲14日前まで/3回以内	収獲14日前まで/3回以内	△※	○かぶれ注意(10日間入園禁止)・葉害(レモン)
					29	フロリサイドSC	1:フルアジナム	2,000倍	収獲30日前まで/1回	収獲30日前まで/1回	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:イワフルエキ	4,000倍	収獲前日まで/3回以内	収獲前日まで/3回以内	○	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	600倍	収獲90日前まで/4回以内	収獲30日前まで/4回以内	△	
					3+11	ナテオーボフロアブル	1:マンゼブ	600倍	収獲90日前まで/4回以内	収獲30日前まで/4回以内	△	
					11+7	ナリアWDG	1:テブコナゾール・2:トリプロキシストロビン	1,500倍	収獲前日まで/3回以内	収獲前日まで/3回以内	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピラフロストロビン2:ボスカド	2,000倍	収獲14日前まで/3回以内	収獲14日前まで/3回以内	△※	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ホセチル	400倍	収獲前日まで/3回以内	収獲前日まで/3回以内	△	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	600倍	収獲90日前まで/4回以内	収獲30日前まで/4回以内	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	600倍	収獲90日前まで/4回以内	収獲30日前まで/4回以内	△	
					貯蔵病害	(発生の特徴) ○スプリンクラー・灌水園や水田監視園などで発生しやすい。 (防除上のポイント) ○予防散布を原則とし降雨前に実施。	○発病果を早期除去。 ○排水に努め、敷ワラやマルチ等で雨水のはねあがりを防止。	8月 下旬		10	レーバスフロアブル	
21	ライメイフロアブル	1:アミスター	3,000倍	収獲前日まで/3回以内						収獲前日まで/3回以内	△	
40	レーバスフロアブル	1:マンジプロバシ	2,000倍	収獲前日まで/3回以内						収獲前日まで/3回以内	○	
M7	ペンレート水和剤	1:ペンシル	4,000倍	収獲前日まで/2回以内						収獲前日まで/4回以内	△	
M7	ベフラン液剤25	1:イミダジジン酢酸塩	2,000倍	収獲前日まで/2回以内						収獲前日まで/5回以内	△	
M7	バルクートフロアブル	1:イミダジジン酢酸塩	2,000倍	収獲前日まで/2回以内						収獲前日まで/3回以内	△	
M7+1	ベムトップジンフロアブル	1:イミダジジン酢酸塩2:チオファネートメチル	1,500倍	収獲前日まで/2回以内						収獲7日前まで/3回以内	△	
1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	2,000倍	収獲前日まで/5回以内						収獲前日まで/5回以内	△	
1	トップジンMフル	1:チオファネートメチル	2,000倍	収獲前日まで/5回以内						収獲前日まで/5回以内	△	
1	ベムトップジンフロアブル	1:イミダジジン酢酸塩2:チオファネートメチル	1,500倍	収獲前日まで/2回以内						収獲7日前まで/3回以内	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤				水産 毒(注)	注意事項	
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名			濃度 (使用量)
ミカンハダニ	○ミカンハダニの防除の要点(P.150)参照 (留意点) ○マイトナー、ダニエモン、パロックの感受性が低下している園地がみられる。		12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬 (物理)	マンシ油乳剤(95%)	1:マンシ油	45倍	冬期/ー	普	
			6月	コロマイト水和剤 パロックフロアブル メビウスフロアブル マイトナーフロアブル ダニエモンフロアブル ダニグッターフロアブル スターマイトフロアブル スターマイトプラスフロアブル	1:ミルベメクチン 1:エトキサゾール 1:アハメクチン2:エトキサゾール 1:ピフェナセート 1:スピロジクロフェン 1:スピロボクサフェン 1:シエンピラフェン 1:シエンピラフェン2:ピリダバン	2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 4,000倍 2,000倍 3,000倍 1,000倍	収穫7日前まで/2回以内 収穫14日前まで/2回以内 収穫14日前まで/2回以内 収穫7日前まで/1回 収穫7日前まで/1回 収穫7日前まで/1回 収穫7日前まで/1回 収穫7日前まで/1回	普 普 劇 普 普 普 普 劇	○ 乗害(高温時) ○ 近接散布(Cボルドー) ○ 近接散布(Cボルドー) ○ 近接散布(Cボルドー) ○ 近接散布(Cボルドー) ○ 近接散布(Cボルドー) ○ 近接注意(クワンマイト・スターマイト) ○ 近接注意(クワンマイト・スターマイト) ○ 回数注意(ダニエモン・アフロートエース) ○ 回数注意(ダニエモン・アフロートエース)
			6月中旬～下旬	NC 高度精製マンシ油乳剤(97%製剤)	1:マンシ油	150倍	銘柄により異なる/ー	普	○ 梅雨明け直後に早めに散布
			7月						
			8月中旬～8月下旬						
			9月下旬～10月中旬						
			10月下旬	コロマイト水和剤 エコービタ液剤 アカリタッチ乳剤 フーモン	1:ミルベメクチン 1:還元澱粉糖化物 1:プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル 1:ポリグリセリン脂肪酸エステル	2,000倍 300倍 2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで/2回以内 収穫前日まで/ー 収穫前日まで/ー 収穫前日まで/ー	普 普 普 普	○ 乗害(高温時) ○ 使用法(参考資料P.30)参照。 ○ 使用法(参考資料P.30)参照。 ○ 使用法(参考資料P.30)参照。 ○ 使用法(参考資料P.30)参照。
			11月	NC オオマイト水和剤	1:調合油 1:BPSS	500倍 750倍	収穫前日まで/ー 収穫14日前まで/2回以内	普	○ 混合注意(ベフワン)・乗害(着色期) ○ 銅剤混用不可・銅剤近接散布(効力低下・6ヶ月以上空ける)
			33	ダニオナーテフロアブル	1:アジナパビル	3,000倍	収穫7日前まで/2回以内 収穫前日まで/1回	普	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤				FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数		人 毒 (注)	注意事項
			IRAC コード	時期	かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん								
ミカンサビダニ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○微小な害虫のため肉眼観察は難しい。 高温乾燥(少雨)条件下で多発しやすい。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○前年発生園では、早めに散布。 ○9月は高温乾燥が続く場合に散布。</p>		5月	6	アグリメック	1:アバクチン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	△	○ 剤型は乳剤	<p>○ 葉害(高温時)</p> <p>○ 近接散布(ICボルドー)</p> <p>○ 葉害(肥大期～着色期)</p> <p>○ 回数注意(リーズン)</p> <p>○ 回数注意(マッチ・アカタ)</p> <p>○ 刺激(眼)</p> <p>○ 刺激(眼)</p> <p>○ 回数注意(アプロード・ダブルフェース)</p> <p>○ 近接散布(ICボルドー)、葉害(イネ)</p> <p>○ 葉害(イネ)</p> <p>○ 回数注意(ケンマイ・スターマイト)</p> <p>○ 近接散布(ICボルドー)</p> <p>○ 回数注意(タニコング・アプロードエース)</p> <p>○ 天敵への影響大</p> <p>○ 葉害(高温時)</p> <p>○ 近接散布(マン油)、葉害(高温時)、混用注意(マン油)</p>		
			6月	6	コロマト水和剤	1:シルベリタチン	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△※				
			6月	6	アニキ乳剤	1:レピタチン	3,000倍	収穫3日前まで/4回以内	収穫前日まで/4回以内	△※				
			6+10B	6	メビウスフロアブル	1:アバクチン2:エキサゾール	3,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△				
			12C	12C	オマイト水和剤	1:BPFS	750倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△※				
			13	13	コテツフロアブル	1:クロルフェニル	6,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△※				
			15	15	マッチ乳剤	1:ルフェスロン	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	△				
			4A+15	4A+15	リーズン顆粒水和剤	1:チアトキサム2:ルフェスロン	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	△				
			21A	21A	サンマイト水和剤	1:ピリダベン	3,000倍	収穫3日前まで/2回以内	収穫3日前まで/2回以内	×				
			21A	21A	ハチハチフロアブル	1:トリアエンピゾラ	3,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	×				
			21A+16	21A+16	アプロードエースフロアブル	1:フェニピロキシメト2:アプロアジン	2,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	×				
			23	23	ダニエモンフロアブル	1:スピロジカロフェン	6,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	○				
			23	23	ダニゲッターフロアブル	1:スピロジフェン	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	△				
			23	23	モベントフロアブル	1:スピロトキサト	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	○				
			25A+21A	25A+21A	スターマイトブラッサフロアブル	1:エビピラフェン2:ピリダベン	1,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	×				
			25B+21A	25B+21A	ダブルフェースフロアブル	1:ピフルアミド2:フェニピロキシメト	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	△				
			30	30	グレーシアフロアブル	1:フルキサタミド	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△				
34	34	ファインセーブフロアブル	1:フロキサキ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	×							
un	un	モレスタン水和剤	1:キリリン系	1,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫7日前まで/3回以内	△							
un	un	イオウフロアブル	1:硫黄	400倍	発生初期/ー	発生初期/ー	○							
un	un	園芸ボルドー	1:硫酸2:塩基性塩化銅	500倍	ー/ー	ー/ー	△							
7月			5月～6月の薬剤と同じ (モレスタン水和剤、アプロードエースフロアブル、イオウフロアブル、園芸ボルドー、モベントフロアブルを除く)											
8月														
9月														

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										水産 毒 (注)	注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)		使用時期/使用回数		劇 毒		
								かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん					
チャノホコリダニ	<p>(発生の特徴) ○微小な害虫のため、肉眼観察は難しい。 高温乾燥(少雨)条件下で多発しやすい。 ○新梢被害に注意し、発生初期に防除。  (防除上のポイント) ○発生園では、落弁5～10日後に第1回目散布。 ○レモンは開花期が長く、被害を受けやすい。常発地では、幼果期に2回散布。</p>	○施設内では発生源になる野菜を植栽しない。	5月下旬	6		アグリメック	同一殺ダニ剤は原則年1回の使用とする。 1:アバダチン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	△	○ 剤型は乳剤 ○ かぶれ注意(10日間入園禁止)・葉害(レモン) ○ 刺激(眼) ○ 刺激(眼) ○ 回数注意(アプロード・ダブルアース) ○ 近接散布(ICボルドー)、葉害(イネ) ○ 葉害(イネ) ○ 近接散布(ICボルドー) ○ 回数注意(リノサイト・スターマイト) 近接散布(ICボルドー) ○ 回数注意(ニコノグ・アプロード・アース) ○ 天敵への影響大 ○ 葉害(高温時) ○ 近接散布(マシン油)、葉害(高温時)、混用注意(マシン油) ○ 炭酸カルシウム加用		
			5月下旬	6		アニキ乳剤	1:レピカチン	4,000倍	収穫3日前まで/4回以内	収穫3日前まで/4回以内	△※			
			5月下旬	13		コテツフロアブル	1:コロバエナベル	6,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△※			
			6月上旬	21A	29	フロンスイトSC	1:フルアジナM	2,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫30日前まで/1回	×			
						サンマイト水和剤	1:ピリダベン	3,000倍	収穫3日前まで/2回以内	収穫3日前まで/2回以内	×			
						ハチハチフロアブル	1:トルアセゾド'	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	×			
			6月上旬	21A+16	39	アプロードエースフロアブル	1:フェニロキシメト2:プロプロフェジン	2,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	×			
						ダニエモンエースフロアブル	1:スピロジノフロエン	4,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	○			
			7月			ダニゲッターフロアブル	1:スピロジノフロエン	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	△			
						モベントフロアブル	1:スピロジノフロエン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	○			
						スターマイトフロアブル	1:ジエピラフェン	3,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	○			
						スターマイトブラーフフロアブル	1:ジエピラフェン2:ピリダベン	1,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	△			
						ダブルフェースフロアブル	1:ピフルプロシト2:フェニロキシメト	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	△			
						グレージフロアブル	1:フルキサチト'	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△			
			5月下旬～6月中旬			M10	1:フロイキシン	1,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	×			
M2	1:キキサル系	400倍				収穫30日前まで/1回	発生初期/—	○						
M2+M1	1:硫黄	500倍				—/—	—/—	△						
7月			園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅										
ヤノネカイガララムシ	<p>(防除上のポイント) ○第1世代幼虫を重点的に防除。 ○防除時期は、他のカイガララムシに比べ約10日早い。 ○第1世代幼虫初発日から30～35日後に散布(アプロード剤、モベントは20～25日後)。 ○第2世代幼虫初発日から30日後に散布。 ○アプロードの感受性が低下している園地がみられる。</p>	○寄生の多い枝を切り取り処分。	12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬			5月下旬～6月上旬の薬剤と同じ (モルスタン水和剤、フロンスイトSC、アプロードエースフロアブル、イオウフロアブル、園芸ボルドー、モベントフロアブルを除く)								
			5月下旬～6月中旬	16 21A+16 23		マシノ油乳剤(95%)	1:マシノ油	45倍	45倍	冬期/—	冬期/—	普		
						アプロード水和剤	1:アプロプロフェジン	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	○			
						アプロードエースフロアブル	1:フェニロキシメト2:プロプロフェジン	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	×			
						モベントフロアブル	1:スピロジノフロエン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	○			
6月	1A 1B 1B 4A 4A 4C 9B		オリオン水和剤40	1:アニコカルブ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△						
			ダーズバン乳剤40	1:コロピリホス	1,000倍	収穫60日前まで/1回	収穫30日前まで/2回以内	×						
			ダーズバンDF	1:コロピリホス	2,000倍	収穫60日前まで/1回	収穫30日前まで/2回以内	×						
			アルパリン顆粒水溶液	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△						
8月	4A 4C		スタークル顆粒水溶液	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△						
			トランスフォームフロアブル	1:スピロキナゾール	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	○						
6月	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾール	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△						



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		使用時期/使用回数	人水産 毒(注)	注意事項
									マジン油乳剤(95%)	45倍			
(サンマルカイガラムシ)	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○第1世代幼虫を重点的に防除。</li> <li>○幼虫越冬のため冬期マジン油乳剤の効果が高い。</li> <li>○枝や幹に寄生が多いため、その部分にも充分かかるよう散布。</li> </ul>		12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬			マジン油乳剤(95%)	①マジン油 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹は60倍(97%)が適当	45倍	冬期/—	冬期/—	温州みかん除く		
			6月			オリオン水和剤40	1:アエカブ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内			△
			月中旬			アルバリン顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			△
			下旬			スタークル顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			△
						モスピラン顆粒水溶液	1:アセカブ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内			△
						モスピランSL液剤	1:アセカブ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内			△
						トランスフォーームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			○
						アブロード水和剤	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内			○
						アブロードエースフロアブル	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内			○
アカマルカイガラムシ	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○防除時期はフジコナカイガラムシとほぼ同じ。</li> <li>○枝や幹にも充分かかるよう散布。</li> <li>○多発園では1か月後に再散布。</li> </ul>		12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬			マジン油乳剤(95%)	①マジン油 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹は60倍(97%)が適当	45倍	冬期/—	冬期/—	温州みかんは露地のみ		
			6月			エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内			×
			月中旬			ダーズバンDF	1:クロルピリス	2,000倍	収穫60日前まで/1回	収穫30日前まで/2回以内			×
			下旬			アドマイヤーフロアブル	1:イタダクアクト	2,500倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) / 3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) / 3回以内			△
						アルバリン顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			△
						スタークル顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			△
						トランスフォーームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			○
						コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内			△
						アブロード水和剤	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内			○
						アブロードエースフロアブル	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内			×
											○回数注意(アブロード・ダブルフェース)		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤			人 毒	水産 (注)	注意事項			
									かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数	温州みかん						
ミコ ナカ ヒビ メコ ナカ イカ イカ シ シ ムシ ナ カ イ ガ ラ ム シ ・	<ul style="list-style-type: none"> <li>○防除上のポイント</li> <li>○前年度多発した園では4月にも防除。</li> <li>○第1世代幼虫を重点的に防除。</li> <li>○多発園では第1回散布3週間後に2回目を散布。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○5月～8月に幹や枝で寄生が多いときは、タワシなどで駆除。</li> </ul>	4月	16		アブロード水和剤	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○				
			6月	1A		オリオン水和剤40	1:アエカプロ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	○温州みかんは露地のみ ○温州みかんは露地のみ		
			中旬	1B		ダーズバン乳剤40	1:クロルピリス	1,000倍	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫30日前まで/2回以内	収穫30日前まで/2回以内	劇	×			
			下旬	1B		ダーズバンDF	1:クロルピリス	2,000倍	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫30日前まで/2回以内	収穫30日前まで/2回以内	劇	×			
				4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
				4A		モスピランSL液剤	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
				4A		アルパラン顆粒水溶液	1:ジノテラン	1,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△			
				4A		スタークル顆粒水溶液	1:ジノテラン	1,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△			
				4A		アドマイヤーフフロアブル	1:インダクプロド	2,500倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△		
						トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○		
			コロト顆粒水和剤	1:ピリフルキサゾン	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△					
			アブロード水和剤	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○					
			アブロードエースフロアブル	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○回数注意(アブロード・ダブルフエース)				
			6月中旬～下旬の薬剤と同じ(アブロード水和剤、アブロードエースフロアブルを除く)	8月													
イ セ リ ヤ カ イ ガ ラ ム シ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ベダリアテントウの発生園では殺虫剤散布を控える。</li> <li>○防除時期はフジコナカイガラムシとほぼ同じ。</li> <li>○枝や幹にも十分かかるように散布。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ベダリアテントウの発生園では殺虫剤散布を控える。</li> </ul>	12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬	(物理)		マンシ油乳剤(95%)	1:マンシ油	45倍	冬期/-	冬期/-	冬期/-	普	△				
			6月	1A		オリオン水和剤40	1:アエカプロ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	○回数注意(アブロード・ダブルフエース)		
			中旬	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
			下旬	4A		モスピランSL液剤	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○			
				16		アブロード水和剤	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○		
				21A+16		アブロードエースフロアブル	1:アブロード	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×		
						6月中旬～下旬の薬剤と同じ(アブロード水和剤、アブロードエースフロアブルを除く)	8月中旬～下旬										
						モスピラン顆粒水溶液	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△		
						モスピランSL液剤	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△		
			ダントツ水溶液	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△					
			トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○					
			アクタラ顆粒水溶液	1:チノキサラム	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△					
			トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○					
ツ ノ ロ ウ ム シ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○寄生の多い枝は切り取り処分。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○寄生の多い枝は切り取り処分。</li> </ul>	7月	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△				
			6月	4A		モスピランSL液剤	1:アセタムプロド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
ル ビ ー ロ ウ ム シ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○寄生の多い枝は切り取り処分。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○寄生の多い枝は切り取り処分。</li> </ul>	7月上旬	4A		アクタラ顆粒水溶液	1:チノキサラム	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△				
			中旬	4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○			

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		水産 人毒(注)	注意事項				
									使用時期/使用回数	かんきつ(温州みかん除く)						
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○幼木や中晩柑では発生初期に散布。 ○一部地域の施設栽培園のワタアブラムシでは、ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が確認されている。	○成木園では天敵の発生に注意し、天敵が多いときは、殺虫剤散布を控える。	4月～9月	4A		モスピラン粒剤	1:アセクミブライド	10~20g/樹	育苗期/1回	かんきつ(温州みかん除く) 育苗期/1回	普	○主幹部吹付、10~100ml/樹				
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:アクトキヤム	10倍	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	普					
ミカン トゲ コナ ジラ シ	(発生の特徴) ○年4回発生。 (防除上のポイント) ○葉裏に十分散布。 ○若齢幼虫期に散布。		6月上旬～中旬	2B		キラップフロアブル	1:エチプロール	2,000倍	収穫21日前まで/2回以内	収穫21日前まで/2回以内	普	○葉害(着色期)				
				3A+1B		スミロデイー乳剤	1:フェンロバトリン2:MEP	1,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/4回以内	劇	○合剤(P.15)参照。				
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イダグクロブライド	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇					
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセクミブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇					
				4A		モスピランSL液剤	1:アセクミブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇					
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:アクトキヤム	3,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普					
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スピホキフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
				23	39	モベントフロアブル	1:スピロトキサメト	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○葉害(イネ)				
				21A		ハチハチフロアブル	1:トルエンピラト	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	○刺激(眼)				
				29		ウララ50DF	1:フエコナド	10,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫7日前まで/2回以内	普					
				ミカン トゲ コナ ジラ シ	(発生の特徴) ○年4回発生。 (防除上のポイント) ○葉裏に十分散布。 ○若齢幼虫期に散布。		7月中旬～下旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセクミブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	
								4A		モスピランSL液剤	1:アセクミブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	
4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン					2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン					2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン					2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
5		デイヤナWDG	1:スピネトラム					10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普					
5		デリケートWDG	1:スピネトラム					10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普					
9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン					3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普					
16		アブロード水和剤	1:アブフロフェジン					1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普					
23		モベントフロアブル	1:スピロトキサメト					2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○葉害(イネ)				
7月中旬～下旬	上記薬剤から、アブロードを除く薬剤															
	8月～10月	上記薬剤から、アブロードを除く薬剤														

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	防除薬剤 (使用量)		使用時期/使用回数		人水産 毒(注)	注意事項
							かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん				
ミカン コナジラミ	(発生の特徴) ○年3回発生。 ○若齢幼虫期に散布。	(防除上のポイント) ○葉裏に十分散布。 ○若齢幼虫期に散布。	5月中旬	4A	モスピラン顆粒水溶液	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	○乗害(イネ)	
			6月中旬	4A	アルパソ顆粒水溶液	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△		
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。  (防除上のポイント) ○多発園では1週間ごとに散布。  ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(P.151)参照	7月下旬~8月下旬	7月下旬	4A	アドマイヤーフローアブル	1:イタダクロアクト	2,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	△	○合ビレ(P.15)参照。 ○合ビレ(P.15)参照。	
			8月上旬	4A	ダントツ水溶液	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△		
			8月中旬	4A	アクタラ顆粒水溶液	1:チアトキサム	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△		
			8月下旬	4A	アルパソ顆粒水溶液	1:ジノテラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△		
			9月上旬	4A	スタークル顆粒水溶液	1:ジノテラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△		
コバエ類	○除草の徹底。		9月上旬	3A	ロディール乳剤	1:フェンプロパトリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	×	○合ビレ(P.15)参照。 ○刺激(眼)	
			11月上旬	21A	ハチハチフロアブル	1:トリエタピトリン	1,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	×		
アオハナハナ	(発生の特徴) ○園内密度が高くなる午前中に防除。		5月上旬	1A	オリオン水和剤40	1:アエタミプリド	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	○登録はケンキスイ類 ○合ビレ(P.15)参照。 ○合ビレ(P.15)参照。 ○合ビレ(P.15)参照。	
グリー・ケンキスイ		5月中旬	3A	エルサン乳剤	1:PAP	2,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	△			
			5月中旬	3A	アークリン水和剤	1:エトフェンプロックス	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	△		
			5月中旬	3A	ロディール乳剤	1:フェンプロパトリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	△		
			5月中旬	3A+1B	スミロデー乳剤	1:フェンプロパトリン2:MEP	1,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△		
			5月中旬	4A	モスピラン顆粒水溶液	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△		
			5月中旬	4A	モスピランSL液剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△		
			5月中旬	4A	アクタラ顆粒水溶液	1:チアトキサム	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△		
			5月中旬	4A	アルパソ顆粒水溶液	1:ジノテラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△		
			5月中旬	4A	スタークル顆粒水溶液	1:ジノテラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△		
			5月中旬	28	エクスレトルSE	1:ジノテラン 1:ジノテラン/エトフェンプロックス	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		人 毒 (注)	注意事項
									使用時期/使用回数	かんきつ(温州みかん除く) 温州みかん		
ミカン	(防除上のポイント) ○夏芽の発生から 秋枝の伸長停止 期にかけて系統の 異なる薬剤をロー テーションで散布。	○新梢の発生を不揃 いにする過剰な施 肥、強剪定を避け る。	育苗期 「苗木」	4A		アクタラ粒剤5	1:チアホキサム	20~40g/ 樹	育苗期/2回以内	育苗期/2回以内	×	
ハモグリガ				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	10~20g/ 樹	育苗期/1回	育苗期/1回	△	
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	10~20g/ 樹	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	20倍	春芽・夏芽又は秋芽の発 生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発 生前/3回以内	△	○ 樹幹散布10~100ml/樹
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアホキサム	25倍	春芽・夏芽又は秋芽の発 生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発 生前/3回以内	△	○ 主幹部吹付、20~100ml/樹
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアフラシ	50倍	育苗期/5回以内	育苗期/5回以内	△	○ 株元灌注、100ml/株
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアフラシ	50倍	育苗期/5回以内	育苗期/5回以内	△	○ 株元灌注、100ml/株
				28		エクシレルSE	1:ジノアフラシ+アピロール	100倍	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	△	○ 苗木全体に30~500ml/株を散布、但 し、130L/10a
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イミダクロプリド	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露 地栽培については発芽期 から開花期を除く)/3回 以内	収穫14日前まで(但し、露 地栽培については発芽期 から開花期を除く)/3回 以内	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアホキサム	3,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアフラシ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアフラシ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
				4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:チアホキサム2:ルフェスロン	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	△	○ 回数注意(7カラ・マツ)
				5		スピノエースフロアブル	1:スピノサト	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△	
				5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
				5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
				6		アグリメック	1:アハメクチン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	△	○ 剤型は乳剤
				15		マッシュ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	△	
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノキサロン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
				28		エクシレルSE	1:ジノアフラシ+アピロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
				28		テツパン液剤	1:ジノアフラシ+アピロール	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	○	
				1A		オリオン水和剤40	1:アピロール	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
				3A		ロディー乳剤	1:フェネプロバトリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	×	○ 合セル(P.15)参照。
				3A		アークリン水和剤	1:エトフェンプロックス	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	○ 合セル(P.15)参照。
				5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
				5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
				28		テツパン液剤	1:ジノアフラシ+アピロール	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	○	
				28		エクシレルSE	1:ジノアフラシ+アピロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
ハマキムシ類	(防除上のポイント) ○発生園では15日 毎に2回散布。		4月 5月下旬	1A		オリオン水和剤40	1:アピロール	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
			5月	3A		ロディー乳剤	1:フェネプロバトリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	×	○ 合セル(P.15)参照。
			11月上旬	3A		アークリン水和剤	1:エトフェンプロックス	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	○ 合セル(P.15)参照。
			11月上旬	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
			11月上旬	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
			11月上旬	28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
			11月上旬	28		テツパン液剤	1:ジノアフラシ+アピロール	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	○	
			11月上旬	28		エクシレルSE	1:ジノアフラシ+アピロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	

病害虫名	病害虫の特徴 (防除上のポイント等)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	防除薬剤 濃度 (使用量)		使用時期/使用回数		人水産 毒 (注)	注意事項
								かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん				
アゲハ類	○若齢幼虫期に防除。 ○若齢幼虫期に防除。	○幼虫の捕殺。	育苗期(苗木)	28		エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	普	○苗木全体に30～500ml/株を散布、但し、130L/10a
			6月	1A		オリオン水和剤40	1:アニコルブ	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	
			月下旬	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセキアクト	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	
			下旬	4A		ダントツ水溶液	1:クロチアニン	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	
			9月	5		スピノエースフロアアブル	1:スピノサト	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○登録はナミアゲハ
			9月	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			9月	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			15			マッチ乳剤	1:ルフェエロン	収穫21日前まで/1回	収穫21日前まで/1回	収穫21日前まで/1回	収穫21日前まで/1回	普	
			4A+15			リーズン顆粒水和剤	1:チアノキサム2,ルフェエロン	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○回数注意(カガラ・マツ)
			22B			アクセルフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	
			28			フェニックスフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			28			エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	
			28			テッサン液剤	1:ジクアリアプロール	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
ヨモギエダシヤク			4月	3A		ロディー乳剤	1:フェエプロバトリン	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	○合ピレ(P.15)参照。
			4月	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			6月	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			6月	13		コテツフロアアブル	1:クロルピエナビル	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※
			6月	15		マッチ乳剤	1:ルフェエロン	収穫21日前まで/1回	収穫21日前まで/1回	収穫21日前まで/1回	収穫21日前まで/1回	普	
			6月	15		カスケード乳剤	1:フルベシジノ	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	
			6月	21A	39	ハチハチフロアアブル	1:トルフェンピラト	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	○刺激(眼)
			6月	22B		アクセルフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	
			6月	28		エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	
			6月	1A		オリオン水和剤40	1:アニコルブ	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	
			6月	1B		ダーズバン乳剤40	1:クロルピエナビル	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	劇	○温州みかんは露地のみ
			6月	1B		ダーズバンDF	1:クロルピエナビル	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	劇	○温州みかんは露地のみ
			6月	3A		ロディー乳剤	1:フェエプロバトリン	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	○合ピレ(P.15)参照。
10月	28		フェニックスフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普				
10月	28		エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普				
10月	30		グレーシアフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○天敵への影響大			
クワゴマダラヒトリ	○成虫の発生は年1回。幼虫で越冬。 ○幼虫は園外から、雑草等を食べ侵入。 ○産卵は特定の樹種。 ○被害は春、稀に秋、周囲の産卵植物が餌として不適となると、園内に侵入加害。 ○周囲や園内の雑草で確認したら要注意。 (防除上のポイント) (耕種的防除法)	○園地周辺のワフ、アカメガシワ、カラスザンショウなどの産卵植物を8月下旬頃に除去。10月上旬に菓網を処分。	4月	1A		オリオン水和剤40	1:アニコルブ	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	
			6月	1B		ダーズバン乳剤40	1:クロルピエナビル	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	劇	
			6月	1B		ダーズバンDF	1:クロルピエナビル	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	収穫60日前まで/1回	劇	
			6月	3A		ロディー乳剤	1:フェエプロバトリン	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	
			10月	28		フェニックスフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			10月	28		エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	
			10月	30		グレーシアフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	
			10月	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			10月	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			10月	13		コテツフロアアブル	1:クロルピエナビル	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※
			10月	28		フェニックスフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
			10月	28		エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	
			ハスモンヨトウ	○若齢幼虫期に防除。 (発生の特徴) ○主な発生はハウスみかん。露地品種では通常問題にならない。	○若齢幼虫期に防除。	1月	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内
1月	5					デリゲートWDG	1:スピネトラム	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
8月	13					コテツフロアアブル	1:クロルピエナビル	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※
8月	28					フェニックスフロアアブル	1:フルベシジノ	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	
8月	28					エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数		人水産 毒(注)	注意事項			
								かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん					
ゴマダラカミキリ(天牛)	(防除上のポイント) ○多発園では7月中旬～下旬に幼虫対象剤を株元へ1～2回散布(回数注意)。	○成虫や食入幼虫は見つけ次第捕殺。	4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:アクトキサム	10倍	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内 育苗期/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内 育苗期/3回以内	普	○主幹部吹付、10～100ml/樹			
			28		エクシレルSE	1:アクトキサム	100倍			普	○苗木全体に30～500ml/株を散布、但し、130L/10a			
			5月下旬～6月中旬											
			6月		バリオキサ・カミキリ(成虫対象)		成虫発生初期/—	—	成虫発生初期/—	—	—	○地際の主幹分岐部等に取付。		
			1A		オリオン水和剤40	1:アクトキサム	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
			4A		アドマイヤーフロアブル	1:イタダクロアクト	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)/3回以内	劇	△			
			4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセキサム	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
			4A		モスピランSL液剤	1:アセキサム	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
			4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:アクトキサム	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△			
			4A		ダントツ水溶剤	1:クオアニン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△			
			4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:アクトキサム2:メソロン	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△			
			21A	39	ハチハチフロアブル	1:トリアゾチオ	1,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○回数注意(アクトラ・メソ)		
			22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミジン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○刺激(眼)		
21A+22B		アクセルキングフロアブル	1:トリアゾチオ2:メタフルミジン	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	△※	○回数注意(アセキサム・ハチハチ)					
28		エクシレルSE	1:ジアントラニプロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○天敵への影響大					
28		テップン液剤	1:ジアントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○						
30		グレーションフロアブル	1:フルキサミジン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△						
7月中旬～下旬														
カネタタキ	(発生の特徴) ○幼果期・果皮をなめるように食害。 ○着色期・果皮を深くえぐる食害。 (防除上のポイント) ○被害が見え始めたら早めに散布。 ○前年発生園は注意。	(発生の特徴) ○年2回発生。 ○山間地や比較的湿潤な園地が多い。 (防除上のポイント) ○春芽の展葉初期に虫や被害が見え始めたら早めに散布。	4A		(幼虫対象)									
			4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセキサム	200倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
			4A		モスピランSL液剤	1:アセキサム	200倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△			
			22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミジン	200倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○			
			8月上旬～中旬											
			3A		園芸用キンチョールE	1:ベルトリン		収穫14日前まで/6回以内	収穫14日前まで/6回以内	普	○	○食入孔に注入・合ビレ(P.15)参照。		
			3A		ロビンソフト	1:フェンプロパリン		収穫前日まで/5回以内	収穫前日まで/5回以内	普	○	○食入孔に注入・合ビレ(P.15)参照。		
			1A		オリオン水和剤40	1:アクトキサム	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	○葉害(着色期)		
			1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○合ビレ(P.15)参照。		
			3A		テルスターフロアブル	1:セフェントリン	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	劇	×	○合ビレ(P.15)参照。		
			3A		ロディール乳剤	1:フェンプロパリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○合ビレ(P.15)参照。		
			3A		アークリン水和剤	1:エトフェンプロックス	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○合ビレ(P.15)参照。		
			13		コデツプロアブル	1:クロルフェチル	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	○天敵への影響大		
30		グレーションフロアブル	1:フルキサミジン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△						
1A		オリオン水和剤40	1:アクトキサム	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△						
22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミジン	1,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		水産 毒(注)	注意事項
									かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数		
チャノキイロアザミウマ類	(発生の特徴) ○防風樹がイスマキ やサンゴジュの場 合発生しやすい。  (防除上のポイント) ○新梢や果実で発生 を認めたら早めに 散布。	○園地内や周辺の発 生源となるツタ等の 植物は処分。 ○樹冠占有面積率が 60%以下の園地で は光反射白色マル チンネット被覆で被 害軽減可能。	5 月 下旬	2B		キラップフロアアブル	1:エチプロール 1:イタクロアブド	2,000倍 4,000倍	収穫21日前まで/2回以内 収穫14日前まで(但し、露 地栽培については発芽期 から開花期を除く)/3回 以内	収穫21日前まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内	○ 葉害(着色期)	
			6 月上旬	4A		ダントツ水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤 モスピランSL液剤	1:クロアチジン 1:アセメブリン 1:アセメブリン	4,000倍 4,000倍 4,000倍	収穫前日まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内 収穫14日前まで/3回以内		
			6 月中旬	4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:チアノキサム	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内		
			6 月下旬	4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:チアノキサム2:ルフェスロン	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	○回数注意(アクトラ・マツチ)
			7 月上旬	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアアラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	
			7 月中旬	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアアラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	
			7 月下旬	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			8 月上旬	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			8 月中旬	5		スピノエースフロアアブル	1:スピネトラム	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	
			8 月下旬	6		アグリメック	1:アハメカチン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	○ 剤型は乳剤
			9 月上旬	6		アニキ乳剤	1:レピメカチン	2,000倍	収穫3日前まで/4回以内	収穫前日まで/4回以内	収穫前日まで/4回以内	○ 剤型は乳剤
			9 月中旬	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピピメカチン	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	
			9 月下旬	13		コデツプロアアブル	1:クロルフェネル	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			10 月上旬	15		マツチ乳剤	1:ルフェスロン	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	
10 月中旬	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサロン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	○ 刺激(眼)			
10 月下旬	21A	39	ハチハチフロアアブル	1:トリアンピネド	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	○ 天敵への影響大			
11 月上旬	29		ウララ50DF	1:フロエンピネド	10,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内				
11 月中旬	30		グレンジアフロアアブル	1:フルキサタジ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内				
11 月下旬	34		ファイブセーブフロアアブル	1:フロメキン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内				
ハナアザミウマ類	(防除のポイント) ○着色初期から発生 に注意し、発生を認 めたら早めに散布。		9 月下旬	1A		オリオン水和剤40	1:アアエカルブ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	○ 台ピ(P.15)参照。	
			10 月上旬	3A		テルスターフロアアブル	1:ピフェントリン	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内		
			10 月中旬	5		スピノエースフロアアブル	1:スピネトラム	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	
			10 月下旬	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			11 月上旬	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			11 月中旬	6		アグリメック	1:アハメカチン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	○ 剤型は乳剤
			11 月下旬	28		テックン液剤	1:ジクアリアプロール	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			12 月上旬	29		ウララ50DF	1:フロエンピネド	10,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	
			12 月中旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセメブリン	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	
			12 月下旬	4A		モスピランSL液剤	1:アセメブリン	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	
			1月 月上旬	5		スピノエースフロアアブル	1:スピネトラム	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	
			1月 月中旬	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			1月 月下旬	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			2月 月上旬	21A	39	ハチハチフロアアブル	1:スピネトラム	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	○ 刺激(眼)
2月 月中旬	34		ファイブセーブフロアアブル	1:フロメキン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内				
ネギアザミウマ類	(発生の特徴) ○主な発生はハウス みかん。露地品種 では通常問題にな らない。	○果実の加害時期 は幼果期から収穫 期。	果 実 着 色 期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセメブリン	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内		
			4A		モスピランSL液剤	1:アセメブリン	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内		
			5 月上旬	5		スピノエースフロアアブル	1:スピネトラム	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	
			5 月中旬	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			5 月下旬	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	
			6 月上旬	21A	39	ハチハチフロアアブル	1:スピネトラム	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	○ 刺激(眼)
			6 月中旬	34		ファイブセーブフロアアブル	1:フロメキン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	防除薬剤		水産 (注)	注意事項
									かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数		
ミカン キン キイ ロア ザ ミ ウ マ	(発生の特徴) ○主な発生はハズミカ ・愛媛県試第28号。 露地品種では通常 問題にならない。 ○主な果実の加害 時期は、ハズミカ は着色期、愛媛果 試第28号では新梢 発生期～着色期。  (防除のポイント) ○抵抗性に注意。	○ハウス内外の除草 徹底。 ○ハウス内での野菜、 花き類栽培は発生 源となるのでしない。 ○開放部(側窓・天窓) にネット(1mm以下) または光反射資材 を織り込んだ網を張 り侵入防止。	5 月	IB		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	×	
			5 月	IB		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/5回以内	△	
			12 月	IB		ダーズバンDF	1:クロルピリホス	2,000倍	収穫60日前まで/1回	収穫30日前まで/2回以内	△	
			5 月	4C		トランスフオームフロアブル	1:スホホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	○	
			5 月	5		デアナWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
			6 月	6		デリケートWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△	
			13 月	13		アグリメック	1:アハメクチン	1,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	△	○ 剤型は乳剤
			34 月	34		コテツフロアブル	1:クロロフェナピル	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	△※	
						ファイネセーブフロアブル	1:フロトキエン	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	×	
						以下「みかん」のみの登録 アプアーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍		収穫3日前まで/2回以内	△※	
ナ メ ク ジ 類	(発生の特徴) ○草生栽培園で発生 が多い。 ○発生は5月から梅 雨明け頃が多い。	(耕種的防除法) ○清耕栽培とする。	5 月	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1~5g/m <sup>2</sup>	発生時/ー	発生時/ー	○	○ 発生・加害場所・株元に配置
			7 月	M1		ムンジュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	発生前～発生初期/ー	発生前～発生初期/ー	△	
			7 月	M1		ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	発生前～発生初期/ー	発生前～発生初期/ー	△	○ 近接散布(マシン油)・葉害(高温時)
			上 旬	M1		クプロソールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発生前～発生初期/ー	発生前～発生初期/ー	△	
			8 月	6		アグリメック	1:アハメクチン	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	△	○ 剤型は乳剤
			8 月	8		マイキラーL	1:メタルデヒド	200倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	○	
			8 月	8		ナメクリーン3	1:メタルデヒド	1kg/10a	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	○	
			8 月	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1~5g/m <sup>2</sup>	発生時/ー	発生時/ー	○	○ 発生・加害場所・株元に配置
カ タ ツ ム リ 類	(発生の特徴) ○梅雨期にも被害を 出すが、8~10月頃 の加害が多い。 ○草生栽培園で発生 が多い。	(耕種的防除法) ○清耕栽培とする。	8 月	M1		ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	発生前～発生初期/ー	発生前～発生初期/ー	△	
			9 月	M1		ムンジュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	発生前～発生初期/ー	発生前～発生初期/ー	△	
			10 月	M1		クプロソールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発生前～発生初期/ー	発生前～発生初期/ー	△	
			8 月	8		マイキラーL	1:メタルデヒド	200倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	○	
			8 月	8		ナメクリーン3	1:メタルデヒド	1kg/10a	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	○	
			7 月	(成虫対象)		マラソン粉剤3	1:マラソン	3kg/10a	収穫14日前まで/5回以内	収穫14日前まで/5回以内	△	○ 夏みかん(登録なし)飛散注意
			6 月	(成虫対象)		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセギムブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
			7 月	4A		モスピランSL液剤	1:アセギムブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
ミ カ ン バ エ	(発生の特徴) ○温州みかんやコミ カン、ボンカン、キ ンカン等果皮の薄 い品種に寄生が多 い。  (防除上のポイント) ○前年発生園では、 6・7月の成虫防除 を徹底する。  ○被害果抑制には、 8月上旬と下旬の 孵化幼虫を対象と した防除が最も重 要。 ○防除上の留意点 (P.154)参照	○発生園では、果実 をすべて収穫し、袋 等に詰め、適正に 処分。 ○放任園の伐採を徹 底。ただし、発生園 では、翌年の成虫 拡散防止のため、 数本おとり樹を残し、 翌年、産卵ピーク後 の8月下旬にそれら を伐採。 ○園周縁樹の間、縮 小した防風樹の刈り 込みを行い、園内 の日当たりを良くす る。	6 月	IB		マラソン粉剤3	1:マラソン	3kg/10a	収穫14日前まで/5回以内	収穫14日前まで/5回以内	△	
			6 月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセギムブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
			6 月	4A		モスピランSL液剤	1:アセギムブライド	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
			7 月	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアジニン	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
			8 月	(幼虫対象)		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキヤム	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	
			8 月	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアテラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
			8 月	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアテラン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	△	
			8 月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセギムブライド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項	
落葉病	<p>(防除上のポイント)</p> <p>○初期防除を徹底し、その後2週間おきに2~3回散布。(留意点)</p> <p>○炭疽病の5月及び6月上旬から10月の薬剤は、落葉病でも登録有り。</p>	○秋期に落葉を処分。	5月	M1	M1	オキシドール水和剤80	炭疽病の5月及び6月上旬から8月中旬の薬剤に加えて以下の薬剤	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	<p>○葉害注意(着色期以降)</p> <p>○葉害注意(着色期以降)</p> <p>○葉害注意(着色期以降)</p>	
炭疽病	<p>(発生の特徴)</p> <p>○品種間差が大きく、横野・早秋・富有は罹病しやすい。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○新梢発育期に1~2回散布。</p> <p>○秋期になると果実の感受性が高まるので防除を徹底。</p> <p>○天候不順が続くときは追加防除。</p> <p>(留意点)</p> <p>○5月及び6月上旬から8月中旬の薬剤は、落葉病でも登録有り。</p>	<p>○発病枝・果実除去。</p> <p>○通風、採光、排水を良くする。</p>	休眠期(3月)	M3+1	M3	ホーマイコート	1:オキサネートチアル	50倍	休眠期	1回	普	×	<p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意、回数注意(シマン、ラリー)</p> <p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意、収穫前日数注意</p>	
			5月	M3	M3	ジマンダイゼン水和剤	1:マンゼブ	600倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		<p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意、回数注意(シマン、ラリー)</p>
				M3	M3	ベンコセブ水和剤	1:マンゼブ	600倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		
			6月上旬	M3+3	M3+3	エムダイフアー水和剤	1:マンゼブ2:ミクロブタニル	500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	<p>○かぶれ注意</p> <p>○かぶれ注意、回数注意(シマン、ラリー)</p>	
				M9	M9	プロータ水和剤	1:マンゼブ2:ミクロブタニル	500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		
			6月上旬	5月の薬剤に加えて以下の薬剤	1	トップジンM水和剤	1:オキサネートチアル	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	<p>○単用とする。</p>	
				1	ベンレート水和剤	1:ベンリ	2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△			
				3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコゾール	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
				3	オンリーワンフロアブル	1:アブコゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			10月	3+11	インディーフロアブル	1:アブコゾール	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△			
				11	ナディーボフロアブル	1:アブコゾール2:トリロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
				11	ストロビーロードフロアブル	1:トリロキシストロビン	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△			
				11	アミスター10フロアブル	1:トリロキシストロビン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△			
				11	スクレアフロアブル	1:マンデスストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
				11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ヒリペンカルブ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△			
				11+7	ナリアWDG	1:ヒリペンカルブ2:ホスカリド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※			
				52	ミキワ20フロアブル	1:ヒリペンカルブ2:ホスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
				M4	オーソサイド水和剤80	1:アブコゾール	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○新梢発育期に1～2回散布。 ○秋期に落葉を処分。 ○通風、採光、排水を良くする。	耕種的防除法	時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水毒 (注)	注意事項
うどんこ病			5月	un	M3+1 M3+2 M2 M2 M2 M3+3	ホーマイコート ラピライト水和剤 イオフロアブル サルファアザール プロダ水和剤	1:チラ2:チオアネートチル 1:チオアネートチル2:マンネブ 1:硫黄 1:硫黄 1:マンゼブ2:ミクロブタニル	100倍 500倍 500倍 500倍	休眠期 収穫45日前まで 発病前～発病初期 発病前～発病初期 収穫45日前まで	1回 2回以内 — — 2回以内	普 普 普 普	○かぶれ注意(10日間入園禁止) ○高温時散布しない。 ○高温時散布しない。 ○かぶれ注意、 回数注意(ジマン、ラリー)
			6月 7月	un	M2 M2 M1 M1 M1	【6月～7月、8月中旬～9月中旬のどちらでも使用できる薬剤】 イオフロアブル サルファアザール オキシンドー水和剤80 キノンドー水和剤80 キノンドー顆粒水和剤	1:硫黄 1:硫黄 1:有機銅 1:有機銅 1:有機銅	500倍 500倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	発病前～発病初期 発病前～発病初期 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで	— — 5回以内 5回以内 5回以内	普 普 普 普 普	○高温時散布しない。 ○高温時散布しない。 ○葉害注意(着色期以降) ○葉害注意(着色期以降) ○葉害注意(着色期以降)
			8月 9月	7 7 7 7 7 11 11 11 11+7 52 M7 M7+M4 U6	3 3 3 3 3 3 7 7 7 7 7 11 11 11 11+7 52 M7 U6	トリフミン水和剤 アンピルフロアブル ラリー水和剤 スコア顆粒水和剤 オンリーワンフロアブル インダーフロアブル サルバトールME パレード15フロアブル ネクスターフロアブル ケンジャフロアブル フルーツセイバー カナメフロアブル ストロベードライフロアブル アミスター10フロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 スクレアフロアブル ナリアWDG ミキワ20フロアブル ペルコート水和剤 ダイバワー水和剤 ロナケン顆粒水和剤	1:トリフルミゾール 1:ヘキサコナゾール 1:ミクロブタニル 1:シフェノコナゾール 1:チアコナゾール 1:フエンコナゾール 1:アトコナゾール 1:ピラジメトール 1:イピラサド 1:イノフェタド 1:ペンチオピラト 1:インピフルキサム 1:クリクシムチル 1:アジキシトピソ 1:ベリベンカルブ 1:マンデスチロピソ 1:ピラクロストロピソ2:ボスカリド 1:イアフルフェノキソ 1:イミダクワジンアルベシール酸塩 1:イミダクワジンアルベシール酸塩2:キヤブタン 1:シフルフェニト	2,000倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍 3,000倍 5,000倍 4,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 3,000倍 1,000倍 3,000倍 3,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍 1,000倍 4,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 5回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普	○単用とする。 ○葉害(西村・富有)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
灰色 かか び病	○刀根、西条柿は発生が多い。  (発生の特徴)	○通風、採光、排水を良くする。	5月 下旬	7	7	フルーツセイバー	1:ペンチオザト <sup>*</sup>	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
						ケンジャフロアブル	1:イソキサト <sup>*</sup>	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	○		
すす 点病	○通風の悪い圃、日陰になる位置で発生しやすい。  (発生の特徴)	○通風、採光、排水を良くする。	7月 中旬	7	7	カナメフロアブル	1:インピルキキヤム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	
						フルビコフロアブル	1:メニピリム	3,000倍	収穫14日前まで	5回以内	○		
						ゲッター水和剤	1:ジエトフェンカルブ <sup>2</sup> :チオアネートメチル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○		
						ニマイバー水和剤	1:ジエトフェンカルブ <sup>2</sup> :ベンゾニル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○		
						ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ゼリベンカルブ <sup>*</sup>	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○		
						フロンスайдSC	1:フルアジナム	2,000倍	収穫45日前まで	1回	○	○かぶれ注意(10日間入園禁止)	
						ミギロ20フロアブル	1:イソキサト <sup>*</sup>	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	○葉害(西村・富有)	
						ベルクート水和剤	1:イソキサト <sup>*</sup>	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	○		
						トリアジンM水和剤	1:イソキサト <sup>*</sup>	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	○		
						ペンレート水和剤	1:ペンリ	2,000倍	収穫前日まで	6回以内	○		
枝 幹 書虫	○5月以降、発生圃では、主幹部・主枝・主枝に丁寧散布。  (防除上のポイント)	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。	3月 下旬	1B 1B+1B	1B	トラサイドA乳剤	1:マロン2:MEP	200倍	産卵期～幼虫食入初期(但し収穫45日前まで)	2回以内	○	○	○葉害(葉への付着)。主幹部、主枝・主枝の分枝部に散布。 ○葉害(葉への付着)。樹幹部に十分散布。登録はヒロコシカハ ○樹幹部及び主枝に散布。
						フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	200倍	開花期まで	1回	○		
						サムコルフフロアブル10	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○	○登録は7カモンダラメ付	
						フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
						オリオン水和剤40	1:アラニカルブ <sup>*</sup>	1,000倍	収穫21日前まで	1回	○		
						サイアノックス水和剤	1:プロチオホス	800倍	収穫75日前まで	2回以内	○		
						アクタラ顆粒水溶剤	1:CYAP	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	○		
						スタークル顆粒水溶剤	1:クロチアエジン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○		
						コテツフロアブル	1:チオトキヤム	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	○		
						パダンSG水溶剤	1:シノチアラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
カ キ ノ ヘ タ ム シ ガ	○第1世代幼虫には、6月5日～15日に第1回の散布、2週間後に第2回の散布。 ○第2世代幼虫には、7月下旬と8月中旬の2回散布。  (留意点) ○パダンSG水溶剤の連用はフジコノカイガラムシ多発の恐れがあるので、他剤と交互に使用。	(耕種的防除) ○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。 ○9月上旬頃にコモなどを巻き付け、春に適切に処分。	6月 中旬	1A 1B 1B 4A 4A 4A 4A	1A	オリオン水和剤40	1:アラニカルブ <sup>*</sup>	1,000倍	収穫21日前まで	1回	○	○	
						サイアノックス水和剤	1:プロチオホス	800倍	収穫75日前まで	2回以内	○		
						アクタラ顆粒水溶剤	1:CYAP	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	○		
						スタークル顆粒水溶剤	1:クロチアエジン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○		
						コテツフロアブル	1:チオトキヤム	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	○		
						パダンSG水溶剤	1:シノチアラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
						キックオフ顆粒水和剤	1:シノチアラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
						フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	○	○他剤と交互使用(留意点)	
						サムコルフフロアブル10	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	5,000倍	収穫前日まで	4回以内	○		
						ヨーマルフフロアブル	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	10,000倍	収穫前日まで	3回以内	○		
テックペン液剤	1:フルベンジアミド <sup>*</sup>	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	○								

防除薬剤

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人畜 毒(注)	水産 毒(注)	注意事項
フジ	(防除上のポイント) ○4月、芽に移動後の越冬幼虫を対象に散布。 ○5月～8月に幹や枝で寄生が多いときは、タワシなどで駆除。 ○第1世代幼虫期に徹底防除。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。 ○5月～8月に幹や枝で寄生が多いときは、タワシなどで駆除。	4 5月上旬	16		アブロード水和剤	1:ブプロブフェン	1,000倍	開花期まで (但し、収穫45日前まで)	2回以内	普	○	○4月中の使用に限る。
ナシ			6 5月中旬	1A		オリオン水和剤40	1:グラニカルブ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
カイ			7 7月中旬	1B		トチオン水和剤	1:プロチオホス	800倍	収穫75日前まで	2回以内	普	△	
ガラ			7 7月中旬	1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	
ラム			上 8月上旬	1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
シ			1B			スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
ン			4A			モスピラン顆粒水溶液	1:アセミゾリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
シ			4A			アルバリン顆粒水溶液	1:シノチフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
ン			4A			スタークル顆粒水溶液	1:シノチフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
シ			4C			トランスフロアムフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
ン	9B			コルト顆粒水和剤	1:ピリアルキナリン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
カイ	ラムシ類	○寄生の多い枝は切り取り処分。	12月中旬～下旬	(物理) (物理)									○芽が動き出す前に散布 ○芽が動き出す前に散布
ツ	アロウモン		6 5月下旬	1A		マンシ油乳剤(95%)	1:マンシ油	20倍	—	—	普	△	
イ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫時に防除。	○冬期に繭を捕殺。	7 7月下旬	4A		オリオン水和剤40	1:グラニカルブ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
ラ			8 8月上旬	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセミゾリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
ガ			6 6月中旬	1A		オリオン水和剤40	1:グラニカルブ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
類			7 7月下旬	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
コ	(防除上のポイント) ○発生初期は、圃の周辺部に飛来し加害するのでよく観察し早期防除に努める。	(耕種的防除法) ○近隣に、幼虫の餌となる堆肥等の有機物を貯留、堆積しない。 ○成虫を捕殺。	6 6月下旬	3A+1B		パーマチオン水和剤	1:フェハレレート2:MEP	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	劇	×	○台じ(P.15)参照。
カ			8 8月中旬	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
ネ			6 6月下旬	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
シ	ン類		8月中旬～下旬										
ト	ウガネブイブイ		6月中旬～7月										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項
カメムシ類	○ 果樹園に飛来する時期 や量は年変動が大きく、 地域差や圃地差も大きい。 (防除上のポイント) ○ 飛来が認められた園で は早めに防除。 ○ 受粉が必要な品種は、 開花期に訪花昆虫への 影響が強い剤の使用は 避ける。 ○ 果樹カメムシ類の発生 生態と防除対策 (P.151) 参照		5月 5月 10月	1B 2B 3A 3A 3A 3A+1B 4A		スミチオン水和剤40 キラップフロアアブル アグロスリン水和剤 テルスター水和剤 デルスターフロアアブル ロドイーター水和剤 パーマチオン水和剤 アドマイヤー水和剤	1: MEP 1: エチアール 1: シペントリン 1: ピフェントリン 1: ピフェントリン 1: フェンプロパニドリン 1: フェンハレレート2: MEP 1: ミタクロプロアト	1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 5,000倍 1,500倍 2,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 劇 普 劇 劇 劇 劇	△ ○ × △※ × × × × △	○ 合ヒ(P.15)参照。 ○ 合ヒ(P.15)参照。 ○ 合ヒ(P.15)参照。 ○ 合ヒ(P.15)参照。
チャノキイロアザミウマ	(防除上のポイント) ○ 果実での成幼虫の発生 状況を観察し、発生を認 めたから早めに薬剤散布。 ○ 5月下旬～6月上旬は カキグダアザミウマ と同時防除可能。 ○ 受粉が必要な品種は、 開花期に訪花昆虫への 影響が強い剤の使用は 避ける。 (発生の特徴) ○ 品種間差大きい。 (留意点) ○ バダンSG水溶剤の連 用はアズコナカイガラム シ多発の恐れがあるの で、他剤と交互に使用。		5月 5月下旬 6月上旬 6月中旬 6月下旬 7月上旬 7月中旬 7月下旬 8月上旬	1B 1B 1B 2B 4A 4A  4A 4A 4A 4A 5 5 9B 13 14 29		オルトラン水和剤 ジェイエース水溶剤 トクチオン水和剤 キラップフロアアブル モスピラン顆粒水溶剤 アドマイヤー水和剤  アクトラ顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 デアナナWDG デリガートWDG コルト顆粒水和剤 コテツフロアアブル パダンSG水溶剤 ウアラDF	1: フェエート 1: フェエート 1: プロチオホス 1: エチアール 1: アセタミプロド 1: ミタクロプロアト  1: ジアトキヤム 1: クロチアエジン 1: ジノチアフラン 1: ジノチアフラン 1: スピネトラム 1: スピネトラム 1: ヒリアルキナゾリン 1: コルフェチル 1: カルタップ 1: プロノゴト	1,500倍 1,500倍 800倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍  2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 10,000倍 10,000倍 3,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍	収穫45日前まで 収穫45日前まで 収穫75日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫45日前まで 収穫14日前まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内  3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 4回以内 2回以内	普 普 普 普 普 劇 劇  普 普 普 普 普 普 普 普 劇 普	△ ○ △ ○ △ △  △ △ △ △ △ △ △ △※ × ○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
カキ	(防除上のポイント) ○新葉等に寄生がみられ始めた時期に第1回目防除。 ○開花期には受粉が必要な品種では、訪花昆虫に影響の強い剤の使用は避ける。	○冬期に粗皮を削り、越冬虫を駆除。 ○巻葉等被害部の摘除。	4月 下旬	1B 1B 1B 4A 4A 4A 4A		オルトラン水和剤 ジェイエース水和剤 トクチオン水和剤 モスピラン顆粒水溶解剤 アクタラ顆粒水溶解剤 アルバリン顆粒水溶解剤 スタークル顆粒水溶解剤	1:アセフェート 1:アセフェート 1:プロチオホス 1:アセタミプリド 1:アトキサメチル 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン	1,500倍 1,500倍 800倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫45日前まで 収穫45日前まで 収穫75日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで	2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 劇 普 普	△ ○ △ △ △ △ △	
ハダニ類		○草、周辺雑草を適切に管理。	発生初期	20D 25A 25B		マイコナーネフロアアブル スターマイトフロアアブル ダニコングフロアアブル	1:ピロフェネート 1:ジエニルアフェン 1:ピフルアミド	1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 1回 1回	普 普 普	△ △ △	
カンザワハダニ ナミハダニ				13		コテツゾフロアアブル	1:クロルフェピル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
サカキ ビダニ			6月 下旬	13 21A		コテツゾフロアアブル サンマイト水和剤	1:クロルフェピル 1:ピリタダベン	4,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで	2回以内 2回以内	劇 劇	△※ ×	○刺激(眼)
カキノヒ メヨコ バイ	(防除上のポイント) ○新葉硬化までの防除徹底。 ○越冬場所であるサツキ・ツツジ等の防除(3月上旬まで)も有効。 ○受粉が必要な品種では、開花期に訪花昆虫への影響の強い剤は使用しない。		4月 中旬	1A 4A 4A		オリオン水和剤40 ダントゾ水溶解剤 モスピラン顆粒水溶解剤	1:ラニカルブ 1:クロチアニジン 1:アセタミプリド	1,000倍 4,000倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 3回以内 3回以内	劇 普 劇	△ △ △	
ヨハモ ウシ	(病害虫の特徴) ○主に葉を食害する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。		5月 下旬	8 28		オリオン水和剤40 フェニックスフロアアブル	1:ラニカルブ 1:フルベンジアミド	1,000倍 4,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで	1回 2回以内	劇 普	△ △	
ハマキ ムシ 類	(病害虫の特徴) ○葉をつつって食害。果実では、へたの下などの果皮をなめるように食害。 (防除上のポイント) ○葉や果実の寄生部位にかかると丁寧に散布。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。	5月 下旬	1B 1A 15 28 28 28 28		トクチオン水和剤 オリオン水和剤40 カスケード乳剤 フェニックスフロアアブル サムコルフフロアアブル10 テツパン液剤 ヨーバルフロアアブル	1:プロチオホス 1:ラニカルブ 1:フルフェグスロン 1:フルベンジアミド 1:クロラトラニリアロール 1:シクラニリアロール 1:アトキサメチル	800倍 1,000倍 4,000倍 4,000倍 5,000倍 2,000倍 10,000倍	収穫75日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 1回 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 劇 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ○ △	
ケムシ 類	(病害虫の特徴) ○主に葉を食害する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。		4月 下旬	1A 15		オリオン水和剤40 カスケード乳剤	1:ラニカルブ 1:フルフェグスロン	1,000倍 4,000倍	収穫21日前まで 収穫14日前まで	1回 2回以内	劇 普	△ △	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	防除薬剤							人本産毒(注)	注意事項
				IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数		
黒とう病	(発生の特徴) ○4～5月に降雨があると発病。 ○5～6月に冷たい降雨が頻くと激しく発病。 ○若く軟弱な組織で発病が激しい。 ○夏期乾燥期に一旦発病停止。 ○シャインマスカットなどのヨーロッパ種は弱く、アメリカ種は強い。  (防除上のポイント) ○発芽直前・梅雨までに重点防除。 ○枝幹にかいけむらのないようにていねいに散布。	○病枝、病果の除去徹底。密植園では間伐実施。 ○チッ素肥料の過用を避け、カリ肥料を十分に施し、枝の充実を努める。 ○多発園では雨よけ施設を導入。	発芽直前	1	1:ペニシル	ベンレート水和剤	1:ペニシル	200倍	休眠期	1回	△	○かぶれ注意
			M5	1:TPN	パスポート顆粒水和剤	1:TPN	250倍	休眠期	1回	×		
			前	M7	1:ボリオキシンの酢酸塩	ベフラン液剤25	1:ボリオキシンの酢酸塩	250倍	休眠期	1回	△	
				M3+I	1:オキソニル	ベンレートT水和剤20	1:オキソニル	200倍	休眠期	1回	×	
				M9	1:シチアリン	デランフロアブル	1:シチアリン	200倍	休眠期	1回	×	
			4月下旬～5月上旬	uv	1:硫黄2:塩基性塩化銅	園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅	500倍	—	—	△	○葉害注意(デランフロアブル)
				M2+M1	1:チオソックスフロアブル	チオソックスフロアブル	1:チオソックスフロアブル	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	△	
				M3	1:チオソックスフロアブル	チオソックスフロアブル	1:チオソックスフロアブル	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	×	
			5月上旬～中旬(開花前)	M9	1:シチアリン	デランフロアブル	1:シチアリン	1,000倍	落葉期まで但し、収穫75日前まで	2回以内	×	○かぶれ注意
			5月上旬～中旬(開花前)	1	1:ペニシル	ベンレート水和剤	1:ペニシル	2,000倍	収穫45日前まで	3回以内	△	
			(開花前)	M3	1:マンゼブ	ジマンダイゼン水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	○かぶれ注意
			中旬)	M3	1:マンゼブ	ペンコセブ水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	
				40+M3	1:ペンチアハリカルブ	カンバンネラ水和剤	1:ペンチアハリカルブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	○かぶれ注意
			中旬)	40+M3	1:ペンチアハリカルブ	カンバンネラ水和剤	1:ペンチアハリカルブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	
			5月下旬～6月上旬)	3	マナーズDF	マナーズDF	1:マナーズDF	4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	△	○かぶれ注意
			6月上旬)	3	オージェイ水和剤	オージェイ水和剤	1:オージェイ水和剤	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○	
			6月下旬)	7	パレード15フロアブル	パレード15フロアブル	1:パレード15フロアブル	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	△	○耐性菌注意
			6月上旬)	7	フルーツセイバー	フルーツセイバー	1:フルーツセイバー	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
				7	カナメフロアブル	カナメフロアブル	1:インビフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	△	○耐性菌注意
				7	ケンジャフロアブル	ケンジャフロアブル	1:ケンジャフロアブル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	○	
				11	アミスター10フロアブル	アミスター10フロアブル	1:アミスター10フロアブル	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	○	○耐性菌注意
				11	ストロベードライフロアブル	ストロベードライフロアブル	1:ストロベードライフロアブル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	△	
				19	ポリオキシシAL水溶剤	ポリオキシシAL水溶剤	1:ポリオキシシAL水溶剤	5,000倍	収穫60日前まで	5回以内	○	○耐性菌注意、葉害(ポリオキシシAL)
			6月)	27+11	ホライズンドライフロアブル	ホライズンドライフロアブル	1:ジモキニコル2:アモキサトン	2,500倍	収穫21日前まで	3回以内	△※	
			7月中旬)	3	インダーフロアブル	インダーフロアブル	1:インダーフロアブル	8,000倍	収穫30日前まで	3回以内	○	○よこれ注意
			7月中旬)	52	ミキワ20フロアブル	ミキワ20フロアブル	1:イアルフェン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
			7月～8月)	M1	1:塩基性硫酸銅	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	—	—	△	



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項	
														発芽直前
晩腐病	(防除上のポイント) ○袋かけ前までに10～15日の間隔で2～3回散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード11 年1回の使用が望ましい。	○密植を避け圃面を明るくする。 ○排水に努める。 ○チッ素肥料の過用を避ける。	5月		M7	ペフラン液剤25	1:ミノカザン酢酸塩	250倍	休眠期	1回	劇	△	○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○よこれ注) 散布時期注意(果実肥大期まで) ○かぶれ注意 散布時期注意(落弁期まで) ○かぶれ注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 葉害(夏期28度以上)	
			5月下旬		1	ペンレート水和剤	1:ベノミル	200倍	休眠期	1回	普	△		
			6月上旬		M3+1	ペンレートT水和剤20	1:チラム2:ベノミル	80倍	休眠期	1回	普	×		
			6月上旬		M1	ICホルド-66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	-	-	-	普		△
			6月上旬		M3	チオノックフロアブル	1:チラム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×		
			6月上旬		M3	トノックスフロアブル	1:チラム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×		
			6月上旬		1+M3	ラビライト水和剤	1:チオアネート2:チラム2:マンネブ	800倍	落弁期まで 但し、収穫75日前まで	1回	普	△		
			5月下旬		M3	ジマンダイゼン水和剤	1:マンネブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		
			5月下旬		1	ペンレート水和剤	1:ベノミル	2,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△		
			5月下旬		3	オンリーワンフロアブル	1:チオコゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
7月～8月			6月上旬		9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:シプロジニル2:フルシオキソニル	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○かぶれ注意 葉害(ロザリオ777)	
			6月上旬		11	アミスター10フロアブル	1:アキキストロビン	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△		
			6月上旬		11	ストロビードライブフロアブル	1:クレンキムチル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△		
			6月上旬		11	スクレアフロアブル	1:マンデ'ストロビン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
			6月上旬		11+7	ナリアWDG	1:ピラクrostロビン2:ボ'スカリド'	2,000倍	(大粒種)収穫7日前まで	3回以内	普	△※		
			6月上旬		21+M5	ド-シヤスフロアブル	1:シアゾフ'アスト2:TPN	2,000倍	収穫60日前まで	3回以内	普	△※		
			6月中旬		40+M3	ベネセット水和剤	1:ベンチア'カリカル'イン'プロ'ロ'ル2:マンゼ'ブ'	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		
			7月中旬		40+M3	カンパネラ水和剤	1:ベンチア'カリカル'イン'プロ'ロ'ル2:マンゼ'ブ'	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		
			7月中旬		49+M3	ゾ-ベ'ック エニベ'ル 顆粒水和剤	1:オキチア'ピ'ロ'リン2:マンゼ'ブ'	750倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△		
			7月～8月		52	ミキワ20フロアブル	1:イ'フル'フェ'キ'ン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
		M1	ICホルド-66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	-	-	普	△	○よこれ注意				

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤				濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水産 毒(注)	注意事項
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名					
うどんこ病	(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	耕種的防除法 ○開花期の発病新梢(芽し ぶ)は直ちに除去。 ○落葉の処分。	5	3	トリフミン水和剤	1:トリフルシゾール	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	△	○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意
			5	3	マネージDF	1:イミベンコナゾール	4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	△	
			5	3	インダーフロアブル	1:フェブコナゾール	8,000倍	収穫30日前まで	3回以内	○	
			5	3	オンリーワンフロアブル	1:チアコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
			5	3	オーシヤイン水和剤	1:オキスポコナゾール 1:フルマル酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○	
			5	7	フルーツセイバー	1:ペンチオゼト	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
			5	7	ネクスターフロアブル	1:イピトラザム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
			5	7	カナメフロアブル	1:インビルフルキム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	△	
			5	7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルシト	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○	
			5	7	ケンジャフロアブル	1:イノフェダト	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
			5	9	フルビカフロアブル	1:メバニヒリウム	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	○	
褐斑病	(防除上のポイント) ○かきむらの無いように 丁寧に散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	耕種的防除法 ○密植を避け、棚面を明る くする。 ○多発園では粗皮削りを 行う。 ○落葉の処分。	3月下旬～4月上旬(発芽直前)	M7	ペフラン液剤25	1:ミカダジン酢酸塩	250倍	休眠期	1回	劇	○耐性菌注意、葉害(ロザリオヒミアコ) ○耐性菌注意
			5	1	トップジンAM水和剤	1:オフロアネートメチル	1,500倍	収穫45日前まで	1回	△	
			5	1	ペンレート水和剤	1:ベニミル	2,000倍	収穫45日前まで	3回以内	△	
			5	3	オンリーワンフロアブル	1:チアコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△	
			5	3	インダーフロアブル	1:フェブコナゾール	8,000倍	収穫30日前まで	3回以内	○	
			5	3	オーシヤインフロアブル	1:オキスポコナゾール 1:フルマル酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○	
			5	3	トリフミン水和剤	1:トリフルシゾール	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	△	
			5	7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルシト	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○	
			5	7	フルーツセイバー	1:ペンチオゼト	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
			5	7	カナメフロアブル	1:インビルフルキム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
			5	7	ケンジャフロアブル	1:イノフェダト	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	△	
うどんこ病	(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	耕種的防除法 ○開花期の発病新梢(芽し ぶ)は直ちに除去。 ○落葉の処分。	5	11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	△	○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意
			5	11	スクレアフロアブル	1:マンデチオロピン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
			5	M4	オンソーサイド水和剤80	1:キヤブタン	800倍	収穫30日前まで	3回以内	×	
			5	M3	ペンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	
			5	M3	トノックスフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	
			5	M3	チオノックフロアブル	1:チガム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	×	
			5	M3	チオノックフロアブル	1:チガム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	×	
			5	M4	オンソーサイド水和剤80	1:キヤブタン	800倍	収穫30日前まで	3回以内	×	
			5	M3	ペンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	
			5	M3	トノックスフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	△	
			5	M3	チオノックフロアブル	1:チガム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	×	

病害虫名	病害上のポイント等 (留意点)	耕種的防除法	FRACコード	IRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M1	7月	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	—	—	普	△	○よこれ注意 ○かぶれ注意
			M3	7月	ペンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○よこれ注意
べと病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。  (発生の特徴) ○感染は5～10月の多雨で多くなる。 ○30℃以上では病勢進展停止。 (防除上のポイント) ○発芽が始まる4月下旬頃から薬剤散布を開始。 ○5～6月は10～12日間隔で散布。 ○発病後は防除効果が低い。  (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード11 年1回の使用が望ましい。	○初発病の葉、花穂、果実の早期除去。 ○落葉の処分。	M3	8月	オンリーワンフロアブル	1:アコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
			M4	8月	フルーツセイバー	1:ペンチオゾラト	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M7	7月	カナメフロアブル	1:インピルフルキヤム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
			M11	7月	ストロベードライフロアブル	1:クルジキムタル	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
べと病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M11	7月	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:レリベンカルブ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
			M11	7月	アミスター10フロアブル	1:アノキシストロビン	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M1	5月	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	—	—	普	△	○よこれ(注) ○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
			M1	5月	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M2+M1	5月下旬	園芸ボルドー	1:硫酸2:塩基性塩化銅	800倍	—	—	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
			M3	5月下旬	ジマンダイゼン水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M3	6月	ペンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
			M4	6月上旬	オーソサイド水和剤80	1:キヤブタン	800倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	P7	6月上旬	アリエッティ水和剤	1:ホセチル	800倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
			21+M5	6月上旬	ドーシヤスフロアブル	1:シゾフアクト2:TPN	2,000倍	収穫60日前まで	3回以内	普	△	○よこれ(注) 炭酸カルシウム剤加用
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	40	6月上旬	フェステイバル水和剤	1:ジトモル7	750倍	収穫45日前まで	2回以内	普	○	○落花直後までの使用
			40+M3	6月上旬	カンパネラ水和剤	1:ペンチアハリカルブ/インプロレ2:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	○	○落花直後までの使用
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	40+M3	6月中旬	ペネセット水和剤	1:ペンチアハリカルブ/インプロレ2:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○よこれ注意
			49+M3	6月中旬	ソーベック エニペル 顆粒水和剤	1:オキサチアピロリ2:マンゼブ	750倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○よこれ注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M3	6月中旬	チオノックフロアブル	1:チガム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	○よこれ注意
			M3	6月中旬	トノックフロアブル	1:チガム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	○よこれ注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M3+4	6月下旬	リトミルゴールMZ	1:マンゼブ2:タラキシルM	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○よこれ注意
			4+M5	6月下旬	フロリオゴールド	1:タラキシルM2:TPN	1,500倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	○よこれ注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	11	7月中旬	アミスター10フロアブル	1:アノキシストロビン	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
			11	7月中旬	ストロベードライフロアブル	1:クルジキムタル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	21	7月中旬	ランマンフロアブル	1:クレノキシムタル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
			21	7月中旬	ライメイフロアブル	1:シゾフアクト	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	22	7月中旬	エトフィンフロアブル	1:エタボキヤム	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○耐性菌注意
			21+27	7月中旬	ダイナモ顆粒水和剤	1:アミスター10フロアブル2:シモキヤム	5,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	27+11	7月中旬	ホライズンドライフロアブル	1:シモキヤム2:アノキシストロビン	2,500倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
			27+40	7月中旬	ペトリアイト顆粒水和剤	1:シモキヤム2:ペンチアハリカルブ/インプロレ	3,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	40	7月中旬	レーバスフロアブル	1:マンジプロバント	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
			43+40	7月中旬	ジャストフィットフロアブル	1:フルホレコリ2:ペンチアハリカルブ/インプロレ	5,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
さび病	○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	M1	7月～8月	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	—	—	普	△	○よこれ注意
			M1	9月～10月(収穫後)	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	—	—	普	△	○よこれ注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水産 毒(注)		
灰色かび病	(防除上のポイント) ○開花前に散布。 (留意点) ○カンタスドライフロアブル 高温条件や散布後急激 に乾燥すると、葉焼けや 日焼け等の発生を助長す る恐れ。ニューズ、アプロ チBI等の浸透性展着剤 及び液肥は加用しない (薬害)。 ○耐性菌注意 FRACコード7、11 年1回の使用が望ましい。	○通風、採光、排水を良く する。 ○落花後は幼果に付着し た花冠を早期除去。	5月上旬		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,500倍	開花期～幼果期 但し、収穫60日前まで	3回以内	普	○かんきつへのドリフト注意	
			5月中旬		3	オンリーワンフロアブル	1:アブコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見に心掛け、薬剤は発病根除去後に処理。 ○新植の際、前作物の発病の有無に注意。	○被害枝を切り取り処分。 ○若齢幼虫期に10日おき に2回散布 ○クビアカスカシバには 7月散布が有効。	5月上旬		3	オーシャイン水和剤	1:オキボコナゾール フルマル酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○乗害等(注)、耐性菌注意	
			5月中旬		7	パレード15フロアブル	1:ピラジメト	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○耐性菌注意	
			5月下旬		7	カンタスドライフロアブル	1:ボツカリド	1,000倍	(大粒種)収穫7日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
			6月上旬		7	フルーツセイバー	1:ペンチオゾド	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
			6月中旬		7	カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	○耐性菌注意	
			6月下旬		7	ケンジャフロアブル	1:イフエグッド	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
			7月上旬		9	フルピカフロアブル	1:ムネピリム	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○耐性菌注意	
			7月中旬		9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:シブジニル2:フルシオキソニル	3,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○耐性菌注意	
			7月下旬		10+1	ゲッター水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:チオアネートメチル	1,000倍	収穫45日前まで	1回	普	○耐性菌注意	
			8月上旬		11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
			8月中旬		11	スクレアフロアブル	1:マンデストロピン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
			8月下旬		12	セイブアーフロアブル20	1:フルシオキソニル	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意	
スカシバ類	○被害枝を切り取り処分。 ○クビアカスカシバには 7月散布が有効。	○被害枝を切り取り処分。 ○若齢幼虫期に10日おき に2回散布 ○クビアカスカシバには 7月散布が有効。	6月上旬		17	ピクシオDF	1:フェビフサミン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○かぶれ注意	
			6月中旬		17	パスワード顆粒水和剤	1:フェンハキチド	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○かぶれ注意	
			6月下旬		29	フロンスイドSC	1:フルアシナム	2,000倍	開花直前～落葉期 但し、収穫60日前まで	1回	普	○かぶれ注意	
			7月上旬		52	ミギワ20フロアブル	1:イフルフェレン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○かぶれ注意	
			7月中旬		M8	トレンックスフロアブル	1:チクラム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	○かぶれ注意	
			7月下旬		M3	チオノックフロアブル	1:チクラム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	○かぶれ注意	
			8月上旬		6	フジアン粒剤	1:イプロチオチオン	3g/樹	萌芽期まで	1回	普	○土壌混和	
			8月中旬		29	フロンスイドSC	1:フルアシナム	1,000倍	収穫21日前まで	1回	普	○かぶれ注意(10日間入園禁止)、 土壌混注 100～2000/樹	
			8月下旬		4A	スタークル顆粒水溶剤	1:ジノチフラン	40g/樹	幼果期まで但し、 収穫30日前まで	1回	普	○登録はクビアカスカシバ	
			9月上旬		4A	アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノチフラン	40g/樹	幼果期まで但し、 収穫30日前まで	1回	普	○登録はクビアカスカシバ	
			9月中旬		3A	(上記薬剤は、本剤1g当たり1ml0の割合で混合し、主幹から主枝の粗皮を露状に剥いた部分に塗布) ロピンフッド 1:フェンプロバトリン			収穫前日まで	5回以内	普	○登録はクビアカスカシバ	
			9月下旬		1B	スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	○登録はクビアカスカシバ	
10月上旬		1B	スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普	○登録はクビアカスカシバ				
10月中旬		14	バダダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	(大粒種)収穫21日前まで	5回以内	劇	○登録はクビアカスカシバ				
10月下旬		28	フェニックスフロアブル	1:フルベンジメト	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○登録はクビアカスカシバ				
11月上旬		28	サムコルフフロアブル10	1:シロラニリニール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○登録はクビアカスカシバ				
11月中旬		28	エクシレルSE	1:シアントニリアロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○登録はクビアカスカシバ				
11月下旬		28	テッサン液剤	1:シクラニリアロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○登録はクビアカスカシバ				
12月上旬		28	ヨーバルフロアブル	1:アトラニリアロール	10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○登録はクビアカスカシバ				

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項								
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水産 毒(注)										
フタテンヒメヨコバイ	○防除上のポイント ○発生初期に重点的に防除。	○採光、風通を良くする。	5月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	○天敵への影響大									
			下旬	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普										
			8月	4A		アドマイヤー水和剤	1:イミダクロプロット	1,000倍	収穫21日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇										
			チャノキイロアザミウマ	○防除上のポイント ○満開直後から袋かけまでに3~4回散布。	○不要な副梢は早めに剪定処分。	5月	1B		モスピラン顆粒水溶解剤	1:アセチミット	2,000倍		収穫14日前まで	3回以内	劇						
						中旬	4A		ダントツ水溶解剤	1:クロチアエジン	4,000倍		収穫前日まで	3回以内	普						
						下旬	4A		アクタラ顆粒水溶解剤	1:チアトキサム	3,000倍		収穫7日前まで	2回以内	普						
						コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。		6月	4A			アルバリン顆粒水溶解剤	1:ジノチフラン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普			
									下旬	4A			スタークル顆粒水溶解剤	1:ジノチフラン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普			
									8月	13			コテツフロアブル	1:カオルフェピル	2,000倍	収穫60日前まで	2回以内	劇			
									上旬	14			パダンSG水溶解剤	1:カルトップ	1,500倍	(大粒種)収穫21日前まで	5回以内	劇			
									コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。			5月	4A		トクチオン水和剤	1:プロチオホス	800倍	収穫45日前まで	3回以内	普
													中旬	4A		モスピラン顆粒水溶解剤	1:アセチミット	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇
													下旬	4A		アクタラ顆粒水溶解剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇
			コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。									6月	4A		アルバリン顆粒水溶解剤	1:ジノチフラン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普
下旬	4A					スタークル顆粒水溶解剤	1:ジノチフラン	1,000倍				収穫前日まで	3回以内	普							
8月	4A					ダントツ水溶解剤	1:クロチアエジン	2,000倍				収穫前日まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	3回以内	普							
コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。					5月	4A					アドマイヤー水和剤	1:イミダクロプロット	1,000倍	収穫21日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇				
						中旬	4A					アドマイヤーフロアブル	1:イミダクロプロット	5,000倍	収穫21日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇				
						下旬	5					デアナナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普				
						コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。					6月	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	
									下旬	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリアルキヤノン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普				
			8月	13					コテツフロアブル	1:カオルフェピル	4,000倍	収穫60日前まで	2回以内	劇							
上旬	14		パダンSG水溶解剤	1:カルトップ	1,500倍				(大粒種)収穫21日前まで	5回以内	劇										
コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。		6月	29		ウララDF	1:プロニカスト	1,000倍	開花期前まで	2回以内	普										
			下旬	28		エクシレルSE	1:シアントリアプロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普										
			8月	28		ヨーバルフロアブル	1:トリアリアプロール	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普										
			コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。		6月	28		テツパン液剤	1:シクワリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							
						下旬	30		グレーシアフロアブル	1:フルキサメタジ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普							
						8月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普							
上旬	1B					スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普										
コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。		6月	3A		アグロスリン水和剤	1:シペルトリン	2,000倍	収穫21日前まで	5回以内	劇										
			下旬	3A		アデオオン水和剤	1:ペルトリン	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普										
			8月	3A		スカウトフロアブル	1:トロトリン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇										
			コガネムシ類	○飛来しはじめてから2週間ごとに2~3回散布。		6月	4A		モスピラン顆粒水溶解剤	1:アセチミット	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇							
						下旬	28		テツパン液剤	1:シクワリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							
						8月	28		ヨーバルフロアブル	1:トリアリアプロール	10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普							
上旬	28					エクシレルSE	1:シアントリアプロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤						注意事項	
			時期	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人水毒(注)
カブドミキリトラ	(防除上のポイント) ○収穫後に食入防止のため9月上旬と下旬の2回散布。 ○食入後の休眠期に防除。	○剪定時、被害枝は切り取り処分。 ○幼虫を捕殺。	9月	1B 1B 4A	SMチオン水和剤40 SMチオン水和剤40 モスピラン顆粒水溶剤	1:MEP 1:MEP 1:アセチアクト	1,000倍 1,000倍 2,000倍	(大粒種)収穫21日前まで (小粒種)収穫90日前まで 収穫後秋期	2回以内 2回以内 3回以内	△ △ △
ハダニ類	○雑草等の寄主植物の管理徹底。		3月下旬	un	M2 石炭硫黄合剤 銘柄により登録が異なる。必ずラベルを確認。 コロマイト水和剤 マイトコネフロアアブル カネマイトフロアアブル スターマイトフロアアブル ダニサラバフロアアブル ダニコンクフロアアブル	1:石灰硫黄合剤 1:ミルベメチン 1:ピフェナゼート 1:アセキシル 1:シエピラフェン 1:シフルホフェン 1:ピフルアクト	40倍 2,000倍 1,000倍 1,500倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	冬期 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	— 2回以内 1回 1回 1回 2回以内 1回	△ △※ △ △ △ △ △ △ △
コナカイガラムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。 ○若齢幼虫期に防除。	○粗皮削りを励行。	4月～幼果期	4A	アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 使用 方法: 薬剤1gあたり水1mlの割合で混合、主幹から主枝の粗皮を剥がして剥いだ部分に塗布。 オリオン水和剤40 トクチオン水和剤 モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 トランスフォームフロアアブル コルト顆粒水和剤 アブロードフロアアブル	1:シノチアフラン 1:シノチアフラン 1:アラニカルブ 1:プロチオホス 1:アセチアクト 1:クロチアニジン 1:チアトキサム 1:シノチアフラン 1:シノチアフラン 1:スルホキサフロル 1:セリアルキナゾリン 1:プロロアジン	20～40g/樹 20～40g/樹 1,000倍 800倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍 1,000倍	幼果期まで但し、収穫30日前まで 幼果期まで但し、収穫30日前まで 収穫45日前まで (大粒種)収穫45日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫30日前まで	1回 1回 1回 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △
クアノニカイガラムシ			5月 7月 8月中旬 9月上旬	1A 1B 4A 4A 4A 4A 4A 4C 9B 16	SMチオン水和剤40 SMチオン水和剤40	1:MEP 1:MEP	1,000倍 1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで (小粒種)収穫90日前まで	2回以内 2回以内	△ △
			7月 8月中旬～9月上旬		上記薬剤と同じ 上記薬剤と同じ					

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	防除薬剤		濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
							一般名	一般名						
縮葉病	(防除上のポイント) ○かきむらのないよう丁寧に散布。 ○萌芽直前の散布効果が高い。	○罹病葉の除去。	12月 3月中旬 (萌芽直前)	un	M2 M1 M1+M1	石灰硫黄合剤 ムンシュポルドーDF ICボルドー412 キンセツ水和剤80	1:石灰硫黄合剤	7倍	発芽前	ー	ー	普	△	○ラベル等(注)展着剤加用
							1:塩基性硫酸銅	500倍	開花前まで	ー	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用 ○葉害注意	
黒星病	(発生の特徴) ○低温多湿の年に発病が激しい。 (防除上のポイント) ○無袋の場合は4月下旬から3回程度散布。 ○有袋の場合は袋かけ前までの防除を徹底。	○通風を図る。 ○発病枝の除去。	4月下旬 6月上旬	un	M3 M3 M3+1 M7	石灰硫黄合剤 トノックスフロアブル チオノックフロアブル ホーマイコート ペフラン液剤25	1:石灰硫黄合剤	500倍	収穫7日前まで	5回以内	5回以内	普	×	
							1:塩基性硫酸銅	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×		
炭疽病	(発生の特徴) ○4～6月に降雨が続くと発病が多くなる。	○発病枝の切除。 ○被害果を早期除去。 ○早めに袋がけ。	4月 7月	un	M2 M2 M3 M3 M3 M5 M7 M9 M9+7	石灰硫黄合剤 イオウフロアブル サルファーゾル トノックスフロアブル チオノックフロアブル ペンコセブ水和剤 ダコニール1000 ペルコート水和剤 デランフロアブル セルカデイスDフロアブル	1:石灰硫黄合剤	750倍	収穫21日前まで	2回以内	2回以内	普	△	
							1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○高温時散布しない	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○袋かけ前防除徹底。 ○袋かけ前防除徹底。 ○樹勢の強化に努める。	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水産 毒(注)	注意事項							
													濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水産 毒(注)			
せん孔細菌病	(防除上のポイント) ○開花期と収穫20日前からの防除徹底。 ○同系統の薬剤の連用を避ける。(耐性菌発生注意) ○有袋は袋かけ前までの防除徹底。	○防風垣等で強風を防ぐ。 ○発病枝の切除。 ○樹勢の強化に努める。	3月上旬～中旬		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	—	—	—	普	○単用散布 ○近接散布(注)						
						アグレプト水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	△								
						アグレプト液剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	△								
						マイシン20水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	△								
						スターナ水和剤	1:オキソニツグ酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	△								
						マイコシールド	1:オキシテトラサイクリン	1,500倍	収穫21日前まで	5回以内	△								
						41+25	1:オキシテトラサイクリン2:ストレプトマイシン硫酸塩	1,500倍	収穫60日前まで	2回以内	△								
						M1	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用 ○かぶれ注意							
						M9	デランフロアブル	1:シチアミン	600倍	収穫7日前まで	4回以内	×							
						灰星病	(防除上のポイント) ○開花期と収穫20日前からの防除徹底。 ○同系統の薬剤の連用を避ける。(耐性菌発生注意) ○有袋は袋かけ前までの防除徹底。	○発病枝の切除。	9月中旬～10月(収穫後)		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	—	—	—	普	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用
												クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普		
												コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～落葉まで	—	普		
												2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	△	○かんきつへのトリプト注意
												2	スミレックス水和剤	1:プロキシム	1,500倍	収穫3日前まで	3回以内	△	
3	オンリーワンフロアブル	1:アコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内							△							
3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内							○							
3	オーシャイン水和剤	1:オキソニツグ酸	2,000倍	収穫前日まで	3回以内							○							
3	サルノシトールME	1:アトラコゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内							○							
3	インダーフロアブル	1:フェプロコゾール	5,000倍	収穫前日まで	4回以内							○							
3+11	ナディールフロアブル	1:アコナゾール2:トリプロキシム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内							△							
7	バレード15フロアブル	1:ヒラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内							○							
7	フルーツセイバー	1:ペンチゼラト	1,500倍	収穫前日まで	3回以内							○							
7	カナメフロアブル	1:インピルフルキヤム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内							△							
7	ケンジャフロアブル	1:イワエタシド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○													
11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	△													
11	ストロビードライフロアブル	1:クレゾキシムメチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△													
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ヒリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	△													
11	スクレアフロアブル	1:マンデストロビン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	○													
11+7	ナリアWDG	1:ヒラジフルミド2:ボスカド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	△※													
29	フロンスイドSC	1:フルアジナム	2,000倍	収穫7日前まで	1回	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)												
52	ミギワ20フロアブル	1:イプフルフェンキ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○													
M7	ベルコート水和剤	1:イミダクワジンアルベニル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△													
M7	ペルコートフロアブル	1:イミダクワジンアルベニル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△													
M9+7	セルカデイズDフロアブル	1:イミダクワジンアルベニル酸塩	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	×	○かぶれ注意												
U6	コナケン顆粒水和剤	1:シチアミン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	○													



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤						水産 毒 (注)	注意事項		
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期			使用 回数	
モブシス腐敗病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 防除上のポイント)</li> <li>○ 落弁直後の幼果期から防除徹底。</li> <li>○ 同系統の薬剤の連用を避ける。(耐性菌発生に注意)</li> <li>○ 有袋は袋かけ前までの防除徹底。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病枝の切除。</li> </ul>	4月中旬(落弁直後)		ロブラール水和剤	1:1ブロン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ かんきつへのドリフト注意
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 幼果期頃から発生し始めるので4月下旬から5月中旬に2回散布。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 通風を図る。</li> <li>○ 落葉の処分。</li> </ul>	4月下旬	3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ かんきつへのドリフト注意
			4月下旬	3	オンリーワンフロアブル	1:アブコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
白紋羽病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 樹勢が衰えると発病しやすい。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 早期発見し、薬剤は、発病根除去後に処理。</li> <li>○ 新植の際、前作物の発病の有無に注意。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 適正な樹勢を保つ。</li> <li>○ 未熟な粗大有機物を投入しない。</li> <li>○ 前作の被害根を除去。</li> <li>○ 無病苗を植え付ける。</li> </ul>	4月下旬	3	サルバトールME	1:アブコナゾール	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 10分間根部浸漬
			6月上旬	3+11	ナティールポフロアブル	1:アブコナゾール2:トリフロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
白紋羽病			4月上旬	7	フルーツセイバー	1:ペンチオピラト	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ かんきつへのドリフト注意
			4月上旬	7	カナメフロアブル	1:インピルフルキヤム	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	○	
白紋羽病			4月上旬	11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ペラジフルミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ かんきつへのドリフト注意
			4月上旬	11	スクレアフロアブル	1:ペラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
白紋羽病			4月上旬	M7	ペルコート水和剤	1:マンデスフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ かんきつへのドリフト注意
			4月上旬	M7	ペルコートフロアブル	1:マンデスフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
白紋羽病			4月上旬	U6	コナケン顆粒水和剤	1:シフルフェナジド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ かんきつへのドリフト注意
			4月上旬	U6	コナケン顆粒水和剤	1:シフルフェナジド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
白紋羽病			苗木植付前	1	トップジンM水和剤	1:ゴアアネートメタル	500倍	植付前	1回	普	△	○ かんきつへのドリフト注意
			発芽前	6	フジワン顆粒剤	1:イプロチオラン	3kg/樹	発芽前	1回	普	△	
白紋羽病			休眠期～生育期	29	フロロサイドSC	1:フルシナム	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○ かんきつへのドリフト注意(10日間入園禁止)、土壌灌注 100～200ℓ/樹
			休眠期～生育期	29	フロロサイドSC	1:フルシナム	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	

病害虫名	病害上の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人 毒 (注)	水産 (注)	注意事項	
														12月上旬～中旬
シシ クイ ムシ 類	(発生の特徴) ○ナンヒメシシクイは新梢・ 果実とも加害。 ○モモゴマダラノメイガは 果実のみ加害。 (防除上のポイント) ○4月中旬頃から10～15日 ごとに散布。 ○袋かけ前には必ず薬剤 散布。	○樹上の被害果は発生源 となるため処分。	4月	1A		オリオン水和剤40	1:アケニカルブ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△		
			4月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫3日前まで	6回以内	劇	△		
			8月	1B		ダールズバンDF	1:ケルビリホス	3,000倍	収穫14日前まで	5回以内	劇	×		
			4月	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			4月	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			4月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセチアリト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			5月	5		デアナナWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			5月	5		デリガートWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			5月	5		スピノエースフロアブル	1:スピノサト	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△		
			21A	21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェンバト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
28	28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
28	28		サムコルフフロアブル10	1:クロラントラニリアロール	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
28	28		エクシレルSE	1:ジアントリアリアロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
28	28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリアロール	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
28	28		テッパン液剤	1:シクラニリアロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
カイ イガ ラム シ類	(防除上のポイント) ○多発園では、第1回散布 の2週間後に2回目を散布 ○寄生の多い時にはタワシ などでごすり、重なつて寄 生する上の虫を落としてか ら薬剤を散布。		12月上旬～中旬	(物理)										
5月			1B		マシン油乳剤(95%)	1:マシン油	20倍	—	—	普	△			
5月			1B		ダールズバンDF	1:ケルビリホス	3,000倍	収穫14日前まで	5回以内	劇	×			
5月			4C		トランスフォームフロアブル	1:ダイアジン	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	×			
9B			9B		コルト顆粒水和剤	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○			
16			16		アプロード水和剤	1:ピリノキサナリ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			
16			16		アプロードフロアブル	1:プロプロフェン	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○			
21A+16			21A+16		アプロードエースフロアブル	1:プロプロフェン	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△			
23			23		モベントフロアブル	1:フェンピロキサメート2:プロプロフェン	1,000倍	収穫14日前まで	1回	普	×			
7月中旬～8月上旬			5月の薬剤と同じ(アプロード水和剤を除く)			1:ピロテトラト	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○			
8月下旬～9月中旬	5月の薬剤と同じ(アプロード水和剤を除く)													
ア ブ ラム シ類	(防除上のポイント) ○発生初期に散布。		12月上旬～中旬	(物理)										
4月			4A		マシン油乳剤(95%)	1:マシン油	25倍	発芽前	—	普	△			
4月			4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセチアリト	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△			
4月			4A		アドマイヤーフロアブル	1:ミダクログリト	5,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△			
6月			4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:チアトキヤム	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
6月			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
6月			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
6月			4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○			
9B			9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリノキサナリ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
21A			21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェンバト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×			
23	23		モベントフロアブル	1:トルフェンバト	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○					
29	29		ウララDF	1:プロニカト	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○					

防除薬剤

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人畜毒 (注)	注意事項
モモハモグリガ	病害虫の特徴 防除上のポイント等 ○成虫発生期～食入初期に散布。		4月 中旬 下旬	4A		アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アクトラ顆粒水溶剤 スピノエースフロアブル デアナWDG デリダートWDG カスケード乳剤 ハチハチフロアブル サムコルフフロアブル10 フェニックスフロアブル エクシレルSE ヨースラルフロアブル テックス液剤	1:メダカアクト 1:アセチミクト 1:ジノアフラン 1:ジノアフラン 1:チアラキサム 1:スピノサト 1:スピネトラム 1:スピネトラム 1:フルフェキサゾン 1:トルフェンビクト 1:クロラントリニリアロール 1:フルベンジメクト 1:シアントリニリアロール 1:トアラニリアロール 1:シクラニリアロール	5,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍 4,000倍 10,000倍 10,000倍 4,000倍 2,000倍 5,000倍 4,000倍 5,000倍 5,000倍 2,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については養分期から開花期を除く) 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	△ △	○葉害(施設)
ハダニ類	(防除上のポイント) ○発生初期に散布。		7月 下旬 8月 中旬	6 10B 20B 20D 23 25A 25A 25B 33		コロマイト乳剤 バロックフロアブル カネマイトフロアブル マイトコーネフロアブル ダニゲッターフロアブル スターマイトフロアブル ダニサラバフロアブル ダニコングフロアブル ダニオーテフロアブル	1:ミレバメダチ 1:エトキサゾール 1:アセキサシル 1:ヒワネゼット 1:スピロメトフェン 1:シエンピラフェン 1:シフルトフェン 1:ヒフルプロミド 1:アミノピリン	1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 2回以内 1回 1回 1回 1回 2回以内 1回 1回	△※ △ △ △ △ △ ○ △ △ ○ △ ○ △ △ ○	○単用散布、葉害(高温時) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○近接散布(ICホルトー) ○混用(注)(P:297)
モモサビダニ	(防除上のポイント) ○発生初期に防除徹底。		7月 中旬 8月	10B 13 20B 21A 21A 23		バロックフロアブル コテツフロアブル カネマイトフロアブル ハチハチフロアブル サンマイト水和剤 ダニゲッターフロアブル	1:エトキサゾール 1:フルフェキサシル 1:アセキサシル 1:トルフェンビクト 1:ピリダベン 1:スピロメトフェン	2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 1回 2回以内 1回 1回	△ △※ △ △ × × △	○近接散布(ICホルトー) ○葉害(株) ○刺激(眼) ○葉害(株)、近接散布(ICホルトー)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤					注意事項							
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名		濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人畜 毒	水産 (注)		
コス カ シ バ	○防除上のポイント ○樹上に残った蛹殻を発生時期、量の目安とする。 ○フェニックスフロアブル500倍散布園では、同剤4,000倍散布不要。	○虫糞や樹脂を目安に、秋～春にかけて幼虫を捕殺。 ○冬季にまゆや蛹等を捕殺。	4	1B+1B		ラビキラー乳剤	1:MEP2:PAP	200倍	落葉後～発芽前(休眠期)	1回		×	○樹幹及び主枝に十分散布 ○使用法(参考資料P.9)参照。		
			4			スカシバコンシ	1:シノセルブ	40～100本/10a(8g/100本製剤)	成虫発生初期～終期	—		○			
			3～4月(開花期まで)	28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	500倍	開花期まで	1回		普		△	○樹幹及び主枝に散布
			5月 7月	28 28 28 28		フェニックスフロアブル サムコルフロアブル10 テツパン液剤 ヨーマルフロアブル	1:フルベンジアミド 1:クロラントリニアロール 1:シクラニアロール 1:アトラニアロール	4,000倍 5,000倍 2,000倍 10,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内		普 普 普 普		△ △ △ △	
ケ ム シ 類	○防除上のポイント ○若齢幼虫時に防除。 ○作物や周辺植物上の卵塊や集団にいる若齢幼虫寄生枝などを切除し処分。 ○冬季にまゆや蛹等を捕殺。	○袋かけを早めに行う。	10月～11月	1B+1B 3A		トライサイドA乳剤 ロビシブツド (上記薬剤は、専用ノズルを食入部に差し込み、薬剤が食入部から逆流するまで噴射)	1:マクリン2:MEP 1:フェンプロパリン	200倍	収穫後～発芽前(幼虫食入期) 収穫前日まで	1回 5回以内		普 ○	○樹幹及び主枝に十分散布 ○樹幹及び主枝に十分散布 ○合じ(P.15)参照。		
			3 3 9 月	18 28 28		ロムダンフロアブル フェニックスフロアブル エクシレルSE	1:アフラエノバト 1:フルベンジアミド 1:シアントラニアロール	3,000倍 4,000倍 5,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内		普 普 普		○	
			4 月 下 旬 3 月 8 月 上 旬	1B 3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A		スミチオン水和剤40 テルスターフロアブル アグロスリン水和剤 ロデイー乳剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルハリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:MEP 1:セフェントリン 1:ジベタルリン 1:フェンプロパリン 1:チアトキヤム 1:シノテフラン 1:シノテフラン 1:ミタクロアブト 1:アセタミプリド 1:クロチアニン	1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 5,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで(用し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) 収穫前日まで 収穫7日前まで	6回以内 2回以内 5回以内 5回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内		普 × × × × △ △ △ △ △ △ △ △		○葉害(4～5月品種による) ○合じ(P.15)参照。 ○合じ(P.15)参照。 ○合じ(P.15)参照。	
カ メ ム シ 類	○発生の特徴 ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 ○果樹カメムシ類の発生活態と防除対策(P.151)参照 ○防除上のポイント ○飛来が認められたら早めに防除。	4 月 下 旬 3 月 8 月 上 旬	1B 3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A		スミチオン水和剤40 テルスターフロアブル アグロスリン水和剤 ロデイー乳剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルハリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:MEP 1:セフェントリン 1:ジベタルリン 1:フェンプロパリン 1:チアトキヤム 1:シノテフラン 1:シノテフラン 1:ミタクロアブト 1:アセタミプリド 1:クロチアニン	1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 5,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで(用し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) 収穫前日まで 収穫7日前まで	6回以内 2回以内 5回以内 5回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内		普 × × × × △ △ △ △ △ △ △ △	○葉害(施設)			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 普	水産 (注)	注意事項
実 炭 疽 病	(防除上のポイント) ○ 球果の肥大期から成熟 期に2～3回散布。	○ 間伐・剪定により通風、 採光を良くする。 ○ 枯枝、枯損樹の除去。	6 月 中 旬 ～ 8 月		1 1 M8 M7	ペンレート水和剤 トップジンM水和剤 ジマンダイセン水和剤 ベルクートフロアブル	1:ペ/ミル 1:オファネート+チル 1:マンセブ 1:イソキサジンアルベニル酸塩	2,000倍 1,000倍 600倍 1,000倍	裂果前但し収穫14日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	4回以内 4回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ △ △	○ かぶれ注意
カ イ ツ ガ ラ マ ム シ	(防除上のポイント) ○ 一齢幼虫の発生から3週 間後の6月下旬～7月上 旬、その3週間後の7月中 ～下旬に防除。		12月中旬～下旬	(物理)		マンシ油乳剤(95%) エルサン乳剤 アプロード水和剤 モスピラン顆粒水溶液	1:マンシ油 1:PAP 1:アプロ7エジン 1:アセタグリド	14倍 1,000倍 1,000倍 4,000倍	— 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	— 4回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 劇	△ × ○ △	○ 厳寒期前に散布
ク リ イ ガ ア ブ ラ ム シ	(防除上のポイント) ○ 球果への移動期(6月下 旬～7月中旬)の防除を 徹底。	○ イガを集めて処分。	6 月 下 旬 ～ 7 月 中 旬	1B 3A 4A 4A 3A+1B		エルサン乳剤 マブリック水和剤20 アドマイヤー水和剤 モスピラン顆粒水溶液 パーマチオン水和剤	1:PAP 1:フルハリネート 1:ミタケアグリド 1:アセタグリド 1:アセタグリド 1:フェンハレレート2:MEP	1,000倍 2,000倍 1,000倍 4,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで(但し、露地栽 培については発芽期から開 花期を除く) 収穫7日前まで 裂果前但し収穫14日前まで	4回以内 2回以内 3回以内 3回以内 4回以内	劇 × × △ △ ×	× × △ △ ×	○ 合じ(P.15)参照。 ○ 合じ(P.15)参照。
メ モ イ ノ ガ マ ダ ラ	(防除上のポイント) ○ 早生種は7月中旬～下旬 から、中晩生種は8月上 ～中旬から、10日以内 の間隔で2～3回散布。	○ イガを集めて処分。	7 月 中 旬 ～ 9 月 上 旬	1B 1B 1B 5 5 28		エルサン粉剤2 エルサン乳剤 トクチオン乳剤 デアナWDG デリゲートWDG フェニックスフロアブル	1:PAP 1:PAP 1:プロチオホス 1:スレネトラム 1:スレネトラム 1:フルベンジアミド	6kg/10a 1,000倍 1,000倍 10,000倍 10,000倍 4,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 裂果前まで(但し収穫7日前 まで) 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 4回以内 5回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 × × △ △ △ △	× × △ △ △ △	
カ ミ キ リ ム シ	類	○ 成幼虫を捕殺。	6月～10月	1B+1B		トラサイドA乳剤	1:マフロン2:MEP	200倍	裂果前但し収穫14日前まで	1回	普	△	○ 樹幹部に十分散布。
ク リ タ マ バ チ	(防除上のポイント) ○ 天敵の羽化時期である4 月までは剪定枝を園内に 残し、天敵を保護。	○ 間・縮伐、整枝・剪定の 実施、肥培管理を適切に 行い、樹勢強化に努める。	6月下旬～7月上旬	3A 3A 3A		アグロスリン水和剤 アデオン乳剤 マブリック水和剤20	1:ジベル外リン 1:ベルトル 1:フルハリネート	1,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 羽化脱出期 (但し収穫14日前まで) 収穫7日前まで	5回以内 5回以内 2回以内	劇 普 劇	× × ×	○ 合じ(P.15)参照。 ○ 合じ(P.15)参照。 ○ 合じ(P.15)参照。
ク リ シ ン ウ ム シ	(防除上のポイント) ○ 中晩生品種に発生が 多い。		9 月 上 旬 ～ 中 旬	3A 3A 3A 3A+1B 4A		アグロスリン水和剤 アデオン乳剤 アークリン水和剤 パーマチオン水和剤 モスピラン顆粒水溶液	1:ジベル外リン 1:ベルトル 1:エトフェンプロックス 1:フェンハレレート2:MEP 1:アセタグリド	1,500倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 裂果前但し収穫14日前まで 収穫7日前まで	5回以内 5回以内 3回以内 4回以内 3回以内	劇 × × △ × △	× × △ × △	○ 合じ(P.15)参照。 ○ 合じ(P.15)参照。 ○ 合じ(P.15)参照。 ○ 合じ(P.15)参照。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○雨前散布を徹底、降雨の場合、追加防除を実施。 ○耐性菌注意 FRACコード3、7年2回までの使用とし、連用を避ける。	耕種的防除法 ○中間宿主のビヤクシンは極力伐採。	時期 3月下旬～4月	FRACコード	使用薬剤 一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	水産人毒(注)	注意事項								
											IRACコード							
赤星病	○雨前散布を徹底、降雨の場合、追加防除を実施。 ○耐性菌注意 FRACコード3、7年2回までの使用とし、連用を避ける。	○中間宿主のビヤクシンは極力伐採。	3月下旬～4月	un	石炭硫黄合剤	40倍	-	-	普	○ラベル等(注)								
											①ビヤクシン類に対する防除							
											un	石炭硫黄合剤	40倍	-	-	普	○ラベル等(注)	
											4月上旬	M3	ジマンダイゼン水和剤	600倍	収穫30日前まで	5回以内	普	○かぶれ注意
											5月上旬	M3	ベンコゼブ水和剤	600倍	収穫30日前まで	5回以内	普	○かぶれ注意
											5月中旬	M3	エムダイファー水和剤	600倍	収穫45日前まで	3回以内	普	○かぶれ注意
												M3	トノックスフロアブル	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	○かぶれ注意
												M3	チオソックフロアブル	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	○耐性菌、かぶれ注意
												M9+7	セルカデイズDフロアブル	1,500倍	収穫60日前まで	3回以内	劇	○耐性菌注意
												3	トリアミン水和剤	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意
	3	アンピフロアブル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意											
	3	インダーフロアブル	8,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意											
	3	スコア顆粒水和剤	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意											
	3	オンリーワンフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意											
	3	サルバトールME	3,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意											
	3	オーシャインフロアブル	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○耐性菌注意											
	7	カナメフロアブル	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	○耐性菌注意											
	7	パレード15フロアブル	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○耐性菌注意											
	7	フルーツセイバー	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意											
黒星病	(防除上のポイント) ○新梢の先端を重点的に散布。 ○7～10日おきに散布、雨の多い時は散布間隔を短縮。 ○開花直前から開花後2週間の防除を徹底。 (留意点) ○石灰硫黄合剤の使用銘柄で登録内容が異なる。マンシ油散布後、1か月以上あける。 ○耐性菌注意 FRACコード3、7、11年2回までの使用とし、連用を避ける。	○落葉は春までに土中に埋める。 ○被害芽は花ごう基部に発病した場合も除去。	開花前 3月中旬～下旬	M1	ICボルト-48Q	30倍	収穫後～開花前	-	普	○かぶれ注意								
											un	石炭硫黄合剤	7倍	発芽前	-	普	○かぶれ注意	
											M3+1	ホーマイコート	50倍	休眠期	1回	普	○耐性菌注意	
											M1	オキシントー水和剤80	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	○耐性菌注意	
											M1	キノントー水和剤80	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	○耐性菌注意	
											M3	トノックスフロアブル	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	○耐性菌注意	
											M3	チオソックフロアブル	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	○耐性菌注意	
											M4	オーソサイド水和剤80	800倍	収穫3日前まで	9回以内	普	○耐性菌注意	
											M7	ペルコート水和剤	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	○耐性菌注意	
											M7	ペルコートフロアブル	1,500倍	収穫14日前まで	5回以内	普	○耐性菌注意	
M9+7	セルカデイズDフロアブル	1,500倍	収穫60日前まで	3回以内	劇	○耐性菌、かぶれ注意												
1+M3	ラビライト水和剤	800倍	収穫45日前まで	3回以内	普	○かぶれ注意												
2+M1	ロブドー水和剤	800倍	収穫14日前まで	5回以内	普	○耐性菌注意												
3	トリアミン水和剤	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意												
3	アンピフロアブル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○耐性菌注意												
3	オーシャインフロアブル	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○耐性菌注意												
7	パレード15フロアブル	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○耐性菌注意												
7	ネクスターフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○耐性菌注意												
7	カナメフロアブル	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	○耐性菌注意												
11	ストロベードライフロアブル	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	○6月中旬以降散布、耐性菌注意												
29	フロロサイドSC	2,000倍	収穫30日前まで	1回	普	○かぶれ注意(10日間入園禁止)												

なし

[6]なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
黒星病	(防除上のポイント) ○多染した圃地では、 2週間間隔で2回散布。 (収穫後)		収穫後(10月～11月上旬) 4月上旬 8月上旬	3	インダーフロアブル	1:フェンコナゾール	8,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				3	オンリーワンフロアブル	1:アゾコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				3	サルノボトールME	1:アゾコナゾール	3,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				3	マネージDF	1:イミベンコナゾール	6,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				7	フルーツセイバー	1:ベンチオチゾール	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				9	ユニックス顆粒水和剤47	1:ジプロフェニル	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○耐性菌注意	
				11	スクレアフロアブル	1:マンデスチロビン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
				11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ヒリベンカルブ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意	
11+7	ナリアWDG	1:ヒラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○乗害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意					
黒斑病	(防除上のポイント) ○10～15日おきに散布、 雨の多い時は散布間隔 を短縮。 ○小袋かけ前と梅雨期の 防除徹底。 (留意点) ○耐性菌注意1 FRACコード3、7、11 年2回までの使用とし、 連用を避ける。 ○耐性菌注意2 FRACコード19 耐性菌が確認されており 注意が必要。	○伝染源である枝の病斑と ボケ芽を剪定時に除去。 ○罹病果は集めて処分。	収穫後(10月～11月上旬) 4月上旬 8月上旬	M1	ICボルドー48Q	1:塩基性硫酸銅	30倍	収穫後～開花前	—	普	○	○使用方法は塗布	
				M1	オキシンドール水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意	
				M1	キノンドール水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	△	○耐性菌注意1	
				M4+M1	オキシラン水和剤	1:キプロタン2:有機銅	500倍	収穫3日前まで	9回以内	普	△	○耐性菌注意1	
				1	トップジンMペースト	1:オリアネートサル	原液	剪定整枝時及び病患部削り取り直後	3回以内	普	○	○使用方法は塗布	
				2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	○耐性菌注意1	
				3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意1	
				3	オンリーワンフロアブル	1:アゾコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意1	
				7	パレード15フロアブル	1:ヒラジフルミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意1	
				7	カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○耐性菌注意1	
9	ユニックス顆粒水和剤47	1:ジプロフェニル	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○乗害(開花～落花30日まで避ける)、耐性菌注意1					
11	ストロベードライフロアブル	1:クレゾキシムチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意1					
11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○耐性菌注意1					
11+7	ナリアWDG	1:ヒラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○乗害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意1					
19	ポリオキシシAL水和剤	1:ポリオキシシ複合体	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	○耐性菌注意2					
29	フロンスカイドSC	1:フルアジナム	2,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)					
M1	オキシンドール水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	○かぶれ注意					
M1	キノンドール水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	○かぶれ注意					
M1	キノンドールフロアブル	1:有機銅	1,000倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	○かぶれ注意					
M3	アントラコール顆粒水和剤	1:プロピネブ	500倍	収穫45日前まで	4回以内	普	△	○かぶれ注意					
M3	トノックスフロアブル	1:チナム	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○かぶれ注意					
M3	チオノックフロアブル	1:チナム	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○かぶれ注意					
M7	ベルクート水和剤	1:イミノカタシアルベシル酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	○かぶれ注意					
M9	デランフロアブル	1:シチアリン	1,000倍	収穫60日前まで	4回以内	劇	×	○かぶれ注意					
M9+7	セルカデイズDフロアブル	1:シチアリン2:フルキヒロキチド	1,500倍	収穫60日前まで	3回以内	劇	×	○かぶれ注意、耐性菌注意1					

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	水害 (注)	注意事項								
													原液	剪定整枝時及び病患部削り取り直後	3回以内	○				
輪紋病	(防除上のポイント) ○多発園では10～15日おきに散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード3、7、11年2回までの使用とし、連用を避ける。	○イボが多数形成された枝は剪定時に除去し、トップジンMペーストを塗布。 ○イボのついた苗木を新植しない。	5月中旬 9月中旬	1	1	トップジンMペースト	1:チオアアネートチル	原液	剪定整枝時及び病患部削り取り直後	3回以内	○	○使用方法は塗布								
													1	トップジンM水和剤	1:チオアアネートチル	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	△	○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○葉害(開花～落花30日まで避ける)、耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○葉害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意 ○かぶれ注意
													1	ペンレート水和剤	1:ペン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	△	
													3	スコア顆粒水和剤	1:ゾフェノコゾール	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	○	
													3	インダーフロアブル	1:フェンチオニル	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
													7	バレート15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	
													11	ストロビーードライフロアブル	1:クレソキシムチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△	
													11	アミスター10フロアブル	1:アノキシストロピン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	△	
													11	スクレアフロアブル	1:マンデスチロピン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
													11+7	ナリアWDG	1:ピラジフルミド2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△※	
M1	キノンドーフロアブル	1:有機銅	1,000倍	収穫3日前まで	9回以内	×														
M7	ベルクート水和剤	1:ミカクダジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	△														
M4	オーソサイド水和剤80	1:キヤブタン	1,000倍	収穫3日前まで	9回以内	×														
M9	デランフロアブル	1:シチアン	1,000倍	収穫60日前まで	4回以内	×														
うどんこ病	(防除上のポイント) ○発病葉を見つけたい散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード3、7、11年2回までの使用とし、連用を避ける。	○落葉の処分。	6月下旬 9月	3	3	トリフミン水和剤	1:トリフミンゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△	○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○耐性菌注意 ○葉害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意								
													3	アンピルフロアブル	1:ペンキコナゾール	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○	
													3	サルバトールME	1:テラコゾール	3,000倍	収穫21日前まで	3回以内	○	
													7	バレート15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	
													7	フルーツセイバー	1:ペンチオピラ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
													11	ストロビーードライフロアブル	1:クレソキシムチル	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	△	
													11	アミスター10フロアブル	1:アノキシストロピン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	△	
													11	スクレアフロアブル	1:マンデスチロピン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	○	
													11+7	ナリアWDG	1:ピラジフルミド2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△※	
													19	デュアルサイド水和剤	1:プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル2:ポリオキシソルビトール	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	○	
52	ミギワ20フロアブル	1:イブアルフェン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	○														
M7	ベルクート水和剤	1:ミカクダジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	△														
M7	ベルクートフロアブル	1:ミカクダジンアルベシル酸塩	1,500倍	収穫14日前まで	5回以内	△														
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見に心掛け、薬剤は発病根除去後に処理。 ○新植の場合は前作物の発病の有無に注意。	○樹勢を適正に保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗を植える。	休眠期 落花直後まで	1	6	トップジンM水和剤	1:チオアアネートチル	500倍 (土壌灌注)	休眠期	1回	○	○土壌混和								
													6	フジワン粒剤	1:イブプロチオン	3～5kg/樹	落花直後まで	2回以内	△	
													29	フロンスайдSC	1:フルアジナム	1,000倍	収穫30日前まで	1回	×	



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	防除薬剤			使用時期	使用回数	人水産 毒(注)	注意事項
							一般名	濃度 (使用量)	使用回数				
カイガラムシ類			12月中旬～1月中旬	(物理)									
クワコナ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○9月にバンド(わら等)を巻き、越冬卵を処分。	5月	1B		マシン油乳剤(95%)	マシン油	20倍	—	—	普	○粗皮を削った後散布。 近接散布(硫黄合剤)	
カイガラムシ				1B		サイアノックス水和剤	1:CVAP	1,000倍	(無袋)収穫45日前まで	3回以内	普		
				1B		トナチオン水和剤	1:CVAP	1,000倍	(有袋)収穫7日前まで	3回以内	普		
				1B		ダースバンDF	1:クロチホス	800倍	収穫60日前まで	5回以内	普		
				1B		スミチオン水和剤40	1:クロチホス	3,000倍	収穫30日前まで	3回以内	劇		
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	○葉害(6月散布)	
				1B		ダイアジン水和剤34	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	○葉害(6月散布)	
				16		アブロード水和剤	1:ダイアジン	1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇		
				16		アブロードフロアブル	1:プロプロフェン	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普		
				1A		オリオン水和剤40	1:プロプロフェン	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普		
			7月	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:アラニカルブ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇		
			8月	4A		ダントツ水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			5月	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:クロチアニン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			9月中旬	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シノチフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			9月上旬	4A		トランスフォームフロアブル	1:シノチフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			8月上旬	4C		コルト顆粒水和剤	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			9月上旬	9B			1:ピリアルキナゾン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
シクイムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期より15日ごとに収穫期まで散布。		満開直後	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	○葉害(6月散布)	
				1B		サイアノックス水和剤	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	○葉害(6月散布)	
				1B		サイアノックス水和剤	1:CVAP	1,000倍	(無袋)収穫45日前まで	3回以内	普		
				1B		ダイアジン水和剤34	1:CVAP	1,000倍	(有袋)収穫7日前まで	3回以内	普		
			5月下旬・7月下旬				1:ダイアジン	1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇		
メイトイガモシマダラ	(発生の特徴) ○幼虫が枝幹と果実へ食入 ○交信かく乱剤利用の減農薬圃で発生が多い。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。	6月	1A		コンフェューザーN	1:オリアリアートトリプル・ピーチフルア	50～200本/10a(52g/200本製剤)	成虫発生初期～終期	—	普	○使用法(参考資料P.9)参照。	
			6月中旬	5		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇		
			8月中旬	5		デリアナWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			8月	28		フェニックスフロアブル	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			8月	28		サムコロフロアブル10	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			8月	28		エクシレルSE	1:クロラントリニリアロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
				28		ヨーバルフロアブル	1:シアントリアリアロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
				28		テツパン液剤	1:チトラニリアロール	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
				28		フェニックスフロアブル	1:シクラニリアロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			6月	28			1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			9月										
			10月										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	防除薬剤			濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項
							一般名	使用薬剤	FRAC コード						
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○新梢での発生状況に注意し、発生初期に防除。		発芽期	4A		アルバリン粒剤	1:シノチフラン		20g/株	育苗期	1回	普	△	○苗木登録 10a当たり110kgまで ○苗木登録 10a当たり110kgまで	
				4A		スタークル粒剤	1:シノチフラン		20g/株	育苗期	1回	普	△		
ハマキムシ類	(防除上のポイント) ○発芽期から開花期の防除が重要。		発芽期	4A		バリアード顆粒水和剤	1:ダクロプロト		4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○刺激(眼) ○葉害(伏)	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:シノチフラン		2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シノチフラン		2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム		3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:メダクロアクト		5,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△		
				4C		トランスポフォームフロアブル	1:スルホキサフル		4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				9B	39	コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナン		4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				21A		ハチハチフロアブル	1:トルフェンヒラト		2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×		
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラメト		2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○		
				29		ウアラDF	1:プロネホト		4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○		
				1A		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ		1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△		
1B		ダイアジン水和剤34	1:ダイアジン		1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇	×						
1B		スミチオン水和剤40	1:MEP		1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△						
1B		スミチオン水和剤40	1:MEP		1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	○						
1B		ダースバンDF	1:クロルピホス		3,000倍	収穫30日前まで	3回以内	劇	×						
5		デアナWDG	1:スピネトラム		5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
5		デリガードWDG	1:スピネトラム		5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
28		エクシレルSE	1:シアントラニリアロール		5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
28		ヨーバルフロアブル	1:トラニリアロール		5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
28		テツパン液剤	1:シクラニリアロール		2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○						
28		サムコルフフロアブル10	1:クロラニリアニリアロール		5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
1A		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ		1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△						
3A		アークリン水和剤	1:エトフェンブロッサ		1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△						
28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジジアニト		4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
28		サムコルフフロアブル10	1:クロラニリアニリアロール		5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
28		エクシレルSE	1:シアントラニリアロール		5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
1B		スミチオン水和剤40	1:MEP		1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△						
1B		スミチオン水和剤40	1:MEP		1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	△						
1B		ダイアジン水和剤34	1:ダイアジン		1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇	×						
6		コロマイト水和剤	1:ニルベメチン		2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※						
6		コロマイト乳剤	1:ニルベメチン		1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※						
20B		カネマイトフロアブル	1:アセキノシル		1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△						
20D		マイトコーネフロアブル	1:ピラネナゼト		1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△						
23		ダニゲッターフロアブル	1:スピロメト		2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△						
25A		スターマイトフロアブル	1:ジエピラゾエン		2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△						
25A		ダニサラバフロアブル	1:ジフルトフェン		2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○						
25B		ダニコングフロアブル	1:ピラネナゼト		2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△						
33		ダニオーテフロアブル	1:アジナニル		2,000倍	収穫前日まで	1回	普	○						
13		コテツフロアブル	1:クロルフェニル		2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項
ニセナシバダニ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 ○ 芽の基部、枝の粗皮、古い切り口等で越冬。最高気温18℃以上になる頃越冬場所から離脱。(防除上のポイント)</li> <li>○ 寄生密度の高い徒長枝先端部や芽に丁寧に散布。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 剪定、粗皮削り等で越冬密度を下げる。</li> <li>○ 剪定枝等は園外へ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>上3月中旬</li> <li>5月中旬</li> <li>6月上旬</li> <li>21A+16</li> <li>7月上旬</li> <li>23</li> <li>23</li> <li>25B+21A</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>un</li> <li>6</li> <li>13</li> <li>20B</li> <li>21A</li> <li>21A</li> <li>21A</li> <li>23</li> <li>23</li> <li>25B+21A</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>M2</li> <li>39</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>クムラス</li> <li>コロマイト乳剤</li> <li>コテツフロアブル</li> <li>カネマイトフロアブル</li> <li>ハチハチフロアブル</li> <li>サンマイト水和剤</li> <li>アプロードエースフロアブル</li> <li>ダニゲッターフロアブル</li> <li>モンベントフロアブル</li> <li>ダブルフェースフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:硫黄</li> <li>1:ミルベメチン</li> <li>1:コロフェチル</li> <li>1:アセキシル</li> <li>1:トルフェビド</li> <li>1:ヒリタヘン</li> <li>1:フェビロキシメト2:プロフェン</li> <li>1:スピロメフエン</li> <li>1:スピロテトラト</li> <li>1:ビフルプロミド2:フェビロキシメト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>300倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ー</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ー</li> <li>1回</li> <li>3回以内</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>3回以内</li> <li>1回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>劇</li> <li>普</li> <li>劇</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>△※</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>×</li> <li>×</li> <li>×</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉害(発芽前までに使用)</li> <li>○ 単用で散布</li> <li>○ 刺激(眼)</li> <li>○ 刺激(眼)</li> <li>○ 回数注意(アプロード・タフルフェース)</li> <li>○ 近接散布(ICホルド)・葉害(イネ)</li> <li>○ 葉害(イネ)</li> <li>○ 回数注意(アプロード・アプロードエース)</li> </ul>
アザミウマイロ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 被害は新梢葉を内側にして湾曲し、新梢の先端部で多く見られる。(防除上のポイント)</li> <li>○ 寄生密度の高い徒長枝先端部や芽に丁寧に散布。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>5月</li> <li>5月</li> <li>7月</li> <li>13月</li> <li>21A</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5</li> <li>5</li> <li>9B</li> <li>13</li> <li>21A</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>WDG</li> <li>デリゲートWDG</li> <li>コルト顆粒水和剤</li> <li>コテツフロアブル</li> <li>ハチハチフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:スピネトラ</li> <li>1:スピネトラ</li> <li>1:ヒリフルキナゾン</li> <li>1:コロフェチル</li> <li>1:トルフェビド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5,000倍</li> <li>5,000倍</li> <li>3,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>1回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>劇</li> <li>劇</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△※</li> <li>×</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 刺激(眼)</li> </ul>	
キクイムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 枝幹と果実に穿孔被害。</li> <li>○ 樹勢の衰えた樹で、枝幹被害が多い。</li> <li>○ 被害樹を確認後は主幹部に薬剤を散布。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>4~5月</li> <li>1B+1B</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1B+1B</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>トキサイドA乳剤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:マゾシ2:MEP</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>200倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4月~7月</li> <li>但し収穫21日前まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉害(葉に付着)</li> <li>樹幹部に散布</li> </ul>	
カメムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や圃地差も大きい。</li> <li>○ 果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(P.151) 参照</li> <li>○ 飛来が認められたら早めに防除。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 防虫網6mm目以下(4mm目以下が望ましい)で圃全体を覆う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5月下旬</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>4A</li> <li>4A</li> <li>4A</li> <li>4A</li> <li>28</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1B</li> <li>1B</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>3A</li> <li>4A</li> <li>4A</li> <li>4A</li> <li>4A</li> <li>28</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SM</li> <li>SM</li> <li>AG</li> <li>SC</li> <li>TE</li> <li>TE</li> <li>RD</li> <li>AD</li> <li>AL</li> <li>ST</li> <li>AC</li> <li>DT</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:MEP</li> <li>1:MEP</li> <li>1:シベルトリ</li> <li>1:トラトリ</li> <li>1:フェント</li> <li>1:フェント</li> <li>1:フェプロロパド</li> <li>1:ミダクアロパド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,500倍</li> <li>1,500倍</li> <li>2,000倍</li> <li>5,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>6回以内</li> <li>6回以内</li> <li>3回以内</li> <li>5回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>劇</li> <li>劇</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>劇</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△</li> <li>×</li> <li>△※</li> <li>△※</li> <li>×</li> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉害(6月散布)</li> <li>○ 葉害(6月散布)</li> <li>○ 合比(P.15)参照。</li> <li>○ 合比(P.15)参照。</li> <li>○ 合比(P.15)参照。</li> <li>○ 合比(P.15)参照。</li> <li>○ 合比(P.15)参照。</li> </ul>		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項		
黒 星 病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○4月頃から降雨により感染。</li> <li>○潜伏期間30～40日。</li> <li>○春先が温暖多雨の場合多発。</li> <li>○白加賀は発生しやすい。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○感染時期の4月上旬～5月下旬を中心に3～4回防除。</li> <li>○多発傾向の園地では、収穫期以降9月上旬頃まで防除し、越冬伝染源を低減。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○発病枝は切除。</li> <li>○通風、採光、排水を良くする。</li> </ul>	4 月 上 旬		1	トップジンM水和剤	1:オオファネートメチル	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類		
			4 月 上 旬		1	ペンレレート水和剤	1:ペンレ	3,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△			
う どん こ 病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○春先が温暖多雨の場合多発。</li> <li>○白加賀は発生しやすい。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○感染時期の4月上旬～5月下旬を中心に3～4回防除。</li> <li>○多発傾向の園地では、収穫期以降9月上旬頃まで防除し、越冬伝染源を低減。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○風当りの強い所は防風網などを整備。</li> <li>○発病枝は切除。</li> </ul>	5 月		3	マネージDF	1:イミベンコナゾール	4,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	○			
			5 月		3	オーシヤイン水和剤	1:オキズホコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			
					3	インダーフロアブル	1:フェンコナゾール	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○			
					3	スコア顆粒水和剤	1:ジメノコナゾール	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			
					3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△			
					3+11	ナティールフロアブル	1:アコナゾール2:トリプロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
					7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルト	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○			○登録は小粒核果類
					7	フルーツセイバー	1:ペンチオゼト	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			○登録は小粒核果類
					7	ネクスターフロアブル	1:イピラゾラム	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			○登録は小粒核果類
					7	ケンジヤフロアブル	1:イワエダシト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:ジプロニル2:フルシオキシニル	3,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△			
					11	ストロボードライフロアブル	1:クロキシメチル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△			
					11	アミスター10フロアブル	1:アノキシストロビン	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
					11+7	ナリアWDG	1:ピラクトロビン2:ボスカリト	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※			○登録は小粒核果類(すもを除く)
					29	フロンスイドSC	1:フルシオラム	2,000倍	発芽期まで(但し、収穫60日前まで)	1回	普	×			○かぶれ注意(10日間入園禁止)
					52	ミギワ20フロアブル	1:イアフルフェネキ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			○登録は小粒核果類
					M2	イオウフロアブル	1:硫黄	500倍	—	—	普	○			○高温時散布しない
					M2	サルブアーツール	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	—	普	○			○高温時散布しない
		M3	ペンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△			○かぶれ注意			
		M3	チオソックフロアブル	1:チガム	500倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×						
		M3	トニックスフロアブル	1:チガム	500倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×						
		M7	ペルクート水和剤	1:ミリカザンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△						
		M7	ペルクートフロアブル	1:ミリカザンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△						
		M9	デランフロアブル	1:シチアリン	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×				○かぶれ注意		
			4月上旬～5月		11	ストロボードライフロアブル	1:クロキシメチル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△			
			3月(葉芽発芽前)		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	葉芽発芽前まで	—	普	△	○葉害(生育期)		
					M1	コサイト3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	硬核期まで	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用		
		4 月 上 旬			24	カスミン液剤	1:カスカマイシン	500倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△			
		5 月 上 旬			31	スターナ水和剤	1:オキリニック酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類		
					41	マイコシールド	1:オキシテトラサイクリン	1,500倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△			
					M1	コサイト3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	硬核期まで	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○病原菌は、果実上に残存した花弁より侵入。	○排水をよくする。 ○整枝・剪定等で通風を改善。 ○落下した発病果を処分。	2月下旬		2 3+11 7	ロブロール水和剤 ナナイロフロアブル パレード15フロアブル	1:イブゾロン 1:アコナゾール2:トリプロキシストロビン 1:ヒラジフルミド	1,500倍 2,000倍 3,000倍	収穫45日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	△ △ ○	○かんきつへのドリフト注意 ○葉害注意 ○登録は小粒核果類
すす病	(発生の特徴) ○春先、枝の病斑の上に形成された胞子が、雨水によって運ばれ果実に感染する。 ○5月中旬以降の主要感染時期の多雨で多発。	○整枝・剪定等で通風を改善。	4月下旬		3 3 3+11	スコア顆粒水和剤 インダーフロアブル ナナイロフロアブル	1:ジフェノコナゾール 1:フェブコナゾール 1:アコナゾール2:トリプロキシストロビン	3,000倍 5,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	○ ○ △	○登録は小粒核果類
白斑病	(発生のポイント) ○4月下旬以降の主要感染時期の多雨で多発。		5月上旬		7 7	パレード15フロアブル フルーツセイバー	1:ヒラジフルミド 1:ペンチオズド	2,000倍 1,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△ △	○登録は小粒核果類
白紋羽病	(発生のポイント) ○4月下旬以降10日または2週間おきに薬剤を散布。	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見し、薬剤は発病根除去後に処理。 ○新植の際、前作物の発病の有無に注意。	(耕種的防除法) ○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。		M3 M4 M9	ペンコゼブフロアブル オーソサイド水和剤80 デランフロアブル	1:マンゼブ 1:キヤブタン 1:ジチアノ	1,000倍 800倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで	3回以内 3回以内 2回以内	普 普 劇	△ △ ×	○かぶれ注意 ○登録は小粒核果類 ○かぶれ注意
ウメシロカカイガラムシ	(防除上のポイント) ○多寄生時にはタワシで、重なりで寄生する上の虫を落とす薬剤散布。 ○収穫後、幼虫発生期に2週間ごとに2回散布。	○多寄生枝を切除。	5月上旬		29	フロロサイドSC	1:フルロジナム	500倍	収穫後～開花前まで(但し、収穫60日前まで)	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
			5月上旬		4C 9B 4C 9B 16	トランスフォームフロアブル コルト顆粒水和剤 トランスフォームフロアブル コルト顆粒水和剤 アブロードフロアブル	1:スルホキサフロル 1:ヒリフルキナゾル 1:スルホキサフロル 1:ヒリフルキナゾル 1:プロプロフェジン	1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	○ △ ○ △ △	○登録は小粒核果類 ○登録は小粒核果類
			12月		NC	高度精製マシリン油乳剤(97%製剤)	1:マシリン油	50倍	発芽前	-	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○新梢での発生状況に注意し、発生初期から防除。		発生初期～6月	4A 4A 4A 4A 4A 4C 9B 29		モスピラン顆粒水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 トランスポームフロアブル コルト顆粒水和剤 ウララDF	1:メタミプリド 1:チアトキサム 1:ジノアブラン 1:ジノアブラン 1:クロチアエジン 1:スルホキサフロ 1:ヒリフルキサゾン 1:プロエガミド	4,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 4,000倍 4,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	劇 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ○ △ ○	
コスカシバ	(防除上のポイント) ○樹上に残った蛹殻を発生時期、量の目安とする。	○虫糞や樹脂を目安に、秋～春に幼虫を捕殺。	発芽前	1B+1B 28		ラビキラー乳剤 フェニックスフロアブル	1:MEP2:PAP 1:フルベンジミアミド	200倍 200倍	落葉後～発芽前(休眠期) 開花期まで	2回以内 1回	劇 普	×	○樹幹・主枝に十分散布 ○樹幹・主枝に散布 ○使用法(参考資料P.9)参照。
ケムシ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除	○作物や周辺植物上の卵塊や集団でいる若齢幼虫寄生枝を切除し処分 ○冬季にまゆや蛹等を捕殺。	4月上旬 5月～7月	28		スカシバコンシ サムコルフロアブル10	1:ジノンセルブ 1:クロラントリプロロール	40～100本/10a(8g/100本製剤) 5,000倍	成虫発生初期～終期 収穫14日前まで	- 3回以内	普	△	
アカイダマシ	(発生の特徴) ○完熟果実に誘引される。	○落下果実の処理。	収穫期	1A 18 28 28 28 3A 4A		オリオン水和剤40 ロムダンフロアブル フェニックスフロアブル ヨーマルフロアブル テッサン液剤 アデオン水和剤 バリアード顆粒水和剤	1:アラニカルブ 1:チアフェンジト 1:フルベンジミアミド 1:クロラントリプロロール 1:シクラニプロロール 1:ペルメトリン 1:チアクロプロリド	1,000倍 3,000倍 4,000倍 5,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普 普 普 普 普	△ ○ △ △ ○ ×	○合ヒ(P.15)参照。
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や圃地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めから防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(P.151)参照		4月～6月	3A 3A 4A 4A 4A 4A		スカウトフロアブル テルスターフロアブル アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:トラトリン 1:ヒフェントリン 1:ジノアブラン 1:ジノアブラン 1:チアトキサム 1:クロチアエジン	2,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	劇 劇 普 普 普 普	△※ ×	○合ヒ(P.15)参照。 ○合ヒ(P.15)参照。 登録は小粒核果類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水産 毒(注)	注意事項	
														休眠期(3月上旬～中旬)
花腐病	○がく裂開期に降雨が多いと発生が多くなる	○通風、採光、排水を良くする。 ○開花の約30日前に環状剥皮を行う。	4月上旬		M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	休眠期～養生期(新梢長約10cm)	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
細菌病			5月上旬	24+M1	24+M1	カスミンボルドー	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
菌病			中旬	24+M1	24+M1	カッパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
病			下旬	M1	M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	休眠期～養生期(新梢長約10cm)	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
腐			上旬	24+M1	24+M1	カスミンボルドー	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後養生期(新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
菌			旬	24+M1	24+M1	カッパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後養生期(新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
病				24	24	カスミン液剤	1:カスカマイシン	400倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				25	25	アグレプト水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				25	25	マイシン20水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				41+25	41+25	アグリマイシン-100	1:オキシノチン(ク)2:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	落花期まで	3回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
かいよう病		○風当たりの強いところは防風対策を強化。 ○発病樹は伐採(樹体の枯死、菌液の漏出が激しい場合伐根)。 ○初期病徴(葉のみの発生)では、速やかに結果母枝まで切り戻す。 ○被害枝や剪定枝は埋設、焼却。 ○剪定箇所には保護剤を塗布。	11～12月(収穫後)	M1	M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	収穫後～発芽前	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			1月	24+M1	24+M1	カスミンボルドー	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
			2月	24+M1	24+M1	カッパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	収穫後～発芽前	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用
				M1	M1	ドイトボルドーA	1:塩基性塩化銅	500倍	休眠期～蕾出現前	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			3月上旬～中旬(発芽前)	上記薬剤と同じ										
			4月上旬～中旬(発芽後養生期)	上記薬剤と同じ										
				24+M1	24+M1	カスミンボルドー	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後養生期(新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				24+M1	24+M1	カッパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後養生期(新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				コサイド3000は、発芽期以降の散布が遅れないようにする・開花期以降、葉が黄化・落葉する場合があります。(黄色・赤色系)										
				M1	M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用	
				M1	M1	フジローフロアブル	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
			4月下旬	24	24	カスミン液剤	1:カスカマイシン	400倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
			5月上旬	25	25	アグレプト水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
			下旬	25	25	マイシン20水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
			中旬	41+25	41+25	アグリマイシン-100	1:オキシノチン(ク)2:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	落花期まで	3回以内	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
			(開花前)	M1	M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	—	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
				M1	M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
				M1	M1	フジローフロアブル	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)	
				M1	M1	エコンヨット	1:ハチルスF747	1,000倍	収穫前日まで	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)
				M1	M1	マスタピース水和剤	1:シュートモナステシ	2,000倍	収穫前日まで	—	—	普	△	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用、葉害(注)
			5月下旬～(開花後)	上記薬剤と同じ										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水 毒 (注)	注意事項
果実軟腐病	(発生の特徴) ○秋雨が多い年は、追加防除。 (防除上のポイント) ○発生初期より3週間間隔で2回散布。 ○農薬のかかりにくい所に寄生するため、丁寧に散布。	○枯れ枝、剪定枝等の除去処分。 ○適期収穫。 ○追熟温度は適正に保ち15度以上にしない。	5月下旬～7月		1 1 1 11+7 29 M7 P7	トップジンM水和剤 トップジンMノル ペンレート水和剤 ナリアWDG フロキサイドSC ペルコート水和剤 アリエッティ水和剤	1:チオアネートメチル 1:チオアネートメチル 1:ペニシリン 1:ピラジナトロン2:ボスカリド 1:フルアジナム 1:イソプロピルアルコール 1:ホセチル	1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 600倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫30日前まで 収穫前日まで 幼果期まで(但し、収穫120日前まで)	5回以内 5回以内 5回以内 2回以内 1回 5回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
灰色かび病	(発生の特徴) ○天候不順が減くときは追加防除。 ○貯蔵庫内の点検に努め、発病果は早期に除去。	○通風、採光、排水を良くする。 ○果面が濡れた状態では収穫しない。 ○貯蔵庫内の点検に努め、発病果は早期に除去。	8月下旬～9月中旬 5月下旬～6月上旬(落果期)		2 7 11 11 11+7 29	ロプラール水和剤 バレード15フロアブル ストロビードライフロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 ナリアWDG フロキサイドSC	1:イプロジオン 1:ピラジナトロン 1:クレキシムメチル 1:ピリベンカルブ 1:ピラジナトロン2:ボスカリド 1:フルアジナム 1:イプロジオン	1,500倍 3,000倍 3,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍	開花期～落花期 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫30日前まで 収穫前日まで	4回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 1回 4回以内	普 普 普 普 普 普 普	○かんきつへのドリフト注意
すす斑病	(発生の特徴) ○中国系品種は弱い。 (防除上のポイント) ○6～8月に1ヶ月間隔で2回散布。	○通風、採光、排水を良くする。	6月中旬～8月中旬		1 11 11 11+7	ペンレート水和剤 ストロビードライフロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 ナリアWDG	1:ペニシリン 1:クレキシムメチル 1:ピリベンカルブ 1:ピラジナトロン2:ボスカリド	2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えた場合発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見に心掛け、薬剤は、発病根除去後に処理。 ○新植の場合は前作物の発病の有無に注意。	○適正な樹勢を保つ。 ○前作の被害根を除去。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○無病苗の植え付け。	植付時(苗木)		29	フロキサイドSC	1:フルアジナム	500倍	植付時	1回	普	○苗木の1時間浸漬 かぶれ注意(10日間入園禁止)
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や圃地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(P.151)参照		5月下旬		3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A	アデオイン乳剤 アグロスリン乳剤 テルスターフロアブル アドマイヤーフロアブル アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:ペルメトリン 1:シペルメトリン 1:ピラジナトロン 1:ミダクアアクト 1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:クロチアニジン	2,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	○合ピレ(P.15)参照 ○合ピレ(P.15)参照 ○合ピレ(P.15)参照



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤						水産 (注)	人毒 (注)	注意事項					
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期				使用回数				
キイロマイコガ	防除上のポイント) ○発生初期より3週間間隔で2回散布。 ○農薬のかかりにくい所に寄生するため、丁寧に散布。	耕種的防除法	6 月 中 旬 5 月 7 月 28	3A 3A 3A 3A 14 28		アグロスリン乳剤 アデオン乳剤 マブリック水和剤20 スクアウトフロアブル パダンSG水溶剤 フェニックスフロアブル	1:シペルトリン 1:ペルトリン 1:フルハリネット 1:トロトリン 1:カルタップ 1:フルベンジアミド	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,500倍 4,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで	3回以内 5回以内 2回以内 5回以内 3回以内 3回以内	×	×	×	×	×	○合ビレ(P.15)参照 ○合ビレ(P.15)参照 ○合ビレ(P.15)参照 ○合ビレ(P.15)参照
カイガラムシ類		○支障がない範囲で寄生枝を処分。 (防除上のポイント) ○第1世代幼虫(5月・下旬)の防除を徹底。 ○若齢幼虫の多発生時期に防除。多発期では、1回目の散布から約2週間後に再散布。 ○多発生時には重なって寄生する上の虫をタワシなどで落とし薬剤散布。	12月～1月 (物理)	NC		マシノ油乳剤(95%) トモノールS	1:マシノ油 1:マシノ油	14倍 30倍	— 発芽前	— —	— —	— —	— —	— —	— —	
クワシロコガ カイガラムシ		○放任樹は伐採。 ○1年生枝への食入が中心である4～5月に虫叢を目安に食入枝を除去	5 月 7 月 9 月 5 月 10 月	3A 4A 4A 4A 13 14 21A		アグロスリン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 モスピランSL液剤 ダントツ水溶剤 コテツフロアブル パダンSG水溶剤 サンマイト水和剤	1:シペルトリン 1:セタミド 1:アセタミド 1:クロチアエジン 1:クロルフェニル 1:カルタップ 1:ヒリタベン	2,000倍 4,000倍 4,000倍 4,000倍 2,000倍 1,500倍 3,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫30日前まで 収穫14日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 1回	×	×	×	×	○合ビレ(P.15)参照 ○刺激(眼)	
ス(キカシバビバシカシバ)	(発生の特徴) ○マタタビ科の植物に寄生。 ○卵越冬、4月にふ化。 (防除上のポイント) ○ふ化幼虫が1年生枝へ食入する時期に散布。		4 月 5 月	3A 28 3A		アグロスリン乳剤 フェニックスフロアブル ロビンフッド (上記薬剤は、専用ノズルを食入部に差し込み、薬剤が食入部から逆流するまで噴射)	1:シペルトリン 1:フルベンジアミド 1:フェンプロパリン	2,000倍 4,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 5回以内	×	×	×	×	×	○合ビレ(P.15)参照
ケ(クワシロコガ) ゴマダラヒトリ	(発生の特徴) ○成虫の発生は年1回。幼虫で越冬。 ○幼虫は園外から、雑草等を食べ侵入。 ○産卵は特定の樹種 (防除上のポイント) ○新梢伸長期に樹上で虫を確認したら早めに散布。 (耕種的防除法) ○園地周辺のクワ、アカマダシ、カラスザンショウなどの産卵植物を8月下旬頃に除去。 ○10月上旬に真網を処分。		4 月 5 月	3A 11A 11A 22B 28		テルスターフロアブル デルフィン顆粒水和剤 ファイブスター顆粒水和剤 アクセルフロアブル フェニックスフロアブル	1:フェントリン 1:BT(生菌) 1:BT(生菌) 1:マダラシ 1:フルベンジアミド	3,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 4,000倍	収穫前日まで 発生初期 (但し、収穫前日まで) 発生初期 (但し、収穫前日まで) 収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 — — 3回以内 3回以内	×	○	○	○	○	○合ビレ(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤				濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名						
が ん し ゆ 病	○ナンシメンクイ、カミキリムシの食入、加害痕より発病しやすいので、これらを防除。	○罹病苗を植付けない。 ○激症樹は早期に処分。 ○発病枝は剪定時に除去。 ○適切な肥培管理。 ○防風対策。	2月下旬～3月上旬	M1 M1 M1	Zボルドー ICボルドー66D コサイド3000	1:塩基性硫酸銅 1:塩基性硫酸銅 1:水酸化第二銅	500倍 50倍 1,000倍	— — —	普 普 普	×	○葉害(果実直径10mm以上) ○葉害(高温時・異常低温時・樹勢弱い樹)	
ま ま 色 斑 点 病		○発芽前に落葉を処分。 ○発病葉を摘除。 ○排水を良くする。 ○雨による土からのはね上がりを防ぐ。	6月中旬～下旬(収穫後) 上記薬剤 9月上旬～中旬(剪定後) 上記薬剤 2月下旬～4月	1 1	トップジンM水和剤 ベンレート水和剤	1:チオファネートメチル 1:ベンシル	800倍 収穫14日前まで 2,000倍 収穫14日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △		
灰 斑 病		○発芽前に落葉を処分。 ○発病葉を除去。 ○通風、採光をよくする。	5月中旬～6月上旬 上記薬剤 10月中旬～12月中旬 上記薬剤 春枝伸長期(4月上旬～4月下旬)	1 1 12	トップジンM水和剤 ベンレート水和剤 セイブアープロアブル20	1:チオファネートメチル 1:ベンシル 1:フルジコキソニル	1,000倍 収穫14日前まで 2,000倍 収穫14日前まで 1,000倍 収穫21日前まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ○		
灰 色 か び 病		○発芽前に落葉を処分。 ○通風、採光、排水を良くする。	夏枝伸長期(収穫後) 上記薬剤 開花終期～袋掛け前	2 9 M7	ロブラー水和剤 フルピカフロアブル ベルクート水和剤	1:アゾキシ 1:メニピリム 1:ミノキサジンアルベシル酸塩	1,500倍 収穫前日まで 2,000倍 収穫7日前まで 1,000倍 収穫7日前まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ ○ △	○かんきつへのドリフト注意	
白 紋 羽 病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見し、薬剤は、発病根除去後に処理。 ○新植の際、前作物の発病の有無に注意。	○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗を植え付ける。	収穫後(9月) 収穫後～開花前 開花前	1 29	トップジンM水和剤 フロキサイドSC	1:チオファネートメチル 1:フルジナム	300～500倍 収穫後(7月上旬～9月上旬)	1回	普	△	○灌水 ○かぶれ注意(10日間入園禁止)	
シ ン ク ヒ イ	(発生の特徴) ○収穫跡、芽かき跡、剪定跡などから食入しやすい。	○バンド誘殺、冬期の粗皮削りを実施し、越冬幼虫密度を下げる。 ○袋掛けを徹底。	6月～9月	6	フジラン粒剤 パダンSG水溶剤	1:イブプロチアザン 1:カルタップ	3kg/樹 開花前 1,500倍 春芽伸長期まで(但し収穫90日前まで)	1回 4回以内	普 劇	△ ×	○土壌混和	
ア ブ ラ ム シ 類			発生初期	3A 4A 4A 4A	スカウトフロアブル アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:トロロリン 1:ミダクアロアト 1:アセタミプリド 1:クロチアエジン	2,000倍 収穫3日前まで 2,000倍 収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) 4,000倍 収穫前日まで 4,000倍 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 劇 普	△※ △ △ △		

病害虫名	病害虫の徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	FRAC コード	使用薬剤 一般名	濃度 (使用量)	使用時期	回数	水産 毒 (注)	注意事項	
											IRAC コード
ビ ワ キ ジ ラ ミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ピロ樹に通年寄生し、年間に5世代程度発生。</li> <li>○5～6月に多発し、顕著な被害をもたらす。</li> <li>○7月中旬～8月の盛夏には樹幹内部で休眠する。</li> <li>○幼虫は花房や幼果等の隙間を好み、甘露を排出してすす病を誘発する。</li> <li>(発生の特徴)</li> <li>○開花初期(11月中旬)と袋かけ前(3～4月)の防除を徹底。</li> <li>○開花初期の防除は、花や蕾の間に隙間ができてから、または摘房・摘蕾後に実施する。</li> <li>○袋かけ前の防除は、摘果後に行い、散布後速やかに袋掛けを実施する。</li> <li>○機能性展着剤の加用が有効。</li> <li>○十分量(目安:300L/10a以上)の薬剤散布を心掛ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オリオン水和剤40</li> <li>スカウトフロアブル</li> <li>ロデイー水和剤</li> <li>スタークル顆粒水溶液</li> <li>アルバリン顆粒水溶液</li> <li>モスピラン顆粒水溶液</li> <li>サンマイト水和剤</li> <li>モバントフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:アラクニカルブ</li> <li>1:トクロトリ</li> <li>1:フェプロロパトリン</li> <li>1:ジノチアフラン</li> <li>1:ジノチアフラン</li> <li>1:アセチアゾリン</li> <li>1:セリタベン</li> <li>1:スピロテトラマト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000倍 収穫7日前まで</li> <li>2,000倍 収穫3日前まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>3,000倍 収穫3日前まで</li> <li>2,000倍 収穫21日前まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5回以内</li> <li>3回以内</li> <li>4回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△※</li> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>×</li> <li>○</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○合ヒ(P.15)参照。</li> <li>○合ヒ(P.15)参照。</li> </ul>				
開花初期(11月中旬) 上記薬剤											
袋かけ前(3月～4月) 上記薬剤											
ミ カ ン ハ ダ ニ			発生初期	10B 25A	<ul style="list-style-type: none"> <li>バロックフロアブル</li> <li>ダニサラバフロアブル</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1:エトキサゾール</li> <li>1:ジフルトフェン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2,000倍 収穫7日前まで</li> <li>1,000倍 収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>○</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○近接散布(Cホールド)</li> <li>○近接散布(Cホールド)</li> </ul>
カ メ ム シ 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○飛来が認められたら早めに防除。</li> <li>○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(P.151)参照</li> </ul>		発生初期	3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A	<ul style="list-style-type: none"> <li>ロデイー水和剤</li> <li>テルスター水和剤</li> <li>テルスターフロアブル</li> <li>ダントツ水溶液</li> <li>スタークル顆粒水溶液</li> <li>アルバリン顆粒水溶液</li> <li>アドマイヤーフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:フェプロロパトリン</li> <li>1:ピエントリン</li> <li>1:ピエントリン</li> <li>1:クロチアフェン</li> <li>1:ジノチアフラン</li> <li>1:ジノチアフラン</li> <li>1:イミダクログリド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>3,000倍 収穫前日まで</li> <li>4,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫前日まで</li> <li>2,000倍 収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×</li> <li>△※</li> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○合ヒ(P.15)参照。</li> <li>○合ヒ(P.15)参照。</li> <li>○合ヒ(P.15)参照。</li> </ul>	

### (3) ミカンハダニ防除の要点

#### ① ミカンハダニ発生の経過と防除上の問題点

ミカンハダニの年間の発生経過は、年度や地域、園によって一様ではないが、最も多い発生型は6月中旬～下旬に増殖が始まり、7月中旬～下旬にピークを迎えて8月中旬～下旬に終息する夏期の発生と、9月中～下旬から増殖が始まり、11～12月にピークを迎える秋期の発生の2山型である。

しかし、この発生型は薬剤の散布経過（時期、回数）や効率的散布がなされているか否かなどによって大きく変動し、年間の防除がまずいと4～6月の春の発生や、8～9月の平年なら終息期に当たる時期にも多発するなど、きわめて不規則である。

葉色があせるほどミカンハダニの大被害を受けると、春先の落葉を多くして樹勢を弱め、果実の糖酸を減ずるほか、毎年多くの被害を受けると、隔年結果性を高め、直花の結果率を高めて果実の品格を低下させる傾向が強い。

一方、ミカンハダニは、①年間の発生回数が多く、②移動性が小さく、③近親交配が起こりやすく、④突然変異率が高いことなど、殺虫剤抵抗性を獲得しやすい要因を多く持っているため、抵抗性の発達が早く、有効な薬剤が少なくなりやすい。

また、農薬の新規開発は毒性評価の強化によって、多くの年月と経費を要するようになっており、従来のように矢継ぎ早に新農薬が普及する可能性は少なくなっている。

そこで、今後のハダニ防除ではこれらの問題点を理解し、次に掲げる諸原則を配慮して、農薬による危被害防止に留意した少散布回数による効率的、経済的防除の推進を図るよう心掛けたい。

#### ② ハダニ防除の4原則

ア 発生初期の防除を徹底すること。

葉や果実の被害は成幼虫の発生量に比例して累積的に進行する。年間の発生期間、発生量、現在の殺ダニ剤の一般的効果程度と樹勢の衰弱、減収、果実の品質低下などの実害の起こる限界（被害許容限界）との関係から検討された要防除密度は、雌成虫が葉平均3匹以内とみられている。

このうち、要防除密度の1葉平均雌成虫3匹以内の目標は早期多発樹におかれるもので、この時の園全体の平均発生数はほぼ1葉平均0.5～1匹の雌成虫数に該当する。

薬剤の使用条件が適正であり、上記の発生初期を徹底すると、かなりの多発園でも夏～秋期の3回以内の散布でほぼ防除が可能であり、葉の被害は葉色が変わるまでに達することはないはずである。

イ 薬剤は付着面積率を高めるよう丁寧に散布する。

最近の薬剤散布用ノズルは、多くがてっぽうノズルなどと呼ばれる薬液吐出量の多い能率散布の可能な機具に変わってきている。これらの散布機具でも葉の表裏にかけむらなく薬がかかると配慮がなされているとよいが、一般的にはこの点の注意が乏しく、樹冠外側からの吹き付け散布が多くて、葉裏への薬液付着は著しく悪い。

ミカンハダニは7～8月の高温期には約50%が葉表で生息するが、その時期より低温期になると温度が下がるにつれて葉裏での生息割合が多くなり、6月や9～10月では70～80%の成幼虫、卵が葉裏に生息する状態になる。そのため、ハダニ防除のための薬剤は常に葉裏に良くかかるよう、丁寧に散布することが薬剤の防除効果を高める秘訣である。

最近、殺ダニ剤はハダニの抵抗性の獲得などで効力の不安定なものが多くなっている。有効な薬剤の少ない時、こうした効力の不安定な農薬も使わざるを得ない状態であるが、このような場合、特に葉裏まで薬剤が良くかかり、樹全体に付着面積率が高まるような散布方法をとることが肝要である。

ウ 薬剤の輪用（ローテーション）の徹底を図る。

薬剤の抵抗性は、その薬剤の散布回数と平行して発達する傾向があり、殺ダニ剤の多くでは、数回の散布で抵抗性の発達した事例が多い。仮に、6回の散布を行った頃から効力低下が見られる場合、年2回ずつ散布すると3年で、3回では2年でこの現象が到来することになり、その薬剤の寿命を短くする要因になる。そのため、同一薬剤は1年で1回の使用にとどめ、散布時期ごとに薬剤は性質の異なるものを代えて使うようにして、有効な薬剤が長年使用できるよう配慮する必要がある。

エ 冬期のマシン油乳剤散布を励行する。

冬期のマシン油乳剤の散布はミカンハダニに極めて高い安定した防除効果を示し、12～1月または、2～3月発芽前散布で、いずれもその年の6月中～下旬までハダニの増殖を抑えて、7月以降の夏期発生ハダニ防除を容易にする効果が高い。この散布を省くと、4～5月の春のハダニが出始め、6～7月にはハダニ密度が高まって、かなり濃密な防除を行わないと密度を抑えきれない状態になり、薬剤の散布回数が増す一方、被害は著しく高まるという防除効率が上がらない大きな原因になる。

散布時期は12月中旬～1月中旬までの越冬初期が安全であるが、この時期に散布できない甘夏柑などでは、2月下旬～3月中旬頃の発芽前にも散布できる。

散布濃度は95%製剤45倍とするが、樹勢の弱った樹では、97%製剤60倍が適当である。但しマシン油乳剤は商

品によって登録内容が異なるため、使用に当たっては農薬ラベルの表示を必ず確認する。

越冬中のミカンハダニは、ほとんど葉裏で生活し、葉表に移動することは少ない。そのため、マシン油乳剤の粗雑な葉裏付着の悪い散布は予期した効果の上まらない最大の原因となるので注意する。

#### (4) マシン油乳剤の夏期散布とその注意事項

##### ① マシン油乳剤の夏期散布による害虫の防除効果

高度精製のマシン油乳剤の6月散布ではミカンハダニにかなり高い防除効果を示すほか、ヤノネカイガラムシにも2齢中期までの若齢幼虫にかなり高い殺虫力がある。しかし、ミカンサビダニ、ナシマルカイガラムシには防除効果が劣り、コナカイガラムシ類、ロウムシ類などには防除効果は期待できない。

一般に昆虫類に対する殺虫力が低いので、各種害虫の捕食性・寄生天敵に害作用が少ない。そのため、天敵を放飼した園や薬剤少散布回数による防除体系を組んでいる園などでは適正な薬剤である。

##### ② マシン油乳剤の種類

マシン油乳剤には油分95%のマシン油乳剤と、97%高度精製マシン油乳剤の2種類があるが、夏期散布には後者の高度精製マシン油乳剤を用いる。

また、マシン油乳剤は商品によって登録内容が異なるため、使用に当たっては農薬ラベルの表示を必ず確認する。

##### ③ 散布濃度

ミカンハダニに対する安定した防除効果を期待するには150倍が適当である。

##### ④ 散布時期

一般に6月中旬～下旬に限って散布し、7月以降は散布しないように注意する。但し、6月散布でも樹勢の弱ったものなどでは古葉が落葉することもある。

6月上旬以前の散布では充実の不十分な若葉や発育中の新葉に薬害を出したり、新葉の発育を悪くしたりする危険性がある。

また、果実の発育が進んで散布すると、果汁中の糖の含量を低くする恐れがあり、7月以降の散布ではこの危険性は高い。

##### ⑤ 品種との関係

マシン油乳剤夏期散布の比較的安全な品種は温州みかんと夏みかんである。ネーブル・八朔などの中晩生柑橘では果実に薬害を出したり、生理落果を多くしたりする危険があるので散布をひかえるのが安全である。

##### ⑥ 油浸現象と薬害の関係

マシン油乳剤の夏期散布を行うと、葉や緑枝、果面にほぼ例外なく油浸による斑紋（油浸斑）が現れる。この油浸斑は温州みかんで1～2ヶ月後には消失する。

しかし、ネーブル、八朔などの果実で激しい油浸斑が出ると、その部分が窪んで後、表面がコルク状化した薬斑になることがある。

##### ⑦ その他の散布上の注意事項

ア ジチアノン剤を散布した園では、1ヶ月以上の間隔をおいて散布する（薬害）。

イ 摘果剤を散布する園では、いずれが先にあっても1週間以上（できれば10日）の間隔をおく。

ウ マンネブ剤、マンゼブ剤、銅剤は多雨の条件の時でも、マシン油乳剤の7～10日（ICボルドー66Dは14日以上）前までに散布し、混用散布は行わない。

エ マシン油乳剤散布後に次の薬剤を散布する場合、雨の多い時には20日以上、一般的には1ヶ月以上の間隔をおかないと薬剤の付着が悪い傾向がある。

##### ⑧ ミカンハダニ防除上の注意事項

ア 薬剤は2～3日以上晴天の続く条件で散布する。散布直後の降雨で効果が低下するが、再散布はしないように注意する。

イ 散布時のミカンハダニの密度が高いと防除効果がおとる場合が多いので、1葉雌成虫が1～2匹程度の増殖初期に散布する。

ウ 薬剤は葉の表、裏、緑枝などにつけ残しのないように、十分な散布を行わないと満足な防除効果は発揮されない。

##### ⑨ 散布についての指導上の徹底

防除暦編成にあたっては①～⑧までの事項を参考のうえ、適用の可否を判定するとともに、夏期マシン油乳剤を防除暦に組み入れた地域においては現場指導の徹底を図り、薬害の発生や果実品質を損なうことのないように、十分注意して対応すること。

#### (5) 果樹カメムシ類の発生生態と防除対策

##### ① 発生生態

果樹を加害する主なカメムシ類は、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシの3種で、チャバネアオカメムシの発生が最も多い。愛媛県南部では、年によりツヤアオカメムシの発生が多い場合がある。

いずれの種も成虫で越冬し、年1～3回発生する。越冬明けの成虫は、サクラ、キリ等、様々な樹種の果実などを吸汁しながら、うめ、もも等の果樹園にも飛来し加害する。7月以降は、主な繁殖源であるヒノキやスギの球果に寄生し、8月以降新成虫が出現する。球果量よりもカメムシの発生量が相対的に多い場合には、球果の消耗が進み、かき、かんきつ等の果樹への飛来が多くなる。

② 発生子察法

ア 越冬密度調査法

チャバネアオカメムシは、雑木林等の落葉下で成虫越冬する。そのため、冬季に一定面積の落葉を集め、室内で調査することにより、越冬量を知ることができる。越冬密度を調査することにより、7月頃までの発生量を予測することが可能である。

イ 予察灯

予察灯への誘殺が4～7月に多い年は、うめ、もも、なし等の被害が多く、8月以降に多い年は、かき、かんきつ等の被害が多い。

ウ 集合フェロモントラップ

チャバネアオカメムシの集合フェロモンには、同種の雌雄成虫が誘引されるため、予察灯とともに発生量、発生時期の予察に使用されている。

③ 防除対策

果樹カメムシ類は果樹園外に発生源があり、年次間による発生量の変動が大きく、飛来量は地域や園地による差が大きい。多発年には周辺部から次々に飛来するため、防除薬剤は残効性が長いものが求められる。成虫は広範囲に移動するので、防除効果を高めるためには広域一斉防除が有効である。現在、一般的に使用されている薬剤は、1 B (有機リン系)、3 A (合成ピレスロイド系)、4 A (ネオニコチノイド系) のものが主体である。有機リン系剤は速効性に優れるが、残効が短い剤が多い。合成ピレスロイド系剤は速効性、残効性とも優れる剤が多い。ネオニコチノイド系剤は速効性には劣るものの、残効性に優れ、吸汁阻害効果も認められる剤が多い。

連続散布を行った後にはリサージェンスが起こる可能性があるため、散布後のカイガラムシ、ダニ等の発生にも注意する。

果樹カメムシ類に対する各種薬剤の効果

薬剤名	系統 注1)	人畜毒性	水産 注2)	接触効果 注3)	残効性 注4)
アクトラ顆粒水溶剤	4 A	普	△	B	A
アドマイヤー水和剤	4 A	劇	△	B	A
アドマイヤーフロアブル	4 A	劇	△	B	B
スタークル/アルパリン顆粒水溶剤	4 A	普	△	B	A
ダントツ水溶剤	4 A	普	△	B	A
モスピラン S L 液剤	4 A	劇	△	B	A
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	劇	△	B	A
アグロスリン水和剤	3 A	劇	×	A	B
アディオン乳剤	3 A	普	×	A	B
スカウトフロアブル	3 A	劇	△※	A	C
テルスター水和剤	3 A	普	△※	A	A
テルスターフロアブル	3 A	劇	×	A	A
ロディー水和剤	3 A	劇	×	A	B
ロディー乳剤	3 A	劇	×	A	B
パーマチオン水和剤	1 B + 3 A	劇	×	A	B
スミチオン水和剤40	1 B	普	△	A	C
スミチオン乳剤	1 B	普	△	A	C
キラップフロアブル	2 B	普	○	A	A

注1) 4 A : ネオニコチノイド系、3 A : 合成ピレスロイド系、1 B : 有機リン系、2 B : フェニルピラゾール系

注2) 水産は「水産動植物への影響」を示す。(P8参照)

注3) A : 散布1日後の死虫率がほぼ100%、B : 散布1日後に生存虫がある

注4) A : 5日以上、B : 3日以上、C : 1日以下

注5) 「接触効果」「残効性」のデータは、主に「果樹カメムシ おもしろ生態とかしこい防ぎ方」(堤、2003)を参考にした。

(6) かんきつ病害虫のスプリンクラー防除上の留意点

スプリンクラー利用によるかんきつ園の農薬散布は、短時間かつ省力的に行え、労働の軽減化が図れるほか、農薬散布者の安全性の維持や病害虫の適期防除を容易にする等のメリットが大きい。

しかし、手散布に比べて防除効果にムラが生じ易いため、補正散布に努めるなどその欠陥を極力回避するように利用面での対応に以下の注意が最低限必要である。また、防除効果が上がらない病害虫(カイガラムシ類やハダニ類など)に対しては本防除法は利用しない。

① 農薬の選定と散布時期

防除効果の安定のためには、適剤を選定し、適期防除を原則とする。また、一時に広範囲の使用となることから天候に配慮するとともに使用基準を厳守し、特に水産動植物への影響の高い剤は使用しない。

② 散布剤の濃度

手散布と同様な実用散布濃度を基準とし、薬剤濃度を適正に維持するとともに、薬剤調整にあたっては水溶性内袋を使用した薬剤の利用等によって中毒事故等が生じないように細心の注意を払う。

なお、単用散布が原則であるので混用散布はひかえる。

③ 散布液量

ラベルの表示内容を厳守し、農薬の特性、対象病害虫の種類・発生密度、地形、施設条件、樹冠の大きさ、着葉密度

等を考慮して使用基準内で液量を決定する。

なお、密植状態にある園や枝葉が過密状態にある園では、薬量を増やしても付着量の向上は少なく、間伐や整枝、剪定を励行し、樹形を改善することにより、付着性の向上を図ることが先決である。

#### ④ 散布前後の点検

施設・機械の点検を念に行い、散布前後の通水を心がける。さらに、散布後の残液は適正に処理する。

#### ⑤ 農薬の飛散低減

- ・周囲の作物との境界に、遮蔽ネットや防風樹、緩衝地帯等を設置する。
- ・飛散防止カバー（反射板）を取り付け、散布前に点検、補修を行う。
- ・圃場周辺の作物を確認し、収穫間近の作物がある場合は散布を控えたり、収穫時期をずらしてもらうなど、周囲の圃場主とコミュニケーションを十分に取る。
- ・薬剤は「かんきつ類」の登録があるものを選定する。
- ・風向、風速に注意し、風の強い時（風速3m/秒以上）は散布を控える。
- ・散布圧を上げすぎず、適正な散布圧で散布すると共に、飛散の少ないノズルを選択する。
- ・散布終了後は十分に洗浄を行う。

### (7) カンキツウイルス・ウイロイド病の防除法

愛媛県内で確認されているウイルス病は4種、ウイロイド病は7種である。ウイルス・ウイロイド病は、現在のところ薬剤による防除が困難であるため、以下の耕種的防除法を中心に対応する。

#### ① ウイルス・ウイロイド病共通項目

- ・発病樹の伐採・伐根を行う。
- ・接木伝染するため、ウイルス・ウイロイドフリーの穂木を用いる。
- ・ウイルス・ウイロイド検定を行っていない穂木は用いない。
- ・適正な肥培管理を行い、結実過多等を避けて樹勢維持に努める。

#### ② 温州萎縮病(SDV)、カンキツモザイク病(CiMV)

- ・土壌伝染するため、発病園では発病樹と健全樹の境界に溝を掘って遮断し、拡大を防止する。
- ・防風樹としてのサンゴジュで保毒が確認されているので、植栽を避ける。

#### ③ ステムピッチング病(CTV)、かいようこ斑病(CTV)、ハッサク萎縮病(CTV)

- ・ミカンクローブラムシ、ワタアブラムシによって媒介されるため、アブラムシ類の防除(P105参照)に努める。
- ・弱毒苗を植栽する。

#### ④ 接木部異常病(ASGV)

- ・台木部のみが発病するため、ユズ、シークワーシャーを根接ぎする。

#### ⑤ エクソコーティス病(CEVd)

- ・器具伝染するため、ハサミ・ノコギリ等を消毒して用いる。消毒は、塩素系漂白剤(次亜塩素酸ナトリウム含有)の原液～50%液を作成し、この液にハサミ等の器具を数秒間浸漬する。器具は水洗いし、紙で拭き取り使用する。
- ・台木部のみが発病するため、ユズ、シークワーシャーを根接ぎする。

#### ⑥ その他ウイロイド(CVd-os、CVd I-Lss、CVd II、CVd III、CVd IV、CBLVd)

- ・器具伝染するため、ハサミ・ノコギリ等を消毒して用いる。消毒は、塩素系漂白剤(次亜塩素酸ナトリウム含有)の原液～50%液を作成し、この液にハサミ等の器具を数秒間浸漬する。器具は水洗いし、紙で拭き取り使用する。

### (8) カンキツ黒点病の防除上の留意点

新品種が本病に弱いため防除に関する試験の要望が高かった。近年本病の防除に関する試験を体系的に行ったところ、以下に示す3点の知見が得られたので参考に今後防除に反映していただきたい。

#### ① 散布間隔

マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は累積降水量が200～250mmに達した時、または散布後1ヶ月を経過した時である。しかし、近年黒点病に弱い新品種が多くなり、前述の散布間隔では黒点病の発生が抑えきれない事例が認められる。そこで、新品種の中で本病にもっとも弱い‘せとが’について散布間隔を検討した結果、マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は累積降水量150～180mmまたは散布後約25日と考えられた。‘せとが’以外の黒点病に弱い品種(河内晩柑、清見、天草等)についても散布間隔を短くする必要がある。

#### ② 樹体が濡れた状態での散布による防除効果

樹体が濡れた状態(雨上がり直後)と乾いた状態でマンゼブ剤を散布した場合、樹体が濡れた状態では乾いた状態散布に比べて初期の薬剤付着が劣り、防除効果も約1割程度劣る。

このため、雨上がり直後の樹体が濡れた状態での散布は避け、樹体が乾いてから散布を行う。やむを得ず濡れた状態で散布した場合は、次回散布を早める必要がある。また、散布直後の降雨は薬剤が流亡するため、再散布の必要がある。

#### ③ マンゼブ剤と殺虫剤の混用による防除効果

マンゼブ剤と殺虫剤を混用すると防除効果が変化することが指摘されているが、混用による防除効果を体系的に検討した事例は少なかった。このため、カンキツに登録のある殺虫剤との混用による防除効果の変化を検討した結果、フロアブルとの混用では防除効果が単用に比べ同等から上昇し、乳剤との混用では防除効果がやや減少し、水溶剤および水和剤との混用では防除効果が10～20%減少した。防除効果から考えるとマンゼブ剤の混用相手としてフロアブルがもっとも良く、水和剤がもっとも悪いことが推察された。しかし、顕著な効果を示す殺虫剤が水和剤のみの場合は、次回散布を早めること等で対応する。また、若干防除効果が落ちる乳剤との混用では薬害発生事例が水和剤混用より多いので、その点は注意が必要である。

### (9) ミカンバエの防除上の留意点

ミカンバエは、かんきつ類だけに寄生するハエ目ミバエ科の仲間、日本の在来種である。適正な栽培管理や薬剤防除を産地ぐるみで確実に実施すれば、防除は十分可能な害虫である。但し、本種の被害で最も留意すべき点は、収穫時にも幼虫が果実内部に腐敗を伴わず寄生し続け、消費段階においては外観上、非寄生果と見分けがつかないことである。このため、健全果に寄生果が1果でも混入すると、選別は困難となり、産地のイメージダウンに繋がってしまう。これらの理由から、本種の発生生態を十分理解した上で、撲滅を目指した的確な防除対応が必要とされる。

#### 1. 形態

図1に示すとおり、卵は、白色楕円形であり、1齢幼虫は、乳白色で大きさ1.3~3.5mm、2齢幼虫は、乳白色で3.4~8mm、3齢幼虫は黄白色で5~15.5mm。蛹は淡黄色~黄褐色の楕円形を示す。成虫は、黄褐色であり、雌は腹部に産卵管を持つ。

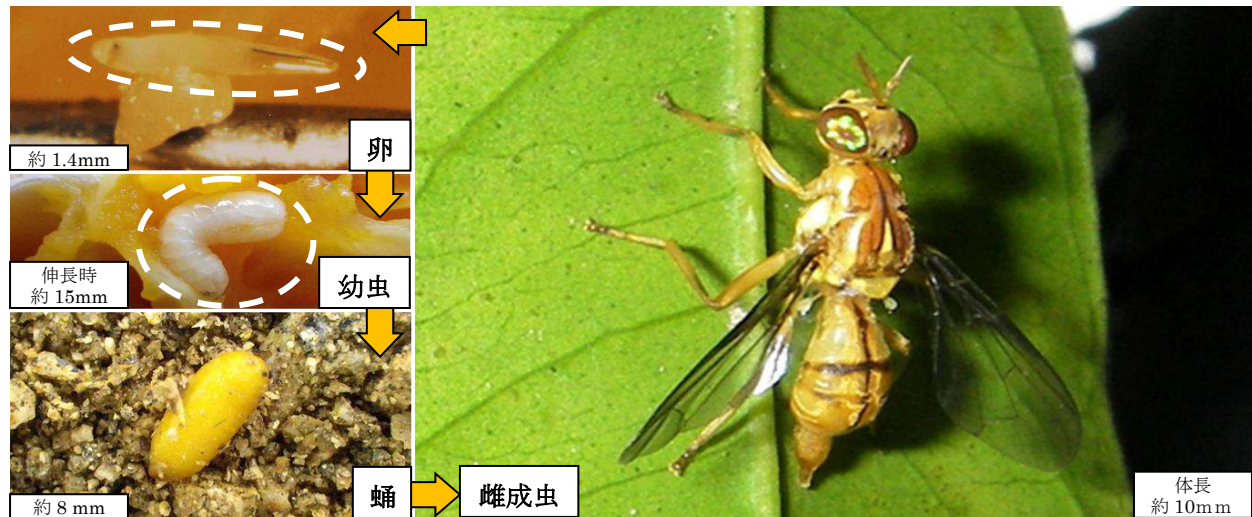


図1 ミカンバエの形態

#### 2. 発生生態

- ・年間のステージ別の発生経過は、図2を参照。
- ・寄主(被害)はかんきつ類に限られる。被害の多い品種は、果皮の薄い温州みかんやコミカン、ボンカン、キンカン等である。
- ・産卵期の7~9月に果皮の厚い品種(伊予柑、清見、甘夏、八朔、レモン等)では、じょうのう内まで本虫の産卵管(約4.0mm)が届かず、産卵されてもうまく育たないとされている。

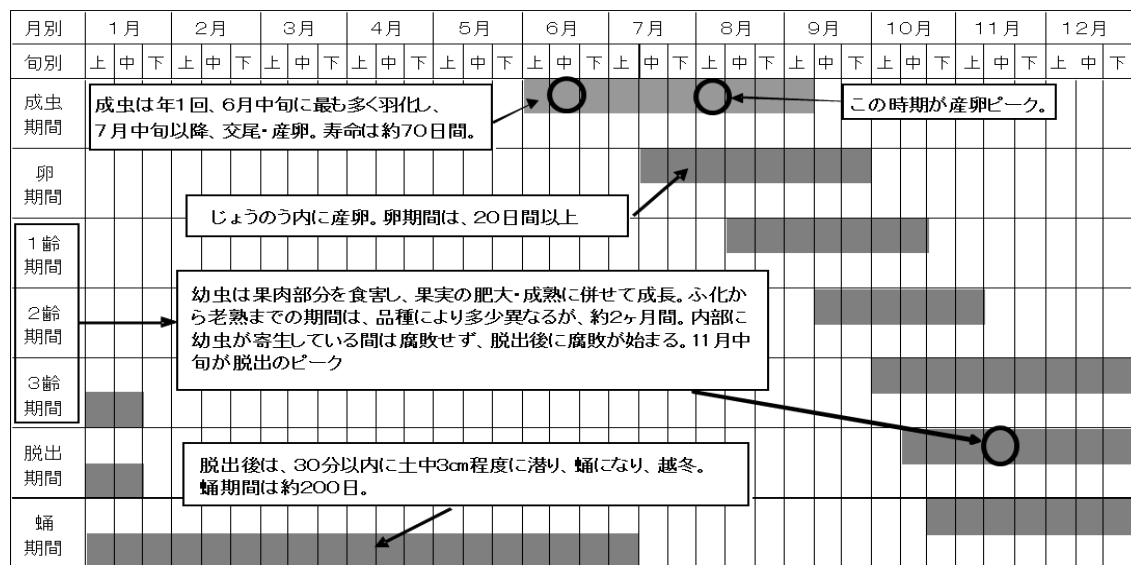


図2 ミカンバエのステージ別の年間発生経過

大分柑試研究報告(深井, 1958)の原図を参考に作成。  
網掛け部分は、発生時期を示す。



### 3. 園地における被害果の見分け方

- ・日当たりの悪い箇所の果実に産卵が多く、産卵直後の8月中・下旬は、産卵痕の周りがやや黄色くなる(図3)。
- ・被害果は健全果に比べ、へた周りや産卵痕を中心に約1～2週間早く異常着色し、落果し易くなる(図5)。
- ・内部の被害部分は、変色を伴わず空洞となる(図6)。
- ・被害果の外観(図5)や落果し易い点は、カメムシ類による被害果と見分けが付きにくい。このため、内部(断面)を観察し、ミカンバエによる被害果の特徴(図6)となる幼虫の食害による果肉の部分消失や寄生により被害を見分ける。
- ・樹上で被害が進むと、果面に2～3mmの脱出孔を確認できる場合がある(図7)。

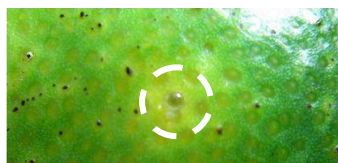


図3 産卵痕



図4 産卵痕断面

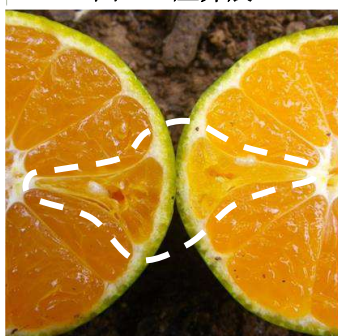


図6 被害果の断面

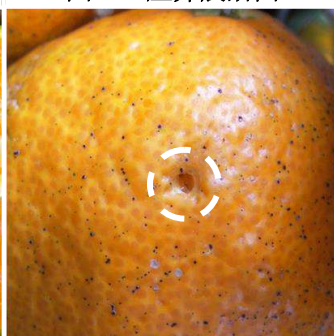


図7 被害果の脱出孔



図5 被害果 (被害果では異常着色が目立つ)

### 4. 防除法

#### 1) 耕種的防除法

園内外の栽培管理を見直し、本虫の発生しにくい環境の整備

- ・放任園は本種の発生源になるため、伐採を徹底する。
- ・収穫期に本種の発生を認めた場合は、全果実を収穫し、袋に詰める等適切に処分する。
- ・先述のような被害発生園で、栽培をやめる場合(放任園化)は、成虫分散防止のため、必ず「おとり樹」を数本残して伐採し、翌年の産卵後の8月下旬に、それら「おとり樹」を伐採する。
- ・成虫は直射日光を嫌うため、園周縁の日当たりの悪い樹はできる限り伐採する。
- ・防風垣(イヌマキやスギ等)は定期的に刈り込み、園の日当たりを良くする。
- ・樹の剪定や間伐を行い、日当たりに加え防除等の作業性も良くする。
- ・適正な摘果を行い、葉液のかかりにくい果実を減らす。

#### 2) 薬剤防除法

本虫の発生生態に応じた適期・適剤散布の励行

- ・発生地域では、6～8月に、計4回の防除が必須(具体的な薬剤は本文P111を参照)。
- ・6、7月は、特に前年発生園で、成虫分散防止(周辺の園主に迷惑をかけない)のための防除時期である。土中から成虫が羽化してくる6月下旬に1回目を散布し、他園に分散・産卵開始する7月中旬に2回目を散布する。
- ・8月は、交尾・産卵後の被害防止(自園の被害を少なくする)のための防除である。産卵ピークである8月前半に3回目を散布し、産卵がほぼ終了する8月後半に4回目を散布する。
- ・薬剤散布は薬液が果実全体にかかるよう、できる限り2方向から丁寧に行う。
- ・次ページに示す「ミカンバエ発生地域でのミカンバエ撲滅に向けたチェックシート」を参考にして地域ぐるみの防除対応を励行する。

## <ミカンバエ発生地域でのミカンバエ撲滅に向けたチェックシート>

### 1. 園内外の環境や栽培条件の見直しや虫の発生しにくい環境の整備

- 園周辺に放任園がある場合は、虫の発生源になるので、できる限り伐採していますか。
- 成虫は直射日光を嫌います。園周縁の日当たりの悪い樹はできる限り伐採していますか。
- 防風垣(イヌマキやスギ等)は定期的に刈り込み、日当たりの良い園にしていますか。
- 樹の剪定や間伐を行い、日当たりに加え防除等の作業性も良くしていますか。
- 適正な剪定・摘果を行い、薬剤の散布ムラを減らしていますか。
- 薬剤散布は薬液が果実全面にかかるよう、できる限り2方向から丁寧に行っていますか。

### 2. 適期の適剤散布(6~8月の間、計4回の防除が必須)

特に、前年、虫が発生した園では、6・7月は成虫分散防止のための防除時期です。周辺の園主に迷惑をかけないためにも必ず実施しましょう。

- 6月上中旬に土から成虫が出てきます。この時期に決められた薬剤を散布していますか。
- 7月中旬以降、産卵を始めます。この時期に決められた薬剤を散布していますか。

8月は果実被害を減らすための防除時期です。  
自園の被害をなくすために必ず実施しましょう。

- 7月中旬以降、産卵を始めます。8月前半に決められた薬剤を散布していますか。
- 8月後半には、ほぼ産卵が終了します。この時期に決められた薬剤を散布していますか。

以上の10項目について目的をきちんと理解した上で、適切に実施しましょう！！

## (10) キウイフルーツかいよう病の防除法

### (1) 耕種的防除

#### ①発生園地における伐採基準

被害程度	具体的症状	伐採方針
<ul style="list-style-type: none"> <li>・甚大な症状の場合（被害程度3）</li> <li>・園地全体の保菌が濃厚で、薬剤散布だけでは対応が困難な場合（農家とJA団体等が協議）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・細菌液漏出等のかいよう症状や樹体の枯死が認められる場合</li> <li>・資材等からの感染の可能性が強く疑われる場合</li> </ul>	園地全伐採 農家の同意前提 ・ 抜根を基本とする。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一部樹体の主枝・主幹での発生であり、周辺樹の管理は薬剤散布で対応可能と認められる場合（被害程度2高）</li> <li>（農家とJA団体等が協議）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主幹または殆どの主枝からの樹液流出等のかいよう症状が認められる場合</li> </ul>	当該樹のみ伐採 農家の同意前提 ・ 抜根を基本とする。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一部樹体の主幹以外での発生であり、薬剤散布で対応可能と認められる場合（被害程度2低）</li> <li>（農家とJA団体等が協議）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一部の主枝からの樹液流出等のかいよう症状が認められる場合</li> </ul>	部分切除 農家の同意前提 ・ 発生が認められた主枝の基部で切除
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発生程度が上記以外の場合（被害程度1）</li> <li>・園地の一部に発生が見られ、薬剤散布で対応可能と認められる場合（農家とJA団体等が協議）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・枝枯れ、発病葉などの症状が散見される場合</li> </ul>	部分切除 農家の同意前提 ・ 発病枝または結果母枝の基部で切除

※黄色・赤色系品種では、部分切除後の発病調査を特に念入りに行う。

注）被害程度1	：枝枯れ、葉の褐色斑点などが散見。
被害程度2低	：一部の主枝からの樹液流出。
被害程度2高	：主幹または殆どの主枝からの樹液流出。
被害程度3	：園地全体での保菌が濃厚であり、多くの発病樹がみられる。

#### ②園地見回りの徹底による早期発見と部分伐採の繰り返しによる防除方法

園地見回りによって、疑わしい症状が発見された場合は、被害の拡散を防ぐため、速やかに発病程度に応じた対応を取る。

なお、その後は経過観察により、発病が再確認された場合は、同じ作業を繰り返す。

〔切り口はトップジンMペーストを塗布するか、資材で覆う。  
伐採した枝や葉は細菌飛散防止のために適切に処理すること。〕

#### ③防風施設及び雨除け施設の設置

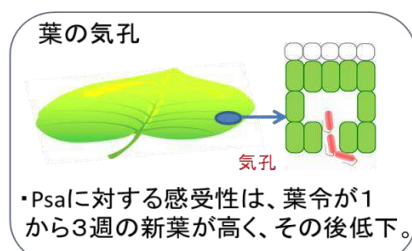
感染拡大を防止するため、防風施設及び雨除け施設を設置する。

### (2) 薬剤防除（予防）（化学的防除）

登録農薬には銅剤、抗生物質剤などがあり、下記のとおり薬剤を定期的に散布（基幹防除）することで感染防止を図る。発病程度が大きい場合は十分な抑制効果が得られないことがあるので、耕種的防除との併用を行うことが重要である。基幹防除は最低の防除対応として、強風や降雹等、樹体が付傷する（した）場合には追加の薬剤散布を行うこと（応急防除）。なお、梅雨明け以降、気温の高い夏季の薬剤防除は不要である。

## 病原菌の主な侵入部位（保護すべき部位）

### ・自然開口部



### ・傷口



## ①収穫直後から発芽前までの休眠期

基幹防除回数：収穫後（11～12月）に1回、剪定後（1～2月）に1回、発芽前（3月上旬～中旬）に1回。

ICボルドー66Dの50倍、コサイド3000の2,000倍（収穫後～発芽前）、カスミンボルドー500倍・銅シン水剤500倍（休眠期）を、収穫後、落葉後、剪定前後、発芽前に加え、強風や降雹等により樹体の損傷が認められた場合などに散布する。

## ②発芽後叢生期（新梢長約10cm）まで

基幹防除回数：4月上旬～中旬に1回。

カスミンボルドー1,000倍、銅シン水剤1,000倍またはコサイド3000の2,000倍を散布する（各薬剤散布時には葉害軽減のため炭酸カルシウム剤200倍を加用）。

## ③開花前

基幹防除回数：4月下旬～5月中旬に1回。

コサイド3000の2,000倍を散布する（葉害軽減のため炭酸カルシウム剤200倍を加用）。

## ④開花後

基幹防除回数：5月下旬以降に1回。

コサイド3000の2,000倍（使用時期：収穫後～果実肥大期、葉害軽減のため炭酸カルシウム剤200倍を加用）、アグリマイシン-100の1,000倍（使用時期：落花期まで）、アグレプト水剤1,000倍（使用時期：収穫90日前まで）、マイシン20水剤（使用時期：収穫90日前まで）またはカスミン液剤400倍（使用時期：収穫90日前まで）などを散布する。耐性菌出現の恐れがあるため、同一FRACコードの抗生物質剤の連用は避ける。

以上は、各時期の基本となる防除回数（合計6回）であるため、気象条件、前年の発生状況、地域の防除暦等を参考にして、散布回数を適宜追加する。

(11) 果樹園除草剤等使用法

区分	農薬名	一般名	毒性		使用時期(収穫前日数)／本剤の使用回数													
			人畜	水産(注)	かんきつ	かき	ぶどう	もも	くり	なし	うめ	キウイフルーツ	びわ	いちじく	すもも	果樹類		
土壌処理剤・茎葉処理剤	カーメックスD	DCMU	普	△	-/1	-/1		-/1						-/1				
	ダイロンゾル	DCMU	普	△	60/1		60/1	90/1										
	ゾーバー	DCMU・ターバシル	普	△	60/1													
	シンバー	ターバシル	普	△	7/2													
土壌処理剤	トレファノサイド乳剤	トリフルラリン	普	△			30/2	30/2		30/2								
茎葉処理剤	サンダーボルト007	グリホサートイソプロピルアミン塩・ピラフルフェンエチル	普	×	7/3													7/3 (かんきつ、パイナップルを除く)
	サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩	普	×	7/3													7/3 (かんきつを除く)
	クサクリーン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩	普	×	7/3													7/3 (かんきつ、パイナップルを除く)
	タッチダウンiQ	グリホサートカリウム塩	普	×	5/3													5/3 (かんきつを除く)
	パスタ液剤	グルホシネート	普	△	21/3	前日/3	前日/3	前日/3	30/3	前日/3	前日/3	21/3	21/3	前日/3	前日/3			
	ザクサ液剤	グルホシネートPナトリウム塩	普	△	21/3				30/3			21/3	21/3					前日/3 (かんきつ、りんごびわ、いちじく(種子)、くり、キウイフルーツ、食用桑(果実)、さんしょう(果実)を除く)
	ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩	普	×	7/5													7/3 (かんきつを除く)
レグロックス	ジクワット	劇	△														30/5	

注 (1) 除草剤は樹体にかからないように注意する。  
 (2) 成分の総使用回数に留意する。

1)かんきつ類

時期	対象雑草	薬剤名	10a 当たり		使用上の注意
			薬量	散布液量	
2月～3月	1年生雑草 (カモジグサイヌビエメヒシバハコベイヌタデエノコログサ)	ゾーバー	300g	200～300ℓ	(1) 非イオン系展着剤を加用する。 (2) 松、杉、榎等の防風垣の近くでは使用しない。
		シンバー	200～300g	100～300ℓ	苗木生産ほ場では使用しない。
		パスタ液剤	300～500ml	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		ザクサ液剤	300～500ml	100～150ℓ	
		ダイロンゾル	200～400ml	100ℓ	
4月～6月	1年生雑草 (ヤエムグラカラスノエンドウメヒシバイヌノフグリホトケノザイヌビエ)	ラウンドアップマックスロード	200～500ml	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	少量散布の場合は専用ノズル <sup>®</sup> ULV5 <sup>®</sup> を用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		サンフーロン液剤	250～500ml	少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		クサクリーン液剤		10～100ℓ	
		タッチダウンiQ			
		パスタ液剤	300～500ml	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	(1) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (2) 雑草生育期で草丈30cm以下が効果は高い。
		ザクサ液剤	300～500ml	100～150ℓ	
	サンダーボルト007	400～1000ml	100ℓ		
	多年生雑草 (スギナヨモギギシギシヤブカラシ)	ラウンドアップマックスロード	500～1,000ml	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1) 少量散布の場合は専用ノズル <sup>®</sup> ULV5 <sup>®</sup> を用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (2) スギナを対象として用いる場合は、薬量1,500～2,000ml (散布液量は左表のとおり) とする。
		サンフーロン液剤		少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		タッチダウンiQ	500～1,000ml	10～100ℓ	(2) スギナを対象としてタッチダウンiQを用いる場合は、薬量を1,500～2,000ml (散布液量25～50ℓ) とする。
パスタ液剤		500～1,000ml	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ		
	ザクサ液剤	500～1,000ml	100～150ℓ		
	サンダーボルト007	400～1000ml	100ℓ		

時期	対象雑草	薬剤名	10a当たり		使用上の注意
			薬量	散布流量	
6月下旬～ 7月上旬	1年生雑草 〔メヒシバ イヌビエ エノコログサ〕	カーメックスD	200～400g	70～100ℓ	
7月上旬～ 中旬	1年生雑草 〔メヒシバ イヌビエ イスタデ エノコログサ アレチノギク スベリヒユ〕	バスタ液剤	300～500ml	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	(1) 30cm以下の草丈で効果が高い。 (2) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		ザクサ液剤	300～500ml	100～150ℓ	
		サンダーボルト007	400～1000ml	100ℓ	
7月～10月 (生育盛期)	1年生雑草 〔メヒシバ エノコログサ イヌビエ イスタデ スベリヒユ〕	ラウンドアップ マックスロード	200～500ml	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1) 多年生のは、薬量、散布時期を変えて部分的に処理する。 (2) 防風林、一般作物、かんきつに薬液がかからないように注意する。 (3) 崩壊の恐れがある畦畔には使用しない。 (4) 一定の期間を経過してから効果が現れるため、全体が枯死するまで刈り取らない。 (5) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (6) ラウンドアップマックスロードを少量散布する場合は専用ノズル”ULV5”を用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		サンファーロン液剤	250～500ml	少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		クサクリーン液剤			
		タッチダウンiQ	250～500ml	10～100ℓ	
7月～10月 (生育盛期) ～ (生育終期)	多年生雑草 〔チガヤ カラムシ ギシギシ ハマスゲ ヨモギ カタバミ類 ススキ〕	ラウンドアップ マックスロード	500～1,000ml	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		サンファーロン液剤		少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		タッチダウンiQ	500～1,000ml	10～100ℓ	

(注) (1) 年間を通じ、除草剤のみに頼ることを極力避けることが望ましい。そのために春は中耕による除草を行い、使用回数を減らすよう配慮する。  
(2) 土壌処理剤は、連用を避ける。

## 2) 落葉果樹

時期	対象雑草	薬剤名	10a当たり		使用上の注意
			薬量	散布流量	
4月下旬～ 5月下旬	1年生雑草 〔ツユクサ ハコベ ヤエムグラ〕	レグロックス	300～500ml	70～100ℓ	(1) 広葉雑草に効果が高い。 (2) 樹体にかからないようにする。
		バスタ液剤	300～500ml	100～150ℓ	(1) 草丈30cm以下の処理効果が高い。 (2) 樹体にかからないようにする。 (3) バスタ液剤はイネ科に対しては効果がやや劣る。 (4) バスタ液剤は、かき、ぶどう、もも、くり、なし、小粒核果類、ブルーベリー、イチゴ、初刈り、いちじく、おうとう、りんごの使用に限る。 (5) トレファノサイド乳剤は雑草発生前に土壌表面散布する。 (6) トレファノサイド乳剤は、ぶどう、もも、なし、りんごの使用に限る。
		ザクサ液剤	300～500ml	100～150ℓ	
		トレファノサイド乳剤	300～400ml	100ℓ	
7月上旬～ 中旬	1年生雑草 〔メヒシバ エノコログサ イヌビエ イスタデ〕	同上 (4月下旬～5月下旬に準じる)			
		ラウンドアップ マックスロード	200～500ml	少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1) 樹体にかからないように注意する (2) 散布は低圧で、茎葉から薬液が流れ落ちない程度にすること。 (3) 多年生のは、薬量、散布時期を変えて部分的に処理すること。 (4) 防風林、一般作物に薬液がかからないように注意する。 (5) 崩壊の恐れがある畦畔には使用しない。 (6) 一定の期間を経過してから効果が現れるため、全体が枯死するまで刈り取らない。 (7) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (8) トレファノサイド乳剤は雑草発生前に土壌表面散布する。 (9) トレファノサイド乳剤は、ぶどう、もも、なし、りんごの使用に限る。
		サンファーロン液剤	250～500ml	50～100ℓ	
		タッチダウンiQ	250～500ml	25～100ℓ	
トレファノサイド乳剤	300～400ml	100ℓ			
サンダーボルト007	400～1000ml	100ℓ			
7月～10月 (生育盛期) ～ (生育終期)	多年生雑草 〔チガヤ カラムシ ギシギシ ハマスゲ ヨモギ カタバミ類 ススキ シロツメクサ〕	ラウンドアップ マックスロード	500～ 1,000ml	少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		サンファーロン液剤	500～ 1,000ml	50～100ℓ	
		タッチダウンiQ	500～ 1,000ml	25～100ℓ	
		サンダーボルト007	400～1000ml	100ℓ	

(12) 植物調節剤使用基準

①温州みかん

使用目的	使用薬剤と濃度	毒性		処理時期	注意事項
		人畜	水産 (注)		
全摘果	フィガロン乳剤 1,000～2,000倍 +エスレル10 2,000～8,000倍	普	○	満開10～20日後の生理落果最盛期	フィガロン乳剤使用上の注意事項 (1) ボルドー液などのアルカリ製剤などとの混用、及び近接散布は避けること。 (2) 薬液が葉先からしたり始める程度にむらなく散布すること。 (3) 散布直後に降雨があった場合でも、再散布はしないこと。 (4) 7～8年生以上の成木に使用し、樹勢の弱い樹には使用しないこと。 (5) 全摘果においてエスレルを混用する場合、旧葉が落葉することがある。 (6) 連用により葉色の退化など樹勢の低下が認められた園では、連年使用を止めること。 (7) 使用回数4回以内(1,000倍希釈散布は2回以内) (8) 夏秋梢伸長抑制においては、1回目に1,000倍～2,000倍、2回目を2,000倍散布とする。
	フィガロン乳剤 1,000倍	普	○		
	ターム水溶剤 500～1,000倍	普	○		
間引き摘果	フィガロン乳剤 1,000～2,000倍	普	○	満開20～50日後	(4) 7～8年生以上の成木に使用し、樹勢の弱い樹には使用しないこと。 (5) 全摘果においてエスレルを混用する場合、旧葉が落葉することがある。
	ターム水溶剤 1,000～1,500倍	普	○	満開20～40日後	
熟期促進 間引き摘果と兼ねて使用する 場合	フィガロン乳剤 第1回目 1,000～2,000倍 第2回目 2,000～3,000倍	普	○	第1回 間引き摘果に準ずる 第2回 満開70～80日後 (但し、収穫14日前まで)	(6) 連用により葉色の退化など樹勢の低下が認められた園では、連年使用を止めること。 (7) 使用回数4回以内(1,000倍希釈散布は2回以内)
熟期促進 熟期促進だけに使用する 場合		普	○	第1回目 満開50～90日後 第2回目 満開70～110日後 (但し、収穫14日前まで)	(8) 夏秋梢伸長抑制においては、1回目に1,000倍～2,000倍、2回目を2,000倍散布とする。
浮皮軽減	フィガロン乳剤 2,000～3,000倍	普	○	第1回目 蛭尻期 (1～2分着色期) 第2回目 蛭尻期の2週間後 (但し、収穫7日前まで)	ターム水溶剤使用上の注意事項 (1) フィガロンの(1)(3)(4)に準じる。 (2) 摘果目的で使用する場合は合計で1回とし、2回使用しないこと。 (3) 全摘果したい場合は樹全体に、部分的に全摘果したい場合は摘果したい部分のみに散布すること。 (4) 間引き摘果に使用する場合、薬液が葉先から滴らない程度にむらなく、散布すること。 (5) 使用回数4回以内(一次生理落果発生期は1回以内、二次生理落果発生期後は3回以内)
夏秋梢伸長抑制	フィガロン乳剤 1,000～2,000倍	普	○	新梢萌芽期 1～2回 (但し、収穫14日前まで)	(1) 露地栽培、加温ハウス栽培緑枝部へ散布。
	ターム水溶剤 1,000～2,000倍	普	○	新梢萌芽期 2～3回 (但し、収穫前日まで)	
新梢発生促進	ビーエー液剤 100～200倍	普	○	萌芽直前～萌芽期 1回 (加温ハウス栽培では収穫後)	
着花促進	ビーエー液剤 100～400倍	普	○	加温直後 1回	
浮皮軽減 予措効果	クレフノン 100倍	普	○	収穫1ヶ月前から収穫直前までの間に1回散布	
浮皮軽減	セルバイン 300倍	普	○	8月下旬から20～30日間隔で2～3回散布(生理落果終了から着色期まで)	
浮皮軽減	ジベレリン剤1～2ppm とジャスモメート液剤2,000倍混用	普 普	△ ○	収穫予定日の3ヶ月前 1回 (但し、収穫45日前まで)	(1) 着色遅延と果頂部に緑斑が残る場合があり、高濃度ほどその傾向は高まる。 (2) 9月上旬散布、12月上旬収穫を前提とする。 (3) 浮皮の発生しやすい品種や園地、収穫が遅れる園地等での使用とする。

②中晩柑類

使用目的	使用薬剤と濃度	毒性		処理時期	対象品種名	注意事項
		人畜	水産 (注)			
摘果	ターム水溶剤 1,000～1,500倍	普	○	満開10～50日後 1回	天草、伊予柑、清見、せとか、はるみ	(1) 温州みかんの(1)～(3)に準ずる。
熟期促進	フィガロン乳剤 2,000～3,000倍	普	○	第1回目 満開50～90日後 第2回目 満開70～110日後 (但し、収穫21日前まで)	伊予柑 ネーブル	(1) 温州みかんに準ずる。
へた落ち防止	マデックEW 2,000～3,000倍	普	○	収穫開始予定日の20～10日前 1回	伊予柑 甘夏 ネーブル 八朔	(1) 伊予柑を長期貯蔵する場合は2,000倍で使用する。 (2) 他の薬剤との混用を避ける。 (3) 着色が4分以上になってから散布するのが望ましい。
後期落果防止	マデックEW 2,000～3,000倍	普	○	着色期～収穫20日前まで 2回以内	日向夏 河内晩柑	(1) 他の薬剤との混用は避ける。
	ターム水溶剤 1,000倍	普	○	着色期～収穫14日前まで 1～2回	河内晩柑	
花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン剤 25～50ppm	普	△	収穫直後～収穫約1ヶ月後 1回	伊予柑 不知火	(1) 着花過多が予想される樹、及び着花を少なくしたい樹や枝に、薬液が葉先から落ちない程度に散布する。 (2) マシン油乳剤の散布前に使用する方が効果が高い。 (3) 果実がある場合は、採取後に散布すること。 (4) 寒害の起こりやすい園で使用しない。
水腐れ軽減	ジベレリン剤 0.5～1ppm	普	△	着色終期但し収穫7日前まで 1回	不知火 はるみ 紅まどんな	紅まどんなは愛媛県試第28号でも使用可能
	ジベレリン剤 0.5ppm			着色始期～4分着色期まで 但し収穫21日前まで 1回	ぼんかん	

③ぶどう

使用目的	対象品種名	使用薬剤と濃度	毒性		処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
			人畜	水産(注)		
無種子化 果粒肥大促進 (2回処理)	デラウエア ヒムロッドシードレスを 除く2倍体米国系 品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 第1回目 100ppm 第2回目 75~100ppm	普	△	第1回 満開予定日約14日前 1回 (花房浸漬) 第2回 満開約10日後 1回 (果房浸漬又は果房散布)	(1)樹勢が弱い樹では有核粒が混入するので、樹勢維持に努める。 (2)処理後8時間以内に降雨があった場合は再処理する。 (3)2倍体米国系品種は、マスカットベリーA、アーリースチュベシ、キャンベルアーリー等。 (4)2倍体欧州系品種は、シャインマスカット、ロザリオビアンコ、瀬戸ジャイアンツ、マスカットオブアレキサンドリア、ネオマスカット、甲斐路、甲州等。 (5)巨峰系4倍体品種は、巨峰、ピオーネ、安芸クイーン、翠峰、サニールージュ、藤稔、高妻、白峰、ゴルビー、多摩ゆたか、紫玉、黒王、ハイベリー等。
	2倍体欧州系品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 第1回目 25ppm 第2回目 25ppm	普	△	第1回 満開時~満開3日後 1回 (花房浸漬) 第2回 満開10~15日後 1回 (果房浸漬)	
	サニールージュを除く 巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 第1回目 12.5~25ppm 第2回目 25ppm	普	△	第1回 満開時~満開3日後 1回 (花房浸漬) 第2回 満開10~15日後 1回 (果房浸漬)	
無種子化 果粒肥大促進 (1回処理)	2倍体欧州系品種 サニールージュを除く 巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 25ppm 加用 フルメット液剤 10ppm	普	△	満開3~5日後(落花期) 1回 (花房浸漬)	(1)樹勢の弱い樹への処理は行わない。 (2)2回目のホルモン処理は行わない。 (3)無種子化を安定させるため開花前にストレプトマイシン剤を処理する。
着粒安定 果粒肥大促進	キングデラ、ヘーソッドレス、 BKソッドレスを除く3倍 体品種	ジベレリン剤 第1回目 25~50ppm 第2回目 25~50ppm	普	△	第1回 満開時~満開3日後 1回 (花房浸漬) 第2回 満開10~15日後 1回 (果房浸漬)	(1)3倍体品種は、キングデラ、サマーブラック、ナガノハープル等。
果房伸長促進	2倍体欧州系品種 キングデラ、ヘーソッドレス、 BKソッドレスを除く3倍 体品種 サニールージュを除く 巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 3~5ppm 【使用液量30~100L/10a】	普	△	展葉3~5枚時 1回 (花房散布)	(1)摘粒の省力化を目的とする。 (2)花房を狙って散布する。
花穂発育促進	2倍体欧州系品種 サニールージュを除く 巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 1~2ppm	普	△	展葉6~8枚時 1回 (花房散布)	(1)果粒肥大の劣る若木において果粒肥大を促進させる効果がある。 (2)花房に散布する。
着粒安定	2倍体欧州系品種 3倍体品種 サニールージュを除く 巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 2~5ppm	普	△	①開花始め~満開前 1回 (花房浸漬) 又は、 ②満開時~満開3日後 1回 (ジベレリンに加用し花房浸漬)	(1)①の場合は、ジベレリン第1回目及び第2回目処理は慣行処理とする。②の場合は第2回目処理は慣行処理とする。
果粒肥大促進	デラウエア 【無核栽培】	フルメット液剤 3~5ppm	普	△	満開約10日後 1回 (ジベレリンに加用し果房浸漬)	(1)デラウエア、2倍体米国系品種、2倍体欧州系品種、3倍体品種に処理する場合は、ジベレリン第1回目処理は慣行とする。 (2)巨峰系4倍体品種へ処理する場合は、満開時~満開3日後のジベレリンによる無種子化処理は慣行とする。
	2倍体米国系品種 【無核栽培】	フルメット液剤 5~10ppm	普	△	満開約10日後 1回 (ジベレリンに加用し果房浸漬)	
	2倍体欧州系品種 3倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 5~10ppm	普	△	満開10~15日後 1回 (ジベレリンに加用し果房浸漬)	
	サニールージュを除く 巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 5~10ppm	普	△	満開10~15日後 1回 (ジベレリンに加用又はフルメット単用で果房浸漬)	
果粒肥大促進	2倍体米国系品種 マスカット・オブ・アレキ サンドリアを除く2倍 体欧州系品種 巨峰系4倍体品種 【有核栽培】	フルメット液剤 5~10ppm	普	△	満開15~20日後 1回 (果房浸漬)	
無種子化	ぶどう 【無核栽培】	①アグレプト液剤 1,000倍 (200ppm) ②ストマイ液剤20 1,000倍 (200ppm)	普	△	①満開予定日の14日前~満開期 1回(散布又は花房散布又は花房 浸漬又は第1回目ジベレリン処理 と併用) ②満開予定日の14日前~満開期 1回(散布又は花房浸漬又は第1 回目ジベレリン処理と併用)	(1)ジベレリンによる無種子化を補助する目的で使用する。 (2)満開期の使用は第1回目ジベレリン処理と併用する。
着色促進	巨峰 ピオーネ	アップサップ液剤 100~200倍 【使用液量2~10mL/1果房】	普	○	着色始期~着色開始2週間後 1回 (果房散布)	(1)薬液が果粒に付き過ぎると果面の汚れや果粉の溶脱するおそれがある。 (2)葉に飛散しない様に散布する。

注 (1) ジベレリン剤、フルメット液剤については、降雨により再処理する場合は総使用回数に留意する。



## ④日本なし

使用目的	使用薬剤と使用量	毒性		処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
		人畜	水産(注)		
熟期促進 果実肥大促進	ジベレリンペースト 20～30mg/1果	普	○	満開30～40日後 1回(果梗部塗布)	(1)二十世紀においてゆず肌の発生が多い樹には使用しない。 (2)薬剤が果面に付着すると葉害の原因となる。
新梢伸長促進	ジベレリンペースト 100mg/1枝	普	○	満開予定日10日前～満開40日後 1回(新梢基部塗布)	(1)全花除去した短果枝の新梢基部に塗布する。 (2)薬剤が葉や芽に付着すると葉害の原因となる。

## ⑤キウイフルーツ

使用目的	使用薬剤と濃度	毒性		処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
		人畜	水産(注)		
果実肥大促進	フルメット液剤 1～5ppm	普	△	開花後20～30日 1回 (果実浸漬又は果実散布)	(1)樹勢の弱い樹への使用は避ける。 (2)濃度が高いと果形が乱れる場合があるので低濃度(1～2ppm)での使用が望ましい。
新梢伸長抑制	ターム水溶剤 1,000～2,000倍 300～600ℓ/10a	普	○	新梢伸長期 1回 (立木全面散布又は枝別散布)	(1)本剤は雄木の登録であるため、雌木にかからないよう雄木専用園等で使用する。

## ⑥かき

使用目的	使用薬剤と使用量	毒性		処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
		人畜	水産(注)		
落果防止	ジベレリン剤 50～200ppm 30～100ℓ/10a	普	△	満開10日後 1回 (幼果およびへたに散布)	



## 5 野 菜

(1) 野菜病害虫防除法

きゅうり

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					水産 人 毒 (注)	注意事項	
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名			濃度(使用量)
ウイルス病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、CMV・WMV・ZYMV・PRSVである。</li> <li>虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。</li> <li>ZYMV単独、又はCMVとZYMVの重複感染で萎れを生じることがある。</li> <li>アブラムシ類の防除を徹底する。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバーポリ及びびシルバートレープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>抵抗性品種を利用する(ZYMV)。</li> <li>発病株を早期に抜き取り、処分する。</li> </ul>				<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ZYMVによる萎れ、果実奇形を防ぐためには、ワクチン(キニフェンピオZY-02)接種苗の定植が有効である(特にハウス抑制栽培)。</li> </ul>				
									<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アブラムシ類の防除の項(P.171)参照</li> </ul>	
黄化えそ病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスはMYSVである。</li> <li>虫媒(ミナミキイロアザミウマ)伝染するウイルス病である。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>ミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバーポリ及びびシルバートレープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>発病株を早期に抜き取り、処分する。</li> <li>圃場内外の除草を徹底する。</li> </ul>				<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アブラムシ類防除の項(P.171)参照</li> </ul>				
									<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミナミキイロアザミウマの項(P.308)参照</li> </ul>	
黄化病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスはBPVY(CuYV)である。</li> <li>虫媒(オンシツコナジラミ)伝染するウイルス病である。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>オンシツコナジラミの防除を徹底する。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバーポリ及びびシルバートレープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>発病株を早期に抜き取り、処分する。</li> <li>圃場内外の除草を徹底する。</li> </ul>				<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバーポリ及びびシルバートレープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>発病株を早期に抜き取り、処分する。</li> <li>圃場内外の除草を徹底する。</li> </ul>				
									<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オンシツコナジラミの防除の項(P.172)参照</li> </ul>	
退緑黄化病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスはCCYVである。</li> <li>虫媒(タバココナジラミ)伝染するウイルス病である。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>タバココナジラミの防除を徹底する。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバーポリ及びびシルバートレープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>発病株を早期に抜き取り、処分する。</li> <li>圃場内外の除草を徹底する。</li> </ul>				<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバーポリ及びびシルバートレープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>発病株を早期に抜き取り、処分する。</li> <li>圃場内外の除草を徹底する。</li> </ul>				
									<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>タバココナジラミの防除の項(P.172)参照</li> </ul>	
緑斑モザイク病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、KGMVである。</li> <li>土壌伝染、種子伝染するウイルス病である。</li> <li>強い汁液伝染力を持つため、発病株を管理した手、はさみ等を通しての感染も高率でおこる。</li> <li>クロロピクリンは効果なし。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本病を対象に種子消毒した種子を使用する。</li> <li>床土は無病土を使用する。</li> <li>連作は避ける。</li> <li>発病株を早期に抜き取り処分する。</li> <li>支柱等資材を更新する。</li> <li>発病ハウスへの出入は特に注意する。</li> </ul>				<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カスミンボルドー</li> <li>カッパーシン水和剤</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅</li> <li>1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1,000倍 収穫前日まで</li> <li>1,000倍 収穫前日まで</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>5回以内</li> <li>5回以内</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△</li> </ul>
斑点細菌病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多湿条件下で多発する。</li> <li>予防散布の効果が高い。</li> <li>幼苗期は無機銅剤より有機銅剤の方が葉害が少ない。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>茎葉の過繁茂を避ける。</li> <li>罹病部はすみやかに除去し、圃場外へ持ち出す。</li> </ul>				<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>床土消毒</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>銅剤及び混合剤(P.317)参照</li> <li>土壌病害虫防除法の項(P.301)参照</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>苗立枯病の項(P.307)参照</li> </ul>	<p>(薬剤防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>は種後～</li> </ul>	

病害虫名	病害の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
菌核病	<ul style="list-style-type: none"> <li>地表面に落下した菌核で越冬する。</li> <li>咲き終わった花弁から発病する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連作を避け、アブラナ科作物等本病の出やすい作物の後作を避ける。</li> <li>発病畑の夏期水田化を行う。</li> <li>被害部を早期に除去する。</li> </ul>	発病前( ) 発病初期	2 2 10+1	2 2 10+1	ロプラール水和剤 スミレックス水和剤 ゲッター水和剤	1:イプロジオン 1:プロキシムン 1:シエトフェンカルブ2:チオフアネートメチル	1,000倍 1,000~2,000倍 1,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 6回以内 5回以内	普 普 普	△ △ ○	
立枯性疫病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>疫病菌の発育適温は、28~32℃であるが、24℃くらいで多湿のときに発生が多い。6月中旬~7月上旬に最も多く発生する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連作を避ける。</li> <li>高畝とし、排水を図る。</li> <li>マルチを行い、病原菌のね上がりを防ぐ。</li> </ul>	発病前( ) 発病初期	28	28	フレビクルN液剤	1:プロパモカルブ塩酸塩	400倍	苗床:は種直後 本圃:定植直後及び生育初期(但し、収穫21日前まで)	3回以内	普	○	○ 30/㎡土壌還元注
疫病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>疫病は24℃くらいで多湿の時、発生が多い。</li> <li>浸水した場合や排水の悪いところで発生が多い。</li> <li>酸性土壌で発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連作を避ける。</li> <li>高畝とし、排水を図る。</li> <li>マルチを行い、病原菌のね上がりを防ぐ。</li> </ul>	作付け前 発病前( ) 発病初期	M3	M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
炭疽病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>露地で発生が多く、6月頃から秋まで発生し、特に降雨の連続したとき被害が大きい。</li> <li>窒素過多で発生が多くなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>密植を避け、風通しを良くする。</li> <li>窒素過多を避ける。</li> <li>発病葉・果実は早期に除去する。</li> <li>排水を良くする。</li> </ul>	発病前( ) 発病初期	M5 M3 M3 1 M7 11+M5 M7+11	M5 M3 M3 1 M7 11+M5 M7+11	ダコニール1000 ベンコゼプロフロアブル ジマンダイセン水和剤 ベンレート水和剤 トップジンM水和剤 ベルクルートフロアブル アミスターオーブテイフロアブル フェンベル 顆粒水和剤	1:TPN 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:ベノシル 1:チオフアネートメチル 1:シノキサロニル酸塩 1:アキニクスロニル2:TPN 1:シノキサロニル酸塩 2:ピリヘンカルブ	1,000倍 500~1,000倍 600倍 2,000~3,000倍 1,500~2,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	12回以内 3回以内 3回以内 3回以内 5回以内 4回以内 4回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	× △ △ △ △ △ △※ ○	○ かふれ注意
疫病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(防除上のポイント)</li> <li>予防散布に重点を置く。</li> </ul>		発病前( ) 発病初期	10+1 52	10+1 52	ニマイバー水和剤 ミギワ10フロアブル	1:シエトフェンカルブ2:ベノシル 1:イプロジオン	1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	△ ○	

病害虫名		病害虫の特徵 防除上のポイント等		耕種的防除法		時期		IRAC コード		FRAC コード		使用薬剤		一般名		濃度(使用量)		使用時期		本剤の使用回数		人毒		水産(注)		注意事項	
黒星病	○ 冷涼(17℃くらい)多湿の天候が続くときに多発する。 ○ 施設のビニールが破れていると、その付近のキョウリが低温にあり、発生することがある。 ○ 予防散布に重点を置く。	○ ハウス栽培では換気をよくするなど多湿を防ぐ。 ○ 支柱等資材を消毒又は更新する。 ○ ハウス栽培では発病適温(17℃付近)よりも高い温度で管理する。 ○ 発病葉・果実は早期に除去する。	発病前	M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ かぶれ注意	普	△	○ かぶれ注意												
																M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
べと病	○ 発生の特徵 (防除上のポイント) ○ 発生の特徵 (防除上のポイント) ○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病前	M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	○ かぶれ注意	普	△	○ かぶれ注意												
																M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	600~800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	600~800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可	普	△	○ 無機銅との近接散布不可												
																M3	ベンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	500~1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	P7	アリエツアイト水和剤	1:ホセチル	400~800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可	普	△	○ 無機銅との近接散布不可												
																21	ランマンフロアブル	1:シアノアクト	1,000~2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	21+M5	ドローシヤスフロアブル	1:シアノアクト	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可	普	△	○ 無機銅との近接散布不可												
																M3+4	リドミルゴールドMZ	1:マンゼブ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	40+M3	カンパネラ水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可	普	△	○ 無機銅との近接散布不可												
																40+M3	ベネセット水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:シモキサニル	1,000~1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可	普	△	○ 無機銅との近接散布不可												
																27+M5	ブリザード水和剤	1:シモキサニル	1,500~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	27+11	ホライズントライフロアブル	1:シモキサニル	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可	普	△	○ 無機銅との近接散布不可												
																40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:マンゼブ	1,000~1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	27+40	ベトフアイトー顆粒水和剤	1:シモキサニル	2,000~3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 蜜に対して影響あり。	普	○	○ 蜜に対して影響あり。												
																43+40	ジャストフィットフロアブル	1:フルオロ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	21	ライメイフロアブル	1:アミダ	2,000~4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 蜜に対して影響あり。	普	△	○ 蜜に対して影響あり。												
																21+27	ダイオモ顆粒水和剤	1:アミダ	2,000~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	40	フェステイバル水和剤	1:シトモ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 蜜に対して影響あり。	普	○	○ 蜜に対して影響あり。												
																45+40	ザンブロDMフロアブル	1:アミダ	1,500~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	U17	ピシロックフロアブル	1:ピカ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 蜜に対して影響あり。	普	○	○ 蜜に対して影響あり。												
																22	エトフインフロアブル	1:ピカ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○				
○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 発生の特徵 (防除上のポイント)	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害葉の処分し、伝染源を残さない。	発病初期	49+M3	ゾーベック エニベル 顆粒水和剤	1:ピカ	750倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 蜜に対して影響あり。	普	△	○ 蜜に対して影響あり。												
																21+49	ゾーベック エンデクタSE	1:ピカ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○				

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○ 発病前と発生の極初期の散布に重点を置く。 ○ 降雨前後に重点的に散布する。 ○ ペンゾイミダゾール系薬剤は、県内で広く耐性菌が確認されている。	耕種的防除法	時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
褐斑病		○ 窒素質肥料の過多を避ける。 ○ 草勢を低下させない肥培管理する。 ○ 被害残渣の処理を徹底する。	発病前 ～ 発病初期	M3 M3 M3 M3 M5 M7 9 12 10+2	M3 M3 M3 M3 M5 M7 9 12 10+2	ジマンダイゼン水和剤 ジマンダイゼンフロアブル ベンコゼブ水和剤 ベンコゼブフロアブル ダコニール1000 フルベクトフロアブル セルピカフロアブル セリアーフロアブル20 スミレンド水和剤	1:マンセブ 1:マンセブ 1:マンセブ 1:マンセブ 1:TPN 1:ミノカタジン・アルベルシ酸塩 1:ホニベリム 1:フルジ・オキソニル 1:シ・エトフェンカルブ2:プロジント	600倍 500～800倍 800倍 500倍 1,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 1,500～2,000倍 1,500～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 12回以内 7回以内 4回以内 3回以内 5回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ ○ △ △ △ ○ ○ ○ ○	○ かぶれ注意  ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)多湿条件下で発生する。 (防除上のポイント) ○ 発病前散布に重点を置く。	○ 花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。	開花期 ～ 収穫期	M5 2 M7 M7 M7+11 17+12 17 12 9 2 10+2 10+1 10+1 7 7 7 7 7+M5 M7+19 52	M5 2 M7 M7 M7+11 17+12 17 12 9 2 10+2 10+1 10+1 7 7 7 7 7+M5 M7+19 52	ダコニール1000 ロブラール水和剤 ベルコート水和剤 ベルコートフロアブル ファンベル顆粒水和剤 ジャストミート顆粒水和剤 ピクシオDF セイビアーフロアブル20 フルピカフロアブル スミレックス水和剤 スミレンド水和剤 ゲッター水和剤 ニマイバー水和剤 カンタストライフロアブル アフエツフロアブル バレート20フロアブル ネクスターフロアブル ケンジヤフロアブル ベジセイバー ダイアリットDF ミキワ10フロアブル	1:TPN 1:フロジ・オン 1:ミノカタジン・アルベルシ酸塩 1:ミノカタジン・アルベルシ酸塩 1:ミノカタジン・アルベルシ酸塩 1:ミノカタジン・アルベルシ酸塩 2:ペリバンカルブ 1:フェニチン 1:フルジ・オキソニル 1:ホニベリム 1:プロジント 1:シ・エトフェンカルブ2:プロジント 1:シ・エトフェンカルブ2:チオアブネートメチル 1:シ・エトフェンカルブ2:ベ・ニル 1:ボスカリト 1:ペンゾセブト 1:ピラゾール 1:イピラザム 1:イフエダシト 1:ペンゾセブト2:TPN 1:ミノカタジン・アルベルシ酸塩 2:ボリオキシシン複合体 1:イフルフェンキ	1,000倍 1,000～1,500倍 2,000～4,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 1,000～2,000倍 1,500～2,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 1,000～1,500倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	12回以内 4回以内 7回以内 7回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普	× △ △ △ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ ○ △ △ △ △ △ ○	○ かぶれ注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
つる割病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ きゅうりつる割病菌は、きゅうりの他、メロン、マクワリを侵すが、スイカ、トウガンは侵さない。</li> <li>○ ユウガオつる割病菌は、カボチャ・岩木を侵す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 病株の早期抜き取りを行う。</li> <li>○ pHの低い圃場では、定植前に苦土石灰を施用するなどしてpHを高める。</li> <li>○ 接木栽培を行う。</li> </ul>	発病前初期		1	ベンレート水和剤	1:ベンゾル	1,000倍	定植前～定植1ヶ月後	3回以内	普	△	○1株当り150～300m <sup>2</sup> の灌水処理
つる枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉では、縁部分に発生し、枯れた部分に小さな黒粒を多数形成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 巻きひげ等の残渣を処理する。</li> <li>○ 肥切れしないようにする。</li> </ul>	発病前初期		M3 M4 2 1 1 7 7	ジマンダISEN水和剤 オーソサイド水和剤80 ロブラール水和剤 トップジンM水和剤 トップジンMペースト ケンジヤプロアブル パレード20フロアブル	1:マンゼブ 1:キアブタン 1:イブゾロン 1:チオファネートメチル 1:チオファネートメチル原液 1:イフエグッド 1:ピラゾフルシド	600倍 600～800倍 1,000倍 1,500～2,000倍 2,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 発病初期 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 5回以内 4回以内 5回以内 5回以内 4回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	△ × △ △ ○ ○ ○	○ 散布する。幼苗期に葉害が出やすいので注意する。
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ハウス抑制栽培で被害が大きい。</li> <li>○ (防除上のポイント) 発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。</li> <li>○ 水和剤は展着剤を加用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害残渣を圃場内に残さない。</li> <li>○ 発病した茎葉は、速やかに除去する。</li> <li>○ 密植、株の過繁茂を避ける。</li> </ul>	発病前初期	un un	M5 M7 M7 9 M10 M10 3 3 3 3 U6+3	ダコニール1000 ベルコート水和剤 フルビカフロアブル モレスタン水和剤 バルミノ トリフミン水和剤 トリフミン乳剤 フリー水和剤 スコア顆粒水和剤 サブロー乳剤 パンチョTFF顆粒水和剤	1:TPN 1:ミノカタジンアルベシル酸塩 1:ミノカタジンアルベシル酸塩 1:ムニヒリア 1:キキアリン系 1:キキアリン系 1:トリフルシール 1:トリフルシール 1:シロフタニール 1:シフエノコゾール 1:トリロン 1:シフルフエグッド2:トリフルシール	1,000倍 2,000～4,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍 2,000～5,000倍 3,000～5,000倍 2,000倍 4,000～8,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 3,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	12回以内 7回以内 7回以内 4回以内 3回以内 3回以内 5回以内 5回以内 3回以内 5回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	× △ ○ △ △ △ △ △ △ △ ○ △ ○	○ かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	IRAC		FRAC	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
			コード	コード									
センチュウ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 主要種は、ネコブセンチュウ類。</li> <li>○ 被害は、根がコブだらけになり、草丈や葉数の減少、下位葉からの枯れあがり、萎凋が引き起こされる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 有機質を施用する。</li> <li>○ 床土は水田土壌を使用する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> </ul>	1B			ネマキック液剤	1:イシアホス	4,000倍	生育期(但し、収穫前日まで)	1回	劇	○	○ 土壌灌注(20/㎡)、登録はネコブセンチュウ
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴) ワタアブラムシが主体である。</li> <li>○ 露地での発生が多いのは、6～8月頃である。</li> <li>○ (防除上のポイント) ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部地域で認められている。</li> <li>○ シルバーポリーによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。</li> <li>○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。</li> <li>○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺の除草をする。</li> </ul>	4A 4A 28+4A 4A 23 28 4A+28 28 28 4A 4A 28			<ul style="list-style-type: none"> <li>アルパリン粒剤</li> <li>スタークル粒剤</li> <li>ミネクトデュオ粒剤</li> <li>アドマイヤー1粒剤</li> <li>モベントフロアブル</li> <li>ベリマーグSC</li> <li>アベイル粒剤</li> <li>プリロン粒剤オメガ</li> <li>ヨーバルフロアブル</li> <li>アドマイヤー1粒剤</li> <li>モスピラン粒剤</li> <li>ベリマーグSC</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:シノチラン</li> <li>1:シノチラン</li> <li>1:シノチラン2:ファトキヤム</li> <li>1:イタダクアクト</li> <li>1:スピロテアクト</li> <li>1:シノチラン2:アクトアクト</li> <li>1:アセタミプリド2:シノチラン</li> <li>1:シノチラン2:アクトアクト</li> <li>1:シノチラン2:アクトアクト</li> <li>1:イタダクアクト</li> <li>1:アセタミプリド</li> <li>1:シノチラン2:アクトアクト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1g/株</li> <li>1g/株</li> <li>1g/株</li> <li>1g/株</li> <li>500倍</li> <li>25ml/400株</li> <li>2g/株</li> <li>2g/株</li> <li>200倍</li> <li>1～2g/株</li> <li>0.5～1g/株</li> <li>25ml/400株</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>育苗期</li> <li>育苗期</li> <li>鉢上げ時～育苗期後半</li> <li>育苗期後半</li> <li>育苗期後半</li> <li>定植当日</li> <li>定植当日</li> <li>育苗期後半～定植時</li> <li>定植当日</li> <li>定植時</li> <li>定植時</li> <li>定植直後</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> <li>1回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元灌注(25～50ml/株)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 400株当り2～200(1株当り5～50ml)、混用(注)(P.300)</li> <li>○ 株元散布、同時施用</li> <li>○ 灌注(25ml/株)</li> <li>○ 植穴または株元土壌混和</li> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 400株あたり20～200L(1株あたり50～500ml)根回し水との同時処理が可能</li> <li>○ 混用(注)(P.300)</li> <li>○ 株元散布</li> </ul>	
			4A			ダントツ粒剤	1:クロチニジン	1～2g/株	定植後 但し収穫前日まで	3回以内	普	△	
			4A 4A 4C 21A 21A 9B 9B 29 23 28	39		<ul style="list-style-type: none"> <li>モスピラン顆粒水溶剤</li> <li>トランスフロアブル</li> <li>サンマイトフロアブル</li> <li>ハチハチ乳剤</li> <li>チェス顆粒水和剤</li> <li>コルト顆粒水和剤</li> <li>ウララDF</li> <li>モベントフロアブル</li> <li>ベネビアOD</li> <li>くん煙剤(P.316)参照</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2,000～4,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000～1,500倍</li> <li>1,000～2,000倍</li> <li>5,000倍</li> <li>4,000倍</li> <li>2,000～4,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>劇</li> <li>普</li> <li>劇</li> <li>劇</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>×</li> <li>×</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>△</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ かぶれ注意、刺激(眼)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> </ul>	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。</li> <li>○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。</li> <li>○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺の除草をする。</li> </ul>	発生前	4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤 モベントフロアブル	1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:クロチアニン 1:ステロチアマト	1~2g/株 1~2g/株 1~2g/株 500倍	育苗期 育苗期 育苗期後半 育苗期後半~定植当日	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ △ △ ○	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元散布</li> <li>○ 株元灌水(25~50ml/株)葉害等(注)(P.299)</li> </ul>
			28	4A+28	ベリマークSC アペイル粒剤	1:シアントリアプロール 1:アセタミプリト2:シアントリアプロール	25ml/400株 2g/株	育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日	1回	普	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.300)</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 施設では冬期も発育し加害する。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 葉裏に十分に散布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である。</li> </ul>	発生前	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 株元散布、同時施用(注)(P.300)</li> <li>○ 植穴処理</li> <li>○ 植穴処理土壌混和</li> <li>○ 植穴土壌混和</li> <li>○ 植穴土壌混和</li> </ul>
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			4A		モスビラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△		
			4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:チトキサム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			4C		トランスフェオームフロアブル	1:スルホキサフル	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			21A		サンマイルフロアブル	1:ピリタハン	1,000~1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△		
			21A+16		アプロードエースフロアブル	1:フエンピロキシメト2:プロプロフェン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			7C		ラノーテープ	1:ピリプロキシフェン	10~50㎡/10a (施設栽培)	1回	普	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ IGR剤(注)(P.15)参照</li> <li>○ ラノーテープの注意事項(参考資料参考資料P.28)参照</li> </ul>		
			6		コロマイト乳剤	1:シルベクチン	1,000~1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
			6		アニキ乳剤	1:レピクチン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		
			6		アグリメック	1:アハクチン	500~1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△		
			6		アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
			un	M10	モレスタン水和剤	1:キノキサリ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
un	M10	バルミノ	1:キノキサリ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンボト	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
9B		チェス顆粒水和剤	1:ピネロシン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリアルキナリン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
29		ウアラDF	1:プロネクト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
23		モベントフロアブル	1:ステロチアマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
28		ベネビアOD	1:シアントリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
5		ディアナSC	1:ステネトラム	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:ステノクト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○					
30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○					

薬剤防除法																				
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項							
コナジラミ類 ナシ	コナジラミ類の特徴 (発生の特徴) ○コナジラミ類の特徴(P.164)参照	○コナジラミ類の項(P.164)参照	発生初期	16		アプロード水和剤	1:アプロアジン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○登録は幼虫 ○IGR剤(注)(P.15)参照							
														1B	ダイアジン3	6~9kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	○土壌混和 登録はウリハムシ幼虫
														4A+28	アベイル粒剤	2g/株	育苗後半~ 定植当日	1回	普	
ウリハムシ	(発生の特徴) ○越冬成虫は、5月上旬~6月下旬に現れ、新成虫は、7月中旬頃から羽化し、8月上旬中旬が最盛期である。 ○幼虫による被害は、7月上旬から認められる。	○3~4葉期まで寒冷紗、ビニールなどで覆う。 ○シルバーポリなどによるマルチが有効である。	発生前	4A		モスピラン顆粒水溶剤 アルパリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 コテツフロアブル ガードベイトA	1:ダイアジン 1:アセタミプリド・シアントロエリブ ロール 1:アセタミプリド 1:ジノアフラン 1:ジノアフラン 1:クロフェニル 1:ペルメリン	6~9kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	×	○土壌混和 登録はウリハムシ幼虫							
														4A		4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	
														4A		2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	
コナジラミ類 幼虫	(発生の特徴) ○発生は、ドウガネブイブイである。	○有機質肥料を多用するとコガネムシ類が集まりやすいので、施用後は覆土を厚くする。	発生前	3A		ガードベイトA	1:ペルメリン	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○幼苗期葉害注意 ○株元散布 合ピレ(注)(P.15)							
														1B		4~6kg/10a	は種時	1回	普	
														1B	カルボス粉剤 ダイアジン5	4~6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	○土壌表面散布土壌混和処理 ○全面土壌混和または作業土壌混和
タネバエ	(発生の特徴) ○幼虫が植え付けた種子や幼苗を加害する。 ○春~初夏に発生多い。	○有機質肥料を多用するとタネバエが集まりやすいので施用後は覆土を厚くする。	発生前	1B		カルボス粉剤 ダイアジン5	1:イキサチン 1:ダイアジン	4~6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○全面土壌混和または作業土壌混和							
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○主要種は、カブラヤガ、タマネヤガである。 ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害する。	○作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺する。	発生前	1B		ダイアジン5	1:ダイアジン	4~6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○全面土壌混和または作業土壌混和							
ウリノメイガ	(病害虫の名称) ○標準名は、ワタヘリクロノメイガである。 (防除上のポイント) ○葉裏中心に生息するので、薬剤防除は、葉裏を対象に丁寧に行う。 ○薬剤防除は、若齢幼虫期に実施する。	○蛹・幼虫を捕殺する。 ○ハウス栽培では、開口部に防虫ネット等を設置する。	発生初期	15	15	カスケード乳剤 マトリックフロアブル マツチ乳剤 アファーム乳剤 スピノエース顆粒水和剤 ダブルシユーターSE ダイアナSC フェニックス顆粒水和剤 プレバソフフロアブル5 ペネビアOD ヨーバルフロアブル ハチハチ乳剤 コテツフロアブル グレーシア乳剤 くん煙剤(P.316)参照	1:フルフェキサロン 1:クロフェニル 1:フルフェキサロン 1:エマカチン安息香酸塩 1:スピノアト 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノアト 1:スピノラム 1:フルフェキサロン 1:クロフェニル 1:シアントロエリブ 1:アベイル 1:トリフエピド 1:クロフェニル 1:フルフェキサロン	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 5,000倍 1,000倍 2,500~5,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500~5,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 劇 劇 普	○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※ ○※								

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)		耕種的防除法		IRAC コード		FRAC コード		使用薬剤		一般名		濃度(使用量)		使用時期		本剤の使用回数		人毒		水産(注)		注意事項	
ハモグリバエ類	ハモグリバエ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後多発することがある。</li> <li>発生の主体は、トマトハモグリバエである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>苗からの持ち込みを防止する。</li> <li>成虫の侵入を防止するため、施設の開口部に防虫ネット等(1mm目以下0.6mm目以下が望ましい)を設置する。</li> <li>被害を受けた収穫残渣は、発生源となるので、適切に処分する。</li> </ul>	4A	4A	28	28	28	4A	4A	5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和	
				5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和								
トマトハモグリバエ	トマトハモグリバエ			5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和								
ミナミキイロアザミワマ	ミナミキイロアザミワマ			5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和								
ハダニ類	ハダニ類			5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和								
ミナミキイロアザミワマ	ミナミキイロアザミワマ			5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和								
ハダニ類	ハダニ類			5	5	5	28	28	un	6	30	28+4A	4A	15	普	△	株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 展着剤は加用しない 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.297) 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和								

薬剤防除法												
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	水産 毒(注)	注意事項
チャノホコリダニ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 薬は、ホルモン障害様になり、萎縮したり、奇形化する。症状が進むと、生長点が褐変し、芯止まり症状となり、その後、生長点が枯死する。茎や果実が加害されるとさめ肌になる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○ ハダニ類登録薬剤では、マイトコナーネ・ダニサラバ・バロックの効果は低い。</p>		発 生 初 期	6		コロマイト乳剤	1:300、メカチン	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	晋 △※	

病害名		対 策	症 状	本障害と類似した病気の症状
子ロースミスによる急性萎凋	<p>障害名 発生原因</p> <p>複雑な生理的要因が関与するが、台木部分と接木穂部分の水分の供給と需要のアンバランスで発生</p>	<p>対 策</p> <p>○ 接木作業の適正化 ① 穂木、台木の融合組織の発育を促進させるため、育苗床の温・湿度を高める。 ○ 生育中の萎れの軽減 ① 葉面散布を行う。 ② 着果負担をなくすため摘果を行う。</p>	<p>症 状</p> <p>収穫始め頃から急性的な株全体の萎れが起こる。 根及び地際部に異常は見られず、茎の断面も肉眼では健全に見える。</p>	<p>本障害と類似した病気の症状</p> <p>病 状</p> <p>病害名 立枯性疫病</p> <p>・ 茎の地際部が水浸状となり、根も褐変、腐敗。 ・ 株元の維管束断面は褐変。  ・ 株全体が萎れるが、明瞭なモザイク症状を伴わないことも多い。</p>

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
ウイルス病	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、CMV・WMV・ZYMVである。</li> <li>虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。(防除上のポイント)</li> <li>アブラムシ類の防除を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>耕種的防除法) <ul style="list-style-type: none"> <li>寒冷紗被覆で育苗する。</li> <li>シルバークロ及びシルバーテーパーなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。</li> <li>発病株の早期抜き取り、処分する。</li> </ul> </li> </ul>										
苗立枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>リンクトニア属菌によるものが多いが、ピシウム属菌等によっても起こる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>床土は、無病土を使用する。</li> </ul>			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
疫病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>降雨の多い年で、梅雨頃より発生する。</li> <li>特に果実の被害が著しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病地は、4年以上ワリ類の作付を避ける。</li> <li>栽培地は、低湿地を避け、排水を良くし、敷きわらをすする。</li> <li>発病果・茎を速やかに処分する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病前</li> <li>発病前</li> <li>発病前</li> <li>発病初期</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>M3</li> <li>M3</li> <li>P7</li> <li>M3+4</li> <li>40+M1</li> <li>40+M5</li> <li>40+M3</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>27+40</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ジマンダイセン水和剤</li> <li>ベンコゼブ水和剤</li> <li>アリエツァイ水和剤</li> <li>リドミルゴールドMZ</li> <li>フェステイバルC水和剤</li> <li>プロボーズ顆粒水和剤</li> <li>カンパネラ水和剤</li> <li>ランマンフロアブル</li> <li>ライメイフロアブル</li> <li>ベトアアイター顆粒水和剤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:ホセナル</li> <li>1:マンゼブ2:メタラキシルM</li> <li>1:シトキセル2:塩基性塩化銅</li> <li>1:ベンチアハリカルブイフロピル2:TPN</li> <li>1:ベンチアハリカルブイフロピル2:マンゼブ</li> <li>1:シアノシアニド</li> <li>1:アミスプロム</li> <li>1:シキキセル2:ベンチアハリカルブイフロピル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>600倍</li> <li>600倍</li> <li>400~800倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫21日前まで</li> <li>収穫21日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫30日前まで</li> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫21日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫3日前まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>○</li> </ul>	
べと病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>病斑は、小さく丸みを帯びたように発生する。</li> <li>葉裏にかびを生じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>栽培地は低湿地を避け、排水を良くし、敷きわらをすする。</li> <li>着果初期の肥料切れを防止する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病前</li> <li>発病初期</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>M5</li> <li>M3</li> <li>M3</li> <li>M3+4</li> <li>40+M1</li> <li>11</li> <li>40+M5</li> <li>40+M3</li> <li>21</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>銅剤及び混合剤(P.317)参照</li> <li>ダコニール1000</li> <li>ジマンダイセン水和剤</li> <li>ベンコゼブ水和剤</li> <li>リドミルゴールドMZ</li> <li>フェステイバルC水和剤</li> <li>ストロビーフロアブル</li> <li>プロボーズ顆粒水和剤</li> <li>カンパネラ水和剤</li> <li>ランマンフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:TPN</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:マンゼブ2:メタラキシルM</li> <li>1:シトキセル2:塩基性塩化銅</li> <li>1:クノキムメチル</li> <li>1:ベンチアハリカルブイフロピル2:TPN</li> <li>1:ベンチアハリカルブイフロピル2:マンゼブ</li> <li>1:シアノシアニド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000倍</li> <li>600倍</li> <li>600倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>3,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫21日前まで</li> <li>収穫21日前まで</li> <li>収穫30日前まで</li> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫21日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>○</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○かぶれ注意</li> <li>○葉害等(注)(P.299)</li> </ul>
灰色かび病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>低温(20℃以下)・多湿条件下で発生する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>開</li> <li>収</li> <li>種</li> <li>期</li> </ul>		銅剤及び混合剤(P.317)参照	銅剤及び混合剤(参考資料P.20)参照						

病名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 水和剤は、展着剤を加用する。</li> <li>○ 水和剤は、展着剤を加用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害残渣を圃場内に残さない。</li> <li>○ 発病茎葉は、速やかに除去する。</li> <li>○ 密植、株の過繁茂を避ける。</li> </ul>	発病前	un	M2 M7 9 7+M5 M10 3 3 3 U6+3	イオウフロアブル ベルコート水和剤 フルビカフロアブル ベジセイバー モレスタン水和剤 トリフミン水和剤 スコア顆粒水和剤 フラー水和剤 バンチョウTF顆粒水和剤	1:硫黄 1:ミカダソノアルヘニル酸塩 1:メニピリム 1:ペンチオチアト2:TPN 1:キキチリン系 1:トリフルシノール 1:ジフェノコナゾール 1:シロプロタエン 1:シフルプロエチト2:トリフルシノール	500倍 1,000～2,000倍 2,000～3,000倍 1,000倍 2,000～4,000倍 3,000～5,000倍 2,000倍 4,000～8,000倍 2,000倍	発病前～発病初期 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 4回以内 4回以内 3回以内 3回以内 5回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	○ △ ○ ○ △ △ ○ ○ ○ ○	○ 葉害等(注)(P.299)			
ネキリムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。</li> <li>○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。</li> <li>○ 被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺する。</li> </ul>	発生前	1B 3A	NC NC 7 40+M5 U13+9	ハーモメイト水和剤 カリグリーン アフェットフロアブル プロボーズ顆粒水和剤 シウチノスクアフロアブル 銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照 カルボス微粒剤 ガードベイトA	1:ポリオキシ複合体 1:クレキシムメチル 1:アキシストロピン2:TPN 1:ピラクロホリン2:ボスカード 1:ピリオフェン 1:シノカタジアルヘニル酸塩 2:ピリオフェン 1:炭酸水素ナトリウム 1:炭酸水素カリウム 1:ペンチオチアト 1:ペンチアハリカルブイアプロピル2:TPN 1:フルチノール2:メニピリム 銅剤及び混合剤(参考資料P.20)参照 1:イキサチオン 1:ペルメトリン	800～1,000倍 800～1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 5回以内	劇 普	△ ○※ ○※	○ 植穴処理土壌混和 ○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)			
ワリハムシ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は、7月下旬頃から羽化し、8月上旬が最盛期となる。</li> <li>○ 幼虫による被害は、7月上旬から認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼植物期間中は、成虫の飛来回避のため被覆する。</li> <li>○ 成虫の産卵防止のため、株元に川砂を敷く。</li> <li>○ シルバーホリでマルチする。</li> </ul>	成虫発生初期	1B 4A		マジン乳剤 モスピラン顆粒水和剤	1:マジン 1:アセタミプロト	1,000倍 2,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 2回以内	普 劇	△ △				
ハモグリバエ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後、多発することがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 苗からの特込を防ぐ。</li> <li>○ 被害残渣は、発生源となるので適切に処分する。</li> <li>○ 被害の多かった圃場では収穫終了後、20日以上植物がないよう管理するか、被覆資材で土壌表面を覆うと、蛹数を減少させることができる。</li> </ul>	発生初期	17		トリガード液剤	1:シロロジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ ICR剤(注)(P.15)参照			

薬剤防除法													
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ア ブ ラ ム シ 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特徴) ○ ワタアブラムシが主体である。</li> <li>○ 防除上のポイント (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部の地域で認められている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。</li> </ul>	発 生 前	4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
コ ナ ジ ラ ミ 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。</li> <li>○ 上位葉には、成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。</li> <li>○ 防除上のポイント (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。</li> <li>○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。</li> </ul>	発 生 前	4A 4A 4A		アドマイヤー1粒剤 スタークル粒剤 アルバリン粒剤	1:バダクロアクト 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン	2g/株 2g/株 2g/株	定植時 定植時 定植時	1回 1回 1回	普 普 普	△ △ △	○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和
ハ ダ ニ 類		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。</li> <li>○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し適切に実施する。</li> </ul>	発 生 初 期	21A 23 4A 4A		サンマイトフロアブル モベントフロアブル スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	1:ピダベン 1:スピロテトラマト 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン	1,000~1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普 普	× ○ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)
ア ザ ミ ウ マ 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 露地で果菜類が栽培されている地帯や、圃場周辺に雑草繁茂地がある場所で、発生が多く見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 寄生苗を植え付けない。</li> <li>○ 早期発見に努め、低密度時に薬剤散布を行なう。</li> </ul>	発 生 初 期	20B 23		カネマイトフロアブル モベントフロアブル	1:アセキノシル 1:スピロテトラマト	1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで	1回 3回以内	普 普	△ ○	○ 葉害等(注)(P.299)
			発 生 初 期	6		アブアーム乳剤	1:エマクタン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
苗立枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 苗が軟弱となると多発する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> </ul>	床土消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
つる割病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保水力の乏しい砂地や乾燥地で発生しやすい。</li> <li>○ ユウガオ台木は、生育初期に炭疽病が発生することがあるので注意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 耐病性台木を利用する。</li> </ul>	床土消毒 本畑消毒			土壌病害虫防除法の項(P.307)参照							
つる枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ウリ科作物の中でも本病による被害が大き。</li> <li>○ 発病前に重点をおく。(防除上のポイント)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 草勢を保つために肥切れさせない。</li> <li>○ 敷わらを早めに行う。</li> </ul>	発病前 発病初期	M5 M3 2 M7 M7 1 10+1 10+2 19 3 11+M5 11 11+7 M7+11 7		<ul style="list-style-type: none"> <li>ダコニール1000</li> <li>ベニコゼブ水和剤</li> <li>ロプラール水和剤</li> <li>スミレックス水和剤</li> <li>ベルグート水和剤</li> <li>ベルグートフロアブル</li> <li>ベンレート水和剤</li> <li>ニマイバー水和剤</li> <li>スミレンド水和剤</li> <li>ポリオキシシアル水溶剤</li> <li>スコア顆粒水和剤</li> <li>トリアミン水和剤</li> <li>アミスターオーブテイフロアブル</li> <li>ストロブローフロアブル</li> <li>シグナムWDG</li> <li>ファンネル顆粒水和剤</li> <li>アフエツフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:TPN</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:アゾクソン</li> <li>1:プロジソン</li> <li>1:ミノカタジンアルベシル酸塩</li> <li>1:ピノカタジンアルベシル酸塩</li> <li>1:ペノシル</li> <li>1:エトフェンカルブ2:ペノシル</li> <li>1:シコトフェンカルブ2:アゾジソン</li> <li>1:ポリオキシシアル水溶剤</li> <li>1:シコトフェンカルブ</li> <li>1:トリアルミン</li> <li>1:アノキシン2:TPN</li> <li>1:ラネキシルM</li> <li>1:ビラトロロビン2:ボスカド</li> <li>1:ミノカタジンアルベシル酸塩</li> <li>2:ペリロニンカルブ</li> <li>1:ペンチオキサート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>700~1,000倍</li> <li>400~600倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000~3,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,500~2,000倍</li> <li>1,000~2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>3,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000~3,000倍</li> <li>1,500~2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5回以内</li> <li>7回以内</li> <li>4回以内</li> <li>5回以内</li> <li>4回以内</li> <li>4回以内</li> <li>5回以内</li> <li>5回以内</li> <li>5回以内</li> <li>3回以内</li> <li>4回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>△※</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△※</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ かぶれ注意</li> </ul>
褐色腐敗病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 苗床や本圃で発生し、露地栽培では、5~8月の天候不順時に発生しやすい。葉・茎・果実が侵されるが、つるの先端部が特に発病しやすい。</li> <li>○ 降雨が頻繁にある時は、散布間隔を短縮する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 日当たり・通風・排水のよい畑に栽培し、湿地排水不良畑では排水を良くする。</li> <li>○ 密植を避ける。</li> <li>○ 敷わらを十分に行い、土からの病原菌のはね上がりを防ぐ。</li> <li>○ 残渣は深く埋める。</li> </ul>	発病前 発病初期	21 21+M5 40 M3+4 27+M3 27+40 40+M1 40+M5 40+M3 40+M3 11+7		<ul style="list-style-type: none"> <li>ランマンフロアブル</li> <li>ドシヤスフロアブル</li> <li>レーパスフロアブル</li> <li>リドミルゴールドMZ</li> <li>カーゼートPZ水和剤</li> <li>ベトリアイター顆粒水和剤</li> <li>フェステイバルC水和剤</li> <li>フロボーズ顆粒水和剤</li> <li>カンパネラ水和剤</li> <li>ベネセット水和剤</li> <li>シグナムWDG</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:シアグアミノ</li> <li>1:シアグアミノ2:TPN</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:マンゼブ2:メテキシルM</li> <li>1:シキキエニル2:マンゼブ</li> <li>1:シキキエニル2:ペンチオキサート</li> <li>1:シコトフェンカルブ</li> <li>1:シコトフェンカルブ2:塩基性塩化銅</li> <li>1:ペンチオキサート</li> <li>1:ペンチオキサート2:マンゼブ</li> <li>1:ペンチオキサート2:マンゼブ</li> <li>1:ピラトロロビン2:ボスカド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000~2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000~1,500倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,500倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4回以内</li> <li>4回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>5回以内</li> <li>5回以内</li> <li>5回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△※</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>△※</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> </ul>



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワタアブラムシが主体である。</li> <li>(防除上のポイント) 葉裏及び生長点に寄生が多いので、この部分に丁寧に散布する。</li> <li>ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部の地域で認められている。</li> </ul>		発生前	28+4A 23 28 28 4A+28 4A 4A		ミネクトデメトエオ粒剤 モベントフロアブル ベリマーグSC ヨーバルフロアブル アベイル粒剤 アドマイヤー1粒剤 アドマイヤー1粒剤	1:シアントリアゾール2:アトキサム 1:スピロテクト 1:シアントリアゾール 1:テトラニリアゾール 1:アセタミプリト2:シアントリアゾール 1:ピダクロプロト 1:イミダクロプロト	2g/株 500倍 25ml/400株 200倍 2g/株 5g/株(但し、3kg/10aまで) 1~5g/株(但し、3kg/10aまで)	鉢上げ時~育苗期後半 育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普 普	△ ○ △ △ ○ △ △	<ul style="list-style-type: none"> <li>株元散布。</li> <li>株元灌注(25~50ml/株)葉害等(注)(P.299)</li> <li>400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.300)</li> <li>灌注(25ml/株)</li> <li>株元散布</li> <li>株元土壌混和</li> <li>植穴土壌混和</li> </ul>
タネバエ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴) タネバエは、鶏糞等の有機物を施用すると多発することがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>有機質肥料を多用すると、タネバエが集まりやすいため、施用後は覆土を厚くする。</li> </ul>	発生初期	4A 4C 21A 21A 21A 9B 9B 29		モスピラン顆粒水溶液 トランスフロアムフロアブル サンマイトフロアブル ハチハチ乳剤 ハチハチフロアブル チェス顆粒水和剤 コルト顆粒水和剤 ウララDF くん煙剤(P.316)参照	1:アセタミプリト 1:スルホキサフロル 1:ピリダベン 1:トルフェンビト 1:トルフェンビト 1:ピネトジン 1:ピリアルキサゾン 1:プロエカト	2,000~4,000倍 2,000倍 1,000~1,500倍 1,000~2,000倍 1,000~2,000倍 5,000倍 4,000倍 2,000~4,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 4回以内 3回以内 2回以内	劇 普 劇 劇 劇 普 普 普	△ ○ × × × ○ △ ○	<ul style="list-style-type: none"> <li>かふれ注意、刺激(眼)</li> <li>刺激(眼)</li> </ul>
ネキリムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴) 主要種は、カブラヤガ・タマヤガである。</li> <li>前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。</li> <li>被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺する。</li> </ul>	発生前	1B		ダイアジン粒剤3 カルボス微粒剤F	1:ダイアジン 1:イキサチオン	5~8kg/10a 3g/株	は種時又は 植付時 定植時	2回以内 1回	普 劇	× △	<ul style="list-style-type: none"> <li>葉害等(注)(P.299) 使用方法は土壌混和</li> <li>植穴処理土壌混和</li> </ul>

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期 上げ時～育苗期 後半 育苗期後半～定植 当日 育苗期後半～定植 当日 育苗期後半～定植 当日 育苗期後半～定植 当日	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類	○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。	○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	28+4A 23 28 28 4A+28		ミネクトデユオ粒剤 モベントフロアブル ベリママーSC ヨーバルフロアブル アベイル粒剤	1:シアントリアプロール2:シアトキヤム 1:ネトロリアト 1:シアントリアプロール 1:ネトロリアト 1:アセチミプロト2:シアントリアプロール	2g/株 500倍 25ml/400株 200倍 2g/株	1回 1回 1回 1回 1回	1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普	△ ○ △ △ ○	○ 株元散布 ○ 株元灌水(25～50ml/株)葉害等(注)(P.299) ○ 400株当り10～200(1株当り25～50ml)、混用(注)(P.300) ○ 灌水(25ml/株) ○ IGR剤(注)(P.15)参照
ウリハムシ	(発生の特徴) ○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は7月下旬頃から羽化し、8月上旬が最盛期である。	○ 幼植物期間中は、成虫飛来回避のため被覆を行う。 ○ 成虫の産卵防止のため、株元に川砂を敷く。 ○ シルバーボリでマルチする。	発生前 発初期	1B 9B 23 6 30 5		ダイアジン粒剤3 コルト顆粒水和剤 モベントフロアブル アファーム乳剤 グレースシア乳剤 ディアナSC	1:ダイアジン 1:ピリラルキナゾリン 1:ネトロリアト 1:エマクサチ安息香酸塩 1:フルキサミド 1:ネトロリアト	1,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500倍	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普	× △ ○ △※ △ △	○ 葉害等(注)(P.299) 使用方法は土壌混和
ミナミキイロアザミウマ	(防除上のポイント) ○ 同一薬剤の運用を避ける。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の雌脱、移動も考慮し適切に実施する。 ○ 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。 ○ 土壌の乾燥を図る。 ○ 未熟堆肥の施用を避ける。	発生前 発初期	25A 25A 6 20B 20D 26B+21A 30 25B 10B 1B		スターマイトフロアブル ダニサラバフロアブル アグリメック カネマイトフロアブル マイコーネフロアブル ダブルフェースフロアブル グレースシア乳剤 ダニオテーフロアブル ダニロングフロアブル バロックフロアブル くん煙剤(P.316)参照 ダイアジン粒剤3	1:シエビラフェン 1:ジフルトフェン 1:アバメクチン 1:アセキノシル 1:ピフェナゼート 1:ピフルアミド2:フェビロキソメト 1:フルキサミド 1:アシナピル 1:ピフルアミド 1:エトキサゾール 1:ダイアジン	2,000倍 1,000倍 500～1,000倍 1,000～1,500倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 6～9kg/10a	1回 2回以内 3回以内 1回 1回 1回 1回 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内	普 普 劇 普 普 普 普 普 普 普	△ ○ ○ △ △ △ △ △ ○ △ △ ×	○ 葉害等(注)(P.299) 使用方法は土壌混和	
ゲラ			発生前	1B		ダイアジン粒剤3	1:ダイアジン	6～9kg/10a	2回以内	2回以内	普	×	○ 葉害等(注)(P.299) 使用方法は土壌混和

障害名 発生原因 急性萎ちょう症	障害名 発生原因 急性萎ちょう症	対策	症状	本障害と類似した病気の症状	
				障害名	症状
根の吸水力の衰え、弱日照などによる着果負担により発生	着果し始めた頃より、突然萎れるようになり、葉が緑のままやがて枯死する。 接木部分がわずかに変色していることがある。エウガオ台木に発生が見られる。	○ 堆肥を施し、土づくりを行い、順調に成育させる。 ○ かまぼこや台木を使用する。	スイカ又はエウガオの維管束が褐変。	本障害	急性萎ちょう症

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法				水産 人 毒 (注)	注意事項
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名		
ウイルス病	<p>TomMVによるウイルス病 (発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 土壌伝染、種子伝染するウイルス病である。</li> <li>○ 強い汁液伝染力を持つため、発病株を管理した手、はさみ等を通しての感染も高率で起こる。</li> <li>○ クロルピクリンは効果がない。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本病を対象とした種子消毒済みの種子を利用する。</li> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 連作する場合は、抵抗性品種を利用する。</li> <li>○ 発病株は早期に抜き取る。</li> <li>○ 支柱等の資材を更新する。</li> </ul>						
斑点細菌病	<p>CMVによるウイルス病 (発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。</li> <li>○ 露地トマトに発生が多い。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ アブラムシ類の飛来防止と防除する。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育苗期間中は、寒冷紗で被覆する。</li> <li>○ シルバーポリやシルバーナーブなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。</li> <li>○ 圃場周辺を除草する。</li> </ul> <p>アブラムシ類防除の項(P.188)参照</p>						
炭疽病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ToMVとPVXによる重複感染が原因である。</li> <li>○ PVX単独感染では、軽いモザイク症状にとどまる。</li> <li>○ PVXの伝染方法は、接触感染だけである。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ばれいしよとの混作又は、近接地での栽培は避ける。</li> <li>○ 作業前後に手をよく洗う。</li> </ul> <p>ウイルス病の項(P.322)参照</p>						
黄化葉巻病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 病原ウイルスは、TYLCLVである。</li> <li>○ 虫媒(タバココナジラミ、バイオイタイブB及びQ)伝染するウイルス病である。</li> <li>○ タバココナジラミ、バイオイタイブB及びQの防除を徹底する。</li> <li>○ 本果は、イソエール系とマイルド系が確認されている。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 防虫ネット(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))等で、育苗圃や本圃への媒介虫の侵入を防止する。</li> <li>○ 施設内外の除草に努め、近くに媒介虫が寄生しやすい植物を置かない。</li> <li>○ 発病株は早急に除去し、適切に処分する。</li> <li>○ ウイルスの系統に応じた抵抗性品種を利用する。</li> </ul> <p>トマト黄化葉巻病の項(P.311)参照</p>						
青枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 病原ウイルスは、TbLCJVである。</li> <li>○ 虫媒(タバココナジラミの在来系統)伝染するウイルス病である。</li> </ul>	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 黄化葉巻病の防除法の項参照(上記)。</li> </ul> <p>コナジラミ類、タバココナジラミ防除の項(P.189、190)参照</p>						
青枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 5年以上の輪作をする。</li> <li>○ 連作を避け、発病圃場は3年以上水田化する。</li> <li>○ 発病株は早期に除去する。</li> <li>○ 移植後の植傷みや、管理作業時に根に傷をつけないようにする。</li> <li>○ 排水を図る。</li> <li>○ 敷きワラやマルチ等により、地温の上昇を抑制する。</li> <li>○ 石灰を多量に施用する(200kg/10a)。</li> <li>○ ハサミ等作業器具の消毒および手の洗浄を行いながら作業する。</li> <li>○ 抵抗性台木を利用する。</li> </ul>	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 5年以上の輪作をする。</li> <li>○ 連作を避け、発病圃場は3年以上水田化する。</li> <li>○ 発病株は早期に除去する。</li> <li>○ 移植後の植傷みや、管理作業時に根に傷をつけないようにする。</li> <li>○ 排水を図る。</li> <li>○ 敷きワラやマルチ等により、地温の上昇を抑制する。</li> <li>○ 石灰を多量に施用する(200kg/10a)。</li> <li>○ ハサミ等作業器具の消毒および手の洗浄を行いながら作業する。</li> <li>○ 抵抗性台木を利用する。</li> </ul>						
斑点細菌病	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育苗期から予防する。</li> <li>○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。</li> </ul>	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 窒素肥料の多用を避ける。</li> <li>○ 被害茎葉は、圃場外へ持ち出す。</li> <li>○ 排水・換気等を図り、多湿を避ける。</li> <li>○ ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防止する。</li> </ul>	<p>発病前</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>24+M1 カスミンボルドー</li> <li>24+M1 カッパーシン水和剤</li> </ul> <p>銅剤及び混合剤(P.317)参照</p>	<p>1:カスカマイン2:塩基性塩化銅</p> <p>1:カスカマイン2:塩基性塩化銅</p>	<p>1,000倍 収穫前日まで</p> <p>1,000倍 収穫前日まで</p>	<p>5回以内</p> <p>5回以内</p>	<p>普</p> <p>普</p>	<p>△</p> <p>△</p>

		薬剤防除法																		
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産 人 毒 (注)	注意事項									
												時期								
かい い よ う 病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ かいよう病菌は、被害茎葉とともに、土壤中に入ってから3年以上生存し伝染源となる。</li> <li>○ 摘芽・摘葉・摘心・誘引などの農作業により、次々に病原細菌が伝搬される。</li> <li>○ 育苗期から予防する。</li> <li>○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。</li> <li>○ 芽かき直後に薬剤散布を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 窒素肥料の多用を避ける。</li> <li>○ 発病株は、早期に除去する。</li> <li>○ 汁液伝染を避けるため、芽かき時期を遅らさない。</li> <li>○ 排水・換気等を図り、多湿を避ける。</li> <li>○ ハサミ等作業器具の消毒および手の洗浄を行いつながら作業する。</li> <li>○ 資材も伝染源となるので、よく洗浄・消毒して使用する。</li> </ul>			カスミンポルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普										
												発病前)	24+M1	24+M1	カッパパーシン水和剤	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普
															銅剤及び混合剤(P.317)参照					
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 軟腐病菌は灌水や、降雨による土壌のはね上がりで伝染する。</li> <li>○ 茎は、ずい部が腐敗消失し、やがて枯死する。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。</li> <li>○ 芽かき直後に薬剤散布を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。</li> <li>○ 窒素肥料の多用を避ける。</li> <li>○ ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防ぐ。</li> </ul>			カスミンポルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普										
												発病前)	24+M1	24+M1	カッパパーシン水和剤	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普
															銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照					
病苗立枯	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 幼苗の段階で罹病すると、倒伏することがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 無病苗を定植する。</li> </ul>			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照															
												は種後～								
白絹病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 高温多湿条件で多発する。</li> <li>○ 前作物の残渣や、未熟たい肥のすき込みは、発病を助長する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避け、床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 被害株、病菌のついた敷わら等は菌核を落とさないように、圃場外へ除去する。</li> <li>○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので土中深く埋め込む。</li> <li>○ 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を実施する。</li> <li>○ 植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正する。</li> <li>○ 無病苗を定植する。</li> </ul>			カスミンポルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普										
萎凋病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 比較的高温期に発生する。</li> <li>○ 葉が黄化し、茎の維管束の褐変は、根から発病した葉の位置付近まで比較的広範囲に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 5年以上の輪作をする。</li> <li>○ 排水をよくする。</li> <li>○ 石灰を多量施用する。(200kg/10a以上)</li> <li>○ 有機物資材を施用する。</li> <li>○ 敷きわらを行う等、地温の上昇を抑制する。</li> <li>○ 抵抗性台木に接木する。</li> </ul>			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 灌水処理(150～300ml/株)</li> </ul>									
												発病前)	1	1	ベンレート水和剤	1:ベンパル	1,000倍	定植前～定植1ヶ月後	2回以内	普

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	FRACコード				使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産人毒(注)	注意事項
			時期	IRACコード	FRACコード	FRACコード							
根腐萎凋病	(発生の特徴) ○ 夏秋栽培でも梅雨時に発病することがある。 ○ 排水をよくする。 ○ 有機物を施用する。 ○ 抵抗性苗木に接木する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 5年以上の輪作を行う。 ○ 排水をよくする。 ○ 有機物を施用する。 ○ 抵抗性苗木に接木する。	○ 石灰を多量施用する。(200kg/10a以上)				土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
			床土、本圃の土壌消毒	M3	M3	M3							
疫病	(発生の特徴) ○ ハウスでは、低温多湿時、露地では梅雨時期に発病が多い。 ○ 多発地地で発生しやすい。 ○ 梅雨入り後や、曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやすい、莖葉過多・多湿条件は発病を著しく助長する。  (防除上のポイント) ○ 苗床で幼苗に発生することがあるため、苗床での薬剤散布を十分に行う。 ○ 発病前から予防散布を定期的に(特に発生しやすい時期は雨の合間を利用して)薬剤散布を行う。 ○ 初発確認後は、散布間隔を短縮、集中的に薬剤散布を行う。	○ 露地栽培ではマルチをし、雨で土粒が跳ね上がらないようにする。できれば雨よけ栽培にする。 ○ 排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○ ハウスでは夜間、莖葉に水滴がつかないように管理に努める。 ○ 被害莖葉は、第二次伝染源となるので除去する。 ○ 被害残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									○ かぶれ注意	
			床土、本圃の土壌消毒	M3	M3	M3							M5
菌核病	(発生の特徴) ○ ハウスでは無加温栽培で発生が多い。 ○ 発病は低温(18~20℃)、多湿条件で見られる。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。	銅剤及び混合剤(P.317)参照										○ 葉害等(注)(P.299)
			床土、本圃の土壌消毒	1	1	10+1							

トマト

トマト

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
葉かび病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>施設での発病が激しい。</li> <li>高温期に病勢は衰える。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>感染から発病まで2週間以上かかることもあり、発病後からの防除では効果が上がりにくい。感染初期から防除を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>抵抗性品種を栽培する(抵抗性品種を侵す葉かび病菌の新レーズが確認されているので注意する)。</li> <li>密植を避け、草勢を落とさないように管理する。</li> <li>ハウスでは排水をよくし、換気に努める。</li> <li>過度の灌水は避ける。</li> <li>多発した葉は、伝染源となるので除去する。</li> <li>資材を消毒又は更新する。</li> </ul>	発病前～発病初期	M3	ベンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	800倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○かぶれ注意	
				M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	800倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△		
				M7	ベルコート水和剤	1:ミノキサジナルヘシル酸塩	3,000～6,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				M7	ベルコートフロアブル	1:ミノキサジナルヘシル酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				M7+19	ダイアクトDF	1:ミノキサジナルヘシル酸塩 2:ポリオキシソルホン複合体	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				10+1	ゲッター水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:チオアネートメチル	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○		
				3	トリフミン乳剤	1:トリフルシゾール	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	トリフミン水和剤	1:トリフルシゾール	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	フラー水和剤	1:シクロブタニル	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				3	フラー水和剤	1:シクロブタニル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ジフェコナゾール	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○葉害等(注)(P.299)	
				M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:アミスターオプティフロアブル ファンベル顆粒水和剤	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				7	カンタストライフロアブル	1:ボスオクト	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				7	アフェットフロアブル	1:ペンチオゼブ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				7	ケンジャフロアブル	1:イフエダシ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				7	ネクスターフロアブル	1:イピラゾラム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				7	ハレード20フロアブル	1:ピラゾフルト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
11+7	シグナムWDG	1:ピラゾフルト 1:ピラゾフルト2:ボスオクト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○葉害等(注)(P.299)					
7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオゼブ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
19	デュアルサイド水和剤	1:プロレシグリエルモル/脂肪酸エステル2:ポリオキシソルホン複合体	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
		銅剤及び混合剤(P.317)、くん煙剤(P.316)、微生物農薬(参考資料P.20)参照											
すすかび病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>類似する葉かび病との識別には、俵鏡による病原菌観察が必要である。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>気温25℃では、感染から発病までに3週間程度を要するため、発病が進行してからの防除では効果が劣る。感染初期から防除を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>密植を避け、排水をよくして多湿を防ぐ。</li> <li>発病葉、被害残渣は圃場外に持ち出し、適切に処分する。</li> </ul>	発病前～発病初期	M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	○かぶれ注意	
				M7	ベルコートフロアブル	1:ミノキサジナルヘシル酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				M3	ベンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				3	トリフミン水和剤	1:トリフルシゾール	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	トリフミン乳剤	1:トリフルシゾール	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピラゾフルト 1:アミスターオプティフロアブル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:アミスターオプティフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○葉害等(注)(P.299)	
				M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ミノキサジナルヘシル酸塩 2:ピラゾフルト	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオゼブ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
10+1	ニマイバー水和剤	1:シエトフェンカルブ2:ベノミル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		銅剤及び混合剤(P.317)参照											



病害虫名		病害虫の特徵 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法																
						時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項						
灰色かび病	○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生する。 ○ 低温多湿で地温が上がらない場合に多い。 (防除上のポイント) ○ 発病前から予防散布を行う。 ○ 発病後は7～10日間隔で散布する。 ○ ペンズイミダゾール系薬剤は、果内で広く耐性菌が確認されているので使用を避ける。	○ 花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。	発病前 発病初期	2	19	ロプラール水和剤	1:イプロazon	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	○	○	○	○	○	○	○					
																		1:ボリオキシンAL水和剤	1:ボリオキシン複合体	1:ボリオキシンAL水溶剤	1:ミルタジニアルヘシル酸塩	1:ミルタジニアルヘシル酸塩
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 施設栽培で発生が多い。 ○ 乾燥条件で多発する。 ○ 発病適温は、20～25℃である。	○ 通風をよくする。 ○ 密植を避ける。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ 樹勢低下を避ける。 ○ 被害残渣を除去する。	発病前 発病初期	3	3	トリファミン乳剤	1:トリファミン	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	○	○	○	○	○	○	○					
																		1:トリファミン水和剤	1:ミルタジニアルヘシル酸塩	1:ミルタジニアルヘシル酸塩	1:ミルタジニアルヘシル酸塩	2:ピリオフェン
輪紋病	(発生の特徴) ○ 乾燥条件で多発する。 (防除上のポイント) ○ 予防散布の効果が大きい。	○ 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。	発病前 発病初期	M3	M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	800倍	収穫前日まで	2回以内	○	○	○	○	○	○	○					
																		1:マンゼブ	1:マンゼブ	1:TPN	1:イピラサマ	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産(注)	人毒	注意事項
ネコウチ		○ 有機質を十分施用する。 ○ 連作を避ける。 ○ 床土は水田土壌を使用する。	床土、本畑 初発期	1B		ガードホープ液剤	1:ホチアゼート	4,000倍 20/㎡灌水	収穫前日まで	1回	○		○ 使用方法(注)(P.300)
アラビヤシシトマ	(発生の特徴) ○ モモアカアブラムシが主体である。	○ 無寄生病を定植する(隔離され、雑草等もない条件下で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。	発生前	4A 28+4A 28 4A+28 28		ダントツ粒剤 ミネクトデュオ粒剤 ベリマークSC アベイル粒剤 ヨーバルフロアブル プリロツツ粒剤オメガ モスピラン粒剤 アドマイヤー1粒剤 ベスタガード粒剤 ダントツ粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤	1:クロチアニジン 1:シアンチアニジン 1:シアンチアニジン 1:アセチルピリノキサミン 1:シアンチアニジン 1:アセチルピリノキサミン 1:シタクロアピド 1:ニペンヒラム 1:クロチアニジン 1:シノラフラン 1:シノラフラン 1:クロチアニジン	1g/株 2g/株 25ml/400株 2g/株 200倍 2g/株 1g/株 1~2g/株 1~2g/株 1~2g/株 1g/株 1g/株 1~2g/株	育苗期 畝上げ時~育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半 定植時 定植時 定植時 定植時 定植時 定植時 定植時 定植後 但し収穫前日まで	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 3回以内	△ △ △ ○ △ ○ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ 株元処理 ○ 株元散布 ○ 400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.300) ○ 灌水(25ml/株) ○ 株元散布、同時施用(注)(P.300) ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴処理土壌混和 ○ 植穴処理土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布	
アブラムシ類			発生初期	4A 4A 4A 4A 4A 4A 9B 29 9B 28 4C		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アドマイヤー水和剤 アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 ハリアート顆粒水和剤 チェス顆粒水和剤 ウアラDF コルト顆粒水和剤 ペネブアOD トランスフオームフロアブル くん煙剤(P.316)参照 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:ジノフラン 1:ジノフラン 1:シタクロアピド 1:シタクロアピド 1:アセチルピリノキサミン 1:クロチアニジン 1:チアクロアピド 1:ピオロン 1:アロニカト 1:ベリルキルチン 1:シアンチアニジン 1:スルホキサフロ	1g/株 1g/株 2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 2,000~4,000倍 5,000倍 2,000~4,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍	生育期 但し、 収穫前日まで 生育期 但し、 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布	



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類			発生初期	6 6 5 5 23 23		コロマイト乳剤 アニキ乳剤 デオナSC ダブルシユーターSE クリアザールフロアブル モベントフロアブル	1:シムヘ、メカチン 1:レピ、メカチン 1:スピ、ネトラム 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピ ナド 1:スピ、ロメゾレン 1:スピ、ロトアマト	1,500倍 1,000~2,000倍 2,500倍 1,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普	△※ △※ △ △ △ ○	○葉害等(注)(P.299) ○マルハナバチ、カブリダニへの 使用は避ける。 葉害等(注)(P.299) ○葉害等(注)(P.299) ○葉害等(注)(P.299) ○タバコナジラミには効果低い
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ・タマ ヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産 卵、そこで生育した幼虫が加 害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草 し、前作も早急に処分す る。 ○ 被害株の発生が見られた ら、その周辺の土壌中に潜 んでいる幼虫を採し捕殺す る。	発生初期	9B un 28 4C 30 34	M10	コルト顆粒水和剤 モレスタン水和剤 ベネビアOD トランスフォームフロアブル グレースシア乳剤 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30) ファイネセーフフロアブル ガードベイトA	1:ピリアルキナゾン 1:ネキサリン系 1:シアントラニプロール 1:ズルホキサメタト 1:フルキサメタト 1:プロホキソ	4,000倍 1,500~2,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 劇	○※ ○※	○登録はタバコナジラミ類 ○株元散布 合ピレ(注)(P.15)
蛾実吸	(発生の特徴) ○ 森林等に囲まれた、中山間 地域で発生が多い。	○ 施設開口部に防虫ネット等 (5mm目以下)を張り、侵入 防止を図る。											
カナメツムリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動。 ○ 水分の多い、柔らかい部分を 好んで食害。	○ 圃場周辺の雑草や、前作 の残渣を早めに処分。	生初期	un		スラゴ メタアルデヒド剤(参考資料P.29)参照	1:磷酸第二鉄	1~5g/m <sup>2</sup>	発生時	—	普	○	○発生あるいは加害を受けた場 所又は株元に配置

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項			
														桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。		
ハ ス モ ン ヨ ト ワ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。  (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や、分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫も、見つけしだい捕殺する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等(4mm目以下)での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。	15		ノーモルト乳剤	1:フルヘンシロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				15		アタプロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				15		マツチ乳剤	1:フルフェスロン	3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				15		カスケード乳剤	1:フルフェスロン	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				18		ファルコンフロアブル	1:ホキシフェノジド*	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				6		アニキ乳剤	1:ヒレ*クチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				5		ディアナSC	1:ズ*ネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルヘンシロン*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				28		ヨーバルフロアブル	1:チトラエリテロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照							
un		プレオフロアブル	1:ペリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照							
30		グレースシア乳剤	1:フルキサミダシ*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照							
						BT剤(参考資料P.15)参照										
オ オ タ バ コ ガ	(発生の特徴) ○ 夏～秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。  (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等(4mm目以下)での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。	15		カスケード乳剤	1:フルフェスロン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				15		アタプロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				15		マツチ乳剤	1:フルフェスロン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				18		マトリックフロアブル	1:フロマフェノジド*	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				18		ファルコンフロアブル	1:ホキシフェノジド*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				6		アフアーム乳剤	1:エマクチン*安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				6		アニキ乳剤	1:ヒレ*クチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ズ*ネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				5		ディアナSC	1:ズ*ネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
				5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:ズ*ネトラム*	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○ IGR剤(注)(P.15)参照			
										フェニックス顆粒水和剤						
				28		プレバノンフロアブル5	1:フルヘンシロン*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普					
				28		ベネビアOD	1:クロラトリエリテロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普					
				28		ヨーバルフロアブル	1:シアントラエリテロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普					
				28		コテツフロアブル	1:チトラエリテロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普					
				13		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普					
				22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普					
22A		プレオフロアブル	1:ペリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普									
un		グレースシア乳剤	1:フルキサミダシ*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普									
30		BT剤(参考資料P.15)参照														
						くん煙剤(P.316)参照										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産 人毒	注意事項		
													薬剤防除法	
トマト キバガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1年に複数回の世代が発生し、繁殖力が高い。</li> <li>○ 卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。</li> <li>○ 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。</li> <li>○ 土中や葉の表面で蛹化。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。</li> <li>○ 被害葉や被害果は圃場内外に持ち出すとともに、野外に放置せず速やかに適切に処分。</li> </ul>	発生前	28		ベリマールSC	1:シアントリエリアプロール	25ml/400株	育苗後半～	1回	普	○ 400株当り10～200(1株当り25～50ml)、混用(注)(P.300) ○ 株元散布、同時施用(注)(P.300)		
			発生初期	5		デュオナSC	1:ピネトラム 1:脂肪酸リセリト(虫)2:スピノサド	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	普		
ハモグリバエ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 葉裏に十分に散布する。</li> <li>(留意点)</li> <li>○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後多発することがある。</li> <li>○ 被害残渣は発生源となるの</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 苗からの持ち込みを防ぐ。</li> <li>○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.6mm目以下が望ましい))</li> <li>○ 被害残渣は発生源となるの</li> </ul>	発生前	4A 4A 28+4A		アルバール粒剤 スタークル粒剤 ミネクトデュオ粒剤	1:シノプアラン 1:シノプアラン 1:シアントリエリアプロール2:チアト	1～2g/株 1～2g/株 2g/株	育苗期 育苗期 斜上げ時～育苗期後半	1回 1回 1回	普 普 普	普 普 普	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 50ml/株灌水。展着剤使用しない ○ 400株当り10～200(1株当り25～50ml)、混用(注)(P.300) ○ 灌水(25ml/株)	
			発生初期	28		ベリマールSC	1:シアントリエリアプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	普		
			発生前	28		ヨーバルフロアブル	1:チトリエリアプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	普		
			発生初期	4A 4A 4A 4A		アルバール粒剤 スタークル粒剤 アクタラ粒剤5 ダント粒剤	1:シノプアラン 1:シノプアラン 1:チトリエリアプロール 1:チトリエリアプロール	1～2g/株 1～2g/株 1～2g/株 1～2g/株	定植時 定植時 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	普 普 普 普	○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴処理 ○ 植穴処理	
			発生初期	17		トリガード液剤	1:シロロジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	普	普	○ ICR剤(注)(P.15)参照 ○ ICR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	15		マッチ乳剤	1:ルアエロン	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	普	普	
			発生初期	4A		ダント水溶剤	1:ロチニジン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	普	普	
			発生初期	6		アフアーム乳剤	1:エマカチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	普	普	
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ピネトラム 1:スピノサド	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	普	普	
			発生初期	5		デュオナSC	1:ピネトラム 1:脂肪酸リセリト(虫)2:スピノサド	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	普	普	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	5		デュオナSC	1:ピネトラム 1:脂肪酸リセリト(虫)2:スピノサド	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	普	普	
			発生初期	28		プレバノンフロアブル5	1:クロトリエリアプロール	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	普	普	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	28		ベネビアOD	1:シアントリエリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	普	普	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	28		ヨーバルフロアブル	1:チトリエリアプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	普	普	
			発生初期	30 4A+28		グリーンシア乳剤 アペイル粒剤	1:フルキサミド 1:チトリエリアプロール	2,000倍 2g/株	収穫前日まで 育苗後半～定植当日	2回以内 1回	普 普	普 普	普 普	
発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルキサミド	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	普	普	○ ICR剤(注)(P.15)参照			

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ハダニ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 養液栽培などハウス内が乾燥する条件で発生が多い。</li> <li>○ 密度が高くなると葉が黄化する。</li> <li>○ 近接する発生源の影響が大さい。</li> <li>○ 極少ない寄生で葉枯を生じする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。</li> <li>○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し、適切に実施する。</li> </ul>	発生初期	13 20D 5		コテツフロアブル マイトコーネフロアブル ダブルシユーターSE  気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:カルフエピル 1:ピフェナセト 1:脂肪酸ジセト(虫)2:スピノサド	2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 1回 2回以内	劇 普 普	△※ △ △	○登録はナミハダニ。 ○葉害等(注)(P.299)
トマトサビダニ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 養液栽培での発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ナス科雑草にも寄生するので、ハウス内や周辺を除草。</li> </ul>	発生初期	un 15 15	M10  19	モレスタン水和剤 マツチ乳剤 カスケード乳剤 デュアルサイド水和剤  コロマイト乳剤 アプアーム乳剤 アニキ乳剤 アグリメック コテツフロアブル ダニトロンフロアブル アブロードエースフロアブル ファイブセーフフロアブル トランスフォーラムフロアブル グレーシア乳剤 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:キキサリン系 1:ルフェスロン 1:フルフェキサソ 1:プロピレシクリコエモル脂肪酸エステル2:ポリオキシン複合体 1:ミルベキチン 1:エマメチン安息香酸塩 1:レピメチン 1:アハメチン 1:カルフエピル 1:フェビロキシメト  1:フェビロキシメト2:プロフェンフェジン 1:プロホキ 1:ホルボキサフル 1:フルキサメト 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1,500~2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍  1,500倍 2,000倍 2,000倍 500~1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍  1,000~4,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで  収穫前日まで 収穫前日まで 収穫開始14日前まで 収穫前日まで  収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 4回以内 4回以内 3回以内  2回以内 5回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内  3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普  普 普 普 劇 劇 普 普  普 劇 普 普	△ △ △ △  △※ △※ △※ △※ △※ △※ △※  × × × × △	○葉害等(注)(P.299) ○IGRR剤(注)(P.15)参照 ○IGRR剤(注)(P.15)参照
アザミウマ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ トマト果実では、開花時に子房に産卵するため、産卵痕の周りが白く色が抜け、白ぶくれ症になる。</li> <li>○ 防除上のポイント ファイブセーフフロアブルはヒラスハナアザミウマに対して効果が低い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草もない条件で育苗する)。</li> <li>○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。</li> </ul>	発生前	4A 28+4A  28 28		ダントツ粒剤 ミネクトデュオ粒剤 プリロンツ粒剤オメガ ベリママーグSC  モスピラン顆粒水溶液 スピノエース顆粒水和剤 ディアアSC ダイアスリットDF ファイブセーフフロアブル ダブルシユーターSE アグリメック グレーシア乳剤 カスケード乳剤 マツチ乳剤 コテツフロアブル	1:カチアニジン 1:シントラニプロール2:チアトキサム 1:シントラニプロール 1:シントラニプロール  1:アセチアト 1:スピノサド 1:スピノサド 1:スピノサド 2:ポリオキシン複合体 1:プロホキ 1:脂肪酸トリセト(虫)2:スピノサド 1:アハメチン 1:フルキサメト 1:フルフェキサソ 1:ルフェスロン 1:カルフエピル	1g/株 2g/株 2g/株 25ml/400株  2,000倍 5,000倍 2,500~5,000倍 1,500倍  1,000~2,000倍 1,000倍 500~1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍	育苗期後半 鉢上げ時~育苗期後半 育苗期後半~定植時 育苗期後半~定植当日  収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで  収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 1回 1回 1回  3回以内 2回以内 2回以内 3回以内  3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 4回以内 4回以内 3回以内	普 普 普 普  劇 普 普 普  劇 普 普 普 普 普 普 劇	○株元処理 ○株元散布  ○葉害等(注)(P.300) ○400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(P.300)	
ミカンキイロアザミウマ			発生初期	15 15 13		カスケード乳剤 マツチ乳剤 コテツフロアブル	1:フルフェキサソ	2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 4回以内 4回以内	普 普 普	△ △ △	○IGRR剤(注)(P.15)参照 ○IGRR剤(注)(P.15)参照

トマト	障害名 発生原因	症 状	対 策	病害名	本障害と類似した病気の症状 症 状
しり腐果	直接の原因は、石灰欠乏である。カリや窒素が多い場合や、高温乾燥で発生しやすい。	ピンポン玉ぐらいの大きさの幼果から発生し始める。症状が進むと被害部が暗褐色となり、くぼみを生じたまま固まってしまう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 窒素質肥料の適用を避ける。</li> <li>○ 土壌を乾燥させすぎない。</li> <li>○ 応急対策として、カルクロン、スイカル、マイルドカルシウム等の葉面散布用カルシウム肥料の葉面散布を行う。</li> </ul>	実腐病	果実に黒褐色円形で、ややへこんだ輪紋状の病斑ができ、病斑内には小黒点が作られる。



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人水産 毒(注)	注意事項
青枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>水はけの悪い床土や、酸性土壌で発病が多い。</li> <li>日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて、青枯れ状態になる。</li> <li>導管が褐変し、切断面からは乳白色の菌泥が出る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> <li>連作を避け、5年以上の輪作を行う。</li> <li>発生圃場では、病原菌密度抑制のため、3年程度水田化する。</li> <li>生育に影響のない範囲で、石灰を多量に施用する(200kg/10a)。</li> <li>敷きわらやマルチ等により、地温の上昇を抑制させる。</li> <li>適切な抵抗性台木を使用する。</li> <li>根傷みのないよう、管理作業には十分注意する。</li> <li>排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。</li> <li>発病株は、見つけ次第除去する。</li> <li>発病株に触れた手やハサミで健全株を触らないようにし、作業後は石鹸等で洗う。</li> <li>発生圃場では、栽培終了後、極力根も含めて全株を除去する。</li> </ul>	床土消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
			本畑消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
枯苗		床土は無病土を使用する。	床土消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
半蒔		床土は無病土を使用する。	本畑消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
萎凋病	<ul style="list-style-type: none"> <li>本病は、地温22～26℃の時期に発生しやすく、18℃以下の低温や30℃以上の高温では発病しにくい。</li> <li>土壌湿度は、乾燥よりも湿潤状態で発病しやすく、日照不足は発病を助長する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病株は、見つけ次第除去する。</li> <li>発生圃場では栽培終了後、極力根も含めて全株除去する。</li> <li>40～90日以上の灌水処理・水田化により、病原菌密度を減少させることが可能である。</li> <li>根傷みのないよう、管理作業には十分注意する。</li> <li>排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。</li> <li>連作を避ける。</li> <li>抵抗性台木を使用する。</li> </ul>	床土消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
根腐疫病	<ul style="list-style-type: none"> <li>被害残渣上の病原菌は、根とともに土壌中に残り、越冬して伝染源となる。</li> <li>排水不良の多湿な圃場で発生が多く、特に水田転換畑での発生が目立っている。</li> <li>長期間、連作している圃場で発生することが多い。</li> <li>台太郎(台木)で発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。</li> <li>連作を避け、他の作物を導入し、輪作を行なう。</li> <li>酸性土壌で発生が多い傾向にあるので、石灰を施用し、中性になるように矯正する。</li> <li>完熟堆肥などの良質有機物を積極的に投入する。</li> <li>発病株を見つけた場合には速やかに抜き取り、病患部での菌の増殖や隣接株への感染を未然に防止する。また、収穫後の残渣は圃場外に持ち出し、乾燥後焼却する。</li> </ul>	後定	1	ベンレート水和剤		1,000倍	定植後～収穫14日前	3回以内	普	○ 400～600ml/株土壌灌注
			種								
菌核病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>低温(18～20℃)・多湿条件で発病する。</li> <li>発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミ糞状の菌核が形成される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>被害部は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。</li> </ul>	1	1	トップジンM水和剤		1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	
			1	2	1:ベンシル		2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			2	2	ロブアール水和剤		1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	
			10+1	10+1	スミックス水和剤		1,000～2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	
					グッター水和剤		1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	
			10+1	10+1	ニマイバー水和剤		1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			10+2	10+2	スミアレンド水和剤		1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	
			11	11	ファンタジスタ顆粒水和剤		2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			7	7	カンタストリアフロアブル		1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			7	7	ハレード20フロアブル		2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			7	7	ファンジャフロアブル		2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			7+M5	7+M5	1:イソプロト		1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	
			17	17	1:ペンチオト		1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
					2:TPN		2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	
					くん煙剤(P.316)参照						○ 葉害等(注)(P.299)

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		IRACコード		FRACコード		使用薬剤		一般名		濃度(使用量)		使用時期		本剤の使用回数		人毒		水産(注)		注意事項	
す	す	か	び	病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 堆肥を十分に施し、肥切れしないようにする。</li> <li>○ 通風・排水を良くする。</li> <li>○ 敷わら・敷草を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害茎葉と発病株を処分する。</li> <li>○ 多発時は、枝を更新剪定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3</li> <li>3</li> <li>11+M5</li> <li>11</li> <li>11</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>M10</li> <li>7+M5</li> <li>11+7</li> <li>10+1</li> </ul>	un	<ul style="list-style-type: none"> <li>M5</li> <li>2</li> <li>M7</li> <li>M7</li> <li>M7+19</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダコニール1000</li> <li>ロブラール水和剤</li> <li>ベルクート水和剤</li> <li>ベルクートフロアブル</li> <li>ダイアスリットDF</li> <li>フラー水和剤</li> <li>スコア顆粒水和剤</li> <li>アミスターオプティフロアブル</li> <li>ストビーフロアブル</li> <li>ファンタジスタ顆粒水和剤</li> <li>カンタストフロアブル</li> <li>アフェスターフロアブル</li> <li>ネクスターフロアブル</li> <li>パルミノ</li> <li>パルミノ</li> <li>ベジセイバー</li> <li>シグナムWDG</li> <li>ニマイバー水和剤</li> <li>くん煙剤(P.316)参照</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:TPN</li> <li>1:イロジオン</li> <li>1:バノカタジンアルベルシル酸塩</li> <li>1:バノカタジンアルベルシル酸塩</li> <li>1:バノカタジンアルベルシル酸塩2:ホリキシン複合体</li> <li>1:シロブタール</li> <li>1:シウエコゾール</li> <li>1:アノキストロビン2:TPN</li> <li>1:ルノキシムメチル</li> <li>1:ピリベンカルブ</li> <li>1:ボスカド</li> <li>1:ペンチオピト</li> <li>1:イピラザム</li> <li>1:ピラゾールド</li> <li>1:キキシン系</li> <li>1:ペンチオピト2:TPN</li> <li>1:ピラロトロン2:ボスカド</li> <li>1:ジエトフェンカルブ2:ベミル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>3,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000～1,500倍</li> <li>4,000～6,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>3,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000～1,500倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000～4,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,500～2,000倍</li> <li>1,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>△※</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> </ul>								
黒	枯	病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 堆肥を十分に施し、肥切れしないようにする。</li> <li>○ 通風・排水を良くする。</li> <li>○ 敷わら・敷草を行う。</li> <li>○ 被害茎葉と病株を処分する。</li> <li>○ 多発時は、枝を更新剪定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害茎葉や被害果は、早めに除去し、適切に処分する。</li> <li>○ 密植、窒素過多、排水不良を避ける。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>M5</li> <li>2</li> <li>1</li> <li>1</li> <li>10+1</li> <li>10+1</li> <li>11</li> <li>7</li> <li>M7</li> <li>7+M5</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>M5</li> <li>2</li> <li>1</li> <li>1</li> <li>10+1</li> <li>10+1</li> <li>11</li> <li>7</li> <li>M7</li> <li>7+M5</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダコニール1000</li> <li>ロブラール水和剤</li> <li>トップジンM水和剤</li> <li>ペンレート水和剤</li> <li>ゲッター水和剤</li> <li>ニマイバー水和剤</li> <li>ファンタジスタ顆粒水和剤</li> <li>ネクスターフロアブル</li> <li>ベルクートフロアブル</li> <li>ベジセイバー</li> <li>くん煙剤(P.316)参照</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:TPN</li> <li>1:イロジオン</li> <li>1:チオアネートメチル</li> <li>1:ベノミル</li> <li>1:ジエトフェンカルブ2:チオアネートメチル</li> <li>1:ジエトフェンカルブ2:ベノミル</li> <li>1:ピリベンカルブ</li> <li>1:イピラザム</li> <li>1:バノカタジンアルベルシル酸塩</li> <li>1:ペンチオピト2:TPN</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000倍</li> <li>1,000～1,500倍</li> <li>1,500～2,000倍</li> <li>2,000～3,000倍</li> <li>1,500倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000～3,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4回以内</li> <li>4回以内</li> <li>5回以内</li> <li>3回以内</li> <li>5回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> <li>△</li> </ul>											
褐	紋	病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害茎葉や被害果は、早めに除去し、適切に処分する。</li> <li>○ 密植、窒素過多、排水不良を避ける。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1</li> <li>M7</li> <li>11</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1</li> <li>M7</li> <li>11</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペンレート水和剤</li> <li>ベルクートフロアブル</li> <li>スクレアフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:ベノミル</li> <li>1:バノカタジンアルベルシル酸塩</li> <li>1:マブテスロピロ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△</li> <li>△</li> <li>○</li> </ul>											

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
うどんこ病	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 比較的乾燥した条件下(湿度50～80%)で多発する。</p>	<p>○ 被害残渣を圃場内に残さない。</p> <p>○ 発病した茎葉は、速やかに除去する。</p> <p>○ 窒素過多・肥切れさせないよう、適正に肥培管理を行う。</p> <p>○ 密植、株の過繁茂を避ける。</p>	発病初期		9	フルピフロアブル	1:ホニベリム	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						ベルクートフロアブル	1:ホニベリム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						トリフミン水和剤	1:トリフミン水和剤	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
						トリフミン乳剤	1:トリフミン乳剤	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
						ブリー水和剤	1:ブリー水和剤	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						サブロール乳剤	1:サブロール乳剤	1,000～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
						スコア顆粒水和剤	1:スコア顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						アミスターオプティフロアブル	1:アミスターオプティフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
						アフェクトフロアブル	1:アフェクトフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ハレード20フロアブル	1:ハレード20フロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ケンジャフロアブル	1:ケンジャフロアブル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ネクスターフロアブル	1:ネクスターフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ベジセイバー	1:ベジセイバー	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						モレスタン水和剤	1:モレスタン水和剤	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
						バルミノ	1:バルミノ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						パンチョTPF顆粒水和剤	1:パンチョTPF顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						シヨウチノスクアフロアブル	1:シヨウチノスクアフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						プロパティフロアブル	1:プロパティフロアブル	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
デュアルサイド水和剤	1:デュアルサイド水和剤	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○							
灰色かび病	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生する。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○ 発病後は、7～10日間隔で防除する。</p>	<p>○ 花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。</p> <p>○ 密植を避ける。</p>	開花期～収穫期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
						ロブラール水和剤	1:イロジオン	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						ポリオキシンAL水溶剤	1:ポリオキシン複合体	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						フルピフロアブル	1:ホニベリム	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ペリハンカルブ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						セリアーフロアブル20	1:フルジオキシニル	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ジャヤストミート顆粒水和剤	1:フエンヘキチト2:フルシオキニル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ピクシオDF	1:フエンヘキチト	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						スミレックス水和剤	1:プロシトリン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	○	
						スミブレンド水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:プロシトリン	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
						ゲッター水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:オプティフロアブル	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
						ニマイバー水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:ベニミル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
						カンタストライフロアブル	1:ボスカド	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						アフェクトフロアブル	1:ペンチオチト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ハレード20フロアブル	1:ペラシグルミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ケンジャフロアブル	1:イノフェタド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ベジセイバー	1:ペンチオチト2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ミギワ10フロアブル	1:イノフェタド	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						くん煙剤(P.316)参照	くん煙剤(P.316)参照						
微生物農薬(参考資料P.20)参照	微生物農薬(参考資料P.20)参照												

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項
褐腐病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>露地栽培では、6～9月に果実の被害が発生しやすいため、施設栽培では、4月以降に発生し、梅雨後半から9月にかけて降雨が多いと多発する。</li> <li>土壌伝染と水媒伝染で発生するので、多雨・多灌水が発生を助長する。</li> </ul>	<p>(圃場での対策)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他のナス科・ウリ科野菜の近く、多雨時に浸冠する恐れのある圃場、前作で発生した圃場では作付しない。</li> <li>酸性土壌で発生が多いので、pH調整を行う。</li> <li>窒素肥料の過剰や偏用をしない。</li> <li>高畝とし、排水を良くする(畝間灌水は発生を増加させることがあるので注意する)。</li> <li>土壌中の病原菌が地上部へ跳ね上がらないよう、敷きわらやマルチをする。</li> <li>密植や過繁茂を避け、通風や採光を図る。</li> <li>発病果を除去し、圃場外で適切に処分する。</li> </ul>	発生初期			ランマンフロアブル ライメイフロアブル ドーシヤスフロアブル ホライズンフロアブル ベトアアイトー顆粒水和剤 フェステイバルC水和剤 プロボーズ顆粒水和剤 レーバスフロアブル ピシロックフロアブル	1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル 1:シメキチニル2:ベンチアハリカル	2,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 2,500倍 2,000～3,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	○ △ △※ △※ ○ △ △※ ○ ○	
センチュウ類	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>成虫は年2回発生する。</li> <li>(防除上のポイント) 幼虫の発生期に防除を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>葉裏のつづぶ状の卵塊をつぶす。</li> </ul>	発生初期	4A 4A 13 22A 22B 1B		アクトラ顆粒水溶液 モスピラン顆粒水溶液 コテツフロアブル トルネードエースDF アクセルフロアブル サイアノックス乳剤	1:チアホキヤム 1:アセタミプリド 1:ホルコピル 1:イトキヤルブ 1:チアホキヤム 1:CYAP	2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 4回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 劇 劇 普 普 普 普	△ △ △※ ○ ○ ○ △	○ 幼虫期葉害注意 ○ 登録はニジュウヤホシテントウ ○ 登録はテントウムシダマシ
アブラムシ類	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>発生の主体は、ワタアブラムシである。</li> <li>(防除上のポイント) ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部の地域で認められている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>無寄生病を定植する(隔離され、雑草等もない条件下で育苗する)。</li> <li>雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内外の除草に努める。</li> <li>シルババーリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。</li> <li>ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等の被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果がある)。</li> </ul>	発生前	28+4A 4A 28 4A+28 23 28 28 4A 4A 4A		ミネクトデュオ顆粒剤 アドマイヤー1粒剤 ベリマークSC アベイル粒剤 モベントフロアブル ヨーバルフロアブル プリロツク顆粒剤オメガ モスピラン粒剤 アドマイヤー1粒剤 モスピラン粒剤	1:シアントラニロール2:チアホキヤム 1:イタクロアクト 1:シアントラニロール 1:アセタミプリド2:シアントラニロール 1:スピロテトラト 1:シアントラニロール 1:シアントラニロール 1:アセタミプリド 1:イタクロアクト 1:アセタミプリド	2g/株 1g/株 25ml/400株 2g/株 500g/株 200倍 2g/株 0.5g/株 1～2g/株 0.5～1g/株	鉢上げ時～育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植時 定植前日～定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 使用液量400株当り10～200(25～50ml/株灌水)、混用(注)(P.300) ○ 株元散布 ○ 25～50ml/株灌水、葉害等(注)(P.299) ○ 25ml/株灌水 ○ 株元散布、同時施用(注)(P.300) ○ 株元散布 ○ 植穴又は株元土壌混和 ○ 植穴土壌混和	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	4A 4A 4A 4C 9B 9B 29 23 28		アドマイヤー水和剤 アドマイヤーフロアブル モスピラン 顆粒水溶剤 トランスフォーラムフロアブル チェス顆粒水和剤 コルト顆粒水和剤 ウアラDF モベントフロアブル ヨーバルフロアブル くん煙剤(P.316)参照	1:バクタクロアクト 1:バクタクロアクト 1:アセタミプリド 1:アセタミプリド 1:スピロサロリン 1:ピリプロキニゲン 1:プロニカスト 1:スピロテトラト 1:ネトラニリアロール	2,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 5,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 劇 普 普 普 普 普 普	△ △ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △	
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。  (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布する。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草も無い条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。	発生前	4A 4A 28+4A 28 28 4A+28 23 4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ミネクトデユオ粒剤 アリロツ粒剤オメガ ベリマーグSC アベイル粒剤 モベントフロアブル アカタラ粒剤5 ダントツ粒剤	1:シノリアラン 1:シノリアラン 1:シアントラニリアロール2:チアトキサム 1:シアントラニリアロール 1:シアントラニリアロール 1:シアントラニリアロール 1:アセタミプリド2:シアントラニリアロール 1:スピロテトラト 1:チアトキサム 1:クロチアニシン	1～2g/株 1～2g/株 2g/株 2g/株 25ml/400株 2g/株 500倍 1g/株 1g/株	育苗期 育苗期 鉢上げ時～育苗後半 育苗後半～定植時 育苗後半～定植日 育苗後半～定植日 育苗後半～定植日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ ○ △ ○ ○ ○ ○ △	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布、同時施用(注)(P.300) ○ 使用液量400株当り10～200(25～50ml/株灌注)、混用(注)(P.300) ○ 株元散布 ○ 25～50ml/株灌注、葉巻等(注)(P.299) ○ 植穴処理 ○ 植穴処理土壌混和 ○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	21A+16 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4C 6 6 5		アプロードエースフロアブル モスピラン 顆粒水溶剤 アカタラ顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アルバリン 顆粒水溶剤 スタークル 顆粒水溶剤 アドマイヤー水和剤 トランスフォーラムフロアブル コロマイト乳剤 アグリメック ダブルシユーターSE	1:フェニロキシメト2:アプロロフェシン 1:アセタミプリド 1:チアトキサム 1:クロチアニシン 1:シノリアラン 1:シノリアラン 1:バクタクロアクト 1:スピロキサフロル 1:シルベ、メクシ 1:アハメクチン 1:脂肪酸グリセリド(虫2:スピノサト)	1,000～2,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000～4,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 1,000～2,000倍 1,500倍 500～1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 劇 普 普 普 普 普 劇 普 普 普 普	× △ △ △ △ △ △ ○ △ △ △ △	○ タバココナジラミには効果低い ○ 葉巻等(注)(P.299)
			発生初期	5 9B 9B 29 23 28 34		ディアナSC チェス顆粒水和剤 コルト顆粒水和剤 ウアラDF モベントフロアブル ヨーバルフロアブル フィアムセーブフロアブル	1:スピノラム 1:ピロロシン 1:ピリプロキニゲン 1:プロニカスト 1:スピロテトラト 1:ネトラニリアロール 1:プロメキソ	2,500倍 5,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	△ ○ △ ○ ○ ○ △	○ タバココナジラミには効果低い ○ 葉巻等(注)(P.299) ○ 登録はタバココナジラミ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項						
														害					
ネ キ リ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 被害種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 ○ 前作や、作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。 ○ 作付予定地では、予め除草し、前作も早急に処分する。	発生前	28		プレバソフロアブル5	1:クロラントニアプロール	100倍	育苗後半～定植当日	1回	普	△	○ 25m <sup>2</sup> /株灌水						
						ベリマークSC	1:ジアントラニアプロール	25m <sup>2</sup> /400株	育苗後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～200(25～50m <sup>2</sup> /株灌水)、混用(注)(P.300) ○ 株元散布 ○ 合ヒレ(注)(P.15)						
						ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※							
土壌病害虫防除法の項(P.301)参照																			
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫も見つけ次第捕殺する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット(4mm目以下)等での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	発生前	28		プレバソフロアブル5	1:クロラントニアプロール	100倍	育苗後半～定植当日	1回	普	△	○ 25m <sup>2</sup> /株灌水						
						ノーモルト乳剤	1:アラルベンズロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)						
						アタブロン乳剤	1:カルフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)						
						フェルコンフロアブル	1:外キシフェノシト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)						
						マトリックフロアブル	1:カモフェノシト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)						
						アファーム乳剤	1:エマメチン・安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※							
						アニキ乳剤	1:レピタチン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※							
						デアナナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△							
						フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△							
						プレバソフロアブル5	1:クロラントニアプロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△							
						コテツフロアブル	1:クロラントニアプロール	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期葉害注意						
						トルネードエースDF	1:イントキサカルブ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○							
						ファイントリムDF	1:イントキサカルブ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○							
						プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△							
						くん煙剤(P.316)参照													
						オ オ タ バ コ カ	(発生の特徴) ○ 夏～秋に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ハウス開口部に防虫ネット等(4mm目以下)を張り、侵入防止を図る。	発生初期	15		マツチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
アタブロン乳剤	1:カルフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普							△	○ IGR剤(注)(P.15)						
カスケード乳剤	1:フルフェノキサロン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普							△	○ IGR剤(注)(P.15)						
マトリックフロアブル	1:カモフェノシト	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普							○	○ IGR剤(注)(P.15)						
フェルコンフロアブル	1:外キシフェノシト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							○	○ IGR剤(注)(P.15)						
アファーム乳剤	1:エマメチン・安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							△※							
アニキ乳剤	1:レピタチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普							△※							
スピネトラム	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							△							
デアナナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							△							
ダブルシユータールSE	1:脂肪酸グリセリド(虫2:スピノサド)	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							△	○ 葉害等(注)(P.299)						
フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普							△							
プレバソフロアブル5	1:クロラントニアプロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							△							
ヨーバルフロアブル	1:クロラントニアプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普							△							
コテツフロアブル	1:クロラントニアプロール	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇							△※	○ 幼苗期葉害注意						
トルネードエースDF	1:イントキサカルブ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							○							
ファイントリムDF	1:イントキサカルブ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							○							
プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△													
BT剤(参考資料P.15)、くん煙剤(P.316)参照																			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水害(注)	注意事項			
ハモグリバエ類	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。</li> <li>○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後多発することがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 苗からの持ち込みを防ぐ。</li> <li>○ 成虫の侵入を防止するためハウスの開口部に防虫ネット等(1mm目以下(0.6mm目以下が望ましい))を設置する。</li> <li>○ 被害を受けた収穫残渣は発生源となるので、適切に処分する。</li> </ul>	発生前	4A 4A 28+4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ミネクトデュオ粒剤	1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:ジノトラニアロール2:チアマトキサム	2g/株 2g/株 2g/株	育苗期 育苗期 鉢上げ時～育苗後半	1回 1回 1回	普 普 普	△ △ △	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布			
			28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニアロール	100倍	育苗後半～定植当	1回	普	△	○ 25ml/株灌水				
			28		ベリマークSC	1:ジノトラニアロール	25ml/400株	育苗後半～定植当	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～200(25～50ml/株灌水)、混用(注)(P.300)				
			28		ヨーバルフロアブル	1:シロアラン	200倍	育苗後半～定植当	1回	普	△	○ 25ml/株灌水				
			4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:ジノアラン 1:ジノアラン	1～2g/株 1～2g/株	定植時 定植時	1回 1回	普 普	△ △	○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和				
			5 5		ディアナSC ダブルシチューターSE	1:スピネトラム 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサド	2,500～5,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	○ 葉害等(注)(P.299)				
			28 28		プレバソンフロアブル5 ヨーバルフロアブル	1:クロラントラニアロール 1:シロアラン	1,000～2,000倍 2,500～5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△ △					
			6 6		コロマイト乳剤 アファーム乳剤	1:シルベキチン 1:エマクチ安息香酸塩	1,500倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△※ △※					
			4A 4A		ダントツ粒剤 アクタラ粒剤5	1:カチニジン 1:チアマトキサム	1g/株 1g/株	定植時 定植時	1回 1回	普 普	△ ×	○ 植穴処理 ○ 植穴処理				
			15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)				
			17 4A 4A		トリガード液剤 ダントツ水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤	1:シロアラン 1:カチニジン 1:チアマトキサム	1,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ △	○ IGR剤(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15)				
			アザミウマ類	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 露地栽培では、天敵への影響の少ない選択性殺虫剤を用いることで発生を抑えることが可能である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ミナキイロアザミウマの項(P.308)参照</li> </ul>	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ジノトラニアロール2:チアマトキサム	2g/株	鉢上げ時～育苗後半	1回	普	△	○ 株元散布
						28		ブリロン粒剤オメガ	1:ジノトラニアロール	2g/株	育苗後半～定植時	1回	普	○ 株元散布、同時施用(注)(P.300)		
28		ベリマークSC				1:ジノトラニアロール	25ml/400株	育苗後半～定植当	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～200(25～50ml/株灌水)、混用(注)(P.300)				
23		モベントフロアブル				1:スピノテアト	500倍	育苗後半～定植当	1回	普	○ 50ml/株灌水、葉害等(注)(P.299)					
4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤				1:ジノアラン 1:ジノアラン	1～2g/株 1～2g/株	定植時 定植時	1回 1回	普 普	△ △	○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和				
6 5 5		アファーム乳剤 スピエース顆粒水和剤 ディアナSC ダブルシチューターSE				1:エマクチ安息香酸塩 1:スピノサド 1:スピネトラム 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサド	2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△※ △ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)				
4A 4A 4A		モスピラン顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤				1:アセキサリト 1:ジノアラン 1:ジノアラン	2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普	△ △ △					
34 23		アフェンセーフフロアブル モベントフロアブル	1:フロキサト 1:スピノテアト	1,000～2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	劇 普	△ ○	○ 葉害等(注)(P.299)							

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法							注意事項	
時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水害(注)					
アザミウマ	3A		アゼント水和剤	1:アクリナリン	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 合ヒレ(注)(P.15)				
シロアザミ	13		コテソフロアブル	1:コルフェピル	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期葉害注意				
シナミキイロアザミウマの項(P.308)参照														
ハダニ類	23		モベントフロアブル	1:スピロテアマト	500倍	育苗後半～定植当日	1回	普	△	○ 50ml/株灌注、葉害等(注)(P.299)				
	5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸リピド(虫)2:スピロサト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)				
	6		コロマイト水和剤	1:シルバ、メチン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※					
	6		コロマイト乳剤	1:シルバ、メチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※					
	6		アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※					
	6		アグリメック	1:エマクチン	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△					
	25A	19	スターマイトフロアブル	1:シエピラフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
			デュアルサイド水和剤	1:プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル2:ポリオキソン複合体	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
	20B		カネマイトフロアブル	1:アセキシル	1,000～1,500倍	収穫前日まで	1回	普	△					
	20D		マイトコーネフロアブル	1:ピラフェン	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
	13		コテソフロアブル	1:コルフェピル	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期葉害注意				
	23		モベントフロアブル	1:スピロテアマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 葉害等(注)(P.299)				
	33		ダニオーテフロアブル	1:アジナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 混用等(注)(P.300)				
	25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ピフルアミド2:フェピロキシメト	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
	25B		ダニコングフロアブル	1:ピフルアミド	3,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
			くん煙剤(P.316)参照											
チャノホコリダニ	10B		バロックフロアブル	1:エトキサゾール	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
	21A+16		アブロードエースフロアブル	1:フェピロキシメト2:プロフェシン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(P.15)				
	6		コロマイト乳剤	1:シルバ、メチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※					
	6		アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※					
	25A		スターマイトフロアブル	1:シエピラフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
	23		モベントフロアブル	1:スピロテアマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)				
	un	M10	バルミノ	1:キキサン系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
			気門封鎖薬剤(参考資料P.30)参照											
カスミカメムシ類	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリアルキナン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)		○ 登録はカメラムシ類		
	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△					
コガネムシ類	4A		アグタラ粒剤5	1:チアトキサム	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理				



病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 (注)	注意事項
ウイルス病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、ToMV、PMMoV</li> <li>土壤伝染、種子伝染するウイルス病。</li> <li>強い伝染力を持つため、発病株を管理した手、ハサミ等を通しての感染も高率で起こる。</li> <li>抵抗性品種でもトウガラシ系統ウイルスには侵される。</li> </ul>	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> <li>抵抗性品種を利用する。</li> <li>発病株の早期抜き取り。</li> <li>支柱等資材を更新する。</li> </ul>	<p>(IRACコード)</p>	<p>(FRACコード)</p>	<p>使用薬剤</p>	<p>一般名</p>	<p>濃度(使用量)</p>	<p>使用時期</p>	<p>本剤の 使用回数</p>	<p>人 水産 (注)</p>	<p>注意事項</p>	
												<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、CMV、BBWV、PVY</li> <li>虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。</li> <li>露地栽培で被害が大きい。</li> </ul>
青枯病	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アブラムシ類の防除を徹底する。</li> </ul>	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> <li>日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて、青枯れ状態になる。</li> <li>導管が褐変し、切断面からは乳白色の菌糸が出る。</li> </ul>	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>シルバーマルチやシルベーターなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。</li> <li>圃場周辺の雑草を除去する。</li> </ul>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	<p>アブラムシ類防除の項(P.205)参照</p>	
												<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて、青枯れ状態になる。</li> <li>導管が褐変し、切断面からは乳白色の菌糸が出る。</li> </ul>
斑点細菌病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大きい。</li> <li>多発すると、果実では小円形のぞうき症状とことがある。</li> <li>発病により激しく落葉することがある。</li> </ul>	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>低湿地での作付を避け、排水対策を講じる。</li> <li>連作を避ける。</li> <li>窒素質肥料の偏用を避け、カリ肥料を十分施す。</li> </ul>	<p>24+M1</p>	<p>24+M1</p>	<p>カスミンボルドー</p>	<p>銅</p>	<p>1,000倍</p>	<p>収穫前日まで</p>	<p>5回以内</p>	<p>普</p>	<p>普</p>	
												<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大きい。</li> <li>多発すると、果実では小円形のぞうき症状とことがある。</li> <li>発病により激しく落葉することがある。</li> </ul>
苗立枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>軟弱な苗で発生が多い。</li> </ul>	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> <li>育苗中の水管理を適正にする。</li> </ul>	<p>24+M1</p>	<p>24+M1</p>	<p>銅</p>	<p>銅</p>	<p>1,000倍</p>	<p>収穫前日まで</p>	<p>5回以内</p>	<p>普</p>	<p>普</p>	
												<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>軟弱な苗で発生が多い。</li> </ul>
疫病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやすく、窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。</li> </ul>	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止する。可能ならば雨よけ栽培とする。</li> <li>被害茎葉は第二次伝染源となるので除去する。</li> <li>被害茎葉残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。</li> </ul>	<p>21</p>	<p>21</p>	<p>ランマンフロアブル</p>	<p>1:シメジ</p>	<p>2,000倍</p>	<p>収穫前日まで</p>	<p>4回以内</p>	<p>普</p>	<p>普</p>	
												<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止する。可能ならば雨よけ栽培とする。</li> <li>被害茎葉は第二次伝染源となるので除去する。</li> <li>被害茎葉残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。</li> </ul>

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>低温(20℃以下)・多湿条件下で発生する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。</li> <li>密植を避ける。</li> </ul>	発病前		2	ロブロール水和剤	1:イプロソロン	1,000~1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
			発病前		2	スミレックス水和剤	1:プロンジン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
			発病前		12	セイビアーフロアブル20	1:フルノキソニル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意
			発病初期		11+M5	アミスターオーブタイプフロアブル	1:アノキシストロビン2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意
			発病初期		7	カンタストロイロアブル	1:ボスカド	1,000~1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期		7	アフェットフロアブル	1:ベンチオゼット	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病初期		7	バレード20フロアブル	1:ピラゾノール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期		7+M5	ベジセイバー	1:ベンチオゼット2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病初期		17	ピクシオDF	1:ピラゾノール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期		52	ミギワ10フロアブル	1:イプロフェン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期			微生物農薬(参考資料P.20)、くん煙剤(P.316)参照							
へた腐病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>圃場では発生しないが、収穫後の果実を腐敗させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>摘葉作業等によって生じた作物残渣は、伝染源になるので、早期に圃場外へ持ち出す。</li> <li>露地栽培では、降雨中に収穫しない。</li> <li>収穫時は鋭利なハサミで採果する。</li> <li>出荷までの期間をできるだけ低温に保つ。</li> </ul>											
白絹病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高温多湿条件下で発生が多くなる。</li> <li>前作物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連作を避け、床土は無病土を使用する。</li> <li>3~4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を行う。</li> <li>定植前に石灰を施用し、土壌pHを矯正する。</li> <li>無病苗を定植する。</li> <li>被害株、病原菌の付いた藪を落とさないように圃場外へ持ち出す。</li> <li>発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。</li> </ul>											
うどんこ病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他作物のうどんこ病のように表面に粉体を作らない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>圃場内に被害残渣を残さない。</li> <li>発病した茎葉は速やかに除去する。</li> <li>窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。</li> <li>密植、株の過繁茂を避ける。</li> </ul>	発病前		7	アフェットフロアブル	1:ベンチオゼット	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 10/株・株元灌水
			発病前		14	リンレックス水和剤	1:トリクロロメチル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 10/株・株元灌水
			発病初期		3	トリフミン水和剤	1:トリフルシール	3,000~5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
			発病初期		3	フリール水和剤	1:シロブタール	4,000~6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
			発病初期		3	スコア顆粒水和剤	1:シフェコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期		11	ストロビーフロアブル	1:カルソキウムメチル	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
			発病初期		7	アフェットフロアブル	1:ベンチオゼット	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期		7	バレード20フロアブル	1:ピラゾノール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期		7+M5	ベジセイバー	1:ベンチオゼット2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病初期		11+7	シグナムWDG	1:ピラゾノール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 葉害等(注)(P.299)
			発病初期		U6+3	ハンチオンTP顆粒水和剤	1:シフルフェナゾール2:トリフルシール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
			発病初期		M10	モレスタン水和剤	1:キキサン系	2,000~3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
			発病初期		M10	バルミノ	1:キキサン系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
			発病初期		50	フロパティフロアブル	1:ピリオフェン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			発病初期			微生物農薬(参考資料P.20)、くん煙剤(P.316)参照							
斑点病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本病原菌はピーマンだけを侵す。(防除上のポイント)</li> <li>予防散布を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。</li> <li>発病葉は早期に除去する。</li> </ul>	発病前		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ かぶれ注意
			発病前		3	フリール水和剤	1:シロブタール	4,000~6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
			発病前		7+M5	ベジセイバー	1:ベンチオゼット2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
			発病前		11+M5	アミスターオーブタイプフロアブル	1:アノキシストロビン2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意

薬剤防除法													
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
黒 枯 病	<p>○ 露地栽培では梅雨時から発病するが、秋期に発病が目立つことがある。</p> <p>○ 被害残渣から伝染する。</p> <p>○ 葉、茎、果実、果梗に黒褐色斑点を形成する。</p>	<p>○ 伝染源をなくすため、発病葉は速やかに除去し、適切に処分する。</p> <p>○ 密植を避ける。</p>	発 病 前 ～ 発 病 初 期		M5 1 2 11+M5	ダコニール1000 トップジンM水和剤 スミレックス水和剤 アミスターオーブティフロアブル	1:TPN 1:チオアネートメチル 1:プロキシム 1:アノキシストロビン2:TPN	1,000倍 4,000～6,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 5回以内 3回以内	普 普 普 普	× △ △ △※	○ かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
炭 疽 病	<p>○ 降雨や灌水時の土壌の跳ね上がりにより分生子が飛散し、感染する。</p> <p>○ 傷口から感染しやすい。</p> <p>○ 近年、県内では <i>Colletotrichum scovillei</i> による炭疽病が確認されており、従来の <i>C. capsici</i>、<i>C. gloeosporioides</i> に比べ被害が激しい。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○ 予防散布に重点を置く。</p>	<p>○ 発病葉や発病果は発見次第除去する。</p> <p>○ 雨よけ栽培やマルチ被覆等により、降雨による跳ね上がりを防ぐ。</p> <p>○ 果実に傷がつかないように、支柱や枝つり等で固定する。</p>	発 病 前 ～ 発 病 初 期		M5 12 11+7 11+M5 7+M5 11	ダコニール1000 セイブアーフロアブル20 シグナムWDG アミスターオーブティフロアブル ベジセイバー スクエアフロアブル	1:TPN 1:フルンオキソニル 1:ピラロクストロビン2:ボクスト 1:アノキシストロビン2:TPN 1:ペンチオザト2:TPN 1:マンデスターロビン	1,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普	× ○ △※ △※ △ ○	○ かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意
ア ブ ラ ム シ 類	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。</p> <p>○ 露地栽培では、7～9月頃に発生が多い。</p> <p>○ 雑草にも寄生し、発生源となる。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部の地域で認められている。</p>	<p>○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗)。</p> <p>○ 圃場内外の除草に努める。</p> <p>○ シルバーボリによる敵マルシなど光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効。</p>	発 生 前	28+4A 4A 28 28 28 23 4A 4A 4A		ミネトデュオ粒剤 アドマイヤー1粒剤 アリロップ粒剤オメガ ペリマークSC ヨーバルフロアブル モベントフロアブル モスピラン粒剤 アドマイヤー1粒剤 モスピラン粒剤	1:シアントアエトリオール2:チアメキサム 1:バクタクロアクト 1:シアントアエトリオール 1:シアントアエトリオール 1:チトアエトリオール 1:セロトアエト 1:アセタミプリド 1:バクタクロアクト 1:アセタミプリド	2g/株 1g/株 2g/株 25ml/400株 200倍 500倍 0.5g/株 1～2g/株 0.5g/株	鉢上げ時～育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半～定植時 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 定植前日～定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ ○ △ ○ △ △ △ △	○ 株元散布 ○ 株元散布、同時施用(注)(P.300) ○ 使用液量400株当り10～200(25～50ml/株灌水)、混用等(注)(P.300) ○ 25ml/株灌水 ○ 25～50ml/株灌水、葉害等(注)(P.299) ○ 株元散布 ○ 植穴又は株元土壌混和 ○ 植穴土壌混和
			発 生 初 期	4A 4C 9B 29 23 28		モスピラン顆粒水溶剤 トランスフオームフロアブル チェス顆粒水和剤 ウアラDF モベントフロアブル ベネビアOD くん煙剤(P.316)	1:アセタミプリド 1:フルホキサトール 1:ピロクソニン 1:フロニカスト 1:セロトアエト 1:シアントアエトリオール	4,000倍 2,000倍 5,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内	劇 普 普 普 普 普	△ ○ ○ ○ ○ ○ △	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ふ化幼虫の集団加害葉を除去する。	発生初期	28		フレバンフロアブル5	1:クロラントニアプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌水
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草する。 ○ 周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生初期	3A		ガードベイトA	1:ハルモリン	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○ 株元散布
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 果実では、産卵痕の周辺が白色のリング状となる白臍れ症が発生する。 (防除上のポイント) ○ 露地栽培では天敵への影響の少ない選択性殺虫剤を用いることで、発生を抑えることが可能。	○ ミナキイロアザミウマの項(P.308)参照	発生前	28+4A 28 28 4A+28		ミネトデュオ粒剤 ブリッソ粒剤オメガ ベリマークSC アベイル粒剤 モベントフロアブル アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:シアントラニプロール2:アトメキサム 1:シアントラニプロール 1:シアントラニプロール 1:アセタミプリド2:アントラニリアール 1:スピロテクト 1:シノアフラ 1:シノアフラ 1:シノアフラ	2g/株 2g/株 25mℓ/400株 2g/株 500倍 1～2g/株 1～2g/株	鉢上げ時～育苗期後半 育苗期後半～定植時 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普 普	△ ○ △ ○ △ △ △	○ 株元散布 ○ 株元散布、同時施用(注)(P.300) ○ 使用容量400株当り10～200(25～50mℓ/株灌水)、混用等(注)(P.300) ○ 株元散布 ○ 50mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299) ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和
ミカンキイロアザミウマ			発生初期	5 5 5 4A 4A 6 34 23 21A 28 30 13		スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC ダブルシューターSE アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アグリメック フェンセーブフロアブル モベントフロアブル ハチハチ乳剤 ベネビアOD グレースシア乳剤 コテツフロアブル	1:スピノクト 1:スピノクト 1:脂肪酸グリセリド(虫2:スピノクト) 1:シノアフラ 1:シノアフラ 1:アハメクチン 1:アハメクチン 1:スピロテクト 1:トルフェンブト 1:シアントラニプロール 1:フルキサミド 1:クロルフェピル	5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 500～1,000倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 1回 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 劇 普 劇 普 普 劇	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △※	○ 葉害等(注)(P.299)
ミナキイロアザミウマ													

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハダニ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生初期に丁寧に散布する。</li> <li>○ 系統の異なる薬剤によるローテーション防除を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 圃場内外の除草に努め、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。</li> <li>○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈り払いなどは、ハダニの離脱、移動も考慮し、適切に実施する。</li> <li>○ 発生初期は一部の株に集中的に発生する傾向がある。ので、早期発見に努める。</li> </ul>	発生初期	6 25A 25A 13 20B 20D 25B+21A 25B 5		コロマイト乳剤 アグリマック スターマイトフロアブル ダニサラバフロアブル コテソフロアブル カネマイトフロアブル マイトコーネフロアブル ダブルフェースフロアブル ダニコングフロアブル ダブルシユーターSE	1:シルベ、メチン 1:アハ、メチン 1:シエ、ブアフェン 1:シアルトフェン 1:カルアフェン 1:アセキノシル 1:ピフェチネート 1:ピフルアミド、2:フェビロキシメト 1:ピフルアミド 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサド	1,000倍 500~1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 3,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 1回 2回以内 2回以内 1回 1回 1回 1回 2回以内	普 劇 普 普 普 普 普 普 普 普	△※ △ △ △ △※ △ △ △ △ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)
チャノホコリダニ	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 生長点や新葉に多く寄生する。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 発生初期に、生長点等によくかかるよう散布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 芯止まり株を見つけたら速やかに除去し、適切に処分する。</li> </ul>	発生初期	6 25A 21A un M10 un 20B 23 30		アニキ乳剤 スターマイトフロアブル ハチハチ乳剤 モレスタン水和剤 バルミン カネマイトフロアブル モベントフロアブル グレシーア乳剤	1:レピメチン 1:シエ、ブアフェン 1:トルフェンビト 1:キキサン系 1:キキサン系 1:アセキノシル 1:スピロテトラト 1:フルキサミド	2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000~3,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 1回 1回 3回以内 3回以内 1回 3回以内 2回以内	普 普 劇 普 普 普 普 普	△※ △ △ × △ △ △ △ △ △	○ 眼に刺激痛、皮膚かぶれ ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 天敵への影響大

病害名 発生原因	対 策	症 状	本障害と類似した病気の症状	
			病害名	症 状
しり腐果	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 窒素質肥料の過用を避ける。</li> <li>○ 土壌を乾燥させ過ぎない。</li> <li>○ 応急対策として、カルクロン、スマカル、マイルドカルシウム等の葉面散布用カルシウム肥料の葉面散布を行う。</li> </ul>	果実の側面に黒褐色で、ややくぼんだ斑点ができ、腐敗したようになる。	本障害と類似した病気の症状	炭疽病 病斑は同心輪紋を生じ、灰色の中央部分に小黒点粒を生じる。



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 (注)	注意事項
芽 枯 病	(発生の特徴) ○ 長期株冷栽培で発生しやすい。 ○ 苗床での防除を徹底する。 ○ ハウス内に保菌株を持ち込まない。 ○ 炭疽病の防除対策の項(P.313)参照	○ 排水、換気に努める。  (植付前) ○ 無病圃の株を親株とする。 ○ 地床育苗の場合には、排水の良い圃場を選定する。 ○ 高畝とする。 ○ プランターで育苗する等、親株栽培時から雨よけ栽培を行う。 (育苗期) ○ 発病株は周辺株の小葉に染みや斑点が生じるまでに除去し、二次伝染を防ぐ。 ○ 雨よけ栽培を行う。頭上灌水によっても発病するため注意する。 ○ 窒素過多を避ける。  (本圃定植後) ○ 萎凋株が完全に枯死するまで放置しない。 ○ 補植を徹底する。本圃で生じたランナー先の子苗を誘引する。	土壌消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
			炭疽病	M3 M3 M3 M7 M7 M9 10+1 10+1 12 M7 M7+11 M4	ジマンダイセン水和剤 ベンコゼブ水和剤 アントラコール顆粒水和剤 ベルコート水和剤 ベルコートフロアブル デランフロアブル 銅剤及び混合剤(P.317)参照 ゲッター水和剤 ニマイバー水和剤 セイビアーフロアブル20 ベルコートフロアブル ファンベル顆粒水和剤 オーソサイド水和剤80 微生物農薬(参考資料P.20)参照	1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:プロベネブ 1:ミノキサジニアルベル酸塩 1:ミノキサジニアルベル酸塩 1:シチアン 1:ジェトフェンカルブ2:チオアネート 1:シエトフェンカルブ2:ベノミル 1:フルジオキサゾール 1:ミノキサジニアルベル酸塩 1:ミノキサジニアルベル酸塩2:ピリベンカルブ 1:キアブタ	600倍 600倍 500倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 800倍	仮植栽培期、但し収穫76日前まで 仮植栽培期、但し収穫76日前まで 仮植栽培期 育苗期(定植前) 育苗期(定植前) 育苗期 収穫開始21日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで(生育期) 収穫前日まで 収穫開始14日前まで	6回以内 6回以内 6回以内 5回以内 5回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 5回以内 3回以内 5回以内	普 普 普 普 普 劇 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ × ○ △ ○ △ ○ ×
め 病 の 輪 斑 病	(発生の特徴) ○ 病斑部分が灰白色となる。  (発生の特徴) ○ 古葉に発生する。	○ 発病葉を除去する。  ○ 発病葉を除去する。	土壌消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
			炭疽病	M3 M7 7 3	ジマンダイセン水和剤 ベルコートフロアブル アフェントフロアブル トリフミン水和剤	1:マンゼブ 1:ミノキサジニアルベル酸塩 1:ベンチオゼブ 1:トリフルミンゾール	600倍 1,000倍 2,000倍 3,000倍	仮植栽培期、但し収穫76日前まで 育苗期(定植前) 収穫前日まで 収穫前日まで	6回以内 5回以内 3回以内 5回以内	普 普 普 普	△ △ △ △
萎 黄 病	(発生の特徴) ○ 土壌伝染、苗伝染する。 ○ 新葉が黄化し、小葉の1~2枚が奇形となり、ねじれたように展開してくる。 ○ クラウンの導管部に褐変が見られる。 ○ 萎黄病の防除対策の項(P.315)参照	○ 健全な親株から採苗する。 ○ 無汚染圃場で栽培する。 ○ 発病株は速やかに除去し、圃場外で適切に処分する。	土壌消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
			炭疽病	1	トップジンM水和剤 ベンレート水和剤	1:チオアネートメタル 1:ベンノル	300~500倍 500倍	仮植時及び育苗期 育苗期	3回以内 3回以内	普 普	△ △



薬剤防除法													
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
疫病	(発生の特徴) ○クラウンの症状は炭疽病と類似する。 ○品種「さがほのか」は、本病に特に弱い。 ○主要な病原菌は、 <i>Phytophthora nicotianae</i> (フイトフトラ ニコチアナ) <i>P. cactorum</i> (フイトフトラ カクトラム)	○灌水過多を避け、排水を良くする。 ○密植を避ける。 ○被害株は速やかに除去する。	育苗期	M3+4 21 21 40	リドミルゴールドMZ ランマンフロアブル オラクル顆粒水和剤 レーバスフロアブル	1:マンゼブ2:タタネシロM 1:シブアクト 1:アズルプロム 1:マンジプロバシト	1,000倍 500~1,000倍 2,000~3,000倍 2,000倍	育苗期 育苗期 育苗期 育苗期	3回以内 2回以内 3回以内 苗木:2回以内	普 普 普 普	△ ○ △※ ○	○50mℓ/株散布 ○50mℓ/株・株元灌注 ○50mℓ/株土壌灌注	
			床土消毒 本畑消毒	21 40	ランマンフロアブル レーバスフロアブル	1:シブアクト 1:マンジプロバシト	500~1,000倍 2,000倍	生育期(但し、収穫30日前まで) 生育期(但し、収穫前日まで)	2回以内 本圃:2回以内	普 普	○100mℓ/株・株元灌注		
ネグサレセンチュウ			床土消毒 本畑消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
イチゴメセンチュウ		○発症株から採苗しない。 ○発症株は定植しない。 ○発症株は抜き取り、適切に処分する。 ○連作を避ける。											
コガネムシ類 幼虫	(発生の特徴) ○発生の主体は、ドウガネグアイプイである。 ○本圃では、秋季と春季に被害がみられる。	○過度な堆肥の施用は避ける。	発生前	1B 1B 1B 1B+1A 3A 28	ダイアジノン粒剤I5 カルホス微粒剤F カルホス乳剤 ランダイヤ粒剤 フォース粒剤 ベリマークSC	1:ダイアジノン 1:イキサチオン 1:イキサチオン 1:ダイアジノン2:ダミル 1:テアルリン 1:シアントラニプロール	4~6kg/10a 9kg/10a 1,000~1,500倍 6~9kg/10a 6kg/10a 1,000倍	植付時(仮植床) 植付時 植付後 植付時(仮植床) 植付時(仮植床) 育苗期後半~定植当日	1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 劇 劇 劇 劇 普	× △ △ △ × △	○土壌混和(仮植床) ○土壌表面散布土壌混和処理(仮植床) ○3ℓ/m <sup>2</sup> 灌注(仮植床) ○土壌混和(仮植床) ○全面土壌混和(仮植床) 合ピレ(注)(P.15) ○25~50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.299) 登録はコガネムシ類	
			発生前	23 23 28 4A	モベントフロアブル モベントフロアブル ベリマークSC モスピラン粒剤	1:スピロテアト 1:スピロテアト 1:シアントラニプロール 1:アセクミナト	500倍 250倍 1,000倍 0.5~1g/株	育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日 定植時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	○25~50mℓ/株灌注、葉害等(注)(P.299) ○25mℓ/株灌注、葉害等(注)(P.299) ○25~50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.299) ○植六土壌混和		
アブラムシ類	(発生の特徴) ○発生の主体は、フタアブラムシである。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、防虫ネット等の侵入抑制に有効(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。	発生前	23 23 28 4A	モベントフロアブル モベントフロアブル ベリマークSC モスピラン粒剤	1:スピロテアト 1:スピロテアト 1:シアントラニプロール 1:アセクミナト	500倍 250倍 1,000倍 0.5~1g/株	育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日 定植時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	○25~50mℓ/株灌注、葉害等(注)(P.299) ○25mℓ/株灌注、葉害等(注)(P.299) ○25~50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.299) ○植六土壌混和		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	4A		モスピラン粒剤	1:アゼタミプリド	0.5~1g/株	生育期(定植30日後まで)但しマルチ被覆直前まで	1回	普	△	○ 株元散布
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アゼタミプリド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
			発生初期	4A		ハリアード顆粒水溶液	1:チアプロプリド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
			発生初期	9B		チェス顆粒水溶液	1:ピロキシム	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発生初期	9B		コルト顆粒水溶液	1:ピロキシム	3,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 目に刺激痛
			発生初期	21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェンチド	1,000倍	1番花の開花まで	1回	劇	×	
			発生初期	29		ウラアDF	1:フロエカト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	28		ベネビアOD	1:ジントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発生初期	28		くん糖剤(P.316)							
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ 本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。  (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布する。		発生前	23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	500倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○ 25~50mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299)
			発生前	23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	250倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○ 25mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299)
			発生前	28		ベリマークSC	1:ジントラニプロール	1,000倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 50mℓ/株灌水、混用等(注)(P.300)
			発生初期	4A		モスピラン粒剤	1:アゼタミプリド	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	21A		サンマイトフロアブル	1:ピロキシム	1,000~1,500倍	収穫開始3日前まで	1回	劇	×	
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アゼタミプリド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
			発生初期	4A		ハリアード顆粒水溶液	1:チアプロプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
			発生初期	9B		チェス顆粒水溶液	1:ピロキシム	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発生初期	9B		コルト顆粒水溶液	1:ピロキシム	3,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発生初期	23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	28		ベネビアOD	1:ジントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	5		ダイアSC	1:スピネトラム	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			発生初期	5		ダブシルスターSE	1:脂肪酸リポソーム(虫:スピノサト)	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ヨカイコバノイヒメ	(発生の特徴) ○ 主に6~8月の育苗期に発生する。 ○ 展開葉に葉脈間の退緑斑や湾曲症状などの被害を与える。		発生初期	21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェンチド	1,000倍	1番花の開花まで	1回	劇	×	○ 目に刺激痛
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アゼタミプリド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5~6世代発生する。  (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。		発生前	28		ベリマークSC	1:ジントラニプロール	1,000倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 25~50mℓ/株灌水、混用等(注)(P.300)
			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:アトルベンシロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサズロン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	15		アタゴロン乳剤	1:アトルベンシロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	15		マッチ乳剤	1:ルフェンソール	3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	18		ロムダンフロアブル	1:チアプロプリド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	18		マトリックフロアブル	1:カマクエンチド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	18		ファルコンフロアブル	1:外キジエンチド	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	6		アファーム乳剤	1:エマカチン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	6		アニキ乳剤	1:スピネトラム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
			発生初期	5		ダイアSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			発生初期	28		フェニックス顆粒水溶液	1:フルベンジミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			発生初期	28		プレバソフロアブル5	1:クロラントニプロール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			発生初期	28		ベネビアOD	1:ジントラニプロール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
			発生初期	28		ヨーバルフロアブル	1:シトラニプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人畜 毒	水灌 (注)	注意事項	
														△※
ハスモンヨトウ				13 22A 22A 30 un		コテツフロアブル トルネードエースDF フライントリムDF グレーション乳剤 プレオフロアブル	1:ケルフェピル 1:インドキサカルブ 1:インドキサカルブ 1:フルキキマシド 1:ピリダリル	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 4回以内	劇 普 普 普 普	△※ ○ ○ △ △	○天敵への影響大	
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ヒラス・ハナアザミウマである。 ○ 成虫・幼虫が花や幼果に寄生し、表面を加害する。 ○ 3月以降に密度が増加する。  (防除上のポイント) ○ 発生に気づいたら、早目に防除する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ 本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。	発生前	23 23 28		モベントフロアブル モベントフロアブル ベリマーグSC	1:スピロテアト 1:スピロテアト 1:シアントエトリアプロール	500倍 250倍 1,000倍	育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日	1回 1回 1回	普 普 普	○ ○ ○	○50mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299) ○25mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299) ○50mℓ/株灌水、混用等(注)(P.300)	
ミカンキイロアザミウマ				4A 15 15 23 5 5		モスピラン顆粒水溶剤 カスケード乳剤 アダグロド乳剤 マッチ乳剤 モベントフロアブル スピノサト ダブルシユーターSE	1:アセキサリト 1:フルフェキサゾン 1:ケルフェピル 1:フルフェキサゾン 1:スピロテアト 1:スピノサト 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト	2,000倍 4,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 5,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 3回以内 4回以内 3回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普 普 普 普	△ △ △ △ ○ △ △	○IGR剤(注)(P.15) ○IGR剤(注)(P.15) ○IGR剤(注)(P.15) ○葉害等(注)(P.299)	
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 苗床での防除を徹底し、本圃にハダニ類を持ち込まない。 ○ 初期防除を徹底し、多発時には1週間ごとに2～3回防除する。 ○ 葉裏にかかると散布する。 ○ いちごナミハダニ防除薬剤の効果(参考資料P.34)参照。	○ 近接する発生源の影響が大きいのので、育苗床・圃場内外の除草に努める。 ○ 隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱、移動も考慮して適切に行う。 ○ 発生初期には下位葉での発生が多いので、早めに下位葉を除去する。 ○ 高密度になりクモの巣状になった寄生葉は、早期に除去し、適切に処分する。	発生前 発初期	6 23 23		アグリメック モベントフロアブル モベントフロアブル	1:アハダチン 1:スピロテアト 1:スピロテアト	500～1,000倍 500倍 250倍	育苗期 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日	2回以内 1回 1回	劇 普 普	△ ○ ○	○50mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299) ○25mℓ/株灌水、葉害等(注)(P.299)	
				6 20D 30 25B 25B+21A		コロマイト水和剤 マイコネフロアブル グレーション乳剤 ダニコングフロアブル ダブルフェースフロアブル	1:ミルベメクチン 1:ピロフェネート 1:フルキキマシド 1:ピリダリル 1:ピリダリル2:フェニロキシメト	2,000倍 1,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 1回 1回	普 普 普 普 普	△※ △ △ △ △	○天敵への影響大	
				33 5 13 (殺卵効果主体)		ダニオナーテフロアブル ダブルシユーターSE コテツフロアブル	1:アシナピル 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト 1:ケルフェピル	2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	普 普 劇	○ △ △※	○混用等(注)(P.300)	
						気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)、くん煙剤(P.316)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					使用時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 (注) 毒 劇 普	注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名										
ホコリダニ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 年内に発生が認められた場合は、早急に防除する。</li> <li>○ ハダニ類登録薬剤では、マイトコーネ、ダニコング、ダニオオテ、気門封鎖型薬剤の効率は低い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉に引きつったような奇形症状が出た苗は、早めに処分する。</li> </ul>	21A 25A		サンマイトフロアブル スターマイトフロアブル	1:ピリダベン 1:ジェノブアフェン	1,000~1,500倍 2,000倍	収穫開始3日前まで 収穫前日まで	1回 2回以内	△	○ 登録はシクラメン・ホコリダニ						
キクノバネエ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 成虫は、堆肥等の有機物に誘引され、産卵する。</li> <li>○ 幼虫は、主に地際部や地下部を加害する。</li> <li>○ 花にも寄生し、食害することがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 成虫は有機物に誘引されるので、有機物の多量施用を避ける。</li> <li>○ 堆肥は完熟堆肥を使用する。</li> </ul>	5 21A 15	39	ゼイナナSC ハチハチフロアブル カスケード乳剤	1:ピレネトラム 1:トリフェニピド 1:フルフェノキサロン	2,500倍 1,000倍 4,000倍	収穫前日まで 1番花の開花まで 収穫前日まで	2回以内 1回 3回以内	△ × △	○ 目に刺激痛 ○ IGR剤(注)(P.15)						
ナメクジ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 主に夜間に活動する。</li> <li>○ 水分の多い柔らかい部分をよく好んで食害する。</li> </ul>		un		スラゴ メタアルデヒド剤(参考資料P.29)参照	1:磷酸第二鉄	1~5g/m <sup>2</sup>	発生時	—	○							

障害名 発生原因	症状	対策	
		病害名	本障害と類似した病気の症状
チップバーン (カルシウム欠乏症)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 葉縁やがくの先端が褐色となり、その部分が枯死する。</li> <li>○ 葉は、その後も生育するが、しわが寄ったり、引きつったりする。</li> </ul>	炭疽病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小葉に大型病斑として葉縁から黒色の葉枯れを生じることがある。</li> <li>○ 本症状は、多湿条件が続いた時に発生しやすい。</li> </ul>

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項
ウイルス病	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、TuMV、CMV</li> <li>虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。</li> <li>幼苗期に罹病すると、被害が大きい。</li> <li>アブラムシ類の防除を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> <li>高温多雨時期に発生が多いので春まきはなるべく早く、秋まきはなるべく遅まきする。</li> <li>発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。</li> </ul>	(耕種的防除法) <ul style="list-style-type: none"> <li>耐病性品種を選ぶ。</li> <li>秋まきは、なるべく遅まきとする。</li> <li>間引きは発病株(新葉に緑色の濃淡がはつきりした症状として見られる)から行う。</li> <li>多発地では間引き時期をなるべく遅らせる。</li> </ul>										
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原菌は傷口から侵入する。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>キスジ/マハムシ、コオロギ、土壌線虫を防除する。</li> <li>病原菌は傷口から侵入するので管理作業や降雨の後に防除する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>健全な種子を使用する。</li> <li>肥切れしないようにする。</li> <li>発病株と被害残さを処分する。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> </ul>	生育期	31 31+M1 24+M1		スターナ水和剤 ナレート水和剤 カスミンボルドー	1:オキリニツ酸 1:オキリニツ酸2:有機銅 1:オキリニツ酸2:塩基性塩化銅	1,000倍 800~1,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで	5回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ × △	
黒斑細菌病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>台風等の強風雨後に多発しやすい。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>発病初期に防除する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>健全な種子を使用する。</li> <li>肥切れしないようにする。</li> <li>発病株と被害残さを処分する。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> </ul>	生育期	24+M1 24+M1 31+24		カスミンボルドー カッパパーシ水和剤 カセット水和剤	1:オキリニツ酸2:塩基性塩化銅 1:オキリニツ酸2:塩基性塩化銅 1:オキリニツ酸2:ストロブチン硫酸塩 1:オキリニツ酸2:カスカマイシン 1:オキリニツ酸2:ハリダマイシン 銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照	1,000倍 1,000倍 1,000倍 500倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ○	○トマト、きくへの飛散注意。
萎黄病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>青首品種で発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>発病圃場の土壌は伝染源となるので機械・作業靴等につけて持ち込まないようにする。</li> <li>高温期に播種する作型で発生が多いため、春まきはなるべく早く、秋まきはなるべく遅まきとする。</li> <li>耐病性品種を選択する。</li> <li>発病株と被害残さを処分する。</li> </ul>	床土消毒 本畑消毒			銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照							
根腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>亀裂褐変症のうち、リソクトニア属菌が原因のもの。</li> <li>亀裂褐変症は白首品種で発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>高温多湿条件は発病を助長するので、排水対策と過灌水を防止する。</li> <li>7~8月どりは多発するため、常発地では作型をずらす。</li> <li>発病株と被害残さ(残根)を処分する。</li> <li>土壌物理性の不良な場合に多発するので深耕、有機質や石灰質資材を投入する。</li> </ul>	床土消毒 本畑消毒 作付前	14 29 29		リソクトニア属菌 フロンスイト粉剤 フロンスイトSC	1:トルクホスチル 1:フルアジナム 1:フルアジナム	20~40kg/10a 30~40kg/10a 500ml/10a	は種前 は種前 は種前	1回 1回 1回	普 普 普	△ △※ ×	○ 全面土壌混和、登録は亀裂褐変症(リソクトニア属) ○ 全面土壌混和、登録は亀裂褐変症(リソクトニア属)かぶれ注意 ○ 全面散布後土壌混和(液量100~2000)、登録は亀裂褐変症(リソクトニア属)、かぶれ注意 ○ 登録は、亀裂褐変症(リソクトニア属) ○ 株元散布、登録は亀裂褐変症(リソクトニア属) ○ トマト、きくへの飛散注意。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法				水産 (注)	注意事項				
			時期	FRAC コード	使用薬剤	一般名			濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒
べと病	(発生の特徴) ○ 10～15℃が発病適温であり、多湿条件で多発する。 ○ 根部で「入れ墨症」として発生することがある。 ○ 発病前から定期的に予防散布する。	耕種的防除法 ○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥料切れや樹勢が弱った時に多発するので、肥料を十分に施し肥切れしないようにする。 銅剤及び混合剤(P.317)参照	11+4	ユニフォーム粒剤	1:77キシストロビン2:タラキシルM	6～9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 全面土壌混和 登録は白さび病	
白さび病 (ワツカカ症)	(発生の特徴) ○ 本菌には系統があり、だいこんに寄生するだいこん系はだいこんのみ侵す。 ○ 根部で「ワツカカ症」として発生することがある。	作付前 発病前 発生前 発生初期	M5 21 11 11+M5	ダコニール1000 ランマンフロアブル マジヤーフロアブル アミスターオプティフロアブル	1:TPN 1:シゾフアミド 1:ピコキストロビン 1:77キシストロビン2:TPN	1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫45日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫45日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	× ○ ○ △※	○ 登録は白さび病・ワツカカ症 かぶれ注意 ○ 登録は白さび病・ワツカカ症 ○ 登録は白さび病・ワツカカ症 ○ 登録は白さび病・ワツカカ症 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意	
センチュウ類		○ 発生地での連作を避ける。 ○ 休閑や前作に対抗植物(マリーゴールド、ヘイオーツ等)の栽培を行う。		銅剤及び混合剤(P.317)参照								
キスジノミハムシ	(防除上のポイント) ○ 軟腐病の発生が多い地帯は本虫の防除を徹底する必要があり。  (留意点) ○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合は、使用できる薬剤が限られているため注意する。	○ アブラナ科野菜の連作を避ける。 ○ 暖冬の後、発生しやすいため春先の成虫の発生に注意し、多発地では播種期を遅らせる。	1B 3A 3A 4A 4A 4A 4A 4A+28 14	ラグビーMC粒剤 フォース粒剤 フォース粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アベイル粒剤 ハルダン粒剤4	1:カスサホス 1:アフルリン 1:アフルリン 1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:7セタスプリット2:シアントリアフロール 1:カルタップ	20～30kg/10a 6～9kg/10a 4～9kg/10a 4～6kg/10a 4～6kg/10a 9～12kg/10a 9～12kg/10a 6kg/10a 4kg/10a	は種前 は種時 は種時 は種時 は種時 は種時 は種時 は種時 は種時	1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回 3回以内	普 劇 劇 普 普 普 普 普 劇	△※ × × △ △ △ △ ○ ×	○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 播溝土壌混和 合ヒレ(注)(P.15) ○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 覆土後土壌表面散布	

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法									
時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項					
発生 初期	4A		アルバリン粒剤	1:シノチフラン	6kg/10a	生育期(但し、収穫 30日前まで)	1回	普	△	○散布					
	4A		スタークル粒剤	1:シノチフラン	6kg/10a	生育期(但し、収穫 30日前まで)	1回	普	△	○散布					
	14		バダン粒剤4	1:カルタップ	4kg/10a	生育期(但し、収穫 7日前まで)	3回以内	劇	×	○株元散布					
	4A		モスビラン顆粒水溶剤	1:7セタズリト	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△						
	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:シノチフラン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シノチフラン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
	14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオンシラム	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△						
	14		バダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×						
	21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェネト	2,000倍	収穫30日前まで	1回	×	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意					
	22B		アクセルフロアブル	1:タフホリン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
	28		ベネビアOD	1:シノチフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
	30		グレンシア乳剤	1:シノチフラン	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)					
	30		フロアレアSC	1:7セタズリト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
	発生 初期	4A		モスビラン顆粒水溶剤	1:7セタズリト	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△					
4A			ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
4A			アルバリン顆粒水溶剤	1:シノチフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
4A			スタークル顆粒水溶剤	1:シノチフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
13			コテツフロアブル	1:シノチフラン	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※						
3A			アデイオン乳剤	1:ペルホリン	2,000倍	収穫30日前まで	4回以内	普	×	○合ヒレ(注)(P.15)					
21A		39	ハチハチ乳剤	1:トルフェネト	2,000倍	収穫30日前まで	1回	×	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意					
22B			アクセルフロアブル	1:タフホリン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
30			フロアレアSC	1:7セタズリト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
14			バダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×						
発生 前		4A		アドマイヤー1粒剤	1:ミダコアブト	3~6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和				
		4A		モスビラン粒剤	1:7セタズリト	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和				
		4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	3~6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝処理土壌混和				
		4A		アクタラ粒剤5	1:チオキサム	4kg/10a	は種時	1回	普	×	○作条混和				
発生 初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ミダコアブト	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△						
	4A		モスビラン顆粒水溶剤	1:7セタズリト	2,000~4,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△						
	4A		モスビランSL液剤	1:7セタズリト	2,000~4,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△						
	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チオキサム	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
発生 初期	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シノチフラン	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:シノチフラン	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
	21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェネト	2,000倍	収穫30日前まで	1回	×	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意					
28		ベネビアOD	1:シノチフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)						
4C		トランスフオームフロアブル	1:ヌルホキサフロ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○							

病害虫名		耕種的防除法		薬剤防除法									
病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項	
ネキリムシ類	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 (防除上のポイント)</p> <p>○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生着した幼虫が加害することが多い。 (留意点)</p> <p>○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。</p> <p>ベイト剤は降雨にあうと効果が減退する。双葉期には薬剤がやすすいので注意する。</p>	発生前	1B 1B+1A		ダイアジン粒剤5 ランダイヤ粒剤 ネキリエースK カルボス微粒剤F ガードベイトA	1:ダイジン 1:ダイノ2:ガミル 1:イキチオン 1:イキチオン 1:ベルメトン	4～6kg/10a 4～6kg/10a 3kg/10a 6kg/10a 3kg/10a	は種時 は種時 は種時又は定植時 は種時～生育初期 但し、収穫30日前まで は種時～生育初期	1回 1回 1回 1回 4回以内	普 劇 普 劇 普	×	○ 全面土壌混和又は作葉土壌混和 ○ 作葉土壌混和 ○ 土壌表面株元処理 ○ 土壌表面散布土壌混和处理	
		発生初期	1A 22B		デナボン5%ベイト アクセルベイト	1:NAC 1:タフホゾン	3～6kg/10a 3～6kg/10a	収穫30日前まで 収穫7日前まで	4回以内 2回以内	普 普	△ ○	○ 株元散布 合ヒレ注意事項(P.15)参照 ○ 株元散布 ○ 株元散布	
アオムシ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 標準和名(モンシロチョウ)。 ○ 春～初夏及び10～11月に被害が多い。 (防除上のポイント)</p> <p>○ 若齢幼虫期に防除する。 (留意点)</p> <p>○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。 ○ 回数注意</p> <p>プリロソソノ粒剤オメガ、アベイル粒剤は同一成分(シアントラニロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までは処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p>	発生前	28 4A+28		プリロソソノ粒剤オメガ アベイル粒剤	1:シアントラニロール 1:セタミアト2:シアントラニロール	6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種時	1回 1回	普 普	○ ○	○ 播溝土壌混和、同時施用(注)(P.300) ○ 播溝土壌混和、使用回数(注)	
		発生初期	15 15 15 15 5 5 6 13 14 22A 22A 21A 28 28 30 30 un		アタブロン乳剤 ノーモルト乳剤 カスケード乳剤 マツチ乳剤 スピエース顆粒水和剤 デアナSC アファーム乳剤 コデツプロアブル リーフガード顆粒水和剤 トルネードエースDF ファイントリムDF 39 ハチハチ乳剤 ベネビアOD プレバソソノフロアブル5 グレーシア乳剤 プロレアSC プレオフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロルフルアズロン 1:アフルベンズロン 1:フルフェキサズロン 1:ルフェキサズロン 1:スピノサト 1:シネトラム 1:エマクチン安息香酸塩 1:クロルフェニル 1:オキシメチル 1:イソキサカルブ 1:イソキサカルブ 1:トルフェンピラト 1:シアントラニロール 1:クロラニロール 1:フルキサタズト 1:プロフェニル 1:ヒリタリル	2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 3,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫30日前まで 収穫30日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 1回 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 劇 劇 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △※ △※ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 幼苗期葉害注意 ○ 眼に刺激痛、かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299)	



薬剤防除法													
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水 産 (注)	注意事項
コナガ	<p>(発生の特徴) ○春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいため、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。 ○有効な薬剤を長持ちさせるために、薬剤の諸性質等を考慮し効果的な防除を実施する。 (留意点) ○「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。 ○回数注意 プリロツツ粒剤オメガ、アベイル粒剤は同一成分(シアントラニロニリアロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までに処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p>	<p>○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分の実施、また、発生放任圃場を作らない。</p>	発生前	28 4A+28		プリロツツ粒剤オメガ アベイル粒剤	1:シアントラニロニリアロール 1:アセチルアミン2:シアントラニロニリアロール	6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種時	1回 1回	普 普	○ ○	回数注意、播溝土壌混和、同時施用(注)(P.300) ○播溝土壌混和、使用回数(注)
ハイマダラノメイガ	<p>(発生の特徴) ○別名(ダイコンシンクイムシ)。 ○夏期、高温、乾燥した年に発生が多い。 ○9～10月頃播種する作型に発生が多い。 (留意点) ○「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。 ○回数注意 プリロツツ粒剤オメガ、アベイル粒剤は同一成分(シアントラニロニリアロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までに処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p>	<p>○間引き時に被害株を除去する。 ○寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。</p>	発生前	28 4A+28		プリロツツ粒剤オメガ アベイル粒剤	1:シアントラニロニリアロール 1:アセチルアミン2:シアントラニロニリアロール	6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種時	1回 1回	普 普	○ ○	回数注意、播溝土壌混和、同時施用(注)(P.300) ○播溝土壌混和、使用回数(注)
			発生初期	15 15 15 5 5 6 13 14 21A 22A 22A 28 30 30 un 34		アタプロン乳剤 ノーモルト乳剤 カスケード乳剤 マツチ乳剤 スピノエース顆粒水和剤 デアナナSC アファーム乳剤 コテツフロアブル リーフガード顆粒水和剤 ハチハチ乳剤 トルネードエースDF ファイニトリムDF ペネリアOD グレース乳剤 フロアレスSC アフェンセーフフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:コルマルアスロン 1:アルハンズロン 1:フルフェノキサロン 1:ルフェネロン 1:スピノト 1:ズネトナ 1:エマメチン安息香酸塩 1:コルフェニル 1:チオキサム 1:トルフェノト 1:インドキサカルブ 1:インドキサカルブ 1:シアントラニロニリアロール 1:トルキサメタジド 1:フロフェニト 1:プロトキ	2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 3,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 1,000～2,000倍	収穫14日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 劇 劇 普 普 普 普 普 普 普 普 普 劇	○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○幼苗期葉害注意 ○眼に刺激痛、かぶれ注意 ○葉害等(注)(P.299)	
			発生初期	15 18 5 14 21A 22B 28 28 28 30 30		カスケード乳剤 マトリックフロアブル デアナナSC リーフガード顆粒水和剤 ハチハチ乳剤 アクセルフロアブル フェニックス顆粒水和剤 ペネリアOD ブレバシオンフロアブル5 グレース乳剤 フロアレスSC	1:フルフェノキサロン 1:プロマフェノト 1:ズネトナ 1:チオキサム 1:トルフェノト 1:メタホルジン 1:フルベニシメス 1:シアントラニロニリアロール 1:クロラニロニリアロール 1:トルキサメタジド 1:フロフェニト	2,000～4,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 1,500倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○眼に刺激痛、かぶれ注意 ○葉害等(注)(P.299)	

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		FRAC コード		使用薬剤		一般名		濃度(使用量)		使用時期		本剤の 使用回数		人 毒		水産 (注)		注意事項	
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	若齢幼虫期に防除する。	卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫は捕殺する。 ○ 寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。	15	アタプロン乳剤	1:カオルフルアスロン	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照												
ヨ ト ウ ム シ	若齢幼虫期に防除する。	卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫は捕殺する。 ○ 寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。	15 18 5 28 28 22B 22A 22A un 30	BT剤(参考資料P.15)参照 アタプロン乳剤 ノーモルト乳剤 マトリックフロアブル デアアナSC プレバノンフロアブル5 ベネビアOD アクセルフロアブル トルネードエースDF ファイナルDF プレオフロアブル プロフレアSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:カオルフルアスロン 1:アルペンズロン 1:ロマフェノシド 1:スピネラム 1:クロラントラニプロール 1:シアントラニプロール 1:インドキサカルブ 1:インドキサカルブ 1:ヒリタリル 1:プロアラニド	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500~5,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000~4,000倍	収穫14日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 葉害等(注)(P.299)												
カ ブ ラ ハ バ チ	風通しが悪かったり、茂りすぎのところで多発する。 (発生の特徴) ○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。 (留意点)	幼虫を捕殺する。 ○ 密植を避け、通風を良くし、健全な株にする。 ○ 周辺のアブラナ科雑草(スナ・タネツケバナ)などを除草する。	28	ブリロツジ粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、同時施用(注)(P.300)												
			4A 28 22B 6 5 28 30 14 14	モスビラン顆粒水溶液 プレバノンフロアブル5 アクセルフロアブル アニキ乳剤 デアアナSC ベネビアOD プロフレアSC リーフガード顆粒水和剤 バダゲンSG水溶液	1:アセチアジド 1:クロラントラニプロール 1:タフルメソン 1:ピピタチン 1:スピネラム 1:シアントラニプロール 1:プロアラニド 1:チオンクアム 1:カルタップ	2,000~4,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍 1,000~2,000倍 2,500~5,000倍 2,000~4,000倍 2,000~4,000倍 1,500倍 1,500倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで	1回 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	劇 普 普 普 普 普 普 劇 劇	△ △ △ △※ △ △ △ △ △ △ ×	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)												

障害名 発生原因		対 策		症 状		病害名 萎黄病		本障害と類似した病気の症状 症 状	
赤しん症	ホウ酸欠乏によるが、高温乾燥条件により助長される。	0.5~1kg/10aのホウ砂を施用する。 ○ 土壌を乾燥させすぎない。 ○ 過リン酸石灰400kg/10aを施用する。		根部を縦に切断すると中心部に、暗褐色又は黒褐色のすじが入っている。 地上部の生育は正常である。	萎黄病	○ 土壌を乾燥させすぎない。 ○ 過リン酸石灰400kg/10aを施用する。	輪生する葉の片側の下葉から黄変し、萎縮症状を示す。 重症株は根部が伸長肥大しない。		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水毒 (注)	注意事項
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 高温多湿条件下で発生し、高温期に結球する作型で多く発生する。</li> <li>○ 結球期以降に発生が多い。</li> <li>○ 結球期に温床・多雨の場合、発生が多くなる。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ 薬剤散布時の展着剤加用で効果が上がる。</li> <li>○ ヨトウムシ、アオムシ等の食害痕も発生を助長するので防除を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 土壌伝染するので、健全なほ場、用土を使用する。</li> <li>○ 傷口から侵入するので、傷を生じないように管理作業を心がける。</li> <li>○ 発病する作物の連作を避ける(アブラナ科、ナス科、キョウリ科、ユリ科等)。</li> <li>○ 低温地を避け、排水を良くする。</li> <li>○ 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。</li> </ul>	発病前	31	31+14	バリダシン液剤5 スターナ水和剤 ソタールWDG	1:バリダマイシン 1:オキリニツグ酸 1:オキリニツグ酸2:トルクロホスチル	800倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	5回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ○	トマト、きくへの飛散注意。
黒腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 秋に降雨が多いと多発しやすい。</li> <li>○ 幼苗期では、子葉頂部で発病し、やがて枯れる。</li> <li>○ 本圃においては、主に下葉から発生し、葉縁部にV字型の病斑を形成する。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ 薬剤散布時の展着剤加用で効果が上がる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>○ 発病株は早期除去する。</li> <li>○ 低温地を避け、排水を良くする。</li> <li>○ 耐病性品種を選択する。</li> </ul>	発病初期	U18 31+M1 41+25	25+M1 24+M1 24+M1	バリダシン液剤5 ナレート水和剤 アグリマイシン—100 トーマイン水和剤 カスミンポルドー カッパパーシン水和剤	1:バリダマイシン 1:オキリニツグ酸2:有機銅 1:オキシトリアイリソ2:ストレプトマイシン硫酸塩 1:ストレプトマイシン硫酸塩2:有機銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	800倍 800倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 4回以内 4回以内	普 普 普 普	△ × △ ×※	トマト、きくへの飛散注意。
苗立枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 多湿条件下で発生が多い。</li> <li>○ 高温時にリゾクトニア属菌による被害が多く、低温時にピシウム属菌による被害が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> </ul>	床土消毒	U18 31+M1 41+25	25+M1 24+M1 24+M1	バリダシン液剤5 ナレート水和剤 アグリマイシン—100 トーマイン水和剤 カスミンポルドー カッパパーシン水和剤	1:バリダマイシン 1:オキリニツグ酸2:有機銅 1:オキシトリアイリソ2:ストレプトマイシン硫酸塩 1:ストレプトマイシン硫酸塩2:有機銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	800倍 800倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 4回以内 4回以内	普 普 普 普	△ × △ ×※	トマト、きくへの飛散注意。
株腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ リゾクトニア属菌による病害。</li> <li>○ 地際部が褐変し、繊維質のみとなり、腐敗する。</li> <li>○ くもの巣状のかびを多湿条件下で生じる。</li> <li>○ 結球全面に腐敗が広がるが、腐敗は表面の腐敗程度であり、結球内部へはほとんど進展しない。</li> <li>○ 結球～収穫期に降雨が続くと発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病株は早期除去する。</li> <li>○ 低温地を避け、排水を良くする。</li> </ul>	発病前	29 12 14 1 7 7 7 7 31+14 U18 11 11 7+M5 2	29 12 14 1 7 7 7 7 31+14 U18 11 11 7+M5 2	フロキサゾールSC セハイブアフロアブル20 リンレックス水和剤 トップジンM水和剤 モンカフトフロアブル40 アフェクトフロアブル カンタストライフロアブル ネクスターフロアブル バレード20フロアブル ソタールWDG バリダシン液剤5 アミスター20フロアブル メジャーフロアブル ベンジセイバー ロブアール水和剤	1:フロキサゾール 1:リンレックス水和剤 1:トップジンM水和剤 1:モンカフトフロアブル 1:アフェクトフロアブル 1:カンタストライフロアブル 1:ネクスターフロアブル 1:バレード20フロアブル 1:ソタールWDG 1:バリダマイシン 1:アミスター20フロアブル 1:メジャーフロアブル 1:ベンジセイバー 1:ロブアール水和剤	500ml/10a 1,000倍 500～1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,500倍 1,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 800倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍	定植前 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	1回 3回以内 3回以内 2回以内 4回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 4回以内 3回以内 2回以内 4回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	× ○ △ △ △ △ ○ △ ○ △ ○ △ △ △ △ △ △ △ △	土壌全面散布(液量150～200)、かぶれ注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤 微生物農薬(参考資料P.20)参照 フロンサートSC	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項																		
														作業 付前	29	7	2	12	1	1	11	11	7+M5	7	7	7	7	M7	11+7	10+1	M5
菌核病	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病後は急速にまん延するので予防散布を徹底する。</li> <li>低温(18~20℃)、多湿条件で発病する。</li> <li>発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。</li> <li>患草がないことで軟腐病と区別可能である。</li> <li>結球期から発生することが多く、初めに下葉から発生し、後に結球部が腐敗する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。排水を良くする。</li> <li>夏期に1か月程度、灌水する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>29</li> <li>7</li> <li>2</li> <li>12</li> <li>1</li> <li>1</li> <li>11</li> <li>11</li> <li>7+M5</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>M7</li> <li>11+7</li> <li>10+1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>29</li> <li>7</li> <li>2</li> <li>12</li> <li>1</li> <li>1</li> <li>11</li> <li>11</li> <li>7+M5</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>7</li> <li>M7</li> <li>11+7</li> <li>10+1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フロンサートSC</li> <li>ハレート20フロアブル</li> <li>ロブテール水和剤</li> <li>ゼイビアフロアブル20</li> <li>バンレート水和剤</li> <li>トップジンM水和剤</li> <li>アムスター20フロアブル</li> <li>ファンタジスタ顆粒水和剤</li> <li>マジヤーフロアブル</li> <li>ベジセイバー</li> <li>カンタスドライフロアブル</li> <li>アフェットフロアブル</li> <li>ハレート20フロアブル</li> <li>ケンジャフロアブル</li> <li>ネクスターフロアブル</li> <li>バルクートフロアブル</li> <li>シグナムWDG</li> <li>ニマイバー水和剤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:フルジナム</li> <li>1:レシフルスト</li> <li>1:フロソネ</li> <li>1:フルジオキニル</li> <li>1:ベニミル</li> <li>1:チオフアネートメチル</li> <li>1:アキシストロビン</li> <li>1:レキストロビン</li> <li>1:レキストロビン</li> <li>1:ベンチオキサト2:TPN</li> <li>1:ボスカド</li> <li>1:ベンチオキサト</li> <li>1:レシフルスト</li> <li>1:イフエグスト</li> <li>1:シラザム</li> <li>1:イミダクワジニルハニル酸塩</li> <li>1:イミダクワジニルハニル酸塩</li> <li>1:レクロロキシン2:ボスカド</li> <li>1:シトエネカルブ2:ベニミル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>500ml/10a</li> <li>希釈水量:100~2000/10a</li> <li>100倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000~1,500倍</li> <li>2,000~3,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,500倍</li> <li>2,000~4,000倍</li> <li>1,500倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,500倍</li> <li>1,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>は種又は定植前</li> <li>育苗後半~定植当日</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫3日前まで</li> <li>収穫14日前まで</li> <li>収穫7日前まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> <li>収穫前日まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2回以内</li> <li>1回</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> <li>6回以内</li> <li>2回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全面散布土壌混和2回以内(但し、苗床では1回以内、本圃では1回以内)</li> <li>○ 使用方法(注)(P.300)</li> <li>○ かんきつへの飛散注意</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> </ul>																				
												べと病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>10~15℃が発病適温で、多湿条件で発生が多くなる。</li> <li>肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。</li> <li>外葉から下葉に発生し、淡褐色の不定形の病斑が生じる。</li> <li>育苗中に発病すると病気の進展が早く、子葉の裏側にかびが生じて生育が阻害される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>肥培管理に注意し、収穫期まで肥切れしないようにする。</li> <li>密植を避け、通風をよくする。</li> <li>発病する作物の連作を避ける(キヤベツ、ブロッコリー、カリフラワー)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>M5</li> <li>M3</li> <li>M3</li> <li>M3+4</li> <li>49+40</li> <li>40+M1</li> <li>40+M3</li> <li>40+M3</li> <li>40+M5</li> <li>1+M5</li> <li>11</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>40</li> <li>U17</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダコニール1000</li> <li>ジマンダイセン水和剤</li> <li>ベンコゼブフロアブル</li> <li>リドミルゴールドMZ</li> <li>オロンデイスクワレトラSC</li> <li>フェステイバルC水和剤</li> <li>カンパネラ水和剤</li> <li>ベネセット水和剤</li> <li>ブロボーズ顆粒水和剤</li> <li>ダコニール水和剤</li> <li>マジヤーフロアブル</li> <li>ライメイフロアブル</li> <li>ユトフインフロアブル</li> <li>レーバスフロアブル</li> <li>ピシロックフロアブル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1:TPN</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:マンゼブ</li> <li>1:マンゼブ2:メタキシルM</li> <li>1:オキサチアプロピル2:マンジプロバシト</li> <li>1:シトモル72:塩基性塩化銅</li> <li>1:ベンチアハリカルブイプロピル2:マンゼブ</li> <li>1:ベンチアハリカルブイプロピル2:マンゼブ</li> <li>1:ベンチアハリカルブイプロピル2:TPN</li> <li>1:ベニミル2:TPN</li> <li>1:レキストロビン</li> <li>1:アミメフロアブル</li> <li>1:エトキキヤム</li> <li>1:マンジプロバシト</li> <li>1:レカルブトラリス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>400~600倍</li> <li>500~600倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>750~1,000倍</li> <li>750~1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>2,000~3000倍</li> <li>1,000倍</li> <li>2,000倍</li> <li>1,000倍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>2回以内</li> <li>3回以内</li> <li>4回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> <li>3回以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> <li>普</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ かぶれ注意</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> <li>○ 葉害等(注)(P.299)</li> </ul>										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
根こぶ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。</li> <li>○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。</li> <li>○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。</li> <li>○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。</li> <li>○ 薬剤を土壌混和する場合、土壌が乾燥時実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 床土は無病土を使用する。</li> <li>○ 多発圃場での作付を避ける。</li> <li>○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。</li> <li>○ 排水を良くし高畝とする。</li> <li>○ アブラナ科雑草(タネソケバナ、ナズナ等)を除草する。</li> <li>○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。</li> <li>○ 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。</li> <li>○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。</li> <li>○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。</li> </ul>	作付前		M5	ダコソイル	1:TPN	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 作条及び全面施用土壌混和かぶれ注意 ○ 植穴処理土壌混和かぶれ注意 ○ 全面土壌混和 ○ 作条土壌混和 ○ 全面土壌混和
					M5	ダコソイル	1:TPN	5～10g/植穴1穴	は種又は定植前	1回	普	×	
					36	ネビジン 粉剤	1:フルスルアゾド <sup>1</sup>	20～30kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	○※	
					36	ネビジン 粉剤	1:フルスルアゾド <sup>1</sup>	20kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	○※	
					36	ネビリュウ	1:フルスルアゾド <sup>1</sup>	20～30kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	○※	
					29	フロキサド粉剤	1:フルアジナム	30～40kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	△※	
					29	フロキサド粉剤	1:フルアジナム	15～20kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	△※	
					29	フロキサドSC	1:フルアジナム	500ml/10a	は種又は定植前	2回以内	普	×	
								<b>注意事項:フルアジナム使用回数2回以内(本圃では1回以内)</b>					
								<b>注意事項:アミスルプロム:8回以内(但し、床での土壌混和は2回以内、本圃での土壌混和は2回以内、散布は4回以内)</b>					
					21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスルプロム	200～500倍	定植前	1回	普	△※	
					21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスルプロム	300g/10a	定植前	2回以内	普	△※	
					21	オラクル粉剤	1:アミスルプロム	30kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	
					21	オラクル粉剤	1:アミスルプロム	20kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	
					21	ランマンフロアブル	1:シアンジアニン	500倍	定植前日～当日	1回	普	○	
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 発生主体はダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ。</li> <li>○ ダイコンアブラムシは早春から初夏、モモアカアブラムシは春と秋に多い。</li> <li>○ 回数注意</li> <li>○ シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。</li> <li>○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。</li> <li>○ シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。</li> </ul>	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアエジン	0.25g/株	は種時	1回	普	△	○ 覆土後セル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から散布する。 ○ 植元散布 ○ 株元散布 ○ 使用量(P.300)
					4A	アルバリン 粒剤	1:ジノチアフラン	2g/株	育苗期	1回	普	△	
					4A	スタークル 粒剤	1:ジノチアフラン	2g/株	育苗期	1回	普	△	
					28+4A	ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニロニアアロール 2:チアトキサム	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	は種後土後～育苗後半	1回	普	△	
					4A	アクトラ粒剤5	1:チアトキサム	1～2g/株	育苗期後半	1回	普	×	
					4A	ダントツ粒剤	1:クロチアエジン	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	
					4A	ダントツ粒剤	1:クロチアエジン	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半	1回	普	△	
					4A	アクトラ顆粒水溶液	1:チアトキサム	100倍	育苗期後半	1回	普	△	
					28	アリロソノ粒剤オメガ	1:シアントラニロニアアロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	
					28	アリロソノ粒剤オメガ	1:シアントラニロニアアロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
					28+4A	ジュリボフロアブル	1:クロラントラニロニアアロール 2:チアトキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
					4A+28	アベイル粒剤	1:アセタズアクトラニロニアアロール 2:シアントラニロニアアロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
					4A+28	アベイル粒剤	1:アセタズアクトラニロニアアロール 2:シアントラニロニアアロール	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
					28	ベリマーグSC	1:シアントラニロニアアロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	
					4A	アルバリン 顆粒水溶液	1:ジノチアフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	
					4A	スタークル 顆粒水溶液	1:ジノチアフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 回数	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類			発生前	4A 4A+5		モスヒラン粒剤	1:7セタミリド	0.5~1g/株	定植前日 ~定植当日	1回	劇	△	○株元散布
						ガードナーフロアブル	1:1.6ダクプロリド2:スレノサド	100倍	定植3日前 ~定植当日	1回	劇	△	○使用方法(注)(P.300)
						アドマイヤー1粒剤	1:1.6ダクプロリド	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
						モスヒラン粒剤	1:7セタミリド	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
						ダントツ粒剤	1:クロチニジン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和
						アクタラ粒剤5	1:チアメキサム	2g/株	定植時	1回	普	×	○植穴処理
						アルベリン粒剤	1:ジノチフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
						スタークル粒剤	1:ジノチフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
						ミネクトデエオ粒剤	1:シアントニリアロール2:チアメキサム	1g/株	定植時	1回	普	△	○株元散布
						ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	4A 28 28 28	39	オリオン水和剤40	1:7ラニカルブ
アドマイヤーフロアブル	1:1.6ダクプロリド	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇							△	○葉害等(注)(P.299)
モスヒラン顆粒水溶剤	1:7セタミリド	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇							△	
アクタラ顆粒水溶剤	1:7セタミリド	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇							△	
ダントツ水溶剤	1:クロチニジン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普							△	
アルベリン顆粒水溶剤	1:ジノチフラン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普							△	
スタークル顆粒水溶剤	1:ジノチフラン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普							△	
ハチハチ乳剤	1:トルエンジド	1,000~2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇							×	
ウララDF	1:プロニカゾン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普							×	
コルト顆粒水和剤	1:ヒリルキゾン	3,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普							×	
ベネビアOD	1:シアントニリアロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×							
ジュリボフロアブル	1:クロチニジン2:チアメキサム	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△							
トランスフロームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○							
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	4A 28 28 28		ダントツ粒剤	1:クロチニジン	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元処理
						ベリマーグSC	1:シアントニリアロール	400倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
						ヨーバルフロアブル	1:7ラニカルブ	200倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
						プレバソフロアブル5	1:クロチニジン2:チアメキサム	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
						カルホス微粒剤F	1:イネチチオン	6kg/10a	は種時又は植付時	1回	劇	△	○土壌表面散布土壌混和処理
						フォース粒剤	1:7アルリン	4kg/10a	定植時	1回	劇	×	○全面土壌混和
						アディオン乳剤	1:ベルトリン	4,000~8,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	○株元灌水0.5L/m <sup>2</sup>
						ネキリエースK	1:イネチチオン	3kg/10a	は種時又は定植時	1回	普	△	○土壌表面株元処理
						デナボン5%ベイト	1:NAC	3~6kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○株元散布
						ガードベイトA	1:ベルトリン	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○*	○株元散布 合ピレ(注)(P.15)
アクセルベイト	1:タフムゾン	3~6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○株元散布						

病害虫名		耕種的防除法		薬剤防除法									
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
ア オ ム シ	<p>(発虫の特徴)</p> <p>標準和名(モンシロチョウ)</p> <p>春～初夏及び10～11月に被害が多い。</p> <p>(防除上のポイント)</p> <p>若齢幼虫期に防除する。</p> <p>(留意点)</p> <p>回数注意</p> <p>アクトランニリアプロール2:チアトキサム、ベリマールSC、ジュロポフロアブル(シアントラニリアプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p> <p>ジュロポフロアブル、ブレバソンプロアブル5、キックオフ顆粒水和剤は同一成分(クロラントラニリアプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p>	発生前	28+4A		ミネクトデユオ粒剤	1:シアントラニリアプロール2:チアトキサム	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	は種蒔き後～育苗期後半	1回	普	△	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			4A		アクトラ粒剤5	1:チアトキサム	2g/株	育苗期後半	1回	普	×	株元散布	
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチニジン	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	株元処理	
			28		プリロソノ粒剤オメガ	1:シアントラニリアプロール	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.300)	
			28		プリロソノ粒剤オメガ	1:シアントラニリアプロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.300)	
			28		ベリマールSC	1:シアントラニリアプロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28+4A		ジュロポフロアブル	1:クロラントラニリアプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニリアプロール	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニリアプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		ブレバソンプロアブル5	1:クロラントラニリアプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		ブレバソンプロアブル5	1:クロラントラニリアプロール	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	展着剤は使用しない。 苗地床1平方メートルあたり200 灌水、回数注意(注)(P.300)	
			28		ヨーバルフロアブル	1:トラニリアプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	使用方法(注)(P.300)	
			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:シ/チフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	使用方法(注)(P.300)	
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シ/チフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	使用方法(注)(P.300)	
			28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニリアプロール2:シ/チフラン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	0.5～1g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	株元散布	
			4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○	
			4A		アルバリン粒剤	1:シ/チフラン	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○	
			4A		スタークル粒剤	1:シ/チフラン	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○	
			28+4A		ミネクトデユオ粒剤	1:シアントラニリアプロール2:チアトキサム	1g/株	定植時	1回	普	△	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										水産 (注)	注意事項
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒				
ア オ ム シ			1A		オリオン水和剤40	1:アニコバル	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	劇	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 眼に刺激痛、かぶれ注意		
			5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノバト	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△			
			5		デアアナSC	1:スピネラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		△	
			6		アフターム乳剤	1:エヌマクシ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		△※	
			6		アニキ乳剤	1:ルピカチン	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※		△※	
			13		コテツフロアブル	1:コロフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※		△※	
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオソクム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△		△	
			15		カスケード乳剤	1:フルフェキサズロン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		△	
			15		マツチ乳剤	1:ルフェキソニ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		△	
			15		ノーモルト乳剤	1:フルベンダズロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		△	
			15		アタプロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△		△	
			18		ファルコンフロアブル	1:外キノフェノシト	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		△	
			21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンダゾト	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×		×	
			22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○		○	
			22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○		○	
			22B		アクセルフロアブル	1:メタフルピリン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○	
			28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンダズト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		△	
			28		プレバソフフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		△	
			28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		△	
			28		ヨーバルフロアブル	1:トラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		△	
28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアアキ サマ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	△					
30		グレーシア乳剤	1:フルキサタジド	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	△					
30		プロフレアSC	1:フロアラニド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	△					
un		プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	△					
34		ファインセーフフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:フロオキニ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	×					
28+4A		ミネクトデユオ粒剤	1:シアントラニプロール2:チアアキ サマ	40g/セル成型青苗ト 11箱または6.7ハー ボット1冊	は種蒔き後 ～育苗期後半	1回	普	△	△					
28		プリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	1g/株	育苗期後半 ～定植時	1回	普	○	○					
28		プリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	50g/セル成型青苗ト 11箱または6.7ハー ボット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○					



病害虫名	耕種的防除法	病害虫の特徴 防除上のポイント等	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)
コナガ		<p>○ ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。</p> <p>○ 回数注意 (留意点) フリロソニン粒剤オメガ、アベイル粒剤、ベリマークSC、ミネクトデユオ粒剤は、同一成分(シアントラニリプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内)、定植後の散布は3回以内)。</p>	発生前	4A+28		アベイル粒剤	1:アセチルピリト2:シアントラニリプロール	1g/株 40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○ 株元散布 ○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
			28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	400倍	育苗期後半	1回	普	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意	
			28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロロピリフェニプロール2:シノテフラソン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	○ 使用方法(注)(P.300)	
			28+4A		ミネクトデユオ粒剤	1:シアントラニリプロール2:チアトキサリム	1g/株	定植時	1回	普	○ 株元散布、回数注意(注)(P.300)	
			5		スピエース顆粒水和剤	1:ピノザド	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
			5		ディアナSC	1:ピネトリアム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			6		アファーム乳剤	1:エマメチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
			13		コテツフロアブル	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
			14		バダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫14日前まで	4回以内	劇	×	
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオシグム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
			15		アタプロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			15		ノーモルト乳剤	1:フルルベンスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			15		カスタード乳剤	1:フルフェキサロン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			15		マツチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			18		ファルコンフロアブル	1:外キシフェジド*	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト*	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
			22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ*	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
			22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ*	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
			22B		アクセルフロアブル	1:メタフルゾン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)
			28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			30		グレーション乳剤	1:フルキサメタジド*	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			30		フロレアSC	1:フロラエリド*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			34		ファインセーブフロアブル	1:フロトキ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
			un		フレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					BT剤(参考資料P.15)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
														発生 前
ハイマダラノメイガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>別名(ダイコンシンクイムシ)。(発生の特徴)</li> <li>夏期の高温少雨で多発する。(留意点)</li> <li>回数注意</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。</li> </ul>	2B		プリンズ粒剤	1:7イプロール	20~30g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(30×60cm、使用土壌約3~40)	は種前	1回	普		△	○均一混和	
			2B		プリンズ粒剤	1:7イプロール	20~30g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(30×60cm、使用土壌約3~40)	は種時~定植前	1回	普		△	○均一散布	
			28+4A		ミネクトデユオ粒剤	1:シアントラネリアプロール2:チアトキサム	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	は種後土後~育苗後半	1回	普		△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		プリロソノ粒剤オメガ	1:シアントラネリアプロール	1g/株	育苗期後半~定植時	1回	普		○	○回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.300)	
			28		プリロソノ粒剤オメガ	1:シアントラネリアプロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半~定植当日	1回	普		○	○回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.300)	
			28		プレバソンプロアブル5	1:クロラントラネリアプロール	100倍	育苗期後半~定植当日	1回	普		△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラネリアプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普		△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		ベリマーズSC	1:シアントラネリアプロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普		△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		ヨーバルフロアブル	1:チラネリアプロール	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普		△	○使用方法(注)(P.300)	
			28+4A		ミネクトデユオ粒剤	1:シアントラネリアプロール2:チアトキサム	1g/株	定植時	1回	普		△	○株元散布、回数注意(注)(P.300)	
			15		マツチ乳剤	1:ルフェキソ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普		△	○IGR剤(注)(P.15)参照	
			15		カスケード乳剤	1:フルフェキサズロン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普		△	○IGR剤(注)(P.15)参照	
			18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノゾド	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普		○	○IGR剤(注)(P.15)参照	
			18		フェルコンフロアブル	1:外ネフェンゾド	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普		○	○IGR剤(注)(P.15)参照	
			5		スピエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普		△		
			5		ディアナSC	1:スピノサト	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		△		
			6		アファーム乳剤	1:エネクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		△	△※	
			6		アニキ乳剤	1:レピクチン	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普		△	△※	

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法								水産 (注) △※	人 毒 (注)	注意事項
時期	IRAC コード			FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	水産 (注) △※				
ハ イ マ ダ ラ ノ メ イ ガ	発生 初期			コテップフロアブル	1:コルフェニル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	△	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意				
				リーフガード顆粒水和剤	1:チオシアム	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	△					
				ハチハチ乳剤	1:トルフェネブト	1,000~2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	×					
				トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○					
				ファイントリムDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○					
				アクセルフロアブル	1:メナムシオン	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	○					
				フェニックス顆粒水和剤	1:フルヘンシアスト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	△					
				プレバンスフロアブル5	1:クロラントリニアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△					
				ベネビアOD	1:シアントリアプロール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	△					
				ヨーバルフロアブル	1:チトリアプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	△					
ジュリボフロアブル	1:クロラントリニアプロール2:チアトキ サム	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	△									
30	30	un	グレーシア乳剤 プロフレアSC プレオフロアブル	1:フルキサメタミド 1:プロアラニル 1:ヒリタリル	2,000~3,000倍 2,000~4,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 2回以内	△ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)					
28+4A	28+4A	un	ジュリボフロアブル	1:クロラントリニアプロール2:チアトキ サム	1,000倍	は種時~育苗期後半	1回	△						
28	28		プレバンスフロアブル5	1:クロラントリニアプロール	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	△						
28+4A	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントリニアプロール2:チアトキ サム	200倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	△						
28	28		ベリマークSC	1:シアントリアプロール	400倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	△						
28+4A	28+4A		キックオブ顆粒水和剤	1:クロラントリニアプロール2:ジノデアラ ン	100倍	定植前日~定植時	1回	△						
5	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500~5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	△						
5	5		デアナSC	1:スピノサト	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	△						
6	6		アフアム乳剤	1:エマメチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△※						
13	13		コテップフロアブル	1:コルフェニル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	△※						
15	15		ノーモルト乳剤	1:フルヘンシアスト	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	△						
15	15		アダプロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	△						
15	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサロン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	4回以内	△						
15	15		マッチ乳剤	1:フルフェキサロン	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	△						
18	18		ファルコンフロアブル	1:メキシフェンゾト	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	△						
22A	22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○						
22A	22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	○						
28	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルヘンシアスト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	△						
28	28		プレバンスフロアブル5	1:クロラントリニアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△						
28	28		ベネビアOD	1:シアントリアプロール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	△						
28	28		ヨーバルフロアブル	1:チトリアプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	△						
28+4A	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントリニアプロール2:チアトキ サム	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	△						
30	30	un	グレーシア乳剤 プロフレアSC プレオフロアブル	1:フルキサメタミド 1:プロアラニル 1:ヒリタリル	2,000~3,000倍 2,000~4,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 2回以内	△ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)					
BT剤(参考資料P.15)参照														
ヨ ト ウ ム シ	発生 前	○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 ○ 若齢幼虫期に防除する。 ○ 回数注意 (留意点) ○ 回数注意 プレバンスフロアブル、ジュリボフロアブル、キックオブ顆粒水和剤は同一成分(クロラントリアプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内。)	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	ジュリボフロアブル	1:クロラントリニアプロール2:チアトキ サム	1,000倍	は種時~育苗期後半	1回		△	○ 苗圃床1㎡当たり200粒注、回数注意 ○ 回数注意、使用方法(注)(P.300) ○ 回数注意、使用方法(注)(P.300) ○ 回数注意、使用方法(注)(P.300) ○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)			
				プレバンスフロアブル5	1:クロラントリニアプロール	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回		△				
ジュリボフロアブル	1:クロラントリニアプロール2:チアトキ サム	200倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	△									
ベリマークSC	1:シアントリアプロール	400倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	△									
キックオブ顆粒水和剤	1:クロラントリニアプロール2:ジノデアラ ン	100倍	定植前日~定植時	1回	△									

薬剤防除法				耕種防除法			病害虫の特徴 防除上のポイント等				
病害虫名	時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハスモンヨトウ	発生前	28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントリニプロール	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300) ○展着剤は使用しない。 ○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	28			ベリマーグSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	28			ヨーバルフロアブル	1:トラニプロール	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
	28+4A			ジュリボフロアブル	1:クロラントリニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	4A+28			アベイル粒剤	1:アセチアミト2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	4A+28			アベイル粒剤	1:アセチアミト2:シアントラニプロール	1g/株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○株元散布、回数注意
	28+4A			キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントリニプロール2:シノテフラ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	5	発生初期		デアナナSC	1:ピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	6	6		アフアーム乳剤	1:エマカチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	6	13		アニキ乳剤	1:ピピカチン	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	15	15		コテツフロアブル	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
	15	15		ノーモルト乳剤	1:アルヘンズロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
	15	15		アダブロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
	15	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
	15	15		マツチ乳剤	1:ルフェキサゾン	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
18	18		ファルコンフロアブル	1:メキソフェニト	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
22A	22A		マトリックフロアブル	1:クロメフェニト	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
22A	22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
22A	22A		ファイナルDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
22B	22B		アクセルフロアブル	1:タフルジン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
22B	22B		アクセルベイト	1:タフルジン	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○株元散布	
28	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルヘンシアス	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
28	28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントリニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
28	28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
28+4A	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントリニプロール2:チアトキサム	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
30	30		グレース乳剤	1:フルキサミダス	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
30	30		フロアレアSC	1:フロアラニト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
un	un		フロアフロアブル	1:ヒリダリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)	
13	13		BT剤(参考資料P.15)参照	BT剤(参考資料P.15)参照					△	※	
28	28		コテツフロアブル	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	※	
28	28		ヨーバルフロアブル	1:トラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	△	
15	15		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	△	
un	un		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	△	
5	5		プレバソンフロアブル	1:ヒリダリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	△	
22A	22A		スビノエース顆粒水和剤	1:ピネトラム	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
22A	22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○	
22A	22A		ファイナルDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○	
30	30		フロアレアSC	1:フロアラニト	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○	
30	30		BT剤(参考資料P.15)参照	BT剤(参考資料P.15)参照					△	※	
シロイチモジヨトウ	発生初期			コテツフロアブル	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	※
	28			ヨーバルフロアブル	1:トラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
	28			ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
	15			カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
	un			プレバソンフロアブル	1:ヒリダリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
	5			スビノエース顆粒水和剤	1:ピネトラム	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
	22A			トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
	22A			ファイナルDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
	30			フロアレアSC	1:フロアラニト	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	

病害虫名		病害虫の被害 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法										
						時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産	注意事項
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 5～11月にかけて数世代発生する。 ○ (防除上のポイント) ○ 夏季以降の発生が多い。蛹で越冬する。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 次世代の増殖頭となる収穫残さの早期処分。発生放任圃場を作らない。	発生	15	カスケード乳剤	1:フルメトキサロン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照					
			発生初期	22B 28 28+4A	アケセルフロアブル ヨーバルフロアブル ジュリポフロアブル	1:タフルジン 1:トラネロプリロール 1:クロラントラニプロール2:チアメキサム	1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで	3回以内 3回以内 3回以内	○ 普 ○ 普 ○ 普 △						
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 外葉が加害されると、食害部位がカルス状になり、その後褐色～黒色化する。	○ 圃場周辺の除草を行う。	発生	5	デオナソールSC	1:スピネタム	50～200倍	育苗期後半	1回	△	○ 使用方法(注)(P.300)					
			発生前	28 4A+5	ベリマークSC ガードナードフロアブル	1:シアントラニプロール 1:イタダクプロプリ2:スピネタム	400倍 100倍	育苗期後半～定植当日 定植3日前～定植当日	1回 1回	○ 普 ○ 普 △	○ 使用方法(注)(P.300) ○ 葉害等(注)(P.299)					
ネギアザミウマ	(発生の特徴) ○ 外葉が加害されるとかすり状となる。 ○ 結球部が加害されると、食害部位がカルス状になり、その後褐色～黒色化する。 ○ 6～8月に被害が多い。 ○ 回数注意 ○ (留意点) プリロンツ粒剤オメガ、アペイル粒剤、ベリマークSC、ミネクトデューオ粒剤は、同一成分(シアントラニプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。 プレバソフロアブル、ジュリポフロアブル、キックオフ顆粒水和剤は同一成分(クロラントラニプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内。)		発生	14 34 15 30 4A	リーフガード顆粒水和剤 ファイネンフロアブル カスケード乳剤 グレースリア粒剤 ダントツ粒剤	1:チオジグム 1:フロトリキン 1:フルメトキサロン 1:フルキサメタリド 1:プロチニジン	1,500倍 1,000～2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～3,000倍 3～6kg/10a	収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 育苗時	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 1回	△ △ △ △ △ △	○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普	○ 播種処理土壌湿和 ○ 株元処理 ○ 使用方法(注)(P.300)				
			発生前	4A 28 28	ダントツ粒剤 ダントツ粒剤 プリロンツ粒剤オメガ プリロンツ粒剤オメガ	1:クロチニジン 1:クロチニジン 1:シアントラニプロール 1:シアントラニプロール	0.5g/株 育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半～定植時	1回 1回 1回 1回	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.300) ○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.300)							
			発生初期	28+4A	ジュリポフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアメキサム	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)						
			発生	28 4A+28	ベリマークSC アペイル粒剤	1:シアントラニプロール 1:アペルミ2:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回 1回	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300) ○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)						
			発生	28+4A	キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロール2:ジノテラリン	100倍	定植前日～定植時	1回	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)						
			発生初期	4A 5 6+15	モスピーダ顆粒水溶剤 スピルエース顆粒水和剤 デオナソールSC	1:スピネタム 1:スピネタム 1:エマメチル安息香酸塩2:ルフェエロン	2,000～4,000倍 5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	5回以内 3回以内 2回以内 3回以内	△ △ △ △	○ 普 ○ 普 ○ 普 ○ 普	○ IGR剤(注)(P.15)参照				
			発生	9B 21A	コルト顆粒水和剤 ハチハチ乳剤	1:ヒトリルキナゾン 1:トルフェンゾラト	3,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫14日前まで	3回以内 2回以内	△ △	○ 普 ○ 普	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意				
			発生	un 14 14	スラゴ リーフガード顆粒水和剤 バザンSG水溶剤	1:チオジグム 1:カルタップ	1～5g/m <sup>2</sup> 1,500倍 1,500倍	発生時 収穫7日前まで 収穫14日前まで	－ 3回以内 4回以内	○ 普 ○ 普 ○ 普	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置					
			カサタメタツムシ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動する。 ○ 水分の多い柔らかい部分で好んで食害する。		発生	un	メタアルデヒド剤(参考資料P.29)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>防除上のポイント</li> <li>食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。</li> <li>予防散布を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病する作物の連作を避ける(アブラナ科、ナス科、キク科、ユリ科等)。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> <li>発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。</li> </ul>	発病前	31	31+M1	スターナ水和剤 ナレート水和剤	1:オキリニツ酸 1:オキリニツ酸2:有機銅	2,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで	2回以内 2回以内	普 普	△ ×	
花蕾腐敗病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>発蕾時に曇天や降雨が続いた場合に多発しやすくなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> </ul>	発病前	31		銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照 スターナ水和剤	1:オキリニツ酸	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
黒腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>秋雨時や台風通過後に多発しやすしい。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。</li> <li>予防散布を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> </ul>	作付前	P2		銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照 オリゼメート顆粒水和剤	1:プロホネゾール	100倍	定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)かぶれ注意
黒斑細菌病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>秋雨時や台風通過後に多発しやすしい。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。</li> <li>予防散布を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> <li>低湿地を避け、排水を良くする。</li> </ul>	作付前	P2		オリゼメート顆粒水和剤	1:プロホネゾール	100倍	定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)かぶれ注意
病苗枯	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>多湿条件下で多発する。</li> <li>徒長苗は罹病しやすしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> </ul>	育苗初期		31	スターナ水和剤	1:オキリニツ酸	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
核病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>発病後は急速にまん延するので予防散布を徹底する。</li> <li>低温(18~20℃)、多湿条件下で発病する。</li> <li>発病部には、白色縮状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。</li> <li>悪臭がないことで軟腐病と区別可能である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。</li> <li>排水を良くする。</li> <li>夏期に1か月程度、灌水する。</li> </ul>	作付前	7	7+M5	リンソックス水和剤 バレート20フロアブル	1:トリコホスチル 1:ピラジフルス	500倍 100倍	収穫21日前まで 育苗期後半~定植当日	1回 1回	普 普	△ ○	○30/㎡株元灌水。登録は苗立枯病(リンソックス菌) ○使用方法(注)(P.300) ○はなやさい類で登録
			発病初期			ベジセイバー	1:ベンチオチゾル2:TPN	1,000倍	出蕾前(但し、収穫21日前まで)	2回以内	普	△	○葉香等(注)(P.299) ○はなやさい類で登録 ○はなやさい類で登録 ○はなやさい類で登録 ○葉香等(注)(P.299)
			発病前	1		トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
			発病前	1		ベレレート水和剤	1:ベ'ミル	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			発病前	7		カンタスドライフロアブル	1:ボ'スガ'	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			発病前	7		アブエットフロアブル	1:ベンチオチゾル'	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病前	7		パレート20フロアブル	1:ピラジフルス'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病前	11		ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ヒリールカンパル	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
			発病前	11		メジューフロアブル	1:ヒ'キキストロピ'ン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病前	11		スクレアフロアブル	1:マンデ'ストロピ'ン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			発病前	12		セイブアーフロアブル20	1:フルシ'キソニル	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
べと病	<ul style="list-style-type: none"> <li>10～15℃で発病適温で、多湿条件で発生が多くなる。</li> <li>肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>肥培管理に注意し、収穫期まで肥切れしないようにする。</li> <li>密植を避け、通風をよくする。</li> <li>発病する作物の連作を避ける(キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー)。</li> </ul>	発生初期		11	アミスター20フロアブル	1:アノキシロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)
					21	ランマンフロアブル	1:ピコキシロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:シアンホフアズ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					22	エトフィンフロアブル	1:メスルアロム	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:エチホキサラム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+7	シグナムWDG	1:アノキシロビン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
					U17	ピシロクフロアブル	1:ピクロロトビン	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					40+M5	プロボーズ顆粒水和剤	1:ピカルボトランクス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					49+40	オロンデイズウルトラSC	1:ベンチアハカリカルブ	2,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	2回以内	普	○	
					M5	ダコニール1000	2:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	2回以内	普	×	
						銅剤及び混合剤(P.317)参照							
						土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
根こぶ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。</li> <li>根こぶが腐敗すると大量の休眠胚子が放出される。</li> <li>休眠胚子は表土15cmまでに多い。</li> <li>本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。</li> <li>薬剤の土壌混和は、土壌乾燥時に実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> <li>多発は場での作付を回避する。</li> <li>発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。</li> <li>排水を良くし高畝とする。</li> <li>アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草す。</li> <li>発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。</li> <li>市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。</li> <li>おとり作物の葉だいこん等を間作する。</li> <li>石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。</li> </ul>	作付前		36	ネビジン粉剤	1:フルスルファズ	20～30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○全面土壌混和、回数(注)
					36	ネビリュウ	1:フルスルファズ	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○作条土壌混和、回数(注)
					36	ネビリュウ	1:フルスルファズ	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○全面土壌混和、回数(注)
					29	フロムサイド粉剤	1:フルアジナム	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○全面土壌混和
					29	フロムサイド粉剤	1:フルアジナム	15～20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○作条土壌混和
					29	フロムサイド粉剤	1:フルアジナム	500ml/10a	定植前	1回	普	×	○全面散布後土壌混和(液量100～2000/10a)、かぶれ注意
					21	オラクフル顆粒水和剤	1:フルアジナム	200～500倍	定植前	1回	普	△※	○使用の方法(注)(P.300)
					21	オラクフル顆粒水和剤	1:フルアジナム	300g/10a	定植前	2回以内	普	△※	○1000の水で希釈し全面散布後土壌混和、回数(注)
					21	オラクフル粉剤	1:フルアジナム	30kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○全面土壌混和、回数(注)
					21	オラクフル粉剤	1:フルアジナム	20kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○作条土壌混和、回数(注)
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	定植時	1回	普	×	○1m <sup>2</sup> あたり希釈液30L土壌灌注
					21	ランマンフロアブル	1:アノキシロビン	500倍	定植前日～当日	1回	普	○	○使用の方法(注)(P.300)
黒すす病	<ul style="list-style-type: none"> <li>高温多湿時に発生が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>育苗中は高温多湿とならないよう管理し、発病苗は早期に処分する。</li> </ul>	発病前		7	ハムレード20フロアブル	1:ピラジプロルズ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○はなやさい類で登録
					7	アフェットフロアブル	1:ベクチロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○はなやさい類で登録
					7+M5	ベジセイバー	1:ベンチチオ2:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:アノキシロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)
					11	メジャーフロアブル	1:ピコキシロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピロヘンカルブ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○はなやさい類で登録
					11+7	シグナムWDG	1:ピクロロトビン	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○はなやさい類で登録
					27+11	ホライズメントライフロアブル	1:シモキサール2:アノキシロビン	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>発生の特徴</li> <li>発生主体はダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ。</li> <li>ダイコンアブラムシは早春から初夏、モモアカアブラムシは春と秋に多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。</li> <li>雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。</li> </ul>	発生前	4A	28+4A	ダントツ粒剤	1:クロチエジン	0.25g/株	は種時	1回	普	△	○覆土に均一に混和
					4A	4A	ミネクトデュオ粒剤	40g/セル成型育苗トポット1冊	は種後	1回	普	△	○使用の方法(注)(P.300)
					4A	4A	ダントツ粒剤	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元処理
					4A	4A	ベスタガード粒剤	50g/セル成型育苗トポット1冊	育苗期後半	1回	普	△	○使用の方法(注)(P.300)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (留意点)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	○回数注意 ミネオデューオ粒剤、プリロン粒剤オメガ、アベイル粒剤、ベリマールSCは同一成分(シアントラニプロロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)、ジュリボフロアブル、キックオフ顆粒水和剤(シプロラニプロロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内。)		発生前	28		プリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.300)
			発生前	28		プリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはベーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.300)
			28+4A	4A		ベリマールSC	1:シアントラニプロロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			4A+28	4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロロール2:チアメキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			4A+28	4A		アベイル粒剤	1:アセチルピリメタニプロロール	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○株元散布、回数注意
			4A+28	4A		アベイル粒剤	1:アセチルピリメタニプロロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはベーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			28+4A	4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロロール2:シノリテフラン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			4A	4A		モスピラン粒剤	1:アセチルピリメタニプロロール	0.5～1g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○株元散布
			4A+5	4A		ガードナーフロアブル	1:イミダクロプリド	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○使用方法(注)(P.300)
			4A	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリド	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A	4A		モスピラン粒剤	1:アセチルピリメタニプロロール	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和
			4A	4A		アルバリン粒剤	1:シノリテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A	4A		スターグル粒剤	1:シノリテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A	4A		アルバリン顆粒水溶液	1:シノリテフラン	100倍	定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			4A	4A		スターグル顆粒水溶液	1:シノリテフラン	100倍	定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:イミダクロプリド	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	○
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセチルピリメタニプロロール	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	○
			発生初期	4A		ダントツ水溶液	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○
			発生初期	4A		アクタラ顆粒水溶液	1:チノキサラム	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○
			発生初期	4A		アルバリン顆粒水溶液	1:シノリテフラン	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○
			発生初期	4A		スターグル顆粒水溶液	1:シノリテフラン	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○
			発生初期	4C		トランスフェオームフロアブル	1:シノリテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○
			発生初期	9B		コルト顆粒水和剤	1:ヒリルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○
			発生初期	14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオキサラム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○
			発生初期	21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルファンピラト	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○
			発生初期	28		ベネビアOD	1:シアントラニプロロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○
			発生初期	23		モベントフロアブル	1:ズピロトキサメト	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○被害は越冬期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することがある。 (防除上のポイント) ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○被害株の発生がなられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○全面土壌混和又は作条土壌混和 ○全面土壌混和 合ピレ(注)(P.15) ○土壌表面株元処理 合ピレ(注)(P.15) ○株元散布 ○株元散布 ○使用方法(注)(P.300)
			発生前	3A		フォース粒剤	1:アフルトリン	4kg/10a	定植時	1回	劇	×	○全面土壌混和 合ピレ(注)(P.15) ○土壌表面株元処理 合ピレ(注)(P.15) ○株元散布 ○株元散布 ○使用方法(注)(P.300)
			発生前	1B		ネキリエースK	1:イキサチオン	3kg/10a	定植時～生育初期 但し収穫14日前まで	4回以内	普	△	○
			発生前	3A		ガードベイトA	1:ベリルトリン	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○	○
			発生前	22B		アクセルベイト	1:メタフルゾン	3～6kg/10a	収穫前日まで	2回以内	普	○	○
			発生前	28		ヨーバルフロアブル	1:アトラニプロロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○





病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナガ	<p>病害虫の特徴 防除上のポイント等</p> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を適用しない。</li> <li>有効な薬剤を長持ちさせるために、薬剤の諸性質等を考慮効果的な防除を実施する。</li> <li>ジアミト系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。</li> <li>回数注意 (留意点)</li> </ul> <p>ミネトデュオ粒剤、プリロン粒剤、アベイル粒剤、ベリマーグSCは同一成分(シアントラニロアブル)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。(クロラントラニロアブル、キックオフ顆粒水和剤は同一成分(クロラントラニロアブル)を含んでおり、本成分を含む農薬の使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p>	<p>耕種的防除法</p>	28		ベリマーグSC	1:シアントラニロアブル	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミアリト2:シアントラニロアブル	1g/株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			4A+5		ガードナーフロアブル	1:イタダカアブ1:2:3:2:3:1:ナド'	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○使用方法(注)(P.300)
			5		デオナSC	1:アトノド	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			6		アファーム乳剤	1:ピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			13		コテツフロアブル	1:エマカチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△※	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			15		ノーモルト乳剤	1:チオシタム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)
			15		カスケード乳剤	1:アルヘルスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照
			28	39	ハチハチ乳剤	1:フルフェキサズロン	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照
21A		トルネードエースDF	1:シアントラニロアブル	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)			
22A		ファイントリムDF	1:トルフェンビト'	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意			
un		プレオフロアブル	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	○はなやさい類で登録			
30		クレシーシア乳剤	1:ヒリタリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○はなやさい類で登録			
30		プロフレアSC	1:フルキサズロン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
34		ファインセーフフロアブル	1:プロアラニド'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
28		フレバンフロアブル5	1:フロトキ	1,000倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニロアブル	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
28		ベリマーグSC	1:シアントラニロアブル	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
28		ヨーバルフロアブル	1:トラニロアブル	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミアリト2:シアントラニロアブル	40g/セル成型育苗トレイ1冊 またははバーホット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミアリト2:シアントラニロアブル	1g/株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニロアブル2:3:1:アトノド	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
5		デオナSC	1:ピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.300)			
15		カスケード乳剤	1:フルフェキサズロン	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
15		マッチ乳剤	1:ルフェキシ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
18		フルコンフロアブル	1:オキサフェンゾリド'	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
22B		アクトフロアブル	1:メチルピリフェン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
28		プレバンフロアブル5	1:クロラントラニロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジダス'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
28		ベネビアOD	1:シアントラニロアブル	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
28		ヨーバルフロアブル	1:トラニロアブル	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
30		プロフレアSC	1:フルフェキサズロン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
un		プレオフロアブル	1:ヒリタリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			
22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	○回数注意、使用方法(注)(P.15)参照			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ヨトウムシ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特微) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。</li> <li>○ 若齢幼虫期に防除する。</li> <li>○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。</li> </ul>	発生初期	5 6 13 18 22B 28 28 30 30		ディアナSC アファーム乳剤 コテツフロアブル マリックフロアブル アクセルフロアブル フェニックス顆粒水和剤 ヨーバルフロアブル クレーシア乳剤 プロレアSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:ズネトラム 1:エマカチ安息香酸塩 1:ホルフェニル 1:クロマフェノト 1:タフホリン 1:フルベシア 1:トラニロア 1:フルキサメタ 1:プロラニル	2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 2,000～4,000倍 2,500～5,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 劇 普 普 普 普 普	△ △※ △※ ○ ○ △ △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ はなやさい類で登録 ○ はなやさい類で登録
ハイマダラノメイガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特微) ○ 別名(ダイロシンクイムシ)。</li> <li>○ 夏期の高温少雨で多発する。</li> <li>○ 7～10月に発生が多くなる。</li> <li>○ 幼虫は、生長点付近を食害する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。</li> </ul>	発生前	2B 28 28+4A 28+4A 4A		ヨーバルフロアブル ミネクトデユオ粒剤 ジュリボフロアブル ダントツ粒剤	1:トラニロア 1:アントラニリブ 1:クロチフェニ 1:クロチフェニ 1:エマカチ安息香酸塩2:ルフェ 1:ズネトラム 1:フルベシア 1:フルベシア 1:トラニロア 1:フルキサメタ 1:プロラニル	200倍 40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊 200倍 2g/株 1,000～1,500倍 2,500～5,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍	育苗期後半 ～定植当日 は種覆土後 ～育苗期後半 育苗期後半 ～定植当日 定植時 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 1回 1回 1回 1回 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △※ △ △ △ △ △	○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 植穴処理土壌混和 ○ IGR剤(注)(P.15)参照
アザミウマ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特微) ○ 主にネギアザミウマが加害。</li> <li>○ 葉が加害されるとかすり状となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 圃場周辺の除草を行う。</li> </ul>	発生前	28+4A 5 15 23 34		ミネクトデユオ粒剤 ディアナSC カスケード乳剤 モベントフロアブル ファインセーブフロアブル	1:シアントラニブ 1:ズネトラム 1:フルベシア 1:ズネトラム 1:フルベシア	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊 2,500～5,000倍 4,000倍 2,000倍 1,000倍	は種覆土後 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで	1回 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 劇	△ △ △ ○ ×	○ 使用方法(注)(P.300) ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 葉害等(注)(P.299)

病名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴) (防除上のポイント)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項
ウイルス病	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原ウイルスは、TuMV、CMV。両ウイルスとも虫媒(アブラムシ類)伝染する。露地の早まきでは発病が多くなる。</li> <li>耐病性品種を選ぶ。</li> <li>シルバーボールマルチ等を使用し、アブラムシ類の飛来防止に努める。</li> <li>はくさいでは播種時から25〜35日の寒冷紗被覆は防除効果が大だが、露地の播種適期より20日以上の早まきは避ける。</li> </ul>												
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>高温多湿条件で発生し、高湿期に結球する作型で多く発生する。</li> <li>結球期以降に発生が多い。</li> <li>結球期に温暖・多雨の場合、発生が多くなる。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>株元を狙って散布する。</li> <li>ヨトウムシ、アオムシ等の食害痕も発生を助長するので防除を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病する作物の連作を避ける(アブラナ科、ナス科、キク科、ユリ科等)。</li> <li>低温地を避け、排水を良くする。</li> <li>発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。</li> </ul>	発生初期			オリゼスター顆粒水和剤 スターナ水和剤 ソタールWDG 31+M1 アグレート水和剤 25 ドーマイン水和剤 25+M1 アタキン水和剤 25+1 アグリマイシン-100 41+25 カセツ水和剤 31+24	1:オキリニック 1:オキリニック2:トクロホスチル 1:オキリニック2:有機銅 1:ストロブチン硫酸塩 1:ストロブチン硫酸塩2:有機銅 1:ストロブチン硫酸塩2:チオファネートチル 1:オキシトラサイクリン2:ストロブチン硫酸塩 1:オキリニック2:カサガマイシン	100倍 1,000倍 1,000倍 600〜1,000倍 1,000〜2,000倍 600〜1,000倍 1,000倍 1,500〜3,000倍 1,000倍	定植時 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで 収穫14日前まで 収穫21日前まで	1回 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ ○ × △ △ ×※ △ △ ○	○使用方法(注)(P.300)
白斑病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>下葉から始まり、次第に新葉へ進展する。</li> <li>秋から初冬にかけて雨が多いため注意する。</li> <li>肥料切れの時に発病しやすい。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>株元の地際付近の葉から発生し始めるので、予防散布を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多湿土壌で発生しやすいので、排水不良の改善を図る。</li> <li>肥料切れしないよう注意する。</li> <li>耐病性品種を選択する。</li> </ul>	発病初期			銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20) トツアジン水和剤 1 ベンレート水和剤 1 フロアール水和剤 2 アフェットフロアブル 7 ネクスターフロアブル 7 パレート20フロアブル 11 ストロビーフロアブル 11 ファンタジスタ顆粒水和剤 M5 ダコニール1000 11+M5 ベジセイバー 7+M5	1:オキリニック 1:ベンチオクロ 1:アグロシオン 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:TPN 1:アグロシオン2:TPN 1:ベンチオクロ2:TPN	1,500倍 2,000〜3,000倍 1,000〜1,500倍 2,000倍 1,000倍 2,000〜4,000倍 3,000倍 3,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ○ △ △ × △※ △	○葉害等(注)(P.299) ○かぶれ注意 ○葉害等(注)(P.300)、かぶれ注意
黒斑病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>古い葉に発生が多い。</li> <li>秋季に雨が多いため発病が多くなる。</li> <li>肥料切れの時に発病しやすい。</li> <li>早まき栽培で多発しやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>肥切れしないよう注意する。</li> <li>排水を良くする。</li> <li>アブラナ科作物の連作を避ける。</li> </ul>	発病初期			銅剤及び混合剤(P.317)参照 フロアール水和剤 2 アフェットフロアブル 7 ネクスターフロアブル 7 パレート20フロアブル 7 ストロビーフロアブル 11 ファンタジスタ顆粒水和剤 11 アミスターオペアフロアブル 11+M5 ベジセイバー 7+M5 ダコニール1000 M5 銅剤及び混合剤(P.317)参照	1:アグロシオン 1:ベンチオクロ 1:アグロシオン 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:ベンチオクロ 1:TPN 1:アグロシオン2:TPN 1:ベンチオクロ2:TPN	1,000〜1,500倍 2,000倍 1,000倍 2,000〜4,000倍 3,000倍 3,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ ○ △ △ △※ △ ×	○葉害等(注)(P.299) ○葉害等(注)(P.299) ○葉害等(注)(P.300)、かぶれ注意 ○かぶれ注意



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
根くびれ病	○ 幼苗期に発生する。 (発生の特徴)	○ アブラナ科作物の連作を回避する。 ○ 排水を良くする。 ○ 移植栽培で発病が少なくなる。	M5	ダコンイル	1:TPN	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 作業施用土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
根こぶ病	○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠孢子が放出される。 ○ 休眠孢子は表土15cmまでに多い。 ○ 薬剤を土壌混和する場合は、土壌が乾燥時に実施する。 (防除上のポイント)	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 多発は場での作付を避ける。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナスナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。 ○ 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	M5	ダコンイル	1:TPN	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 全面施用土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意 ○ 作業施用土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意 ○ 植穴処理土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意 ○ 全面土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意 ○ 作業土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意 ○ 全面土壌混和 ○ ※
センチュウ類	(防除上のポイント) ○ フルスルファミド系は、休眠孢子発生阻害をするため、おとり作物利用の際には使用しない。										
キスジノミハマシ	○ 成虫防除と幼虫防除を組み合わせて効果が高い。 ○ 軟腐病発生の多い地帯は本虫の防除を徹底する。	○ アブラナ科野菜の連作を避ける。	28+4A	ジェリボフロアブル	1:クロラントニエリロール2:チアメキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
			IB	エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	劇	×	
			4A	アルバン顆粒水溶性	1:シノテフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
			4A	スタークル顆粒水溶性	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
			21A	ハチマチフロアブル	1:トルフェンゼット	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激、かぶれ注意
			22B	アケセルフロアブル	1:タタロジソン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			30	プロフレアSC	1:7:7:7:7:7:7	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
ア ブ ラ ム シ 類	<p>病害虫の特徴 防除上のポイント等</p> <p>(発生の特徴)</p> <p>○ 発生の主体はモモアカアブラムシとニセダイコンアブラムシ。</p> <p>○ モモアカアブラムシは春と秋、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。</p> <p>(留意点)</p> <p>○ 回数注意 ミネクトデュオ粒剤、プリロックス粒剤オメガ、アベイル粒剤、ベリマーグSCは同一成分(シアントラニロプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までは1回以内、定植後の散布は3回以内)。</p>	<p>耕種的防除法</p> <p>○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。</p> <p>○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。</p> <p>○ シルバーボリによる敵マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。</p>	<p>時期</p> <p>発 生 前</p>	4A		ダントツ粒剤	1:クロチニジン 1:シアントラニロプロール2:チアトキサム	0.25g/株 40g/セル成型育苗トレイ箱またはペーパーポット1冊	は種時 は種後 ～育苗期後半	1回	普	△	○ 覆土後散布 ○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1～2g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチニジン	0.3g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロックス粒剤オメガ	1:シアントラニロプロール	2g/株	育苗期後半	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.300)
				28		プリロックス粒剤オメガ	1:シアントラニロプロール	50g/セル成型育苗トレイ箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.300)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロチニジン2:チアトキサム	200倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセチルピリト2:シアントラニロプロール	1g/株	育苗期後半	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
				28		ベリマーグSC	1:シアントラニロプロール	400倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
				4A		モスピラン粒剤	1:アセチルピリト	0.5g/株	定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A+5		ガードナーフフロアブル	1:イミダクロプロリト2:アセチルピリト	100倍	定植3日前	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプロリト	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:アセチルピリト	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノラフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノラフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチニジン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
発 生 初 期				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イミダクロプロリト	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセチルピリト	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:アセチルピリト	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノラフラン	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノラフラン	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフオームフロアブル	1:スホキプロル	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェネチド	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェネチド	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激、かぶれ注意
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトアト	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 水稲不稔注意
				29		ウララDF	1:フロロカト	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水溶剤	1:ヒリフルキチン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(P.299)、回数注意
				28		ベネビアOD	1:シアントラニロプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴) 標準名称(モンシロチョウ)。 春～初夏及び10～11月に被害が多い。 (留意点) 回数注意 ミネトデエオ粒剤、プリロン粒剤オメガ、アベイル粒剤、ベリマクSCは同一成分(シアントラニプロロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回)。 プレバソフロアブル5、キックオフ顆粒水和剤は同一成分(クロラントラニプロロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。	耕種的防除法	薬剤防除法								水産(注)	注意事項
			時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数		
アオムシ		○育苗中は寒冷紗などの破覆によって成虫の飛来と産卵を防ぐ。	4A		アクタラ粒剤5 ダントツ粒剤 ミネトデエオ粒剤	1:チアトキサム 1:クロチアジニ 1:シアントラニプロロール2:チアトキサム	2g/株 0.5g/株 40g/セル成型育苗トレイ1箱またはベーパーポット1冊	育苗期後半 育苗期後半 は種覆土後～育苗期後半	1回 1回 1回	普 普 普	×	○株元散布 ○株元散布 ○使用方法(注)(P.300)、回数注意
			28		プリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロロール	1g/株	育苗期後半	1回	普	○	○株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.300)
			28		プリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはベーパーポット1冊	育苗期後半	1回	普	○	○使用方法、回数注意、同時施用(注)(P.300)
			28		プレバソフロアブル5	1:クロラントラニプロロール	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)展着剤は加用しない。
			28		ベリマクSC	1:シアントラニプロロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)、回数注意
			28		ヨーバルフロアブル	1:クロラニプロロール	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)、回数注意
			4A+28		アベイル粒剤	1:アセトアミド2:シアントラニプロロール	1g/株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○株元散布
			28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロロール2:ジノテプレン	100倍	定植前日 ～定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			4A		モスビラン粒剤	1:アセトアミド	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A		アルバリン粒剤	1:ジノテプレン	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A		スタークール粒剤	1:ジノテプレン	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアジニ	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
			5		スピフェース顆粒水和剤	1:アセトアミド	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
			5		ダイアノSC	1:アセトアミド	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			6		アフアーム乳剤	1:エタメチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
			13		コテツフロアブル	1:クロルフェチル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	○定植活着後、8葉期以降に使用
			14		ハダソク水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオキサム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
			15		アタプロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			15		ノーモルト乳剤	1:アールヘンズロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノキサロン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			15		マツチ乳剤	1:ルフェネン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			18		ファルコンフロアブル	1:外キシフェジド	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(P.15)参照
			21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェネビトド	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意
			21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェネビトド	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意
			22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
			22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
			22B		アクセルフロアブル	1:カチルジソン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	





病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
トウモロコシ	○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		プレバソNFアロアブル5	1:クロラントラニプロール	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			発生前	28		ヨーバルフロアブル	1:トラネニプロール	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
ムシ	○ 若齢幼虫期に防除する。		発生初	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアメキサム	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			発生初	4A+5		ガードナーフロアブル	1:ミダクアラノド+2:スベノド*	100倍	定植3日前 ～定植当日	1回	劇	△	○使用方法、葉害等(注)(P.300)
ムシ			発生初	28+4A		キックオブ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロール2:ジノテアラソン	100倍	定植前日 ～定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			発生初	15		アタゴロン乳剤	1:クロラムピロスロン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:フルベンキサロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサロン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノゾト*	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	18		フェルコンフロアブル	1:メクシフェノゾト*	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノゾト	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	5		ダイアナSC	1:スピノゾト	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	6		アプアマ乳剤	1:エマカチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	13		コテツフロアブル	1:クロラムピロ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	22A		ファイレントリムDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	22B		アクセルフロアブル	1:シタフルジン	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンキサロン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	28		プレバソNFアロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	28		ベネビアOD	1:シラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	28		ヨーバルフロアブル	1:シラントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	28		プロフレアSC	1:プロアラゾト*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
ハス	○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28+4A		BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロラントラニプロール2:チアメキサム	200倍	育苗期後半～定植前日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			発生前	28		ベリマーグSC	1:シラントラニプロール	400倍	育苗期後半～定植前日	1回	普	△	○使用方法、混用(注)(P.300)
トウモロコシ			発生前	28		ヨーバルフロアブル	1:トラネニプロール	200倍	育苗期後半～定植前日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.300)
			発生初期	15		アタゴロン乳剤	1:クロラムピロスロン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	5		ダイアナSC	1:スピノゾト	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンキサロン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	28		プレバソNFアロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
			発生初期	28		ベネビアOD	1:シラントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
トウモロコシ			発生初期	22B		アクセルベイト	1:タタフルジン	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○株元散布
			発生初期	22B		アクセルフロアブル	1:タタフルジン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○株元散布
トウモロコシ			発生初期	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアメキサム	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)、回数注意
			発生初期	28		ヨーバルフロアブル	1:トラネニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)、回数注意
トウモロコシ			発生初期	30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタゾト*	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)、回数注意
			発生初期	30		プロフレアSC	1:プロアラゾト*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)、回数注意
トウモロコシ			発生初期	30		BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロラントラニプロール2:チアメキサム	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)、回数注意
			発生初期	30		プロフレアSC	1:プロアラゾト*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(P.299)、回数注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項		
													時期	
ハイマダラノメイガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 別名(ダイオウシンクイムシ)。</li> <li>○ 夏期の高湿少雨で多発する。</li> <li>○ 幼虫は、生長点付近を食害する。</li> <li>○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいため、同一系統の薬剤を連用しない。</li> <li>(留意点)</li> <li>○ 回数注意</li> <li>○ アベイル粒剤、ベリマークSCは同一成分(シアントラニプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</li> <li>○ ジュリボフロアブル、プレバソフロアブル5は同一成分(クアントラニプロール)を含んでおり、本成分を含む農薬の使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。</li> </ul>	28		フリロソソ粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	1g/株	育苗期後半 ～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.300)		
			28		フリロソソ粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法、回数注意、同時施用(注)(P.300)		
			28+4A		ジュリボフロアブル	1:クアントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			4A+28		アベイル粒剤	1:アセチミダト2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		プレバソフロアブル5	1:クアントラニプロール	100倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	
			28		ヨーバルフロアブル	1:クアントラニプロール	200倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.300)	○ 使用方法(注)(P.300)	
			5		スピノエース顆粒水和剤 デアナSC	1:スピノサド 1:スピネトラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内	普 普	△ △	○	○	
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオンクアム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○	○	
			21A		ハチハチ乳剤	1:トルフェンビト	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○	○	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
21A		ハチハチフロアブル	1:トルフェンビト	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○	○	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意			
22B		アクセルフロアブル	1:タフリンジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○	○				
28		プレバソフロアブル5	1:クアントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○	○				
28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○	○	○ 葉害等(注)(P.299)、回数注意			
28		ヨーバルフロアブル	1:クアントラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○	○	○			
30		フロアブルSC	1:プロフワニト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○	○	○			
ネキリムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。</li> <li>○ 周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。</li> </ul>	1B		ダイアジン粒剤5 ネキリエースK	1:ダイアジン 1:イキチオソ	4kg/10a 3kg/10a	は種時又は定植時 は種時又は定植時 ～生育初期 但し、 収穫14日前まで	1回 1回	普 普	× △	○ 全面土壌混和又は作業土壌混和 ○ 土壌表面株元処理		
			3A		ガードベイトA	1:ベルトリン	3kg/10a	は種時～生育初期	5回以内	普	○	○	○ 合ピレ(注)(P.15)、株元散布	
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアエジン	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○	○ 株元散布	
			28		ヨーバルフロアブル	1:クアントラニプロール	200倍	育苗期後半	1回	普	△	○	○ 使用方法(注)(P.300)	
			3A		フォース粒剤	1:アムトリン	4kg/10a	定植時	1回	劇	×	○	○ 合ピレ(注)(P.15)、全面土壌混和	
			1A		テラボン5%ベイト	1:NAC	3～6kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○	○ 株元散布	
			22B		アクセルベイト	1:タフリンジン	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○	○ 株元散布	
			un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/m <sup>2</sup>	発生時	—	普	○	○	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオンクアム	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○	○	○ 登録はナメジリ類。幼苗期には葉害の恐れがあるので散布しない。
			14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○	○	○ 登録はナメジリ類。夏季高温時の苗や軟弱な苗には葉害の恐れがあるので散布しない。
カナムツムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 主に夜間に活動する。</li> <li>○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 圃場の清掃を図る。</li> <li>○ 圃場の排水を良くする。</li> </ul>	21A		ハチハチ乳剤	1:トルフェンビト	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意		
			21A		ハチハチフロアブル	1:トルフェンビト	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意	

メタアルデヒド剤(参考資料P.29)参照

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					水産 人 毒 (注)	注意事項		
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)			使用時期	本剤の使 用回数
ウイルス病	(発生の特徵) ○ 主要な種類はCMV、BBWV。 ○ アブラムシ類により伝染。 ○ 重複感染すると萎縮することがある。	(耕種的防除法) ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草。 ○ シルバーポリーによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。									
べと病	(発生の特徵) ○ 気温10℃前後、多湿条件で多発しやすい。 ○ 春と秋に発生。 (防除上のポイント) ○ 初期防除に努める。	○ 密植をせず風通しを良くする。 ○ 耐病性品種を選ぶ。	発生初期		アブラムシ類の項(P.247)参照						
株腐病	(発生の特徵) ○ 高温・多湿を好むので、夏まき栽培に多い。 ○ 低湿地での作付を避ける。 ○ 密植しない。	○ 密植をせず風通しを良くする。 ○ 耐病性品種を選ぶ。	は種前	11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキントロペン2:メタキソルM	9kg/10a	は種前	1回	普	○ 全面土壌混和
萎凋病	(発生の特徵) ○ 高温条件(25～30℃)を好むので夏まき栽培に多い(15℃以下では発生しない)。 ○ 発病株を圃場外に持ち出し処分。 ○ 完熟堆肥を施用。 ○ 発生の多い圃場では夏まきを避ける。 ○ シロザやサナエタダ等雑草が保菌していることがあるので除草。	○ 密植をせず風通しを良くする。 ○ 耐病性品種を選ぶ。	は種前		本畑消毒	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照					
立枯病	(発生の特徵) ○ ピシウム属菌による。 ○ 低湿地での作付を避ける。 ○ 密植を避ける。	○ 密植をせず風通しを良くする。 ○ 耐病性品種を選ぶ。	は種前	14	リゾレックス粉剤	1:トリクロホスメチル	20～40kg/10a	は種前	1回	普	○ 全面土壌混和
苗立枯病	(発生の特徵) ○ リゾクトニア属菌による。 ○ 高温・多湿条件を好むので夏まき栽培に多い。 ○ 密植を避ける。	○ 密植をせず風通しを良くする。 ○ 耐病性品種を選ぶ。	は種前		本畑消毒	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照					
センチュウ類			は種前		本畑消毒	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照					

薬剤防除法													
病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ア ブラ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はモモアカアブラムシ。 ○ 秋から初冬に寄生が多い。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草。 ○ シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。	は 種 時	4A 4A 4A 4A 4A		アドマイヤー1粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アクタラ粒剤5 ダントツ粒剤	1:イシクワアブド 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:チアメキサム 1:クロチアニン	4kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種時 は種時 は種時 は種時	1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普	△ △ △ × △	○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 作条混和 ○ 播溝土壌混和
ネ キリ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は越冬期以外見られるが、5～9月には異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺。	は 種 前	3A		アオース粒剤	1:テフルリン	9kg/10a	は種前	1回	劇	×	○ 全面土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
シ ロ オ ビ ノ メ イ ガ	(発生の特徴) ○ 発生は9～10月に多い。 ○ 雨除け栽培で多発しやすい。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 周囲のイヌビユ、アカザ等の雑草は発生源となるので除草。	発 生 初 期	3A		ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	生育初期	2回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
シ ロ オ ビ ノ メ イ ガ	(発生の特徴) ○ 発生は9～10月に多い。 ○ 雨除け栽培で多発しやすい。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 周囲のイヌビユ、アカザ等の雑草は発生源となるので除草。	発 生 初 期	5 5 15 28 28 22B		スピノエース顆粒水和剤 デアナSC カスケード乳剤 ベリマーグSC アレバソフロアブル5 アクセルフロアブル	1:スピノサド 1:スピネトラム 1:フルフェノキサロン 1:ジアトラニロリアロール 1:クロアジニロリアロール 1:メタフルミジン	5,000倍 2,500～5,000倍 4,000倍 4,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内 1回 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ○	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 0.2 0/m <sup>2</sup> 株元灌水
ヨ ト ウ ム シ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		発 生 初 期	3A 15		アグロスリン乳剤 ノーモルト乳剤	1:ジベルメリン 1:テフルベンスロン	2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで	5回以内 2回以内	劇 普	× △	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
ハス モン ヨトウ	(発生の特徵) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 卵塊及び分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘葉し、処分。	発生初期	15 18 18 28 28 6 6 5 un 22B		カスケード乳剤 ロムダンフロアアブル マトリックフロアアブル プレバソフフロアアブル5 ベリマーグSC アファーム乳剤 アニキ乳剤 ディアナSC ブレオフフロアアブル アクセルフロアアブル BT剤(参考資料P.15参照) ダイアジン粒剤5	1:フルフェキサロン 1:アブフェジント 1:クロマフェジント 1:クロアクトニリプロール 1:ジアントラニリプロール 1:エマクチン安息香酸塩 1:レピクタチン 1:スピネトラム 1:ピロタリル 1:メタフリンソ	4,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍 1,000～2,000倍	収穫3日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 1回 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ ○ ○ ○ △ △ △※ △※ △※ △※ ○	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 0.2 l/m <sup>2</sup> 株元灌水
タネバエ	(発生の特徵) ○ 鶏ふん等の有機物を施用すると多発することがある。		は種時	1B			1:ダイジン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 作糸土壌混和又は土壌表面散布
アザミウマ類	(発生の特徵) ○ 夏から秋に播種する作型で被害が多い。		発生初期	5 5 34 14 4A		スピエース顆粒水和剤 ディアナSC ファインセーブフロアアブル リーフガード顆粒水和剤 アドマイヤーフロアアブル	1:スピノラト 1:スピネトラム 1:フロタキソ 1:チオシトラム 1:イシダクアブクト	5,000倍 2,500～5,000倍 2,000倍 1,500倍 4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 劇 劇 劇	△ △ × △ △	
ミナミキイロアザミウマ			発生初期	21A		ダニトロンフロアアブル	1:フエンピロキシメト	2,000倍	収穫21日前まで	1回	普	×	
類ダニ	(発生の特徵) ○ 雨除け栽培で多発しやすい。		は種前	13		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照 コテツペイト	1:クロルフェナピル	3～6kg/10a	は種時～2葉期まで	1回	普	○	
ホウレンソウ	(発生の特徵) ○ 比較的低温(15～25℃)で多湿を好む。	○ 収穫残渣を圃場外で適切に処分。 ○ 靱殻・ワラ等未分解の有機質の施用は避ける。 ○ 高温に弱いため太陽熱消毒が有効。	子葉期～4葉期	1B 15 6 13 14 5 23		スミチオン乳剤 カスケード乳剤 アファーム乳剤 コテツフロアアブル リーフガード顆粒水和剤 ディアナSC モベントフロアアブル	1:MIP 1:フルフェキサロン 1:エマクチン安息香酸塩 1:クロルフェナピル	1,000～2,000倍 4,000倍 2,000倍 4,000～6,000倍 1,500倍 2,500倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 2葉期まで(但し、収穫14日前まで) 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで	2回以内 3回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 劇 劇 普 普	△ △ △※ △※ △※ △ △ ○	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 使用時期厳守(白化等葉害の恐れ)。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
萎黄病	○ ヒメアタテンヨコバヤが媒介するフアイトブラズマ病。 ○ 年内取りの作型に多い。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆による媒介虫ヒメアタテンヨコバヤの飛来防止。 ○ シルバーボリなどによる敵マルチも媒介虫の飛来防止に有効。 ○ 発病株は早めに除去。	発病初期		U18	バリダシン液剤5	1:ハリダマイシン	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ ボルドー液との混用不可、トマト、きくへの飛散注意。
						スターナ水和剤 ソタールWDG ナレート水和剤 ドーマイン水和剤	1:オキリニック酸 1:オキリニック酸2:トルロホスチル 1:オキリニック酸2:有機銅 1:ストプトマイシン硫酸塩2:有機銅	2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ ○ × ×※	
軟腐病	(防除上のポイント) ○ ヨトムシ類などの食害部から病原細菌が侵入するのでこれらの害虫を防除。	○ 発病圃場では連作をしない。 ○ 排水不良を改善する。 ○ 傷口から侵入するので、傷口を生じないような管理作業を心がける。	発病初期		31+M1 25+M1	カセト水和剤	1:オキリニック酸2:カスガマイシン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ ボルドー液との混用不可、トマト、きくへの飛散注意。
						銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	1:オキリニック酸2:カスガマイシン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
斑点細菌病	(発生の特徴) ○ 結球を始める頃から被害が顕在化し、降雨量が多いほど多発。	○ 苗は軟弱徒長にせず、でさるだけ傷をつけない。	発病前	P2		オリゼマト粒剤	1:プロベナゾール	6~9kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 土壌混和
						ナレート水和剤 カセト水和剤 銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	1:オキリニック酸2:有機銅 1:オキリニック酸2:カスガマイシン	1,000倍 1,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内	普 普	× ○	
腐敗病	(発生の特徴) ○ 凍霜害は発生を助長。 ○ 結球を始める頃から被害が顕在化。	○ 苗は軟弱徒長にせず、でさるだけ傷をつけない。	発病前	P2		オリゼマト粒剤	1:プロベナゾール	6~9kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 土壌混和
						スターナ水和剤 ソタールWDG ナレート水和剤 アグリマイン-100	1:オキリニック酸 1:オキリニック酸2:トルロホスチル 1:オキリニック酸2:有機銅 1:オキニドサイクリン2:ストロマトイン硫酸塩	2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫14日前まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ ○ × △	
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 立枯症状を起こすことがある。	○ マルチ等により多湿条件を緩和。 ○ トンネル栽培では換気に努め、過湿を避ける。 ○ 発病株は早めに除去、土中に埋め込む等の処理を行う。	発病初期	2 M7 M5		ロブテール水和剤 ベルクート水和剤 ダコンール1000	1:イプロゾロン 1:イミカタンアルベニル酸塩 1:TPN	1,000~1,500倍 1,000~2,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ×	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
						スミレックス水和剤 スミブレンド水和剤 ゲッター水和剤 ニマイバー水和剤 メジャーフロアブル	1:プロシント 1:ジエトフェンカルブ2:プロシント 1:ジエトフェンカルブ2:オファアネート 1:ジエトフェンカルブ2:ベニル 1:ピロキシトロン 1:ボスカト	1,000~2,000倍 1,000~2,000倍 1,500倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	5回以内 5回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普	△ ○ ○ △	
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 立枯症状を起こすことがある。	○ マルチ等により多湿条件を緩和。 ○ トンネル栽培では換気に努め、過湿を避ける。 ○ 発病株は早めに除去、土中に埋め込む等の処理を行う。	発病初期	7 7 7 7 7		カンタスドライアロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル ネクスターフロアブル ケンジヤフロアブル	1:ボスカト 1:ベンチオピラト 1:ピラフルミト 1:イピラサム 1:イワエタミト	1,000~1,500倍 2,000~4,000倍 1,000倍 1,500倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普	△ ○ ○ △ ○	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
						カンタスドライアロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル ネクスターフロアブル ケンジヤフロアブル	1:ボスカト 1:ベンチオピラト 1:ピラフルミト 1:イピラサム 1:イワエタミト	1,000~1,500倍 2,000~4,000倍 1,000倍 1,500倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普	△ ○ ○ △ ○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水産(注)	注意事項
菌核病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病は低温(18~20℃)、多湿条件で見られる。</li> <li>○ 発病部に、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色ネズミの糞状の菌核を形成。</li> <li>○ 悪臭がないことで軟腐病と区別可能。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 発病後は急速にまん延するので、予防散布を徹底。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 夏期に水田にすると、土中の菌核の死滅に有効。</li> <li>○ マルチ等により株元の多湿条件を緩和。</li> <li>○ トンネル栽培では換気に努め、過湿を避ける。</li> <li>○ 発病株は早めに除去し、菌核を圃場に残さないよう処分。</li> </ul>	<p>発病前</p> <p>発病初期</p>			バレード20フロアブル	1:ピラシフルミド	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.300)
							1:イプロゾロン	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
							1:イミダクタンアルベル酸塩	1,000~2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
							1:ベノミル	2,000~3,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
							1:チオアネートメチル	1,500~2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
							1:プロシント	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
							1:ジエトフェンカルブ2:チオアネートメチル	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
							1:ジエトフェンカルブ2:ベノミル	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
							1:ジエトフェンカルブ2:アロシント	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
							1:ジエトフェンカルブ2:ベノミル	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
							1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
							1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
							1:ピリベンカルブ	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
							1:マンデスロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
							1:ボスカド	1,000~1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
							1:ベンチオピラド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
							1:ピラシフルミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
							1:イピレラザム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
							1:イブアタシド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
すそ枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼苗期に発生すると苗立枯れを起すことがある。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 発病初期に、株元にもよくかかるよう散布。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 深植えしない。</li> <li>○ 密植は発病を助長するので適切な株間にする。</li> </ul>	<p>定植前</p> <p>発病初期</p>			プロンサイド粉剤	1:フルアジナム	30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和
						プロンサイドSC	1:フルアジナム	500ml/10a	定植前	1回	普	×	○ 100~1500の水で希釈し全面散布後土壌混和
						リゾレックス水和剤	1:トルクロホスチル	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						ソタールWDG	1:オキリニック/酸2:トルクロホスチル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						ロブラール水和剤	1:イプロゾロン	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
						ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
						ベンレート水和剤	1:ベノミル	1,000~3,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	×	
						バリダシン液剤5	1:バリダマイジン	800倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
						モンカットフロアブル40	1:フルトラニル	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						バシタック水和剤75	1:メプロニル	500~1,000倍	収穫7日前まで 結球開始期まで、但し収穫30日前まで	3回以内	普	△	
						アフエットフロアブル	1:ベンチオピラド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ネクスターフロアブル	1:イピレラザム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						バレード20フロアブル	1:ピラシフルミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						シグナムWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカド	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
						メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
						ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
						ジオゼット水和剤	1:ボリオキシンド亜鉛塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤(P.317)参照							



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴) 萎黄病の病原体を媒介。 ○ 萎黄病の病原体を媒介。 ○ 発生の特徴 (発生の主体はモモアカアブラムシとヒゲナガアブラムシ類。 (防除上のポイント) ○ 抵抗性がつきやすいため、同一系統の薬剤を連用しな	耕種的防除法	時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	○ 発生の特徴 (発生の主体はモモアカアブラムシとヒゲナガアブラムシ類。 (防除上のポイント) ○ 抵抗性がつきやすいため、同一系統の薬剤を連用しな	○ 育苗中は寒冷紗等の被覆で有翅虫飛来防止。 ○ シルバーホリによる畝マルチなど光反射資材は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニプロール2:チアメキサム	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:イシダクロプロリド	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアメキサム	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				28+4A		ジュリプロアブル	1:クロアクトラニプロール2:チアメキサム	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				28		ブリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法、同時施用(注)(P.300)、回数注意
				28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.300)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプロリド2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプロリド2:シアントラニプロール	1g/株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロアクトラニプロール2:ジノテフラン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプロリド	0.25～0.5g/株	定植前日 ～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 株元処理

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	
ア ブラ ム シ 類			発 生 初 期	4A 4A 4A 4A 4A 4C 14 21A 21A 23 29 9B 28		アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アカタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 トランスフォームフロアブル リーフガード顆粒水和剤 ハチハチ乳剤 ハチハチフロアブル モベントフロアブル ウアラDF コルト顆粒水和剤 ベネビアOD	1:イシクワブト 1:アセミアブト 1:クロアミジン 1:チアトキサム 1:ジノアフラン 1:ジノアフラン 1:スルホキサフロ 1:チオキサフロ 1:トクエンビト 1:トクエンビト 1:ステロアト 1:フロニカド 1:ピリラルキナゾン 1:ジアントラニリアロール	4,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 1,500倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 3,000～4,000倍 2,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 普 普 普 普 劇 劇 劇 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ ○ △ × × ○ ○ △ △	○ 目に刺激痛、かぶれ注意 ○ 目に刺激痛、かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299)  ○ 葉害等(注)(P.299)
ヨ ト ウ ム シ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。  (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵防止。	発 生 前	28+4A 28 4A+28 4A		ジユリポフロアブル ブレバゾンフロアブル5 アベイル粒剤 モスピラン粒剤	1:クロアミジン 1:クロアミジン 1:アセタミジン 1:アセタミジン 1:アセタミジン	200倍 100倍 40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊 0.5g/株	育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 定植前日	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ △ ○ △	○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300)展着剤は加用しない。 ○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意  ○ 株元散布
			発 生 初 期	5 28 28 28 28 13 22A 22A 21A+22B 15 30		スピノエース顆粒水和剤 フェニックス顆粒水和剤 ブレバゾンフロアブル5 ヨーバルフロアブル ベネビアOD コテツフロアブル トルネードエースDF アライントリアADF アクセルキングフロアブル カスケード乳剤 グレーシア乳剤 BT剤(参考資料P.15参照)	1:スピノアト 1:フルベシンアト 1:クロアミジン 1:アトニラニリアロール 1:ジアントラニリアロール 1:クロルフェニル 1:イノキカルブ 1:イノキカルブ 1:トクエンビト 1:フルフェノキサゾン 1:フルフェノキサゾン	5,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,500倍 4,000倍 2,000～3,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 劇 普 普 劇 普 普	△ △ △ △ △ △※ △※ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)

病虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		FRAC コード		IRAC コード		使用薬剤		一般名		濃度(使用量)		使用時期		本剤の使用回数		人毒(注)		注意事項					
ネキリムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。</li> <li>○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。</li> <li>○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。</li> </ul>	28+4A	発生前	ミネクトデュオ粒剤	1:ジアントラニリプロール2:チアトキサム	40g/10aの成型育苗トレイ1箱または100g/10aのポット1冊	1回	普通	△	○ 使用方法(注)(P.300)、登録はカブラヤガ	○ 使用方法(注)(P.300)、登録はカブラヤガ	○ 使用方法(注)(P.300)展着剤は加用しない。	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和	○ 合ピレ(注)(P.15)、全面土壌混和	○ 土壌表面株元処理	1回	普通	△	○ 使用方法(注)(P.300)、回数							
																					ジュリボフロアブル	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普通	△	○ 使用方法(注)(P.300)、登録はカブラヤガ
																					プレバソンフロアブル5	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普通	△	○ 使用方法(注)(P.300)展着剤は加用しない。
オオタバコガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴) (防除上のポイント) ○ 結球期以降は、結球内へ食入、外見上ほとんど被害がなく、市場で問題となる。</li> <li>○ 秋期は飛来量が多い。</li> <li>○ 結球内部へ食入されると薬剤の効果がなくなるため、生育初期からの防除が重要。</li> <li>○ 初冬までは飛来が続くため、年内に定植する作型は重点的に防除。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。</li> </ul>	28+4A	発生前	ミネクトデュオ粒剤	1:ジアントラニリプロール2:チアトキサム	40g/10aの成型育苗トレイ1箱または100g/10aのポット1冊	1回	普通	△	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意	○ 株元散布	○ 株元散布、同時施用(注)(P.300)、回数注意	○ 使用方法(注)(P.300)	○ 使用方法(注)(P.300)	○ 使用方法、混用(注)(P.300)、回数注意	1回	普通	△	○ 使用方法(注)(P.300)、回数注意							
																					ジュリボフロアブル	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普通	△	○ 株元散布
																					プレバソン粒剤オメガ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普通	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.300)、回数注意
																					ジュリボフロアブル	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普通	△	○ 株元散布
																					プレバソンフロアブル5	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普通	△	○ 株元散布
																					ベリマールSC	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普通	△	○ 株元散布
																					アベイル粒剤	40g/10aの成型育苗トレイ1箱または100g/10aのポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普通	○	○ 株元散布
																					キックオフ顆粒水和剤	100倍	定植前日～定植時	1回	普通	△	○ 株元散布
																					ガードベイトA	3kg/10a	生育初期	5回以内	普通	※	○ 株元散布
																					アケルベイト	3～6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普通	○	○ 株元散布

病虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
オ オ タ バ コ ガ			発 生 初 期	15 15 18 18 6 6 5 5 28 28 28 28 22B 13 22A 22A un 30 30		カスケード乳剤 マツチ乳剤 アタルコンフロアブル マトリックフロアブル アファーム乳剤 アニキ乳剤 スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC フェニックス顆粒水和剤 ブレバソフフロアブル5 ベネビアOD ヨーバルフロアブル アケルフロアブル コデソフロアブル トルネードエースDF ファイントリムDF ブレオフロアブル グレースシア乳剤 ブロフレアSC	1:フルフェノキサロ 1:フルフェノキサロ 1:フルフェノキサロ 1:クロマフェノキサロ 1:エマメチン安息香酸塩 1:レピダチン 1:スピノサド 1:スピノサド 1:フルベニゾキサロ 1:クロマフェノキサロ 1:ジメトランニリアプロール 1:トリラニリアプロール 1:メプルメジン 1:クロルメチフェル 1:イネトキサカルブ 1:イネトキサカルブ 1:ピリタリル 1:フルキキサメト 1:ブローフェニド	4,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍 2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普	△ △ ○ ○ ○ ○ △※ △※ △ △ △ △ △ △ △ ○ ○ ○ △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 葉害等(注)(P.299)
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	(発生の特徴) ○年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。  (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵防止。	発 生 前	28+4A 28 28 28+4A		BT剤(参考資料P.15参照) ゼニリボフロアブル ブレバソフフロアブル5 ベリマークSC キックオフ顆粒水和剤 ノーモルト乳剤 アタブロソ乳剤 カスケード乳剤 アタルコンフロアブル マトリックフロアブル アファーム乳剤 アニキ乳剤 ディアナSC フェニックス顆粒水和剤 ブレバソフフロアブル5 ヨーバルフロアブル ベネビアOD	1:クロラントリニアプロール2:チアトキサム 1:クロラントリニアプロール 1:ジメトランニリアプロール 1:クロラントリニアプロール2:ジノリネフラン 1:フルベニゾキサロ 1:クロルメチフェル 1:フルフェノキサロ 1:フルフェノキサロ 1:エマメチン安息香酸塩 1:クロマフェノキサロ 1:エマメチン安息香酸塩 1:レピダチン 1:スピノサド 1:フルベニゾキサロ 1:クロラントリニアプロール 1:トリラニリアプロール 1:ジメトランニリアプロール	200倍 100倍 400倍 100倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 2,000～4,000倍 2,500～5,000倍 2,000～4,000倍 2,500～5,000倍 2,000～4,000倍	育苗後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 定植前日～定植時 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 1回 1回 1回 1回 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普	△ △	○使用方法(注)(P.300) ○使用方法(注)(P.300)展着剤は加用しない。 ○使用方法、回数注意、混用(注)(P.300) ○使用方法(注)(P.300) ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ 葉害等(注)(P.299)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハ ス モ ン ヨ ト ウ				22B 13 22A 22A un 30 30		アセチルフロアブル コテソフロアブル トルネードエースDF フェイントリムDF ブレオフロアブル グレーシア乳剤 プロフロアSC	1:メタルミン 1:クロルフェニル 1:イネキサルブ 1:イネキサルブ 1:ピリタリル 1:フルキサタニ 1:フロアエイト	1,000~2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000~3,000倍 2,000~4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普 普	○ △※ ○ ○ △ △ △	
ナ モ グ リ バ エ	(発生の特徴) ○ 春と秋に発生が多い。  (防除上のポイント) ○ マメ科、アブラナ科作物が周 辺部にある場合は発生に注 意。	○ 育苗中は寒冷紗等の被覆 によって成虫の飛来防 止。 ○ シルバーポリによる畝マル チなど光反射資材を活用 した方法は成虫の飛来抑 制に有効。	発 生 前	4A 4A 4A 28+4A  5 4A 4A 4A 28  28  28+4A 28 28 4A+28 4A+28		BT剤(参考資料P.15参照) アカタラ粒剤5 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ミネクトデュオ粒剤  スピエース顆粒水和剤 アカタラ粒剤5 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アリソン粒剤オメガ  プレバソン粒剤  ジューボフロアブル プレバソンフロアブル5 ベリマークSC アペイル粒剤  アペイル粒剤	1:チアトキサム 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジアントラニリアプロール2:チアトキサ ム  1:スピノサト 1:チアトキサム 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジアントラニリアプロール  1:クロラントラニリアプロール  1:クロラントラニリアプロール2:チアトキサ ム 1:クロラントラニリアプロール  1:ジアントラニリアプロール 1:アセタミプリト2:ジアントラニリアロー ル 1:アセタミプリト2:ジアントラニリアロー ル	15g/培土0 15g/培土10 15g/培土10 40g/セル成型育苗トレ イ箱またはペーパー ポット1冊  500~1,000倍 0.5g/株 1g/株 1g/株 1g/株  50g/セル成型育苗トレ イ箱またはペーパー ポット1冊  200倍 100倍 400倍 40g/セル成型育苗トレ イ箱またはペーパー ポット1冊 1g/株	は種前 は種前 は種前 は種後土後 ~育苗後半  定植前まで 育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半 育苗期後半 ~定植時 育苗期後半 ~定植当日  育苗期後半 ~定植当日 育苗期後半 ~定植当日 育苗期後半 ~定植当日 育苗期後半 ~定植当日	1回 1回 1回 1回  1回 1回 1回 1回 1回 1回  1回 1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普  普 普 普 普 普 普  普 普 普 普 普 普 普	× △ △ △  △ × △ △ △ ○ △  △ △ △ △ ○ ○ ○	○ 床土混和 ○ 培土混和 ○ 培土混和 ○ 使用方法(注)(P.300)、回数 注意  ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 株元散布、同時施用 (注)(P.300)、回数注意 ○ 使用方法(注)(P.300)  ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法、混用(注)(P.300)、 回数注意 ○ 使用方法(注)(P.300)、回数 注意 ○ 使用方法(注)(P.300)、回数 注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法							水産 (注)	注意事項	
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期			本剤の使 用回数
ナ モ グ リ バ エ			発生初期	4A+5		ガードナーフロアブル	1:イシクロアクト2:スピノサド	200倍 定植3日前～定植 当日	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.300)
			発生初期	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノアテラン	50～100倍 定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
			発生初期	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアテラン	50～100倍 定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
			発生初期	28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロアトリアプロール2:ジノアテラン	100倍 定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍 収穫前日まで	2回以内	普	△	
				14		バダンSG水溶剤	1:カルタプ	1,500倍 収穫14日前まで	3回以内	劇	×	
				6		アフアーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍 収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				28		ブレバノンフロアブル5	1:クロアトリアプロール	1,000～2,000倍 収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
				28		ベネビアOD	1:シアンロニプロール	2,000倍 収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリアプロール	2,500～5,000倍 収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:トリフェノピド	1,000～2,000倍 収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:トリフェノピド	1,000～2,000倍 収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				un		ブレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍 収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサタジド	2,000～3,000倍 収穫3日前まで	2回以内	普	△	
カナ メ ク タ ツ ム ジ リ 類	(発生の特徴) ○ 夜行性。 (防除上のポイント) ○ 有機質肥料を多用した場合被害が多い。	○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分。 ○ 通風を良くする。	発生初期	14 14 un 21A		バダンSG水溶剤 リーフガード顆粒水和剤 スラゴ ハチハチ乳剤	1:カルタプ 1:チオシグラム 1:磷酸第二鉄 1:トリフェノピド	1,500倍 1,500倍 1～5g/m <sup>2</sup> 発生時 1,000倍 収穫14日前まで	3回以内 2回以内 — 2回以内	劇 劇 普 劇	×	○ 登録はナメジリ類 ○ 登録はナメジリ類 ○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置 ○ 登録はナメジリ類 眼に刺激痛、かぶれ注意

病名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法				使用時期	濃度(使用量)	一般名	使用薬剤	FRAC コード	IRAC コード	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項					
			時期	FRAC コード	使用薬剤	一般名															
えそ 条斑 病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスはIY SV。 ○ 虫媒(ネギアザミウマ)伝染するウイルス病。 (防除上のポイント) ○ ネギアザミウマの防除徹底。	(耕種的防除法) ○ シルバーボリ及びシルバーテープなどで、媒介虫の飛来を防止。 ○ 発病株は早期に抜き取り、処分。 ○ 収穫残渣は放置せず土中に埋めるなど速やかに処分。 ネギアザミウマの項(P.261)参照	U18 24+U1 25 25+1 41+25 M1+25 24+M1 24+M1 31+24 31+M1 31	バリダシン液剤5 カズミンバリダシン液剤 アグレプト水和剤 アタキオン水和剤 アグリマイシン-100 銅ストマイ水和剤 カズミンボルドー カッパーシン水和剤 カセント水和剤 ナレート水和剤 スターナ水和剤 銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	1:ハリダマイン 1:カスガマイシン2:ハリダマイン 1:ストレプトマイシン硫酸塩 1:ストレプトマイシン硫酸塩2:オ フネートメチル 1:オキシテトラサイクリン2:ストレプトマ イン硫酸塩 1:塩基性塩化銅2:ストレプトマイ シン硫酸塩 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:オキリニック酸2:カスガマイシン 1:オキリニック酸2:有機銅 1:オキリニック酸	収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 3回以内 5回以内	500倍 500倍 1,000倍 800倍 1,000倍 600～800倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 800～1,000倍 1,000倍	1:ハリダマイン 1:カスガマイシン2:ハリダマイン 1:ストレプトマイシン硫酸塩 1:ストレプトマイシン硫酸塩2:オ フネートメチル 1:オキシテトラサイクリン2:ストレプトマ イン硫酸塩 1:塩基性塩化銅2:ストレプトマイ シン硫酸塩 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:オキリニック酸2:カスガマイシン 1:オキリニック酸2:有機銅 1:オキリニック酸	バリダシン液剤5 カズミンバリダシン液剤 アグレプト水和剤 アタキオン水和剤 アグリマイシン-100 銅ストマイ水和剤 カズミンボルドー カッパーシン水和剤 カセント水和剤 ナレート水和剤 スターナ水和剤 銅剤及び混合剤(P.317)参照	U18 24+U1 25 25+1 41+25 M1+25 24+M1 24+M1 31+24 31+M1 31	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
腐 敗 病	(発生の特徴) ○ 貯蔵期間にも発病、腐敗 を引き起こす場合があ る。	○ 無病地で育苗。 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。 ○ 収穫後の残渣は処分。 ○ 晴天、乾燥時に収穫。 ○ 吊り貯蔵は、風通しの良い 雨や直射日光のあたらな い涼しい場所を選ぶ。 ○ コンテナ貯蔵では過度の 積込みを避け、通風をよく する。	U18	バリダシン液剤5	1:ハリダマイン	収穫3日前まで	500倍	1:ハリダマイン	バリダシン液剤5	U18	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
枯 立 病	(発生の特徴) ○ 生育末期に発生が多い。	○ 床土は無病土を使用。	床土・本畑消毒 は種後～	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照 苗立枯病の項(P.307)参照																	
黒 斑 病	(発生の特徴) ○ 風ずれによる傷やアザミウマ 類の食害痕が多いと発生し やすい。	○ 無病地で育苗。 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。 ○ 収穫後の残渣は処分。 ○ 晴天、乾燥時に収穫。	M3 M3 2 M3	ジマンダイゼン水和剤 ペンコゼブ水和剤 ロプラール水和剤 銅剤及び混合剤(P.317)参照 ジマンダイゼン水和剤	1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:イプロゾン 1:マンゼブ	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで	400～600倍 400～600倍 1,000倍 400～600倍			M3 M3 2 M3	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
さ び 病	(発生の特徴) ○ 生育末期に発生が多い。	○ 床土は無病土を使用。	床土・本畑消毒 は種後～	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照 苗立枯病の項(P.307)参照																	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
べと病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 気温10～20℃前後、多湿条件で多発。</li> <li>○ 一次伝染は秋、苗床・本圃の地中の卵胞子が伝染源。感染株は全身感染。2～3月頃生育停滞、黄化、葉身の湾曲等の症状を示す(越年罹病株)。</li> <li>○ 二次伝染は、春に越年罹病株上に形成された分生子が雨風で飛散し拡大。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 一次伝染防止のため、育苗期、定植後の12月～1月も防除。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病地で連作しない。</li> <li>○ 排水不良を改善。</li> <li>○ 越年罹病株は抜き取り、圃場外で処分。</li> <li>○ 収穫後の残渣は処分。</li> <li>○ 床土は太陽熱消毒。</li> </ul>	発病初期			ダコンール1000 ジマンダイゼン水和剤 ベンコゼブ水和剤 メジャーフロアブル アミスターオプティフロアブル シグナムWDG ランファンフロアブル ドーシヤスフロアブル リドミルゴールFMZ プロポーズ顆粒水和剤 カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤 ベトファアイター顆粒水和剤 ジヤストフイットフロアブル ホライズンドライフロアブル フェステイバルC水和剤 ザンプロDMフロアブル フロムサイトSC レーバスフロアブル ダイナモ顆粒水和剤 ピシロックフロアブル オロンディスウルトラSC 銅剤及び混合剤(P.317)参照	1:TPN 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:ピコキシトロビン 1:アゾキシトロビン2:TPN 1:ピラロズロビン2:ボスカド 1:ジソフアナット 1:ジソフアナット2:TPN 1:マンゼブ2:ダキシルM 1:ベンチアハリカルブイソプロピル 2:TPN 1:ベンチアハリカルブイソプロピル2:マンゼブ 1:ベンチアハリカルブイソプロピル2:マンゼブ 1:シモキサニル2:ベンチアハリカルブイソプロピル 1:フルビコリド2:ベンチアハリカルブイソプロピル 1:シモキサニル2:フアモキサト 1:シ'トモルF2:塩基性塩化銅 1:アトドラジ2:シ'トモルF 1:フルアジナ 1:マンソプロハミット 1:アミルプロL2:シモキサニル 1:ピカルブトラゾクス 1:オキサチアピロリン2:マンジプロハミット	1,000倍 400～600倍 400～600倍 2,000倍 1,000倍 1,500倍 2,000倍 1,000倍 500～1,000倍 750～1,000倍 750～1,000倍 2,000倍 3,000倍 2,500倍 600～800倍 1,500～2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	6回以内 5回以内 5回以内 3回以内 4回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 5回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普	×	○ かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)、かぶれ注意



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
白色疫病	(発生の特徴) ○ 冬の温暖多雨で多発。 ○ 早生品種に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ 早期発見、早めに防除。	○ 一度発病した圃場は3～4年間作付を避ける。 ○ 排水を良くする。	発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	400～500倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	○ かぶれ注意 ○ かぶれ注意
					29	フロキサイド水和剤	1:フルジナム	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
					29	フロキサイドSC	1:フルジナム	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:マンゼブ2:タテシホルム	500～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ジモキニル2:アモキシトリン	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M1	フェスタイバルC水和剤	1:ジモルフェ2:塩基性塩化銅	600～800倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロボース顆粒水和剤	1:ベンチアハリカルブイプロピル2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ベンチアハリカルブイプロピル2:マンゼブ	750～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ベンチアハリカルブイプロピル2:マンゼブ	750～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+40	ベトアアイトー顆粒水和剤	1:ジモキニル2:ベンチアハリカルブイプロピル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					43+40	ジヤストアイトフロアブル	1:フルオピロトリン2:ベンチアハリカルブイプロピル	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					40	レーバスフロアブル	1:マンジプロハシトリン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					11+7	シグナムWDG	銅剤及び混合剤(P.317)参照	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					灰色かび病	(発生の特徴) ○ 冬から春にかけて温暖多雨の年に発生が多い。	○ 発病株は確実に処分。 ○ 圃場周辺の残渣も処分。	発病初期		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	
29	フロキサイド水和剤	1:フルジナム	1,000～2,000倍	収穫7日前まで						5回以内	普	×	
29	フロキサイドSC	1:フルジナム	1,000～2,000倍	収穫3日前まで						5回以内	普	×	
M7	ベルクートフロアブル	1:イミダジンアルヘル酸塩	1,000倍	収穫前日まで						5回以内	普	△	
M7	ベルクート水和剤	1:イミダジンアルヘル酸塩	1,000倍	収穫前日まで						5回以内	普	△	
12	セイブアーフフロアブル20	1:フルジオキニル	1,000～1,500倍	収穫前日まで						3回以内	普	○	
9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:ジプロニル2:フルジオキニル	1,000倍	収穫前日まで						3回以内	普	△	
17+12	ジヤストミート顆粒水和剤	1:フェンヘキサトリン2:フルジオキニル	2,000～3,000倍	収穫前日まで						3回以内	普	○	
2	スミレックス水和剤	1:プロシメトリン	1,000倍	収穫前日まで						5回以内	普	△	
3	ワーグアツプフロアブル	1:外ナゾール	2,000倍	収穫前日まで						3回以内	普	○	
10+1	ニマイバール水和剤	1:ジエトフェカルブ2:ベニシ	1,000倍	収穫7日前まで						5回以内	普	△	
11	ストロビーフロアブル	1:クレキシムメチル	2,000～3,000倍	収穫14日前まで						3回以内	普	△	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピルヘンカルブ	2,000～4,000倍	収穫前日まで						5回以内	普	△	
11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで						3回以内	普	△	
11+M5	アミスターオーブティフロアブル	1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△※						
11+7	シグナムWDG	銅剤及び混合剤(P.317)参照	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※						
7	カンタストライフロアブル	1:ボスカトリン	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
7	アフェットフロアブル	1:ベンチオキサトリン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△						
7+M5	ベジセイバー	1:ベンチオキサトリン2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△						
7	パレード20フロアブル	1:ピラゾフロリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
7	カナマフロアブル	1:インテルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△						
7	ケンジキフロアブル	1:イプロエタシトリン	1,000～3,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	○						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	薬剤防除法										
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項	
灰色腐敗病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 冬から春の温暖多雨で発生が多い。</li> <li>○ 白色疫病被害株は、灰色腐敗病の感染を受けやすい。</li> <li>○ 発病は晴天日に行う。</li> <li>○ 圃場周辺の残渣処分。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 窒素肥料の過用や晩期追肥を避け、適正な肥培管理。</li> </ul>		M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△		
				2	ロブラーメル水和剤	1:イプロジオン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
				29	フロンスайд水和剤	1:フルンナム	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×		○ かぶれ注意
				29	フロンスайдSC	1:フルンナム	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×		○ かぶれ注意
				M7	ベルクルート水和剤	1:イミクタジアンヘルシル酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				M7	ベルクルートフロアブル	1:イミクタジアンヘルシル酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				12	セイビアーフロアブル20	1:フルジホキソニル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				1	ベンレート水和剤	1:ベンニル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△		
				1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	500～1,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△		
				2	スミレックス水和剤	1:プロシドン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	ワークアップフロアブル	1:ホコゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○ 葉害等(注)(P.299)
				11	ストロビーフロアブル	1:クレキシムメチル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△		
				11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピルヘンカルブ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
	11	メジャーフロアブル	1:ピコキスプロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		○ 葉害等(注)(P.299)			
	11+7	シグナムWDG	1:ピラホストロビン2:ボスカド*	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※					
	11	スクレアフロアブル	1:マンデスロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○ 葉害等(注)(P.299)			
	7	カンタストライフロアブル	1:ボスカド*	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
	7	アフェットフロアブル	1:ペンチオセプト*	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△					
	7	バレード20フロアブル	1:ピラシフルミド*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
	7	カナメフロアブル	1:インフルキサム	4,000～8,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△					
	7+M5	ベジセイバー	1:ペンチセプト2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△					
			銅剤及び混合剤(P.317)参照										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										水産 (注)	人 毒	本剤の使 用回数	注意事項	
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	毒性	注意事項						
			時期	発生 初期	発生 初期	発生 初期	発生 初期	発生 初期	発生 初期			発生 初期					発生 初期
アブラムシ類	(発生の特徴) 発生主体はネギアブラムシ。		1B		ダイアジン乳剤40 エルサン乳剤	1:ダイジン 1:PAP	1,000倍 1,000～2,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内	劇 劇	×	×					
ヨトウムシ	(防除上のポイント) 若齢幼虫期に防除。				BT剤(参考資料P.15参照)												
ネギコガ	(発生の特徴) 夏期に発生が多い。		3A		アデオソニ乳剤	1:ベルトリン	3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×		○合ピレ(注)(P.15)				
ネギキリムシ類	(発生の特徴) 主要種は、カブラヤガ、タマヤガ。		3A 22B		ガードベイトA アクセルベイト	1:ベルトリン 1:タグラブリン	3kg/10a 6kg/10a	生育初期 収穫前日まで	5回以内 3回以内	普 普	○※ ○		○合ピレ(注)(P.15)、株元散布				
ネギアザミウマ	(防除上のポイント) 発生初期から早めの防除。		4A		アドマイヤーフロアブル	1:イタダクプロブド	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△		○使用方法(注)(P.300)				
			1B 1B 1B 1B 1B 1B 4A 4A 3A 3A 3A 5 14 34 30 28 21A		ダイアジン乳剤40 サイアノックス乳剤 エルサン乳剤 トクチオン乳剤 オルトラ水中和剤 ジェイエース水溶剤 ダーズバン乳剤40 モスピラン顆粒水溶剤 モスピランSL液剤 アグロスリン水中和剤 アグロスリン乳剤 アデオソニ乳剤 デリアナSC リーフガード顆粒水中和剤 フアンセーフフロアブル グレンシーア乳剤 ベネビアOD ハチハチ乳剤	1:ダイジン 1:CYAP 1:PAP 1:プロチオホス 1:アセフェート 1:アセフェート 1:クロロピリホス 1:アセタミプロド 1:アセタミプロド 1:ジヘルムリン 1:ジヘルムリン 1:ベルトリン 1:セネトラム 1:チオオクタム 1:フロトキン 1:フルキサタクト 1:ジアントラニプロール 1:トクエンピコト	700～1,200倍 500～1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000～1,500倍 1,000～1,500倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,000～3,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 3,000倍 2,500～5,000倍 1,500倍 1,000～2,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍	収穫21日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 4回以内 5回以内 5回以内 2回以内 3回以内 5回以内 5回以内 5回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	劇 普 劇 普 普 普 劇 劇 劇 普 普 普 普 普 普 普 普 劇	×		○合ピレ(注)(P.15) ○合ピレ(注)(P.15) ○合ピレ(注)(P.15) ○合ピレ(注)(P.15)	○目に刺激痛、かぶれ注意			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種防除法	薬剤防除法					使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
			IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)					
タネバエ	(発生の特徴) 幼虫が播種後の種子や幼苗の地際部などを食害。	鶏糞や未熟堆肥の施用、前作のすき込みは成虫を誘引し被害を増加させるので注意。	は種時又は定植時	1B	ダイアジン5	1:ダイジン	3~5kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	管	×	○ 作付前:全面土壌混和又は作物生育中:作条処理して軽く覆土
ネギハモグリバエ	(防除上のポイント) 発生初期から早めの防除。		発生初期	1B 5 28	ダイアジン乳剤40 ディアナSC ベネビアOD	1:ダイジン 1:スピネラム 1:シアントラニプロール	1,000~2,000倍 2,500~5000倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで	2回以内 2回以内 3回以内	劇 普 普	×	○ 葉害等(注)(P.299) 登録はハモグリバエ類
ネダニ類	(発生の特徴) 地下部(鱗茎、根)を食害。 主要種はロビネンネダニ。	ねぎ、たまねぎ、らっきょう、にら、ゆかりなどのユリ科作物の連作を避ける。 1カ月以上灌水で土壌中のネダニは防除可能。		9B 30 14	コルト顆粒水和剤 グレーシア乳剤 パダンSG水溶剤	1:ピフルキナゾン 1:フルキキタミド 1:カルタップ	2,000倍 2,000~3,000倍 1,500倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内	普 普 劇	×	○ 登録はハモグリバエ類

障害名 発生原因	症状	対策	病状	
			病害名	症状
葉の先枯れ (葉害やガス害でも発生するが、排水不良による根腐れが原因。普通栽培では圃場一面に発生。)	変調部は薄い緑色を呈し、乾燥したようになる。健全部との境界は不明瞭、くぼみはなく平面的で先端部のみで発生。	○排水対策を講じる ○根腐れを避ける管理を心がける。 ○通常、春先の温度上昇により回復する。	白色疫病	変調部は白色から薄い白色になり、境界は明瞭にくぼむ。葉身途中より折損したように発生。

病名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					本剤の使用回数	水産 人毒 (注)	注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名			
萎縮病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、IYDV。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○ ねぎ、たまねぎ、なら、らっきょう畑の近くに苗床を設けると被害が大きくなることがある。	耕種的防除法 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。	(耕種的防除法) ○ アブラムシの飛来防止と防除に努める。 ○ 発病圃場の周辺での栽培は避ける。 ○ 発病株は、できるだけ除去。 アブラムシ類の項(P.265)参照					2回以内	△	
			発生時期	P2	オリゼメート粒剤	1:プロホナゾール	6kg/10a			
えそ条斑病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、IYDV。 ○ 虫媒(ネギアザミウマ)伝染するウイルス病。 (防除上のポイント) ○ ネギアザミウマの防除を徹底。	耕種的防除法 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。	(耕種的防除法) ○ 移植栽培及び直播栽培時には、粒剤施用。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止。 ○ 発病株は早期に抜き取り、処分。 ○ 収穫残渣は放置せず土中に埋めるなど速やかに処分。 ネギアザミウマの項(P.268)参照					2回以内	△	
			発生時期	24+M1 24+M1 31+24 U18 31 31+M1	カズミンボルドー カッパーシン水和剤 カセト水和剤 バリダシン液剤5 スターナ水和剤 ナレート水和剤 銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	1:カガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カガマイシン2:塩基性塩化銅 1:オキリニック酸2:カスガマイシン 1:バリダマイシン 1:オキリニック酸 1:オキリニック酸2:有機銅	1,000倍 1,000倍 1,000倍 500倍 2,000倍 1,000倍			
軟腐病	(発生の特徴) ○ 台風等の激しい風雨による傷口から病原菌が侵入。	耕種的防除法 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 苗床は薄まきにする。 ○ 発病株は早期に除去。	(耕種的防除法) ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 苗床は薄まきにする。 ○ 発病株は早期に除去。					3回以内	△	
			発生時期	M5 M3 M3 M3 P7 21 21+M5 21+27 27+40 40+M5 40+M3 40+M3 M3+4 40+M1 45+40 40 49+40 11 11+M5	ダコニール1000 ジマンダイセン水和剤 ベンコゼブ水和剤 ペンコゼブフロアブル アリエツァイ水和剤 ランマンフロアブル トーシヤスフロアブル ダイナモ顆粒水和剤 ベトアアイター—顆粒水和剤 プロポーズ顆粒水和剤 カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤 リドミルゴールトMZ フェスタイバルC水和剤 ザンプロDMフロアブル レーバスフロアブル オロンデイスウルトラSC メジャーフロアブル アミスターオープンフロアブル 銅剤及び混合剤(P.317)参照	1:TPN 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:ホセチル 1:ジアゾアクト 1:ジアゾアクト2:TPN 1:アミストロロ2:シモキサニル 1:ジモキニル2:ベンチアハリカルブ イゾプロピル 2:TPN 1:ベンチアハリカルブイゾプロピル マンゼブ 1:ベンチアハリカルブイゾプロピル2: マンゼブ 1:マンゼブ2:タテキシルM 1:ジトモル2:塩基性塩化銅 1:アトクランジ2:ジトモル 1:マンジプロバシト 1:オキチアピロリン2:マンジプロバシト 1:ピコキシプロリン 1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍 600倍 600倍 500~600倍 800倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 750~1000倍 750~1000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,500~2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍			
べと病	(発生の特徴) ○ 春先の降雨は発生を助長。	耕種的防除法 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 苗床は薄まきにする。 ○ 発病株は早期に除去。	(耕種的防除法) ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 苗床は薄まきにする。 ○ 発病株は早期に除去。					3回以内	△	
			発生時期	M5 M3 M3 M3 P7 21 21+M5 21+27 27+40 40+M5 40+M3 40+M3 M3+4 40+M1 45+40 40 49+40 11 11+M5	ダコニール1000 ジマンダイセン水和剤 ベンコゼブ水和剤 ペンコゼブフロアブル アリエツァイ水和剤 ランマンフロアブル トーシヤスフロアブル ダイナモ顆粒水和剤 ベトアアイター—顆粒水和剤 プロポーズ顆粒水和剤 カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤 リドミルゴールトMZ フェスタイバルC水和剤 ザンプロDMフロアブル レーバスフロアブル オロンデイスウルトラSC メジャーフロアブル アミスターオープンフロアブル 銅剤及び混合剤(P.317)参照	1:TPN 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:ホセチル 1:ジアゾアクト 1:ジアゾアクト2:TPN 1:アミストロロ2:シモキサニル 1:ジモキニル2:ベンチアハリカルブ イゾプロピル 2:TPN 1:ベンチアハリカルブイゾプロピル マンゼブ 1:ベンチアハリカルブイゾプロピル2: マンゼブ 1:マンゼブ2:タテキシルM 1:ジトモル2:塩基性塩化銅 1:アトクランジ2:ジトモル 1:マンジプロバシト 1:オキチアピロリン2:マンジプロバシト 1:ピコキシプロリン 1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍 600倍 600倍 500~600倍 800倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 750~1000倍 750~1000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,500~2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍			



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC		FRAC	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水産(注)	注意事項		
			時期	コード											
白絹病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高温多湿条件下で発生が多い。</li> <li>○ 前作物物の残渣や未熟たい肥のすき込みは発病を助長。</li> <li>○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので土中深く埋め込む。</li> <li>○ 田畑輪換を行い、夏期水田にすると、土中の菌核の死滅に有効。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避け、床土は無病土を使用。</li> <li>○ 被害株は菌核を落とさないように圃場外へ除去。</li> </ul>	床土消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
			生育期	2	2	ロフアール水和剤	1:イプロゾン	500~1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△		○ 1 0 / m <sup>3</sup> 株元灌水	
				7	7	アフェットフロアブル	1:ベンチオゼプト	1,000~2,000倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	2回以内	普	△		○ 1 0 / m <sup>3</sup> 株元灌水	
				7	7	カナメフロアブル	1:インピルキサム	4,000~8,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△		○ 株元散布	
				7	7	パレード20フロアブル	1:ピラゾフロルシド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○ 葉害等(注)(P.299)	
				11	11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
				19	19	ジオゼット水和剤	1:ボリキシンD亜鉛塩	500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○			
				7+M5	7+M5	ベンジセイバー	1:ベンチオゼプト2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△		○ 株元散布	
				U18	U18	バリダシン液剤5	1:バリダマイシン	500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		○ ボルトー液との混用不可、トマト、きくへの飛散注意。	
				1:トリックス粉剤	20~30kg/10a	土寄せ前但し、収穫14日前まで	3回以内	普	△		○ 株元散布				
				リゾレックス水和剤	1,000倍	土寄せ時(但し、収穫14日前まで)	3回以内	普	△		○ 株元散布				
				フロキサイド粉剤	1:フロキサム	15kg/10a	土寄せ時但し、収穫21日前まで	2回以内	普	△※		○ 株元散布			
				モンカットファイブ粉剤20DL	1:フルトラニル	10~15kg/10a	土寄せ時但し、収穫30日前まで	4回以内	普	△		○ 株元散布			
				モンカットフロアブル40	1:フルトラニル	2,000倍	土寄せ時但し、収穫30日前まで	4回以内	普	△		○ 株元散布			
				モンカット粒剤	1:フルトラニル	4~6kg/10a	土寄せ時但し、収穫30日前まで	4回以内	普	△		○ 株元散布			
萎凋病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病地では連作しない。</li> </ul>		床土消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
			前定植		3	トリフミン水和剤	1:トリフルベンゾール	100倍	定植前	1回	普	△		○ 使用方法(注)(P.300)	
黒腐菌核病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 被害株の残渣が次作への伝染源となる。</li> <li>○ 低温多湿条件下で多発。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病圃場での連作は避ける。</li> <li>○ 酸性の強い圃場では消石灰を施用。</li> </ul>	床土消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
			発生期	7	7	パレード20フロアブル	1:ピラゾフロルシド	100倍	育苗後半~定植当日	1回	普	○		○ 使用方法(注)(P.300)	
				7	7	アフェットフロアブル	1:ベンチオゼプト	1,000~2,000倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	2回以内	普	△		○ 1 0 / m <sup>3</sup> 株元灌水	
				7	7	パレード20フロアブル	1:ピラゾフロルシド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○ 1 0 / m <sup>3</sup> 株元灌水	
				7	7	カナメフロアブル	1:インピルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△		○ 株元散布	
				11	11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
							マラン乳剤	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	6回以内	普	△			
							エルサン乳剤	1,000~2,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	×			
							ダイアジン乳剤40	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×			
				ハチハチ乳剤	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×						
				コルト顆粒水和剤	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△		○ 目に刺激痛、かぶれ注意				

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ネ キ リ ム シ 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○(発生の特徴)</li> <li>○主要種は、カブラヤガ、タマヤガ。</li> <li>○被害は厳寒期を除き見られ、5～9月に異常発生することがある。</li> <li>○前作や作付前の雑草で生育した幼虫が加害することが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。</li> <li>○被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。</li> <li>○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆。</li> </ul>	発生前	3A		アオス粒剤	1:アフルリン	4～9kg/10a	定植時	1回	劇	×	○ 作条土壌混和 合ビレ(注)(P.15) ○ 使用方法(P.300)
			発生初期	28		ベリマークSC	1:シアントラニロリアロール	400倍	生育初期	3回以内	普	△	○ ※ ○ 株元散布 合ビレ(注)(P.15) ○ 050株元灌注
ヨ ト ウ ム シ	<ul style="list-style-type: none"> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 若齢幼虫期に防除。</li> </ul>		発生初期			BT剤(参考資料P.15参照)							
ハ ス モ ン ウ	<ul style="list-style-type: none"> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 若齢幼虫期に防除。</li> </ul>		発生初期			BT剤(参考資料P.15参照)							
ネ キ コ ガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>○ 夏期に発生が多い。</li> </ul>		発生前	4A		アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	1:ジノアフラン 1:ジノアフラン	50倍 50倍	定植前日～定植時 定植前日～定植時	1回 1回	普 普	△ △	○ 使用方法(注)(P.300) ○ 使用方法(注)(P.300)
			発生初期	1B 3A 3A 5 21A+22B 28 28 28 30 30	39	スミチオン乳剤 アグロスリン乳剤 アデオイン乳剤 デアナSC アクセルキングフロアブル フェニックス顆粒水和剤 ブレバソフフロアブル5 ヨーバルフロアブル グレーシア乳剤 ブフロアアールSC	1:MEP 1:シバルマトリン 1:ベルマトリン 1:ズネトラム 1:トリアンピラト <sup>2</sup> :タアルミン 1:フルベジ <sup>3</sup> :アミド <sup>4</sup> 1:クロアトリアロリアロール 1:トリアロリアロール 1:フルキサ <sup>5</sup> :タミド <sup>6</sup> 1:ブフロアアールSC	1,000倍 2,000倍 3,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 劇 普 普 普 普	△ × × × △ △※ △ △ △ △ △	○ 合ビレ(注)(P.15) ○ 合ビレ(注)(P.15)



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水産(注)	注意事項
シロイチモジヨトウ	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。 ○ 白化した被害葉は除去。		発生前	28		ベリマークSC	1:ジアントラニロアロール	400倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.300)、
			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:テフレンシロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタプロン乳剤	1:クロアフルアスロン	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノキサロン	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マツチ乳剤	1:フルフェノキサロン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		アアルコンフロアアブル	1:外キシフェノイド*	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアアブル	1:クロマフェノイド*	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアアブル	1:テラフェノイド*	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:エマメチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト*	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト*	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元灌法、混用(注)(P.300)、回数注意
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベシジン*	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)回数注意
				28		ブレバソフロアアブル5	1:クロラントリニロアロール	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		ベリマークSC	1:ジアントラニロアロール	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ジアントラニロアロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアアブル	1:テトラニロアロール	2,500~5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				13		コテソフロアアブル	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	△※
				21A+22B	39	アケルキングフロアアブル	1:トルフェンブト2:タフルシジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	△※
				22A		トルネードエースDF	1:イトキサカルブ*	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				22A		アアイントリADF	1:イトキサカルブ*	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				un		ブレオフロアアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサタト*	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		プロフロアSC	1:プロフラニト*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						BT剤(参考資料P.15参照) (交信攪乱剤)イトウコン-S 性フェロモンの項(参考資料P.9)参照							

病名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○ 発生初期から早めの防除を 実施。 (発生の特徴) ○ 本虫はYYSV(えそ条斑病の 項参照)を媒介。	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ネギ ギア ザミ ウマ	○ 発生初期から早めの防除を 実施。 (発生の特徴) ○ 本虫はYYSV(えそ条斑病の 項参照)を媒介。	○ 圃場周辺の雑草を除去。 ○ 圃場の乾燥防止。 ○ 健全苗の植付。 ○ シルバーボリ及びシル バーテープなどを使用し、 媒介虫の飛来を防止。	発 生 前	4A		アタラシカサム	1:チアミキサム	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 作条混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作条処理土壌混和
				28		ベリマークSC	1:ジアントラニプロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.300)、 回数注意
				28+4A		ジュロフロアアブル	1:クロラントニプロール2:チアミキサ サム	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:ジアントラニプロ ール	40g/セル成型育苗トレ イ1箱またはハーパー ポット1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.300)、回数 注意
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	0.25～0.5g/株	定植前日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤーフロアアブル	1:イシダクロプロド	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントニプロール2:ジノテフラ ン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	50g/セル成型育苗トレ イ1箱またはハーパー ポット1冊	定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				ネギ ギア ザミ ウマ	○ 発生初期から早めの防除を 実施。 (発生の特徴) ○ 本虫はYYSV(えそ条斑病の 項参照)を媒介。	○ 圃場周辺の雑草を除去。 ○ 圃場の乾燥防止。 ○ 健全苗の植付。 ○ シルバーボリ及びシル バーテープなどを使用し、 媒介虫の飛来を防止。	発 生 前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イシダクロプロド	4kg/10a	定植時
4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド					6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
4A		アタラシカサム	1:チアミキサム					6～9kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 作条混和
4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン					6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 播溝処理土壌混和
4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン					6kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 株元散布
4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン					6kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 株元散布
4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン					6kg/10a	生育期但し、収穫3 日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン					6kg/10a	生育期但し、収穫3 日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン					3～6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム					6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 株元処理

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水産(注)	注意事項
ネギアザミウマ			発 生 初 期	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテラン	400倍	生育期但し、収穫 14日前まで	1回	普	△	○ 0.4 0/m <sup>2</sup> 株元灌注
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテラン	400倍	生育期但し、収穫 14日前まで	1回	普	△	○ 0.4 0/m <sup>2</sup> 株元灌注
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテラン	1,000倍	生育期但し、収穫 14日前まで	1回	普	△	○ 株元処理 10/m <sup>2</sup>
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテラン	1,000倍	生育期但し、収穫 14日前まで	1回	普	△	○ 株元処理 10/m <sup>2</sup>
				1B		ダイアジン乳剤40	1:ダイアジン	700~1,200倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				1B		トクチオン乳剤	1:プロチオホス	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イシダクロブド	2,000~4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:アセタミプリド	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニシン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
				4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				5		スピエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500~5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセト(虫)2:スピノサ ト	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:アハメカチン	500~1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオシガラム	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
				14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				21A		ハチハチ乳剤	1:トリアエンピト <sup>2</sup> :タフルミジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
21A+22B		アクセルキングフロアブル	1:トリアエンピト <sup>2</sup> :タフルミジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※					
28		ベリマークSC	1:ジアントラニリプロール	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 株元灌注、回数注意 混用(注)(P.300)				
28		ベネビアOD	1:ジアントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)				
28		ヨーバルフロアブル	1:トリアニリプロール	2,500~5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△					
29		ウララDF	1:フロニカミド	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
un		ブレオフロアブル	1:ピロタリル	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△					
34		アアンセーブフロアブル	1:フロタキン	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×					
9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△					
30		グレースシア乳剤	1:フルキサキサミド	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△					

病名 害虫	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○ 土着天敵への影響が大きい 薬剤(合成ピレスロイド系薬 剤や有機リン系薬剤など)を 使用後、多発することがあ る。	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ネ		○ 圃場周辺の雑草を除去。 ○ 圃場の乾燥を防止。 ○ 健全苗の植付。	発 生 前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
ギ				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
ハ				4A		ダンツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作条処理土壌混和
モ				28		ブレバソフフロアブル5	1:クロチアニジン	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)展着剤 は加用しない。
グ				28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.300)、 回数注意
リ				28+4A		ジュロポフロアブル	1:クロチアニジン	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)、回数 注意
バ				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプロール 2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ 1箱またはハーバー ボックス1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.300)、回数 注意
エ				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプロール	0.25～0.5g/株	定植前日 ～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イタクトプロール	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロチアニジン 2:ジノテフラン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプロール	6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		ベストガード粒剤	1:ニフェピラム	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 播溝処理土壌混和
				4A		アクトラ粒剤5	1:チアメキサム	6～9kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 作条混和
				4A		ダンツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 播溝処理土壌混和
				4A		ダンツ粒剤	1:クロチアニジン	3～6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
				28		アリロン粒剤オメガ	1:シアントラニプロール	6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 使用回数注意
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6～9kg/10a	生育期但し、収穫3 日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6～9kg/10a	生育期但し、収穫3 日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項	
													時期
ネギハモグリバエ			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	400倍	生育期、但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 0.4 0/m <sup>3</sup> 株元灌水	
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	400倍	生育期、但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 0.4 0/m <sup>3</sup> 株元灌水	
			4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノキサロ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			6		アファーム乳剤	1:エマメチン安息香酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			6		アグリタック	1:アハメチン	500~1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			28		アレバソフフロアブル5	1:クロチアニン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			28		ベリマークSC	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			28		ベネビアOD	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピナ	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			6		アグリタック	1:アハメチン	500~1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
			30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意
30		プロフレアSC	1:プロアズニド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意			
13		コデソフロアブル	1:クロルフェニル	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意			
14		パダンSG水溶剤	1:カルタブ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○	○ 株元灌水0.5 0/m <sup>3</sup> 混用(注)(P.300)、回数注意			
クロバネキノコバエ類	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 比較的排水の悪い、あるいは多くの有機物が投入されている圃場で発生。</p> <p>○ 成虫は、有機物に誘引され産卵。幼虫は未熟な有機物を餌とする。堆肥は完熟堆肥を用い、多施用を避け、土とよく混和する。</p>	<p>被葉及び収穫残渣は発生源となるので、圃場外で適切に処分。</p> <p>成虫は、有機物に誘引され産卵。幼虫は未熟な有機物を餌とする。堆肥は完熟堆肥を用い、多施用を避け、土とよく混和する。</p>	3A		フォース粒剤	1:テフルリン	9kg/10a	定植時	1回	劇	×	○ 作条土壌混和	
			4A		ベストガード粒剤	1:ニテピラム	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○	○ 使用方法(注)(P.300)
			4A		アドマイヤーフロアブル	1:イシクワロブト	200倍	定植前日~定植時	1回	劇	×	○	○ 株元散布
			3A		フォース粒剤	1:テフルリン	9kg/10a	収穫30日前まで	1回	劇	×	○	○ 株元散布
			15		デミリン水和剤	1:ジフルベンズロン	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○	○ 300 ml/0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノキサロ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	生育期、但し、収穫3日前まで	2回以内	普	△	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	1,000倍	生育期、但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○	○ 1 0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	1,000倍	生育期、但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○	○ 1 0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			28		ヨーバルフロアブル	1:トラネリプロール	2,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○	○ 1 0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○	○ 1 0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			14		パダンSG水溶剤	1:カルタブ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○	○ 1 0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			21A		ハチハチ乳剤	1:トルエンピラト	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○	○ 1 0/m <sup>3</sup> 株元灌水
			3A		フォース粒剤	1:テフルリン	9kg/10a	定植時	1回	劇	×	○	○ 作条土壌混和
1B		ラグビーMC粒剤	1:ガスサホス	20kg/10a	定植前	1回	普	△※	○	○ 全面処理土壌混和			
ネダニ類	<p>(発生の特徴)</p> <p>○ 灌水可能なほ場では、栽培終了後1~2か月灌水処理を行い、土壌中に残存しているネダニを防除。</p>		16		アプロードフロアブル	1:アプロフェニン	500~1,000倍	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 1~3 0/m <sup>3</sup> 株元灌水	
			1B		トクオン乳剤	1:プロチオホス	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○	○ 株元散布
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○	○ 株元散布
			3A		フォース粒剤	1:テフルリン	6~9kg/10a	収穫30日前まで	1回	劇	×	○	○ 株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	FRACコード				使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産(注)	注意事項
			IRACコード	FRACコード	時期	は種時							
			は種時										
病苗立枯	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼苗の地際部が軟化・変色し、地上部は萎れる。</li> </ul>					苗立枯病の項(P.307)参照							
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 高温時の播種は発病を助長する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 土壌伝染するので、前年の発生圃場には作付を避ける。</li> <li>○ 傷口から侵入するので、傷を付けないような管理作業を心がける。</li> </ul>		31	24+M1	スターナ水和剤 カスミンボルドー	1:オキリニグ酸 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで	3回以内 2回以内	普 普	△ △	
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ 発生初期から薬剤散布を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 間引きを早めに行う。</li> <li>○ 過乾燥、多肥栽培を控える。</li> </ul>		3	11 11+M5	トリフミン水和剤 ファンタジスタ顆粒水和剤 アミスターオーブテフロアブル	1:トリフミンゾール 1:ピルヘンカルブ 1:アゾキシストロビン2:TPN	3,000倍 3,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫21日前まで	3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普	△ △ △※	○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意
黒葉枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 8～9月に乾燥と曇雨天が繰り返されると発生が多くなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 排水不良地では作付を避ける。</li> <li>○ にんじん以外の作物と3年以上の輪作を行う。</li> </ul>		M5	M3 2 M7 M7 19 11+M5	タコニール1000 ジマンダイゼン水和剤 ロブラル水和剤 ベルクート水和剤 ベルクートフロアブル ポリオキシシAL水和剤 アミスターオーブテフロアブル	1:TPN 1:マンゼブ 1:イプロソシオン 1:イソキサジンアルベシル酸塩 1:イソキサジンアルベシル酸塩 1:ポリオキシシン複合体 1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍 400～600倍 1,000～1,500倍 500～1,000倍 1,000倍 500倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで	5回以内 3回以内 4回以内 5回以内 5回以内 5回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普	× △ △ △ △ ○ △※	○ かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(P.299) かぶれ注意
センチュウ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 主要種はネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ類。</li> <li>○ ネグサレセンチュウの被害は、坪枯れ状に生育が抑制され、根には赤褐色のシミができ、腐る。</li> <li>○ ネコブセンチュウの被害は、生育中に葉が黄変し立たず広がりが、根全体がコブだらけとなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (耕種的防除)</li> <li>○ 対抗植物を栽培する。</li> </ul>				銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	1:フルアジナム	3,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普	△ △ △ △※ △ ○ ×	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299) ○ 皮膚かぶれ注意
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 主要種はニンジンアブラムシ。</li> </ul>			1B	4A 4A 4A 4A	マランノ乳剤 アドマイヤー顆粒水和剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤	1:マラン 1:イシクロプロリド 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:アセチムプロリド	2,000～3,000倍 10,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫14日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	4回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 劇	△ △ △ △ △	

薬剤防除法												
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハ モ グ リ バ エ 類	(発生の特徴) ○ 葉肉内を幼虫がせん孔しなから食害し、白っぽい線状の食害根を葉面に生じる。		4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:ジノアフラン 1:ジノアフラン	9kg/10a 9kg/10a	は種時 は種時	1回 1回	普 普	△ △	○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和
			6 5		アファーム乳剤 スピノエース顆粒水和剤	1:エマメチン安息香酸塩 1:スピノアト	2,000倍 5,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△※ △	
ネ キ リ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ、タマヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除いていつでも見られ、5～9月に異常発生することがある。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を見つけて速に捕殺する。		1B 3A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤	1:ダイジン 1:テフルリン	6kg/10a 4～12kg/10a	は種前 は種前	1回 1回	普 劇	× ×	○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和又は作条土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
			3A		フォース粒剤	1:テフルリン	4kg/10a	は種時	1回	劇	×	○ 作条土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
			1B		ネキリエースK	1:イネサチオン	3kg/10a	発芽期～生育初期 但し、収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 土壌表面株元処理
キ ア ゲ ハ	(発生の特徴) ○ 若・中齢幼虫は体全体が黒褐色で白斑があり、葉の上方の小葉を食害。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺する。		3A 22B		ガードベイトA アクセルベイト	1:ベルストリン 1:タフルミン	3kg/10a 3～6kg/10a	生育初期 収穫7日前まで 収穫前日まで	5回以内 3回以内	普 普	○※ ○	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15) ○ 土壌表面株元処理
			1B 13		マラソン乳剤 コテソフロアブル	1:マラソ 1:コロルアセチル	2,000～3,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	4回以内 2回以内	普 劇	△ △※	
ヨ ト ウ ム シ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。		3A 28 18		アグロスリン乳剤 フェニックス顆粒水和剤 ロムダンフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:ジベルストリン 1:フルベンジアト 1:テプフェジト	2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普	× △ ○	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等  (発生の特徴)	耕種的防除法	薬剤防除法				水産 人毒 (注)	注意事項					
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名			濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数		
モザイク病	病原ウイルスは、CMV、DsMV。 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 DsMVは種いもによっても感染する。	(耕種的防除法) ○ 豆類の圃場の隣接地での栽培は避ける。 ○ 圃場とその周辺の除草に努める。											
軟腐病	(発生の特徴) ○ 収穫間際に発生、降雨が続くと被害が多い。	○ 連作を避け、イネ科作物と輪作する。 ○ 被害株は速やかに除去する。											
乾腐病	(発生の特徴) ○ イモを輪切りにすると、中心部に赤色の小斑点が見られる。	○ 種いもは無病畑から採種する。 ○ 既発生地の種いもは使用しない。 ○ 連作を避ける。											
黒斑病	(発生の特徴) ○ 輪切りにすると維管束を中心に褐色を呈する。	○ 種いもは無病畑から採種し、掘取時に傷を付けないようにする。	本圃消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照								
汚斑病	(発生の特徴) ○ 多雨の場合に多く発生する。	○ 窒素質肥料の備用を避け、加里肥料を十分に施す。 ○ 多発すると孫いもの生育が悪化。 ○ 媛かぶややは本病に抵抗性。	種子消毒		いも類の種子消毒の項(P301)参照								
疫病	(発生の特徴) ○ サトイモだけに発病する。 ○ 高温(27～30℃)を好む。 ○ 夏季の多雨条件下や台風後に発生が多い。 ○ 発病した葉、莖や種いもから伝染する。 ○ 葉が傷つくと発病しやすい。 ○ 下位葉は、上位葉に比べて発病しやすいため、発生に注意する。  (防除上のポイント) ○ 薬剤散布は、下位葉まで薬液が十分かかるようにする。 ○ 発病前の薬剤散布は、発病後の進展を抑制する効果が高い。 ○ 発病後、多発時以外は、耐性菌対策のため同一薬剤の連続散布は避ける。 ○ 展着剤の種類によっては薬害が発生するので注意する。	○ 発生圃場を水田化し菌密度を低下させる。 ○ 圃場内の排水を良好にし、圃場内を乾燥させる。 ○ 既発生地の種いもは使用しない。 ○ 疫病が発生した圃場では連作を避け(2～3年作付を控える)、隣接する圃場での作付けをしない。 ○ 被害残渣を圃場内に残さないよう除去する(圃場周辺に葉、葉柄等を野積みしない)。 ○ 発病した残渣を堆積しプラスタイクフイルムで被覆し、嫌気性発酵させる。	種子消毒	M3+1	いも類の種子消毒の項(P301)参照 ベンレートT水和剤20	1:チアゾラム2:ベンゾニル	20倍	植付前	1回	普	○ 1分間種いも浸漬		
			発生前	NC+M1	ジーファイン水和剤			1,000倍	収穫前日まで	-	普		
			発生初期	M3 M3 21	ペンコゼブ水和剤 ジマンダイセン水和剤 ランマンフロアブル			500倍 500倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普		
				11 21+27 40+M3 40+M3 U17	アミスター20フロアブル ダイナモ顆粒水和剤 ベネセット水和剤 カンパネラ水和剤 ピシロックフロアブル			2,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普	○ 葉害等(注)(P.299) ○ ※	
ネグサレセンチュウ		○ 銅剤及び混合剤(P.317)参照 ○ 土壌病害虫防除法の項(P.301)参照	本圃消毒		銅剤及び混合剤(P.317)参照								



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										水産 (注)	注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒			
ア ブ ラ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はワタアブラムシ。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感 受性低下が一部地域で認め られている。	○ 雑草にも寄生し発生源と なるので、圃場内や周辺 を除草する。	駆付前	4A		アクトラ粒剤5	1:チアトキサム	6kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 作柔混和	
			植付時	4A		アドマイヤー1粒剤 モスピラン粒剤 オンコル粒剤5	1:イシダプロアジド* 1:アセタミプロド* 1:ベンフルカカルブ*	4kg/10a 3~6kg/10a 6~9kg/10a	植付時 植付時 植付時	1回 1回 1回	普 普 普	△ △ △	○ 植溝土壌混和 ○ 植溝土壌混和 ○ 植溝土壌混和	
ス セ ス メ ジ	(発生の特徴) ○ 生育初期に加害されると被害 が大きく注意する。	○ 幼虫は見つけ次第捕殺す る。	発生初期	1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)	
			発生初期	3A		アデオイン乳剤	1:ベルメリン	3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 葉害等(注)(P.299)	
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	(発生の特徴) ○ 年5~6回の発生、被害は9 ~10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 ○ 多発前の世代である8月中 旬頃に重点防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団 を寄生葉ごと摘除し、処分 する。	発生初期	18		マトリックフロアアブル	1:クロマフェンゾド*	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照	
			発生初期	28		ロムダンフロアアブル フェニックス顆粒水和剤 ブレバソフロアアブル5 ヨーバルフロアアブル コテソフロアアブル ブレオフロアアブル	1:チプフェジド* 1:フルベンシメゾド* 1:クロアントリコリアプロール 1:アトリエリアプロール 1:クロルフェニル 1:ピリタリル 1:イトキサカルブ*	2,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 5,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 劇 普	○ ○ △ △ △ △※ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照	
コ ガ ネ ム シ 類 幼虫	(発生の特徴) ○ 成虫は6月中旬~7月下旬 頃に発生のピークとなる。幼 虫は7月頃から発生する。	○ 周辺の寄生植物を除去す る。 ○ 必要以上に有機物を施用 しない。	駆付前	1B		ダイアジンSLゾル	1:ダイジン	25~50倍	植付前	1回	普	△	○ 希釈液の全面土壌混和(散 布液量:1000/10a)	
			時植付			ラグビーMC粒剤 土壌病害虫防除法の項(P.301)参照 BT剤(参考資料P.15)参照	1:カスサホス	20kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面処理土壌混和。登録は コガネムシ類	
ハ ダ ニ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はカンザワハダニ。 ○ 高温乾燥条件下で多発す る。 ○ 生育初期の多発は、生育阻 害を起すことがある。	○ 近接する発生源の影響が 大きいので、育苗床や圃 場内外の除草を徹底す る。	生育初期	1A		オンコル粒剤5	1:ベンフルカカルブ*	6~9kg/10a	生育期 但し、収穫 60日前まで	1回	普	△	○ 株元土壌混和	
			発生初期	6		コロマイト乳剤 コテソフロアアブル マイトローネフロアアブル サンマイトフロアアブル ピラニカEW モベントフロアアブル	1:シルベシクタン 1:クロルフェニル 1:ピロフェン 1:ピリダベン 1:アトリエリアプロール 1:スピロトキサト	1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000~1,500倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫21日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内 1回 2回以内 1回 3回以内	普 劇 普 劇 普 普	△※ △※ △ × △※ ○	○ 登録はカンザワハダニ ○ 葉害等(注)(P.299)	

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	アブラムシ類の項(P.278)参照				薬剤防除法				水産 人毒 (注)	注意事項
				IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	本剤の 使用回数		
ウイルス類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 主要な病原ウイルスはPVY、PLRV。</li> <li>○ タバコ黄斑えそ病防除対策に留意。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無病種いもを使用。</li> <li>○ 発病株を除去。</li> </ul>	(耕種的防除法)	31	41+25	スターナ水和剤 アグリマイシン-100	1:オキソプロパチン2:ストロブチン硫酸塩	1,000倍 1,000~1,600倍	収穫7日前まで 収穫3日前まで	5回以内 5回以内	普 普		
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 伝染源は土壌や種いもに生息する細菌。</li> <li>○ 小葉に発病し始めたら、直ちに1回目の防除を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作は発病を助長するので輪作を行う。</li> <li>○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。</li> <li>○ 無病種いもを使用する。</li> <li>○ 病株、病いもの除去、排水を良くする。</li> <li>○ 収穫は土の乾燥時に行い、いもに傷を付けない。</li> </ul>	(防除上のポイント)	M1+25	24+M1 24+M1	銅ストマイ水和剤 カズミンボルドー カッパパーシン水和剤	1:塩基性塩化銅2:ストロブチン硫酸塩 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	600~800倍 500~800倍 500~800倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	5回以内 3回以内 3回以内	普 普 普		
青枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 生長点付近の葉が萎れた後、全葉が急激に萎凋する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 発病圃場は3年程度水田化する。</li> <li>○ 非寄主作物を取り入れた5年以上の輪作とする。</li> <li>○ 被害株は除去し、排水を図り、圃場が多湿にならないようにする。</li> <li>○ 発病株に触れた手で健全株に触れないようにする。</li> <li>○ 管理作業で根を傷つけないようにする。</li> <li>○ 有機質を施し、敷わらやマルチ等により地温を著しく高くない。</li> </ul>	(防除上のポイント)			銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)参照							
そうか病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 病斑はコルク化して大小様々のかさぶた状となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 無病種いもを使用する。</li> <li>○ 土壌pH6.0以下に抑える。</li> <li>○ 粗大有機物の施用を控え、完熟堆肥を利用する。</li> <li>○ 抵抗性品種利用する。</li> </ul>	(防除上のポイント)	本圃消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
粉状そうか病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発生の特徴</li> <li>○ 病斑はコルク化して隆起し、そうか病に比べて小さく形は整っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 無病種いもを使用する。</li> <li>○ 排水不良地での栽培は避ける。</li> <li>○ 植付前の石灰窒素の50~100kg/10a 施用が有効。</li> <li>○ 収穫は土の乾燥時に行い、いもに傷を付けない。</li> <li>○ 冷涼にして通気のよい場所に貯蔵する。</li> </ul>	(防除上のポイント)	本圃消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
				種いも消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
				床土消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
				本圃消毒		土壌病害虫防除法の項(P.301)参照							
				植付前	29	フロンスイト粉剤	1:フルアジナム	30~40kg/10a	植付前	1回	普		○ 全面土壌混和、かぶれ注意 植溝散布(散布液量200/10a)、かぶれ注意
				植付前	29	フロンスイトFSC	1:フルアジナム	100倍	植付前	1回	普		○ 作条土壌混和 ○ 全面土壌混和
				植付時	36	ネビジン粉剤	1:フルストルブアズト	30kg/10a	植付時	1回	普		○ 全面土壌混和、かぶれ注意
				植付時	36	ネビジン粉剤	1:フルストルブアズト	60kg/10a	植付時	1回	普		○ 全面土壌混和
				植付前	29	フロンスイト粉剤	1:フルアジナム	30~40kg/10a	植付前	1回	普		○ 全面土壌混和、かぶれ注意
				植付前	29	フロンスイトFSC	1:フルアジナム	400~600mg/10a	植付前	1回	普		○ 全面土壌混和、かぶれ注意
				植付前	21	オラクル顆粒水和剤	1:フルアジナム	250g/10a	植付前	1回	普		○ 100%の水で希釈し全面散布 後土壌混和
				植付時	36	ネビジン粉剤	1:フルストルブアズト	60kg/10a	植付時	1回	普		○ 全面土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 毒 (注)	注意事項
乾腐病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 貯蔵中に被害を生じることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 無病種いもを使用する。</li> <li>○ 収穫は土の乾燥時に行い、いもに傷を付けない。</li> <li>○ 冷蔵にして通気の良い場所に貯蔵する。</li> </ul>									
疫病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 多発跡地では発生しやすすい。</li> <li>○ 梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやす。</li> <li>○ 窒素過多は発病を著しく助長する。</li> </ul> <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 初発を確認したら、散布間隔を短縮し、集中的に薬剤散布する。</li> <li>○ 同系統薬剤の連用は避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 無病種いもを使用する。</li> <li>○ 新しいいもへの感染を防ぐため培土を厚くする。</li> </ul>									
夏疫病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 夏期高温時に発生する。</li> <li>○ 病斑は同心円状の輪紋として生じる。</li> <li>○ 本菌はトマト、ナスにも寄生する。</li> </ul>										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC				FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
			IRAC コード	IRAC コード	IRAC コード	IRAC コード									
ア ブ ラ ム シ 類	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ 主要種はモモアカアブラムシとワタアブラムシ。	発 生 初 期	4A	4A	4A	4A	アドマイヤー1粒剤 モスピラン粒剤 ダントツ粒剤 アクトラ粒剤5	1:イシダクプロリド 1:アセタミプリド 1:クロチアニジン 1:チアメトキサム	4kg/10a 3～6kg/10a 3～6kg/10a 2～6kg/10a	植付時 植付時 植付時 植付時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ △ △ ×	○ 植溝土壌混和 ○ 植溝土壌混和 ○ 植溝処理土壌混和 ○ 作条混和	
			4A	4A	4A	4A	アドマイヤー水和剤 モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アクトラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 チェスス顆粒水和剤 コルト顆粒水和剤 ウララDF ハチハチ乳剤 モベントフロアアブル ベネビアOD トランススファームフロアアブル	1:イシダクプロリド 1:アセタミプリド 1:クロチアニジン 1:チアメトキサム 1:ジノアフラシ 1:ジノアフラシ 1:ピホロジン 1:ピロフルキナゾン 1:フロンカシド 1:トリアフェンピラト 1:スピロテトラト 1:ジアントラニロリアロール 1:スルホキサフロル	1,000～3,000倍 2,000～6,000倍 2,000～4,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 5,000倍 4,000～8,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	○ 登録はワタアブラムシ ○ 登録はワタアブラムシ	
ジ ヤ ガ イ モ ガ	○ 無被害の種いもを選ぶ。 ○ 収穫後の圃場及び貯蔵中に産卵しないよう防虫ネットの使用や速やかな保管をする。	発 生 初 期	1B	1B	3A	4A	オルトラン水和剤 トクチオン乳剤 スカウトフロアアブル モスピラン顆粒水溶剤	1:アセフェート 1:プロチホス 1:アセタミプリド	1,000～1,500倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫30日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 5回以内 3回以内	普 普 劇 劇	△ △ △※ △	○ 合ピレ(注)(P.15)	
			1B	1B	1B	1B	オルトラン水和剤 ジェイエース水溶剤	1:アセフェート 1:アセフェート	1,000倍 1,000倍	収穫30日前まで 収穫30日前まで	2回以内 2回以内	普 普	△ ○		
ダ テ マ ン シ 類	○ 卵塊や幼虫は見つけ次第捕殺する。 ○ 成虫は年2回発生する。 (防除上のポイント) ○ 幼虫の発生期に防除する。	発 生 初 期	1B	1B	4A	4A	オルトラン水和剤 ジェイエース水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アクトラ顆粒水溶剤	1:アセフェート 1:アセフェート 1:アセタミプリド 1:クロチアニジン 1:チアメトキサム	1,000倍 1,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍	収穫30日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 劇 普 普	△ ○ △ △ △	○ 登録は幼虫のみ ○ 登録はオオシゴキヤホシテントウ ○ 登録はテントウムシ ○ 登録はアブラムシ	
			1B	1B	1B	1B	オルトラン水和剤 ダイアジン粒剤5	1:アセフェート 1:アセフェート 1:ダイアジン	4～6kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和	
センチュウ類	○ 連作を避ける。	植付前					土壌病害虫防除法の項(P.301)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC	FRAC	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項		
			時期	コード									コード	
基腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地際の茎が黒変し、茎葉は黄色や紫色に変色し次第にしおれ、やがて枯死する。塊根はびり首から腐敗する。</li> <li>○ 雨水等で胞子が拡散し蔓延する。</li> <li>○ 土壌に残った発病残渣が伝染源となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いもは健全株から採取</li> <li>○ 発病株は種いもごと抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。</li> <li>○ 排水路の掃除や排水溝の設置により、ほ場の排水性を高める。</li> <li>○ 連作を避け、ヒルガオ科以外の植物を作付けする。</li> </ul>	11		いも類の種子消毒の項(P.301)参照 フリントフロアブル25	1:1フロキシストロビン	10倍 (4L/10a)	植付前	1回	普		○ 全面散布土壌混和		
			11		フリントフロアブル25	1:1フロキシストロビン	125倍 (50L/10a)	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和		
			11		フリントフロアブル25	1:1フロキシストロビン	250倍 (100L/10a)	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和		
			29		フロキサイトSC	1:1フロキシストロビン	500mℓ/10a (200L/10a)	植付前	1回	普	×	○ 全面散布土壌混和		
			29		フロキサイト粉剤	1:1フロキシストロビン	40kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和		
黒斑病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いも、苗は無病なものを使用する。</li> <li>○ 種いもは温湯消毒(47～48℃ 40分)。</li> <li>○ 収穫時にいもを傷つけない。</li> <li>○ 13～15℃で貯蔵する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いもは健全株から採取する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> </ul>	3		トリフミン水和剤	1:1フロキシストロビン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			11		アミスター20フロアブル	1:1フロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
つる割病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いもは食用としない。</li> <li>○ 被害いもは家畜に与えない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いもは健全株から採取する。</li> <li>○ 被害いもを早期処分する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 無病苗を使用する。</li> </ul>			いも類の種子消毒の項(P.301)参照									
					いも類の種子消毒の項(P.301)参照									
					土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
病黒あざ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 病斑はいもの表面に不整形や大型の黒あざ状に形成される。</li> <li>○ 表皮のみで発病する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いもは健全株から採取する。</li> <li>○ 被害いもを早期処分する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 無病苗を使用する。</li> </ul>			いも類の種子消毒の項(P.301)参照									
					土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
ナカシロシタバ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 病斑はいもの表面に不整形や大型の黒あざ状に形成される。</li> <li>○ 表皮のみで発病する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 種いもは健全株から採取する。</li> <li>○ 被害いもを早期処分する。</li> <li>○ 連作を避ける。</li> <li>○ 無病苗を使用する。</li> </ul>			いも類の種子消毒の項(P.301)参照									
					いも類の種子消毒の項(P.301)参照									
ナカシロシタバ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 若齢幼虫はつるの先や若い葉を好んで食害するため、圃場を良く観察して被害発生の初期を把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 病斑はいもの表面に不整形や大型の黒あざ状に形成される。</li> <li>○ 表皮のみで発病する。</li> </ul>	(耕種的防除法)											
			○ 排水を良くする。 ○ 連作を避ける。											
			桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蜜に影響があるので注意する。											
			生		トクチオン乳剤	1:1フロキサホス	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△			
			1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	劇	×			
			1A		オリオン水和剤40	1:アテニカルブ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	劇	△			
			18		ロムダンフロアブル	1:アブ7エノジド	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○			○ IGR剤(注)(P.15)参照
			15		マッチ乳剤	1:ルフェエロン	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△			○ IGR剤(注)(P.15)参照
			28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアジド	2,000～6,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			28		ブレバノンフロアブル5	1:クロアチアネリアプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			30		グレーション乳剤	1:フルキキタシ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△			
			30		プロフレアSC	1:プロフアニド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
22B		アクセルフロアブル	1:タフルミン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
22A		トルネードエースDF	1:イントキサルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○						
22A		ファイントリムDF	1:イントキサルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○						
un		ブレオフロアブル	1:ゼリタリ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
6		アニキ乳剤	1:レピクタチ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
イモキバガ	(発生の特徴) ○ 別名(イモコガ) ○ 葉の一部を内側に折り曲げたり、隣接する2枚の葉を重ね合わせて折り、表皮だけを残した食害が見られる。	(防除上のポイント等) ○ 老齢幼虫は葉を綴るため、圃場を良く観察して被害発生初期を把握する。	生育期	1A		オリオン水和剤40	1:アテニカルブ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	劇	△	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。		1A 5 6 6 13 15 15 18 18 22B 22A 22A 28 28 28 30 30 un		オリオン水和剤40 ディアナSC アニキ乳剤 アファーム乳剤 コテゾフロアブル アタブロン乳剤 マツチ乳剤 ロムダンフロアブル マトリックフロアブル アケセルフロアブル トルネードエースDF アアインリムDF フェニックス顆粒水和剤 アレバノンフロアブル5 ベネビアOD グレーシア乳剤 プロフレアSC プレオフロアブル	1:アテニカルブ 1:スピネトラム 1:レピダチン 1:エマメタチン安息香酸塩 1:クロルフェニル 1:クロルフェニル 1:ルフェエロン 1:テラフェジント 1:クロマフェジント 1:マトリルジン 1:イトキキカルブ 1:イトキキカルブ 1:フルベンジメクト 1:クロラントニアニプロール 1:シアンチアラニプロール 1:フルキサメクト 1:プロフロニド 1:ピリタリル	1,000倍 2,500～5,000倍 2,000～3,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～6,000倍 2,000～4,000倍 4,000倍 2,000～3,000倍 2,000～4,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	5回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 5回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内	劇 普 △ △※ 普 △ △※ 普 △ 普 △ 普 ○ ○ ○ ○ 普 △ 普 △ 普 △ 普 △ 普 △ 普	○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照	
ハリガネムシ類	(発生の特徴) ○ コツキムシ類幼虫の別称。 ○ 1世代3～4年。 ○ 火山灰土壌や排水良好な洪水土壌で発生が多い。 ○ 被害は局所的に起こることが多く、毎年同じ場所に発生する事が多いので、発生場所を把握する。 ○ 植え付け後は有効な薬剤がないため、被害の予想される圃場では、植え付け前の防除が必要である。	○ 麦や牧草などイネ科の雑草が多い地域で発生が多いため、周辺雑草を除草する。 ○ 連作を避け、非寄生作物や被害の問題にならない作物と輪作する。	植付前	3A 1B		B.T.剤(参考資料P.15)参照 アオース粒剤 トクチオン細粒剤F 土壌病害虫防除法の項(P.301)参照	1:テフメリン 1:プロチオホス	9kg/10a 9kg/10a	植付前 植付前	1回 1回	劇 普	× △	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和 合ピレ(注)(P.15) ○ 植溝又は作条土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	
ア ブ ラ ム シ 類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。</li> <li>○ 生育初期につるの先端に発生し、葉に寄生・吸汁加害するため、生育が抑えられる。</li> <li>○ ウイルス病を伝搬する。</li> </ul>		育苗期	4A		ダントツ粒剤 アクタラ粒剤5	1:クロチアニジン 1:チアメトキサム	6kg/10a 6kg/10a	育苗期 育苗期	1回 1回	普 普	△ ×	○ 株元処理 ○ 株元散布
			発 生 初 期	4A 4A 4A 9B		アドマイヤー顆粒水和剤 モスピラン顆粒水溶液 ダントツ水溶液 コルト顆粒水和剤	1:イミダクロプロリド 1:アセチムプリド 1:クロチアニジン 1:ピリフルキナゾン	10,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 4,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 3回以内	劇 劇 普 普	△ △ △ △	
			植 付 前	1B		ダイアジンSLゾル	1:ダイアジン	50倍	植付前	1回	普	△	○ 全面土壌混和又は畦立て前 作条散布(散布液量1000/10a)
				1B 3A 4A 4A 4A 1B		ラグビーMC粒剤 フォース粒剤 アドマイヤー1粒剤 アドマイヤー1粒剤 アクタラ粒剤5 トクチオン細粒剤F	1:カスサホス 1:チフルリン 1:イミダクロプロリド 1:イミダクロプロリド 1:チアメトキサム 1:プロチオホス	9kg/10a 9kg/10a 4～6kg/10a 6kg/10a 6～9kg/10a 6～9kg/10a	植付前 植付前 植付前 植付前 植付前 植付前	1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 劇 普 普 普 普	△ × △ △ × △	○ 全面処理土壌混和又は作条処理土壌混和、登録はコガネムシ類 ○ 全面土壌混和又は作条土壌混和、合ピレ注意事項(P.15)参照 ○ 作条土壌混和 登録はコガネムシ類 ○ 全面土壌混和 登録はコガネムシ類 ○ 作条混和 登録はコガネムシ類 ○ 植溝または作条土壌混和
コ ガ ネ ム シ 類 幼虫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 周辺の寄生植物を除去。</li> <li>○ 未熟な有機物を過用したり、青刈り作物をすぎ込みだりしない。</li> <li>○ 8月以降は被害が増加するので、なるべく早刈りする。</li> </ul>		植付前～植付時										
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6～9kg/10a	植付前	1回	普	△	○ 作条処理土壌混和、登録はコガネムシ類	
			1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	4～6kg/10a	収穫30日前まで	3回以内	普	×	○ 作条処理して軽く覆土	
ゲ ラ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 敷きワラ等は、集積し焼却処分する。</li> <li>○ 未熟有機物の過用は避ける。</li> <li>○ 圃場の排水を良くし乾燥を図る。</li> </ul>		植 付 前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	4～6kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照										
センチュウ類			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法				FRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
			時期	IRAC コード	IRAC コード	時期										
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 主な病原ウイルスはSMV, BYMV。 ○ SMVは種子伝染、虫媒(アブラムシ類)伝染。BYMVは虫媒(アブラムシ類)伝染。	○ 耐病性品種を選定する。 ○ 無病種子を使用する。 ○ 発病初期に罹病株を除去する。 ○ アブラムシ類の飛来防止と防除。	アブラムシ類の項(P.282、283)参照													
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病は低温(18～20℃)多湿条件で見られる。	○ 発病株は早期に除去、圃場に菌核を残さない。	生育期	2	ロプラール水和剤 ベンレート水和剤 トップジンM水和剤 アフェントフロアブル パレード20フロアブル ニマイバール水和剤 ファンタジスタ顆粒水和剤	1:イプロジオン 1:べノミル 1:チオファネートメチル 1:ベンチオレブド 1:ピラジフルミド 1:ジエトエンカルブ2:べノミル 1:ピルベンカルブ	1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫30日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫30日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ ○ △ △					
白絹病	(発生の特徴) ○ 表わらのすき込みみは白絹病の発病を助長する。	○ 発病地では連作を避け、他作物と輪作する。 ○ 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を行う。 ○ 被害株、病菌のついた藪を落とさないようには場外へ除去する。 ○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので土中深く埋め込む。 ○ 植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正。	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照													
べと病	(発生の特徴) ○ 発病が激しい時は落葉し、大きな被害となる。 ○ 多湿条件で発生が多くなる。	○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥料を十分に施し、肥切れしないようにするが、過繁茂にならないようにする。 ○ 連作を避ける。	生育期	21 21 11 40+MI	ランマンフロアブル ライメイフロアブル アミスター-20フロアブル フェスタイバールC水和剤	1:アゾフアミド 1:アミルプロム 1:アゾキストロビン 1:ジメトホル2:塩基性塩化銅	1,000～2,000倍 2,000倍 2,000倍 600倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	○ △ △ △					○ 葉害等(注)(P.299)
			播種前	4A	ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	は種時	1回	普	△					○ 播溝土壌混和
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○ ウイルス病に弱い品種では早期防除を徹底。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	播種時	4A 4A	アドマイヤー1粒剤 アドマイヤー1粒剤	1:イシダクロプロト 1:イシダクロプロト	3kg/10a 50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(30×60cm、使用土壌約1.5～4t)	は種時 は種時	1回 1回	普 普	△ △					○ 播溝土壌混和 ○ 本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの培土に均一に混和する。
			定植時	4A	アドマイヤー1粒剤	1:アセタミプロト 1:イシダクロプロト	3kg/10a 2g/植穴(但し、6kg/10aまで)	は種時 定植時	1回 1回	普 普	△ △					○ 播溝土壌混和 ○ 植穴土壌混和



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	FRAC				使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
			IRAC コード	FRAC コード	IRAC コード	FRAC コード								
アブラムシ類			発生初期	IB		マブロン乳剤	1:マブロン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)	
			発生初期	IB		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△		
			発生初期	IB		オルトラン水和剤	1:アゼエト	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△		
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水剤	1:アセクシプロ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△		
			発生初期	4A		アクトラ顆粒水剤	1:チアメキサム	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		ダントツ水剤	1:クロチアニン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			発生初期	4A		スタークル顆粒水剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		アルバリン顆粒水剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		ベネビアOD	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)	
カメムシ類	(防除上のポイント) ○ 吸汁加害によって着飛が阻害されるので、開花終期から子実肥大期に2回程度、薬剤散布する。		桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。	発生初期	IB	スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)	
			発生初期	3A		アグロスリン乳剤	1:ジベルメリン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	3A		トレボンEW	1:エトフェンプログス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプログス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	4A		ダントツ水剤	1:クロチアニン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			発生初期	4A		アクトラ顆粒水剤	1:チアメキサム	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		アルバリン顆粒水剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		スタークル顆粒水剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		スタークル液剤10	1:ジノテフラン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4A		スタークルメイト液剤10	1:ジノテフラン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			発生初期	4C		エクシードフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○		
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマヤガ		播種前	IB		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	6kg/10a	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○ 土壌表面散布	
			播種前	3A		ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布	
			播種前	22B		アケセルベイト	1:タフルミゾン	3～6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○		
マメシキイガ	(発生の特徴) ○ 連作すると発生が多くなるので、連作を避ける。 ○ 年1回発生し、ふ化幼虫が莢に食入して子実を加害する。 (防除上のポイント) ○ 散布剤を1～2回散布する。		発生初期	IB		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)	
			発生初期	IB		マブロン乳剤	1:マブロン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
			発生初期	3A		アグロスリン乳剤	1:ジベルメリン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	3A		アデイオン乳剤	1:ベルメリン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	3A		トレボンEW	1:エトフェンプログス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプログス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)	
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水剤	1:アセクシプロ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△		
			発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベシタジ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			発生初期	28		プレバソンフロアブル5	1:クロチアニン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△		
			発生初期	28		ヨーバルフロアブル	1:チロニリアール	5,000～10,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			発生初期	30		グレーシア乳剤	1:チロニリアール	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			発生初期	30		プロフレアSC	1:プロフニド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 毒 (注)	注意事項
ハダニ類			発生期	21A		ダニトロンフロアブル 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)	1:7エビロキシメート	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	1回	×	
ハト・キジバト	(発生の特徴) ○ 出芽後に子葉をついばんで食害する。	○ 寒冷紗や不織布をべた掛けする。	播種前	4A	12+4	クルーザーMAXX	1:チアメキサム2:フルジオキニコル3: メタキシラルM	原液	は種前	1回	○	○ 8ml/乾燥種子1kg(種子食 害忌避)
センチュウ類		○ 発生圃場での連作を避ける。	は種前			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						

病名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					水産 人 毒 (注)	注意事項			
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名			濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数
ウイルス病	(発生の特徴) ○主にBYMV、BBWV2、CNVYVによる。 ○虫媒(アブラムシ類)伝染。BYMVは低率で種子伝染もする。 ○生育初期に感染すると全身的な萎縮を生じる。 (防除上のポイント) ○アブラムシ類を防除する。		(耕種的防除法) ○無病種子を用いる。 ○初期の発病株を除去する。 ○アブラムシ類の飛来防止に努める。									
			アブラムシ類の項(P.287)参照									
クエモザイ	(発生の特徴) ○病原ウイルスはBBNV ○土壌伝染。極低率で種子伝染する。		(耕種的防除法) ○種子は無病株から採取する。 ○連作を避け、発病圃場では4年以上の輪作をする。									
			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照									
苗立枯病	(発生の特徴) ○立枯病は開花期頃より症状が現れる。 ○連作を避ける。 ○排水を良くする。 ○被害株を除去、圃場外へ持ち出す。	床土、本圃の土壌消毒	タチガレン液剤					32	播種後～発病初期			
			500倍	は種後及び生育期 但し、収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 播種穴又は株元に土壌灌注 (200ml/株) 登録は立枯病				
茎腐病	(発生の特徴) ○病原菌が比較的低温を好むため、主に春先に発生する。	発病初期	リンソックス水和剤					14	収穫前日まで	普	△	○ 株元灌注(10/m <sup>2</sup> )
			1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普						
菌核病	(発生の特徴) ○発病は低温(18～20℃)、多湿条件で見られる。 ○茎に発病すると茎内部に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。	発病初期	アフェットプロアブル スクレアプロアブル ニマイバー水和剤 パレード20フロアブル ピソシオDF					7 11 10+1 7 17	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫30日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	普 普 普 普 普	△ ○ △ ○ ○	
			2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍									
赤色斑点病	(発生の特徴) ○春先の気温上昇で発病する。 ○排水を良くする。 ○カリ肥料を十分に施し、健全に育てる。	発病前～初期	ロブラー水和剤 カクタスターフロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 銅剤及び混合剤(P.317)参照					2 7 11	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	普 普 普	△ ○ △	
			1,000倍 1,000倍 2,000倍									
さび病	(発生の特徴) ○排水を良くする。	発病前～初期	ジマンダイセン水和剤 アミスター20フロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 オンリーワンフロアブル カクタスターフロアブル					M3 11 11 3 7	収穫30日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	普 普 普 普 普	△ △ △ △ ○	○ 葉害等(注)(P.299)
			400～600倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍									
輪紋病	(発生の特徴) ○排水を良くする。	初発前～	ジマンダイセン水和剤					M3	収穫30日前まで	普	△	

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徵) ○ ウイルス病を媒介する。 ○ 4～5月に増加し、新梢、さや等に群生する。 ○ 主要種はマメアブラムシ。	○ 寒冷紗被覆育苗を行う。 ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーボールによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イシダクロプロト アドマイヤー1粒剤	3kg/10a 2g/植穴(但し、6kg/10aまで)	は種時 定植時	1回 1回	普 普	△ △	○ 植溝土壌混和 ○ 植穴土壌混和
カメムシ類	(発生の特徵) ○ 加害種はミナミアオカメムシ、イチモンジカメムシ等。 ○ 加害は開花期から収穫期に及ぶが、子実肥大期の被害が大きい。 ○ 主要種はヨトウガ。 ○ 若齢幼虫は集団で表皮を残し加害し、その後分散する。		発生初期	1B 1B 3A 4A		スミチオン乳剤 エルサン乳剤 アデイオン乳剤 アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:MEP 1:PAP 1:ベルモリン 1:イシダクロプロト 1:アセタミプロト 1:クロチアジソン 1:MEP 1:マアソ 1:ジノアテラン 1:ジノアテラン	1,000～2,000倍 1,000～2,000倍 3,000倍 4,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで(但し、露地栽培については開花期終了後) 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 劇 普 劇 劇 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △	
ヨトウガ類	(発生の特徵) ○ 主要種はヨトウガ。 ○ 若齢幼虫は集団で表皮を残し加害し、その後分散する。	○ 分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。	発生初期	3A		アデイオン乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:ベルモリン	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
ネキリムシ類	(発生の特徵) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマヤガ。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。	発生初期	3A		ガードベイトA	1:ベルモリン	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
ハモグリバエ類	(発生の特徵) ○ 幼虫が葉肉内を食害し、白っぽい被害痕が残る。		発生初期	1B 3A 6 5 28 30		マラン乳剤 アデイオン乳剤 アファーム乳剤 ディアナSC ブレバノンフロアブル5 グレースシア乳剤	1:マアソ 1:ベルモリン 1:エマクチン安息香酸塩 1:スピネトラム 1:クロチアジノプロール 1:フルキササギスト	1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000～3,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普	△ × △※ △ △ △	○ 合ピレ(注)(P.15)
マメハモグリバエ				15		カスケード乳剤	1:フルフェノキサゾン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	薬剤防除法					水産 人 毒 (注)	注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名		
ウイルス病	<ul style="list-style-type: none"> <li>主にBYMVによる。</li> <li>虫媒(アブラムシ類)伝染。低率で種子伝染もする。</li> <li>圃場内では散在して発生することが多い。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>アブラムシ類を防除する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>無病種子を用いる。</li> <li>初期の発病株を除去する。</li> <li>アブラムシ類の飛来防止に努める。</li> <li>圃場周辺の雑草を除去する。</li> </ul>	アブラムシ類の項(P.289)参照						
苗立枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>ピシウム属菌又はリゾグクニア属菌により被害を生じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>床土は無病土を使用する。</li> </ul>	アブラムシ類の項(P.289)参照						
立枯病		<ul style="list-style-type: none"> <li>土壌病害虫防除法の項(P.301)参照</li> <li>土壌病害虫防除法の項(P.301)参照</li> </ul>							
根腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>本病は春どり栽培の早期枯れあがり原因となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連作を避ける。</li> <li>排水を良くする。</li> <li>石灰カリを十分に施す。</li> <li>発病の多い圃場は2～3年輪作する。</li> </ul>	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						
茎腐病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>本病は地際節が黒褐色に変色し、くもの巣状のかびを生じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病株は早期に除去。</li> </ul>	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						○ 希釈液30/m <sup>2</sup> を播種穴又は株元に土壌灌注
褐斑病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(防除上のポイント)</li> <li>本病はみかんのそはかす病の原因となるので、みかん園の近くでは収穫後速やかに茎葉を取り除き処分する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>無病種子を用いる。</li> <li>肥沃で排水良好な土地を選ぶ。</li> <li>リン酸・カリ肥料を十分に施して強健に育てる。</li> </ul>	土壌病害虫防除法の項(P.301)参照						○ 10/m <sup>2</sup> の土壌灌注
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発生の特徴)</li> <li>収穫期に雨が多い年に発生が増加する。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>被害残さを圃場内に残さないようにする。</li> <li>発病した茎葉は速やかに除去する。</li> <li>窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。</li> <li>密植、株の過繁茂を避ける。</li> </ul>	アブラムシ類の項(P.289)参照						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 低温(20℃以下)、多湿条件で発生する。</li> <li>○ 輸送中等にも発病するの で、出荷にあたっては被害 葉は丁寧に取り除く。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 花卉・果実・茎・葉等で発 生し、被害部を放置すると 感染源となるので除去す る。</li> <li>○ 密植を避け風通しを良くす る。</li> </ul>	発 病 前 期 ～ 発 病 初 期		2 M1 12 10+1	ロブラール水和剤 サンヨール セイバーフロアブル20 ゲッター水和剤	1:イプロゾン 1:DBDC 1:フルジコキニル 1:ジエトエンカルブ2:チオファネート メチル	1,500倍 500倍 1,000倍 1,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 4回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	△ ○ ○ ○	○ 高温時葉害注意
					10+1	ニマイバール水和剤 アミスター20フロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 カンタスライフロアブル アフエットフロアブル カナメフロアブル	1:ジエトエンカルブ2:ベノミル 1:アノキニストロビン 1:ピルベシカルブ 1:ボスカド 1:ベンチオピラト 1:イピルフルキサム 1:ピラジフルミド	1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 4回以内 3回以内	普 普 普 普 普 劇 普	△ △ △ ○ △ △ ○	○ 葉害等(注)(P.299)
菌核病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 発病は低温(18～20℃)、多 湿条件で見られる。</li> <li>○ 茎に発病すると茎内部に黒 色でネズミの糞状の菌核を形 成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発病株は早期に除去し、 圃場に菌核を残さない。</li> </ul>	発 病 初 期		12 11 11 11 1 7 7 7 10+1	セイバーフロアブル20 アミスター20フロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 スプレアフロアブル ベンレート水和剤 アフエットフロアブル パレード20フロアブル カナメフロアブル ニマイバール水和剤	1:フルジコキニル 1:アノキニストロビン 1:ピルベシカルブ 1:マンデスロビン 1:ベンチオピラト 1:ピラジフルミド 1:イピルフルキサム 1:ジエトエンカルブ2:ベノミル	1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 4,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 4回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	○ △ △ ○ △ △ ○ △	○ 葉害等(注)(P.299)
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 主害虫はエンドウヒゲナガア ブラムシ。</li> <li>○ ウイルス病を媒介する。</li> <li>○ 春季に発生が増加し、新梢、 花卉、さや等に群生する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 雑草にも寄生し発生源と なるので、圃場内や周辺 を除草する。</li> </ul>	発 生 初 期	1B 1B 1B 4A 4A 4A 4A		スミチオン乳剤 ダイアジン乳剤40 マラン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤	1:MEP 1:ダイアジン 1:マラン 1:アセタミプリト 1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:クロチアニジン	1,000～2,000倍 1,000倍 2,000～3,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍	収穫21日前まで 収穫開始14日前ま で 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで	4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普	△ × △ △ △ △ △	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
カメムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 開花期から収穫期にかけ て、不稔、奇形粒等を発生さ せる。</li> </ul>		発 生 初 期	1B 4A 4A		スミチオン乳剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	1:MEP 1:ジノアラン 1:ジノアラン	1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	△ △ △	○ 葉害等(注)(P.299)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ウ ラ ナ ミ シ ジ ミ	○ 年内早出しに被害が多く、秋 期に多発する。 ○ 開花初期から2～3回散布す る。		着 書 期 、 開 花 初 期	3A 3A 3A 14 4A 4A		アデイオン乳剤 トレボン乳剤 トレボンEW パダンSG水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	1:ハルメロン 1:エトフェンプロックス 1:エトフェンプロックス 1:カルカブ 1:ジノアラン 1:ジノアラン	3,000倍 1,000倍 1,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 普 普	×	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 曇天が続く場合葉害注意。
ダ シ ラ メ イ イ カ モ ジ マ	○ 発生の特徴 ○ 年1～2回発生し、ふ化幼虫 が葉に食入して子実を加害 する。 ○ 年4世代程度発生する。		発 生 初 期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 葉害等(注)(P.299)
イ マ メ シ ン ク	○ 発生の特徴 ○ 年1～2回発生し、ふ化幼虫 が葉に食入して子実を加害 する。	○ 連作を避ける。	発 生 初 期	1B 1B		スミチオン乳剤 マラン乳剤	1:MEP 1:マラン	1,000～1,500倍 1,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで	4回以内 3回以内	普 普	△ △	○ 葉害等(注)(P.299)
シ ロ イ チ モ ジ ヨ ト ウ	○ 発生の特徴 ○ 若齢幼虫期は集団で葉裏か ら食害し、白変葉になる。	○ 卵塊及びふ化幼虫は捕殺 する。 ○ 卵塊及びふ化幼虫は捕殺 する。	発 生 初 期	3A 3A 3A 15 15 15 28 un		アデイオン乳剤 トレボン乳剤 トレボンEW アタプロン乳剤 カスケード乳剤 ノーモルト乳剤 フェニックス顆粒水和剤 ブレオフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:ハルメロン 1:エトフェンプロックス 1:エトフェンプロックス 1:クロルフルアズロン 1:フルフェノキサロン 1:フルベンスロン 1:フルベシジ'ア'ト' 1:ピリダリル	3,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	×	○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照 ○ IGR剤(注)(P.15)参照
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	○ 発生の特徴 ○ 年5～6回の発生、被害は9 ～10月に集中。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団 を寄生葉ごと摘除し処分 する。	発 生 初 期	18 6 28 28 un 5 15 30		マドリックフロアブル アフアーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 ブレバノンフロアブル5 ブレオフロアブル ディアナSC カスケード乳剤 グレーシア乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロマフェジ'ト' 1:エマクチン安息香酸塩 1:フルベシジ'ア'ト' 1:クロアチンアゾア'ロ'ル 1:ピリダリル 1:スピネトラム 1:フルフェノキサロン 1:フルキキ'ア'ト'	2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 4,000倍 2,000～3,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	○ △ △ △ △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照
シ ト ウ ム	○ 発生の特徴 ○ 若齢幼虫は集団で表皮を 残し加害し、その後分散する。	○ 分散前の幼虫集団を寄生 葉ごと摘除し、処分する。	発 生 初 期	3A		トレボン乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)



病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC			FRAC	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人畜毒	水産(注)	注意事項	
			時期	コード	コード										コード
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は晩寒期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することが多い。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。 ○ 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。	3A			ガードベイトA	1:ベルモトリン	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ビレ(注)(P.15)		
			4A	5			モスピラン顆粒水溶液 ディアナSC	1:アゼミフロト 1:スピネトラム	4,000倍 2,500～5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内	劇普	△		
ヒラスハナアザミシマ			3A			マブリック水和剤20	1:フルバクテート	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 合ビレ(注)(P.15)		
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 4～11月に発生し、蛹や成虫で越冬する。	○ 圃場周辺の除草を徹底する。	4A			アルバリン顆粒剤	1:ジノアフラシ	9kg/10a	生育期(但し、収穫開始14日前まで)	1回	普	△	○ 株元散布		
			4A			スタークル顆粒剤	1:ジノアフラシ	9kg/10a	生育期(但し、収穫開始14日前まで)	1回	普	△	○ 株元散布		
			4A			アルバリン顆粒水溶液	1:ジノアフラシ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			4A			スタークル顆粒水溶液	1:ジノアフラシ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			6			アフターム乳剤	1:エマメカチン安息香酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※			
			5			ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
ナモグリバエ	(発生の特徴) ○ 多発すると葉が白い袋状になり減収する。	○ 圃場周辺の除草を徹底する。	28			スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			30			アレバソフロアブル5 グレースシア乳剤	1:クロアチアアフラシ 1:フルバクテート	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
コガネムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はドウガネブイブイ。 ○ 幼虫が根節を食害し、生育遅延や枯死を引き起こす。	○ 圃場周辺の除草を徹底する。	桑園周辺では、ほとんどの薬剤が葉に影響があるので注意する。												
			3A					アデイオン乳剤	1:ベルモトリン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ビレ(注)(P.15)
			3A					スカウトフロアブル	1:トクロトリン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	○ 合ビレ(注)(P.15)
			21A	39				バダソSG水溶液 ハチハチフロアブル	1:カルトップ 1:トルフェンピラト	1,500～3,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内	劇	×	○ かぶれ注意
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 前作の残渣や周辺雑草が発生源となることが多い。	○ 圃場周辺の除草を徹底する。	1B			カルホス粉剤	1:イクキチオン	9kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作業施用土壌混和		
			1B			マラン乳剤	1:マラン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△			
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 前作の残渣や周辺雑草が発生源となることが多い。	○ 前作の残渣を圃場に放置しない。	21A			ダニトロンフロアブル	1:フェビロキシメト	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	×			
			6			コロマイト乳剤	1:シルベノキサチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※			
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 前作の残渣や周辺雑草が発生源となることが多い。	○ 前作の残渣を圃場に放置しない。	13			コソゾフロアブル	1:クロロフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×			
			13			コソゾフロアブル	1:クロロフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
			薬剤防除法											
ウイルス病	(発生の特徴) ○主にBYMVによる。 ○他のマメ科作物から伝染することがある。 (防除上のポイント) ○アブラムシ類を防除する。	○無病種子を用いる。 ○初期の発病株を除去する。 ○シルバーボリによる畝マルチなど光反射資材を活用し有翅虫の飛来を抑制する。	発病前初期		11 10+1	アブラムシ類の項(P.293)参照 アブラムシ類の項(P.293)参照	1:ピリヘンカルブ 1:ジエトエンカルブ2:べノミル	2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫開始14日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △		
炭疽病	(発生の特徴) ○降雨の多いときに発生することが多い。	○無病種子を用いる。 ○発病地では連作を避ける。 ○収穫後の茎葉は処分する。 ○抵抗性品種を選ぶ。 ○発病地では連作を避ける。 ○収穫後の茎葉は処分する。	発病初期			アブラムシ類の項(P.293)参照	1:ピリヘンカルブ 1:ジエトエンカルブ2:べノミル	2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫開始14日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △		
さび病		○無病種子を用いる。 ○発病地では連作を避ける。 ○収穫後の茎葉は処分する。	発病初期			アブラムシ類の項(P.293)参照	1:ピリヘンカルブ 1:ジエトエンカルブ2:べノミル	2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫開始14日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △		
菌核病	(防除上のポイント) ○開花開始5～7日後から防除を開始。10日間隔で2～3回実施する。	○被害茎葉は早期に集めて処分する。	発芽期 着莢期	12 1 7 7 11 11 10+1		セイビアーフロアブル20 ベンレート水和剤 カンタスドライフロアブル パレード20フロアブル アブラムシ類の項(P.293)参照 スグレアフロアブル ニマイバー水和剤	1,000～1,500倍 2,000倍 1,000～1,500倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫開始14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	○ △ ○ ○ ○ ○ △			
灰色かび病	(発生の特徴) ○老化又は落下花弁が主な感染源である。	○無病種子を用いる。 ○連作を避ける。 ○被害茎葉は集めて処分する。	発芽期 着莢期	12 11 11 11 7 7 10+1		セイビアーフロアブル20 アミスター20フロアブル アブラムシ類の項(P.293)参照 スグレアフロアブル カンタスドライフロアブル パレード20フロアブル ニマイバー水和剤	1,000～1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000～1,500倍 2,000～4,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫開始14日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	○ △ △ ○ ○ ○ △		○葉害等(注)(P.299)	
かさ枯病		○無病種子を用いる。 ○連作を避ける。 ○被害茎葉は集めて処分する。				銅剤及び混合剤(P.317)参照								
根腐病	(発生の特徴) ○土壌温度が低いときに多発する。	○連作を避ける。 ○被害茎葉は集めて処分する。												
イブキノメ	(発生の特徴) ○6～8月に発生被害が多い。	○被害部は除去する。	発生初期	1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×		
ウラナシ	(発生の特徴) ○年内早出しに被害が多く、秋期に多発する。 (防除上のポイント) ○開花初期から2～3回散布する。		花着初期 開花期	3A 3A		トレボン乳剤 アデオオン乳剤	1:エトエンカルブ 1:べノミル	1,000倍 3,000倍	収穫前日まで 収穫14日前まで	2回以内 3回以内	普 普	×	○合ピレ(注)(P.15) ○合ピレ(注)(P.15)	

桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蜜に影響があるので注意する。



病名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種防除法	FRAC コード	IRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
病苗 立枯		耕種防除法 ○ 床土は無病土を使用す る。										
疫病	○ 改植圃場で発病している。	○ 排水を良くする。	M5 40+M5		ダコニール1000 プロポーフズ顆粒水和剤	1:TPN 1:ベンチアハリカルブイアプロピル 2:TPN	1,000倍 1,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内	普 普	× △※	
茎枯 病	(発生の特徴) ○ 雨よけでは発生が少ない。 ○ 7月下旬～8月下旬の過 繁茂をさけるため1m前後 の位置で先刈りを行い、新 芽を更新する。 ○ 冬期(12月)に茎葉を刈取 処分する。	○ 排水を良くする。 ○ 7月下旬～8月下旬の過 繁茂をさけるため1m前後 の位置で先刈りを行い、新 芽を更新する。 ○ 冬期(12月)に茎葉を刈取 処分する。	M7 M5 1 2 11 11 7 7 7+M5		ベルクルート水和剤 ダコニール1000 ベンレート水和剤 ロブラール水和剤 アミスター20フロアブル メジャーフロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル ベジセイバー	1:イミクダシナルベルシル酸塩 1:TPN 1:ベノシル 1:イプロシオン 1:アノキシストロビン 1:ピコキシストロビン 1:ベンチアハリカルブ 1:ピラジフロスト 1:ベンチアハリカルブ2:TPN	1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 4回以内 4回以内 5回以内 4回以内 3回以内 4回以内 3回以内 4回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ × △ △ △ △ △ ○ △	○ 葉害等(注)(P.299)
斑点 病	(発生の特徴) ○ 早期枯れ上がりにより翌年の 収量が低下する。	○ 排水を良くする。 ○ 7月下旬～8月下旬の過 繁茂をさけるため1m前後 の位置で先刈りを行い、新 芽を更新する。 ○ 冬期(12月)に茎葉を刈取 処分する。	M3 1+M5 14 1 29 11 11+7		銅剤及び混合剤(P.317)参照 ジマンダイゼン水和剤 ダコレート水和剤 リゾレックス水和剤 トップジンM水和剤 アロンサイド水和剤 ファンタジスタ顆粒水和剤 シグナムWDG	1:マンゼブ 1:ベノシル2:TPN 1:トルクロホスチル 1:チオファネートメチル 1:フルアジナム 1:ピリベンカルブ 1:ピラジフロスト2:ホスカタ	400～600倍 1,000倍 500倍 1,000倍 1,000～2,000倍 3,000倍 1,500倍	収穫終了後但し、 秋期まで 収穫終了後 収穫後～茎葉刈取 り期まで、但し収穫 14日前まで 収穫開始7日前まで 収穫終了後但し、 秋期まで 収穫前日まで 収穫前日まで	6回以内 4回以内 3回以内 5回以内 5回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ × △ △※	○ 露地栽培のみの登録 ○ 露地栽培のみの登録 皮膚かぶれ注意
斑 点 病	(発生の特徴) ○ 早期枯れ上がりにより翌年の 収量が低下する。	○ 排水を良くする。 ○ 7月下旬～8月下旬の過 繁茂をさけるため1m前後 の位置で先刈りを行い、新 芽を更新する。 ○ 冬期(12月)に茎葉を刈取 処分する。	M5 M7 M7 2 11 11 7 7+M5 3		ダコニール1000 ベルクルート水和剤 ベルクルートフロアブル ロブラール水和剤 アミスター20フロアブル メジャーフロアブル アフェットフロアブル ベジセイバー スコア顆粒水和剤	1:TPN 1:イミクダシナルベルシル酸塩 1:イミクダシナルベルシル酸塩 1:アノキシストロビン 1:アノキシストロビン 1:ピコキシストロビン 1:ベンチアハリカルブ 1:ベンチアハリカルブ2:TPN 1:ジフェノコゾール	1,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫開始7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内 5回以内 5回以内 4回以内 3回以内 4回以内 4回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	× △ △ △ △ △ △ △ ○	○ 葉害等(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
		耕種防除法 銅剤及び混合剤(P.317)参照	M3 1+M5 29 11 11+7		銅剤及び混合剤(P.317)参照 ジマンダイゼン水和剤 ダコレート水和剤 アロンサイド水和剤 ファンタジスタ顆粒水和剤 シグナムWDG	1:マンゼブ 1:ベノシル2:TPN 1:フルアジナム 1:ピリベンカルブ 1:ピラジフロスト2:ホスカタ	500倍 1,000倍 1,000～2,000倍 3,000倍 1,500倍	収穫終了後 但し、秋期まで 収穫終了後 収穫終了後 但し、秋期まで 収穫前日まで 収穫前日まで	6回以内 4回以内 5回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	△ △ × △ △※	○ 露地栽培のみの登録 ○ 露地栽培のみの登録 かぶれ注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
														薬剤防除法
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はモモアカイアブラムシ、ワタアブラムシ。 ○ 4月ころ有翅虫がハウス内に飛込み寄生する。		発病初期	3A 3A 4A 4A 21A 29	39	アデント水和剤 アデオン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 ダントゾ水溶剤 ハチハチフロアブル ウララDF	1:アクリナリン 1:ベルメリン 1:アセチアブト 1:クロチアニジン 1:トクロアブト 1:フロンカシ	1,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000~4,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普	△※ × △ △ × ○	○合ビレ(注)(P.15) ○合ビレ(注)(P.15) ○眼に刺激痛	
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 秋期に多発する。発生が多い。発生主体はタバココナジラミ。	○ 近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入防止に有効。	発生初期	4A 4A 21A 23 5	39	ベスタガード水溶剤 スターカル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 ハチハチフロアブル モベントフロアブル ディアナSC	1:エチピラマ 1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:トクロアブト 1:スピロトクト 1:スピネトラム	1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	△ △ △ × ○ △	○眼に刺激痛	
ナジウハムシ ハムシ ホシクビ	(発生の特徴) ○ 年1回の発生で、成虫越冬する。 ○ 成・幼虫が若茎の先端や茎の表面を加害し、茎が曲がりたり変色したりする。		発生初期	1B 3A 4A 4A 5 21A		エルサン乳剤 アデオン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 ダントゾ水溶剤 ディアナSC ハチハチフロアブル	1:PAP 1:ベルメリン 1:アセチアブト 1:クロチアニジン 1:スピネトラム 1:トクロアブト	1,000倍 2,000~3,000倍 4,000倍 2,000~4,000倍 2,500~5,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普 普 普 劇	× × △ △ △ ×	○合ビレ(注)(P.15) ○眼に刺激痛	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5~6回の発生、被害は9~10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。 ○ 捕殺する。	発生初期	15 15 15 6 28 28 28 5 un 13 30		ノーモルト乳剤 カスケード乳剤 カワシム乳剤 アファーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 ブレバソフロアブル5 ベネビアOD ディアナSC アデオフロアブル コテソフロアブル グレイシア乳剤 BT剤(参考資料P.15)、フェロモン(参考資料P.9)の項参照	1:ゾフルベンスロン 1:フルフェノキサロン 1:ハルロン 1:エマクチン安息香酸塩 1:フルベシニアト 1:クロチアニジン 1:ジノアブト 1:スピネトラム 1:スピネトラム 1:クロチアニジン 1:ピリタリル 1:フルキサタニト	2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,500~5,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △※ △ △ △ △ △※ △	○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照 ○IGR剤(注)(P.15)参照	
ヨトウ虫	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫は集団で表皮を残り加害し、その後分散する。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。	発生初期	6 28 13 un		アファーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 コテソフロアブル アデオフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:エマクチン安息香酸塩 1:フルベシニアト 1:クロチアニジン 1:ピリタリル	2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△※ △ △※ △		
ヨシロイデ	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫は集団で加害するが、齢が進むにつれて分散する。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。	発生初期			ヨトウ虫-S 性フェロモン(参考資料P.9)の項参照								
シロイデ						BT剤(参考資料P.15)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
オオタバコガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 卵はヨトウのような卵塊でなく1個ずつ産み付けられるため発生時には圃場内で散在する。</li> <li>○ 擬葉及び主茎を食害し、若茎を食害することはあまりない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。</li> <li>○ 捕殺する。</li> </ul>	発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェナキサロニ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アフアーム乳剤	1:エマタチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベシジブト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテソフロアブル	1:コルホエンセル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				un		ブレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
ハダニ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 発生の主体はナミハダニ、カシハラハダニ。</li> <li>○ 鱗片葉に白いカスリ状の斑点が生じ、商品価値が低下する。</li> <li>○ なお、寄生を受けた雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱、移動も考慮し適切に実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。</li> <li>○ なお、寄生を受けた雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱、移動も考慮し適切に実施する。</li> </ul>	発生初期	6		コロマト乳剤	1:ミルベクチン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				13		コテソフロアブル	1:コルホエンセル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				23		モベントフロアブル	1:スピロトトラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:シフルトフェン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				25B		ダニコンクフロアブル	1:ピフルアズニト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
20D		マイトココネフロアブル	1:ピフルアズニト	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△					
30		グレースシア乳剤	1:フルキキマシト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
アザミウマ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 主要種はネギアザミウマ。(防除上のポイント)</li> <li>○ 近隣にタマネギ、ネギ等が栽培されている場合は、収穫期の飛来に気をつける。</li> <li>○ 異常茎等の正常な成育が望めない若茎は増殖源となるため放置しない。</li> <li>○ 晩秋~初冬に刈取った成茎は圃場外へ持ち出し処分する。除草も徹底する。</li> <li>○ 冬季に保温する作型では、裸地状態で寒風に1ヶ月以上さらしてから被覆する。</li> <li>○ 紫外線カットフィルムを使用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 雑草にも寄生するので、圃場周辺を除草する。</li> <li>○ 施設では、開口部に1mm目以下(0.6mm目以下)が望ましい網を被覆で侵入抑制に有効である。</li> <li>○ 異常茎等の正常な成育が望めない若茎は増殖源となるため放置しない。</li> <li>○ 晩秋~初冬に刈取った成茎は圃場外へ持ち出し処分する。除草も徹底する。</li> <li>○ 冬季に保温する作型では、裸地状態で寒風に1ヶ月以上さらしてから被覆する。</li> <li>○ 紫外線カットフィルムを使用する。</li> </ul>	発生初期	5		スピネエース顆粒水和剤	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセキサリト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:アセキサリト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イタダクロプロト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:スピロトトラト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオシガム	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ジアントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
34		ファインセーブフロアブル	1:フロキサキン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×					
30		グレースシア乳剤	1:フルキキマシト	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
ネギアザミウマ			発生初期	4A		ダントツ水溶剤	1:クロアジニン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 眼に刺激痛
				4A		アカタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				9B		ユルト顆粒水和剤	1:ピリルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:トワエンピチト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				un		ブレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ウイルス	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 主にCMVによる。</li> <li>○ 生育初期に感染すると生育抑制されることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ シルバーボールによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。</li> </ul>	発生初期		3	モンガリット粒剤 バリダシン液剤5 アフェットフロアブル	1:シノナゾール 1:ハリダマイシン 1:ベンチオゼブト	6kg/10a 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普	○ △ △	○ 株元散布
紋枯病	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 葉鞘に大型斑点を作る。多湿条件下でクモの巣状菌糸や菌核を形成する。</li> <li>○ 株間の湿度、湿度が高くなる条件で急速に蔓延する。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ 薬剤が株元にかかるように散布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害残渣は深く埋め込む。</li> <li>○ 多肥栽培を避け適切な肥培管理を行う。</li> <li>○ 密植を避け、除草を行い畝間の風通しを良くする。</li> </ul>	発生初期		7								
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 寄生種はトウモロコシアブラムシ(キビクビレアブラムシ)、ムギクビレアブラムシ、ムギヒゲナガアブラムシである。</li> <li>○ 幼虫期から寄生すると生育障害を受ける。</li> <li>○ 葉と穂に寄生し、雄穂では苞葉のかなり奥まで入り込むため品質低下を招く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ シルバーテープを展開する。</li> <li>○ 雑草を除去し、圃場衛生に努める。</li> </ul>	発生初期	3A 4A 4A 4A 4A 4A 4C		アデオニ乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 アクトラ顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルトリオン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 トランスフォームフロアブル	1:ベルモリン 1:アセミアクト 1:チアノキサム 1:ジノテラン 1:ジノアラン 1:クロチアニジン 1:スルホキサフル	3,000倍 2,000~4,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普 普	× △ △ △ △ △ ○	○ 合ピレ(注)(P.15)
ネキリムシ類	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 主要種は、カブラヤガ、タマヤガ。</li> <li>○ 被害は越冬期を除いていつでも見られるが、5~9月には異常発生することがある。</li> <li>○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 作付予定地では予め除草し前作も早急に処分する。</li> <li>○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。</li> </ul>	発芽時	IB		ダイアジンン粒剤5	1:ダイアジンン	6kg/10a	出芽時	1回	普	×	○ 土壌表面散布
アワノメイガ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ (発生の特徴)</li> <li>○ 幼虫が雄穂に集まり、雄穂開花後は雌穂に移動し絹糸を食べ雌穂内に食入する。</li> <li>○ (防除上のポイント)</li> <li>○ 雄穂の出始めと7日後を目安に薬剤散布する。</li> <li>○ 雌穂に十分かかるよう散布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 圃場を見回って食害痕のある株の幼虫を取り除く。</li> </ul>	雄花の抽出期	1A 14 1B 1B 1B 3A 3A+1B 3A 14 28 28 28 28 5		ゲナボン粒剤5 バダン粒剤4 エルサン乳剤 スミチオン乳剤 オルトラン水和剤 アデオニ乳剤 パーマチオン水和剤 トレボン乳剤 バダンSG水溶剤 フェニックス顆粒水和剤 プレバソフロアブル5 ベネビアOD ヨーバルフロアブル ディアナSC	1:NAC 1:カルタップ 1:PAP 1:MEP 1:アセフェート 1:ベルモリン 1:フェンハレール2:MEP 1:エトエンプロックス 1:カルタップ 1:フルベシン75 1:クロチアニジン 1:ジノアラン 1:アトラニアール 1:スピネトラム	4~6kg/10a 6kg/10a 1,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 5,000倍 2,500~5,000倍	各種抽出期~各種抽出期 但し収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 4回以内 4回以内 2回以内 4回以内 4回以内 4回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 劇 劇 普 普 普 劇 普 劇 普 普 普 普	△ × × △ △ × × × × × △ △ △ △	○ 株の上から均一に散粒する。  ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15) ○ 合ピレ(注)(P.15)

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ア ヨ ト ウ	ア ヨ ト ウ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 孵化直後の幼虫は集団で葉を食害しやがて分散して夜間葉を著しく食害する。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 老齢幼虫になると昼間は株元に生息し葉害がかかりにくいため、早期に発見、早期防除を心掛ける。</li> </ul>	3A		トロン乳剤			1:1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)			
ツ マ ジ ロ ク サ ヨ ト ウ	ツ マ ジ ロ ク サ ヨ ト ウ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ トウモロコシが加害する他のチャウ目害虫とはアフロトウが類似するが、頭部の「淡色の逆Y字型の模様」等で区別できる。</li> <li>○ 軟らかい葉を好んで食害する傾向がある。</li> <li>○ 8月以降に発生が多くなる。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 生産ほ場を定期的に見回り、早期発見に努める。</li> </ul>	6 6 15 28 28 28 28		アファーム乳剤 アニキ乳剤 カスケード乳剤 ヨーバルフロアブル アレバソフロアブル5 ベネビアOD フェニックス顆粒水和剤	<p>1:1,000倍 1:2,000倍 1:5,000倍 1:2,000倍 1:2,000倍 1:2,000倍</p>	<p>収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで</p>	<p>2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内</p>	<p>普 普 普 普 普 普 普</p>	<p>△※ △※ △ △ △ △ △</p>	○ IGR剤(注)(P.15)参照					
オ オ タ バ コ ガ	オ オ タ バ コ ガ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼虫が雌穂に集まり、雌穂開花後は雌穂に移動し絹糸を食へ雌穂内に食入する。</li> <li>○ オオタバコガは茎に食入しない。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 雌穂に食入される前に防除する。</li> </ul>	28 un 28 5		ベネビアOD アレオフロアブル アレバソフロアブル5 デアナナSC	<p>2,000～4,000倍 1,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍</p>	<p>収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで</p>	<p>3回以内 2回以内 3回以内 2回以内</p>	<p>普 普 普 普</p>	<p>△ △ △ △</p>						
イ ネ ヨ ト ウ	イ ネ ヨ ト ウ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 別名(ダイメイチュウ)。4～5月に播種すると被害が多い。</li> <li>(防除上のポイント)</li> <li>○ 幼虫の孵化から食入までの間、アフロトウの発生に合わせ効果的に防除する。</li> <li>○ 被害が見られた場合は間隙部に薬剤が十分入るよう薬剤散布する。</li> </ul>	1A		デナボン粒剤5	1:3～6kg/10a	収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ 登録はダイメイチュウ					



[26]薬剤の注意事項一覧

①薬害等の注意事項

アミスター20フロアブル	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない。
アミスターオブティフロアブル	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。薬害防止のため高温多湿時の散布、散布後高温が予想される場合は使用しない。連用は避ける。
オンリーワンフロアブル	はくさい、だいこんに対して薬害を生じる恐れがあるので、付近にある場合はかからないよう注意する。
ガードナーフロアブル	キャベツ、はくさい及びブロッコリーに使用する場合、葉に黄色斑点、葉緑の褐変等の薬害が生じる場合があるが、その後の生育に対する影響は認められない。
カスケード乳剤(なす)	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。品種「千両2号」、「みず茄子」には果実に薬害を生じるので使用しない。
カンタドライフロアブル	高温条件や散布後急激に乾燥すると、葉焼けや日焼け果の発生を助長する恐れがあるので注意する。ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない。
コテツフロアブル(ほうれんそう)	葉に白化などの薬害を生じるおそれがあるので、必ず使用時期を守る。
シグナムWDG	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない。
ストロビーフロアブル	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。薬害防止のため高温多湿時の散布、散布後高温が予想される場合は使用しない。連用は避ける。
スミチオン乳剤	莢に薬害が出ることもあるので、着莢期までの使用が望ましい。また、殺菌剤との混用は薬害を助長するので避ける。
ダイアジノン乳剤40	莢に薬害が出ることもあるので、着莢期までの使用が望ましい。また、殺菌剤との混用は薬害を助長するので避ける。
ダイアジノン粒剤3	ウリ類幼苗期に薬害を生じることがあるので、施用量を厳守するなど十分注意する。
ダブルシューターSE	キャプタン水和剤およびストロビルリン系薬剤との同時施用及び近接散布は薬害が生じる恐れがあるので避ける。
ナティーボフロアブル	はくさい、だいこん、いちご、なしに対して薬害を生じるおそれがあるので、かからないよう注意して使用する。
ベネビアOD	ストロビルリン系の薬剤を含む農薬および銅剤との混用は、薬害を生じるおそれがあるため行わない。展着剤は薬害を生じる恐れがあるため加用しない。アルカリ性の農薬や肥料との混用は避ける。
バルコート水和剤(メロン)	幼果期のメロンに対して薬害を生じる恐れがあるため、かからないよう注意して使用する。
ホライズンドライフロアブル(はくさい)	黄芯系などの葉肉の柔らかい品種には薬害を生じる場合があるので注意する。特に大福系品種には薬害を生じるので使用しない。
メジャーフロアブル	機能性展着剤を加用すると薬害を生じる恐れがあるので注意する。 キャベツ、はくさい、レタス、非結球レタス、ねぎに散布する場合、幼苗期は薬害のおそれがあるので使用を避ける。 たまねぎに使用する場合、幼苗期に散布すると薬害を生じるおそれがあり、生育初期に散布すると株の開帳や葉身部のわん曲の薬害を生じるおそれがあるので使用を避ける。高温条件下で葉先の退緑を生じるおそれがあるので使用を避ける。
モベントフロアブル	水稻にかかる不稔などの薬害を生じる場合があるので注意する。
モレストン水和剤	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。高温多湿時には薬害が出やすい。
フェスティバルC水和剤	きゅうり、はくさい、メロン、キャベツレタスに対して薬害を生じる恐れがあるため、中期以降の散布とし、高温期の散布は症状が激しくなることがあるので避ける。はくさいに使用する場合は、結球期以降の散布は薬害が生じる場合があるので使用を避ける。

②使用方法の注意事項

アクタラ顆粒水溶剤	セル成型育苗トレイ1箱(30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
アドマイヤーフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当たり0.5ℓ灌注
アベイル粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り40g
アルバリン/スタークル顆粒水溶剤(キャベツ)	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3ℓ)当り0.5ℓ灌注
アルバリン/スタークル顆粒水溶剤(ブロッコリー、トマト、ミニトマト、レタス、非結球レタス、ネギ)	セル成型育苗トレイ1箱又は、ペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
オラクル顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当たり0.5ℓ灌注
オリゼート顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)あたり0.5ℓ灌注
ガードナーフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ガードホープ液剤	1㎡ 当り2ℓをじょうろなどを用いて均一に土壌灌注し、処理後は根系への薬剤の移動を促すため、早い時期に5～20ℓ/㎡灌水する。過剰量灌注により薬害を生じるので、施用量を厳守する。
キックオフ顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ジュリボフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
スピノエース顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3ℓ)当り0.5ℓ灌注。
ダントツ粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
トリフミン水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約5L)あたり0.5L
ディアナSC	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
パレード20フロアブル(キャベツ、はくさい、レタス、ねぎ、非結球レタス)	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ブリロッソ粒剤オメガ	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
プリンス粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当り20～30g
プレバソンフロアブル5	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm、使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
プレバソン粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
ベストガード粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
ベリマークSC	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm、使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ミネクトデュオ粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り40g
ヨーバルフロアブル(キャベツ、ブロッコリー、はくさい、非結球レタス)	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ランマンフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約2.5～7ℓ)当り2ℓ灌注

③混用等注意事項

ダニオーテフロアブル	銅剤との混用は避ける。本剤散布後に銅剤を使用する場合は10日以上間隔を空ける。銅剤散布後は使用を避ける。
リーフガード顆粒水和剤	石灰硫黄合剤、ボルドー液とは混用しない。
ベリマークSC	アルカリ性の農薬や肥料との混用は避ける。

④同時施用注意事項

ブリロッソ粒剤オメガ	石灰などのアルカリ性肥料との同時施用は避ける。
------------	-------------------------

(2)いも類の種子消毒法

(いも類の種子消毒法)

作物名	病害虫名	農薬名	使用方法及び注意事項
さといも	疫病	ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間種いも浸漬
	黒斑病	トップジンM水和剤	植付前200～500倍で20～30分間種いも浸漬
ばれいしょ	そうか病	ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間種いも浸漬または植付前種いも重量の0.4～0.5%を種いも粉衣
		コサイドボルドー	植付前50～100倍で20分間種いも浸漬。ただし、萌芽時は不可(葉害)。
		アタッキン水和剤	植付前40～60倍で5～10秒間種いも浸漬または植付前40倍で種いも100kg当り2.5～30を散布。萌芽前に種いもを切断せずに処理する。
		フロンサイド水和剤	植付前100倍で種いも瞬間浸漬
		カセット水和剤	植付前30倍で種いも瞬間浸漬
		アグリマイシン-100	植付前40～100倍で5～10秒間種いも浸漬または植付前種いも100kg当り2.5～30を散布
かんしょ	つる割病	アグレプト水和剤	植付前60～100倍で5～10秒間種いも浸漬
		ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で20～30分間苗基部浸漬または挿苗時500～1,000倍で株元灌注
		ベンレートT水和剤20	植付前200倍で30分間さし苗基部浸漬
	黒斑病	トリフミン水和剤	植付前500倍で17時間苗基部浸漬
		トップジンM水和剤	植付前200～500倍で20～30分間種いもまたは苗茎部浸漬
		ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間さし苗基部浸漬または植付前200倍で30分間さし苗基部浸漬
	基腐病	ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で20～30分間苗基部浸漬または植付前種いも重の0.4%を種いも粉衣
		ベンレートT水和剤20	植付前500～1,000倍で30分間苗基部浸漬
		ベンレートT水和剤20	植付前200倍で30分間さし苗基部浸漬
やまのいも	褐色腐敗病	ベンレートT水和剤20	植付前100～200倍で10分間種いも浸漬
	青かび病		植付前100～200倍で10分間種いも浸漬または植付前種いも重量の0.3～0.5%を種いも粉衣
	根腐病		植付前20倍で約2秒間種いも浸漬

(注)コサイドボルドー、ベンレートT、フロンサイドは養殖池周辺での使用は避けること。

種子消毒に使用した廃液は、河川等に流さないようにする。

(3)野菜の土壌病害虫防除

①土壌消毒剤等による病害虫防除法

作物別適用表 (野菜病害虫防除法の本文に記載のある病害虫と一年生雑草への適用)

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	ク ロ ル ピ ク リ ン	ク ロ ル ビ ク リ ン 錠 剤	ク ロ ピ ク フ ロ ー	ク ロ ピ ク テ ー プ	ソ イ リ ン	デ イ ・ ト ラ ベ ッ ク ス 油 剤	N C S	ガ ス タ ー ド 微 粒 剤	キ ル パ ー	D - D 剤	バ イ デ ー ト L 粒 剤	ラ グ ビ ー M C 粒 剤	ネ マ ト リ ン エ ー ス 粒 剤	ネ マ キ ツ ク 粒 剤	ネ マ ク リ ン 粒 剤	ト ク チ オ ン 細 粒 剤 F	フ ロ ン サ イ ド S C	フ ロ ン サ イ ド 紛 剤	
きゅうり	苗立枯病	○	○		○				○	○										
	つる割病	○	○	○	○	○	○		○	○										
	疫病	○	○																	
	センチュウ類	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	コガネムシ類幼虫																			
	ネキリムシ類	○																		
一年生雑草	○					○	○		○	○										
かぼちゃ	苗立枯病									○										
	疫病																			
	ネキリムシ類																			
一年生雑草	○					○	○		○	○										
すいか	苗立枯病	○								○										
	つる割病	○	○	○	○	○	○			○	○									
	ネキリムシ類	○																		
	ケラ	○																		
一年生雑草	○	○				○	○		○	○										
メロン	苗立枯病	○			○					○										
	ネキリムシ類																			
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	一年生雑草	○	○				○	○		○	○									
トマト	青枯病	○	○							○										
	苗立枯病	○	○		○					○										
	萎凋病	○	○	○	○	○	○			○	○									
	根腐萎凋病																			
	疫病	○																		
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																		
	一年生雑草	○	○				○	○		○	○									

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロ	クロピクテープ	ソイリオン	デイ・トラペックス油剤	NCS	ガスタード微粒剤	キルバー	D-D剤	バイデールL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリーン粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンサイドSC	フロンサイド紛剤
ミニトマト	青枯病	○	○		○				○										
	苗立枯病	○	○						○										
	萎凋病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	根腐萎凋病								○										
	疫病	○																	
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○	○				○		○	○										
なす	青枯病	○	○	○	○				○										
	苗立枯病	○	○		○				○	○									
	半身萎凋病	○	○		○				○	○									
	センチュウ類	○	○	○		○	○		○	○	○		○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○	○				○		○	○										
ピーマン	青枯病	○	○	○	○				○										
	苗立枯病				○				○	○									
	疫病	○	○		○														
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○	○			○			○	○										
甘長とうがらし	疫病	○	○		○				○										
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
ししとう	青枯病	○	○	○	○	○			○										
	苗立枯病				○				○	○									
	疫病	○	○		○				○										
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
いちご	芽枯病								○										
	炭疽病	○	○			○	○		○										
	萎黄病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	疫病	○	○		○		○		○										
	ネガサレセンチュウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○				
	コガネムシ類幼虫										○								
一年生雑草	○	○			○	○		○	○										
だいこん	萎黄病	○	○			○	○		○										
	根腐病(亀裂褐変症)	○							○									○	
	センチュウ類	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	キスジノミハムシ											○							
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○					○		○	○										
キャベツ	苗立枯病		○		○	○			○										○
	株腐病								○										○
	菌核病								○										○
	根こぶ病	○					○	○	○	○									○
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○				○	○		○	○										
カリフラワー	根こぶ病								○										○
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○	○									
ブロッコリー	根こぶ病	○	○	○	○	○			○	○									○
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○	○									
はくさい	軟腐病	○							○										
	根こぶ病					○	○		○	○									○
	尻腐病								○										○
	根くびれ病	○				○			○	○									
	センチュウ類	○	○			○	○		○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○				○	○		○	○										

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロ	クロピクテブ	ソイリン	デイ・トラペックス油剤	NCS	バスタード微粒剤	キルバー	D-D剤	バイデールL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリン粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンスайдSC	フロンスайд紛剤
ほうれんそう	株腐病	○							○	○									
	萎凋病		○	○					○										
	立枯病	○	○						○	○									
	苗立枯病	○																	
	センチュウ類	○	○	○		○	○				○		○						
	ネキリムシ類	○																	
	ポレンソウケガコダニ 一年生雑草	○	○				○	○		○	○								
レタス	オゾ枯病									○	○								
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○				○		○	○									
非結球レタス	オゾ枯病									○	○								
	ネキリムシ類	○																	
たまねぎ	苗立枯病	○								○	○								
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○							○	○								
ねぎ	白絹病	○	○		○	○	○			○	○								
	萎凋病	○		○			○												
	黒腐菌核病						○			○	○								
	ネキリムシ類	○																	
	ネダニ類	○	○		○	○	○				○								
ごぼう	センチュウ類	○	○	○		○	○			○	○	○	○	○					
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○					○	○		○									
にんじん	センチュウ類	○	○			○	○			○	○	○	○	○	○	○			
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○				○	○		○	○								
さといも	乾腐病									○	○								
	ネグサレセンチュウ	○	○			○				○	○	○	○	○	○				
	コガネムシ類幼虫										○								
	一年生雑草	○	○							○	○								
ばれいしょ	青枯病	○	○			○				○	○								
	そうか病	○								○	○								○
	粉状そうか病																		○
	センチュウ類	○	○			○				○	○	○	○	○	○	○			
	ケラ	○																	
	一年生雑草	○	○			○				○	○								
	かんしょ	つる割病	○	○						○	○								
基腐病										○								○	
ハリガネムシ類	○										○							○	
コガネムシ類幼虫											○								
センチュウ類	○	○		○	○				○	○	○	○	○	○	○	○			
ネコブセンチュウ				○	○				○	○	○	○	○	○	○	○			
ケラ	○																		
一年生雑草	○	○				○			○	○									
やまのいも	褐色腐敗病	○				○	○			○	○								○
	根腐病	○	○			○				○	○								
	コガネムシ類幼虫											○							
	センチュウ類	○	○			○	○			○	○	○	○	○	○	○			
一年生雑草	○	○							○	○									
えだまめ	白絹病	○	○																
	ネキリムシ類	○																	
	センチュウ類	○	○							○	○	○	○	○	○				
一年生雑草	○	○							○	○									

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロ	クロピクテブ	ソイリン	デイ・トラペックス油剤	NCS	ガスタード微粒剤	キルパー	D-D剤	バイデールL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリン粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンスайдSC	フロンスайд紛剤
		未成熟そらまめ	苗立枯病 立枯病 茎腐病 ネキリムシ類 一年生雑草	○	○						○								
さやえんどう	苗立枯病 立枯病 根腐病 茎腐病 ネキリムシ類 一年生雑草	○	○						○	○									
実えんどう	苗立枯病 立枯病 茎腐病 一年生雑草	○	○						○	○									
さやいんげん	根腐病 一年生雑草	○	○						○										
しょうが	根茎腐敗病 一年生雑草	○	○	○	○	○	○		○	○									
アスパガラス	立枯病 一年生雑草	○	○	○					○	○									
しそ	青枯病 センチュウ類 一年生雑草								○		○		○						
チンゲンサイ	根こぶ病 ネキリムシ類 一年生雑草		○						○										
オクラ	一年生雑草					○													
しゅんぎく	萎凋病 一年生雑草								○										
こまつな	萎黄病 根こぶ病 ネキリムシ類 コガネムシ類幼虫 センチュウ類 一年生雑草	○	○	○					○										
なばな	センチュウ類 ネキリムシ類 一年生雑草	○	○																
みずな	根こぶ病 センチュウ類 ネキリムシ類 一年生雑草		○	○					○		○		○						
かぶ	根こぶ病 ネキリムシ類 一年生雑草	○					○		○	○								○	

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

(2)いも類の種子消毒法

(いも類の種子消毒法)

作物名	病害虫名	農薬名	使用方法及び注意事項
さといも	疫病	ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間種いも浸漬
	黒斑病	トップジンM水和剤	植付前200～500倍で20～30分間種いも浸漬
ばれいしょ	そうか病	ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間種いも浸漬または植付前種いも重量の0.4～0.5%を種いも粉衣
		コサイドボルドー	植付前50～100倍で20分間種いも浸漬。ただし、萌芽時は不可(葉害)。
		アタッキン水和剤	植付前40～60倍で5～10秒間種いも浸漬または植付前40倍で種いも100kg当り2.5～30を散布。萌芽前に種いもを切断せずに処理する。
		フロンサイド水和剤	植付前100倍で種いも瞬間浸漬
		カセット水和剤	植付前30倍で種いも瞬間浸漬
		アグリマイシン-100	植付前40～100倍で5～10秒間種いも浸漬または植付前種いも100kg当り2.5～30を散布
かんしょ	つる割病	アグレット水和剤	植付前60～100倍で5～10秒間種いも浸漬
		ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で20～30分間苗基部浸漬または挿苗時500～1,000倍で株元灌注
		ベンレートT水和剤20	植付前200倍で30分間さし苗基部浸漬
		トリフミン水和剤	植付前500倍で17時間苗基部浸漬
	黒斑病	トップジンM水和剤	植付前200～500倍で20～30分間種いもまたは苗茎部浸漬
		ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間さし苗基部浸漬または植付前200倍で30分間さし苗基部浸漬
		ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で20～30分間苗基部浸漬または植付前種いも重の0.4%を種いも粉衣
	基腐病	ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で30分間苗基部浸漬
ベンレートT水和剤20		植付前200倍で30分間さし苗基部浸漬	
やまのいも	褐色腐敗病	ベンレートT水和剤20	植付前100～200倍で10分間種いも浸漬
	青かび病		植付前100～200倍で10分間種いも浸漬または植付前種いも重量の0.3～0.5%を種いも粉衣
	根腐病		植付前20倍で約2秒間種いも浸漬

(注)コサイドボルドー、ベンレートT、フロンサイドは養殖池周辺での使用は避けること。

種子消毒に使用した廃液は、河川等に流さないようにする。

(3)野菜の土壌病害虫防除

①土壌消毒剤等による病害虫防除法

作物別適用表 (野菜病害虫防除法の本文に記載のある病害虫と一年生雑草への適用)

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	ク ロ ル ピ ク リ ン	ク ロ ル ビ ク リ ン 錠 剤	ク ロ ピ ク フ ロ ー	ク ロ ピ ク テ ー プ	ソ イ リ ン	デ イ ・ ト ラ ベ ッ ク ス 油 剤	N C S	ガ ス タ ー ド 微 粒 剤	キ ル パ ー	D - D 剤	バ イ デ ー ト L 粒 剤	ラ グ ビ ー M C 粒 剤	ネ マ ト リ ン エ ー ス 粒 剤	ネ マ キ ン ク 粒 剤	ネ マ ク リ ン 粒 剤	ト ク チ オ ン 細 粒 剤 F	フ ロ ン サ イ ド S C	フ ロ ン サ イ ド 紛 剤	
きゅうり	苗立枯病	○	○		○				○	○										
	つる割病	○	○	○	○	○	○		○	○										
	疫病	○	○																	
	センチュウ類	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	コガネムシ類幼虫																			
	ネキリムシ類	○																		
一年生雑草	○					○	○		○	○										
かぼちゃ	苗立枯病									○										
	疫病																			
	ネキリムシ類																			
一年生雑草	○					○	○		○	○										
すいか	苗立枯病	○								○										
	つる割病	○	○	○	○	○	○			○	○									
	ネキリムシ類	○																		
	ケラ	○																		
一年生雑草	○	○				○	○		○	○										
メロン	苗立枯病	○			○					○										
	ネキリムシ類																			
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
一年生雑草	○	○				○	○		○	○										
トマト	青枯病	○	○							○										
	苗立枯病	○	○							○										
	萎凋病	○	○	○	○	○	○			○	○									
	根腐萎凋病																			
	疫病	○																		
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																		
	一年生雑草	○	○				○	○		○	○									

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロ	クロピクテブ	ソイリオン	デイ・トラペックス油剤	NCS	ガスタード微粒剤	キルパー	D-D剤	バイデールL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリーン粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンスайдSC	フロンスайд紛剤
ミニトマト	青枯病	○	○		○		○		○										
	苗立枯病	○	○		○		○		○										
	萎凋病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	根腐萎凋病								○										
	疫病	○																	
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○			
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○	○				○		○	○										
なす	青枯病	○	○	○	○		○		○										
	苗立枯病	○	○		○				○	○									
	半身萎凋病	○	○		○		○		○	○									
	センチュウ類	○	○	○		○	○		○	○	○		○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○				○		○	○									
ピーマン	青枯病	○	○	○	○				○										
	苗立枯病				○				○	○									
	疫病	○	○		○														
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○	○			○			○	○										
甘長とうがらし	疫病	○	○		○				○										
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
ししとう	青枯病	○	○	○	○	○			○										
	苗立枯病				○				○	○									
	疫病	○	○		○				○										
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
いちご	芽枯病								○										
	炭疽病	○	○			○	○		○										
	萎黄病	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
	疫病	○	○		○		○		○										
	ネガサレセンチュウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○				
	コガネムシ類幼虫										○								
一年生雑草	○	○				○	○	○	○										
だいこん	萎黄病	○	○				○		○										
	根腐病(亀裂褐変症)	○							○									○	
	センチュウ類	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	キスジノミハムシ											○							
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○					○		○	○										
キャベツ	苗立枯病		○		○	○			○										○
	株腐病								○										○
	菌核病								○										○
	根こぶ病	○					○	○	○	○									○
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○					○	○	○	○										
カリフラワー	根こぶ病								○										○
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○							○	○										
ブロッコリー	根こぶ病	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○	○									
はくさい	軟腐病	○																	
	根こぶ病						○	○	○	○									○
	尻腐病								○										○
	根くびれ病	○				○			○	○									○
	センチュウ類	○	○			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○			
	ネキリムシ類	○																	
一年生雑草	○					○	○	○	○										

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。



作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	ク ロ ー ル ピ ク リ ン	ク ロ ル ビ ク リ ン 錠 剤	ク ロ ビ ク フ ロ ー	ク ロ ビ ク テ ー プ	ソ イ リ ー ン	デ イ ・ ト ラ ペ ク ス 油 剤	N C S	バ ス タ ー ド 微 粒 剤	キ ル バ ー	D - D 剤	バ イ デ ー ト L 粒 剤	ラ グ ビ ー M C 粒 剤	ネ マ ト リ ン エ ー ス 粒 剤	ネ マ キ ツ ク 粒 剤	ネ マ ク リ ン 粒 剤	ト ク チ オ ン 細 粒 剤 F	フ ロ ン サ イ ド S C	フ ロ ン サ イ ド 紛 剤	
ほうれんそう	株腐病	○							○	○										
	萎凋病	○	○	○	○				○	○										
	立枯病	○	○						○	○										
	苗立枯病	○																		
	センチュウ類	○	○	○		○	○				○		○							
	ネキリムシ類	○																		
	ポレンソウケガコナダニ 一年生雑草	○	○				○	○		○	○									
レタス	すそ枯病									○	○									
	ネキリムシ類	○																		
	一年生雑草	○	○				○			○	○									
非結球レタス	すそ枯病									○	○									
	ネキリムシ類	○																		
たまねぎ	苗立枯病	○	○																	
	ネキリムシ類	○																		
	一年生雑草	○	○							○	○									
ねぎ	白絹病	○	○		○	○	○			○	○									
	萎凋病	○		○			○													
	黒腐菌核病						○			○	○									
	ネキリムシ類	○																		
	ネダニ類	○	○		○	○	○					○								
ごぼう	センチュウ類	○	○	○		○	○			○	○	○	○	○	○					
	ネキリムシ類	○																		
	一年生雑草	○				○	○			○	○									
にんじん	センチュウ類	○	○			○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																		
	一年生雑草	○	○			○	○			○	○									
さといも	乾腐病									○	○									
	ネグサレセンチュウ	○	○			○				○	○	○	○	○	○					
	コガネムシ類幼虫											○								
	一年生雑草	○	○			○				○	○									
ばれいしょ	青枯病	○	○			○				○	○									
	そうか病	○								○	○								○	
	粉状そうか病	○								○	○								○	
	センチュウ類	○	○			○				○	○	○	○	○	○	○				
	ケラ	○																		
	一年生雑草	○	○			○				○	○									
かんしょ	つる割病	○	○							○	○									
	基腐病																		○	○
	ハリガネムシ類	○											○							
	コガネムシ類幼虫											○								
	センチュウ類	○	○		○	○				○	○	○	○	○	○	○				
	ネコブセンチュウ				○	○				○	○	○	○	○	○	○				
	ケラ	○																		
一年生雑草	○	○			○				○	○										
やまのいも	褐色腐敗病	○				○	○													○
	根腐病	○	○			○				○	○									
	コガネムシ類幼虫											○								
	センチュウ類	○	○			○	○			○	○	○	○	○	○	○				
一年生雑草	○	○			○				○	○										
えだまめ	白絹病	○	○																	
	ネキリムシ類	○																		
	センチュウ類	○	○							○	○	○	○	○	○					
一年生雑草	○	○							○	○										

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロ	クロピクテブ	ソイリン	デイ・トラペックス油剤	NCS	ガスタード微粒剤	キルバー	D-D剤	バイデールL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリン粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンスайдSC	フロンスайд紛剤
未成熟そらまめ	苗立枯病								○										
	立枯病	○	○																
	茎腐病								○										
	ネキリムシ類 一年生雑草	○	○						○										
さやえんどう	苗立枯病	○							○	○									
	立枯病	○	○																
	根腐病	○		○	○					○									
	茎腐病 ネキリムシ類 一年生雑草	○	○						○	○									
実えんどう	苗立枯病	○							○	○									
	立枯病	○	○																
	茎腐病								○										
	一年生雑草	○	○						○	○									
さやいんげん	根腐病	○																	
	一年生雑草	○	○						○										
しょうが	根茎腐敗病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
アスパガラス	立枯病	○	○	○															
	一年生雑草	○	○																
しそ	青枯病								○										
	センチュウ類										○		○						
	一年生雑草								○										
チンゲンサイ	根こぶ病								○										
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○										
オクラ	一年生雑草					○													
しゅんぎく	萎凋病								○										
	一年生雑草								○										
こまつな	萎黄病	○	○	○					○										
	根こぶ病								○										
	ネキリムシ類	○																	
	コガネムシ類幼虫										○								
	センチュウ類	○	○			○					○								
なばな	一年生雑草	○							○										
	センチュウ類	○	○																
	ネキリムシ類	○																	
みずな	一年生雑草	○																	
	根こぶ病								○										
	センチュウ類	○	○								○		○						
かぶ	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○	○									○
	根こぶ病	○					○		○	○									

※D-D剤は、D-D、旭D-D、DC油剤、テロン。

## ②対抗植物利用による線虫防除法

対抗植物	作物名		ネコブセンチュウ	ネグサレセンチュウ	播種時期	播種量(散播)/10a
	マメ科	クロタラリア	○		5月～7月	5～6kg
イネ科	ギニアグラス	○		5月～7月	1～2kg	
	エンバク野生種 (ハイオーツ)		○	3月上旬～5月下旬 8月下旬～9月上旬 10月下旬～11月下旬	10～15kg	
キク科	マリーゴールド		○	4月～6月	0.4kg	
対抗植物を利用する場合の留意点 ① 防除の対象となるセンチュウに適した対抗植物・品種を利用する。 ② 対抗植物の効果を高めるためには、この植物の根系を均一かつ相当の高密度で土中に分布させるような播種時期、播種密度、栽植様式が必要である。 ③ 対抗植物栽培圃場の雑草防除を徹底する。 ④ 前作で栽培する場合、少なくとも2～3か月の栽培期間が必要である。						

## ③土壌消毒剤による一年生雑草防除法 (本文に記載のある作物)

農薬名	処理量と適用作物 (使用方法等は各薬剤のラベル参照)
クロールピクリン	①処理量：(床土・堆肥) 3～5ml/穴、(圃場) 2～3ml/穴 適用作物：きゅうり、すいか、メロン、トマト、ミニトマト、なす、ピーマン、ししとう、いちご、だいこん、キャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、はくさい、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ、ねぎ、ごぼう、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、えだまめ、未成熟そらまめ、さやえんどう、実えんどう、さやいんげん、しょうが、アスパラガス、未成熟とうもろこし、チンゲンサイ、こまつな、なばな、みずな、甘長とうがらし、かぶ ②処理量：(圃場) 3～4ml/穴 適用作物：かぼちゃ (かぼちゃ台を含む)
クロルピクリン錠剤	①処理量：1㎡当り10錠 適用作物：すいか、メロン、トマト、ミニトマト、なす、ピーマン、ししとう、いちご、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ、ねぎ、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、えだまめ、未成熟そらまめ、さやえんどう、実えんどう、さやいんげん、しょうが、アスパラガス、甘長とうがらし
バスアミド微粒剤 ガスタード微粒剤	①処理量：20kg/10a 適用作物：しゅんぎく ②処理量：20～30kg/10a 適用作物：きゅうり、かぼちゃ、すいか、メロン、トマト、ミニトマト、なす、いちご、だいこん、キャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、はくさい、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ (10～20kg/10aの場合は播種14日前まで)、ねぎ、ごぼう、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、えだまめ、さやえんどう、実えんどう、さやいんげん、しょうが、こまつな、かぶ ③処理量：30kg/10a 適用作物：ピーマン、ししとう、未成熟そらまめ、しそ、チンゲンサイ、みずな、甘長とうがらし
ソイリーン	①処理量：20～30ℓ/10a (2～3ml/穴) 適用作物：きゅうり、かぼちゃ、すいか、メロン、トマト、ミニトマト、なす、ピーマン、ししとう、いちご、だいこん、キャベツ、はくさい、ほうれんそう、ねぎ、ごぼう、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、しょうが、オクラ、甘長とうがらし
キルパー	①処理量：原液として40ℓ/10a 適用作物：すいか、メロン、なす、ねぎ、ごぼう、さといも、かぶ ②処理量：原液として40～60ℓ/10a 適用作物：きゅうり、トマト、ミニトマト、ピーマン、ししとう、だいこん、キャベツ、ブロッコリー、はくさい、レタス、非結球レタス、にんじん、かんしょ、甘長とうがらし ③処理量：原液として60ℓ/10a 適用作物：すいか、かぼちゃ、なす、ピーマン、ししとう、いちご、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ、ねぎ、ばれいしょ、やまのいも、さやえんどう、実えんどう、しょうが、みずな、甘長とうがらし
ディ・トラベックス油剤	①処理量：30～40ℓ/10a 適用作物：きゅうり、すいか、メロン、トマト、ミニトマト、いちご、だいこん、キャベツ、はくさい、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、ねぎ、ごぼう、にんじん、やまのいも、しょうが、かぶ ②処理量：30ℓ/10a 適用作物：なす
NCS	①処理量：原液として30ℓ/10a 適用作物：たまねぎ (秋播露地栽培苗床)、ねぎ (春播露地栽培苗床)

## ④太陽熱利用による土壌消毒法

夏期の高温を利用した処理方法であり、有機物施用による土づくりを同時に行うことができる。また、土壌微生物の生態系を維持できるため、環境保全型の防除手段として安全、低コストで実施できる。土壌伝染性病害のほかセンチュウ・雑草類の種子も死滅させることができる。但し、効果がやや不安定な病害としてナス科青枯病、トマト根腐萎凋病が挙げられる。

### 1 実施期間

晴天高温が続く梅雨明け直後から8月20日頃の期間に実施する。

### 2 手順

#### (1)土耕栽培

① 粗大有機物 (稲わら、麦わら、木材チップ、緑肥作物等) を乾物重で約1～2t/10a圃場全面に施用する。さらに、石灰窒素を100kg/10a全面散布する。

- ② 圃場のすみずみまで深く耕耘して土壌混和し、その後、畝立て(畝幅70cm、高さ25cm程度)を行う。
- ③ 透明なビニール(古いビニールでよい)で圃場全面を被覆し、破れた箇所を塞いで保湿性を高める。さらに、周囲を盛り土で固定して地表面を密閉する。
- ④ 畝全体に水分が浸透する程度に湛水する。
- ⑤ ハウスにビニール被覆をして密閉し、そのまま20~30日間置く。
- ⑥ 処理後はハウスを開放し、土壌被覆のビニールを除去して土壌を乾燥させる。
- ⑦ pH、EC、無機窒素を測定し、pH矯正等を行う(EC、無機窒素が高い場合は雨で流すか、施肥量を控える)。

#### (2)高設栽培(イチゴ等)

- ① 前作の栽培株は除去し、イチゴはクラウン部も取り除く。
- ② 点滴チューブで灌水し、栽培槽の培地を十分に湿らせる。
- ③ ビニールで栽培槽を包む。ビニールは黒色より透明の方が培地の温度が上昇しやすく効果的である。
- ④ 透明なビニールで架台をスクーティングすると、培地の温度がさらに上昇しやすい。
- ⑤ ハウス側窓はある程度開放し、10~14日間以上置く。処理後は土耕栽培と同様である。

### 3 注意事項

- (1)土壌が乾燥すると菌の活性低下、有機物の腐熟量の減少、地温の低下が起こるので、追加で灌水する。
- (2)病原菌の殺菌温度および日数は40℃、6日間以上必要とするので、天候が不順な日が多い場合は消毒期間を延長する。
- (3)晴天が続くとハウスが高温になるとともに、窒素の分解過程で種々の有害ガスが発生するので、ハウス内へは立ち入らない。また、高設栽培の架台の資材には高熱に弱いものもあるため、ハウス気温が60℃以上となる時はハウス側窓を開放する。
- (4)稲わら、麦わら、山草等を粗大有機物として利用する場合は、5~10cmに裁断して施用する。また、ソルゴー、トウモロコシ等の緑肥作物は立ち毛のまますき込む。
- (5)圃場の周辺部の耕土が浅くなるので、三つ鉞等で、すみずみまで丁寧に耕す。
- (6)下記のような場合、消毒むらが発生し、その部分が病害の発生源となるので十分注意する。
  - ①ビニール等によるマルチ及びハウスの密閉が不完全である。
  - ②耕起むらや有機物の土壌混和が十分でない。
  - ③湛水量が少なく土壌に乾燥むらが生じている。あるいは、湛水を過剰に行い水口周辺部の地温が上昇していない。

### ⑤有機物利用による土壌還元消毒法

土壌に炭素源となる有機物を投入し、湛水および被覆を行い土壌微生物を活性化させ、土壌の還元化を引き起こすことで病原を死滅させる消毒技術である。土壌微生物群への影響も小さく、環境保全型の防除手段として安全に実施できる。また、土壌伝染性病害のほかセンチュウ類にも効果がある。

#### 1 実施期間

30℃以上の地温が確保できる夏季に実施する。

#### 2 手順

- (1)固体有機物(フスマ、米ぬか等)を乾物重で約1~2t/10a圃場全面に施用する。または、液体有機物(エタノール等、濃度は有機物の種類により異なる)を約100~2000/㎡圃場全体に散布して、圃場を湛水状態とする。
- (2)固体有機物の場合、圃場のすみずみまで深く耕耘して土壌混和し、灌水チューブ等で湛水状態となるまで灌水する。
- (3)透明なビニール(古いビニールでよい)で圃場全面を被覆し、破れた箇所を塞いで保湿性を高める。さらに、マルチングと同様に周囲を埋め込んで固定し、地表面を密閉する。
- (4)30℃以上の地温が確保されている状態で、そのまま2~3週間置く。3~4日ほどでドブ臭がすれば消毒が進行している。
- (5)ビニールを除去して耕起を行い、そのまま1週間以上置いて土壌の還元状態を正常に戻す。
- (6)pH、EC、無機窒素を測定し、pH矯正等を行う(EC、無機窒素が高い場合は雨で流すか、施肥量を控える)。

#### 3 注意事項

- (1)利用する有機物はフスマや米ぬか等の分解が早く、土壌に接しやすい細かいものが望ましい。
- (2)湛水処理を行うため、必要に応じて処理区外周に防水壁(波板、うね)を設置する。
- (3)固体有機物の場合は混和する深さまで効果が得られるが、液体有機物の場合それよりも深い下層土まで効果が期待できる。
- (4)エタノールを用いて処理を行う場合は十分に換気を行う。
- (5)圃場の再汚染を避けるため、消毒処理後の耕起では耕耘機をよく洗浄する。また、有機物混和時以上に深く耕起しない。
- (6)水はけがよすぎる土壌では効果が劣るため、他の方法で土壌消毒を行う。

### ⑥熱水利用による土壌消毒法

土壌に熱水を染み込ませて、土壌中の病原菌やセンチュウ類等を死滅させる方法で、環境保全型の防除手段として安全に実施できる。ただし熱水調整用のボイラーと熱水注入装置が必要である。

#### 1 消毒時の土壌条件

土壌が乾燥している時の効果が高いので、土壌は十分に耕起、乾燥させておく。なお、耕土層が浅く、硬くしまった圃場では熱水が十分に浸透しないので、圃場はできるだけ深く耕起し、均平にする。

#### 2 消毒の方法

通常80~95℃の熱水を土壌に注入するが、専用ボイラー(灯油、A重油、LPガスの各タイプ有り)を用い、チューブもしくはウインチ式の熱水注入装置を用いて注入する。注入量は150~2000/㎡を目標とするが、土質や地温により調整する。

消毒後、2日程度は保温シートで圃場全体を被覆し、残熱効果を利用する。

#### 3 その他

装置等専門的な技術が必要であるので、施設面積や経済性等を考慮し、実績のある装置取り扱い者の指導を受け実施する。なお、病原菌以外の生物も死滅するため土壌生物相が単調になりやすく、再汚染しやすい傾向があるので注意が必要である。

⑦ 苗立枯病の薬液灌注等防除法(本文に記載のある作物および病害)

作物名	病害名	農薬名	使用時期	使用濃度	使用量	使用回数	備考
きゅうり	苗立枯病(フザリウム菌、ピシウム菌)	タチガレン液剤	播種直後	500~1,000倍	30/m <sup>2</sup>	3回以内	土壌灌注
	苗立枯病(ピシウム菌)	プレビクールN液剤	播種時	400倍	30/m <sup>2</sup>	3回以内	土壌灌注
		タチガレファイト液剤	播種直後	500倍	30/m <sup>2</sup>	3回以内	土壌灌注
	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	ダコニール1000	播種時または活着後(但し、定植14日後まで)	1,000倍	30/m <sup>2</sup>	2回以内	土壌灌注
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍		1回	
		モンカット水和剤	播種時~子葉展開時	500~1,000倍		1回	
モンカット水和剤50		1,000~2,000倍		1回			
バシタック水和剤75		750~1,500倍		1回			
バリダシン液剤5	播種直後	800倍	1回	灌注			
かぼちゃ	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	5回以内	土壌灌注
すいか	苗立枯病	タチガレン液剤	播種直後	500~1,000倍	30/m <sup>2</sup>	2回以内	苗床土壌灌注
		オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	バシタック水和剤75	播種時~子葉展開時	750~1,500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
メロン	苗立枯病(ピシウム菌)	タチガレン液剤	播種時	500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	全面土壌灌注
		タチガレファイト液剤	播種時	500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	全面土壌灌注
トマト	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	5回以内	土壌灌注
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
		バシタック水和剤75	播種時~子葉展開時	750~1,500倍		1回	
		モンカット水和剤		500~1,000倍		1回	
		モンカット水和剤50		1,000~2,000倍		1回	
ダコニール1000	播種時または活着後(但し、定植14日後まで)	1,000倍	2回以内				
ミニトマト	苗立枯病(リゾクトニア菌)	バシタック水和剤75	播種時~子葉展開時	750~1500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
		モンカット水和剤	播種時~子葉展開時	500~1000倍	30/m <sup>2</sup>	1回	
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	
なす	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
ピーマン	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	2回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	500倍	30/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
		モンカット水和剤	(施設)播種時~子葉展開時(露地)播種時	500~1,000倍		2回以内	
ししとう	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	2回以内	土壌灌注
ブロッコリー	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	育苗期	500倍	30/m <sup>2</sup>	2回以内	土壌灌注
			収穫21日前まで			1回	
ほうれんそう	苗立枯病(ピシウム菌)	タチガレン液剤	播種直後	500~1,000倍	30/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
		モンカット水和剤50	播種直後	1,000~2,000倍		1回	
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	バシタック水和剤75	播種時~子葉展開時	750~1,500倍		1回	
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍		1回	
たまねぎ	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	収穫前日まで	600倍	100~3000/10a	5回以内	散布
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス粉剤	播種前	-	40kg/10a	1回	全面処理土壌混和
ねぎ	苗立枯病(リゾクトニア菌)	ダコニール1000	出芽揃い後(出芽3日後から10日後まで)	500倍	0.50/m <sup>2</sup>	1回	土壌灌注
		バリダシン液剤5	播種時	400倍	60/m <sup>2</sup>	1回	灌注
にんじん	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	1,000倍	30/m <sup>2</sup>	1回	全面土壌灌注
アスパラガス	苗立枯病	リゾレックス水和剤	株養成期(播種または定植時から茎葉刈取り期まで)但し、収穫14日前まで	500倍	100~3000/10a	3回以内	散布
オクラ	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時及び子葉展開時	1,000倍	10/m <sup>2</sup> (150m <sup>0</sup> /穴)	2回以内	植穴土壌灌注
	苗立枯病(ピシウム菌)	オーソサイド水和剤80	播種後から2~3葉期まで	800倍	20/m <sup>2</sup>	2回以内	土壌灌注
キャベツ	苗立枯病(リゾクトニア菌)	フロンサイドSC	播種又は定植前	500mL/10a	100~200L/10a	2回以内	土壌灌注

#### (4)ミナミキイロアザミウマの防除法

本種は、他のアザミウマ類と比較して薬剤の効果が高く、増殖率も高いため、一度多発すると薬剤だけでは防除が極めて困難になる。また、きゅうり・メロンの黄化えそ病(MYSV)を媒介するため、黄化えそ病発生地では、低密度であっても被害が拡大する場合がありますので、以下の点に注意し地域ぐるみで対応していく。

##### 1 耕種的防除法

###### (1)露地栽培

- ① 露地で育苗する場合は、防虫ネットによるトンネル被覆をし、成虫の侵入を防ぐ。
- ② シルバーポリマルチ(畦畔などもマルチを行い裸地の面積を少なくする)や防風をかねて防虫ネットなどで障壁を設ける。
- ③ 本種の有力な天敵ヒメハナカメシ類の保護のため、天敵に影響が大きい殺虫剤の散布を控える。  
また、ほ場周辺にマリーゴールド等の天敵温存植物を植栽することにより、天敵の発生量の増加を図ることが可能である。

###### (2)施設栽培

- ① 苗による持ち込みを防止するため、発生圃場または被害作物周辺での育苗を避ける。  
また、無寄生苗を導入し、寄生の恐れのある場合は、定植前又は定植後速やかに薬剤により防除する。
- ② 育苗及び栽培施設の換気部は、防虫ネット(1mm以下)などで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ③ 被害作物の残渣は、株を引き抜いた後、湛水、密閉して太陽熱利用等による蒸し込み処理を7～10日間位行う。  
冬期は、1ヶ月以上の密閉処理を行う。
- ④ シルバーポリマルチ等による全面マルチは、密度抑制効果が高い。
- ⑤ 近紫外線除去フィルム被覆は、施設内への侵入抑制効果がある(但し、なす及びミツバチを利用する作物を除く)。

###### (3)その他の注意点

- ① 成虫の移動分散は、昼間の風の影響が大きいので、作付圃場は発生源の風上に設ける。  
風下の場合は500m以上離すことが望ましい。
- ② 本種は、雑草においても生息及び増殖するので、圃場周辺及び施設内の除草に努める。  
(密度の増える前に実施する。)

##### 2 薬剤防除法

- (1)育苗中及び本圃生育初期には本種がよく誘引される青色粘着板(ホリバー・トルシー等)を用い、早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (2)植物組織内部に産卵し、土中で蛹化するため、薬剤が直接かからない生育ステージがあり、発生を見たら3～7日間隔で2～3回防除する。特に多発時には反復散布を必ず実施する。
- (3)系統の異なる剤の中から薬剤を選出し、ローテーション散布を心掛ける。
- (4)成・幼虫の寄生部位が作物ごとに以下のように異なるので、調査及び散布時には注意する。

きゅうり……………主に葉  
なす……………葉及び果実のへた下  
ピーマン……………主に果実のへた下

ミナミキイロアザミウマの主な適用薬剤

作物名	系統名	IRACコード	農薬名	濃度	処理方法	使用時期/本剤の使用回数 注1)
きゅうり	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			アルバリン粒剤	2g/株	(植穴)	定植時/1回
			スタークル粒剤	2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ダントツ粒剤	2g/株	(植穴)	定植時/1回
				1g/株	(株元処理)	育苗期後半/1回
すいか	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ダントツ粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
			ダントツ水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内

作物名	系統名	IRACコード	農薬名	濃度	処理方法	使用時期／本剤の使用回数 注1)
すいか	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	4,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	マクロライド系	6	アフーム乳剤 アグリメック	1,000～2,000倍 500～1,000倍	散布 散布	収穫前日まで/3回以内 収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC ダブルシューターSE	5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍	散布 散布 散布	収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/2回以内
	METI系	21A	ハチハチ乳剤 ハチハチフロアブル	1,000～2,000倍 1,000倍	散布 散布	収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/2回以内
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍 50ml/株 500倍	散布 灌注	収穫前日まで/3回以内 育苗期後半～定植当日/1回
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2)		育苗期後半～定植当日/1回
	ネオニコチノイド系 +ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤 ミネクトデュオ粒剤	2g/株 2g/株	(株元散布) (株元散布)	育苗期後半～定植当日/1回 鉢上げ時～育苗期後半/1回
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	イソキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
メロン	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			アルバリン粒剤	2g/株	(植穴)	定植時/1回
			スタークル粒剤	2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ダントツ粒剤	2g/株	(植穴)	定植時/1回
			アクタラ粒剤5	1g/株	(植穴)	定植時/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
	ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内		
	アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内		
	バリアード顆粒水和剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内		
	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫3日前まで/2回以内		
	アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫3日前まで/2回以内		
	I GR系	15	アタブロン乳剤 注5,6) カスケード乳剤 注6) デミリン水和剤 注6)	2,000～4,000倍 2,000～4,000倍 1,500～3,000倍	散布 散布 散布	収穫14日前まで/3回以内 収穫7日前まで/3回以内 収穫7日前まで/3回以内
	マクロライド系	6	アフーム乳剤 アグリメック	1,000～2,000倍 500～1,000倍	散布 散布	収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/3回以内
スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC ダブルシューターSE	5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍	散布 散布 散布	収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/2回以内	
プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内	
環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍 50ml/株 500倍	散布 灌注	収穫前日まで/3回以内 育苗期後半～定植当日/1回	
ジアミド系	28	ベリマークSC	注2)		育苗期後半～定植当日/1回	
ネオニコチノイド系+ジアミド系	4A+28	ミネクトデュオ粒剤	2g/株	(株元散布)	鉢上げ時～育苗期後半/1回	
イソキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内	
なす	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			アクタラ粒剤5	1g/株	(植穴)	定植時/1回
			アルバリン粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			スタークル粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内		
	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内		
	ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内		
	I GR系	15	アタブロン乳剤 注6) カスケード乳剤 注6)	2,000倍 2,000～4,000倍	散布 散布	収穫前日まで/3回以内 収穫前日まで/4回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	2,000倍	散布	収穫前日まで/4回以内
	マクロライド系	6	アフーム乳剤 アグリメック	2,000倍 500～1,000倍	散布 散布	収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	散布 散布	収穫前日まで/2回以内 収穫前日まで/2回以内
プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/4回以内	
環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍 50ml/株 500倍	散布 灌注	収穫前日まで/3回以内 育苗期後半～定植当日/1回	
ジアミド系	28	ベリマークSC プリロツ粒剤	注2) 2g/株	(株元散布)	育苗期後半～定植当日/1回	
ネオニコチノイド系 +ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤 ミネクトデュオ粒剤	2g/株 2g/株	(株元散布) (株元散布)	育苗期後半～定植当日/1回 鉢上げ時～育苗期後半/1回	
Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内	
イソキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内	
ピーマン	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤 アクタラ粒剤5 アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1～2g/株 2g/株 1～2g/株 1～2g/株	(植穴) (植穴) (植穴) (植穴)	定植時/1回 定植時/1回 定植時/1回 定植時/1回

作物名	系統名	IRACコード	農薬名	濃度	処理方法	使用時期／本剤の使用回数 注1)
ピーマン	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダントツ水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	IGR系	15	アタブロン乳剤 注6)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			カスケード乳剤 注6)	4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	マクロライド系	6	アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	METI系	21A	ハチハチ乳剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/1回
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内	
			50ml/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回	
ジアミド系	28	ベリマークSC		注2)	育苗期後半～定植当日/1回	
		プリロックス粒剤	2g/株	(株元散布)	育苗期後半～定植時/1回	
ネオニコチノイド系 +ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤 ミネクトデュオ粒剤	2g/株	(株元散布)	育苗期後半～定植当日/1回	
			2g/株	(株元散布)	鉢上げ時～育苗期後半/1回	
Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内	
イノキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内	
ししとう	IGR系	15	アタブロン乳剤 注6)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	20,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	ジアミド系	28	ベリマークSC		注2)	育苗期後半～定植当日/1回
			ベネビアOD 注4)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内	
とうがらし類	ネオニコチノイド系	4A	アルバリン粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			スタークル粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ベストガード粒剤	1～2g/株	(植穴)	定植時/1回
			ダントツ水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500倍	散布	収穫前日まで/2回以内
ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内	
プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内	
環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内	
50ml/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回				
ほうれんそう	ネライストキシシン系	14	パダン粒剤4	6kg/10a	土壌表面散布及び茎葉散布	播種時及び発芽揃時/2回以内
			パダンSG水溶剤 注8)	1,500倍	散布	収穫7日前まで/2回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	2,000倍	散布	収穫14日前まで/2回以内
豆類(未成熟)	スピノシン系	5	ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
さやいんげん	IGR系	15	アタブロン乳剤 注6)	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内

注1 使用時期は使用できる時期及び収穫前日数、使用回数は本剤の総使用回数の制限を示す。

注2 400株当りの使用薬量 25ml、希釈水量 10～20L(1株当たり25～50ml) 灌注。ただし、ししとうは希釈水量 10L(1株当たり25ml) 灌注。

注3 コテツフロアブルは、きゅうり、なすの幼苗への散布は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

また、ピーマンでは、品種により葉に褐点などの薬害を生じることがあるので注意する。

注4 ベネビアODはTPN剤、ストロビルリン系、銅剤との混用を行わない(薬害)。展着剤を加用しない(薬害)。

注5 アタブロン乳剤は、メロンの摘心前(特に低温期)の散布は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

注6 アタブロン、カスケード、デミリンはIGR剤使用上の注意事項参照(P15)。

注7 モベントフロアブルは、最高分げつ期から出穂開花期の稲にかかると不稔などの薬害を生じる場合があるので注意する。

注8 パダンSG水溶剤は、ほうれんそうの高温時の散布は薬害を生じる恐れがあるので避ける。

注9 モスピラン、アドマイヤーは県内で効果が低下しているのを削除した。

注10 合成ピレスロイド剤のアグロスリン、アーデントは県内で効果が低下しているのを削除した。



**(5) トマト黄化葉巻病の防除方法**

トマト黄化葉巻病は、トマト黄化葉巻ウイルス(*Tomato yellow leaf curl virus*:TYLCV)の感染によって発病するウイルス病であり、タバココナジラミバイオタイプQおよびバイオタイプBが病原ウイルスを媒介する。両者のウイルス媒介能力に差はないとされている。また、媒介虫は多くの寄主植物を持ち、一旦保毒虫となると高い感染力で発病株や発病圃場を急速に拡大させる。

TYLCVは長崎・高知株と呼ばれるイスラエル系統と愛知・静岡株と呼ばれるマイルド系統に分類される。県内では最初、イスラエル系統が発生していたが、その後マイルド系統も確認されている。また、作型、感染時期、品種によって発病のタイミングや症状等が異なり、病徴でのウイルス系統判別は困難であり、マイルド系統であっても被害は大きい。

防除は、発病株の早期の抜き取りと媒介虫であるタバココナジラミバイオタイプQおよびバイオタイプB(以下、タバココナジラミとする)の対策が中心となる。

**1 発生生態**

抑制栽培や促成栽培で多くの発生を認めるが、県内でも従来は未確認であった夏秋栽培の発生を確認した。ハウス栽培での発病は早い場合7~8月の育苗中からみられ、定植後の生育期(9~11月)に発生が急増する。また、12~3月の低温期には停滞するが、4月以降の気温上昇とともに発生は再び増加する。

**2 トマトへの感染から発病までの期間**

TYLCVは日々の管理作業や摘葉・収穫・吊り下げなどでは伝染しない。感染は保毒タバココナジラミのみによっておこり、感染植物を1日吸汁すると6~8割が感染することが報告されている(最短15分の吸汁で保毒)。

トマト生育ステージ	条件	発病日数	備考
育苗~生育初期	夏季(25℃前後)	7~14日	低温期は14日以上
生育中後期	低温期	30~60日	数ヶ月以上の事例有

**3 感染植物**

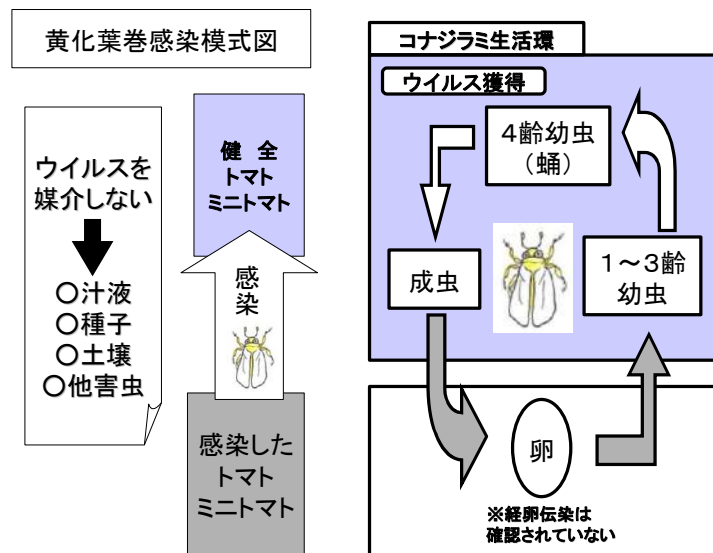
自然感染で症状が確認されている植物は、トマト、ミニトマト、トルコギキョウである。また、自然感染しても症状が出ない植物や接種試験により感染が確認された植物もある。主要な感染ルートはトマト(ミニトマト)からトマト(ミニトマト)への感染によるものと考えられるが、その他の感染植物からの感染にも注意が必要である。

感染植物と種類

感染状況	植物名
自然感染して症状を現す	トマト、ミニトマト、トルコギキョウ
自然感染するが無病徴	ピーマン、センナリホオズキ、タカサブロウ、ノボロギク、ノゲシ、エノキグサ、ハコベ、ウシハコベ、ホソバツルノゲイトウなど
接種により感染・発病	タバコ、ペチュニア、インゲンマメ、チョウセンアサガオなど

**4 伝染方法および伝染経路**

伝染は、タバココナジラミがTYLCVに感染したトマト(ミニトマト)を吸汁してウイルスを獲得し、健全なトマト(ミニトマト)を吸汁することで起こる。実際、自然感染するトマト(ミニトマト)からのウイルス検出頻度が高く、トマトからトマトへの伝染が重要な伝染経路となっている。なお、汁液伝染、土壌伝染、種子伝染はせず、媒介虫の経卵伝染は確認されていない。



**5 防除対策**

**(1) 罹病株の早期発見・早期抜き取り**

- 罹病株は速やかに抜き取り、肥料袋やビニール袋などに入れ密閉し、完全に枯死させる。

**(2) 施設周辺環境の整備**

- 既発生圃場(地域)では、作付終了後や栽培開始前など施設内外の除草を徹底する。
- 圃場・施設内に果菜類(メロン・キュウリ・ナスなど)や花卉類などのタバココナジラミが寄生しやすい植物を持ち込まない。

**(3) 収穫終了後の管理**

- 収穫終了後には株元を切断および抜根し、40℃以上で7~10日以上施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。蒸し込み時の注意として、コナジラミ類はわずかな隙間からも逃げ出すので、密閉は夕方に行なう等の工夫をする。

**(4) 残渣処理**

- 残渣は適切に処理し、野良生えトマトやコナジラミ類の発生源を断つ。

**(5) 物理的防除**

- ・育苗圃場や本圃ともに1mm目合い以下(0.4mm目合い以下が望ましい)のネットを開口部全てに設置する(サイド、谷部、妻面、天窓、出入口など)。
- ・施設には近紫外線除去フィルムを利用する。(但し、同一施設でミツバチを利用する作物やナスを栽培する場合は不可)
- ・施設周辺に反射率の高い光反射マルチ(幅1.5m程度)を設置する。
- ・育苗圃、本圃ともに黄色粘着板を設置し、コナジラミ類のモニタリングを行なう。
- ・施設外周部に帯状の黄色粘着テープを設置する。

**(6) 化学的防除**

- ・定植時または育苗期後半に殺虫剤を処理する。特に、育苗期や育苗期後半の薬剤処理は感染抑制効果が期待できる。
- ・ピリプロキシフェンテープ剤(ラノーテープ)を設置して、コナジラミ類の密度抑制を図る。(但し、タバココナジラミには効果が低い)
- ・薬剤は、ネオニコチノイド系薬剤、ピラゾール系薬剤、IBR剤、IGR剤等をローテーション散布する。感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

**(7) 抵抗性品種の利用**

- ・イスラエル系統とマイルド系統の両方に抵抗性を示す抵抗性品種には、①高温時に発病の可能性のある品種、②高温時にイスラエル系統に抵抗性を示すがマイルド系統には抵抗性を示さない品種の2種類がある。
- ・これらの品種では、病徴が現れていなくても、作物体にウイルスが存在している場合もあり、新たな感染源となる恐れがある。
- ・抵抗性品種の利用においても、総合的な防除対策を講じておく必要がある。

○タバココナジラミ類について

**タバココナジラミ パイオタイプB(旧名:シルバーリーフコナジラミ)**

平成元年より全国各地のポインセチアで多発生し、その後九州や関東、東海地方のメロン・トマト・きゅうりなどで発生が見られ、特にトマトにおいて、果実に着色異常を発生させ問題になった。県内では平成4年に発生を確認した。(特殊報発表)。

**タバココナジラミ パイオタイプQ**

平成17年に宮崎県において初めて報告され、県内では平成18年に確認された(病害虫発生予察特殊報発表)。  
 両種の外観形態上の区別は困難で、肉眼で判別することは不可能である。また、両種ともTYLCVを媒介し、多発生すると成幼虫の吸汁によって生育は阻害され、更に排泄物によるすす病が発生するなど二次被害を生じる。  
 成虫の体長は約0.8mm、幅約0.4mm、翅は白く体色は淡黄色。蛹は黄色で扁平で中央部に向かって盛り上がりが見られる。  
 ライフサイクル(卵→成虫)は25℃で約25日、産卵数は約60個、成虫の寿命は約18日で、低温条件ではもう少し長くなる。  
 野外では4～11月にかけて発生し、特に8～10月に密度の上昇がみられるが、越冬できない。

コナジラミ類の生態について

	コナジラミの種類		
	オンシツコナジラミ <i>Trialeurodes vaporariorum</i>	TYLCV媒介虫	
		タバココナジラミ パイオタイプB <i>Bemisia Tabaci</i> B-biotype	タバココナジラミ パイオタイプQ <i>Bemisia Tabaci</i> Q-biotype
卵	8日	7.5日	
幼虫	1齢(6日)、2齢(2日)、3齢(3日)、4齢(4日)	1齢(2.8～3日)、2齢(2～2.4日)、3齢(1.9～3日)	
蛹	5日	4.7日 → 産卵前3.5日	
卵→成虫	28日	22.5～24日	
寿命	成虫は15～25℃で50日以上。30℃以上では短くなり、40℃以上では生存できない。		
産卵	18～27℃で一定。それ以外の高・低温では減少。		
寄主植物	キク科雑草など 500種以上	トマト、なす、メロン、きゅうり、 かぼちゃ、キャベツ、ポインセチア、 キク等 13科23種	トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、 パプリカ、ししとう、キュウリ、メロン、 茎ブロッコリー、アスパラガス、シソ、 サツマイモ、ブバルディア、ポインセチア 8科14種
特性	①集中する習性が高い。 ②幼虫は移動できない。 ③温度に発育は依存する。 ④作物の状態に左右される。 ⑤色彩反応 ⑥羽化時間 ⑦活動状況 ⑧飛翔活動		
薬剤抵抗	特に抵抗性の指摘はないが、薬剤感受性の低下している個体群も見受けられる。	オンシツコナジラミより感受性が低下している薬剤が指摘されている。	感受性の低下が確認されている。ジノテフラン、ニテンピラム、ピリダベンなどが有効である。

## (6) 防虫ネットによる害虫の防除法

施設の開口部にネットを展開し、害虫の侵入を防止する方法で、野菜等の施設栽培における環境保全型の防除手段として効果の高い方法である。防除対象の害虫の大きさ、施設内温度の上昇等を考慮しながら、防虫ネットの選定を行う必要がある。

### 1 展帳方法

- ① 側窓部等の開口部に、バッカー等の留め具を用いて、隙間のないようにしっかりと固定する。
- ② 施設出入口は人の出入りに伴い害虫が侵入しやすいので、資材を二重にしたり、合わせ目を留めたりなどの処理を行う。
- ③ 天窓部や換気扇の吸入口からも害虫が侵入する恐れがあり、十分な侵入防止効果を望む場合はこれらの部位にも展帳を行う。

### 2 防虫ネットの選定

防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	コナジラミ類	ハモグリバエ類	アザミウマ類	アブラムシ類	キスジノミハムシ	ヨトウムシ類	コナガ
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	× ▲	○	○	○	○
0.8mm	×	△	× ▲	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注) 侵入防止効果 ○：90%以上、△：70%以上、×：50%以下 ▲赤色ネット(0.6mm、0.8mm)使用時の効果(アザミウマ類で有効)

- ① 目合いを細かくするほど害虫の侵入防止効果は高まるが、施設内の通気が悪くなり、気温が上昇しやすい欠点がある。栽培する作物の種類や時期によって、高温限界を考慮して目合いの選定を行う必要がある。
- ② 周辺部の害虫密度により実用的な効果が左右されるため、その点も考慮して目合いを選定する。
- ③ ハスモンヨトウ等では、ネット上に産卵して、ふ化幼虫が施設内に侵入する場合があります、目合いの細かいネットでも発生が見られる場合があるので、注意する。
- ④ 施設の構造面からは、屋根は高いほうが、また強制換気を行うほうが温度が上がりにくい。
- ⑤ 同じ目合いでも繊維の細い資材のほうが通気性は優れるが、耐久性やコスト面も考慮して選定する。

### 3 その他

きゅうり、トマト等の近紫外線除去フィルムが使用できる作物では、併用することにより、害虫の侵入防止効果がさらに高まる。施設内に害虫の発生源となる不用な作物を残さないこと、できるだけ除草をすることで、害虫が増加しにくい環境を作ることも大切である。

## (7) いちご炭疽病の防除方法

いちご炭疽病の本県での発生は昭和48年の東予地域での確認が最初であったが、被害は軽微であったとの記録が残っている。その理由は、主流品種の「宝交早生」が抵抗性品種であったためである。しかし、昭和60～61年産より導入された品種「女峰」が本病に高い罹病性を示したことから被害が問題化した。本県では「女峰」の作付けが増加するにつれて被害が増加し、平成7～8年産より県内へ導入された「さちのか」でも著しい発生がみられ、続いて品種更新された「紅ほっぺ」、本県育成品種の「あまおとめ」も本病に対する罹病性が高く、被害は継続している。

栽培面から多発要因を探ると、小型ポットを利用した棚式育苗システム(高設育苗)は、使用培土が少量で軽量化されている分、培土が乾燥しやすいため、夏期高温時には1日に3～4回の頭上灌水が必要となる。このため、本病の発病適温と多湿条件が整い易く、被害が助長されている。

### 1 発生条件

本病の発病適温は25～30℃であり比較的高温条件で発生する。但し、接種試験を行うと20℃でも発病がみられ、発病の温度範囲は広い。伝染の主体は胞子で行われ、夏期高温時に雨が多いと発生が増加する。この理由は胞子が風のみでは飛散せず、水滴の飛散と共に周辺へ飛び散って行くためである。また、降雨に強い風を伴う場合には被害はより拡大される。

愛媛県内では、一般には7月から発病し始めるが、6月上旬に初発が見られる場合もある。但し、被害が増加するのは8月に入ってからであり、9月中・下旬のハウス定植時まで、育苗期間を通して被害が増加する。夏期高温時に降雨の多い年には発生・被害が助長される。その後、ハウス内に持ち込まれた保菌株が発病し、萎凋・枯死症状を生じ直接的減収要因となる(図1)。

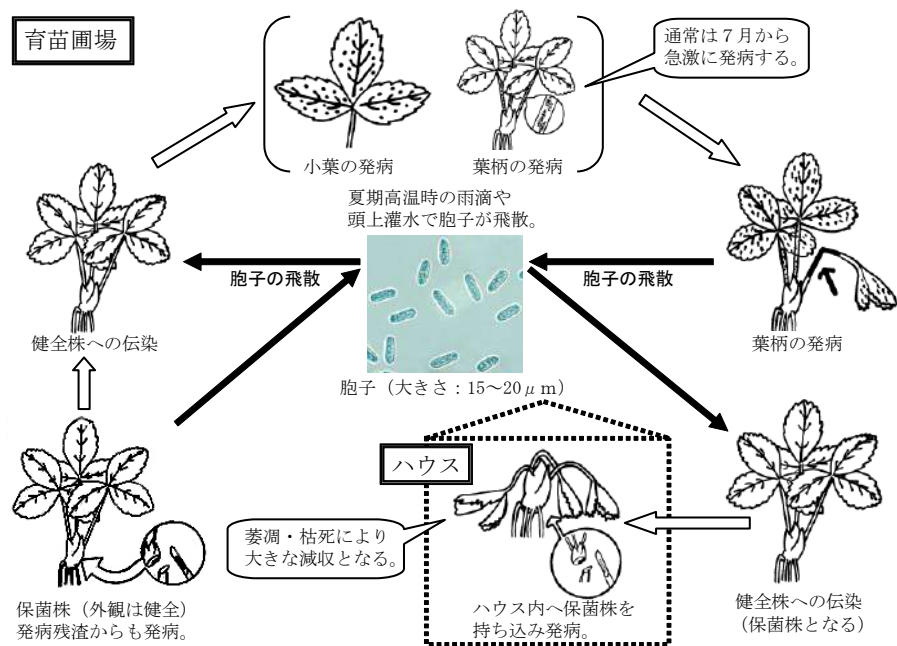


図1 いちご炭疽病の伝染と発病

### 2 発病の特徴

本病の第一次伝染源は托葉やクラウンが侵された保菌株による場合が多い。これは土中に残存した菌からの発病よりも比重が大きいと言える。従来、根からの感染・発病はないとされていたが、土中の発病残渣から根を通じた感染も新たに報告されている。

本病はランナーで発病しやすく、無仮植栽培では重要な発病部位であった。しかし、ポット栽培では、葉柄、小葉、クラウンで発病する。特に葉柄では黒い小斑点や黒色病斑、あるいは病勢進展により病斑から折れる被害が中心となる。葉柄の病斑上では多量の胞子が形成され、第二次伝染源となる。なお、高設パネル上で栽培株を確保するため、発生ランナー先端の子苗を生育させて鉢受けしているが、このランナーで著しく発病している事例が観察される。

飛散した胞子が小葉に感染すると、汚斑状の「染み」状斑点となる。接種試験によると窒素施用量に拘わらず小葉で安定的に発病した。このため、圃場内の発病モニタリングでは小葉の発病に注目するとよい。但し、小葉にも胞子形成を伴う大型の病斑（図2）が発生することがあり、加えて、葉の表側から裏側に病斑が突き抜ける赤色小斑が発生することもある。クラウン部が侵されると、ここが褐変し最終的に発病株は萎凋・枯死するが28℃以上の高温下で助長される。県内では育苗中に炭疽病以外に輪斑病、じゃのめ病、斑点細菌病が発生する。これらの病害に比べて炭疽病の被害は大きいので、症状を的確に見分ける必要がある（表1）。平成21年にはハウス内において本病による果実発病が確認された。症状は果実表面にくぼみを伴い黒変化していた（図3）。

表1 愛媛県内のいちごの育苗中に発生する主な病害の部位別の特徴

いちごの部位（発生の特徴）	炭疽病	輪斑病	じゃのめ病	斑点細菌病
小葉（複葉）	汚斑症状（薄墨色）、大型病斑、または赤色小斑も生じる。	病斑周辺は紫褐色で内部は灰褐色葉縁でクサビ型	病斑周辺は紫褐色で内部は灰白色	赤褐色～赤紫色の不整形円形
葉柄	黒色病斑	やや淡い黒色病斑	この部位での発病は本県では未確認。	
ランナー				
（発生の特徴）	クラウンを侵されると萎凋・枯死する。	葉柄の伸長病斑へは小葉や葉柄が枯れ込んだ後に移行する。	輪斑病と比較するとやや新しい葉位で発生する。	台風通過後に発生が多い（同時多発する）。



図2 いちご炭疽病の大型病斑（小葉で発生）



図3 いちご炭疽病の果実発病（ハウス内）

### 3 防除対策

本病の胞子飛散を防ぐため、障壁による防除、雨滴等の水しぶきによる伝染を防ぐための雨よけ栽培、底面給水、マルチ下チューブ灌水等の耕腫の防除法が考案されている。特に、雨よけと底面・株元給水を組み合わせた防除効果は高いので本システムを積極的に導入する。但し、雨よけ栽培下であっても発病がみられるため、発病株の早期除去、定期的な薬剤防除は怠らないようにする。

#### 1) 無病親株の確保

自家採苗を行う場合には、無病圃場から親株を選ぶ。発病圃場では外観が健全に見えても保菌している株が多い。このような圃場からの親株の採取を避ける。

#### 2) 発病株の除去

小葉、葉柄の発病株は、株ごと徹底的に除去する。理由は小葉、葉柄に局部病徴がみられる株は、クラウン部に本菌が感染している確率が高いためである。特に、葉柄の病斑部で折れた株や周辺株に多数の「斑点」症状が見られる場合は、二次伝染が起こっている結果である。このため、発病株の早急な除去が重要となる。

ハウス内では保菌株の持ち込みにより萎凋を生じるが、発病株が完全枯死しない段階でハウス外に持ち出し健全株を補植する。

#### 3) 多湿の回避

高設栽培で、培土の少ないポットを使う場合には、根の目詰まりに注意する。この状態は、根腐れを起こすだけでなく本病の助長要因になる。また、下位葉・古葉の除去を徹底する。

#### 4) 耕種の防除

本病は多窒素で発病が助長されることが実験的に証明されている。このため、追肥量に注意し、多窒素による過繁茂を避ける。特にポット育苗では、粒状肥料が施用されるので、草勢をみながら追肥を行う。

イチゴ炭疽病菌はイヌビユ、セイタカアワダチソウ、メヒシバ、ノゲン等に無病徴感染し、除草剤等で枯死した後に分生子を形成する。このため、特に前作で炭疽病が発生した圃場では除草を徹底するとともに、雑草残渣を圃場外に持ち出すか適切に処分する。

#### 5) 薬剤防除

本病は、育苗期の定期的な防除でいちごに本菌が感染する前の予防的対応が望まれる。薬剤は表2を参照し、同一系統剤の連用を避ける。なお、治療効果が期待できるゲッター水和剤は予防剤として使用するのは不適である。本剤は発病後の胞子が飛散した以降に使用する。ペンレート水和剤、アミスター20フロアブルは、耐性菌の発生、効果不足から防除効果が期待できないため使用しない。

表2 いちご炭疽病の防除薬剤の特徴

使用時期	薬剤名	希釈倍数 (倍)	期待できる薬剤の効果	
			予防効果	治療効果
仮植栽培期	ジマンダイセン水和剤	600	○	
	ベンコゼブ水和剤	600	○	
	アントラコール顆粒水和剤	500	○	
育苗期	デランフロアブル	1000	○	
	ベルコート水和剤	1000	○	
	ベルコートフロアブル	1000	○	
収穫開始21日前まで	ゲッター水和剤	1000		○
収穫30日前まで	オーソサイド水和剤80	800	○	
収穫前日まで	セイビアーフロアブル20	1000	○	
	ファンベル顆粒水和剤	1000	○	

## (8) いちご萎黄病の防除方法

いちご萎黄病の我が国での初発生は1970年に確認され、愛媛県内では1972年度の県病害虫発生予察事業年報に県内の初発生が記録されている。当時のいちごでは、全国的に品種「宝交早生」が栽培され、本病に対する罹病性が高いことから、発生が著しく、現在も本県育成品種の「あまおとめ」を中心に被害が継続している。

### 1 発生条件

発病最適温度は30℃前後と比較的高温条件を好み、夏場に高温乾燥が続くと育苗圃場での発生が助長される。なお、20℃前後でも発病がみられるため、発病する温度範囲は広く、本圃での発生も著しい。よって、愛媛県内では6～8月の育苗期、本圃では定植後11月頃まで発生がみられた後、12～2月の冬季の低温で病勢は停滞するものの、3～4月頃の春先に気温が上がってくると再び増加する。また、土壌pHが低いほど発病が著しくなる。

本病の伝染方法には、土壌中に存在する耐久体の孢子（厚膜孢子）による土壌伝染があり、土壌中の病原菌の分布は地表から約20cm深に多いとされている。厚膜孢子は数年以上にわたって土壌中に長期間生存し、近くにいちごが植え付けられると孢子が萌芽伸長し、根から侵入することで感染が成立する。また、罹病親株からランナーを経由して子株へ感染する種苗伝染もみられる。接種試験によると、接種から30～40日経過すると罹病した親株から第1子株へ萎黄病菌が伝染し、時間が経過することで第2子株へと伝染する。以上の伝染方法以外では、発病残渣を含む汚染土壌が風雨によって飛散することによる周辺への伝播や、使用した育苗ポットや吸水マット等の育苗資材に付着した発病残渣中の病原菌が来季の苗に感染する等、多様な伝染方法がある（図1）。

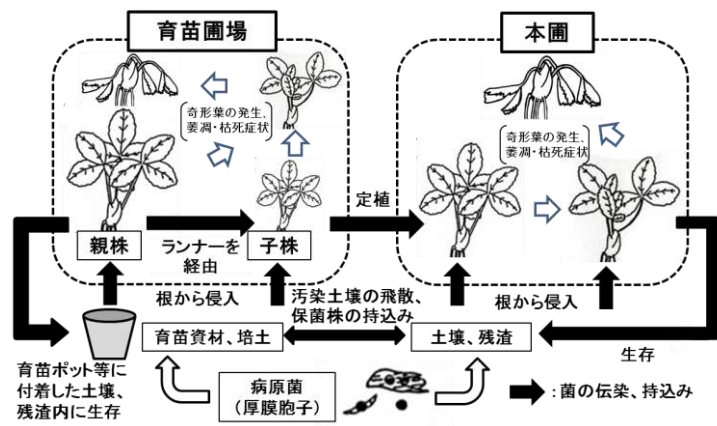


図1 いちご萎黄病の伝染と発病

### 2 発病の特徴

本病の典型的な病徴は、新葉の3枚の小葉の内、黄色味を帯びた1～2枚の小葉がねじれたように奇形・小型化しながら出葉し、クラウン部の導管部分が褐変する。本病は、やがて株全体が萎凋・枯死するが、愛媛県内においては株の枯死につながる病害では炭疽病、疫病が発生している。この2病害が示す病徴の類似性は高いが、萎黄病との区別は容易である（表1）。萎黄病菌は感染してから1か月程度の潜伏期間があるため、健全株と潜在感染株（保菌株）の識別は困難である。

表1 いちご萎黄病、炭疽病、疫病の株全体の特徴

発生の特徴	萎黄病	炭疽病	疫病
初期症状	小葉の一部が黄色味を帯び、ねじれたように奇形・小型化しながら出葉する。次に出葉する新葉も同様の症状となる。	わずかな萎凋（小葉の葉脈が赤変化する）ことがある。局部病斑の併発により、小葉や葉柄が黒変化する。	わずかな萎凋。
後期症状	株全体が萎凋・枯死する。小葉の奇形は残存する。	株全体が萎凋・枯死する。	株全体が萎凋・枯死する。
クラウン部の断面	導管の一部、または全体が褐色～黒褐色になる。	クラウン基部の外側から中心へ向けて褐変し、導管以外も変色する。	クラウン基部の外側から中心へ向けて褐変し、導管以外も変色する。

### 3 防除対策

本病は多様な伝染源が存在するため、以下の防除対策を組み合わせ、親株をはじめ、本圃に定植する苗の感染リスクをできる限り小さくすることが重要である。以下が、主な防除対策となる。

#### 1) 無病親株の確保

育苗に用いる元親株は毎年更新し、自家採苗を行う場合には無病圃場から親株を選ぶ。発病圃場では外観が健全に見えても保菌している場合があるため、このような圃場からの親株の採取を避ける。

#### 2) 発病株・残渣・汚染土壌の除去

発病が確認された場合は速やかに株ごと除去する。残渣や汚染土壌には病原菌が存在し、風雨により伝播する恐れがあるため、可能な限り圃場外に持ち出し適切に処分する。

#### 3) 育苗資材の洗浄・消毒

育苗に用いるポット、育苗箱、吸水マット等の資材は、使用前に水道水で水洗して土壌の付着を落とした後、ケミクロンG、イチパン乳剤等の資材消毒剤で消毒する。土壌の付着があると資材消毒を行っても防除効果は低下する。育苗用の培土は新しいものか、蒸気消毒等により加熱処理したものを使用する。

#### 4) 空中採苗・子苗の早期切り離し

育苗時の土壌伝染を防ぐには高架設備等で空中採苗し、地面に触れさせないことが有効である。また、親株に保菌の疑いがある場合でも第2複葉展開期までにランナーを切り離して採苗すれば子苗への伝染を防止できる。第2複葉展開期での採苗が困難な場合でも、できるだけ早期に、ランナー先端に近い子苗を切り離して採苗することで感染リスクを小さくできる。

#### 5) 土壌消毒、灌水

本圃で連作する場合には必ず土壌消毒を行う（野菜の土壌病害虫防除の項参照：p. 295～）。クラウン内部の病原菌の殺菌は困難なため、消毒前に残渣は丁寧に除去する。太陽熱利用による土壌消毒、土壌還元消毒、熱水利用による土壌消毒も有効である（各消毒法の項参照：p. 299～300）

#### 6) 薬剤防除

本病の防除対策として表2の薬剤が使用できる。但し、薬剤効果は予防的であるため、必ず土壌消毒等の他の防除対策と組み合わせる。

表2 いちご萎黄病の防除薬剤の特徴

使用時期	薬剤名	希釈倍数 (倍)	使用方法	使用回数	期待できる薬剤の効果	
					予防効果	治療効果
仮植時及び仮植栽培期	トップジンM水和剤	300～500	3ℓ/㎡灌注	3回以内	○	
育苗期	ベンレート水和剤	500	50～100ml/株灌注	3回以内	○	
本圃定植後 (但し収穫30日前まで)			100ml/株灌注	1回	○	

## (9)くん煙剤の使用法

### ①殺菌剤

作物名	農薬名	使用時期/本剤の使用回数	適用病害虫	ハウスの高さ2mの場合の使用量	使用器具
きゅうり	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	灰色かび病、菌核病	100g/150～200㎡	
	モレスタン水和剤	収穫前日まで/3回以内	うどんこ病	20g/50㎡	蒸散器
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	パンチョTFジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	シーマージェット	収穫前日まで/1回	うどんこ病	75g/200㎡	
	フルピカくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	うどんこ病、灰色かび病	50g/250㎡	
	硫黄粒剤	-/-	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
すいか	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病	100g/150～200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	硫黄粒剤	-/-	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
メロン	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病、つる枯病	100g/150～200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	パンチョTFジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	硫黄粒剤	-/-	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
トマト	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/3回以内	灰色かび病、菌核病	100g/150～200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	葉かび病	50g/200㎡	
	パンチョTFジェット	収穫前日/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
ミニトマト	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/3回以内	灰色かび病、菌核病	100g/150～200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	葉かび病	50g/200㎡	
なす	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	灰色かび病、菌核病	100g/150～200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病、すすかび病	50g/200㎡	
	シーマージェット	収穫前日まで/1回	うどんこ病	75g/200㎡	
いちご	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	灰色かび病	100g/150～200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	パンチョTFジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	シーマージェット	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	75g/200㎡	
	フルピカくん煙剤	収穫前日まで/3回以内	うどんこ病、灰色かび病	50g/250㎡	
	硫黄粒剤	-/-	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
さやえんどう	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
実えんどう	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
甘長とうがらし	ロブラールくん煙剤※	収穫前日まで/2回以内	灰色かび病、菌核病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤※	-/-	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器

(注)使用にあたっては、各薬剤に記載されている使用方法、注意事項を遵守すること。

※パンチョTFジェットはトリフミンジェットの成分(トリフルミゾール)の混合剤であるので、総使用回数に注意すること。

※甘長とうがらしのロブラールくん煙剤、硫黄粒剤はとうがらし類で登録。

### ②殺虫剤

作物名	農薬名	使用時期/本剤の使用回数	適用病害虫	ハウスの高さ2mの場合の使用量	使用器具
きゅうり	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、コナジラミ類、ミナミキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	50g/200㎡	
	シーマージェット	収穫前日まで/1回	アブラムシ類、ハダニ類	75g/200㎡	
すいか	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	50g/200㎡	
メロン	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、アザミウマ類	50g/200㎡	
	マブリックジェット※	収穫3日前まで/2回以内	ハダニ類	50g/200㎡	
トマト	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	ミカンキイロアザミウマ、コナジラミ類	50g/200㎡	
ミニトマト	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	ミカンキイロアザミウマ、コナジラミ類	50g/200㎡	
なす	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	50g/200㎡	
	シーマージェット	収穫前日まで/1回	アブラムシ類、ハダニ類	75g/200㎡	

作物名	農薬名	使用時期/本剤の使用回数	適用病害虫	ハウスの高さ2mの場合の使用量	使用器具
いちご	モスピランジェット	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、アザミウマ類	50g/200㎡	
	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	20g/200㎡	
	シーマージェット	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	75g/200㎡	

(注)使用にあたっては、各薬剤に記載されている注意事項を遵守すること。

薬剤抵抗性が発達するおそれがあるので、防除効果を検討しながら薬剤の選択を行うこと。

※マブリックジェットは、合成ピレスロイド剤使用上の注意(P15)を参照のこと。

## (10) 野菜用銅剤及び混合剤の使用法

※有機銅(8-ヒドロキシキノリン銅)およびその混合剤は、有機銅の総使用回数に注意すること(各薬剤のラベル参照)。

※クブラビットホルテ、コサイドDF、コサイドボルドー、サンボルドー、撒粉ボルドー粉剤DLは県内流通がないため削除した。

※きゅうりのキノンドー水和剤40、キンセット水和剤は、使用時期が1番花の開花前までとなっており、誤使用防止のため削除した。

※カスミンボルドー、銅シン水和剤、ドーマイシン水和剤、銅ストマイ水和剤、フェスティバルC、ナレート水和剤は各作物の本文中に記載した。

### [1] 野菜類

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	褐斑細菌病、黒腐病、軟腐病、斑点細菌病、べと病、黒斑細菌病	-/-
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	100倍	軟腐病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500~1,000倍	軟腐病、べと病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500~1,000倍	軟腐病、べと病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	2,000倍	褐斑細菌病、黒腐病、軟腐病、斑点細菌病	-/-
クリーンカップ	水酸化第二銅・パチルスズブチリス	1,000~2,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/-
		1,000倍	灰色かび病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	750~1,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/-
		1,000倍	白さび病、軟腐病	
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000~1,500倍	軟腐病	-/-
		1,000~2,000倍	べと病、斑点細菌病	
		1,000倍	ナメクジ類	

### [2] きゅうり

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	500倍	斑点細菌病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	斑点細菌病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	斑点細菌病	-/-
クリーンカップ	水酸化第二銅・パチルスズブチリス	1,000倍	べと病、褐斑病	収穫前日まで/-
		2,000倍	斑点細菌病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	750~1,500倍	斑点細菌病	収穫前日まで/-
		1000倍	灰色かび病	
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,200倍	べと病、炭疽病	収穫前日まで/5回以内
		1,200~1,500倍	斑点細菌病	
ドクリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	斑点細菌病	収穫前日まで/5回以内
		1,000~1,500倍	炭疽病、べと病	
シトラノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・TPN	1,000~1,200倍	斑点細菌病、褐斑病、べと病	収穫前日まで/5回以内
サンヨール	DBEDC	500倍	べと病、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内

### [3] かぼちゃ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	果実斑点細菌病、軟腐細菌病	-/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	べと病、炭疽病	収穫7日前まで/3回以内
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病	収穫前日まで/4回以内

### [4] すいか

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	50倍	つる枯病、炭疽病	-/-
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500~800倍	疫病	-/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	べと病、炭疽病	収穫10日前まで/5回以内
		800倍	果実汚斑細菌	
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	炭疽病、果実汚斑細菌病	収穫前日まで/5回以内
ドクリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	果実汚斑細菌病	収穫前日まで/5回以内
		500~1,000倍	つる枯病、炭疽病	
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内

[5] メロン

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500~1,000倍	斑点細菌病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500~1,000倍	斑点細菌病	-/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	べと病、炭疽病	収穫10日前まで/5回以内
		600~800倍	斑点細菌病	
		800倍	果実汚斑細菌病	
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	斑点細菌病	収穫10日前まで/5回以内
ドクリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	果実汚斑細菌病	収穫10日前まで/5回以内
		500~1,000倍	つる枯病	
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内

[6] トマト

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	400~600倍	疫病、輪紋病	-/-
		500倍	すすかび病	
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	500倍	疫病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	疫病	-/-
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチルスズブチリス	1,000倍	疫病、すすかび病	収穫前日まで/-
		1,000~2,000倍	葉かび病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	800倍	すすかび病、葉かび病	収穫前日まで/-
サンヨール	DBEDC	500倍	葉かび病、灰色かび病、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内
		500~700倍	うどんこ病	収穫前日まで/4回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	葉かび病、すすかび病	-/-
		1,000~2,000倍	疫病	-/-
園芸ボルドー	硫黄・塩基性塩化銅混合剤	400~800倍	疫病	-/-
		800倍	うどんこ病	-/-
		500倍	葉かび病、すすかび病、トマトサビダニ	-/-

[7] ミニトマト

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	400~600倍	疫病、輪紋病	-/-
		500倍	すすかび病	
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	500倍	疫病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	疫病	-/-
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチルスズブチリス	1,000倍	疫病、すすかび病	収穫前日まで/-
		1,000~2,000倍	葉かび病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	800倍	すすかび病、葉かび病	収穫前日まで/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	-/-
サンヨール	DBEDC	500倍	葉かび病、灰色かび病、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内
		500~700倍	うどんこ病	収穫前日まで/4回以内
園芸ボルドー	硫黄・塩基性塩化銅混合剤	400~800倍	疫病	-/-
		800倍	うどんこ病	-/-
		500倍	葉かび病、すすかび病、トマトサビダニ	-/-
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000~2,000倍	疫病	-/-
		1,000倍	葉かび病、すすかび病	-/-

[8] なす

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	すすかび病	-/-
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000~2,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/-
サンヨール	DBEDC	700倍	うどんこ病、すすかび病	収穫前日まで/4回以内



[9] ピーマン

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病、アブラムシ類	収穫前日まで/4回以内

[10] 甘長とうがらし

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病、アブラムシ類	収穫前日まで/4回以内

[11] いちご

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	炭疽病、角斑細菌病	-/-
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	100倍	炭疽病	-/-
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	500~800倍 100倍(5ml/株) ク라운部散布	炭疽病	育苗期/3回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	500~800倍	炭疽病	育苗期/3回以内
サンヨール	DBEDC	500~1,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/6回以内
		500倍	灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類	
		瞬間~5分間苗浸漬 800倍	うどんこ病	定植前/1回
		5分間苗浸漬		

[12] だいこん

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	黒斑細菌病、白さび病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	白さび病	-/-
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500~700倍	軟腐病	収穫21日前まで/3回以内
キンセット水和剤80	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000~1,400倍	軟腐病	収穫21日前まで/3回以内

[13] キャベツ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	黒腐病、黒斑細菌病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	黒腐病、黒斑細菌病	-/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	500~800倍	黒腐病	収穫14日前まで/3回以内
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	黒腐病	収穫14日前まで/3回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	500~1,000倍	黒腐病	収穫14日前まで/3回以内
		800~1,000倍	軟腐病	
シトラーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・TPN	1,000~1,200倍	黒腐病、べと病	収穫14日前まで/2回以内
クプロシールド*	塩基性硫酸銅	1,000倍	黒腐病	-/-
		1,000~2,000倍	黒斑細菌病	-/-
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	黒腐病	-/-

※クプロシールドは結球期以降の散布で薬害を生じる恐れがあるので、結球初期までに散布する。

[14] ブロッコリー

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	花蕾腐敗病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	花蕾腐敗病	-/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	黒腐病、黒斑細菌病	収穫14日前まで/3回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000~2,000倍	黒斑細菌病、花蕾腐敗病	-/-
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	黒斑細菌病	-/-

[15] はくさい

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500~700倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
キノンドー水和剤80	8-ヒドロキシキノリン銅	1,200倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
シトラーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・TPN	1,000~1,200倍	軟腐病、べと病、白斑病	収穫30日前まで/2回以内
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	-/-
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	-/-
クプロシールド*	塩基性硫酸銅	1,000~2,000倍	黒腐病、黒斑細菌病	-/-

※クプロシールドは結球期以降の散布で薬害を生じる恐れがあるので、結球初期までに散布する。

[16] ほうれんそう

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	べと病、白斑病	-/-

[17] レタス

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500~800倍	腐敗病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500~1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500~1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	-/-
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500~700倍	軟腐病	収穫21日前まで/5回以内
キンセット水和剤80	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000~1,500倍	軟腐病	収穫21日前まで/5回以内
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	腐敗病	収穫前日まで/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	600倍	斑点細菌病、軟腐病、べと病	収穫21日前まで/5回以内
		600~800倍	腐敗病	
キノンドー水和剤80	8-ヒドロキシキノリン銅	1,200~1,600倍	腐敗病	収穫21日前まで/5回以内
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	軟腐病、斑点細菌病、腐敗病	収穫21日前まで/5回以内
ドクリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	軟腐病	収穫21日前まで/5回以内
		800倍	腐敗病	
シトラーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・TPN	1,000~1,200倍	すそ枯病、腐敗病、べと病	収穫21日前まで/3回以内
		1,000倍	軟腐病	
ロブドー水和剤	イプロジオン・8-ヒドロキシキノリン銅	500倍	菌核病、斑点細菌病、腐敗病、軟腐病	収穫21日前まで/3回以内
フジドールLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	-/-

[18] 非結球レタス

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500~800倍	腐敗病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500~1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500~1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	-/-
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	腐敗病	収穫前日まで/-
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	軟腐病、斑点細菌病、腐敗病	収穫30日前まで/5回以内
ドクリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800~1,000倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
		800倍	腐敗病	
フジドールLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	-/-

[19] たまねぎ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	白色疫病	-/-
ドイツボルドーDF	塩基性塩化銅	1,000倍	軟腐病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	白色疫病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000~2,000倍	軟腐病	-
		1,000倍	りん片腐敗病	
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500~700倍	軟腐病	収穫14日前まで/3回以内
キンセット水和剤80	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000~1,400倍	軟腐病	収穫14日前まで/3回以内
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	600倍	軟腐病	収穫14日前まで/3回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	りん片腐敗病	-/-

[20] にんじん

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	50~100倍	黒葉枯病	-/-
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500~800倍	黒葉枯病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	500~1,000倍	黒葉枯病	-/-
クリーンカップ	水酸化第二銅・パチリス・ズブチリス	1,000倍	黒葉枯病	収穫前日まで/-
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	600~800倍	黒葉枯病	収穫3日前まで/5回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	黒葉枯病	-/-
クミガードSC	水酸化第二銅	500倍	黒葉枯病	-/-

[21] えだまめ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーDF	塩基性塩化銅	500倍	斑点細菌病	-/-

[22] さやえんどう

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	1,000倍	先端黄白化症	-/-
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病、灰色かび病	収穫前日まで/4回以内

[23] 実えんどう

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	1,000倍	先端黄白化症	-/-
サンヨール	DBEDC	500倍	うどんこ病、灰色かび病	収穫前日まで/4回以内

[24] さやいんげん

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーDF	塩基性塩化銅	500倍	かさ枯病	-/-

[25] アスパラガス

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	茎枯病、斑点病	-/-
ドイツボルドー	塩基性塩化銅	500倍	茎枯病	収穫後/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	茎枯病	収穫後/-
コサイド3000	水酸化第二銅	2,000倍	茎枯病、斑点病、褐斑病	-/-
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	600~800倍	茎枯病、べと病	収穫3日前まで/5回以内
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・TPN	1,000~1,200倍	茎枯病、斑点病、褐斑病	収穫3日前まで/4回以内
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	500倍	茎枯病	-/-
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	茎枯病、斑点病	-/-

[26] しそ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍 株元散布	斑点病	収穫前日まで/4回以内

[27] さといも

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	疫病	収穫前日まで/-

[28] ばれいしょ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	400倍	疫病	-/-
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	50倍	疫病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	400~800倍	疫病	-/-
ドイツボルドーDF	塩基性塩化銅	500~1,000倍	疫病、軟腐病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	400~800倍	疫病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	1,000倍	疫病、軟腐病	-/-
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500~700倍	軟腐病	収穫14日前まで/5回以内
キンセット水和剤80	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000~1,400倍	軟腐病	収穫14日前まで/5回以内
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	疫病	収穫前日まで/-
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	軟腐病	-/-
		1,000~2,000倍	疫病	

[29] かんしょ

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	斑点病、基腐病	-/-
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	500倍	斑点病	-/-
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	斑点病	-/-
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	基腐病	収穫前日まで/-

[30] やまのいも

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Zボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	炭疽病、葉渋病	-/-
コサイド3000	水酸化第二銅	2,000倍	葉渋病	-/-
キノンドー水和剤40	8-ヒドロキシキノリン銅	600倍	葉渋病	収穫14日前まで/5回以内
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・TPN	1,000~1,200倍	炭疽病、葉渋病	収穫30日前まで/5回以内

(11) 野菜類ウイルス病の主な病原ウイルスとその性質

野菜名 (宿主名)	病原ウイルス (和名)	伝染方法				注意事項	
		(汁液)	(種子)	(虫媒)	(土壌)		
ナス科	トマト	ToMV (トマトモザイクウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		PVX (ジャガイモXウイルス)	+	-	-	-	手の洗浄、ばれいしょからの伝染防止
		PVY (ジャガイモYウイルス)	+	?	+	-	ばれいしょからの伝染防止
		TSWV (トマト黄化えそウイルス)	-	-	+	-	主にミカンキロアザミウマの寄生防止
		TbLCJV (タバコ巻葉ウイルス)	-	-	+	-	タバコナジラミ(スイカズラコナジラミ)の寄生防止
		TYLCV (トマト黄化葉巻ウイルス)	-	-	+	-	タバコナジラミ(バイオタイプB,Q)の寄生防止
		ToCV (トマトクロロシスウイルス)	-	-	+	-	タバコナジラミ(バイオタイプB,Q)、オンシツコナジラミの寄生防止
なす	ピーマン	TMV (タバコモザイクウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		ToMV (トマトモザイクウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		TMGMV (タバコマイルドグリーンモザイクウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		PaMMV (パプリカマイルドモットルウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		PMMoV (トウガラシマイルドモットルウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		BBWV (ソラマメウイルトウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		TSWV (トマト黄化えそウイルス)	-	-	+	-	主にミカンキロアザミウマの寄生防止
		TAV (トマトアスパーマーミウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	PVY (ジャガイモYウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
ばれいしょ	なす	ToMV (トマトモザイクウイルス)	++	+	-	+	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		BBWV (ソラマメウイルトウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	TSWV (トマト黄化えそウイルス)	+	-	+	-	主にミカンキロアザミウマの寄生防止	
	PLRV (ジャガイモ葉巻ウイルス)	-	+	+	-	アブラムシの寄生防止、種いも(塊茎)で伝染	
	PVX (ジャガイモXウイルス)	+	+	-	-	種いも(塊茎)で伝染	
	PVY (ジャガイモYウイルス)	+	+	+	-	アブラムシの寄生防止、種いも(塊茎)で伝染	
ウリ科	きゅうり	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		WMV (カボチャモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		ZYMV (ズッキーニ黄斑モザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		PRSV (パパイヤ輪点ウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		KGMV (キュウリ緑斑モザイクウイルス)	++	+	-	+	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		MYSV (メロン黄化えそウイルス)	-	-	+	-	ミナミキロアザミウマの寄生防止
		BPYV (ビートシュードイエロースウイルス)	-	-	+	-	オンシツコナジラミの寄生防止
		(CuYV: キュウリ黄化ウイルス)	-	-	+	-	
		CCYV (ウリ類退緑黄化ウイルス)	-	-	+	-	タバコナジラミ(バイオタイプB,Q)の寄生防止
		かぼちゃ	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-
	WMV (カボチャモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	CGMMV (スイカ緑斑モザイクウイルス)	++	+	-	+	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄	
すいか	WMV (カボチャモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	CGMMV (スイカ緑斑モザイクウイルス)	++	+	-	+	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄	
	MYSV (メロン黄化えそウイルス)	-	-	+	-	ミナミキロアザミウマの寄生防止	
	CCYV (ウリ類退緑黄化ウイルス)	-	-	+	-	タバコナジラミ(バイオタイプB,Q)の寄生防止	
メロン (マスクメロン)	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	WMV (カボチャモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	MNSV (メロンえそ斑点ウイルス)	+	+	-	+	土壌消毒	
						(下等菌類)	
	CGMMV (スイカ緑斑モザイクウイルス)	++	+	-	+	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄	
	ToRSV (トマト輪点ウイルス)	+	+	+	+	種子、土壌の消毒	
					(土壌ワジ)		
	MYSV (メロン黄化えそウイルス)	-	-	+	-	ミナミキロアザミウマの寄生防止	
	CCYV (ウリ類退緑黄化ウイルス)	-	-	+	-	タバコナジラミ(バイオタイプB,Q)の寄生防止	
しろり	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	WMV (カボチャモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
アブラナ科	だいこん	TuMV (カブモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	はくさい	TuMV (カブモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	ブロッコリー	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	キャベツ	CaMV (カリフラワーモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
カリフラワー	TuMV (カブモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	
	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止	

※汁液伝染の++は伝染力が強いことを示す。

野菜名 (宿主名)	病原ウイルス (和名)	伝染方法				注意事項	
		(汁液)	(種子)	(虫媒)	(土壌)		
キク科	レタス	LMV (レタスモザイクウイルス)	+	+	+	-	アブラムシの寄生防止、種子消毒
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		MiLV (ミラフィオリレタスウイルス)	-	-	-	+	レタスビッグベイン病の病原ウイルス、土壌消毒
		LBVaV (レタスビッグベイン随伴ウイルス)	-	-	-	+	土壌消毒
セリ科	セルリー	CMV (キュウリモザイクウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		CeMV (セルリーモザイクウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	みつば	CMV (キュウリモザイクウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		ZaMV (ミツバモザイクウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	にんじん	CeMV (セルリーモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
アカザ科	ほうれんそう	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		BBWV (ソラマメウイルトウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		BMV (ビートモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		TuMV (カブモザイクウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
マメ科	えんどうそらまめ	MDV (レンゲ萎縮ウイルス)	++	+	-	+	アブラムシの寄生防止
		BBWV2 (ソラマメウイルトウイルス2)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		BBNV (ソラマメえそモザイクウイルス)	+	-	+	-	連作を避ける。菌類による伝染?
		BYMV (インゲンマメ黄斑モザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		WMV (カボチャモザイクウイルス)	-	+	+	-	アブラムシの寄生防止
		LMV (レタスモザイクウイルス)	+	+	-	-	アブラムシの寄生防止 (えんどうで発生)
		CIYV (クローバ葉脈黄化ウイルス)	+	+	+	-	アブラムシの寄生防止
		CYV (クローバ萎黄ウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
	いんげん	BYMV (インゲンマメ黄斑モザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		BCMV (インゲンマメモザイクウイルス)	+	+	+	-	アブラムシの寄生防止
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		SDV (ダイズわい化ウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
ユリ科	ねぎたまねぎ	OYDV (タマネギ萎縮ウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		GLV (ニンニク潜在ウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止 (ねぎで発生)
		IYSV (アイリスイエロースポットウイルス)	-	-	+	-	ネギアザミウマの寄生防止
バラ科	いちご	SMoV (イチゴモットルウイルス)	+	+	+	-	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
		SCrV (イチゴクリンクルウイルス)	-	+	+	-	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
		SMYEV (イチゴマイルドイエローエッジウイルス)	-	+	+	-	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
		SVBV (イチゴベインバンディングウイルス)	-	+	+	-	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
サトイモ科	さといも	DsMV (サトイモモザイクウイルス)	+	+	+	-	種いも(塊茎)で伝染する
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	++	+	-	+	アブラムシの寄生防止
ヒルガオ科	かんしょ	SPFMV (サツマイモ斑紋モザイクウイルス)	+	+	+	-	種いも(塊根)で伝染する。帯状粗皮病を引き起こす系統(強毒系統)がある。
		SPV2 (Sweet Potato Virus 2)	?	?	+	?	アブラムシの寄生防止(2023年確認)
イネ科	トウモロコシ[未成熟トウモロコシ]	SuMV (サトウキビモザイクウイルス)	-	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
ヤマノイモ科	やまのいも	CYNMV (ヤマノイモえそモザイクウイルス)	+	+	+	-	アブラムシの寄生防止
		JYMV (ヤマノイモモザイクウイルス)	+	+	+	-	アブラムシの寄生防止
シショウガ科	しょうが	CMV (キュウリモザイクウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
シソ科	しそ	BBWV (ソラマメウイルトウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止
		PeMV (シソ斑紋ウイルス)	+	-	+	-	アブラムシの寄生防止

※汁液伝染の++は伝染力が強いことを示す。

● 種類別除草剤使用法

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
きゆうり	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培(移植栽培))定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (露地栽培(移植栽培))定植直後:畦間土壌散布 (露地栽培(直播栽培))は種直後:全面土壌散布	1回	200~250ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培(移植栽培)) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (露地栽培(直播栽培)) は種直後:全面土壌散布	1回	3~4kg	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植後(雑草発生前)(但し定植10日後まで) :畦間、株間土壌散布 定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	
すいか	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培) 定植キヤップ後(但し、収穫45日前まで):全面土壌散布	2回以内	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布	2回以内	2~4kg 4~5kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
メロン	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培(トンネル・マルチ栽培)) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培) 定植キヤップ後(但し、収穫45日前まで):全面土壌散布	2回以内	200~300ml (1000) 150~200ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布	2回以内	2~3kg 4~5kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
トマト	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4~5kg	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植活着後(雑草発生前)(但し定植10日後まで) :畦間、株間土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	センコル水和剤 (メトリブジン 50)	(露地栽培) :畦間株間散布 定植活着後~定植14日後まで(雑草発生前~2、3葉期)	1回	60~100g (1000)	(1)土壌の乾燥が続く場合には土壌 散布は効果が低下するので、雑草の 発生後に散布する。
ミニ トマト	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4~5kg	
なす	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	4~5kg	(2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前又は定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
ピーマン	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
いちご	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	(親株床、子苗床、本圃、施設栽培) 植付後又は定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) : 全面土壌散布又は株間土壌散布	2回以内	150~200ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し定植7日後まで): 株間土壌散布	1回	150~200ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
だいこん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	150~200ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後: 全面土壌散布	1回	150ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布 (直播栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
キャベツ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布 (直播栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植前又は定植後~定植翌日(雑草発生前) : 全面土壌散布	1回	4~5kg	
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	定植8日後まで: 全面土壌散布	1回	150~200ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植前~定植直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	定植前(植穴掘前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植後雑草発生前(定植後10日まで) : 全面土壌散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	定植直後雑草発生前: 全面土壌処理	1回	200~300g (100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植後(但し収穫60日前まで): 株間土壌散布	1回	150~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	デュアールゴールド (S-トラクロール 83.7)	定植直後~定植15日後まで(雑草発生前) 畦間株間土壌散布	1回	40~60ml (70~100ℓ)	(1)広葉雑草(特にアカザ科)には効果が劣るので、イネ科雑草優占圃場で使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草の3~8葉期) 収穫30日前まで: 雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200ml (100L)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
ブ ロ ッ コ リ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	定植前(植穴掘前):全面土壤散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壤散布	1回	4~6kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壤散布	1回	200ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで) :全面土壤処理	1回	200~300g (1000)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500) 200ml (1000)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植後雑草発生前(収穫30日前まで) :全面土壤散布	1回	50~75ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
は く さ い	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培)定植前(植穴掘前):全面土壤散布 定植直後:畦間土壤散布 (直播栽培)は種直後:全面土壤散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培)定植前(植穴掘前):全面土壤散布 (直播栽培)は種直後:全面土壤散布	1回	4~6kg 3~5kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植前(雑草発生前):全面土壤散布	1回	4~6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗には薬害を生ずるおそれがあるので注意すること。
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン30)	定植前(雑草発生前):全面土壤散布	1回	200~300ml (70~1500)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壤散布	1回	150ml (1000)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壤散布	1回	200ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	定植前(植穴掘前):全面土壤散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草の3~8葉期)収穫21日前まで:雑草茎葉散布	1回	200ml (1000)	(1)広葉雑草及びアカツリグサ科雑草には効果が期待できない
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500) 200ml (1000)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壤散布	1回	150ml (1000)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	ほ う れ ん そ う	アーザラン液剤 (アシユラムナトリウム 37)	は種後~子葉展開期:全面土壤散布	1回	秋播き 600~800ml (100~2000) 春~初夏播き 800~1,000ml 但し、芽出し播き は800ml (100~2000)
クロロIPC (IPC 45.8)		は種直後:全面土壤散布	1回	100~200ml (70~1000)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
ナブ乳剤 (セトキシジム 20)		雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで):雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)		(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壤散布 定植直後:畦間土壤散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。
レ タ ス	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壤散布	1回	3~4kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植前(雑草発生前):全面土壤散布	1回	4~6kg	
	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壤散布 定植直後:畦間土壤散布	1回	200~300ml (1000)	



作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
レタス	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前又は定植・マルチ前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	(秋播栽培)は種覆土後(雑草発生前)(但し、は種14日後まで)、定植前、定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで): 全面土壌処理 (春播栽培)定植前、定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで): 全面土壌処理	1回	200~300g (70~100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し、収穫60日前まで) 株間土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
非結球レタス	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して葉害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前): 全面土壌散布	1回	3~4kg	
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し、収穫60日前まで): 株間土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科とツユクサには効果が劣る。
ねぎ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	定植後雑草発生前(但し、収穫30日前まで): 全面土壌散布	2回以内	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	定植後雑草発生前(但し、収穫30日前まで): 全面土壌散布	2回以内	4~5kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植後(雑草発生前(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗は葉害を生ずるおそれがあるので注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	200~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科と広葉一年生雑草に有効で、キク科とツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植活着後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植活着後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	定植直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100ℓ) 200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
たまねぎ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(本畑)定植後(但し収穫75日前まで): 全面土壌散布	2回以内	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 (本畑)生育期(春期)(但し、収穫75日前まで): 畝間土壌散布 (本畑)定植後(但し、収穫75日前まで): 全面土壌散布	2回以内	4~5kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	(移植栽培)定植前(雑草発生前)または定植後(雑草発生前)(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布 (直播栽培)は種後~本葉2葉期(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ) 200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2.0)	(秋播マルチ栽培)定植前(マルチ前): 全面土壌散布 (秋播栽培)定植後又は生育期(雑草発生前)(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布 (春播栽培)定植後(雑草発生前)(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布	1回	5~6kg	
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後または中耕後(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布	2回以内	200~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
たまねぎ	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	(移植栽培)定植活着後(雑草発生前)(収穫30日前まで) : 全面土壌散布	1回	50~200g (1000)	(1)雑草発生前に散布する (2)ツユクサには効果が劣る。
		(直播栽培)は種後発芽前(雑草発生前): 全面土壌散布		75~100g (1000)	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	(春播、秋播)定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	(春播)定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで): 全面土 壌散布	1回	5~7kg	
		(秋播)定植後又は春季の雑草発生前(但し収穫60日前ま で): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2)	定植後(但し、収穫75日前まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	(ペンディメタリン 1.2)	定植前(マルチ前): 全面土壌散布			
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	(春播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) : 全面土壌処理	2回以内	200~300g (1000)	(1)一年生イネ科を対象に実施する。 (2)一年生イネ科を対象に実施する。 (1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
		(春播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) : 全面土壌処理		300g (1000)	
		(秋播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) : 全面土壌処理		200~300g (1000)	
	アクチノールB乳剤 (アイオキシニル 30)	(秋播移植栽培)早春期但し収穫30日前まで(雑草生育初期) : 雑草茎葉散布または全面散布	2回以内	100~200ml (70~1000)	(1)展着剤は加用しない。 (2)イネ科雑草及びコニシキソウには効果が劣る。
		(春播移植栽培)生育期但し収穫30日前まで(雑草生育初期) : 雑草茎葉散布または全面散布		100~150ml (70~1000)	
		(直播栽培)生育期(たまねぎ1葉期以降)~開花期まで(雑草1 ~2葉期まで)(但し収穫30日前まで)	3回以内	30~50ml (70~1000)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200ml (100~1500)	
	バサグラン液剤 (バンタン 40)	(春播移植栽培)移植後6月上旬まで(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布 (秋播移植栽培)移植後生葉4葉期まで(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布	1回	60~120ml (70~1000)	(1)イネ科雑草には効果がない。 (2)生葉4葉期までに散布する。
セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫21日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	3回以内	50~75ml (1000)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。	
ホーネスト乳剤 (テブラロキシジム10)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。	2回以内	75~100ml (100~1500)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。	
ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3~8葉期)(但し収穫30日前ま で): 雑草茎葉散布又は全面散布	2回以内	200~300ml (1000)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。	
モーティブ乳剤 (ジメテナミドP 19.7) (ペンディメタリン23.1)	定植前(雑草発生前)または定植後(雑草発生前)(但し、定植 日後まで): 全面土壌散布	1回	200~400ml (1000)	(1)散布直後の多量の降雨は薬害のおそれがあるので、天候を見きわめて散布する。	
フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	50~75ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。	
	定植後雑草発生前(定植後30日まで) : 全面土壌散布		75~120ml (1000)		
ごぼう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	は種後発芽前 雑草発生前: 全面土壌散布	1回	(べたがけ栽培) 100~200g (1000)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
				200~300g (1000)	
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後: 全面土壌散布	1回	200~500ml (70~1000)	(1)雑草発芽前後又は発芽初期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。	
	雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200ml (1000)		

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
にんじん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	は種直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~5kg	(2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ロロックス (リニューロン 50)	にんじん3~5葉期(雑草発生始期)(但し、収穫30日前まで) は種直後: 全面土壌散布	1回	100~150g 100~200g (70~150ℓ)	(1)雑草発生始期に使用する。
	ロロックス粒剤 (リニューロン 1.5)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)砂土では使用しない。
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後(高温時除く): 全面土壌散布	1回	300~600ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	は種後発芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(2)気温20℃以下の時期に使用する。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	は種後発芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。
	カイトック乳剤 (ペンディメタリン 15) (リニューロン 10)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ)	(2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。
	カイトック細粒剤F (ペンディメタリン 1.5) (リニューロン 1.0)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	3~5kg	(1)雑草発生前に散布する。
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	は種直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)スズメノテッポウやキク科雑草が多発する圃場では登録の範囲内で多めの薬量で使用する。
	クリアターン乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ペンディメタリン 5.0) (リニューロン 7.5)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	500~700ml (70~100ℓ)	(1)雑草の発生前に散布する。
	クリアターン細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニューロン 1.2)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~5kg	(2)キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)収穫40日前まで : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	ホーネスト乳剤 (デブラロキシジム 10)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。	1回	75~100ml (100~150ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。
ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3~8葉期)(但し収穫45日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(2)イネ科作物に飛散しないように注意する。	
さといも	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	植付後(但し、植付7日後まで): 全面土壌散布	1回	300~400ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付後(但し、植付7日後まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。
		土寄せ後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) : 全面土壌散布		200~400ml (100ℓ)	(2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	植付前(雑草発生前)又は植付後萌芽前(雑草発生前) : 全面土壌散布	1回	4~6kg	
		土寄せ後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) : 全面土壌散布			
	ロロックス (リニューロン 50)	植付直後: 全面土壌散布	1回	100~200g (70~150ℓ)	(1)雑草発生前~発芽始期に使用する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(2)砂土では使用しない。
クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。	
				(2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意	
さといも	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	植付直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。	
	クリアター細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ベンディメタリン 0.8) (リニューロン 1.2)	植付後~萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~5kg	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では葉害を生じる恐れがあるので使用しない。	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	70~130ml (70~100l)	(1)1年生雑草が対象	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150l)	(1)イネ科雑草の発生前後に散布する。	
ばれいしょ	ラクサー乳剤 (アラクロール 30.0) (リニューロン 12.0)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	400~600ml (100l)		
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付後~萌芽前: 全面土壌散布	1回	4~5kg	(1)雑草発生前に散布する。	
	ロックス (リニューロン 50)	植付直後~萌芽前: 全面土壌散布	1回	100~200g (70~150l)	(1)雑草始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150l)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	5~6kg		
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期但し収穫前日まで 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期但し収穫前日まで 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズノカタビラを除く。	2回以内	150~200ml (100~150l) 200ml (100l)	(1)イネ科雑草の発生前後に散布する。	
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~300ml (70~100l)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2.0)	(マルチ栽培を除く) 植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布 (マルチ栽培) 植付後マルチ前(但し、萌芽前まで) (雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg		
	クリアター乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ベンディメタリン 5.0) (リニューロン 7.5)	植付後~萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	600~800ml (70~100l)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では葉害を生じる恐れがあるので使用しない。	
	クリアター細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ベンディメタリン 0.8) (リニューロン 1.2)	植付後~萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~5kg		
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	100~130ml (70~100l)	1年生雑草が対象	
	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	植付後萌芽前: 全面土壌散布	1回	100~300g (100l)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサには効果が劣る。	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	植付後~萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。	
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	植付後(雑草発生前)(但し、植付14日後まで) 全面土壌散布	1回	200~400ml (100l)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。	
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100l)	(1)イネ科雑草の発生前後に散布する。	
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	植付後萌芽前(雑草発生前) : 全面土壌散布	1回	75~120ml (70~150l)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。	
	かんしょ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	挿苗前(雑草発生前): 全面土壌散布 挿苗後雑草発生前(但し、収穫60日前まで): 畦間土壌散布	1回	200~300ml (100l)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
		トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	挿苗前(雑草発生前): 全面土壌散布 挿苗後(雑草発生前)(但し、収穫60日前まで): 畦間土壌散布 または畝間土壌散布	1回 2回以内	3~4kg	
		クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	挿苗後(雑草発生前)挿苗3日後まで: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
		デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	挿苗後(雑草発生前、収穫90日前まで): 全面土壌散布 (マルチ前、挿苗前(雑草発生前)、収穫90日前まで): 玉間土壌散布	1回	70~130ml (70~100l)	1年生雑草が対象
ラッソー乳剤 (アラクロール 43)		挿苗後(雑草発生前)(但し収穫90日前まで): 全面土壌散布	2回以内	300ml (100l)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
かんしよ	ロロックス (リニュロン 50)	種いも植付後萌芽前まで:全面土壌散布 苗移植前まで:全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで)(雑草生育期):雑草茎葉兼土壌 処理(畦間処理)	1回	200g 150~200g 100~200g (70~150ℓ)	(1)雑草発生前~発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3~10葉期)(但し収穫14日前ま で):雑草茎葉散布又は全面散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫100日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
やまの いも	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	植付直後:全面土壌散布 生育初期(但し、植付30日後まで):畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付直後:全面土壌散布 生育初期(但し、植付30日後まで):畦間土壌散布	1回	4~6kg	
	ロロックス (リニュロン 50)	植付直後:全面土壌散布 生育期(但し収穫60日前まで)(雑草発生前~発生揃期):畦 間土壌散布	2回以内	100~200g (70~150ℓ)	
	ロロックス粒剤 (リニュロン 1.5)	植付直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	6kg	(1)雑草発生前に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ゴーゴサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効 で、キク科とツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユ クサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	
	カイトック乳剤 (ペンディメタリン 15) (リニュロン 10)	植付後~萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	400~600ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)スズメノテッポウやキク科雑草が多 発する圃場では登録の範囲内で多 めの薬量で使用する。
	カイトック細粒剤F (ペンディメタリン 1.5) (リニュロン 1.0)	植付後~萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン1.2)	植付後~萌芽前(但し、植付後30日まで):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が 劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫60日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫60日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7.0)	雑草生育期(イネ科雑草3~8葉期)(但し収穫7日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。
	ホーネスト乳剤 (テブラロキシジム 10)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布	1回	75~100ml (100~150ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。
	えだ まめ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	は種後出芽前:全面土壌散布 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで):畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)
トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)		は種後発芽前:全面土壌散布 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで):畦間土壌散布	1回	4~6kg	
デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)		(直播栽培)は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布 (移植栽培)定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	70~130ml (70~100ℓ)	1年生雑草が対象
クリアターン乳剤 (バンチオカーブ 50) (ペンディメタリン 5.0) (リニュロン 7.5)		は種直後(雑草発生前):全面土壌散布 定植3日前まで(雑草発生前):全面土壌散布	1回 1回	500~800ml (70~100ℓ) 500~700ml (70~100ℓ)	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れ があるので使用しない
クリアターン細粒剤F (バンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニュロン 1.2)		は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~5kg	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
えだまめ	ロロックス (リニューロン 50)	は種直後～出芽前(雑草発生前～発生始期): 全面土壤散布 本葉3葉期以降(雑草生育期)(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉兼土壤散布(畦間・株間処理)	1回	100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生前～発生揃期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ホーネスト乳剤 (テブラロキシジム 10)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布	1回	75～100ml (100～150ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	35～50ml (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
		雑草生育期イネ科雑草5～8葉期(収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	50～75ml (100ℓ)	
		雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布。		50～75ml (100ℓ)	(1)スズメノカタビラ対策として実施する。
	ボルトフロアブル (キサロホップエチル 7.0)	雑草生育期(イネ科雑草3～8葉期)(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	75～120ml (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。	
さやえんどう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	300ml (100ℓ)	
	バサグラン液剤 (ヘンタジナトリウム塩 40.0)	3～6葉期但し収穫40日前まで: 雑草茎葉散布または全面散布	1回	100～200g (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
実えんどう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	300ml (100ℓ)	
	バサグラン液剤 (ヘンタジナトリウム塩 40.0)	3～6葉期但し収穫40日前まで: 雑草茎葉散布または全面散布	1回	100～200g (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
さやいんげん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地・マルチ栽培)は種前(マルチ前): 全面土壤散布 (露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地・マルチ栽培)は種前(マルチ前): 全面土壤散布 (露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	4～6kg	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	70～130ml (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)砂土では使用しない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	150～200ml (100～150ℓ) 200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
そら成まめ	クロロIPC (IPC 45.8)	中耕培土後(但し、収穫60日前まで): 全面土壤散布	1回	200ml (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
アスパラガス	センコル水和剤 (メトリブジン 50)	萌芽前～萌芽始期又は収穫打切り後(雑草発生前～4、5葉期): 雑草茎葉散布又は全面土壤散布	1回	100～150g (100ℓ)	
	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	萌芽前又は収穫後(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	100～200g (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツクサには効果が劣る。
	ロロックス (リニューロン 50)	萌芽前(雑草発生前～発生始期): 全面土壤散布 萌芽始期(但し収穫前日まで)(雑草発生前～発生始期): 全面土壤散布 生育期(但し収穫前日まで)(雑草生育期): 雑草茎葉兼土壤散布(畝間・株間処理)	1回	150～200g (70～150ℓ) 150～200g (100～150ℓ) 150～200g (100ℓ)	(1)雑草発生前～発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	萌芽前又は収穫打切り後(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	萌芽前(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	200～400ml (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
ア ス パ ラ ガ ス	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン30)	萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫前日まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫前日まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)収穫前日まで: 雑草茎葉散布又は全面散布	2回以内	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	クロロIPC (IPC 45.8)	(苗床)は種直後: 全面土壌散布 (定植畑)培土後雑草発生前(但し、収穫30日前まで): 全面土壌散布	1回	200~300ml (70~100ℓ) 250~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽初期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
つこ な ま	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後: 全面土壌散布	1回	50~100ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
(豆 未 成 熟 )	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
菜 非 結 球 あ ぶ ら な 科 葉	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種直後: 全面土壌散布	1回	150~200ml (100ℓ)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

● 種類別除草剤使用法

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
きゆうり	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培(移植栽培))定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (露地栽培(移植栽培))定植直後:畦間土壌散布 (露地栽培(直播栽培))は種直後:全面土壌散布	1回	200~250ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培(移植栽培)) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (露地栽培(直播栽培)) は種直後:全面土壌散布	1回	3~4kg	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植後(雑草発生前)(但し定植10日後まで) :畦間、株間土壌散布 定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	
すいか	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培) 定植キヤップ後(但し、収穫45日前まで):全面土壌散布	2回以内	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布	2回以内	2~4kg 4~5kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
メロン	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培(トンネル・マルチ栽培)) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培) 定植キヤップ後(但し、収穫45日前まで):全面土壌散布	2回以内	200~300ml (1000) 150~200ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布	2回以内	2~3kg 4~5kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
トマト	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4~5kg	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植活着後(雑草発生前)(但し定植10日後まで) :畦間、株間土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	センコル水和剤 (メトリブジン 50)	(露地栽培) :畦間株間散布 定植活着後~定植14日後まで(雑草発生前~2、3葉期)	1回	60~100g (1000)	(1)土壌の乾燥が続く場合には土壌 散布は効果が低下するので、雑草の 発生後に散布する。
ミニ トマト	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4~5kg	
なす	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	4~5kg	(2)トンネル栽培ではトリフルラリンが 気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前又は定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びビツクサには効果が劣る。



作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
ピーマン	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
いちご	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	(親株床、子苗床、本圃、施設栽培) 植付後又は定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) : 全面土壌散布又は株間土壌散布	2回以内	150~200ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し定植7日後まで): 株間土壌散布	1回	150~200ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
だいこん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	150~200ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後: 全面土壌散布	1回	150ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布 (直播栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
キャベツ	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植前又は定植後~定植翌日(雑草発生前) : 全面土壌散布	1回	4~5kg	
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	定植8日後まで: 全面土壌散布	1回	150~200ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植前~定植直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	定植前(植穴掘前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植後雑草発生前(定植後10日まで) : 全面土壌散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	定植直後雑草発生前: 全面土壌処理	1回	200~300g (100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植後(但し収穫60日前まで): 株間土壌散布	1回	150~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	デュアールゴールド (S-トラクロール 83.7)	定植直後~定植15日後まで(雑草発生前) 畦間株間土壌散布	1回	40~60ml (70~100ℓ)	(1)広葉雑草(特にアカザ科)には効果が劣るので、イネ科雑草優占圃場で使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草の3~8葉期) 収穫30日前まで: 雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200ml (100L)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
ブ ロ ッ コ リ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで) :全面土壌処理	1回	200~300g (1000)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500) 200ml (1000)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植後雑草発生前(収穫30日前まで) :全面土壌散布	1回	50~75ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
は く さ い	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培)定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布 (直播栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培)定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (直播栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	4~6kg 3~5kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗には薬害を生ずるおそれがあるので注意すること。
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン30)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~300ml (70~1500)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壌散布	1回	150ml (1000)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草の3~8葉期)収穫21日前まで:雑草茎葉散布	1回	200ml (1000)	(1)広葉雑草及びアカツリグサ科雑草には効果が期待できない
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500) 200ml (1000)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壌散布	1回	150ml (1000)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	ほ う れ ん そ う	アーザラン液剤 (アシユラムナトリウム 37)	は種後~子葉展開期:全面土壌散布	1回	秋播き 600~800ml (100~2000) 春~初夏播き 800~1,000ml 但し、芽出し播き は800ml (100~2000)
クロロIPC (IPC 45.8)		は種直後:全面土壌散布	1回	100~200ml (70~1000)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
ナブ乳剤 (セトキシジム 20)		雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで):雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
レ タ ス		トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200~300ml (1000)
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布	1回	3~4kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗は薬害を生ずるおそれがあるので注意する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
レタス	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前又は定植・マルチ前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	(秋播栽培)は種覆土後(雑草発生前)(但し、は種14日後まで)、定植前、定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで): 全面土壌処理 (春播栽培)定植前、定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで): 全面土壌処理	1回	200~300g (70~100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し、収穫60日前まで) 株間土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
非結球レタス	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 定植直後: 畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して葉害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(マルチ前): 全面土壌散布	1回	3~4kg	
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し、収穫60日前まで): 株間土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科とツユクサには効果が劣る。
ねぎ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	定植後雑草発生前(但し、収穫30日前まで): 全面土壌散布	2回以内	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	定植後雑草発生前(但し、収穫30日前まで): 全面土壌散布	2回以内	4~5kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2)	定植後(雑草発生前(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗は葉害を生ずるおそれがあるので注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	定植後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	200~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科と広葉一年生雑草に有効で、キク科とツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植活着後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植活着後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	定植直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100ℓ) 200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	たまねぎ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(本畑)定植後(但し収穫75日前まで): 全面土壌散布	2回以内	200~300ml (100ℓ)
トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)		定植前(植穴掘前): 全面土壌散布 (本畑)生育期(春期)(但し、収穫75日前まで): 畝間土壌散布 (本畑)定植後(但し、収穫75日前まで): 全面土壌散布	2回以内	4~5kg	
ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)		(移植栽培)定植前(雑草発生前)または定植後(雑草発生前)(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布 (直播栽培)は種後~本葉2葉期(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ) 200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2.0)		(秋播マルチ栽培)定植前(マルチ前): 全面土壌散布 (秋播栽培)定植後又は生育期(雑草発生前)(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布 (春播栽培)定植後(雑草発生前)(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布	1回	5~6kg	
クロロIPC (IPC 45.8)		定植活着後または中耕後(但し収穫30日前まで): 全面土壌散布	2回以内	200~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
たまねぎ	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	(移植栽培)定植活着後(雑草発生前)(収穫30日前まで) : 全面土壌散布	1回	50~200g (1000)	(1)雑草発生前に散布する (2)ツユクサには効果が劣る。
		(直播栽培)は種後発芽前(雑草発生前): 全面土壌散布		75~100g (1000)	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	(春播、秋播)定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~1500)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	(春播)定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで): 全面土 壌散布	1回	5~7kg	
		(秋播)定植後又は春季の雑草発生前(但し収穫60日前ま で): 全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2)	定植後(但し、収穫75日前まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が 劣る。
	(露地マルチ栽培)				
		定植前(マルチ前): 全面土壌散布			
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	(春播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) : 全面土壌処理	2回以内	200~300g (1000)	(1)一年生イネ科を対象に実施する。 (2)イネ科雑草、カヤツリグサには効果が劣 る。
		(春播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) : 全面土壌処理		300g (1000)	
		(秋播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) : 全面土壌処理		200~300g (1000)	
	アクチノールB乳剤 (アイオキシニル 30)	(秋播移植栽培)早春期但し収穫30日前まで(雑草生育初期) : 雑草茎葉散布または全面散布	2回以内	100~200ml (70~1000)	(1)展着剤は加用しない。 (2)イネ科雑草及びコニシキソウには 効果が劣る。
		(春播移植栽培)生育期但し収穫30日前まで(雑草生育初期) : 雑草茎葉散布または全面散布		100~150ml (70~1000)	
		(直播栽培)生育期(たまねぎ1葉期以降)~開花期まで(雑 草1 ~2葉期まで)(但し収穫30日前まで)	3回以内	30~50ml (70~1000)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200ml (100~1500)	
バサグラン液剤 (バンタン 40)	(春播移植栽培)移植後6月上旬まで(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布 (秋播移植栽培)移植後生葉4葉期まで(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布	1回	60~120ml (70~1000)	(1)イネ科雑草には効果がない。 (2)生葉4葉期までに散布する。	
セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫21日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	3回以内	50~75ml (1000)	(1)イネ科作物に飛散しないように注 意する。	
ホーネスト乳剤 (テブラロキシジム10)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。	2回以内	75~100ml (100~1500)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。	
ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3~8葉期)(但し収穫30日前ま で): 雑草茎葉散布又は全面散布	2回以内	200~300ml (1000)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。	
モーティブ乳剤 (ジメテナミドP 19.7) (ペンディメタリン23.1)	定植前(雑草発生前)または定植後(雑草発生前)(但し、定植 日後まで): 全面土壌散布	1回	200~400ml (1000)	(1)散布直後の多量の降雨は薬害の おそれがあるので、天候を見きわめ て散布する。	
フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	50~75ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科など の一部広葉雑草には効果が劣る。	
	定植後雑草発生前(定植後30日まで) : 全面土壌散布		75~120ml (1000)		
ごぼう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地栽培) は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (1000)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、 キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	は種後発芽前 雑草発生前: 全面土壌散布	1回	(べたがけ栽培) 100~200g (1000)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣 る。
				200~300g (1000)	
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後: 全面土壌散布	1回	200~500ml (70~1000)	(1)雑草発芽前後又は発芽初期に散 布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~1500)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。	
	雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200ml (1000)		

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
にんじん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種直後: 全面土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	は種直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~5kg	(2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ロロックス (リニューロン 50)	にんじん3~5葉期(雑草発生始期)(但し、収穫30日前まで) は種直後: 全面土壌散布	1回	100~150g 100~200g (70~150ℓ)	(1)雑草発生始期に使用する。
	ロロックス粒剤 (リニューロン 1.5)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)砂土では使用しない。
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後(高温時除く): 全面土壌散布	1回	300~600ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	は種後発芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(2)気温20℃以下の時期に使用する。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	は種後発芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。
	カイトック乳剤 (ペンディメタリン 15) (リニューロン 10)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	300~500ml (70~100ℓ)	(2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。
	カイトック細粒剤F (ペンディメタリン 1.5) (リニューロン 1.0)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	3~5kg	(1)雑草発生前に散布する。
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	は種直後: 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)スズメノテッポウやキク科雑草が多発する圃場では登録の範囲内で多めの薬量で使用する。
	クリアターナー乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ペンディメタリン 5.0) (リニューロン 7.5)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	500~700ml (70~100ℓ)	(1)雑草の発生前に散布する。
	クリアターナー細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニューロン 1.2)	は種直後(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~5kg	(2)キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫14日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)収穫40日前まで : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	ホーネスト乳剤 (デブラロキシジム 10)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布または全面散布。	1回	75~100ml (100~150ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。
ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3~8葉期)(但し収穫45日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(2)イネ科作物に飛散しないように注意する。	
さといも	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	植付後(但し、植付7日後まで): 全面土壌散布	1回	300~400ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付後(但し、植付7日後まで): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。
		土寄せ後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) : 全面土壌散布		200~400ml (100ℓ)	(2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	植付前(雑草発生前)又は植付後萌芽前(雑草発生前) : 全面土壌散布	1回	4~6kg	
		土寄せ後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) : 全面土壌散布			
	ロロックス (リニューロン 50)	植付直後: 全面土壌散布	1回	100~200g (70~150ℓ)	(1)雑草発生前~発芽始期に使用する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	(2)砂土では使用しない。
クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。	
				(2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意	
さといも	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	植付直後: 全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。	
	クリアター細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ベンディメタリン 0.8) (リニューロン 1.2)	植付後～萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4～5kg	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では葉害を生じる恐れがあるので使用しない。	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	70～130ml (70～100ℓ)	(1)1年生雑草が対象	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。	
ばれいしょ	ラクサー乳剤 (アラクロール 30.0) (リニューロン 12.0)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	400～600ml (100ℓ)		
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付後～萌芽前: 全面土壌散布	1回	4～5kg	(1)雑草発生前に散布する。	
	ロックス (リニューロン 50)	植付直後～萌芽前: 全面土壌散布	1回	100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200～400ml (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	5～6kg		
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期但し収穫前日まで 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期但し収穫前日まで 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズノカタビラを除く。	2回以内	150～200ml (100～150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。	
	ゴーゴーサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200～300ml (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ベンディメタリン 2.0)	(マルチ栽培を除く) 植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布 (マルチ栽培) 植付後マルチ前(但し、萌芽前まで) (雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4～6kg		
	クリアター乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ベンディメタリン 5.0) (リニューロン 7.5)	植付後～萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	600～800ml (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では葉害を生じる恐れがあるので使用しない。	
	クリアター細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ベンディメタリン 0.8) (リニューロン 1.2)	植付後～萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4～5kg		
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	植付後萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	100～130ml (70～100ℓ)	1年生雑草が対象	
	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	植付後萌芽前: 全面土壌散布	1回	100～300g (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサには効果が劣る。	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン 1.2)	植付後～萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。	
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	植付後(雑草発生前)(但し、植付14日後まで) 全面土壌散布	1回	200～400ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。	
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫30日前まで) : 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発後に散布する。	
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	植付後萌芽前(雑草発生前) : 全面土壌散布	1回	75～120ml (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。	
	かんしょ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	挿苗前(雑草発生前): 全面土壌散布 挿苗後雑草発生前(但し、収穫60日前まで): 畦間土壌散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
		トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	挿苗前(雑草発生前): 全面土壌散布 挿苗後(雑草発生前)(但し、収穫60日前まで): 畦間土壌散布 または畝間土壌散布	1回 2回以内	3～4kg	
		クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	挿苗後(雑草発生前)挿苗3日後まで: 全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
		デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	挿苗後(雑草発生前、収穫90日前まで): 全面土壌散布 マルチ前、挿苗前(雑草発生前、収穫90日前まで): 玉間土壌散布	1回	70～130ml (70～100ℓ)	1年生雑草が対象
ラッソー乳剤 (アラクロール 43)		挿苗後(雑草発生前)(但し収穫90日前まで): 全面土壌散布	2回以内	300ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
かんしょ	ロロックス (リニュロン 50)	種いも植付後萌芽前まで:全面土壌散布 苗移植前まで:全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで)(雑草生育期):雑草茎葉兼土壌 処理(畦間処理)	1回	200g 150~200g 100~200g (70~150ℓ)	(1)雑草発生前~発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3~10葉期)(但し収穫14日前ま で):雑草茎葉散布又は全面散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫100日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
やまのいも	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	植付直後:全面土壌散布 生育初期(但し、植付30日後まで):畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付直後:全面土壌散布 生育初期(但し、植付30日後まで):畦間土壌散布	1回	4~6kg	
	ロロックス (リニュロン 50)	植付直後:全面土壌散布 生育期(但し収穫60日前まで)(雑草発生前~発生揃期):畦 間土壌散布	2回以内	100~200g (70~150ℓ)	
	ロロックス粒剤 (リニュロン 1.5)	植付直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	6kg	(1)雑草発生前に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ゴーゴサン乳剤 (ベンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効 で、キク科とツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユ クサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200~400ml (100~150ℓ)	
	カイトック乳剤 (ベンディメタリン 15) (リニュロン 10)	植付後~萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	400~600ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)スズメノテッポウやキク科雑草が多 発する圃場では登録の範囲内で多 めの薬量で使用する。
	カイトック細粒剤F (ベンディメタリン 1.5) (リニュロン 1.0)	植付後~萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ベンディメタリン1.2)	植付後~萌芽前(但し、植付後30日まで):全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前~発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が 劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫60日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫60日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ボルトフロアブル (キザロホップエチル 7.0)	雑草生育期(イネ科雑草3~8葉期)(但し収穫7日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布	1回	200~300ml (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。
	ホーネスト乳剤 (テブラロキシジム 10)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布	1回	75~100ml (100~150ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草 には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注 意する。
	えだまめ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	は種後出芽前:全面土壌散布 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで):畦間土壌散布	1回	200~300ml (100ℓ)
トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)		は種後発芽前:全面土壌散布 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで):畦間土壌散布	1回	4~6kg	
デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)		(直播栽培)は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布 (移植栽培)定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	70~130ml (70~100ℓ)	1年生雑草が対象
クリアターン乳剤 (バンチオカーブ 50) (ベンディメタリン 5.0) (リニュロン 7.5)		は種直後(雑草発生前):全面土壌散布 定植3日前まで(雑草発生前):全面土壌散布	1回 1回	500~800ml (70~100ℓ) 500~700ml (70~100ℓ)	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れ があるので使用しない
クリアターン細粒剤F (バンチオカーブ 8.0) (ベンディメタリン 0.8) (リニュロン 1.2)		は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4~5kg	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
えだまめ	ロロックス (リニューロン 50)	は種直後～出芽前(雑草発生前～発生始期): 全面土壤散布 本葉3葉期以降(雑草生育期)(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉兼土壤散布(畦間・株間処理)	1回	100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生前～発生揃期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ホーネスト乳剤 (テブラロキシジム 10)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布	1回	75～100ml (100～150ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	35～50ml (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
		雑草生育期イネ科雑草5～8葉期(収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	50～75ml (100ℓ)	
		雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布。		50～75ml (100ℓ)	(1)スズメノカタビラ対策として実施する。
	ボルトフロアブル (キサロホップエチル 7.0)	雑草生育期(イネ科雑草3～8葉期)(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布又は全面散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	75～120ml (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。	
さやえんどう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	300ml (100ℓ)	
	バサグラン液剤 (ヘンタジナトリウム塩 40.0)	3～6葉期但し収穫40日前まで: 雑草茎葉散布または全面散布	1回	100～200g (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
実えんどう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	300ml (100ℓ)	
	バサグラン液剤 (ヘンタジナトリウム塩 40.0)	3～6葉期但し収穫40日前まで: 雑草茎葉散布または全面散布	1回	100～200g (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
さやいんげん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	(露地・マルチ栽培)は種前(マルチ前): 全面土壤散布 (露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地・マルチ栽培)は種前(マルチ前): 全面土壤散布 (露地栽培)は種直後: 全面土壤散布	1回	4～6kg	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	は種後出芽前(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	70～130ml (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)砂土では使用しない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	150～200ml (100～150ℓ) 200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
そら成まめ	クロロIPC (IPC 45.8)	中耕培土後(但し、収穫60日前まで): 全面土壤散布	1回	200ml (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200ml (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
アスパラガス	センコル水和剤 (メトリブジン 50)	萌芽前～萌芽始期又は収穫打切り後(雑草発生前～4、5葉期): 雑草茎葉散布又は全面土壤散布	1回	100～150g (100ℓ)	
	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	萌芽前又は収穫後(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	100～200g (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツクサには効果が劣る。
	ロロックス (リニューロン 50)	萌芽前(雑草発生前～発生始期): 全面土壤散布 萌芽始期(但し収穫前日まで)(雑草発生前～発生始期): 全面土壤散布 生育期(但し収穫前日まで)(雑草生育期): 雑草茎葉兼土壤散布(畝間・株間処理)	1回	150～200g (70～150ℓ) 150～200g (100～150ℓ) 150～200g (100ℓ)	(1)雑草発生前～発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5)	萌芽前又は収穫打切り後(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	200～300ml (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	萌芽前(雑草発生前): 全面土壤散布	1回	200～400ml (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツクサには効果が劣る。



作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の 使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
ア ス パ ラ ガ ス	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	4~6kg	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン30)	萌芽前(雑草発生前): 全面土壌散布	1回	200~400ml (70~150ℓ)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫前日まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6~8葉期(但し収穫前日まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ) 200ml (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)収穫前日まで: 雑草茎葉散布又は全面散布	2回以内	50~75ml (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	クロロIPC (IPC 45.8)	(苗床)は種直後: 全面土壌散布 (定植畑)培土後雑草発生前(但し、収穫30日前まで): 全面土壌散布	1回	200~300ml (70~100ℓ) 250~300ml (70~100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽初期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
つこ な ま	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後: 全面土壌散布	1回	50~100ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
(豆 未 成 熟 )	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫14日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
菜 非 結 球 あ ぶ ら な 科 葉	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種直後: 全面土壌散布	1回	150~200ml (100ℓ)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3~5葉期(但し収穫7日前まで): 雑草茎葉散布または全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150~200ml (100~150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

## IV 令和6年主要改訂部分

1 令和5年12月6日現在の農薬登録に基づき改訂

2 新たに掲載された主な農薬は以下のとおり

	薬剤名	作物	主な対象病害虫
殺菌剤	コナシ顆粒水和剤	大麦	うどんこ病
	ミキワ10フロアブル	きゅうり	菌核病、炭疽病等
	ゾーバックエンテクタ SE	きゅうり	べと病等
殺虫剤	メビウスフロアブル	かんきつ	ミカンダニ、ミカンサビダニ

3 各品目「病害虫防除法」ページから削除した農薬は以下のとおり（登録削除に伴うものは除く）

	薬剤名	対象作物	対象病害虫	削除理由
除草剤	トップガンLフロアブル	水稻	一年生雑草	使用場面が少ないため
殺菌剤	石灰ボルトー液	ぶどう等	黒とう病等	使用場面が少ないため
	オーサイト水和剤	ぶどう	灰色かび病	使用場面が少ないため
	アリエッティC水和剤	もも	縮葉病	使用場面が少ないため
	ダコレックス水和剤	もも	灰星病	使用場面が少ないため
	ベジセイバー	きゅうり	炭疽病	耐性菌回避のため
	テーク水和剤	野菜全般	うどんこ病	使用場面が少ないため
殺虫剤	ダイアジノン粒剤 5	きゅうり	ネリムシ類	使用場面が少ないため
	ガンバ水和剤	キャベツ	コナシ	使用場面が少ないため
	オルトラン粒剤	野菜全般	ヨウムシ、アザミウマ類等	使用場面が少ないため
	ジェイエース粒剤	野菜全般	ヨウムシ、アオムシ類等	使用場面が少ないため
	ラングドレイ粒剤	野菜全般	ネリムシ類	使用場面が少ないため
	エルサン乳剤	にんじん	アブラムシ類	使用場面が少ないため
	クルサーMAXX	えだまめ	アブラムシ類、ネリムシ類、タネバエ	使用場面が少ないため
	テナポン水和剤 50	なし	灰色かび病	使用場面が少ないため

4 その他 トマト トマトキバガの薬剤防除法の項目を新設。

## 農薬の適正使用と危害防止について

- 農薬は、ラベルに表示されている記載事項を十分に確認し、適正に使用しましょう。
- 農薬散布後は、防除器具を十分に洗浄しましょう。
- 農薬を悪用されないように、毒物及び劇物の販売・保管管理に注意しましょう。
- ラベルに農薬登録番号がないにもかかわらず、農薬の効果を謳った資材や、使用すると病害虫に効果がある資材は、無登録農薬の疑いがあるので注意しましょう。
- 農薬飛散の懸念のある場合は、被覆などの防護対策、周辺にも登録のある農薬の選定、飛散の少ない粒剤への切り替え等の対策を実施しましょう。
- 特に住宅地周辺での農薬使用は注意をはらい、事前通知の実施等、周辺住民に対して十分配慮しましょう。

農林水産省：住宅地等における農薬使用について

[https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n\\_tekisei/jutakuti/](https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/)

本指針に掲載した農薬は、原則として「令和5年12月6日現在」の農薬登録に基づいて作成しました。

実際の指導に当たっては登録内容が変更されている場合がありますので、必ず下記のHP等で常に最新の情報を確認してください。

また、農薬使用者に対しては、農薬を実際に使用する際には、**農薬ラベルの表示事項（使用方法、注意事項等）を確認し、遵守するよう指導**してください。



○農林水産省ホームページ

「農薬登録情報提供システム」最新の農薬登録情報

(<https://pesticide.maff.go.jp/>)

○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

(<https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>)

○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」

県内における農薬の適正使用への取り組み等

(<https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html>)

愛媛県 農薬適正使用

検索

○病害虫防除所ホームページ

病害虫発生予察情報等

(<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>)

愛媛県病害虫防除所

検索